

神谷所遺跡Ⅱ



1993

長野県辰野町教育委員会

神谷所遺跡Ⅱ

1993

長野県辰野町教育委員会





序

ここに平成4年度に発掘調査を実施しました第2次の調査報告書を、ようやく刊行することができました。思えばこの現場の作業を終えてからすでに十数余年が過ぎ、広く公開する義務を負うはずの教育委員会として、そのことを果たしていなかった事に重大な責任を感じています。

発掘調査は、とかく現場作業が終了すると全ての事業が終了したかの印象を持ってしまいます。当町でもその様な認識があったのではないかと深く反省しているところです。出土品の中には、そのままでは時間の経過と共に朽ち果てていく物もあります。大切な文化財です。それをくい止める策を施すことが必要です。

現在生きている我々が、なぜ豊かな生活を享受できるか、それを考えなければ未来はありません。奢り昂ることは簡単ですが、時に遠い過去の人々の歩んできた道を振り返り、そこに人間の営みを感じた時、初めて明るい未来が見えるのではないのでしょうか。現在の科学技術は、遠き祖先が見つけた「粘土は高熱で熱すると硬い器になる」という発見から始まっている事を、だれもが理解しなければいけないと思います。辰野町教育委員会では、さらに地道ながら、今を生きる「ヒト」の未来を探る為の資料を積極的に公開するために、積み残してきた調査成果の公開に向けて、今まで以上に努力し、報告書を刊行していく所存です。

末筆になりましたが、調査報告書の刊行が遅れ、その成果を見る事ができないまま逝去された、友野良一調査団長さん、高度な技術で土器を復原して頂いた福沢幸一さん、発掘調査に従事して頂いた方々にこの報告書を捧げます。そして今現在も報告書刊行に向けて整理作業に邁進されている皆さんにお礼を申し上げ、ご挨拶とします。

平成22年3月

辰野町教育委員会
教育長 古村 仁士

例 言

1. この報告書は後山工業団地造成事業に先立って実施された長野県上伊那郡辰野町大字伊那富字後山5908番地5他に所在する^{かみやどこいせき}神谷所遺跡の第2次発掘調査報告書である。
2. 発掘調査は、辰野町教育委員会が実施した。なお、発掘調査の組織については発掘調査関係者名簿として別掲した。
3. 発掘調査は、平成5年4月12日から平成5年12月14日まで現場での作業を行い、平成6年4月3日より平成19年3月31日までの間、遺物整理及び報告書の作成を断続的に実施した。なお、財政的な理由により、印刷および刊行は、平成22年3月31日となった。
4. 発掘現場における記録は福島永が担当し、遺構等の実測図の作成は大森淑子、上島元彦、古畑明美、山崎貴弘が行い、遺物等の実測図及びトレースの作成は赤羽弘江、板倉裕子、大槻直子、大森淑子、佐藤直子、白鳥栄子、竹内みどり、早川裕美子、平沢正子、福島永が行なった。
なお、土器復原は福沢幸一氏にお願いした。
また、鉄器の保存処理については（財）帝京大学山梨文化財研究所に委託している。
5. 本報告の古代の時期区分については、小平和夫氏の御教授および『中央自動車道長野線埋蔵文化財発掘調査報告書4 総論編』に従った。
6. 調査時及び、整理時に作成した実測図及び写真は、辰野町教育委員会で保管している。

発掘調査関係者名簿

1. 神谷所遺跡発掘調査団

調 査 団 長	友野 良一（日本考古学協会会員・発掘担当者）
調 査 員	福島 永（辰野町教育委員会社会教育課文化係）
調 査 補 助 員	山崎 貴弘
発掘調査協力者	板倉たせ子、大森淑子、山崎 誠、山崎良之助、矢島 尚、長田作衛、上島元彦 桑沢とよ子、城倉けさみ、茅野安男、中谷あき子、宮沢英子、山崎 馨、唐沢房夫 松田あつ子、松田春美、宮沢八千代、上島芳子、松田和子、宮沢房子、佐藤直子 矢島郁夫、宮沢恒子、小林久子、白山裕崇、黒岩勉、中谷 良、大森寛子、花岡健太郎 中谷美代子、福沢幸一
整理作業協力者	赤羽弘江、板倉裕子、宇治ひろゑ、大槻直子、大森淑子、工藤信子、佐藤直子 白鳥栄子、竹内みどり、早川裕美子、平沢正子、村上茂子、株式会社シン技術コンサル

2. 辰野町教育委員会事務局（発掘調査当時）

教 育 長	小林 晃一
社会教育課長	赤羽八洲男
文化係長	平泉 栄一
文 化 係	三浦 孝美、小澤 靖一、福島 永、山崎 貴弘

目 次

序

例 言

第I章 遺跡の位置と環境	1
1. 位置と付近の地形・地質	2
2. 歴 史 的 環 境	4
第II章 発掘調査の経緯	6
1. 保護協議の経過	6
第III章 発 掘 調 査	7
1. 調 査 の 方 法	8
2. 調査結果の概要	8
第IV章 遺 構 と 遺 物	13
1. 住 居 址	14
2. 土 坑	115
3. 集 石	165
4. 礫 群	168
5. 溝 址	172
6. その他の遺構と遺物	179
7. 遺構外出土遺物	181
第V章 ま と め	193
写 真 図 版	195
付 図	

挿図目次

第1図	遺跡位置図	1	第43図	第68号住居址出土遺物(3)	53
第2図	調査区位置図	3	第44図	第28号住居址遺構平面図	54
第3図	周辺遺跡分布図	5	第45図	第28号住居址出土遺物	55
第4図	調査地区地形図	7	第46図	第38号住居址遺構平面図	57
第5図	第1次・第2次発掘調査全体測量図	10	第47図	第38号住居址出土遺物	58
第6図	調査地区全体測量図	13	第48図	第40号住居址遺構平面図および 遺物出土状況図	59
第7図	第29号住居址遺構平面図	14	第49図	第40号住居址出土遺物	60
第8図	第29号住居址出土遺物	15	第50図	第41号住居址遺構平面図および 遺物出土状況図	61
第9図	第33号住居址遺構平面図	16	第51図	第41号住居址出土遺物	62
第10図	第33号住居址出土遺物	17	第52図	第42号住居址出土遺物	62
第11図	第36号住居址遺構平面図および 遺物出土状況図	18	第53図	第42号住居址遺構平面図および 遺物出土状況図	64
第12図	第36号住居址出土遺物	19	第54図	第43号住居址遺構平面図	65
第13図	第50号住居址遺構平面図	20	第55図	第45号住居址出土遺物	65
第14図	第50号住居址出土遺物	21	第56図	第45号住居址遺構平面図	66
第15図	第56号住居址遺構平面図および 遺物出土状況図	22	第57図	第46号住居址遺構平面図および 遺物出土状況図	67
第16図	第57号住居址遺構平面図および 遺物出土状況図	24	第58図	第46号住居址出土遺物	68
第17図	第56号・第57号住居址出土遺物	25	第59図	第52号住居址遺構平面図	69
第18図	第58号住居址遺構平面図	26	第60図	第53号住居址遺構平面図および 遺物出土状況図	70
第19図	第58号住居址遺物出土状況図	27	第61図	第54号住居址遺構平面図	71
第20図	第58号住居址出土遺物(1)	27	第62図	第54号住居址遺物出土状況図	72
第21図	第58号住居址出土遺物(2)	28	第63図	第54号住居址出土遺物	73
第22図	第58号住居址出土遺物(3)	29	第64図	住居址出土石器	74
第23図	第58号住居址出土遺物(4)	30	第65図	第24号住居址遺構平面図および 遺物出土状況図	75
第24図	第58号住居址出土遺物(5)	31	第66図	第24号住居址出土遺物	76
第25図	第61号住居址遺物出土状況図	33	第67図	第25号住居址出土遺物	76
第26図	第61号住居址出土遺物	34	第68図	第25号住居址遺構平面図および 遺物出土状況図	77
第27図	第65号住居址遺構平面図	35	第69図	第26号住居址遺構平面図および 遺物出土状況図	78
第28図	第65号住居址遺物出土状況図	36	第70図	第27号住居址遺構平面図(1)	79
第29図	第65号住居址出土遺物(1)	38	第71図	第27号住居址遺構平面図(2)	80
第30図	第65号住居址出土遺物(2)	39	第72図	第27号住居址出土遺物	80
第31図	第65号住居址出土遺物(3)	40	第73図	第27号住居址遺物出土状況図	82
第32図	第65号住居址出土遺物(4)	41	第74図	第30号住居址遺構平面図および 遺物出土状況図	83
第33図	第65号住居址出土遺物(5)	42	第75図	第30号住居址出土遺物	84
第34図	第65号住居址出土遺物(6)	43	第76図	第31号住居址遺構平面図(1)	85
第35図	第67号住居址遺構平面図	44	第77図	第31号住居址遺物出土状況図	86
第36図	第67号住居址遺物出土状況図	45	第78図	第31号・32号・35号住居址出土遺物	86
第37図	第67号住居址出土遺物(1)	47			
第38図	第67号住居址出土遺物(2)	48			
第39図	第67号住居址出土遺物(3)	49			
第40図	第68号住居址出土遺物(1)	50			
第41図	第68号住居址遺物出土状況図	51			
第42図	第68号住居址出土遺物(2)	52			

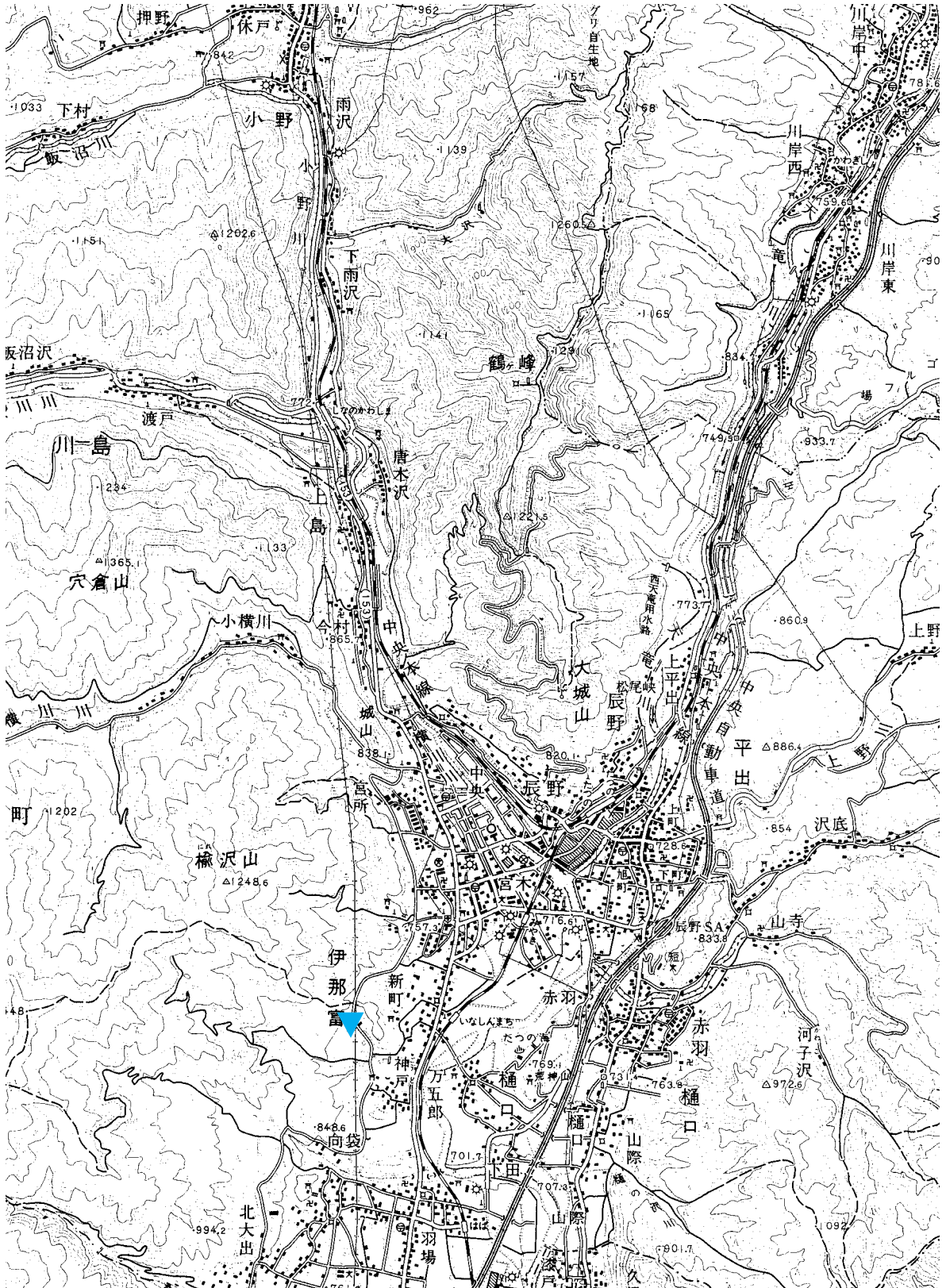
第79図	第31号住居址遺構平面図(2)……………	87	第123図	土坑遺構平面図(14)……………	137
第80図	第32号住居址遺構平面図……………	88	第124図	土坑遺構平面図(15)……………	138
第81図	第32号住居址遺物出土状況図……………	89	第125図	土坑遺構平面図(16)……………	139
第82図	第34号住居址遺構平面図および 遺物出土状況図……………	90	第126図	土坑遺構平面図(17)……………	140
第83図	第35号住居址遺物出土状況図……………	91	第127図	土坑遺構平面図(18)……………	141
第84図	第35号住居址遺構平面図……………	92	第128図	土坑遺構平面図(19)……………	142
第85図	第37号住居址遺物出土状況図……………	93	第129図	土坑遺構平面図(20)……………	143
第86図	第37号住居址遺構平面図……………	94	第130図	土坑遺構平面図(21)……………	144
第87図	第37号住居址出土遺物……………	95	第131図	土坑遺構平面図(22)……………	145
第88図	第39号住居址遺構平面図……………	96	第132図	土坑遺構平面図(23)……………	146
第89図	第44号住居址遺物出土状況図……………	97	第133図	土坑出土遺物(1)……………	153
第90図	第44号・47号・48号住居址出土遺物……………	97	第134図	土坑出土遺物(2)……………	154
第91図	第44号住居址遺構平面図……………	98	第135図	土坑出土遺物(3)……………	155
第92図	第47号住居址遺物出土状況図……………	99	第136図	土坑出土遺物(4)……………	156
第93図	第47号住居址遺構平面図……………	100	第137図	土坑出土遺物(5)……………	157
第94図	第48号住居址遺構平面図……………	101	第138図	土坑出土遺物(6)……………	158
第95図	第48号住居址カマドおよび 遺物出土状況図……………	102	第139図	土坑出土遺物(7)……………	159
第96図	第49号住居址出土遺物……………	103	第140図	土坑出土遺物(8)……………	160
第97図	第49号住居址遺構平面図……………	103	第141図	土坑出土遺物(9)……………	161
第98図	第59号住居址遺構平面図……………	104	第142図	土坑出土遺物(10)……………	162
第99図	第59号住居址遺物出土状況図……………	105	第143図	土坑出土遺物(11)……………	163
第100図	第59号住居址出土遺物……………	105	第144図	土坑出土遺物(12)……………	164
第101図	第62号住居址遺構平面図……………	106	第145図	集石遺構平面図(1)……………	165
第102図	第62号住居址遺物出土状況図および 出土遺物……………	107	第146図	集石遺構平面図(2)……………	166
第103図	第63号住居址遺構平面図(1)……………	108	第147図	第17号集石遺構平面図……………	168
第104図	第63号住居址遺構平面図(2)……………	110	第148図	第18号集石遺構平面図……………	169
第105図	第63号住居址出土遺物……………	110	第149図	集石遺構平面図(3)……………	170
第106図	第63号住居址出土遺物……………	111	第150図	集石遺構平面図(4)……………	171
第107図	第63号住居址遺物出土状況図……………	112	第151図	礫群出土遺物……………	171
第108図	第64号住居址出土遺物……………	113	第152図	第1号礫群遺構平面図……………	172
第109図	第64号住居址遺構平面図および 出土状況図……………	114	第153図	第2号・第3号礫群遺構平面図……………	173
第110図	土坑遺構平面図(1)……………	116	第154図	第2号・第3号礫群土層断面図……………	175
第111図	土坑遺構平面図(2)……………	120	第155図	第10号溝址遺構平面図……………	176
第112図	土坑遺構平面図(3)……………	124	第156図	第11号溝址遺構平面図……………	177
第113図	土坑遺構平面図(4)……………	126	第157図	柱穴出土遺物……………	179
第114図	土坑遺構平面図(5)……………	128	第158図	第1号竪穴・第1・2・3号 竪穴建物址遺構平面図……………	180
第115図	土坑遺構平面図(6)……………	129	第159図	遺構外出土遺物(1)……………	182
第116図	土坑遺構平面図(7)……………	130	第160図	遺構外出土遺物(2)……………	183
第117図	土坑遺構平面図(8)……………	131	第161図	遺構外出土遺物(3)……………	184
第118図	土坑遺構平面図(9)……………	132	第162図	遺構外出土遺物(4)……………	185
第119図	土坑遺構平面図(10)……………	133	第163図	遺構外出土遺物(5)……………	186
第120図	土坑遺構平面図(11)……………	134	第164図	遺構外出土遺物(6)……………	187
第121図	土坑遺構平面図(12)……………	135	第165図	遺構外出土遺物(7)……………	188
第122図	土坑遺構平面図(13)……………	136	第166図	遺構外出土遺物(8)……………	189
			第167図	遺構外出土遺物(9)……………	190
			第168図	遺構外出土遺物(10)……………	191
			第169図	遺構外出土遺物(11)……………	192

写真図版

- 図版1 調査区全景(1) 調査区全景(2)
図版2 調査区全景(3) 調査区全景(4)
図版3 第24号住居址
図版4 第25号住居址
図版5 第26号住居址
図版6 第27号住居址
図版7 第28号住居址
図版8 第29号住居址
図版9 第30・34号住居址
図版10 第30号住居址
図版11 第31号住居址
図版12 第32号住居址
図版13 第33号住居址/第35号住居址(1)
図版14 第35号住居址(2)
図版15 第36号住居址
図版16 第37・42号住居址
図版17 第37号住居址
図版18 第38号住居址
図版19 第39号住居址
図版20 第40号住居址
図版21 第41号住居址
図版22 第42号住居址
図版23 第43号住居址
図版24 第44号住居址
図版25 第45号住居址
図版26 第46号住居址
図版27 第48号住居址
図版28 第49・27号住居址/第49号住居址
図版29 第50号住居址
図版30 第50・37・42号住居址
図版31 第53号住居址
図版32 第54号住居址
図版33 第39号住居址/第39・54号住居址
図版34 第56号住居址
図版35 第57号住居址
図版36 第58号住居址
図版37 第59号住居址
図版38 第62号住居址
図版39 第63号住居址(1)
図版40 第63号住居址(2)
図版41 第64号住居址
図版42 第65号住居址
図版43 第67号住居址
図版44 第68号住居址
図版45 第147号/第148号/第149号/第150号/
第151号/第152号/第153号/第154号土坑
図版46 第155号/第156号/第157号/第158号/
第159・160・161号/第163号/第161号土坑
図版47 DG-72付近土坑群/第164号/第165号/
第166号/第170号土坑
図版48 DM-69付近土坑群/第167号/第168号/
第169号/第173号土坑
図版49 第171号/第172号/第174号/第175号/
第176号/第177・178号/第179号/第182号土坑
図版50 第181号/第183号/第186号/第187号/
第191号/第189号土坑
図版51 第192号/第193号/第194号/第195号/
第196号/第197号/第198号/第199号土坑
図版52 第200号/第201号/第202号/第203号/
第206号/第204号土坑
図版53 第207号/第208号/第209号/第213号/
第214号/第212号/第215号土坑
図版54 第217・218・219号/第217号/第218号/
第219号/第216号/第220号/第221号/
第222号土坑
図版55 第223号/第224号/第237号/第238号/
第225号/第239号土坑
図版56 EJ-28付近土坑群/第226・227・229号/
第228号/第230号/第231・232号土坑
図版57 第235号/第233号/第236号/第240号/
第241号/第242号/第246号土坑
図版58 第244・245号/第244号/第245号/
第251号/第247号/第252号/第253号土坑
図版59 第249・250号/第249号/第250号/
第254号/第255号/第256号/第259号/
第260号土坑
図版60 第257・258号/第257号/第258号/
第261号/第263号/第262号/第283号土坑
図版61 EV-28付近土坑群/第266号/第267号/
第274・275号土坑
図版62 第284号/第276号/第288号/第289号/
第290号土坑
図版63 第281・282号/第281号/第282号/第281号/
第291号/第292号/第294号/第296号土坑
図版64 第297号/第304号/第305号/第306号/
第307・308号/第309・310号/第311号土坑

- 図版65 EX-45付近土坑群/第298号/第299・301号/
 第300号/第303号土坑
 図版66 第312号/第314号/第313号/第315・316号/
 第317号/第318号/第322号土坑
 図版67 第12号集石/第13号集石/第14号集石/
 第15号集石/第16号集石
 図版68 第17号集石/第18号集石/第22号集石/
 第20号集石
 図版69 第19号集石/第21号集石/第1号溝址/
 第2号溝址
 図版70 第1号礫群/第2号礫群/第3号礫群
 図版71 第2号礫群/第3号礫群
 図版72 第29号住居址/第33号住居址
 図版73 第36号住居址/第50号住居址
 図版74 第56・57号住居址/第58号住居址(1)
 図版75 第58号住居址(2)/第58号住居址(3)
 図版76 第58号住居址(4)/第61号住居址
 図版77 第65号住居址(1)/第65号住居址(2)
 図版78 第65号住居址(3)/第65号住居址(4)
 図版79 第65号住居址(5)/第65号住居址(6)
 図版80 第65号住居址(7)/第65・68号住居址
 図版81 第67号住居址(1)/第67号住居址(2)
 図版82 第67号住居址(3)/第68号住居址(1)
 図版83 第68号住居址(2)/第28号住居址(1)
 図版84 第28号住居址(2)/第38号住居址
 図版85 第40号住居址/第41号住居址
 図版86 第42・45号住居址
 図版87 第46号住居址/第46・53・54号住居址
 図版88 第54号住居址/弥生時代住居址出土石器
 図版89 第24・25号住居址/第25・26・27号住居址
 図版90 第30号住居址
 図版91 第31号住居址/第35号住居址/第32号住居址/
 第37号住居址
 図版92 第37号住居址/第44・47・48・49号住居址
 図版93 第59・62号住居址/第51・63・64号住居址
 図版94 第63号住居址(1)
 図版95 第63号住居址(2)/出土鉄製品
 図版96 土坑(160・163・178・218土)/第163号土坑
 図版97 土坑(180・181・189・212・219土)/
 土坑(188・220・221・226・227・229土)
 図版98 土坑(228・232・233・235・247・248・260土)/
 土坑(234・248・262・265・267土)
 図版99 土坑(236・239・241・246・269・270・273・282・
 285土)/第247号土坑/第275号土坑/
 第262号土坑
 図版100 土坑(281・292・301・306・310・311土)/
 土坑(268・275・288・289・294土)
 図版101 土坑(268・275・288・289・294土)/第290号土坑(1)
 図版102 第290号土坑(2)/第225号土坑
 図版103 土坑出土石器/調査風景

第I章 遺跡の位置と環境



第1図 遺跡位置図 (S=1/50,000)

1. 位置と付近の地形・地質

(1) 地 形

辰野町は、長野県のほぼ中央部、北は松本平、東は諏訪盆地に接し、西は木曾山脈を経て木曾谷へと通じる南北約70kmの伊那谷の最北部に位置する。町内を取り囲む山は、西を木曾山脈の最北部にあたる経ヶ岳（標高2,296.3m）より連なる標高1,100m以上の6つの山塊が占め、東には伊那山脈の北端部が延びている。伊那山脈は天竜川の支流の一つである沢底川を境として南部は標高700m～1,200mの小式部城山塊、北部は標高800m～1,000mの東山丘陵に二分されており、東山丘陵は辰野町でも最もなだらかな丘陵状の山地となっている。

一方、諏訪湖に源を発する天竜川は、数段の断層崖に挟まれてその最低部に町を南北に縦断するように南流している。この断層崖の山麓部には扇状地の発達が顕著であり、特に^{にれざわやま}楡沢山～桑沢山山麓では扇状地が重なりあった複合扇状地が形成されている。

天竜川の西部では、横川川や、町内の天竜川の支流としては横川川に続く流路距離を誇る小横川川の上流部では、横川溪谷に代表されるようなV字谷が深く入り込んでおり、下流では川幅がひろがって小規模な谷底平野・段丘・崖錐が発達している。

また、権兵衛峠－経ヶ岳－牛首峠－^{うとうとうげ}善知鳥峠の連なりは南北分水界となっており、これより北部は千曲川水系として日本海へと流れ込み、南部は天竜川水系として太平洋へ注ぎ込んでいる。

神谷所遺跡は、楡沢山の南西麓標高約800m～約780mに広がる、扇端部に豊かな湧き水をたたえた、扇状地上に位置し、断層によって形成された前山をはさんで、その東部に町内が一望できる地点に位置する。

(2) 地 質

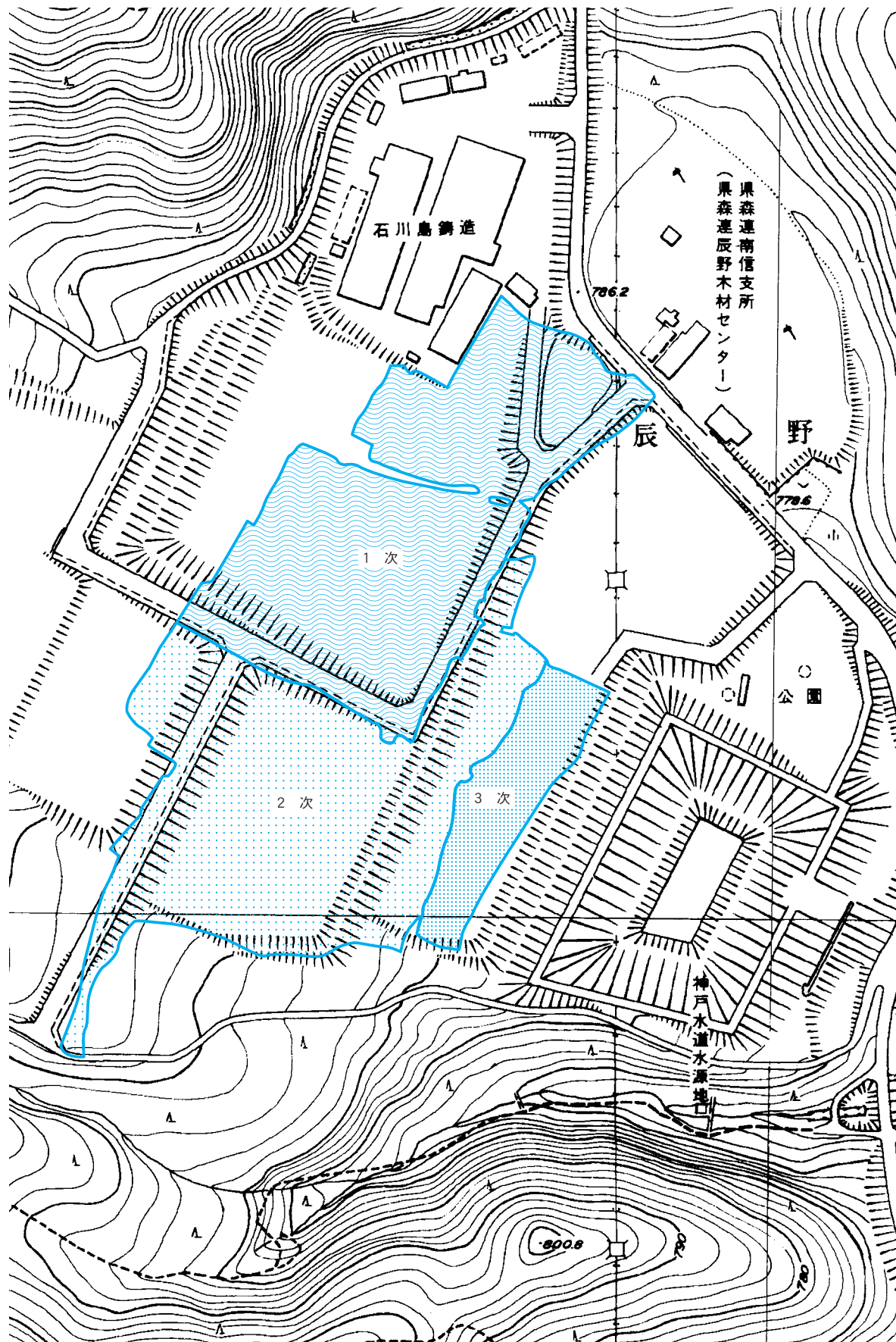
長野県は東部にフォッサマグナが存在し、その西縁には日本を代表する大断層である糸魚川－静岡構造線がはしっている。また、南部には中央構造線が東西に縦走し、地質学的には非常に複雑な構造を呈している。辰野町はこれらの構造線に近い地点に位置し、地質的には西南日本内帯の東端部にあたる。このため、赤石山地は辰野町北部で途切れ、木曾山脈の花崗岩についても辰野町付近で途切れている。

辰野地域は大陸縁辺部で形成された堆積岩を基層とし、その上部に領家花崗岩がのり、その後、霧ヶ峰方面の溶岩や火砕流、辰野地域南部からの礫の流入によってこの地域の地質的な構造ができあがった。また、木曾山脈や赤石山脈の衝突境界としての構造盆地として形成された伊那谷には、木曾山脈を中心とした砂礫が堆積して平地を形成している。辰野地域ではこの堆積層は浅く、100m未満といわれている。

なお、横川川や小横川川は奈良井川と同様に北に流れる川であったものが、断層が動いたために南流するようになった様子が伺える。

また、伊那谷は西部や東部の山麓に大きな断層が走っており、特に西部山麓の断層は「伊那谷断層」と呼ばれ、神谷所遺跡の所在する後山地籍においては断層によって尾根が孤立し、稗塚と呼ばれる丸山が形成されているほか、西側の明神山は古い扇状地が活断層によって持ち上がったものである。

さらに、新町の上水道水源地の掘割では、昭和4年に春日琢美によってテフラを切る断層が観察され、スケッチに残されているが、このスケッチをみるとテフラの降灰が停止してから15,000年の間に西方の山地が約2.3m上昇したことがわかる。また、新町の天竜川河畔の赤浜より、天狗坂を通過して宮所、上島を結ぶ線は赤浜断層と呼ばれ、宮木の太田より新町の新田原地籍へ上がる坂で、断層によって原田の地盤がはね上がった様子が観察されている。



第2図 調査区位置図 (S=1/2,500)

2. 歴史的環境

新町地区は、縄文時代中期中葉の集落跡が発見された新町大原遺跡（60）をはじめ、県宝に指定されている縄文時代後期の仮面付土偶が出土している泉水遺跡（52）が所在する地区である。

この新町区は経ヶ岳山魂の楡沢山と天竜川に挟まれた地域で、遺跡の立地も、扇状地上に位置する泉水遺跡、神谷所遺跡（66）等と段丘に位置する新町大原遺跡（60）、新町原田南遺跡（62）、新町原田北遺跡（61）、新町北原遺跡（49）等に大きく2分される。前述の泉水遺跡は扇状地上に位置しており、土偶のほかは遺物も採集されていないために遺跡の状況は不明である。また、神谷所遺跡に隣接する新町丸山遺跡（65）の西麓の畑からは、昭和32年に平安時代後期の鉄製羽釜が耕作中に出土している。新町丸山遺跡は通称稗塚と呼ばれており、当初古墳ではないかとの疑いが持たれたが、この小山は活断層によって断ち切られた、いわゆるケルン・バットであることが確認されている。神谷所遺跡では鉄製の鍋の破片と思われる遺物も試掘調査によって出土しており、鉄製羽釜と神谷所遺跡との関係については今後更に検討していかなければならない課題であろう。

一方、段丘上に立地する新町原田南遺跡は、新町原田北遺跡、新町大原遺跡と共に圃場整備事業に先立って昭和63年度に調査が実施された遺跡で、縄文時代中期末葉の住居址をはじめ、中世の居館址等が出土している。中世の居館址は、堀によって区画された地点では掘立柱の建物址が出土し、その区画外の郭かと思われる部分には多数の竪穴建物址が検出され、館の空間的な使い分けについての良好な資料を提供することができた。また、玉縁状口縁をもった白磁碗や白磁製の四耳壺破片、東海系の鉢、鎚連弁をもつ青磁碗など鎌倉期を中心とした陶磁器が出土しており、辰野町で調査された中でも古い時期に位置付けられる居館址となった。

新町原田北遺跡は、試掘のみではあったが、平安時代前半期の住居址が確認されている。

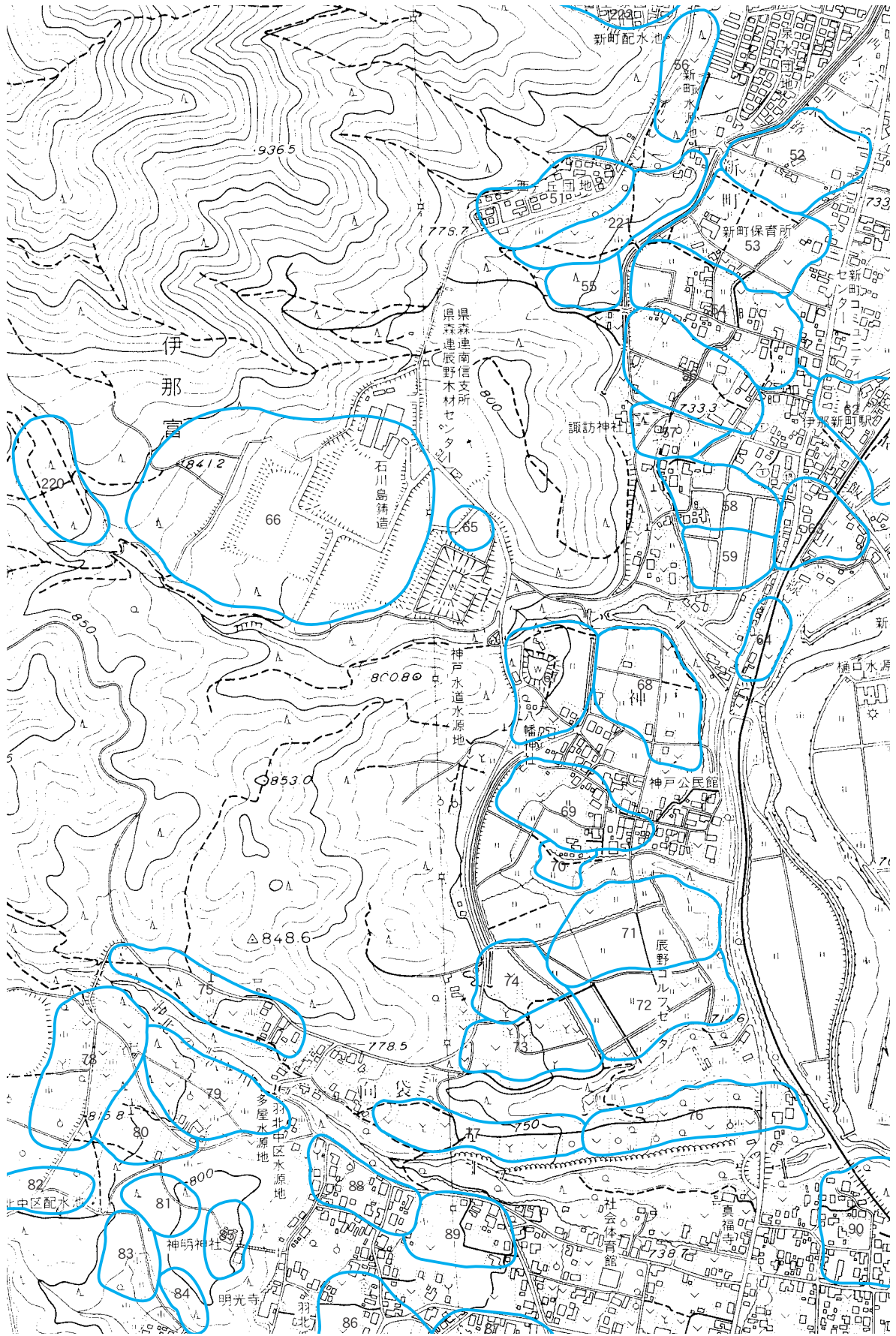
新町大原遺跡では、縄文時代中期中葉の集落が発見されており、単独に埋設された有孔罌付土器をはじめ、石壇を持つ住居址、東海系の土器をともなって一括廃棄された土器群が出土した住居址等が出土している。そのほか、集石炉が20基・中世の掘立柱建物址の出土等、非常に貴重な成果をあげている。

うずらい北・うずらい南遺跡（58・59）は、平成5年度に区画整理事業に先立って調査が実施され、縄文時代前期の焼土を伴う土坑が1基出土している。この遺跡を試掘した結果では、礫が散在した地点や、テフラが確認される地点が観察され、地形的には不安定な地域といった様相を示している。

また、山麓に立地している遺跡としては^{くぬぎばやしせき}榊林遺跡（51）があげられる。この遺跡は楡沢山麓のわずかな平坦部に位置し、昭和61年度と平成元年度に調査が行われ、縄文時代早期から後期にわたる遺構が出土している。なかでも押型文土器を出土した住居址1基や深さ2mに近い円形の大型竪穴や、集石炉10基の出土はこの地区が縄文時代早期にベースキャンプ地として利用されていたことを伺わせる。また、縄文時代前期から中期初頭の小竪穴群と、後期の土坑が発見されているのをはじめ、縄文時代中期中葉と思われる壺形土器が出土し、この中から黒曜石の大型のかたまりが発見されるなど、比較的小規模な遺跡にもかかわらず縄文時代の遺跡として非常に貴重な成果をあげている。

また、宮垣外遺跡（56）は平成19年に耕作土の持ち出しによって破壊され、急遽発掘調査を実施した。その結果、縄文時代中期末葉の住居址をはじめ、後期の土坑などが出土し、破壊のおよばなかった地点において貴重な成果をおさめた。

その他、発掘調査を実施していないが、道下遺跡（63）、神戸遺跡（67）、神戸北原遺跡（68）、羽場上遺跡（69）、どん沢遺跡（70）、神戸南原第一遺跡（71）、神戸南原第二遺跡（72）、山崎遺跡（73）、向袋遺跡（74）、北之沢遺跡（75）古城遺跡（76）等が分布している。



第3図 周辺遺跡分布図 (S=1/10,000)

第Ⅱ章 発掘調査の経緯

1. 保護協議の経過

平成元年10月11日に「平成2年度開発事業に係わる埋蔵文化財について」の依頼文書に対する報告が辰野町土地開発公社より提出された。これによると新町区後山地籍において、工場用地の造成のため、約120,000㎡を平成2年度から造成する予定であった。このため、同年12月4日に教育委員会と、土地開発公社の二者で保護協議を実施した結果、隣接している丸山遺跡は緑地帯として保存し、神谷所遺跡のみ造成の対象になることが判明した。このため、事前に試掘調査を実施して遺跡の分布状況及び性格等を把握した後に本調査を行う、また試掘調査後に再度保護協議を実施することを申し合わせた。

平成2年11月5日には、「新町後山地区開発対策会議」が開かれ、この席上で、発掘調査については、地元には土地の買収が終了していなくても調査を行うことをお願いしており、地権者の了解が得られれば届けを提出した後に調査を開始することが報告されている。

平成2年11月26日に保護協議の経過をふまえる形で、発掘届けが辰野町土地開発公社より提出された。これに対して長野県教育委員会教育長から、辰野町長あてに、「周知の埋蔵文化財包蔵地における土木工事等について（通知）」の文書が送付され、発掘調査を実施するように指示を行っている。

発掘届けが提出されたのをうける形で、町教育委員会では平成3年2月21日に長野県教育委員会文化課の指導主事を迎えて三者による保護協議を実施した。

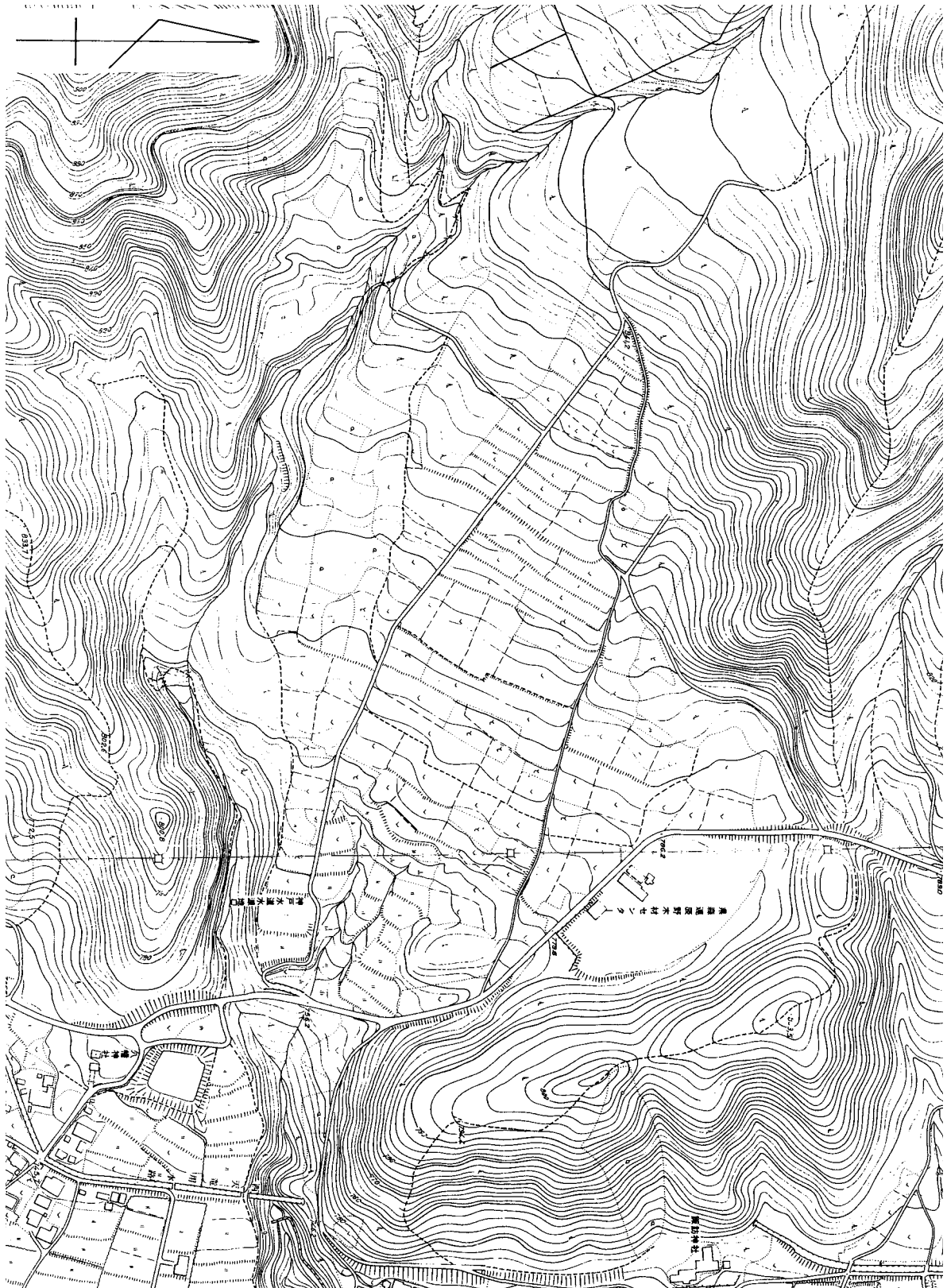
このなかで、この事業の対象面積は135,750㎡であり、これを平成4年8月から平成6年8月にかけて、年度区分にしたがって第1期から第4期までに分けて造成したいという計画が示された。また、地権者の一部に代替地を求める声があるために一部を畑地とすることも説明があった。これに対して畑地として残す部分については一部盛土が実施されるということもあるので本調査は実施しないが、遺跡の性格を把握するために試掘調査は実施したいと説明し、理解を得た。また、全体を調査するとおよそ7地区に調査範囲を分割して実施しなければならず、単年度に調査が実施できる面積も限られ、更に、このように広大な面積を調査することは今まで経験がなく、調査期間も把握できないため、少しでも早く試掘調査を実施し、遺跡の規模、性格を把握したいという説明も行った。これに対して土地開発公社は、地権者には説明をしてあるので、平成2年の作物の収穫後には試掘調査に入れるようにしたいという回答を得た。これを受けて、試掘調査を実施することとし、調査によって遺跡の様子がはっきりした時点で、再度保護協議を行い、期間等の調整をはかることとした。

平成4年1月16日この保護協議の結果をうけて試掘調査を開始し、3月10日に終了した。

なお、この試掘期間中の、平成4年1月22日には「新町後山地区開発計画について」という文書が土地開発公社から提出され、このなかでも、長野県教育委員会文化課の指導を受けるなかで、試掘調査を実施している旨の説明がなされている。

試掘調査によって遺跡全体の様子が把握できた平成4年3月4日に、長野県教育委員会をまじえた三者による保護協議を再度行い、開発範囲全体に遺跡が分布していることを説明し、単年度の工事区間ごとに発掘調査を実施していくことで合意した。

第三章 発掘調査



第4図 調査地区地形図 (S=1/5,000)

1. 調査の方法

神谷所遺跡は、楡沢山山系から流れ出る鳥居沢の押し出しによって形成された扇状地上に立地しており、東にむかってなだらかに傾斜している地形であった。工事の実施設計では、この傾斜を大きく掘削して数段の平坦部を造成する計画であった。このため、代替用地として盛土する地点を残して、遺跡全面を調査する事となり、造成区分にしたがって調査することとした。このうち、今回は第2期造成地点について本調査を実施した。なお、調査範囲が広範囲におよんでおり、一度に表土を剥ぎ取ることが不可能であったため、3区に分割し、そのうちの北部および第1次調査地点東側について最初に調査を実施し、終了後に南部について調査を行っている。

調査はまず重機を使用して表土を除去し、遺構検出面があらわれたところで、ジョレン等を使用して手作業で遺構の検出をおこなった。遺構が確認された段階で移植ゴテ等を使用して遺構内を掘り下げた。遺構は多くがローム層上面で検出されたので比較的確認作業は容易であったが、東部においてはカクランが激しく、遺構を十分に把握できなかった。

遺構内の調査に際しては、土層の観察を行うために住居址については十字に土層観察畦を残し、土坑等については半割にして土層を確認しながら掘り進め、掘り上がった時点で実測図を作成し、記録につとめている。

出土遺物の取り上げ、遺構平面図の作成に際しては、調査中に業者に委託して設定した国土座標に沿った10m×10mのグリッドを基準として細分した2m間隔の方眼を使用した。なお、遺構平面図については1/20の縮尺を基本として図化を行い、遺物の出土している遺構については1/10の縮尺を基準として平板測量または遣り方測量によって記録している。その他、必要に応じて写真撮影等も実施している。

また、グリッドは南北方向を数字で、東西方向はアルファベットを用いて表記している。なお、現場でのレベルについては、基準杭の設定時にあらかじめ設定しておいたベンチマークを使用している。

なお、調査を実施するにあたり、遺構名を現場では仮に1号からとし、遺物整理時に第1次調査からの通し番号に改称した。

遺物を整理する段階で遺物台帳を作成し、各遺物には遺跡の略称（KYD-II）および遺物番号を、また、必要に応じて遺構名等も注記した。現場での写真撮影については35mm一眼レフカメラを使用し、モノクロームネガフィルムと、カラーポジフィルムを用いた。遺物写真についてはデジタルカメラを使用して撮影した。

今回の発掘調査によって出土した遺構・遺物の概要は巻末の報告書抄録に記載している。

2. 調査結果の概要

(1) はじめに

神谷所遺跡は、第1次調査報告書に掲載しているとおり、3次に渡って調査が行われている。

第1次調査では、縄文時代の住居址、小竪穴、土坑（落とし穴を含む）をはじめ、弥生時代の住居址や平安時代の住居址等が出土している。また、平安時代末期から鎌倉時代初め頃と考えられる製鉄関連遺構も発見されるなど貴重な成果を残している。

本書は翌年に実施した、後山工業団地の第2期造成部分のうち、試掘調査によって遺構等が確認された地点約18,500㎡の第2次発掘調査報告書である。今回の調査は、第1次調査の南部に隣接する地点を中心に、一部東部についても調査を行った。その結果、第1次調査で1基出土したのみであった弥生時代の住居址が、調査

区東部にまとまって出土したのをはじめ、時期の確定できない大規模な集石遺構が3ヶ所出土するなど、第1次調査とは出土する遺構の様相が異なっていた。

前述のとおり、発掘調査に際しては土層観察を行うように努めたものの、一部の遺構では土層図を作成せずに掘り上げたり、遺構番号を誤って実測図に記載するなどといったミスも発生し、遺物整理段階で修正につとめたが完全に修正しきれなかった部分もある。このため、土層断面図を掲載できない遺構については、平面図上のレベルを使用して断面図を作成している。

(2) 発掘調査の成果

今回の調査では、第1次調査に引き続いて縄文時代と考えられる落とし穴状遺構が出土したほか、弥生時代の住居址が12基出土しているのをはじめ、弥生時代前期と考えられる土器片を伴う土坑も検出され、弥生時代前期の生活の痕跡が確認できた。

まず縄文時代では、住居址が11基出土している。時期としては前期末葉、中期初頭、後期末葉の時期と考えられる。

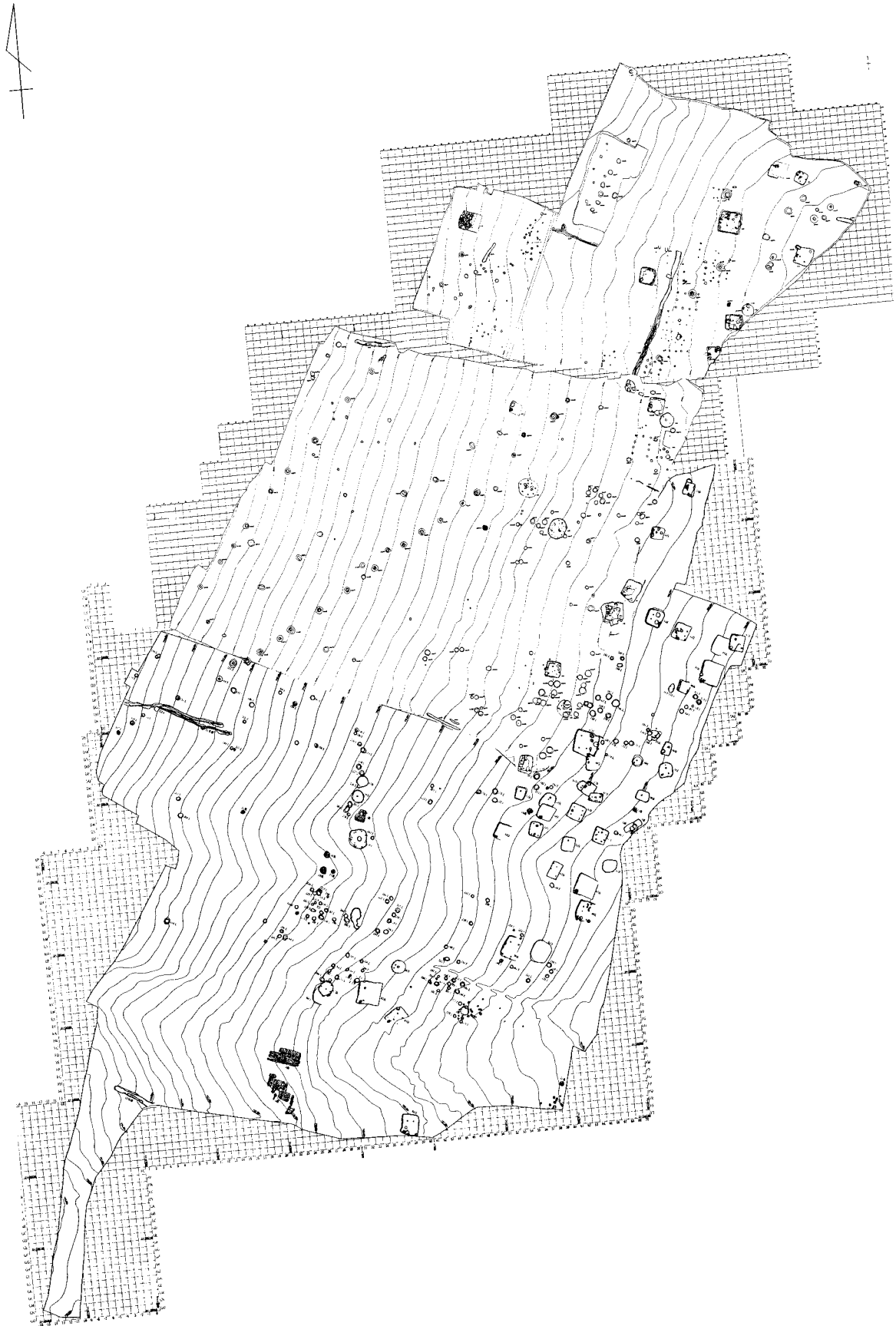
これらの住居址のうち、中期末葉の遺構については痕跡程度であり、その形態を記録することはできなかったが、炉体に土器を伴うか、または床面に被熱面が検出された住居址は前期末葉の遺構である可能性が高く、炉を検出できなかった住居址は中期初頭に多いと考えられる。

住居址の規模も比較的小規模で、柱穴等も明確に検出することができなかったものが多かったが、第65号住居址は谷状の地形内に2基が重複して出土しており、覆土内からは多量の土器片が出土している(第27・28図)。これらの土器片は住居址の廃絶後に廃棄されたものと考えられ、器形の復原できる個体はごく少数であった。

土坑は落とし穴状遺構を除くと約320基が出土している。これらの多くは前期末葉から中期初頭に位置付けられる遺構である。これらの内、断面が筒状もしくは、いわゆる袋状の形態では、比較的深い掘り込みのものもあったが、大半は断面形態に関わりなく浅い。第163号土坑は、深さ約10cm程度の掘り込みとして検出されたにもかかわらず、中期初頭の器形が復原できる深鉢や浅鉢が出土している。

また、第290号土坑は、断面形態がいわゆる袋状を呈しており、その中層から前期末葉の土器片を伴って礫が多量に出土している。礫は炭の混入した覆土中層に集中して出土しており、





第5図 第1次・第2次発掘調査全体測量図 (S=1/1500)

下層と土の様子が異なることから、出土した土器も含めて意図的な埋設と考える事もできそうである。

落とし穴状遺構は10基出土しているが、第1次調査時に検出された列と同様の方向に列をなしていた。しかし、出土したのは北部の一部であり、狩猟に適した地点の境界部分まで調査が及んだことが推定できた。また、第1次調査でも同様であったが、底部付近の暗黄褐色系の覆土は地山かと思われるほど硬くしまっていた。また、その他の土坑についても、数箇所にとまって出土する傾向がうかがえる。

集石は、時期を確定できるような遺物が出土していないため、詳細は明確ではない。形態としては底部に掘り込みを伴うタイプの他に、遺構検出面に礫が集められただけのタイプも存在している。なお、掘り込みを伴う集石の底部に石を敷いたような痕跡が確認できたのは第19号集石のみであり、他は土坑を掘り込んだ後にそのまま礫を入れ込んでいたと考えられる。なお、覆土中には炭化物の混入が見られた。

弥生時代は12基の住居址が出土している。住居址の規模は、長径約3.6mから約4.5mと小規模であった。全体的にはこの地域で典型的な後期の住居址の形態とは異なっており、正方形に近いプランを持っていた。

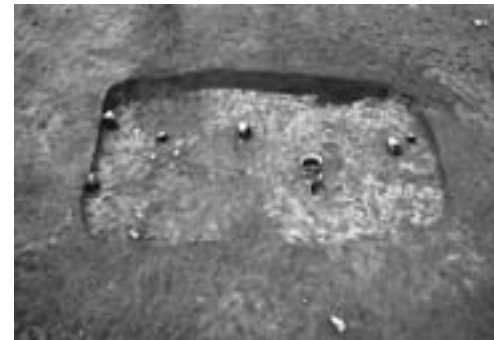
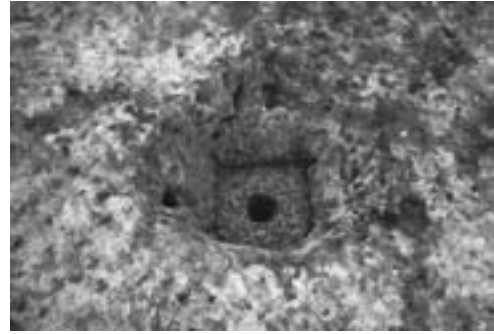
第46号住居址は、長辺約3.7m、短辺約2.5mと小規模な住居址であるにも関わらず、炉が2基出土し、遺物もこの遺跡としては比較的豊富であった。

また、第40号住居址は一辺約4.4mの方形を呈しているが、床面は中心部が柔らかく、周辺部に硬化面が検出されており、他の住居址と異なる状況を示している。なお、この住居址は器形の復元できる遺物が最も多く出土している。

炉の形態も甕のみを炉体として埋設した埋甕炉から、その周囲を石で囲っていたり、単に石で囲っているのみで甕が埋設されていない炉まで様々な形態が出土し、時期差を想定できる。

そのほかにも、第38号住居址の周辺からは小片ではあるが、いわゆるボタン状貼付文を持った甕の破片（第46図4）が出土し、中期末から後期にかけての集落址と推察できる。

また、第225号土坑は直径約1.3m、深さ約1mの土坑であるが、覆土中からススの付着した条痕文を伴う土器片が出土している。破片は下半部のみで一部接合するのみであったものの、この土坑に伴う遺物と考えられ、住居址の検出はなかったものの、前期の生活の痕跡も確認することができた。





これらの集落は弥生時代としては高台に所在する集落であるが、この扇状地には断層によって形成された崖が存在し、ここから豊富な水が湧き出して湿地が形成されていることから、畑作を考慮に入れることはいうまでもないが、この湿地を利用して水稲栽培が行われていた可能性もある。

平安時代は19基の住居址が出土している。後期に属する住居址が大半を占めるといった时期的なものなのか、全体的に出土状態が悪く、形態を明確に把握できる遺構は少なかった。また出土する遺物についても少量で、図化できる遺物のない住居址も存在した。このなかでも、第63号住居址は突出して出土遺物が多く、カマド脇を中心に、皿状に退化した土師器碗・皿類が43個体、盤が2個体、灰釉陶器碗が2個体出土し、当時使用していた食膳具がセットで出土しているのかもしれない。

また、第59号住居址は遺構の約半分程度しか残存していなかったが、床面直上に板状の炭化材が出土し、火災住居の可能性が考えられる。しかし、カマドが破壊された状態で発見され、出土遺物も極少量のため、失火による火災と考えるのは難しいと思われる。なおこの住居址からは自然石を利用した砥石が2個出土している。

小平和夫氏によると、平安時代の遺構は10世紀中頃から11世紀後半にかけての時期に営まれ、10世紀後半から11世紀初めに断絶が認められるようである。この遺跡に限られているわけではないにしても、10世紀から11世紀へ向かう時期の遺構の断絶時に、この遺跡の人々はどこに居住していたのだろうか。

そのほか、今回の調査では、時代が明確ではないものの、最大規模で約35㎡を測る礫群が3ヶ所出土している。

この礫群のうち2ヶ所は、筋状の空白部分を持ちながら直線状に広がっており、厚みも約50cmであった。また、もう1ヶ所については平面方形に分布していた。时期的には比較的新しい時期と考えられるものの、遺物の出土もなく、はっきりしない。また、遺構の性格についても明確にすることができなかった。

あくまでも想像の域を出ないが、遺構外で劃花文が施された龍泉窯系の青磁碗破片や、白磁碗（口縁玉縁状）破片が数点出土していることから、第1次調査で出土した、製鉄関連遺構とのつながりで考えていかなくていけないのかもしれない。

また、調査区西部で出土した形態の明確でない溝状遺構についても、残滓が少量出土していることから、同様の考えでとらえる必要がある。

第IV章 遺構と遺物



第6図 調査地区全体測量図 (S = 1 / 1,500)

1. 住居址

(1) 縄文時代

第29号住居址（第7図）

この住居址は、DR-76グリッドを中心に出土している。直径約2.8mの平面プラン円形を呈し、遺構検出面から約10cm掘り込まれている。

住居址南部に炉が設置され、検出状況から作り替えが行われていると考えられるが、土層観察を行わずに掘り上げてしまったため、新旧関係は明確ではない。柱穴についても、明確に検出することができなかった。

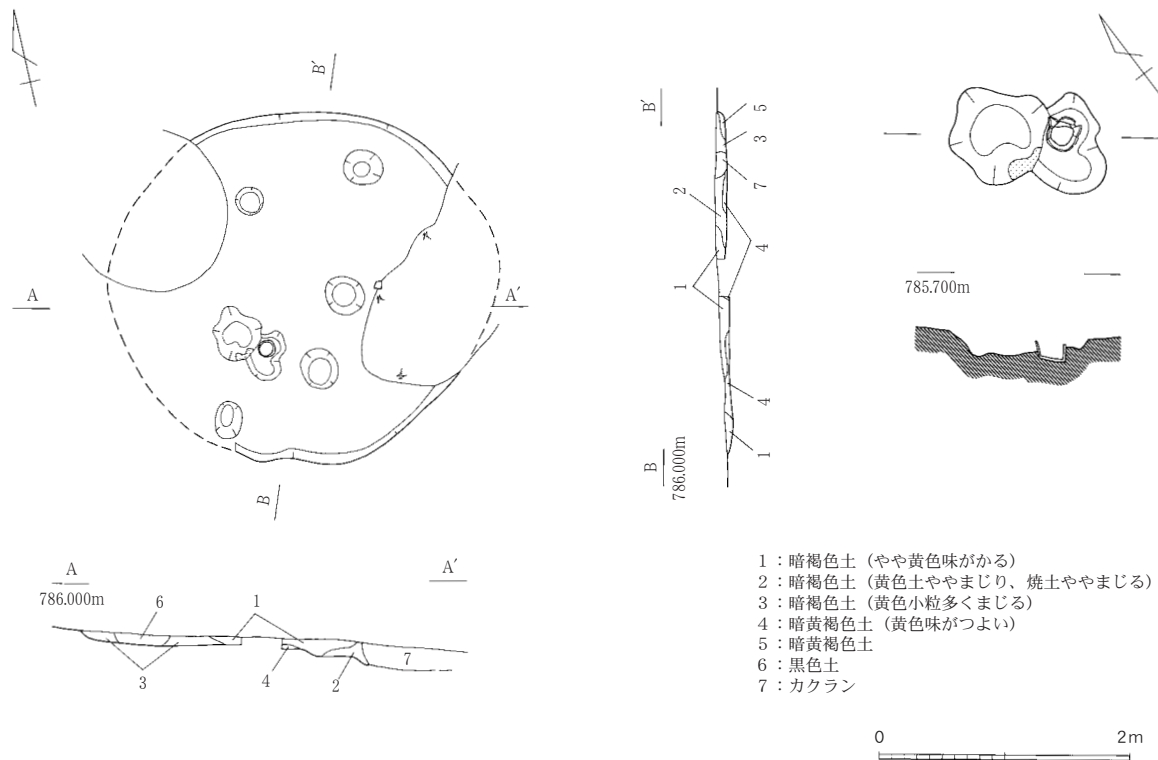
なお、住居址東部には耕作によるカクランが入り、西部については第160号土坑が重複し、それに伴う検出作業によって壁を破壊してしまっている。

遺物（第8図）

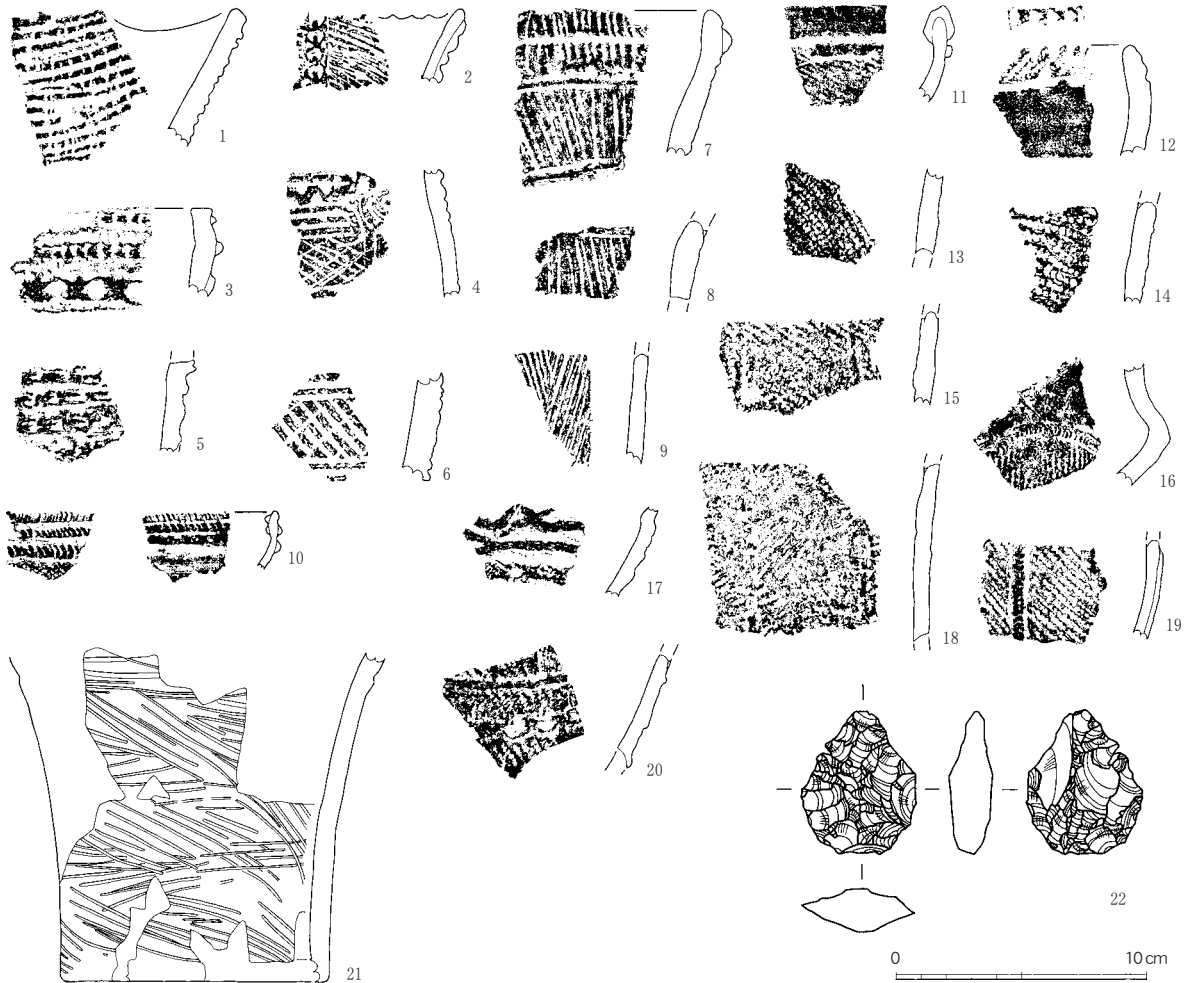
出土している土器は、破片資料が多く、時期も前期末葉から中期初頭にわたる。

21は炉体である。下半部が底部まで残存している。外面には、半截竹管状工具を使用した浅めの平行沈線で、乱れた羽状沈線文を施している。胎土には砂粒が若干混じっている。

1はキザミを伴う浮線文を施文している。外面には煤が付着し、内面には丁寧なミガキ調整が観察される。2は口唇部に押圧を加えて波状とし、浅い平行沈線文を地紋に持つ土器片である。口縁端部から縦位の隆帯を垂下させ、その上を半截竹管状工具によって押圧を加えている。3は口縁部に沿って2本の幅の狭い押引文を伴う隆帯が貼付されている。さらにその下部には押圧隆帯が巡らされている。なお、破片下半部にはススが確認されている。4は破片上部に半截竹管状工具による交互刺突文、その下部には平行沈線による施文がみられる。淡褐色を帯びた堅緻な土器である。



第7図 第29号住居址遺構平面図（炉：S=1/30）



第8図 第29号住居址出土遺物 (22 : S=2/3)

6～9は平行沈線文を主体とした土器である。6は格子目状の文様を施し、7は縦位の平行沈線文を施文の後に横位の沈線を使って文様帯を区画している。なお、口縁部上部付近に横位の隆帯があるが、この隆帯を貼り付けた後に、平行沈線は施文されている。9は比較的浅い平行沈線によって縦位の羽状文を施している。5は横位の押引きを伴う隆帯が添付されている。なお、この押引きで使用している工具は隆帯幅より狭い。

11～14は縄文を持つ土器片である。11は口唇部に粘土をかぶせるように貼り付けて肥厚させ、その直下には隆帯がみられる。12は口縁部上部にのみ縄文が施文され、そこにススが付着している。口唇部は竹管状の工具によると考えられる振幅の小さい波状口縁となっている。

10・15～20は縄文を地紋として、その上に押引きを伴う隆帯を貼り付けている。10は口縁部に内面は2段、外面は3段の押引文が施されている。外面には、この隆帯の直下から縄文がみられる。15は内面にススの付着がみられる。16は「く」字状に強く屈曲した部分を頂点として山形状に押引きを伴う隆帯を貼り付け、その下部に縄文を施文している。17は鋸歯状に屈曲した隆帯が破片上部にみられ、破片下部の押圧隆帯上に地紋の縄文と同時に縄文が施文されている。また、内面はススが付着している。20には押圧隆帯もみられる。なお、10と19は同一個体と考えられ、17と共にやや白味を帯びた胎土である。これらの土器片に施文されている押引文はいずれも精緻な印象で、丁寧に施文されている。

22は黒曜石製の石器である。石鏃の未製品と考えられる。

この住居址は、炉体に使われていた土器から、前期末葉の住居址と考えられる。

第IV章 遺構と遺物

第33号住居址（第9図）

この住居址はDE-78付近に出土している。遺構検出時に土器が出土したことから、周辺を精査したところ、狭い範囲ながら硬化面を確認できたため、住居址とした。

土器は検出面では細かく破損した状態で出土し、小片は円状に広がっているといた状況であった。なお、土器周辺から焼土は検出されていない。

また、この埋設土器の周辺からはピットが2ヶ所出土しているが、この遺構に伴うものとは考えていない。

遺物（第10図）

図示した遺物は埋設土器周辺から出土した土器片である。従ってこの遺構に確実に伴うかは疑問ではあるが、あえて掲載している。

24は埋設されていた土器で、体部を4単位の施文構成としている。体部中部のみを意図的に埋設していたと考えられる。文様は、口縁部および体部に斜位または縦位の沈線を引き、その後口縁部と体部を区画する隆帯や、渦巻文を伴う隆帯を貼り付けている。また、口縁部に見られる格子目状に貼り付けられた斜位の隆帯は、これらの隆帯が施文された後に貼り付けている。なお、隆帯間には沈線による梯子状の文様が4単位みられるが、この文様は、縦位の沈線の施文以前に引かれている。

1は器壁に幅の広い隆帯を屈曲させて貼り付け、その上にさらに細い隆帯を貼り付けている。また破片左には浮線押引文が施されている。

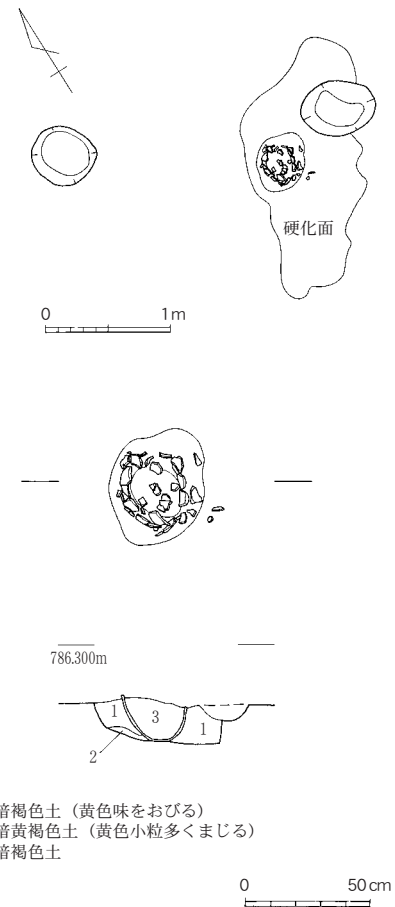
2～4は平行沈線を地紋に持つ土器である。2の内面にはミガキ調整が観察できる。3・4は平行沈線施文後に縦位の隆帯を貼り付けている。なお、3の隆帯上には弱い押引きも見られる。

5～9は器面に薄めの隆帯を貼り付け、その脇を竹管状工具による縁取りを行い、沈線とした土器である。5は口縁部の可能性があるが、縦位の隆帯施文上端部が磨滅しており、接合痕の可能性もある。なお、5・7・8は同一個体である。6・9は上部に頂点を持つように曲線文を施文している。9は器形が大きく変化する屈曲部と考えられる。また、破片上部には接合痕が確認される。

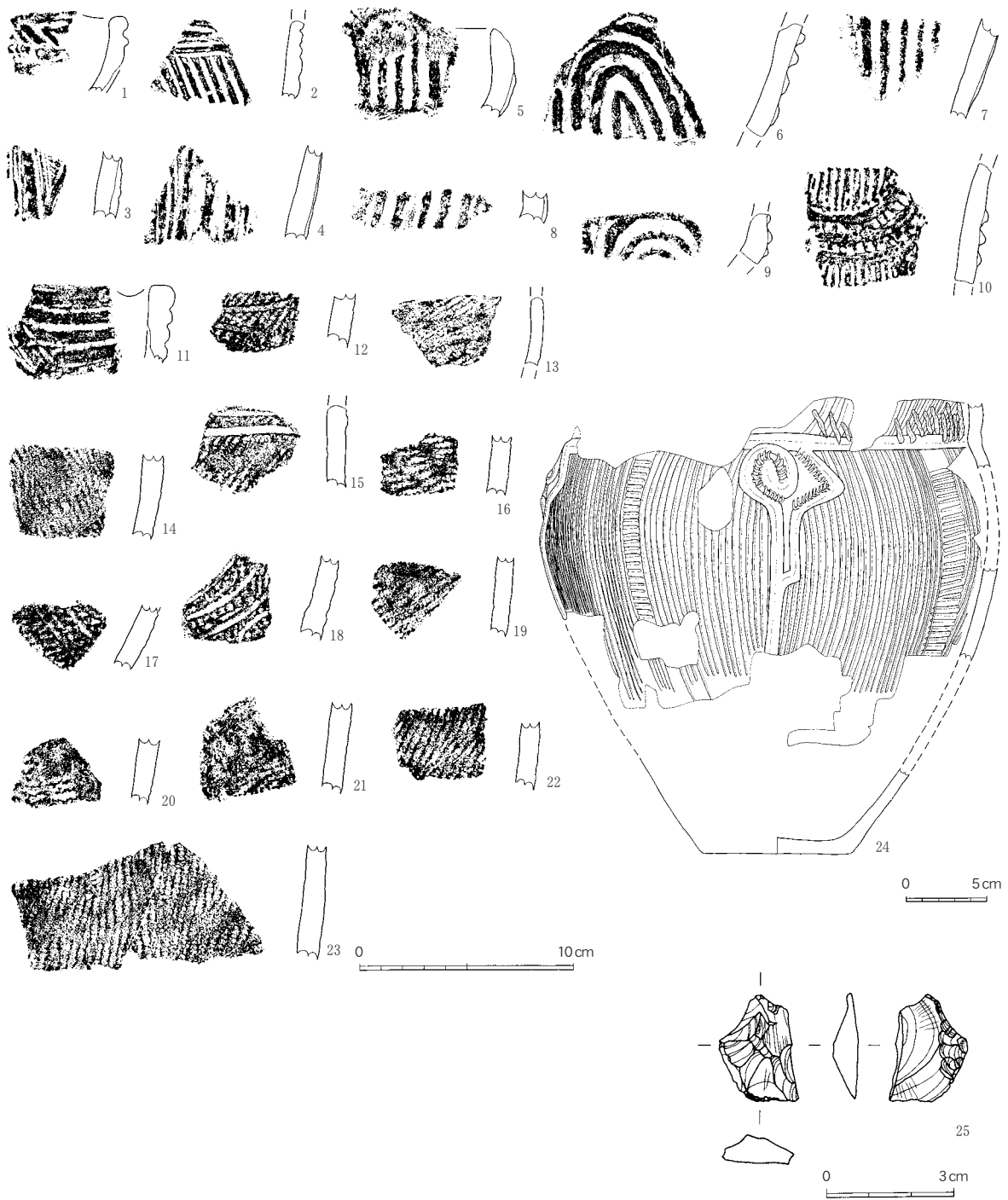
10は曲線を描く隆帯の脇に押引文を施し、その後隆帯上部に半截竹管状工具による平行沈線文を、縦位に施文している。なお、隆帯下部の平行沈線文上部は、竹管状工具による隆帯の縁取りが行われているため、施文順位は明確でない。

11～23は縄文の施文されている土器片である。11は器面に板状の粘土を貼り付けた上に半截竹管状工具による平行沈線を施文している。12・15・17・18には縄文施文後に沈線が引かれている。なお、17～21は同一個体である。

25は黒曜石製の剥片石器である。図面下部と左上に刃部が確認できる。



第9図 第33号住居址遺構平面図



第10図 第33号住居址出土遺物 (24: S=1/4, 25: S=2/3)

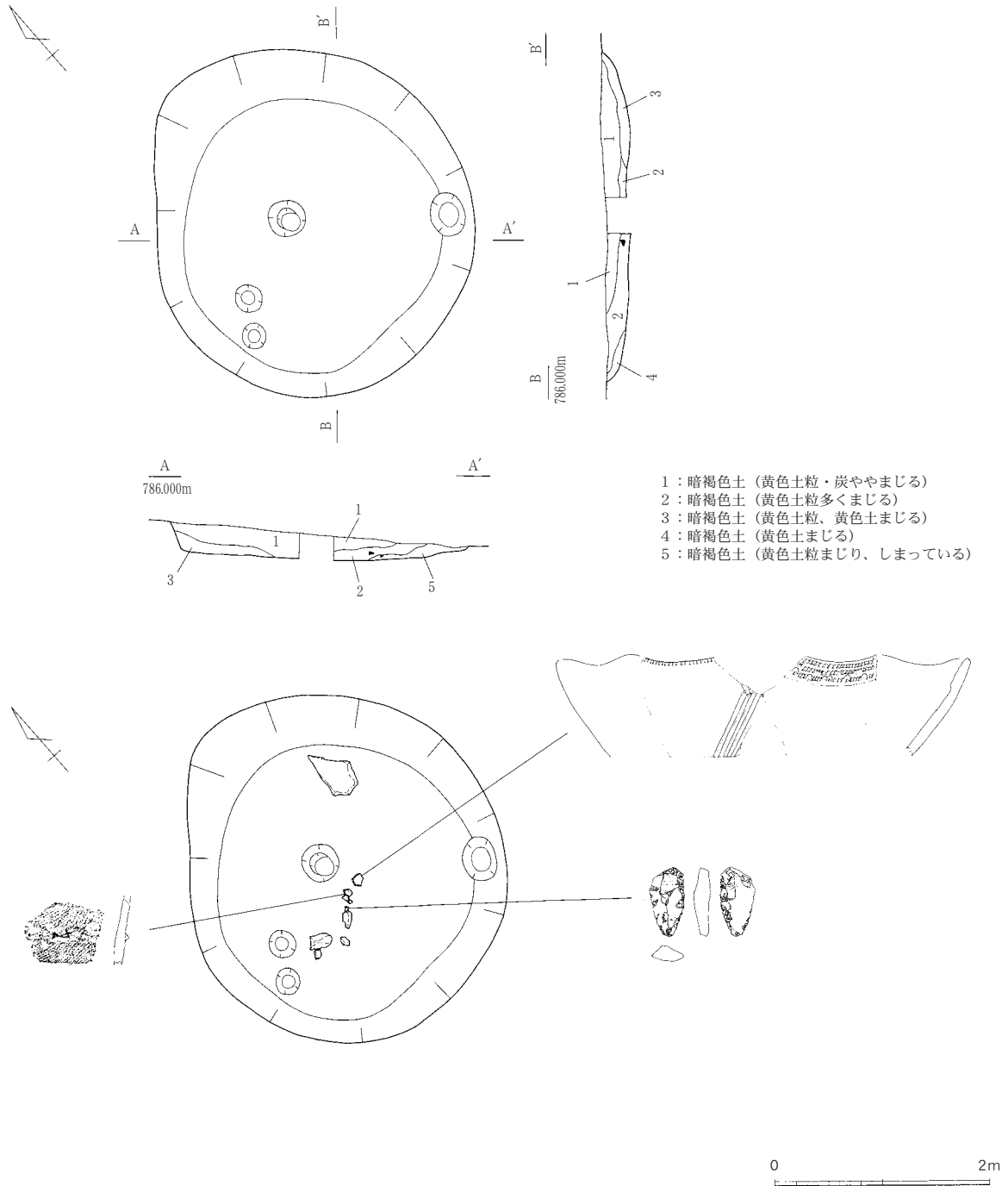
第IV章 遺構と遺物

第36号住居址 (第11図)

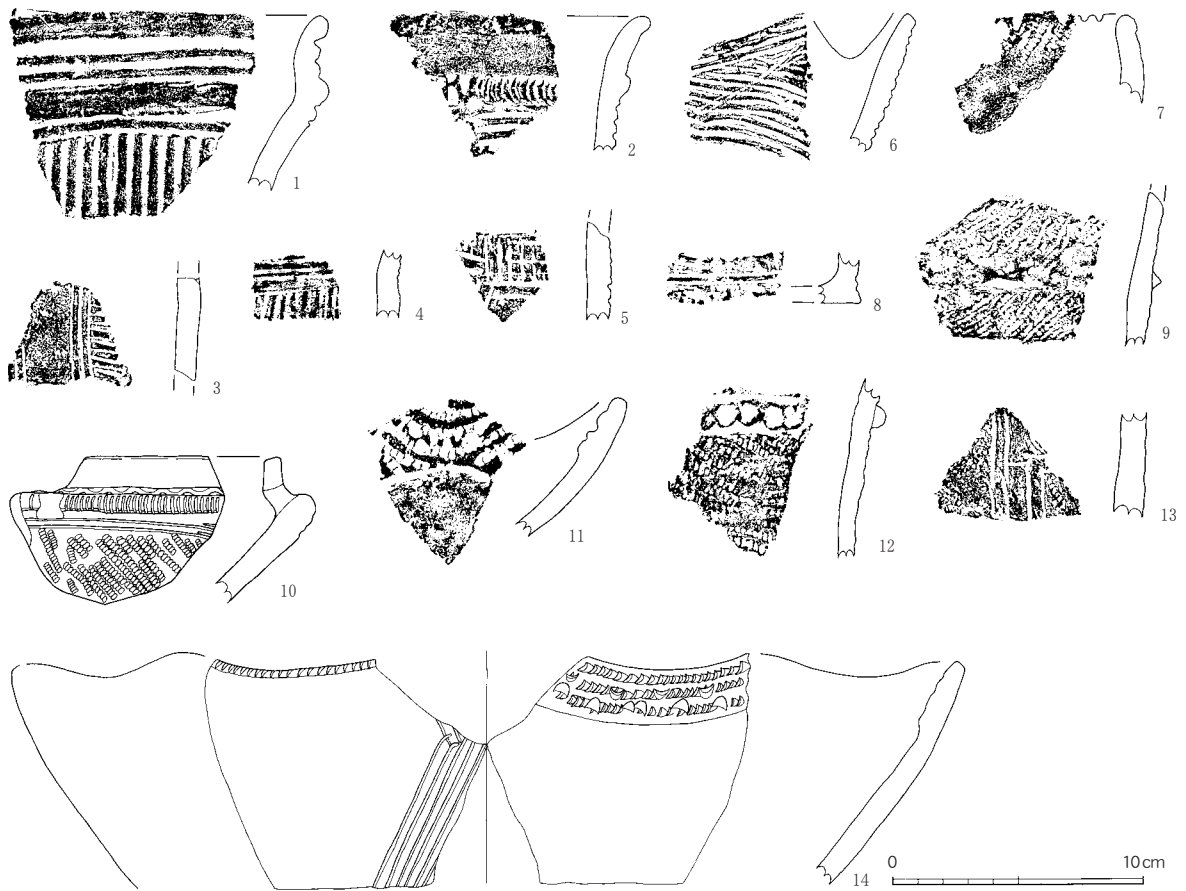
DV-73を中心にして出土している。直径約3.2mの平面円形を呈した小型の住居址である。覆土は全体的に黄色土粒が混入した暗褐色系の土で占められている。床面には硬化面は確認されず、ピットが数箇所検出されたものの、柱穴といえるか疑問である。なお、床面付近からは遺物が若干出土している。

遺物 (第12図)

1～5は半截竹管状工具を使用した平行沈線文を施している土器である。1・4は平行沈線文を縦位に施文している土器片である。1の体部は縦位の沈線を引きいた後横位の沈線を施文している。また、口縁部外面にはス



第11図 第36号住居址遺構平面図および遺物出土状況図

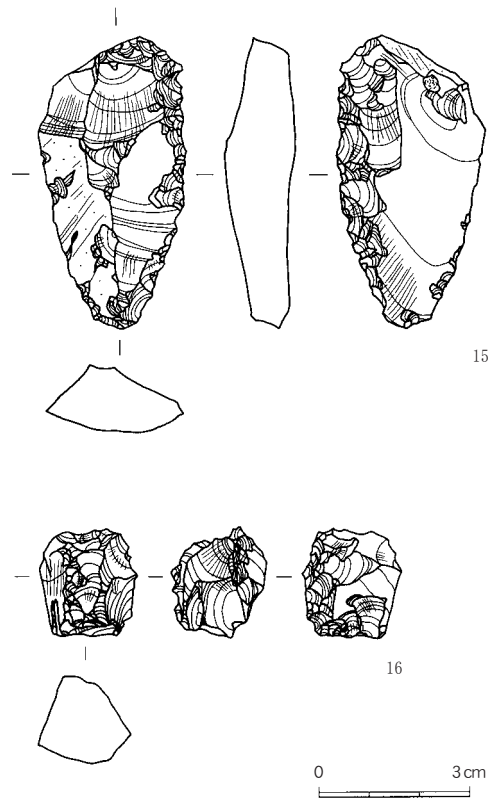


スが付着している。4は胎土に砂粒の混入が目立つ。2は口縁部に無文帯を残し、下部の隆帯に半截竹管状工具で押引文を施し、一部には工具の背面を利用した交互刺突もみられる。3は横位の平行沈線を引いた後、縦位に施文し、梯子状の文様としている。なお、破片上部内面にはススの付着がみられる。5は縦位に沈線を引き、格子目状の文様とし、その後に平行沈線文による文様が施文されている。

6は平行沈線文によるレンズ状文がみられる破片で、混入品と考えられる。

8は底部の破片である。内面と断面にススが付着しており、外面には平行沈線文がみられる。

7・9・10・12・13は縄文を施文している土器である。7の口唇部は竹管状工具によって波状に仕上げられている。9は破片中央部に両端をつまみ上げた隆帯が貼り付けられている。10は鉢形の器形と考えられる。大きく開いた体部の端部を残したまま、器壁に載せるようにして短めの口縁部を貼り付けている。また、露出したままの体部上端部には押引文が施され、口縁部との接合部には交互刺突文が施



第12図 第36号住居址出土遺物

第IV章 遺構と遺物

されている。12には押圧隆帯が貼り付けられている。13は縄文施文後に浅い平行沈線文が縦位に引かれている。

11・14は浅鉢の破片である。内面に押引沈線文が施文されている。14の内面は押引沈線文を施文後に半截竹管状工具の背面を使って交互刺突も行っている。また、外面には縦位の平行沈線文が施文されており、口唇部にも押引文が施文されている。

15は黒曜石製の石器である。実測図は縦位に配置しているが、刃部は縁辺部に確認できる。16は石核である。

第50号住居址（第13図）

この住居址はDW-65より出土している。住居址南東部は第37号住居址によって掘り込まれ、プランを確認できなかったが直径3mの平面円形と推測される。覆土は暗褐色系の土であった。また、床面中央部には土器片を伴う落ち込みが確認され、焼土は検出されなかったものの、ここが炉の可能性が高い。なお、この住居址は柱穴と考えられるピットを検出することができなかった。

遺物（第14図）

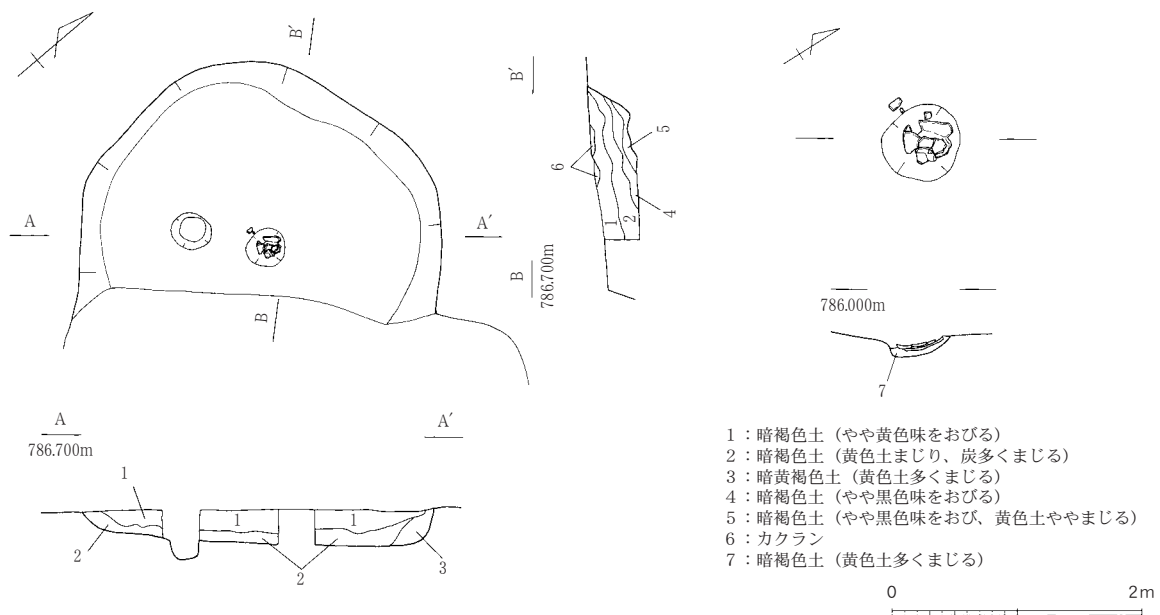
この住居址からは少量の遺物が出土している。8は炉と考えられる落ち込みから出土した土器である。外面に縄文を施文した、底部から大きく開く器形であるが、上部が出土していないため、全体の器形は明確にできない。

1・2は半截竹管状工具を使用した平行沈線を施文している土器である。1は2個1対のボタン状貼付文がみられる波状口縁の土器である。2は平行沈線によってレンズ状文が施文されている。

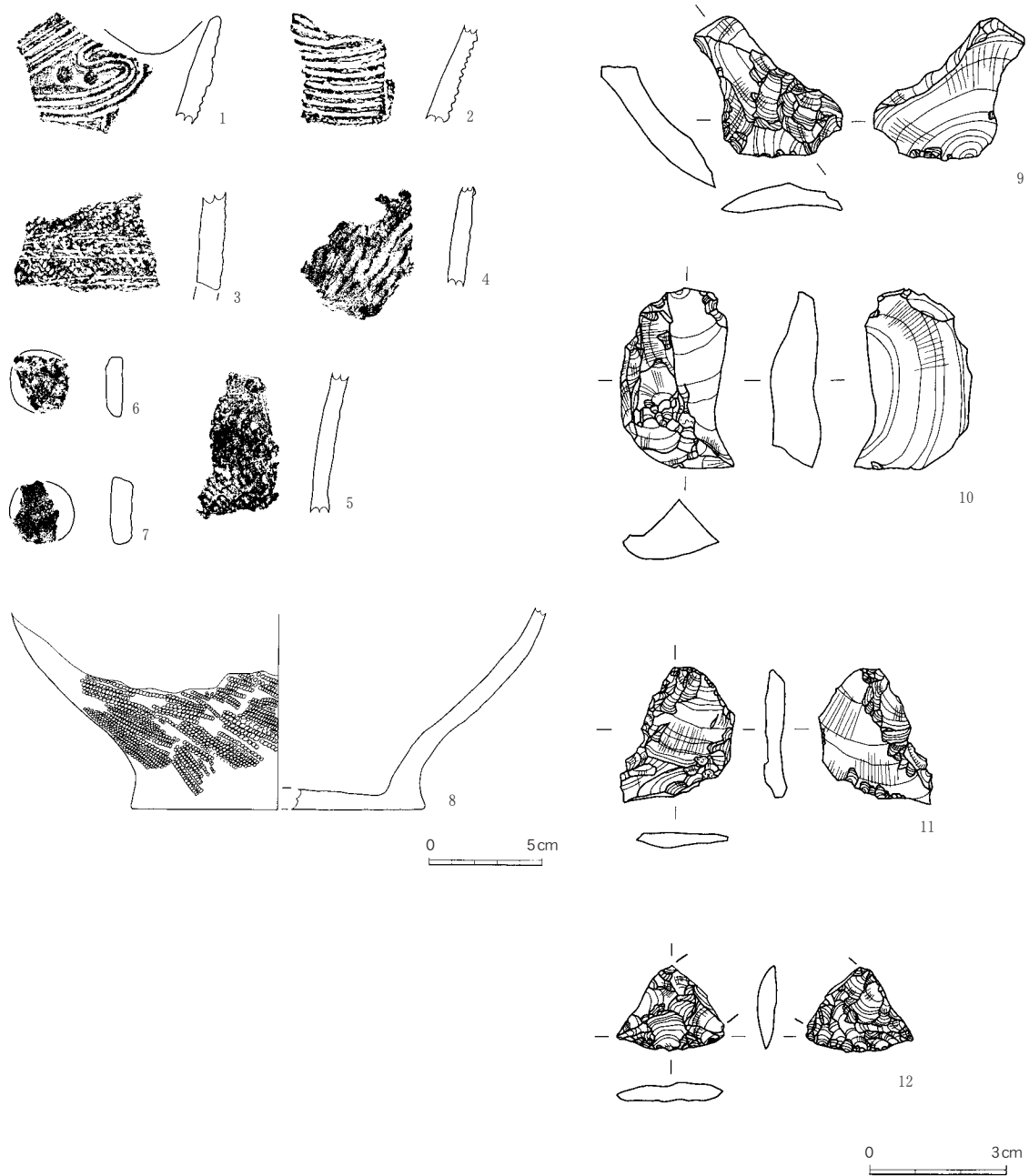
3～5は縄文が施文された土器である。3には縄文施文後に横位の平行沈線が引かれている。

6・7は土製円盤の破片である。

9～12は黒曜石製の石器である。9・10・11は剥片を利用した石器であり、12は石匙の破片である。



第13図 第50号住居址遺構平面図 (炉：S=1/30)



第14図 第50号住居址出土遺物 (9~12: S=2/3)

第56号住居址 (第15図)

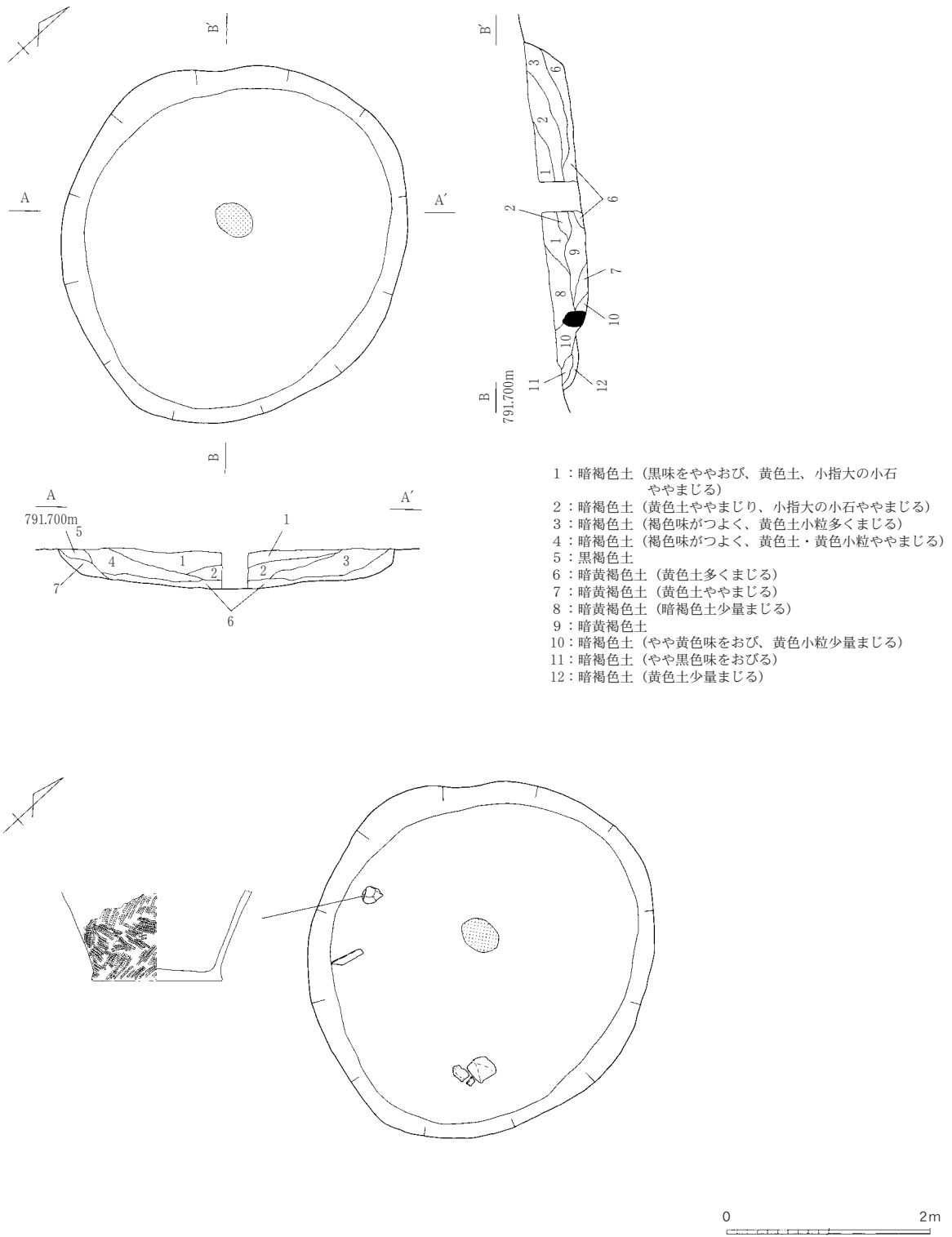
この住居址はDW-35より出土している。直径約3.2mの平面円形であり、上層は暗褐色系、下層は暗黄褐色系の覆土であった。

床面の中央付近には焼土が検出され、地床炉であったと考えられる。なお床面からは柱穴を検出することができなかった。

遺物 (第17図 1・2・19)

1は体部に作り付けられる把手である。細かい連続刺突文が一面に施文されている。2は床面から出土した土器底部である。器面には羽状縄文が施文されている。19は黒曜石の剥片を利用した石器である。

第IV章 遺構と遺物



第15図 第56号住居址遺構平面図および遺物出土状況図

第57号住居址（第16図）

D U-35より出土している。第256号土坑および、第257号土坑と重複して出土した。直径約3.1mの不整円形の平面プランを有し、壁高は約30cmであった。覆土は黄色小粒が混入した暗褐色系の土が中心で、床面からは土器片が出土したが、炉や柱穴といった内部施設は検出できなかった。

遺物（第17図3～18・20・21）

3～18および20・21が出土している。3～6・15は平行沈線文を施文している土器である。3は口縁部が弱く屈曲している器形で、外面に半截竹管状工具による平行沈線文が施されている。また、胎土には砂粒が多く混入している。4は口縁部上端部の破片で、縦位の平行沈線文が施文されている。なお破片下部にはススの付着がみられる。5・6は体部の破片である。3・4と同様に半截竹管状工具による平行沈線文が施されている。15は縄文を地紋として施文した後に、平行沈線を施文している体部の土器片である。

7は多孔質の胎土を持つ土器である。内面はミガキ調整がみられ、外面には横位の、結節浮線文が密接に施文されている。

8は口縁部上端部に縄文が施文された土器片である。縄文が施文された部分は、粘土が厚く貼り付けられていた。

9は白色味を帯びる砂粒が多く混じる胎土である。縄文を地紋に持ち、その上に押引沈線文が施されている。10は16と同一個体である。細かい砂粒と雲母が多く混入しているが、焼成は良好である。16の外面には印刻文がみられ、一部にススもみられる。11は細かい砂粒が混入した小片である。12は11と同系統の土器であるが、焼成があまり。隆帯によって区画された中に、波状沈線文が描かれている。13は底部付近と考えられ、胎土内に雲母を多量に含み、砂粒の混入も目立つ。なお、外面・内面共に文様はみられない。14は底部である。淡褐色を呈し、少量の砂粒の混入があるが、焼成は良好である。17は砂粒の混入した胎土で破片下部には接合痕を地紋化しており、隆帯を横位と弧状に貼り付けている。18は浅鉢の破片である。砂粒が混入した胎土で、口唇部に角押文が施文されている。内面にはヘラミガキ調整が施されている。

20は黒曜石の剥片石器である。下部と裏面右部に小剥離痕がみられる。21は楔形石器と考えられる。

第58号住居址（第18図、第19図）

この住居址はE C-34より出土している。直径約5mの平面不整円形を呈し、壁高は約40cmであった。覆土は暗褐色系の土が中心で、炭や礫が混入していた。住居址の中心部に直径1.2m程の大きさで掘り込みが出土し、礫や土器が出土した。また、焼土も底部から検出されていることから、ここが炉と考えられる。なお、床面の中心部からは硬化面が検出され、壁の周囲から直径25cm程のピットが多数出土し、これらが柱穴と考えられた。

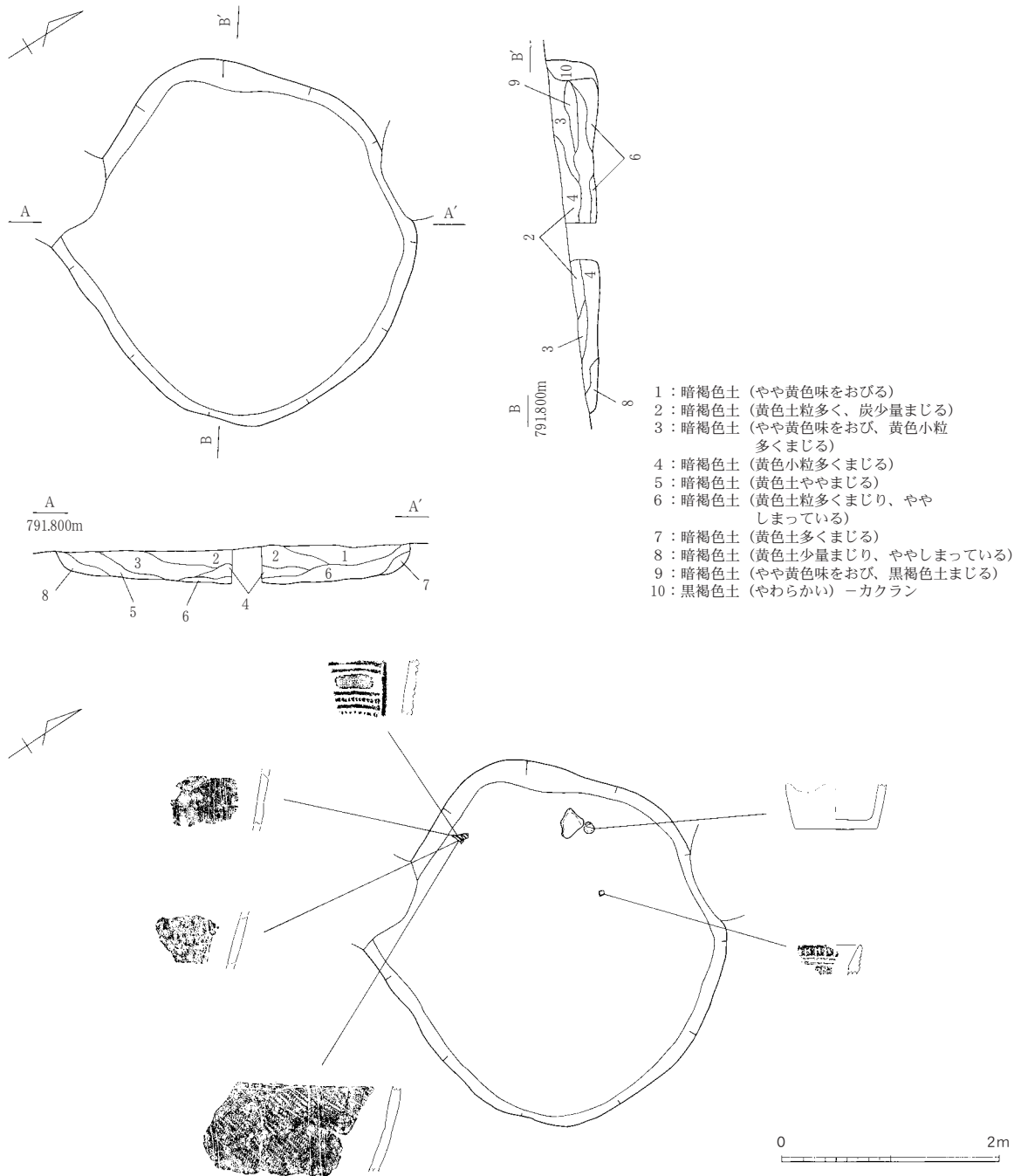
遺物（第20図～第24図）

第20図が出土した石斧である。表面に自然面が残されている。

第21図～第22図はこの住居址から出土した土器である。

第21図1～25・27・28・39はレンズ状文を施文する系統の土器である。1～6は口縁部の破片である。いずれも波状を呈し、上端部は口縁に沿った平行沈線文が施文されている。これらの破片のうち、1の波頂部には穿孔がみられ、6の外面にはススが付着している。7～22・25は、口縁部中部から下部にかけての破片である。7の破片下部および18の外面、22の上部にススの付着がみられる。23～25・27・28は頸部および体部の破片である。このうち23には補修孔が穿孔され、27の内面にはススが付着している。また、28は頸部の膨らみをもつ

第IV章 遺構と遺物



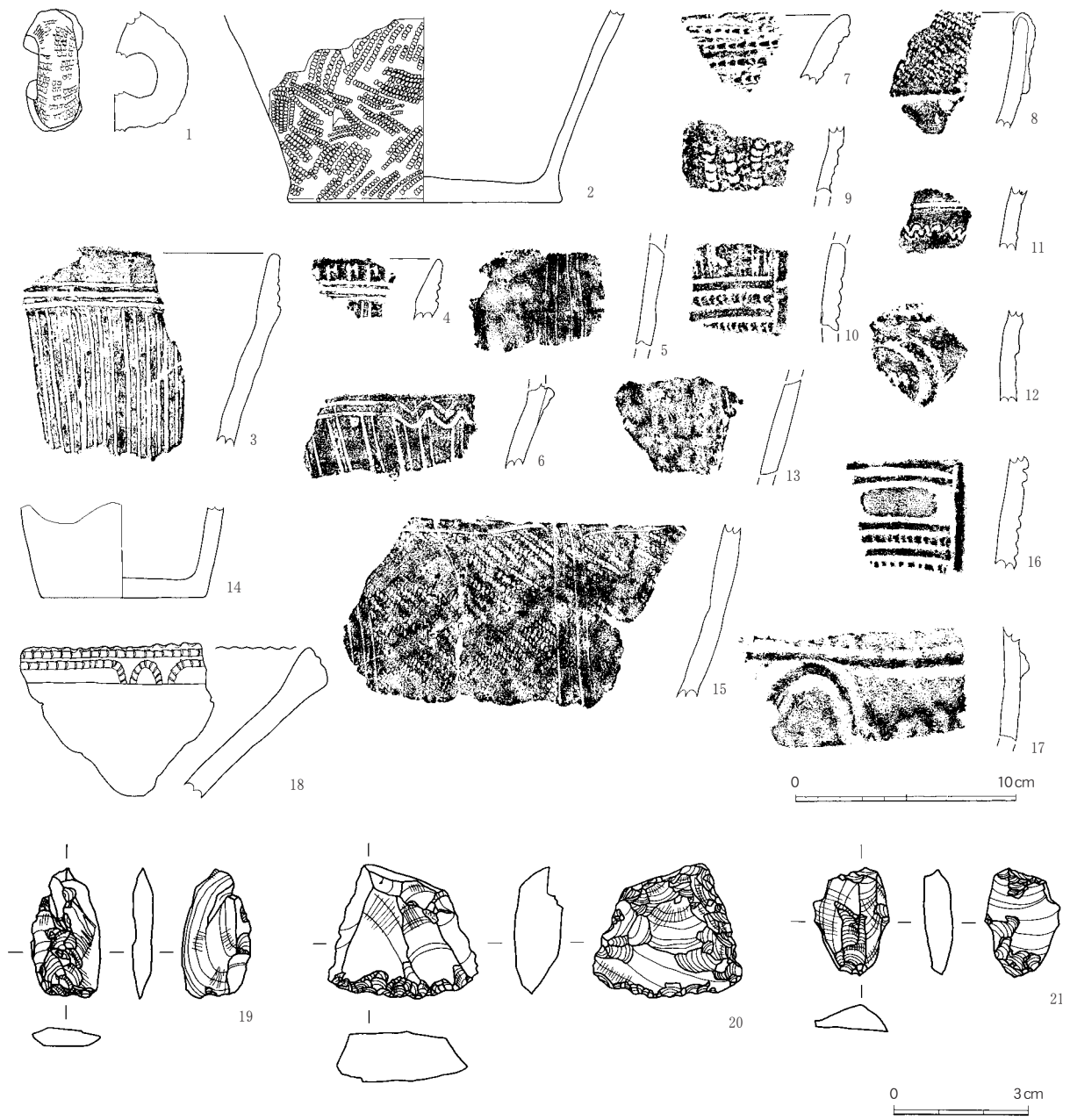
第16図 第57号住居址遺構平面図および遺物出土状況図

部分であるが、断面上部の接合痕にはヘラ状工具によるキザミが施されている。39は底部である。

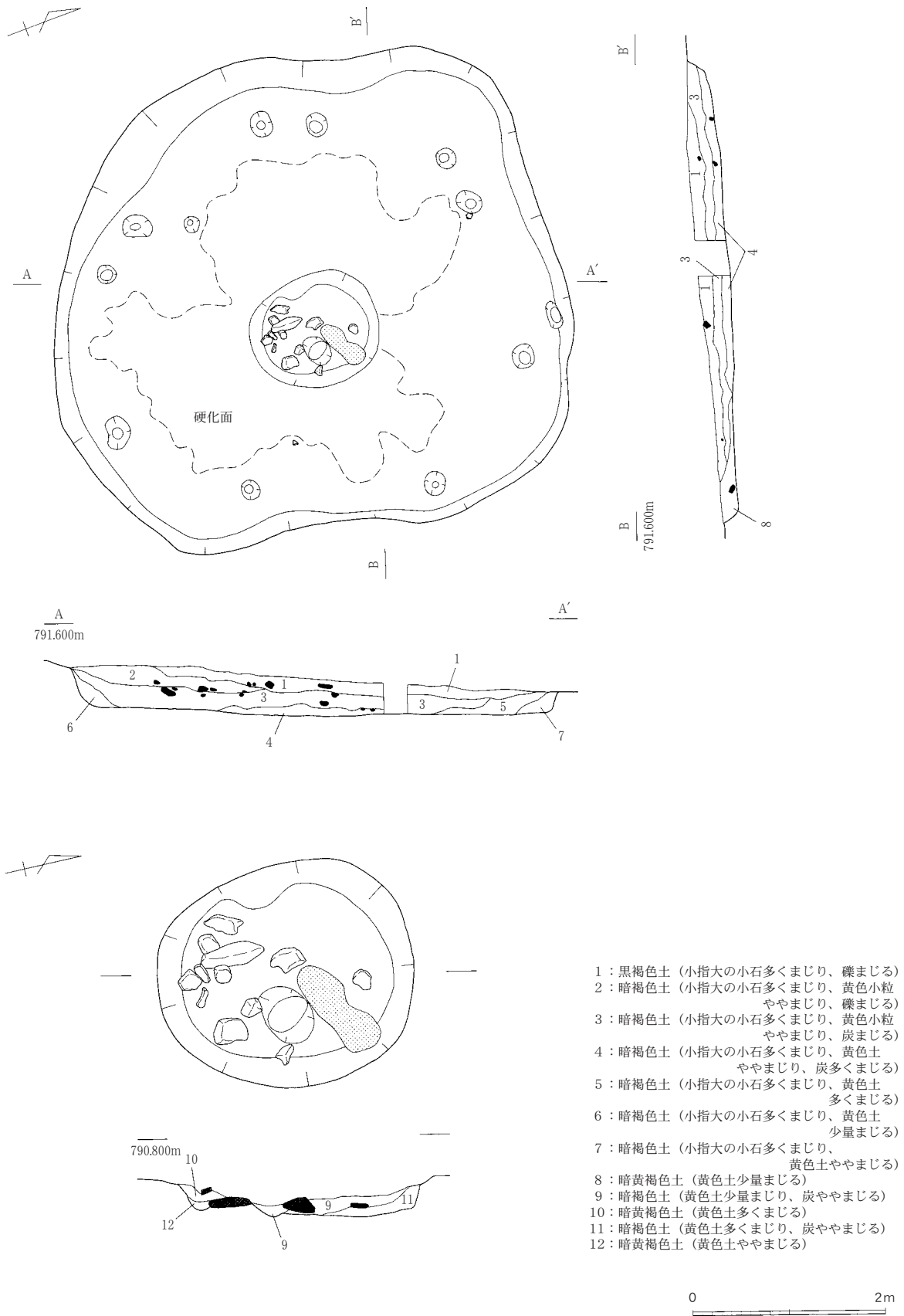
29~31は、平行沈線文による渦巻文を施文する系統である。半截竹管状工具による平行沈線文を施文後、竹管状工具によって沈線を引いている。29は口縁部上端部の破片で、波状を呈する。また、口縁に沿って平行沈線文が引かれ、その下部に沈線文が引かれている。30は渦巻文の中心部に沈線が引かれている。31は平行沈線文を施文後、その渦巻文の外辺に沿って沈線が引かれている。

26・32~35は比較的浅い平行沈線文が引かれている。26は外反する器形で、波状を呈する可能性も考えられる。また、35にはボタン状貼付文がみられる。これらの文様構成から、混入品の可能性も考えられる。

36は竹管状工具による平行沈線で、羽状文を施文している体部の破片である。破片上部には横位の沈線が区画文として引かれている。また、上部の破片断面にはヘラ状工具によるキザミが施されている。

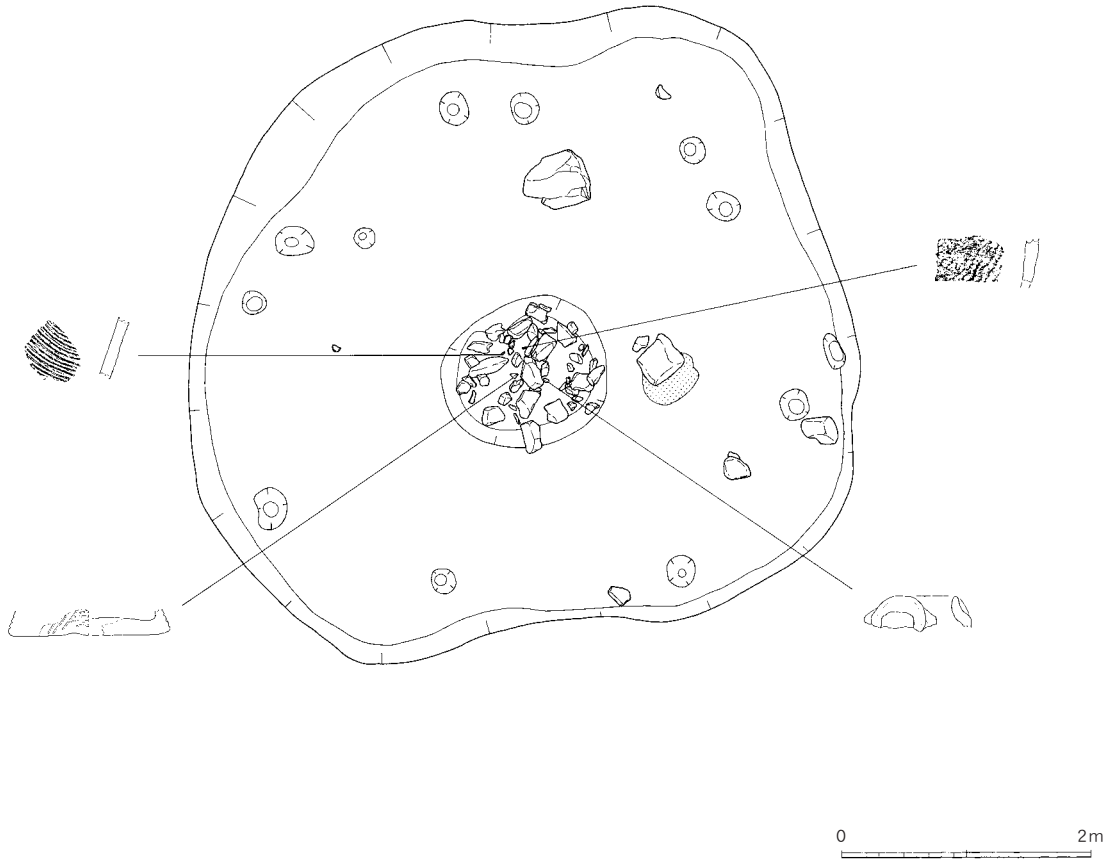


第17图 第56号・第57号住居址出土遺物 (19~21 : S=2/3)



- 1：黒褐色土（小指大の小石多くまじり、礫まじる）
- 2：暗褐色土（小指大の小石多くまじり、黄色小粒やまじり、礫まじる）
- 3：暗褐色土（小指大の小石多くまじり、黄色小粒やまじり、炭まじる）
- 4：暗褐色土（小指大の小石多くまじり、黄色土やまじり、炭多くまじる）
- 5：暗褐色土（小指大の小石多くまじり、黄色土多くまじる）
- 6：暗褐色土（小指大の小石多くまじり、黄色土少量まじる）
- 7：暗褐色土（小指大の小石多くまじり、黄色土ややまじる）
- 8：暗黄褐色土（黄色土少量まじる）
- 9：暗褐色土（黄色土少量まじり、炭ややまじる）
- 10：暗黄褐色土（黄色土多くまじる）
- 11：暗褐色土（黄色土多くまじり、炭ややまじる）
- 12：暗黄褐色土（黄色土ややまじる）

第18図 第58号住居址遺構平面図（炬：S=1/30）



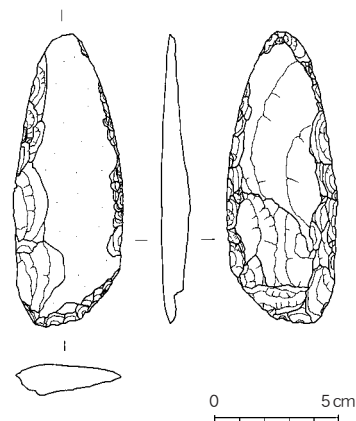
第19図 第58号住居址遺物出土状況図

37・38は竹管状工具による沈線で横位の沈線文を施文している。下部には縄文が施文されている。

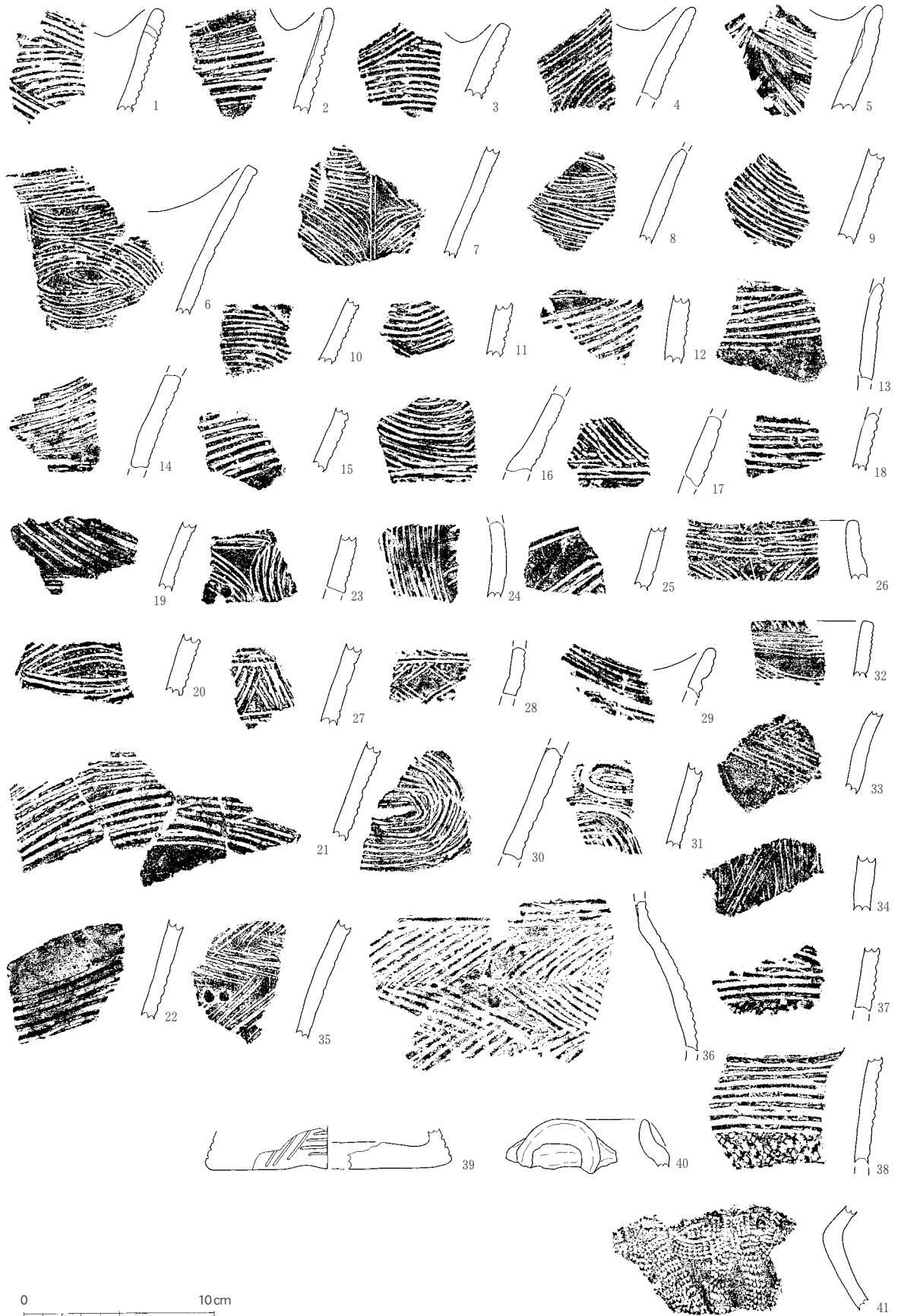
40は口縁部上端部の破片で、粘土紐による弧状の装飾文が貼り付けられている。

41はいわゆるトロフィー型の台付状特殊鉢の下部と考えられる。外面には細い竹管状工具の背の部分を使った連続刺突文がみられる。

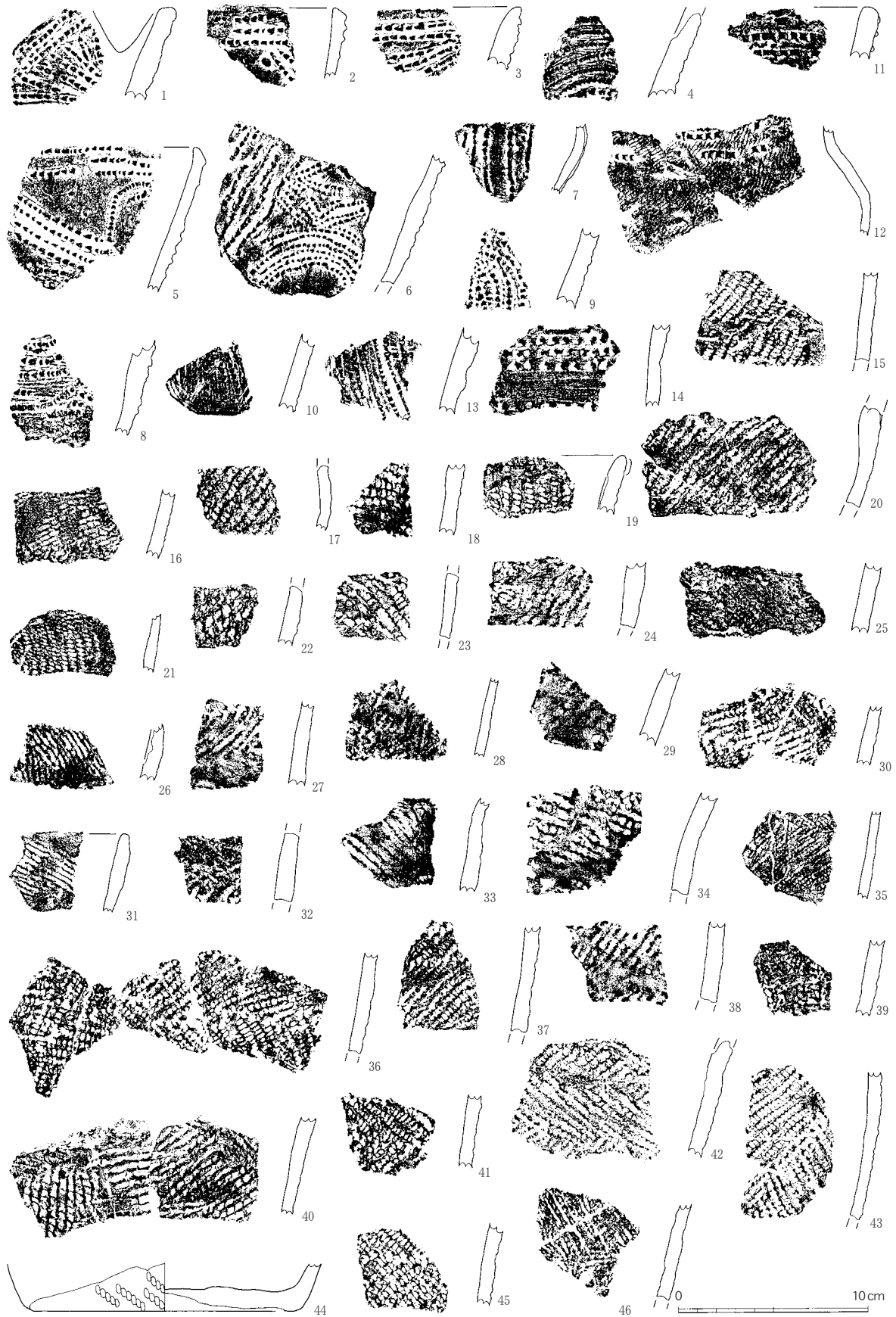
第22図1～3・5～9は結節浮線文を施文している土器である。1は波状口縁で、2・3・5は平口縁である。いずれの破片も口縁部に沿って3本の結節浮線文が施文され、その下部には1は密接に、2・3および5では、間隔をあけた結節浮線文を施文している。なお、これらの破片では地紋を持っていない。土器の内面は、いずれの破片でも、ミガキ調整痕が確認できる。また、2・5にはボタン状貼付文を貼り付けている。6～9は口縁部の破片である。6は5と近似した施文がみられるが、5が淡褐色系の色調に対して、6は褐色系であり、同一個体とは考えにくい。7は縄文を地紋に持ち、その上に縦位に結



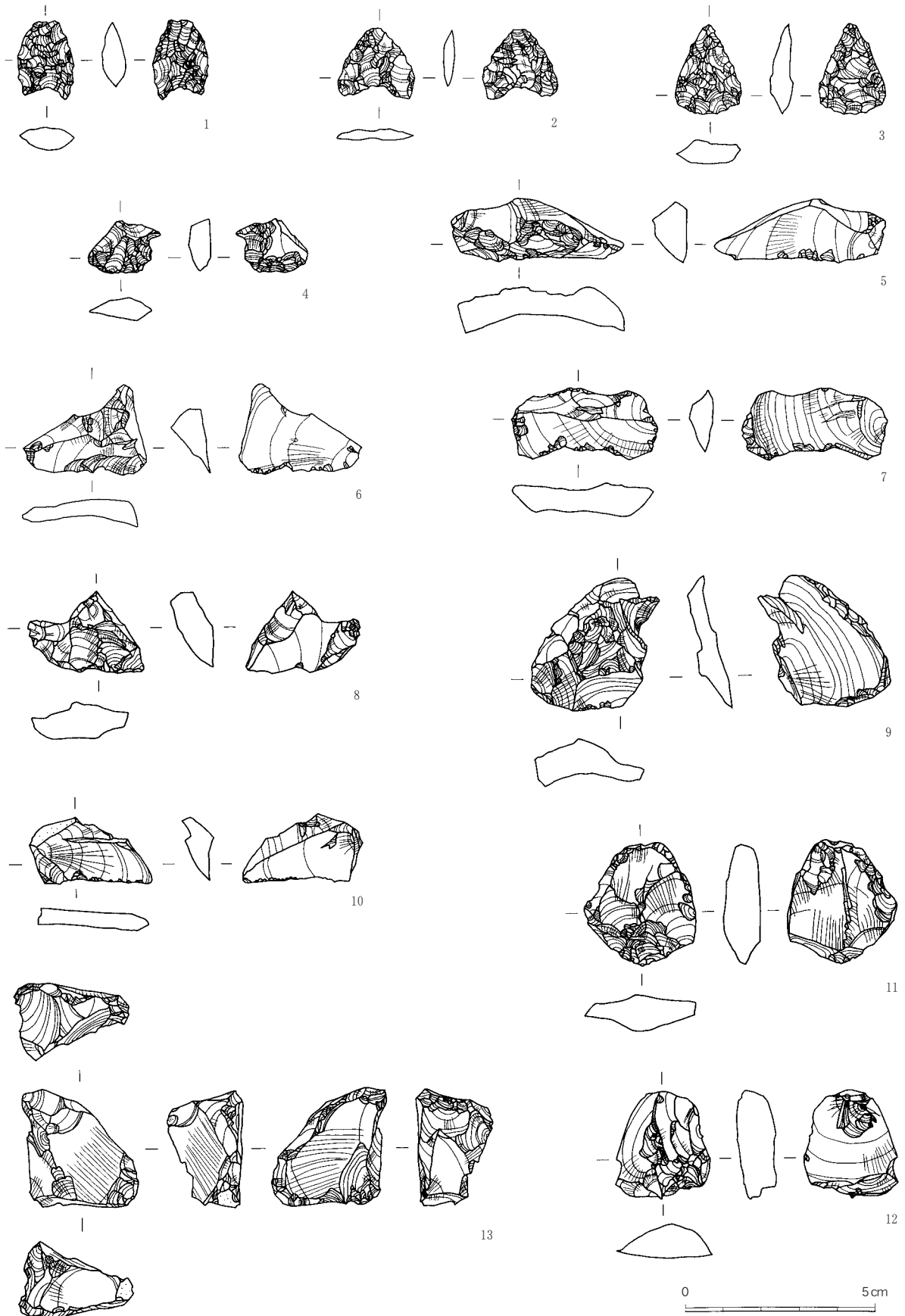
第20図 第58号住居址出土遺物(1)



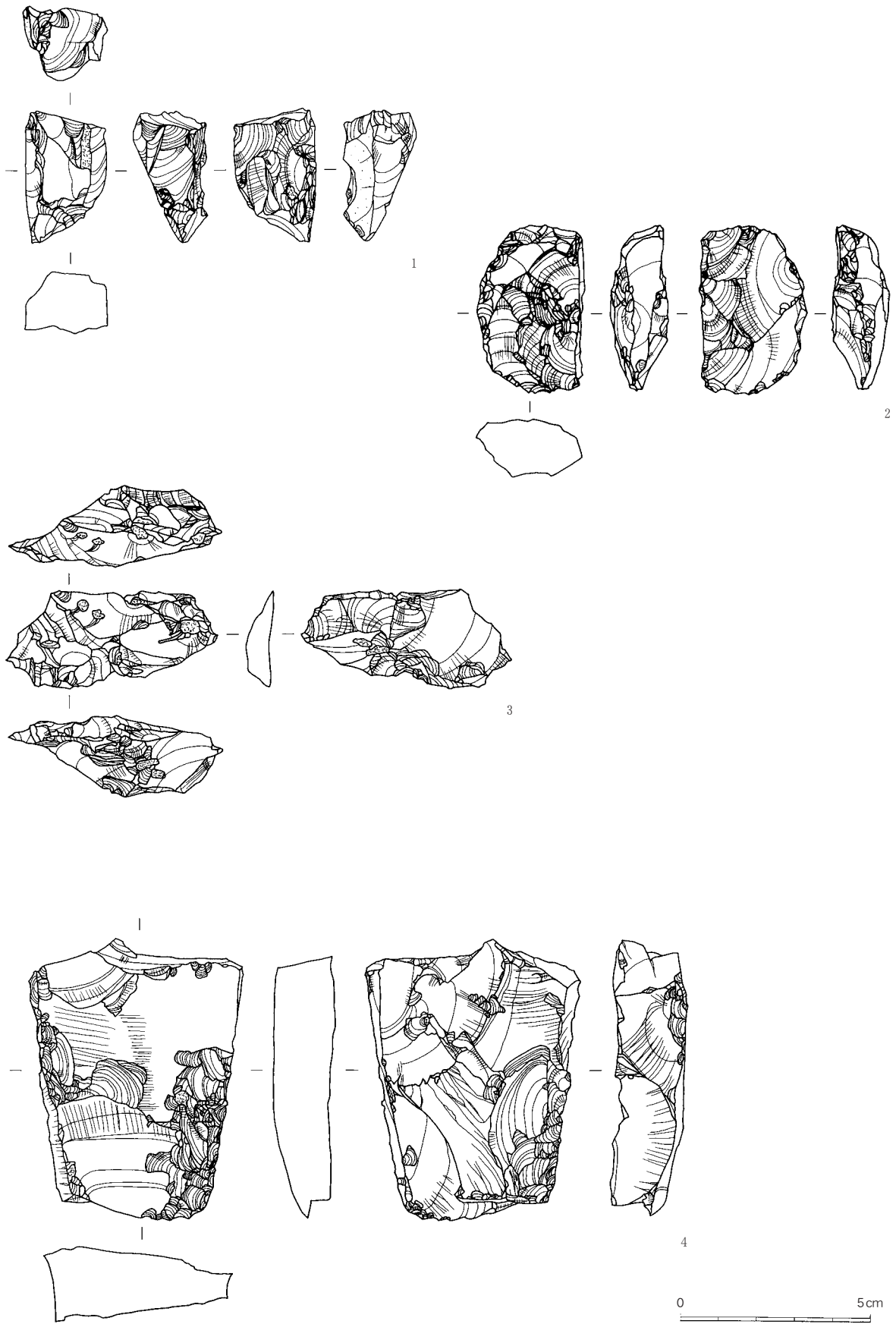
第21図 第58号住居址出土遺物（2）



第22图 第58号住居址出土遗物 (3)



第23図 第58号住居址出土遺物(4)



第24图 第58号住居址出土遺物 (5)

第IV章 遺構と遺物

節浮線文を貼付している。なお、外面にはススが付着している。8の破片下部は剥離が著しいが、平行沈線文を地紋にもっており、その上から結節浮線文を施文している。内面はナデ調整が行われている。9は結節浮線文を密接して施文している。なお、1と9は同一個体の可能性が高い。

10はごく細い隆帯で区画された中に、平行沈線文を引き、その後に結節沈線文を施文している。

11～13はヘラ切りの結節浮線文を施した土器である。11は口縁部の破片で、比較的太い粘土紐を横位に貼り付け、一度に複数本の粘土紐上に、ヘラ状の工具を押し当てるようにして節を構成している。なお、地紋に縄文が施文されている。12も縄文を地紋に持ち、狭い間隔でヘラ状工具を押し当て、節を作っている。なお、外面の上半部にはススの付着がみられる。13は平行沈線文を地紋とし、細めの粘土紐を貼り付けている。粘土紐の上には、ヘラ状工具を使用して節を作っている。内面にはミガキ調整痕が確認できる。14は平行沈線文を横位に施文の後、破片上部と下部には結節沈線文が施されている。やや焼成のあまい破片である。

15～46は縄文を施文した土器である。15は外面と内面の上端部にススが付着し、結節縄文が横位に施文されている。内面にはヘラミガキ調整が行われている。また、22・24・26・27・31・32は無節の縄文が施文されており、22は内面にヘラミガキ調整痕が確認でき、26の内面の一部および断面にはススがみられる。また、30・35～38・40～43・45・46は羽状縄文が施文され、35の内面の一部と40の内面と断面にススが付着している。これらの内、30は焼成があまく、35の縄文はごく浅い施文である。なお、36～38と41・45はそれぞれ同一個体である。

その他、21は白色に近い淡褐色を呈し、内面に剥離がみられるのをはじめ、23の外面、および35の内面の一部にススが付着している。

第23図、第24図はこの住居址から出土した黒曜石である。

第23図1～3は石鏃である。1は縁辺部が外に張り出した凹基鏃である。先端部が欠損している。2は正三角形をした凹基鏃である。3は二等辺三角形を呈し、基部は若干外側に弧を描いている。

4～12は剥片石器である。4は小型の剥片で、下部と一方の縁辺部に小剥離痕がある。5・7は横長で、断面三角形の剥片を利用している。6・8・10は三角形の剥片の底辺を刃部としているが、小剥離痕は少ない。9は薄く剥離した剥片を使用している。11・12は均等に厚く剥離している剥片を使用している。なお、11は石鏃の未製品の可能性もある。13および第23図は石核である。素材をとるための大きな剥離痕のほかに、小剥離痕も観察される。

第61号住居址（第25図）

この住居址はE V-53から出土している。東壁は削平をうけており、正確な規模は把握できなかったが、一辺が約6mの隅丸方形の可能性が考えられる。壁高は約15cmであった。覆土は住居址中央部が暗褐色系で、周辺では褐色系の土が中心であった。

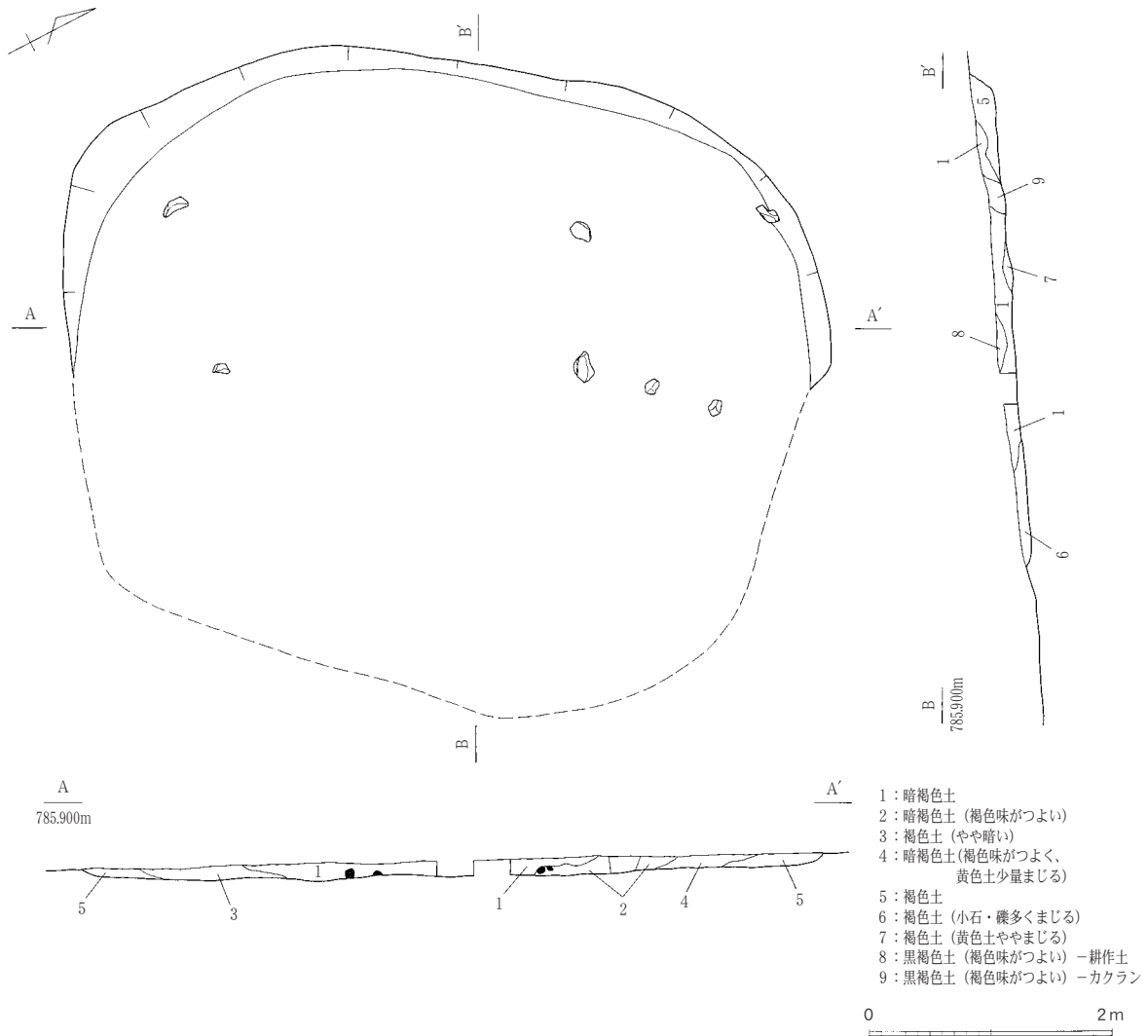
この住居址内には内部施設が確認できず、硬化面も検出することができなかったが、住居址の中央部付近を中心にして、覆土中からは多数の礫が出土した。

遺物（第26図）

6はこの住居址から出土した土器である。表裏共に縄文が施文されている。

1～4は黒曜石である。1・3は剥片石器と考えられる。また、2は石匙と考えられ、縁辺部に小剥離が確認できる。4は楔形石器と考えられる。

5は磨石である。表裏共によく使用されている。なお、中心部には打撃による窪みもみられる。



第25図 第61号住居址遺物出土状況図

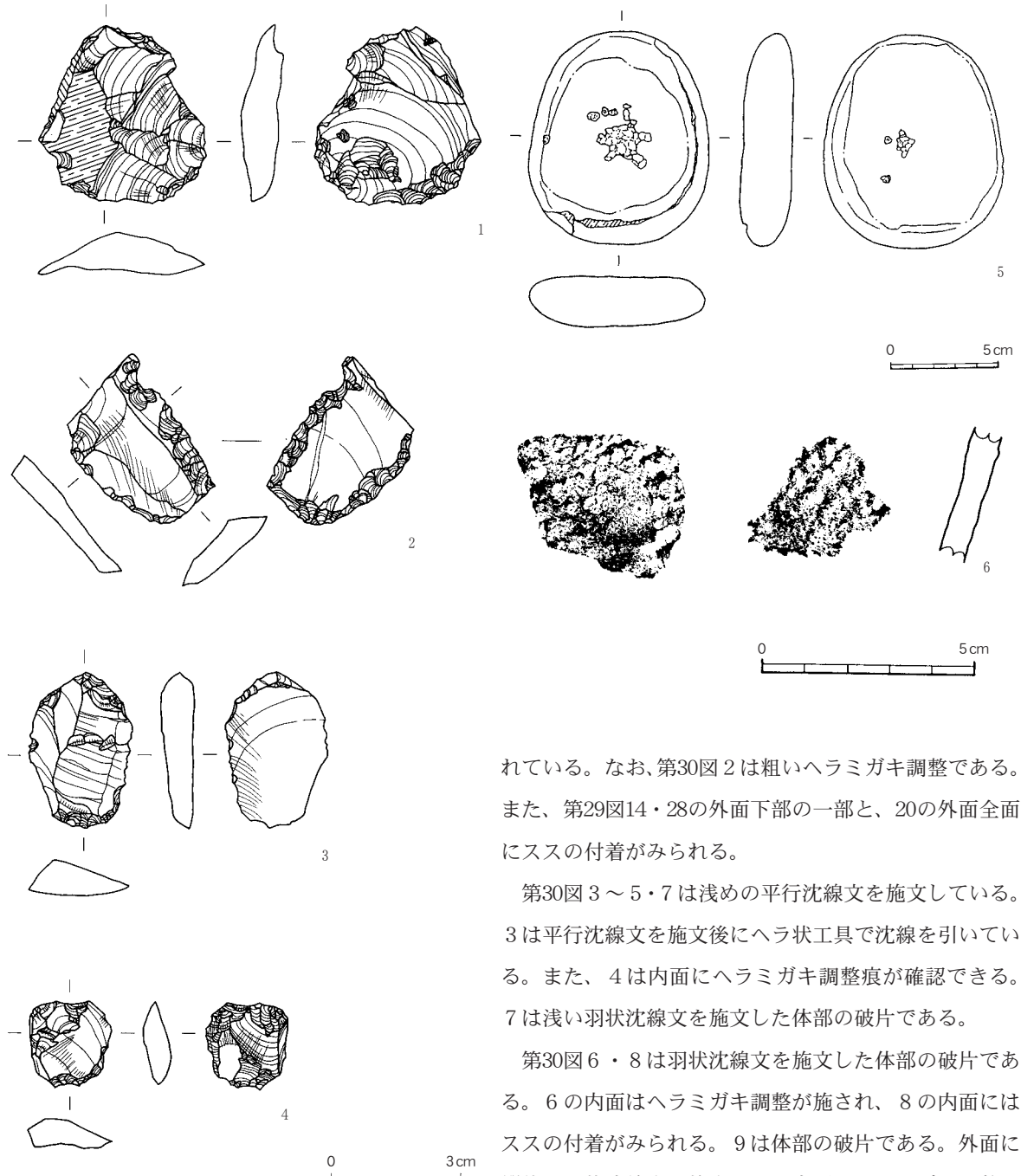
第65号住居址 (第27図、第28図)

この住居址はE X-22から出土している。遺構検出当初は1基の住居址と考えていたが、床面検出時に重複している事が判明した。このため、一括して取り上げてしまった遺物も存在する。

プランは一辺約5.5mの隅丸方形と考えられ、壁高は最深で55cmを測った。覆土は小石が混じる暗褐色系の土であった。床面は、第67号住居址に掘り込まれ、詳細は不明であるが、中央付近を中心にて硬化面が検出され、東部には被熱箇所が確認できる。なお、この住居址からは土器片が多量に出土した。

遺物 (第29図～第34図)

第29図～第32図、第33図1～11はこの住居址から出土した土器である。第29図1～13はレンズ状文を施文した口縁部上部である。1～9・11は波状口縁で、1～3の波頂部には2個の突起が作り付けられている。また、11の口縁部端部は幅を持って肥厚している。8には、波頂部間に突起がみられる。10・12・13は平口縁である。このうち、13の口唇部には挟りが入れている。なお、2～5・7・8・10・11は内面にミガキ調整痕がみられる。また、11の口唇部付近と、12の外面にはスガが付着している。第29図14～20、第30図1・2はレンズ状文を持つ土器の口縁部中部である。第29図14・15・17・28、第30図1・2の内面にはヘラミガキ調整が行わ



第26図 第61号住居址出土遺物 (5 : S=1/3)

れている。なお、第30図2は粗いヘラミガキ調整である。また、第29図14・28の外面上部の一部と、20の外面上部にススの付着がみられる。

第30図3～5・7は浅めの平行沈線文を施文している。3は平行沈線文を施文後にヘラ状工具で沈線を引いている。また、4は内面にヘラミガキ調整痕が確認できる。7は浅い羽状沈線文を施文した体部の破片である。

第30図6・8は羽状沈線文を施文した体部の破片である。6の内面はヘラミガキ調整が施され、8の内面にはススの付着がみられる。9は体部の破片である。外面に縦位の羽状沈線文が施文され、内面はヘラミガキ調整が行われている。

第30図10～12は体部下および底部の一部の破片である。10はいわゆる波状口縁台付特殊鉢の底部である。縦位に平行沈線を一定の間隔で引き、それを中心として縦位の羽状沈線文や、その下部にレンズ状文を施文している。11は横位の平行沈線文を施文して地紋とした後に、縦位の区画を示す平行沈線文を1本引き、その後に区画線を中心に、数本1単位の平行沈線文を羽状に施文している。12は体部中部まで一部残存している。平行沈線文を使って縦位の粗雑な羽状文が施文されている。

第30図13～22は半截竹管状工具を使って、弧線文や直線文を、器壁に空白部を残しながら施文している土器である。13は曲線文を施文する以前に地紋として横位の平行沈線文をひいている。14は口縁部である。口唇部が外に強く屈曲する器形で、口唇部に2本、弱い結節を伴う平行沈線をひいている。15の外面には浅い縄文が地

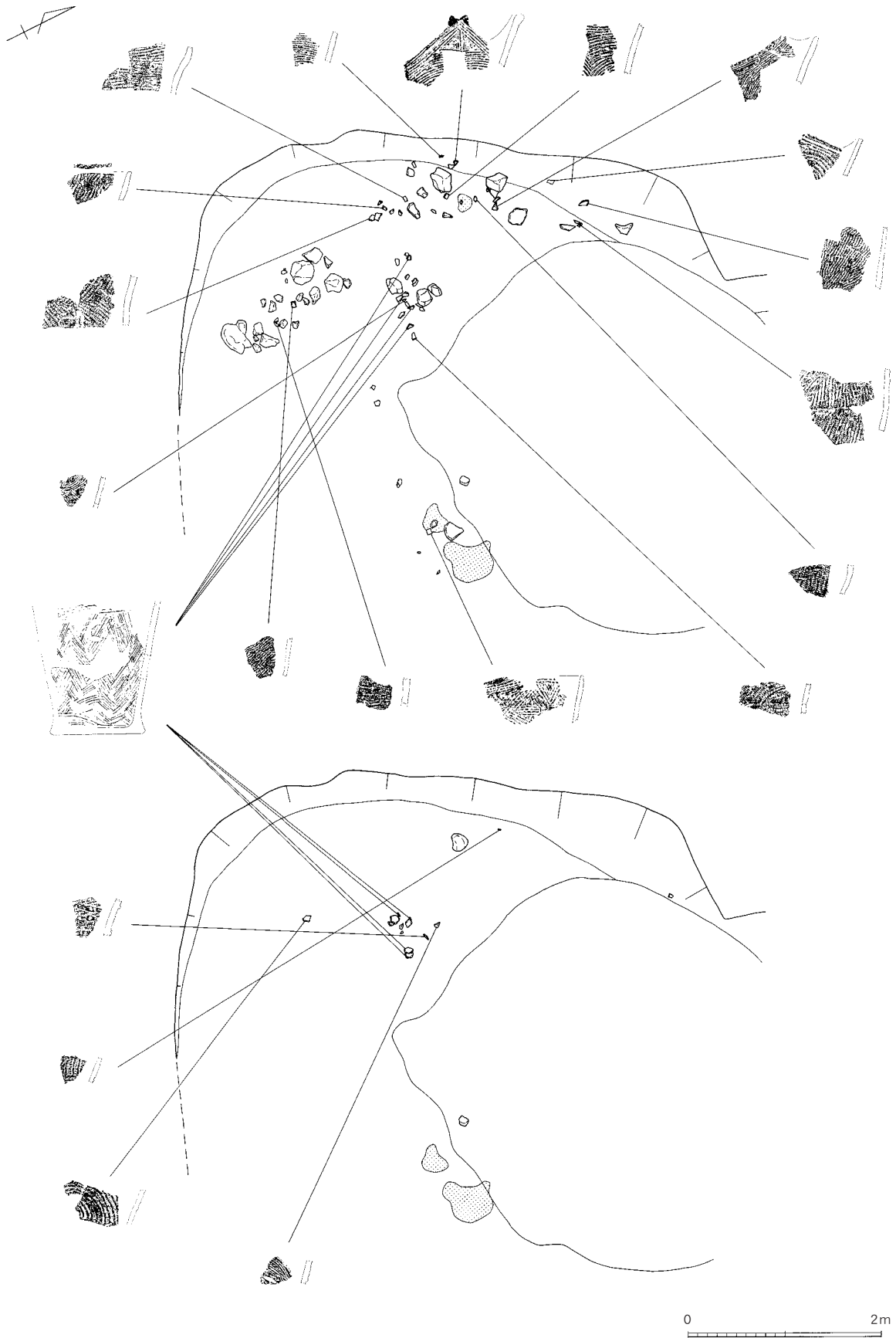


第27図 第65号住居址遺構平面図

紋として施文されている。なお、外面には薄くススの付着がみられる。また、19の内面にもススが付着している。

第30図24・28は結節沈線文を施文した土器である。24は口唇部が丸く仕上げられ、地紋には縄文が施文されている。口縁部上端部に3本結節沈線文が施され、その下部に直線的な平行沈線で幾何学的な文様を描いている。なお、外面にはススが付着している。28は体部中部の破片と思われるが、外面の上部は剥離しており文様構成は不明である。破片中部以下には横位の結節沈線文が6本程施文され、その後下部に縦位の羽状文が結節沈線文で施されている。

第30図25~28および第31図1~11は結節浮線文である。第30図25~28は半截竹管状工具による押し引きで施文しているものである。25は口縁部である。口唇部を平坦に仕上げた波状口縁である。斜位の平行沈線を地紋に持ち、口縁部上部には、その辺に沿って3本の結節浮線文が施文されている。また、波頂部と思われる部分からは縦位に2本結節浮線が施文されている。26は淡褐色を呈し、横位の羽状文を平行沈線で施した地紋を持つ



第28図 第65号住居址遺物出土状況図

ている。この地紋の上に横位の直線や曲線の結節浮線文が施されている。27は縦位の結節浮線文を縦位に4本施文しており、その脇にはボタン状貼付文がみられる。第30図29は浅めの平行沈線で曲線文を描いている。第31図1～11はヘラ状工具によって浮線の上にキザミをいれ、結節浮線文状に仕上げている破片である。いずれの破片も平行沈線文を地紋にもち、その上に粘土紐を貼り付けた後、複数の粘土紐に一度にヘラ状工具を押し当てるようにして、キザミを施文している。なお、9は地紋に斜位の平行沈線文がみられるが、粘土紐を貼り付ける際に地紋が擦り消されてしまったため、ヘラ状工具でキザミを入れる際に粘土紐よりも深くキザミをいれて地紋の補填を行っている。これらのうち1～3・6～8は波状口縁部の破片である。これらの破片の内面にはヘラミガキ調整痕が確認できる。なお、1～3・8と、口縁部中部の破片である5・11は、同一個体と考えられる。また、7の外面全面と、10の外面の一部にはススが付着している。

第31図12～14・17～25は浅い平行沈線文が施文され、ボタン状貼付文を持つ土器である。また、前述した第30図25・27もこの分類に属する。なお、第31図12・14・16・19・21～23には貼付文はみられないが、文様の施文状況からこの範疇ととらえている。これらの破片のうち、21は焼成良好ながら、外面の器壁に白色の砂粒が露出しており、粗いために浅い平行沈線文が途中で途切れている。逆に22は焼成があまりなのか、外面は磨滅が著しく、ススの付着もみられる。また、20・24・25は同一個体であり、緻密な胎土で焼成も良好な土器である。文様は浅い平行沈線文を粗く施文し、そこに大きめのボタン状貼付文を貼り付けている。内面にはヘラミガキ調整痕が確認できる。

そのほか12の内面下部から破断面、13の内面下部、17の外面下部、20の外面上部から破断面（接合痕）、22の外面、23の内面、27・28の外面上半にススの付着がみられた。

15・16は平行沈線文で曲線を描いている。15は外面上部の一部にススが付着し、内面にはヘラミガキ調整が行われている。

第31図27・28は同一個体である。屈曲する体部の破片と考えられ、屈曲部は壁厚が厚くなっている。なお、外面上半部にはススの付着がみられる。

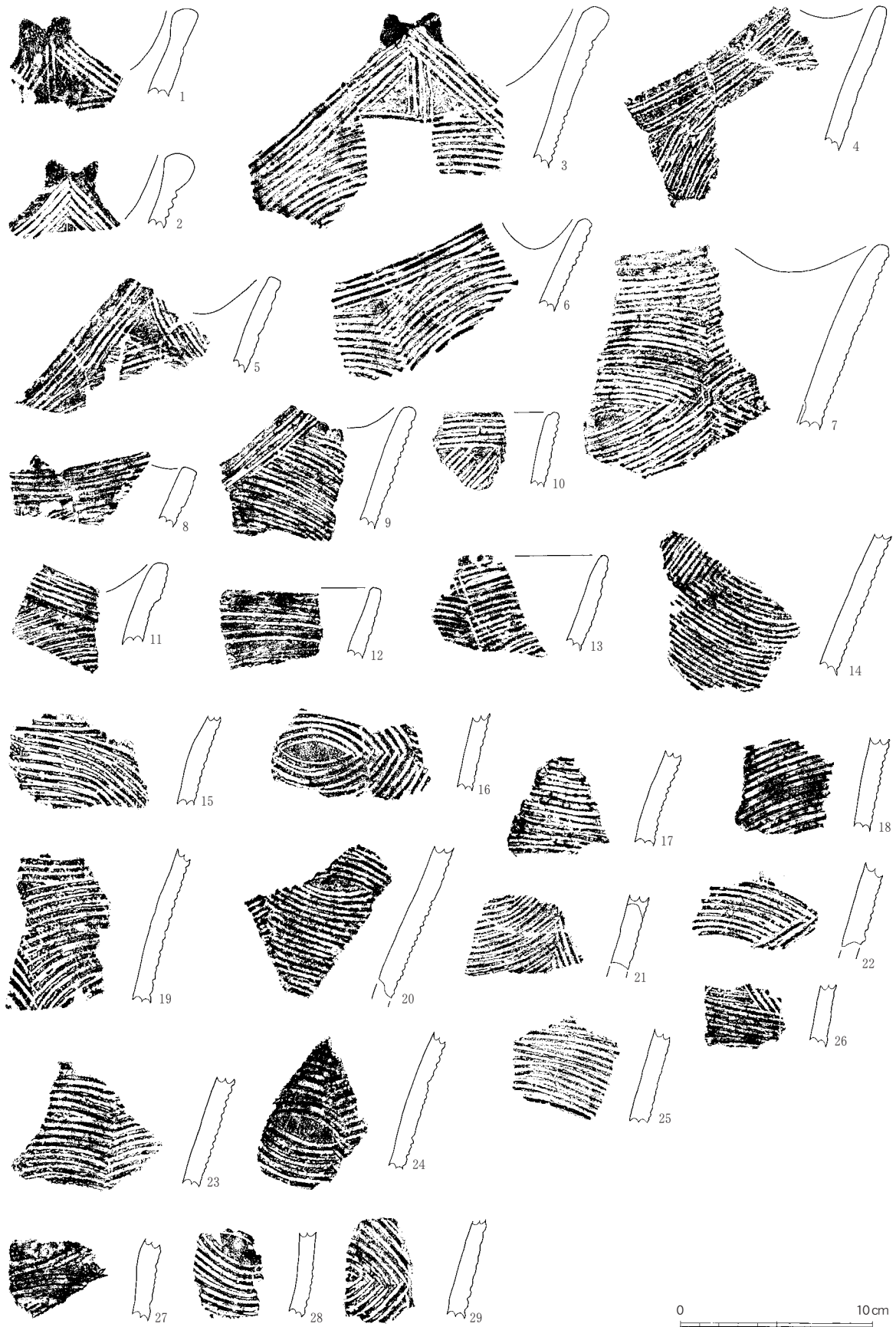
第31図26は底部の小片である。下部までヘラ状工具による刺突が施されている。

第30図30、第31図29～33・39は縄文を地紋にもち、その上にヘラ状工具を斜めに押し当てた細かい隆帯を貼り付けた土器である。受け口状に内屈した口縁部上端部から強く締まった口縁部に至り、再び大きく膨らむ体部となる器形と考えられる。第30図30と第31図30・32・33は同一個体と考えられ、文様構成が緻密で、内面はナデ調整が施されている。なお、内・外面共にススが付着している。また、29・31は地紋の縄文も原体が大きく、貼付されている隆帯も太めである。なお31の色調は、他の破片にくらべて明るい淡褐色である。

第31図34の外面は、縄文の地紋をもち、口縁部上端部には縄文を施文した隆帯が3本貼り付けられている。また、口唇部から内面全面にはミガキ調整が行われている。

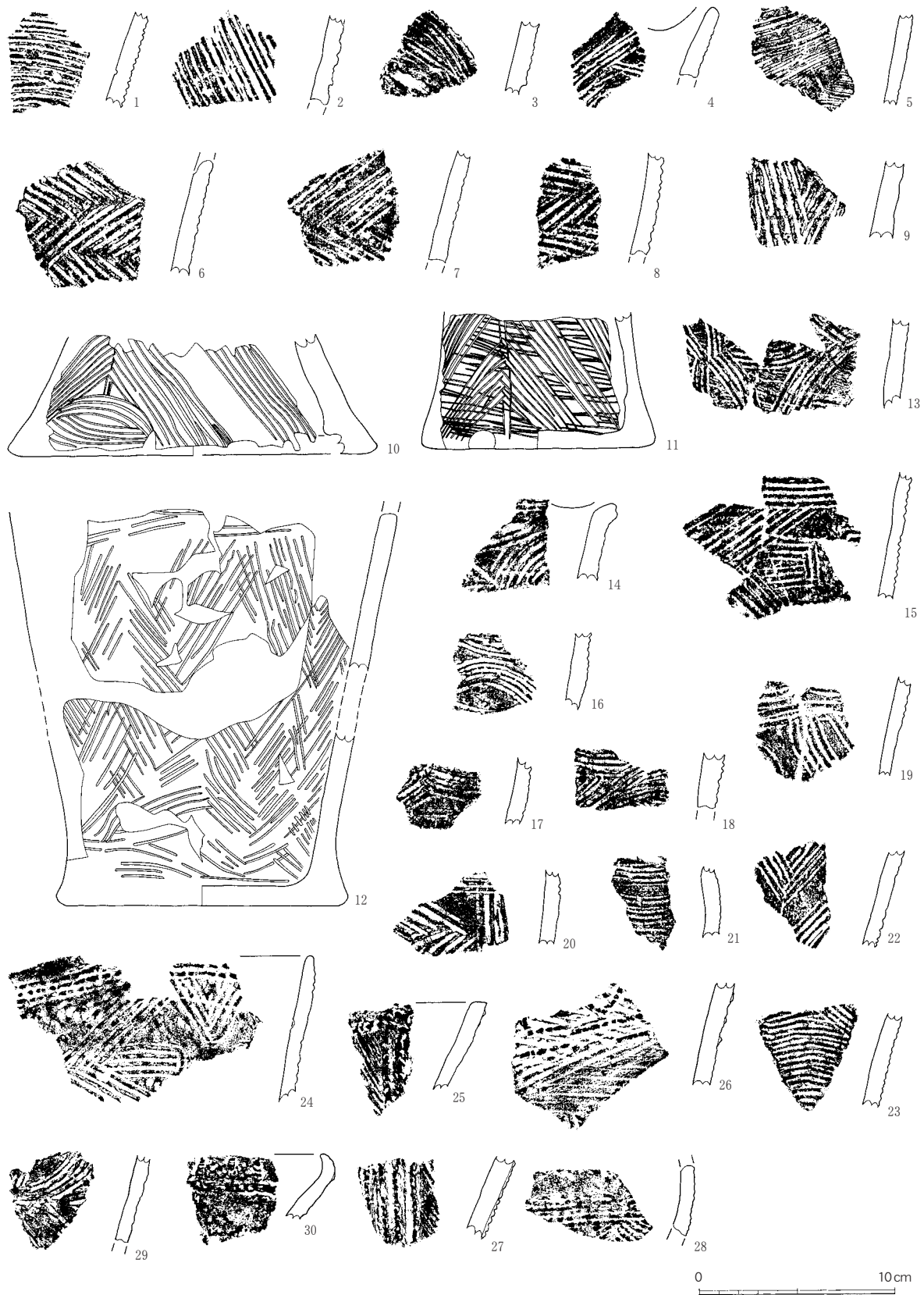
35～38は、結節沈線文を器面全面に施文している土器である。35・36は同一個体である。35は口縁部の破片であるが、口唇部につけられた突起が剥離している。37も口縁部である。口唇部が内側に屈曲しており、そこに付けられた突起の上部にのみ、連続刺突文が施文されている。また、外面の屈曲部と破片下部には竹管状工具による沈線が引かれている。38の突起部は、外面部には連続刺突文が施文されているが、側面および、上部の内面は平行沈線文である。外面は結節沈線文を施文した後に、竹管状工具による沈線を引いている。

第32図、第33図1～11は縄文を施文している土器である。第32図1～4・8は口縁部である。1・2は口縁部上端部が受け口状に屈曲した器形である。両者共に外面にススが付着している。1は口唇部に竹管状工具による押圧が加えられており、2の口唇部には、ヘラ状工具によるキザミがみられる。また3の口唇部には縄文

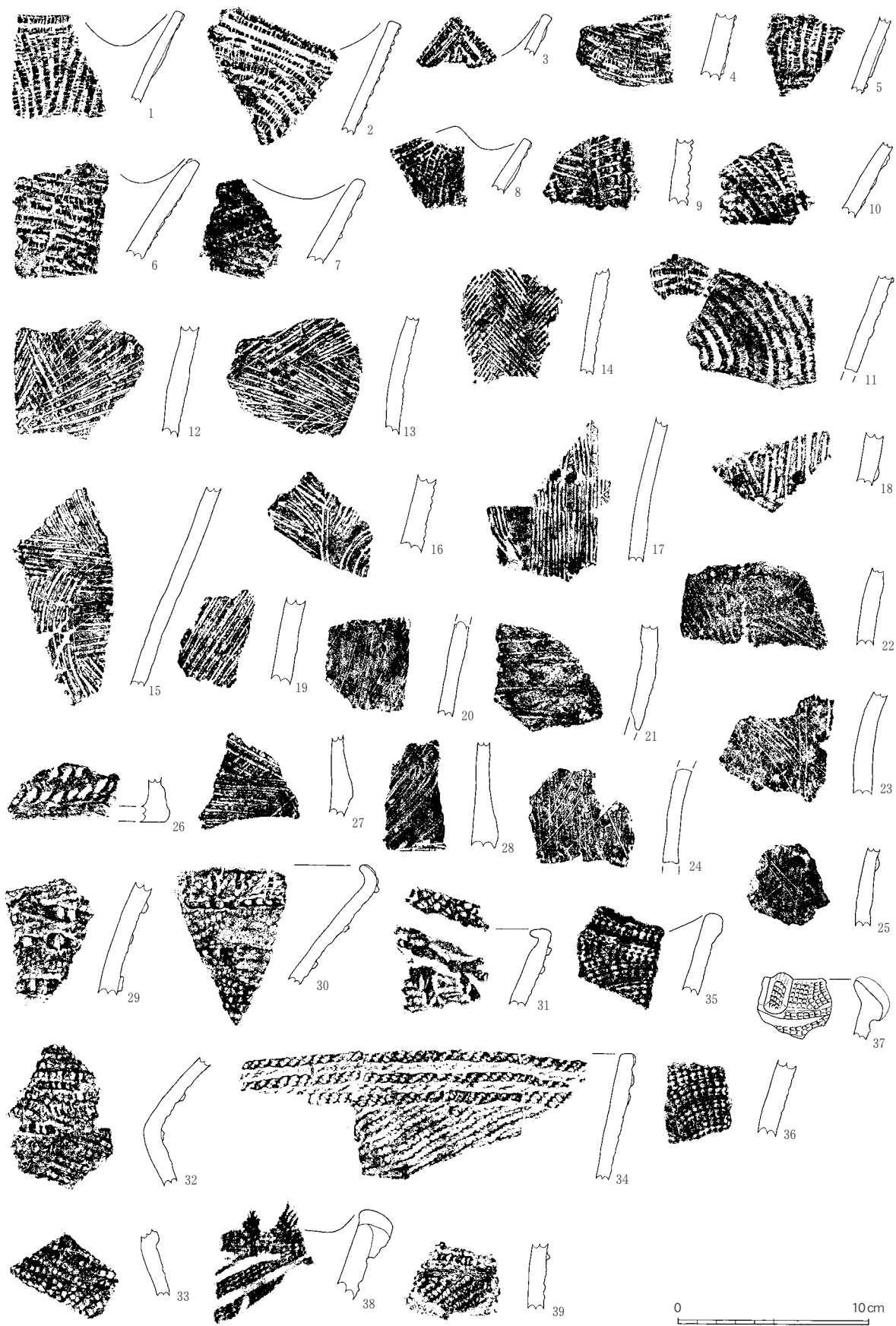


第29図 第65号住居址出土遺物（1）

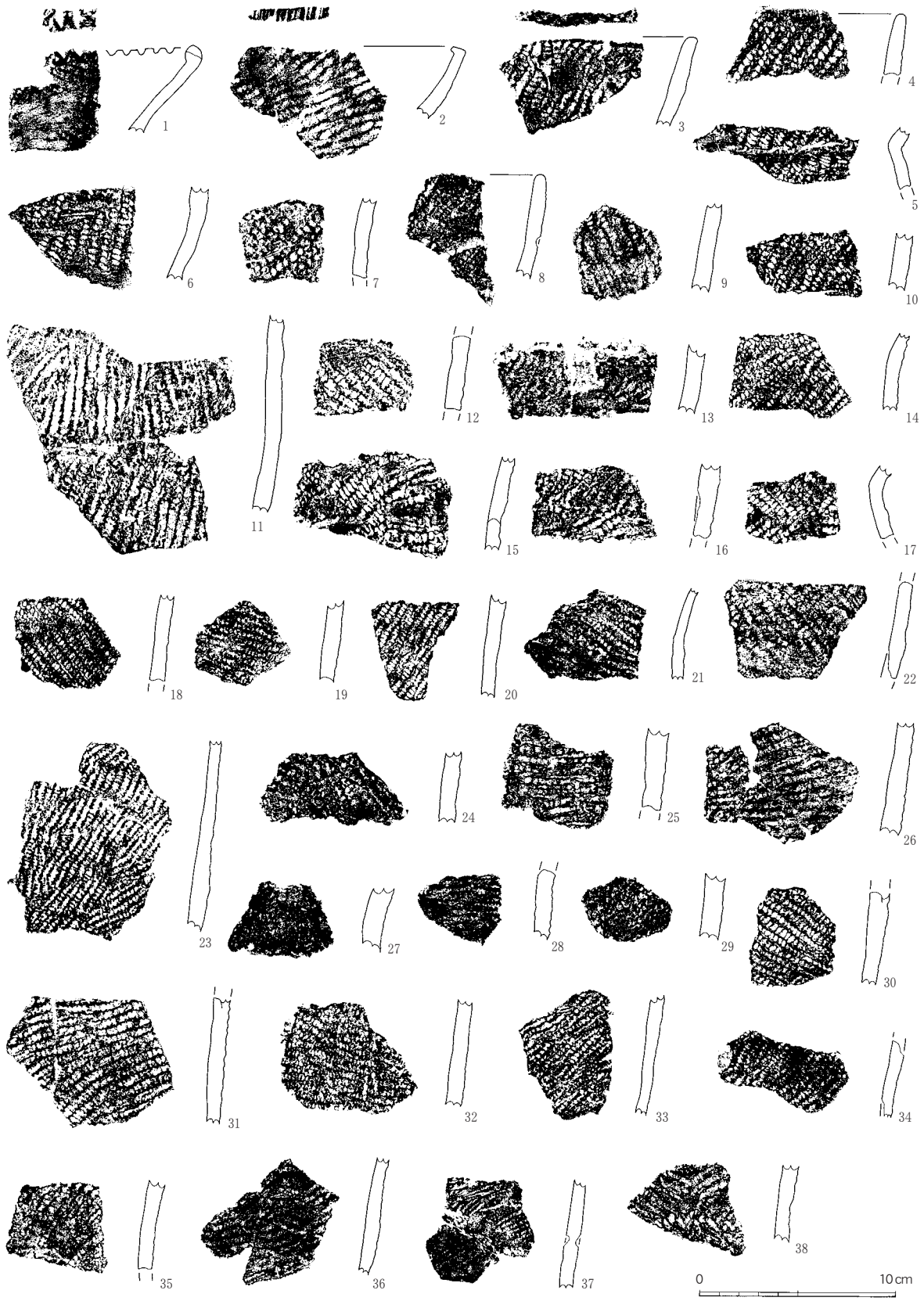
1. 住居址



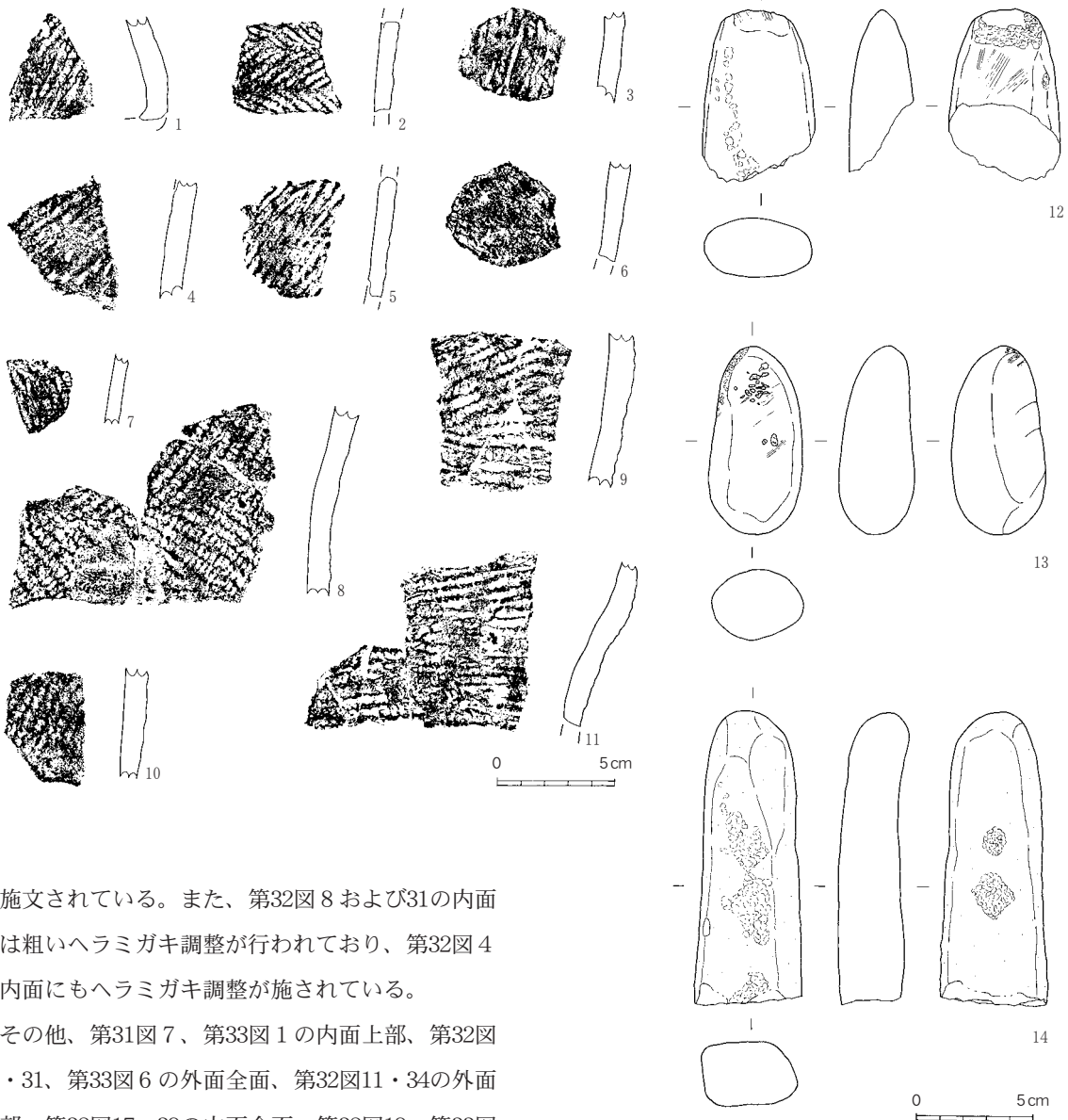
第30图 第65号住居址出土遺物(2)



第31図 第65号住居址出土遺物 (3)



第32图 第65号住居址出土遗物 (4)



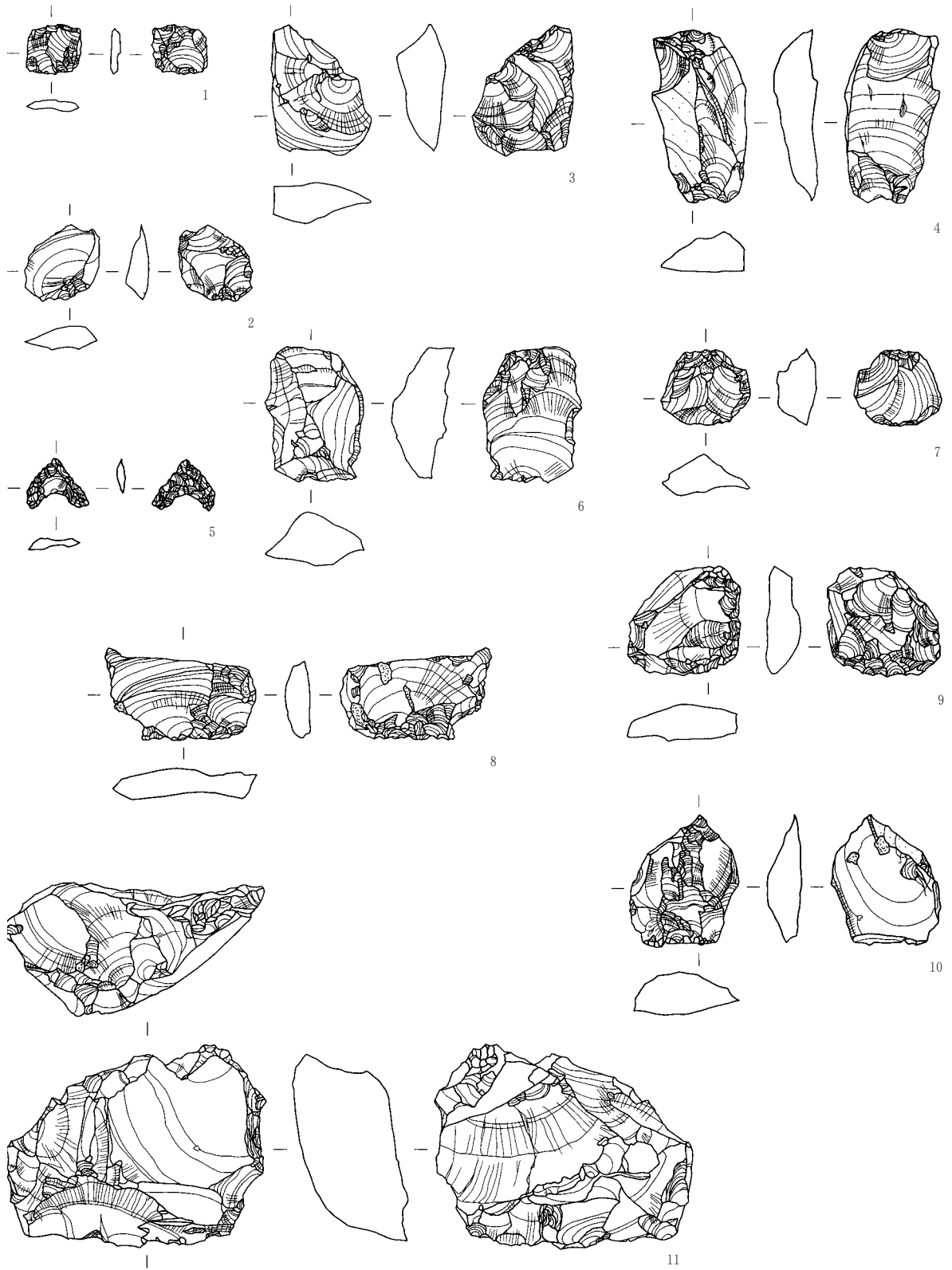
第33図 第65号住居址出土遺物 (5)

が施文されている。また、第32図8および31の内面には粗いヘラミガキ調整が行われており、第32図4の内面にもヘラミガキ調整が施されている。

その他、第31図7、第33図1の内面上部、第32図9・31、第33図6の外全面、第32図11・34の外下面部、第32図17・38の内面全面、第32図18、第33図10の外面上部、第32図23、第33図8の外面上部および内面全面、第32図25の外全面と破断面にススの付着がみられる。

第33図12~14はこの住居址から出土した礫器である。12は磨製石斧である。刃部が欠損している。また、基部には敲打痕が残されている。13は表面に擦痕を留めており、上部には打撃痕もみられる。14は凹石である。表面には広く、裏面には2ヶ所に集中して打撃痕がみられる。

第34図は住居址から出土した黒曜石製の石器である。5は石鎌である。小型で、基部の抉れが深い。住居址検出作業中に出土している。1は楔形石器である。2~4・6~10は剥片石器である。11は石核と考えられる。



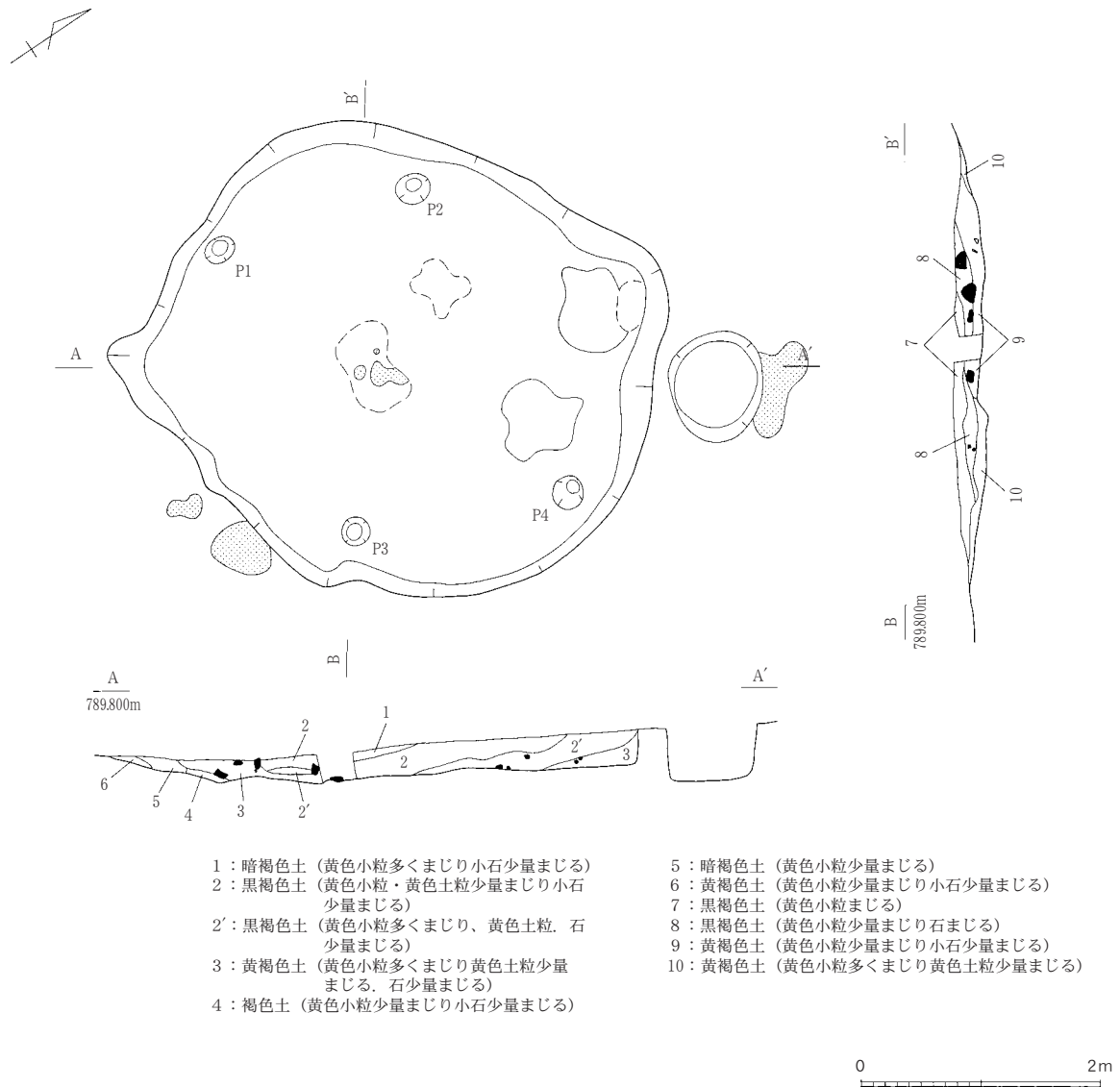
第34图 第65号住居址出土遗物(6)

第IV章 遺構と遺物

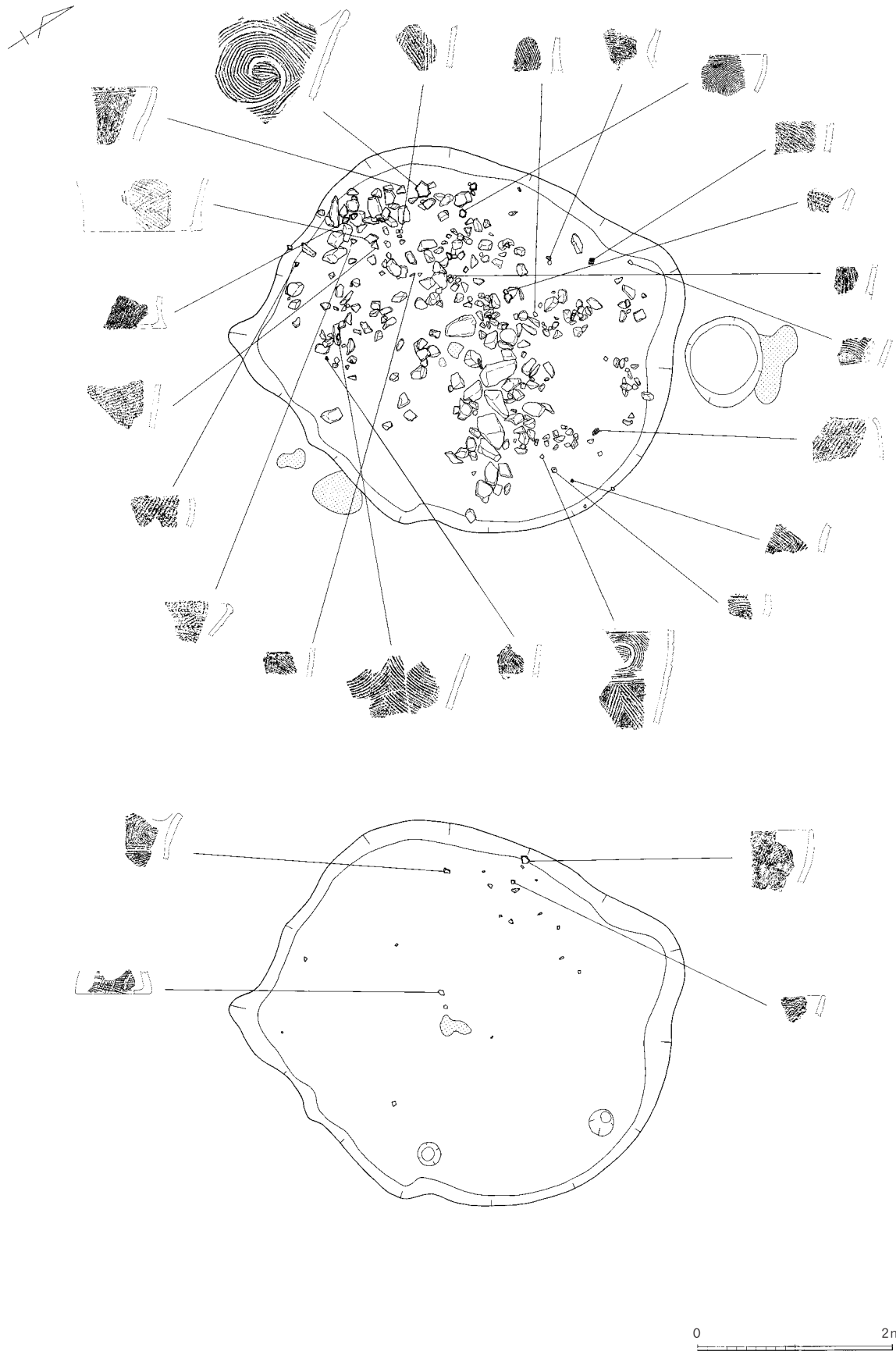
第67号住居址（第35図、第36図）

この住居址はEW-28から出土している。長辺約4m、短辺約3.5mの不整楕円形のプランで、壁高は約20cmを測る。覆土は底部に暗黄褐色系の土が堆積し、その上層に暗褐色系の土が黄色小粒や小石を混入しながら堆積していた。床面からは中央部の一部に硬化面が検出され、柱穴は4ヶ所から出土した。また中央部付近には焼土が検出されており、ここが炉であった可能性が高い。そのほか、図で表現しきれていないものの、東部壁際付近の2ヶ所にごく浅いくぼみも出土している。

なお、この住居址の覆土内からは多量の礫と共に土器片が出土した。



第35図 第67号住居址遺構平面図



第36图 第67号住居址遺物出土状況図

第IV章 遺構と遺物

遺物（第37図～第39図）

第37図1～3は平行沈線でレンズ状文を施文した土器片である。1の外面にはススが付着している。

4・5は半截竹管状工具を使用して円文を描いている土器である。4は内湾する平口縁で、外面にはススが付着し、内面にはヘラミガキ調整が行われている。5は外反する波状口縁である。なお、5の外面下部にはススが付着し、内面にはヘラミガキ調整が施されている。

6～9・12は底部の破片である。6はレンズ状文が施文され、7・9は縦位の羽状文が施文されている。8は羽状に平行沈線を施文した後に、縦位の平行沈線を区画文として引いている。なお、内面にはヘラミガキ調整痕が確認できる。12は横位の平行沈線を施文して地紋とし、その上から斜位の平行沈線文を施している。内面には器壁に炭化物の付着がみられる。

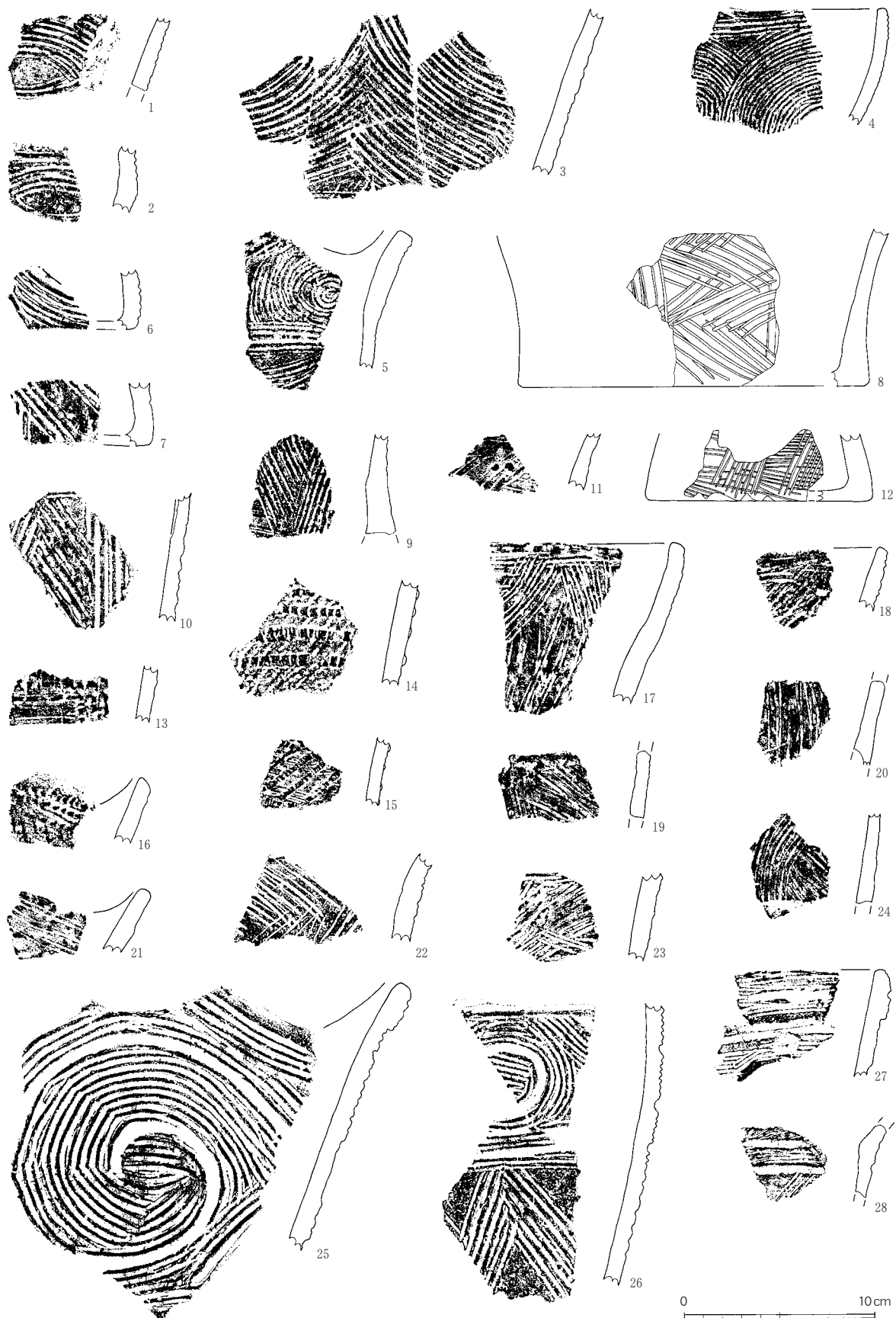
11は浅めの平行沈線文を羽状に施文し、その後小さめのボタン状貼付文を貼り付けている。内面にはススが付着している。

13～16は結節浮線文を施文している。13・15は横位の平行沈線文を地紋にもつ、ヘラ切りの結節浮線文である。13は焼成がややあまく、横位の浮線は低く弱い。なお、外面にはススが付着している。15は内面にヘラミガキ調整が施されている。14は白色味の強い淡褐色であり、地紋に縄文を施文後、太めの隆帯を貼り付け、ヘラ切りの結節浮線文を施している。16は焼成があまく磨耗しているが、半截竹管状工具の押し引きでの結節浮線文が確認できる。口唇部は外側に向かって面取りがされており、その直下には口縁部に沿って3本の結節浮線文が施文されている。その下部には不明瞭ながら斜位の結節浮線文が貼り付けられている。なお、地紋には横位の平行沈線が施されている。

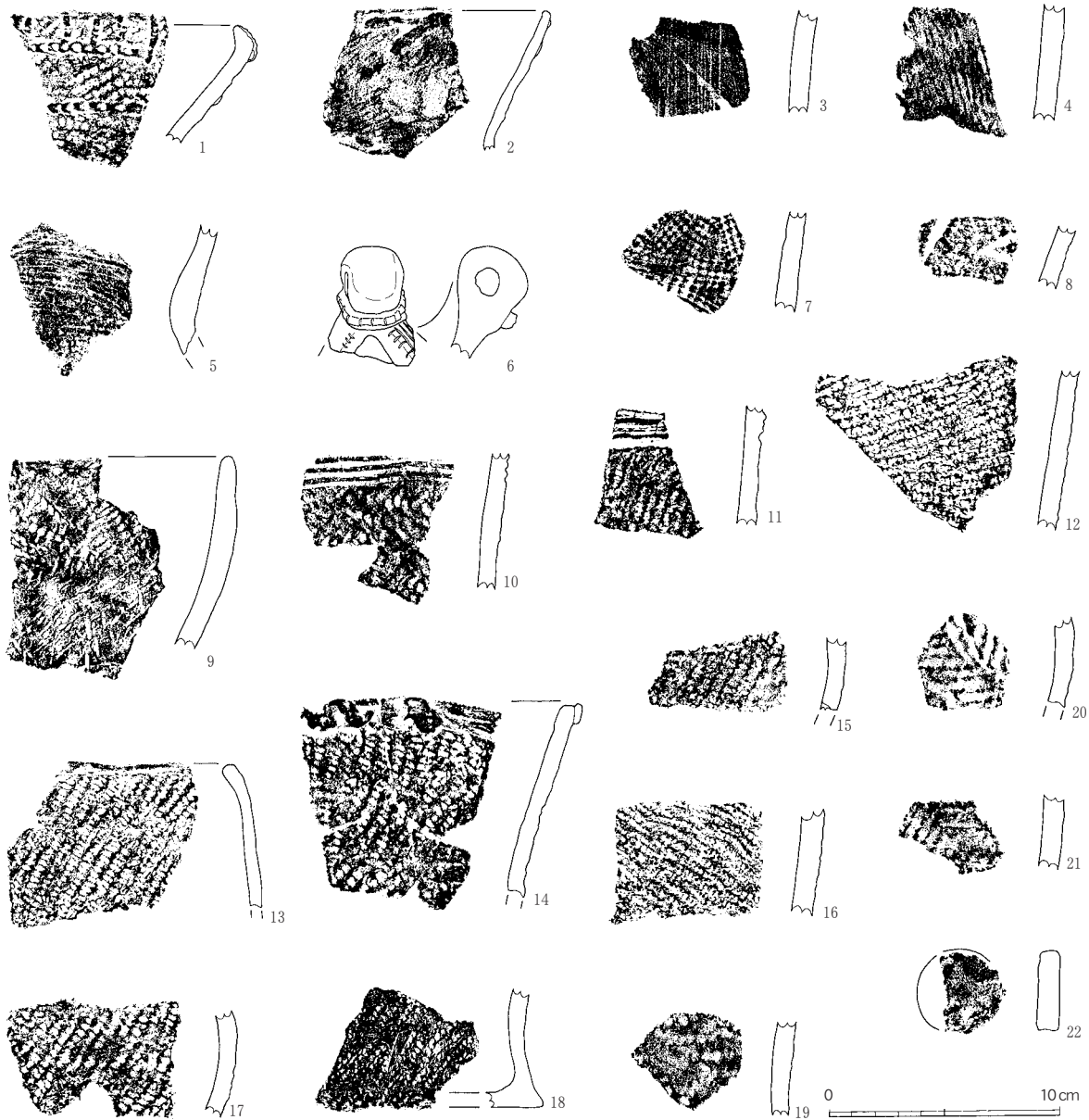
17～24は平行沈線文を施文している土器である。17～20はやや粗雑な印象の施文である。17は口縁部上端部に横位の平行沈線文を引き、その直下に斜位に施文している。外面下部の一部にはススの付着がみられる。17が若干内湾気味に開く器形に対して、18は直線的に立ち上がる器形と考えられる。20は縦位に平行沈線が引かれている。

21～24は浅めの平行沈線文を施文している土器である。21は波状口縁で、外面にはススの付着がみられる。内面はヘラミガキ調整が行われている。22の外面にもススが付着している。23は破片上端部に横位の平行沈線文が施文されている。24は21～23とは文様構成が異なり、斜位の平行沈線文を地紋状に施した後に、曲線文を施文している。この破片の外面下部にもススの付着がみられる。25～28は彫りの深い平行沈線文を施文している。25は口縁部の破片で、波状口縁を呈する。口縁部上端部が肥厚し、上端部に無文部を残しながら口縁部に沿って平行沈線を施文している。この肥厚部の下部に渦巻文を施文し、その後、竹管状工具による沈線の施文が行われている。なお、この渦巻文の施文後に口縁部上端部の施文が行われている。26は体部である、上部には渦巻文を施文し、下部に縦位の羽状文を施文している。なお、上下の文様の区画帯として、単沈線を伴う横位の平行沈線文が施文されている。また、内面にはヘラミガキ調整が行われている。27・28は25・26とは器形が異なっていると考えられる。27は口縁部の破片で、平口縁である。上端部はやはり肥厚しているが、その下部は横位の平行沈線文が施文されている。また肥厚部との境界付近には、三角印刻文の一部も確認できる。なお、内面にはヘラミガキ調整がみられる。28は頸部の破片で、口縁部と体部の文様を区画する横位の平行沈線文の上下を、竹管状工具を使用した単沈線で区画している。この破片の内面もススが付着している。

第38図1は口縁端部が受け口状に屈曲する器形で、外面には縄文が地紋として施文されている。その上に、細かい隆帯を貼り付け、ヘラ状工具を使用した押圧を加えている。第65号住居址からも出土しており、混入の可能性もある。2は破片下部に傾斜の変化点を持つ、直線的に開く口縁部である。縄文を地紋として、その上に



第37图 第67号住居址出土遗物(1)



第38図 第67号住居址出土遺物（2）

隆帯を貼り付けている。外面にはススが付着している。3は条線状に浅い平行沈線文を施文している。外面および、上部の破断面にススの付着がみられる。5は頸部付近の破片と思われる。浅い平行沈線が曲線を描いて施文されている。6は波状口縁の突起部である。波頂部は円形の孔が作られている。7・8は連続刺突文を密接して施文している破片である。7は三角形に文様の空白部分を持ち、8は沈線による文様区画が行われている。

9～21は縄文を施文している土器である。9は口縁部であり、上部には粗い縄文を施文し、下部には撚糸文を棒状工具に巻き付けて施文していると考えられる。10は上部に平行沈線文が施文され、11は沈線の中に平行沈線を引き、文様を区画している。なお、10の上部にはススが付着している。13・14は口縁部の破片である。13は内屈する器形で、上端部まで縄文を施文している。また、14は上端部に隆帯を波状に貼り付けている。17の内面および、外面の下部にはススの付着がみられる。20・21は無節の縄文を施文している。

22は土製円盤の破片である。縄文の施文がみられる。

第39図はこの住居址から出土した石器である。1は黒曜石製であり、2～6は礫器である。

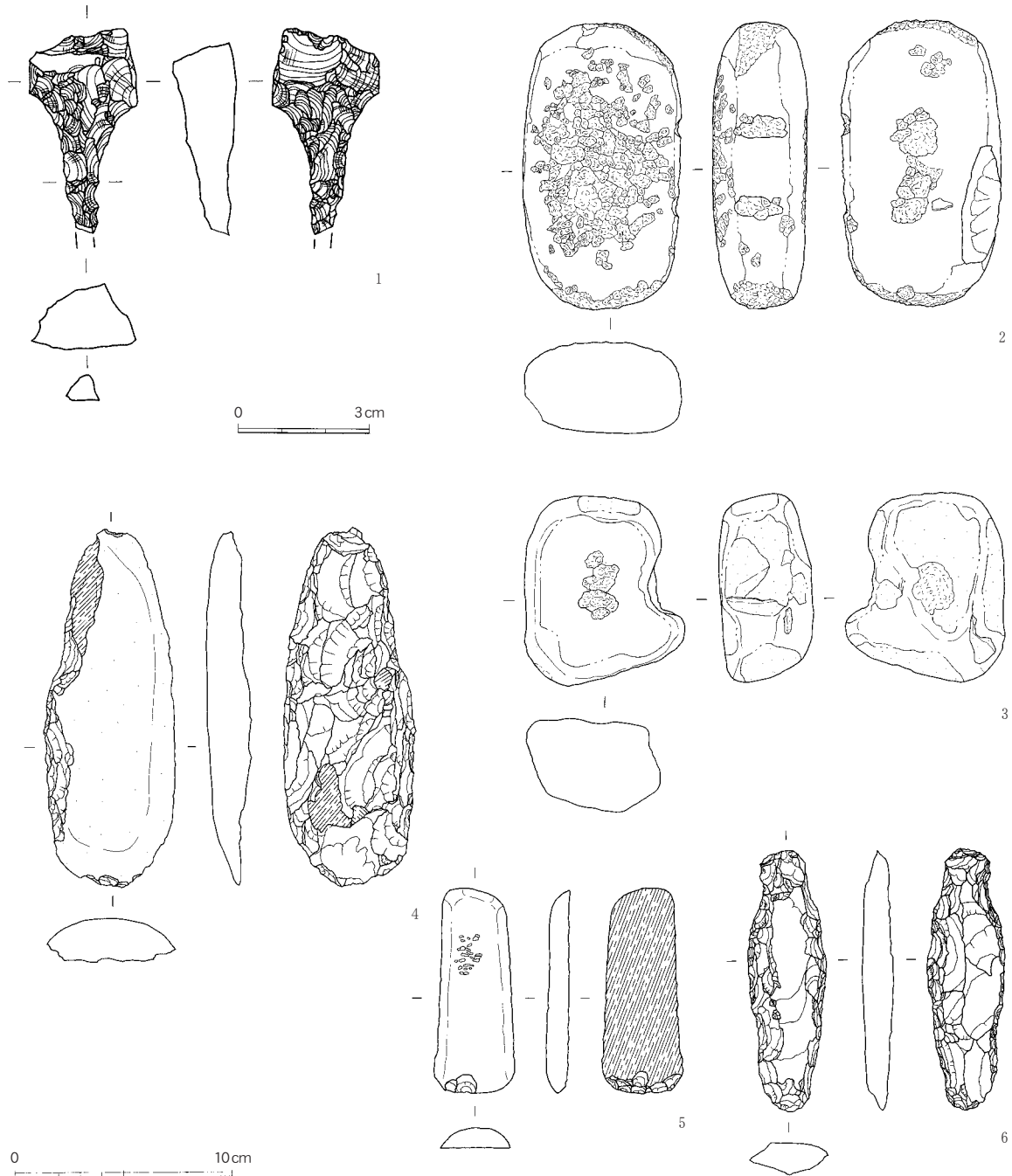
1は石錐である。刃部先端が欠損している。

2・3は磨石である。2は石鹼状の形態をしており、表面と裏面の打撃痕の周辺には、なめらかな磨耗痕がみられる。また、上部と下部に敲打痕を留めており、側面には2ヶ所使用に伴う強い窪みもみられる。3は表裏とも中心に窪みがみられる。また礫の側縁部角に、粗くざらざらした磨耗痕がみられる。

5の背面は節理面であるが、表面に一部打撃痕が認められる。また下部には使用に伴うと考えられる剥離痕もみられる。

4は打製石斧である。表面に自然面を多く残し、一部に節理もみられる。

6は基部に抉りがあり、刃部に向かうにしたがって細くなっていくことから、縦型の石匙と考えられる。



第39図 第67号住居址出土遺物 (3) (1 : S=2/3)

第IV章 遺構と遺物

第68号住居址（第41図）

この住居址はE U-33から出土している。直径約3.5mの円形プランと考えられるが、耕作による削平によって東半部が失われており、明確ではない。住居址の中央部に浅い落ち込みがあり、その周辺に硬化面が検出された。この浅い落ち込み内からは、土器片が敷かれるようにして出土しており、内部からは焼土が検出されなかったものの、周囲の一部に焼土が検出されていることから、ここが炉であったと推定される。

なお、ピットが2ヶ所から出土しているが、柱穴としていいかは明確ではない。なお、この住居址の覆土中からは礫が多く出土し、遺物と共に焼土・炭化物も出土した。

遺物（第40図、第42図、第43図）

第42図1～7は平行沈線によるレンズ状文を施文した土器である。1・2・6は炉内から出土の土器である。同一個体である。なお、そのほかにも5が同一個体と考えられる。これらの土器片の外面にはススの付着がみられる。3は炉内の土器より強く平行沈線を引き、胎土の砂粒も若干多い。外面にはやはりススが付着している。4は口縁部の破片である。波状口縁を呈し、口唇部は丸く仕上げられている。また、口縁部に沿って4本の平行沈線が引かれているが、その前に波状口縁の一番低い位置から縦位に平行沈線が引かれ、その区画を使ってレンズ状文が施文されている。なお、内面には丁寧なヘラミガキ調整が施されている。外面には若干ススの付着がみられる。

7～9は平行沈線文が施文された体部の破片である。浅めの平行沈線で、羽状文を施文している。なお、7の外面上部と、9の外面にススの付着がみられる。

10～15は結節浮線文を施した土器である。10～12・14は半截竹管状工具による押し引きによって結節を施文している。これらのうち、10は内面にヘラミガキ調整がみられ、11の外面にはススが付着している。また、12は胎土に砂粒が多く混入しており、磨滅がみられる。13・15はヘラ状工具を押し当てて結節浮線文としている。13は渦巻文を施文し、15の一部は剥離している。16は燃糸文を施文している。また内面にはヘラミガキ調整がみられる。17～25は縄文を施文している土器である。17は外面にススが付着しており、23は無節の縄文である。また22は口唇部まで縄文を施文しており、内面の口縁部上端部の折り返し部分には結節浮線文を施文している。外面は縄文の上に隆帯を貼り付け、その上部にも縄文を施文している。

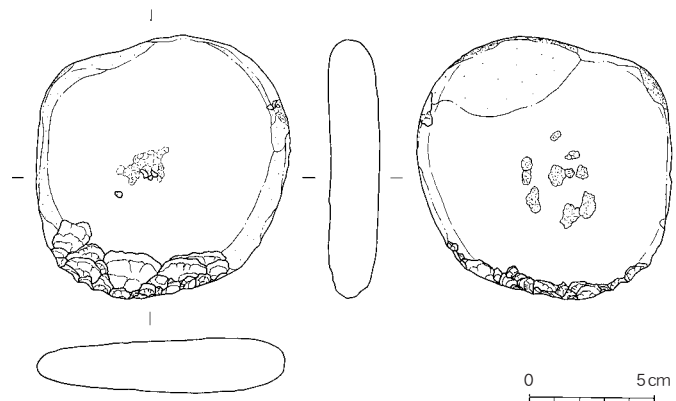
26は有孔浅鉢の破片である。赤みを帯びた褐色を呈し、焼成は良好である。

第40図は磨石である。表面と裏面になめらかな磨耗痕があり、側面にはざらついた磨耗痕を留めている。また表面と裏面の中央部には打撃痕も観察される。さらに下部は打撃による剥離痕もみられる。

第43図5は石錐である。基部が作られておらず、剥片を加工している可能性も考えられる。

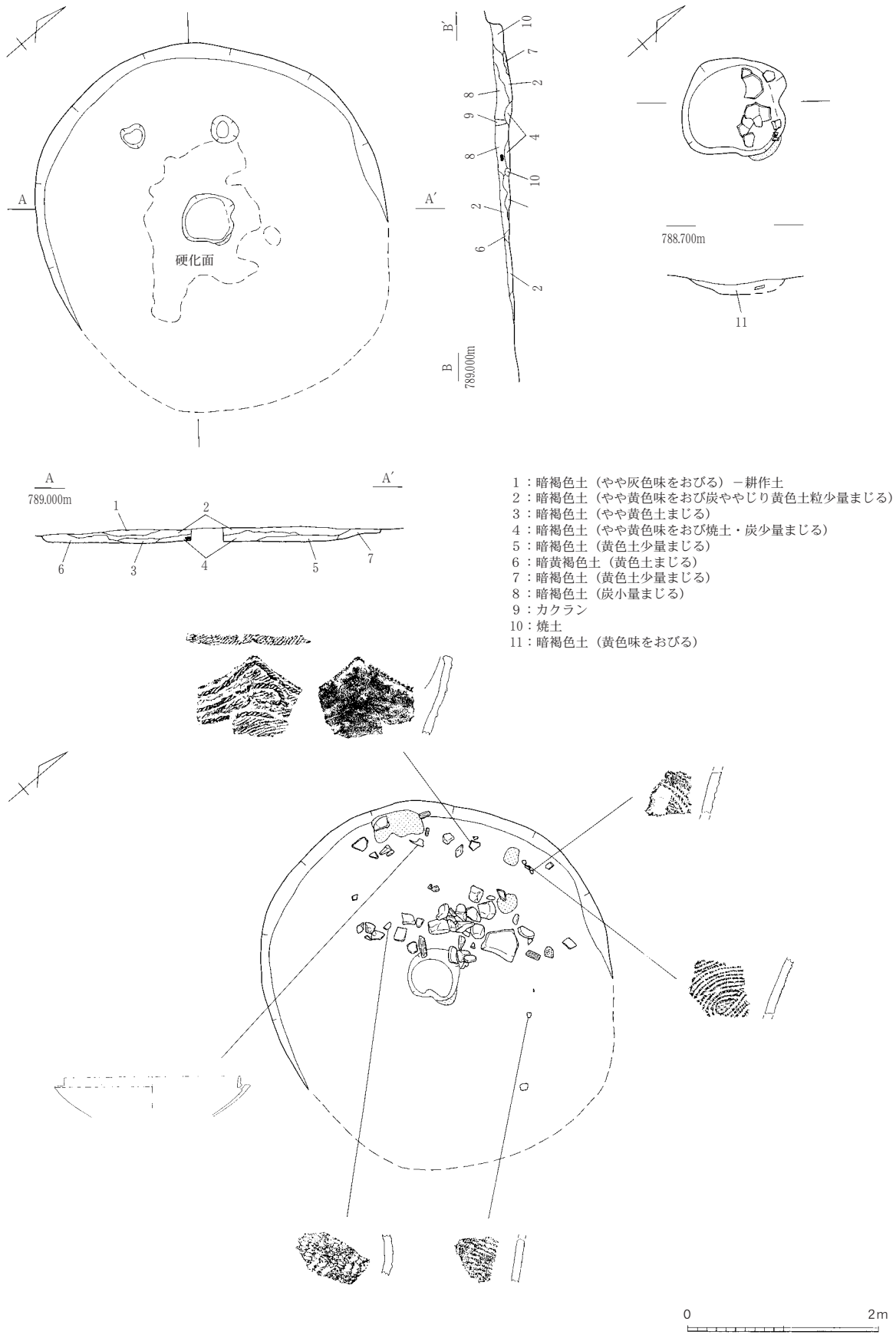
2・4・6・7・9は剥片石器である。2・7は三角形の剥片の長辺を刃部として利用しており、6は細長い剥片の先端部を刃部としている。また、4・9は破片の鋭利な部分を意識的に使用していると考えられる。

1・3は石核と考えられる。

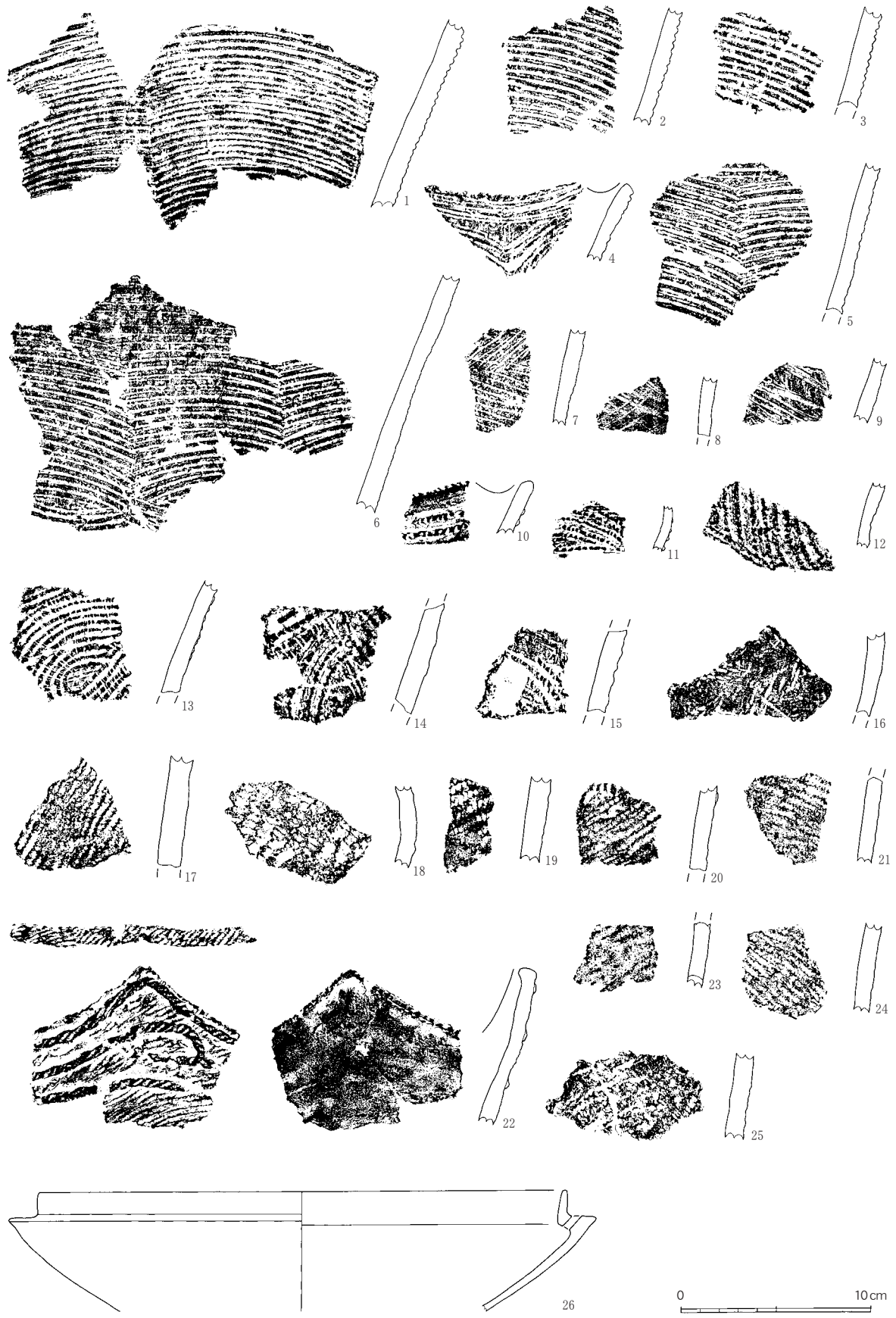


第40図 第68号住居址出土遺物（1）

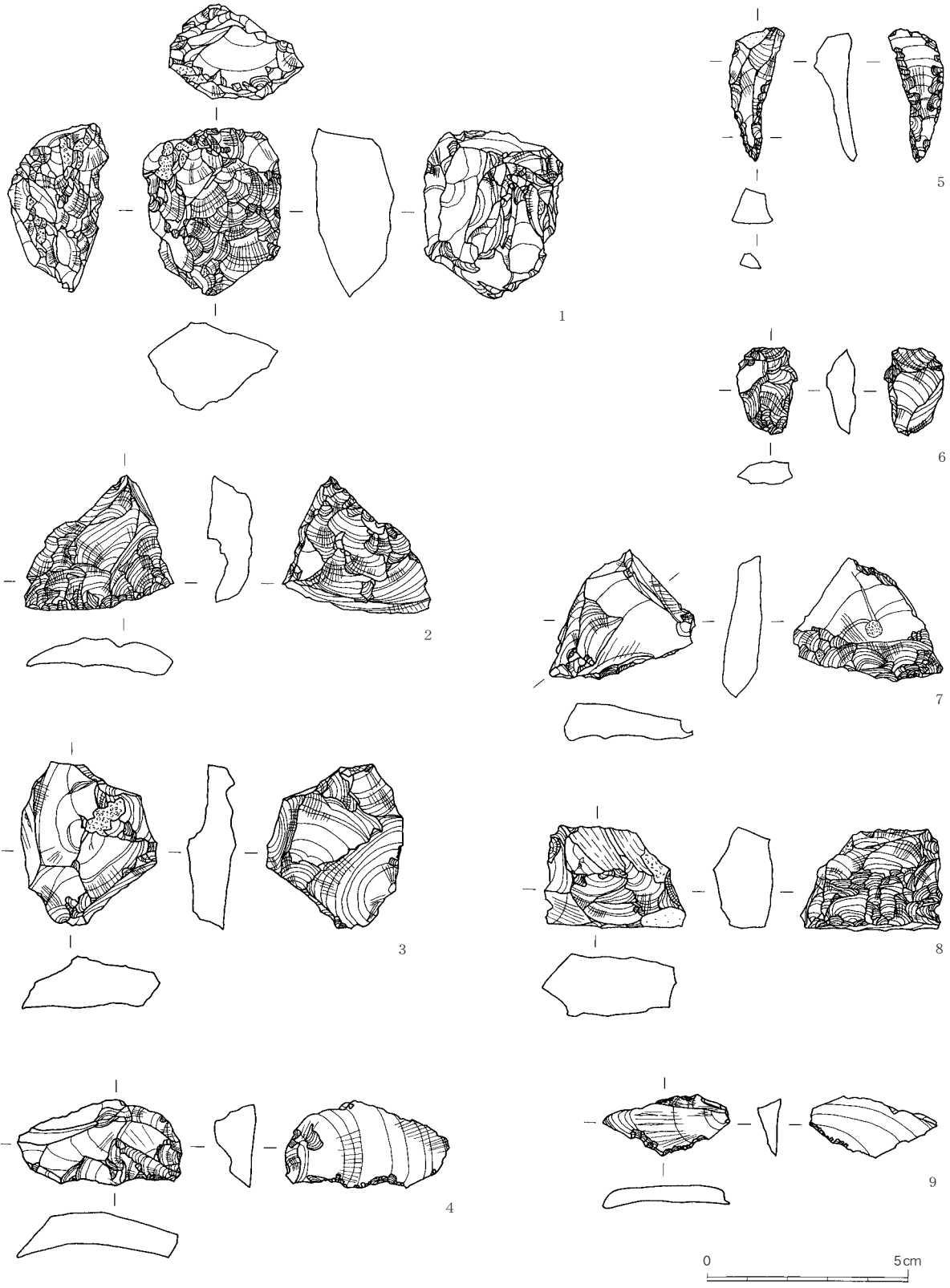
1. 住居址



第41図 第68号住居址遺物出土状況図 (炉: S=1/30)



第42図 第68号住居址出土遺物 (2)



第43图 第68号住居址出土遺物 (3)

(2) 弥生時代

第28号住居址 (第44図)

この住居址はDW-77から出土している。一辺3.9mの方形プランであり、壁高は約20cmであった。覆土は暗褐色系の土で覆われており、若干黄色小粒の混入もみられ、中層には炭化物の混入も確認された。床面に硬化面は確認されず、比較的軟弱であった。

また、中央部北寄り付近に埋甕炉が設置され、南部を中心とした周辺が被熱によって赤色化していた。炉は直径50cmほどの穴を掘り込んで、そこに底部の欠損した甕を埋設して設置しており、炉穴の覆土中には焼土や炭が含まれていた。

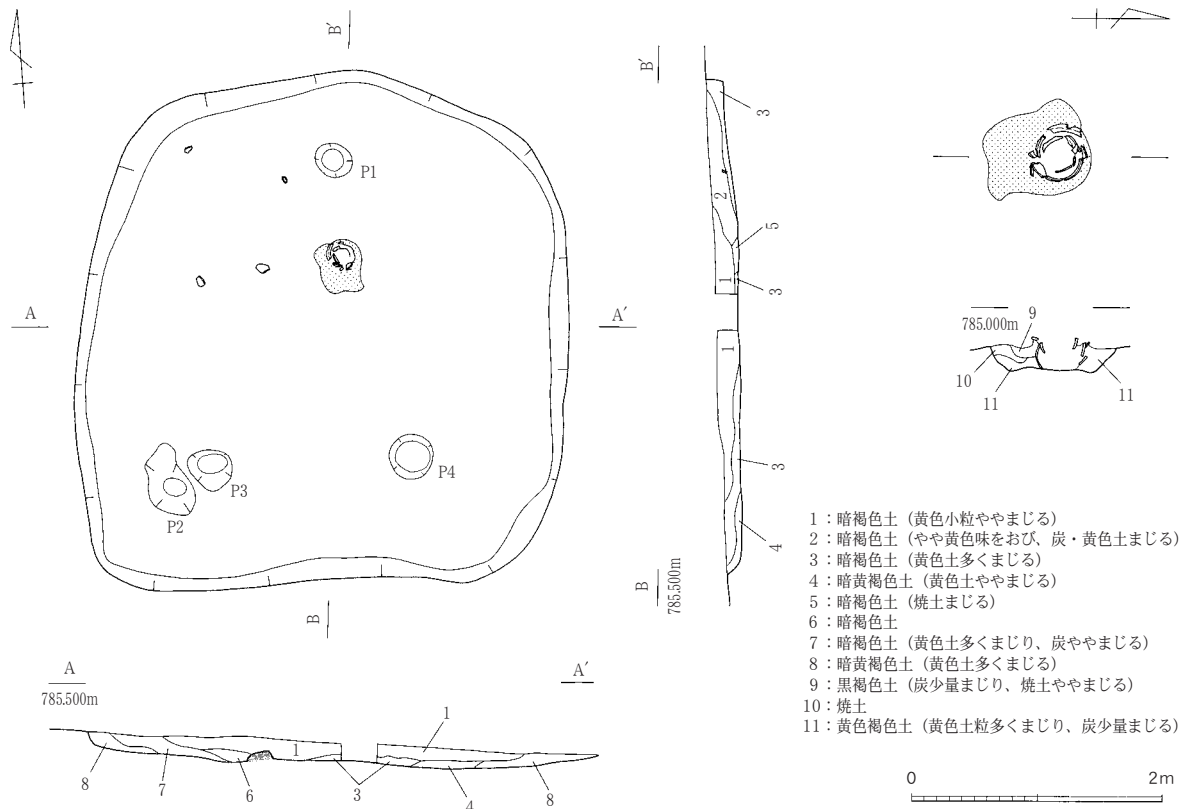
柱穴は3ヶ所出土したが、支柱穴はP3、P4と考えられ、北部の支柱穴は検出できなかった。

なお、西部床面からは土器の小片が出土した。

遺物 (第45図、第64図1)

第45図はこの住居址から出土した土器である。1は炉体として使用されていた甕である。短く屈曲した口縁部から、やや張りのない体部へと続く器形である。体部は最大径の部分で弱く屈曲して底部に至る器形と考えられる。外面には、まず口縁部から体部上部にヘラ状工具による縦位のナデ調整が行われ、頸部から下に8条1単位のクシ描波状文が左から右方向に施文されている。その後その下部に同じ工具によって斜走単線文が1段施されている。なお、体部および内面にはナデ調整が行われているが、ヘラミガキ調整は確認できない。

2～4は住居址床面から出土した土器である。2は甕の口縁部である。頸部から、締めりなく直立気味に立



第44図 第28号住居址遺構平面図 (炉：S=1/30)

ち上がる器形である。明瞭な調整痕は確認できないが、内・外面共にナデ調整が行われていると考えられる。なお、外面の一部にはススの付着がみられる。3・4は甕の体部の破片である。両者共に無文で、斜位のナデ調整痕がみられる。

第64図1はこの住居址覆土内から出土した黒曜石の剥片である。

第38号住居址（第46図）

この住居址E A-73付近より出土している。当初考えていたプランより住居址の規模が大きかったため、土層観察を十分に実施することができなかったが、覆土中層に焼土や炭が混入した暗褐色系の土が確認されている。

プランは、約3.7×3.3mの主軸方向に長い、やや不整形な長方形で、壁高は20cmであった。

炉は床面中心より若干北西寄りに出土した。直径50cmほどの掘り込みの中心部に、体部のみの甕を設置した後、北東部を残して炉体を囲むように細長い石を配置している。この石のうちの1個は縄文時代と考えられる磨石を転用していた。

なお、床面に硬化部および、柱穴を検出することはできなかった。

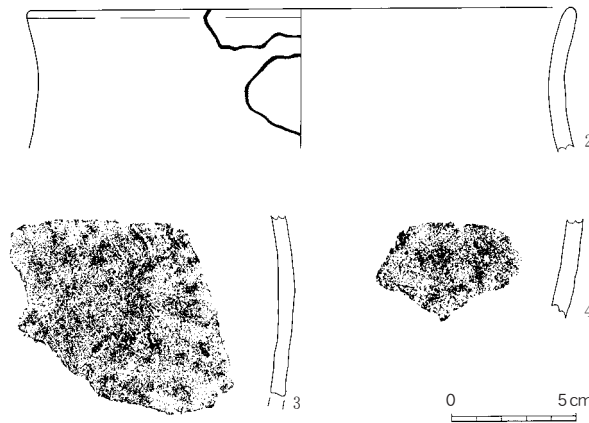
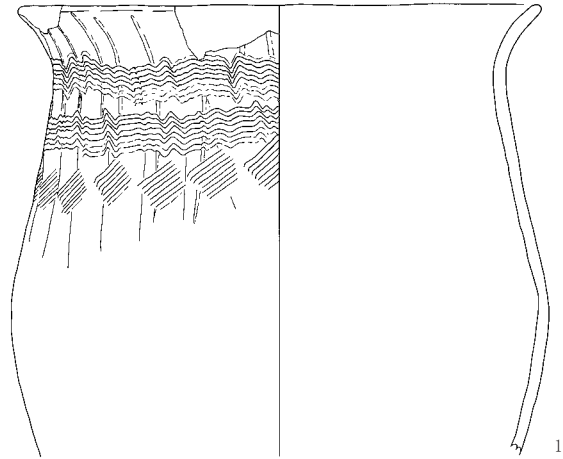
また、床面からは土器は出土しなかったが、石器が出土しており、南西部付近に直径30cmほどの偏平な礫と、石の小口部分を使用した石器（第47図7）が並んで出土したことから、この礫が作業台であった可能性が高い。

遺物（第47図1～6、第64図2～6）

第47図1～6が出土した土器である。

1～3はいずれも甕の破片と考えられる。1は口縁部の破片である。短めの口縁部が強く外反しており、若干太めのクシ状工具による粗雑な波状文が描かれている。2は上半部の破片である。やや内傾気味に立ち上がる体部から、短くやや強めに外半する口縁部にいたる器形である。外面には、口縁部から体部にかけて板状工具による縦位のナデ調整を行った後に7条1単位のクシ描波状文を左から右方向に施している。3は炉体である。口縁部および体部下半が欠損している。球形に膨らんだ体部を持ち、締めりのない頸部にいたっている。外面の頸部には7条1単位の横線文を施文した後、その上段に振幅の小さいクシ描波状文が2段、下から上の施文順位で描かれている。また、体部にはクシ描による斜走短線文が2段施文されている。なお、図上では表現しきれていないが、施文工具は同一のものを使用している。内面には調整痕が明確に残っておらず、ナデ調整の可能性が高い。

4は住居址の南部付近から出土している。太いクシ状工具を使用して体部には斜走単線文を数段引き、口縁部上端部には、刺突文を伴う円形の添付文を貼り付けた後に、若干途切れ気味のクシ描波状文を施文している。



第45図 第28号住居址出土遺物

第IV章 遺構と遺物

5も住居址周辺から出土している。鉢状に外傾しながら立ち上がり、口縁部が外反する形態の甕である。内・外面共に文様は施されておらず、ミガキ調整も確認できない。なお、外面の一部にススの付着がみられる。

6は壺の破片である。破片上端部にクシ描波状文が確認できる。

第47図7～9はこの住居址から出土した礫石器である。時期的に確実に伴うといえないものもあるが、あえてここに掲載している。7は石の小口面に非常に滑らかなミガキ痕がみられる。そのほかの面には使用痕は確認できない。8は図上の上下部に敲打痕が観察され、平坦部には滑らかな磨りの跡が、その周囲にはややざらついた磨りの痕跡がみられる。9は打製石斧である。表面刃部と、背面基部付近に磨滅痕と考えられる部分がある。

第64図2～6はこの住居址覆土内から出土した黒曜石製の石器である。2は石鏃で、3～4は剥片石器である。

第40号住居址（第48図）

この住居址はE C-64から出土している。一辺4.4mの平面方形プランであり、壁高は約20cmであった。覆土は暗褐色系の土が主体であった。この住居址は床面の中心部を除いて壁周辺に硬化面が検出でき、その境界付近の四隅に支柱穴（P1～P4）が出土した。

炉はP1とP2の間から出土し、直径50cmほどの掘り込みに甕を埋設していた。この掘り込みの覆土には、焼土の混入が多くみられた。また、炉体底部付近には焼土が検出された。

この住居址の床面からは多くの礫と共に、器形の判明する土器が出土しており、住居址の東部隅付近からは赤色塗彩の高杯脚部が出土している。

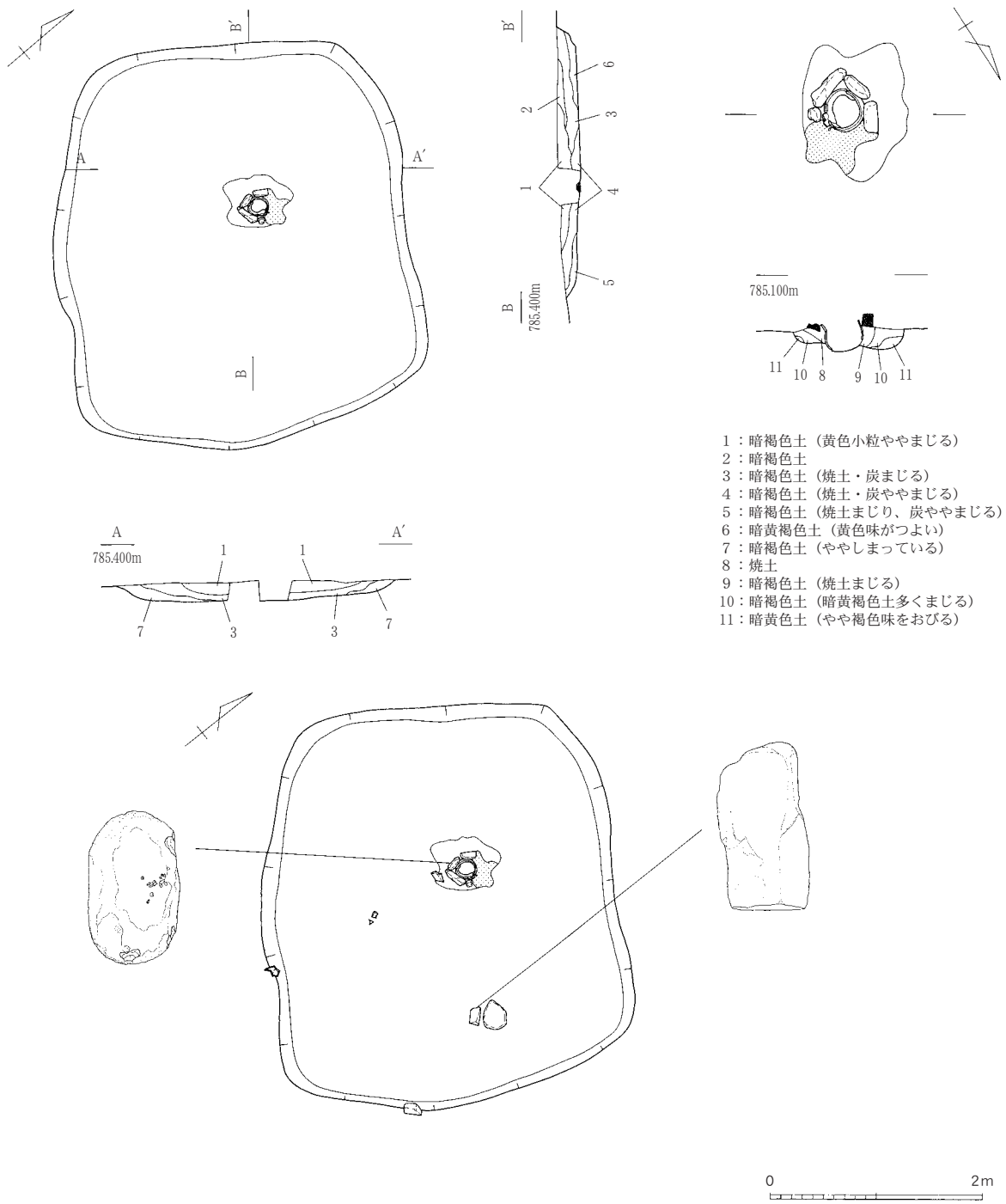
遺物（第49図）

1～5は甕である。1は口縁部の破片で、外面には上端部付近まで密接に左から右方向のクシ描波状文が現存で3段施されている。なお、施文順位は上段から下段であった。また、内面には横位から斜位の密なヘラミガキ調整がみられる。2は器壁が比較的厚く、頸部があまり締まらず、口縁部が直立気味に立ち上がる器形の甕で、1/2个体残存している。外面は斜位のハケ調整を行った後に、6条1単位の振幅の小さいクシ描波状文を断絶しながら6段程度施文している。その後、体部には縦位のヘラミガキを密接に施文している。内面は全面に斜位のハケ調整を行った後、粗雑なヘラミガキ調整を縦位と斜位に施文している。なお、口縁部には明瞭な調整痕がみられず、ナデ調整のみが施されていると考えられ、一部には接合痕がみられる。

3は小片である。頸部が強く屈曲し、最大径が体部上部にある肩の張った器形と考えられる。外面には7条1単位の振幅の大きなクシ描波状文が2段施文されている。また、内面には横位のヘラミガキ調整が密に施されている。4は体部上部に最大径を持ち、屈曲して頸部に至る器形である。口縁部は外反しながら広がるものの、体部の最大径よりも口径は小さい。口縁部中部および体部上部に7条1単位のクシ描波状文が施文されている。また、下段の波状文は数回の断絶が確認できる。なお、内・外面共に明確な調整痕はみられず、ナデ調整と考えられる。5は炉体である。体部最大径が上部にあり、締まりのない頸部からそのまま外反する口縁部に至る、鉢形を呈する器形である。なお、口縁部がほとんど欠損しているが、残存する口唇部にはヘラ状工具によるキザミがみられる。また、頸部から体部上部には、数条1単位のクシ描波状文が断絶箇所を持ちながら、粗雑に施文されている。施文順位は明確にはできないものの、重複箇所から推定すると、下段から上段に向かって施文していると考えられる。なお、外面の体部は縦位のナデ調整を行っており、内面も明瞭な調整痕を留めていないことから、ナデ調整を行っていると考えられる。

6は高杯の脚部である。外面は赤色顔料を塗布した後にヘラミガキ調整を行っている。また、内面は裾部を除いて斜位のハケ調整を行っている。なお、裾部はハケ調整の前にヨコナデ調整を施している。

1. 住居址

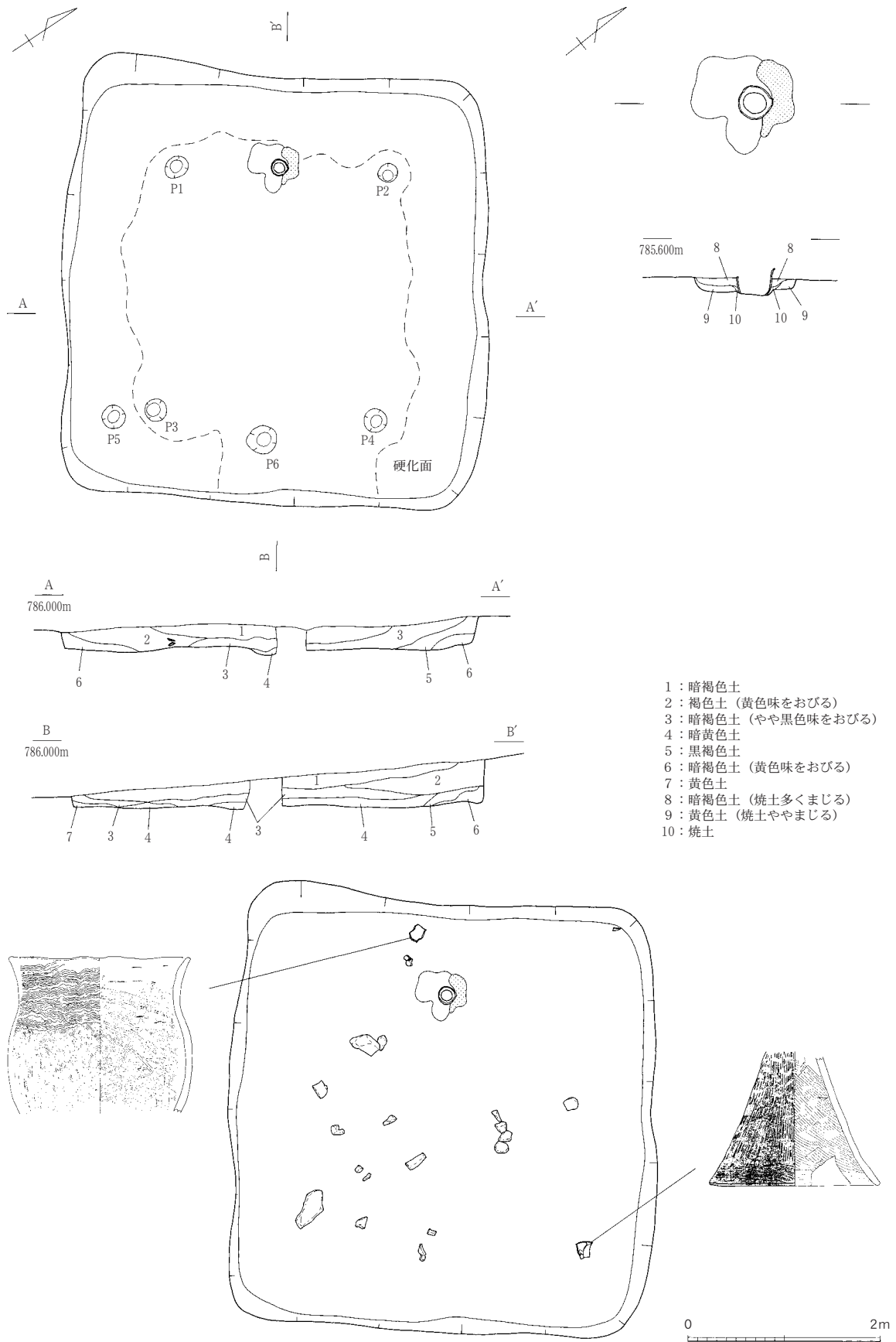


第46図 第38号住居址遺構平面図 (炉：S=1/30)



第47図 第38号住居址出土遺物

1. 住居址



第48図 第40号住居址遺構平面図および遺物出土状況図 (炬 : S=1/30)

第IV章 遺構と遺物

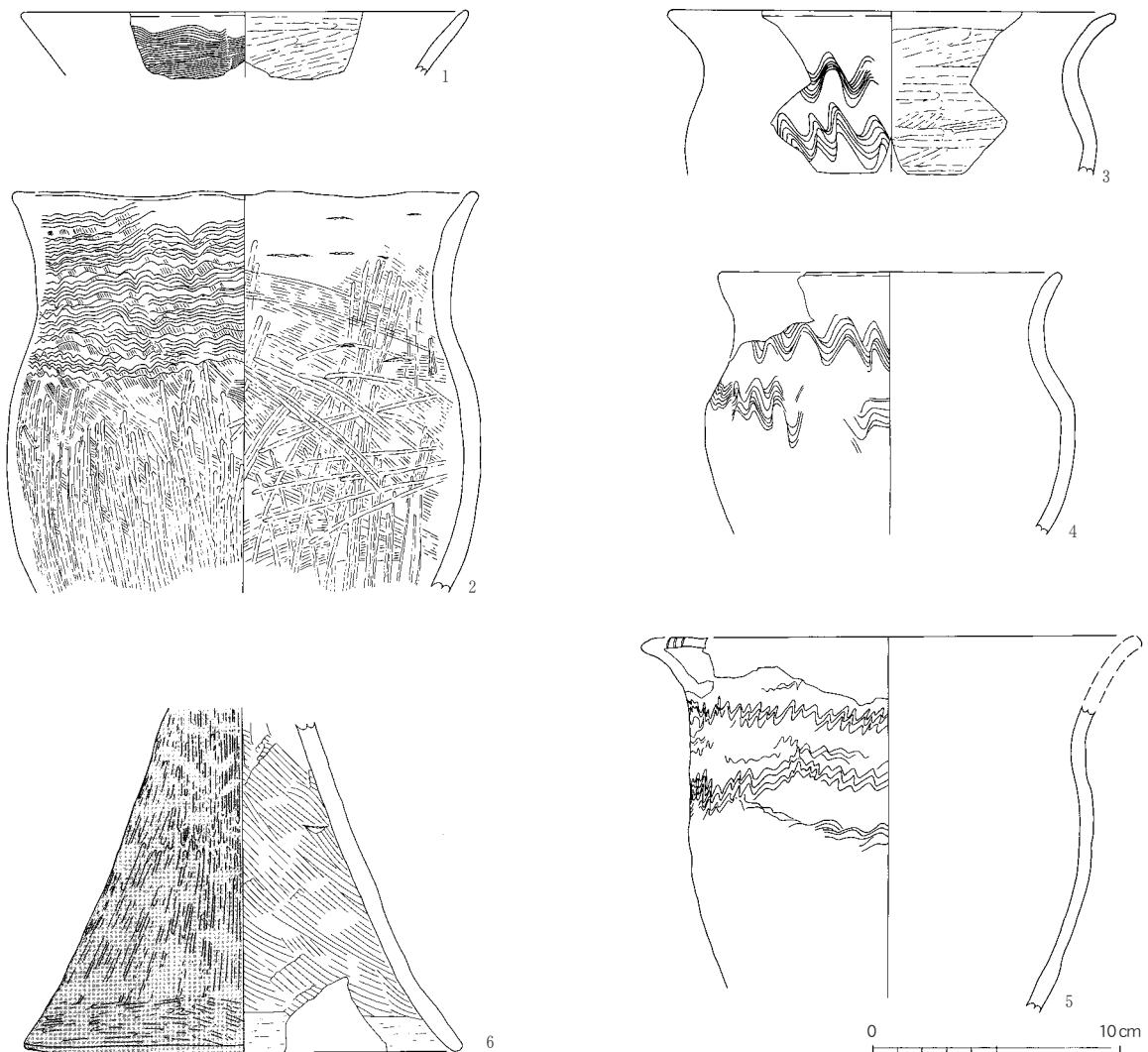
第41号住居址（第50図）

この住居址はE F-67より出土している。平面プランは4.3×3.7mの長方形で、壁高は約20cmであった。覆土は暗褐色系の土が中心であったが、一部に石の多く混入した黒褐色土が検出されている。

床面には硬化面は確認できなかったが、ピットは8ヶ所検出でき、このうち支柱穴と考えられるのはP1～P4であるが、配列が不整形なので疑問も残る。炉は北東壁寄りに造られており、一辺50cmほどの方形に掘り込んだ後に、細長い礫を4個方形に埋め込んでいた。なお、炉の覆土および底部に焼土が検出された。

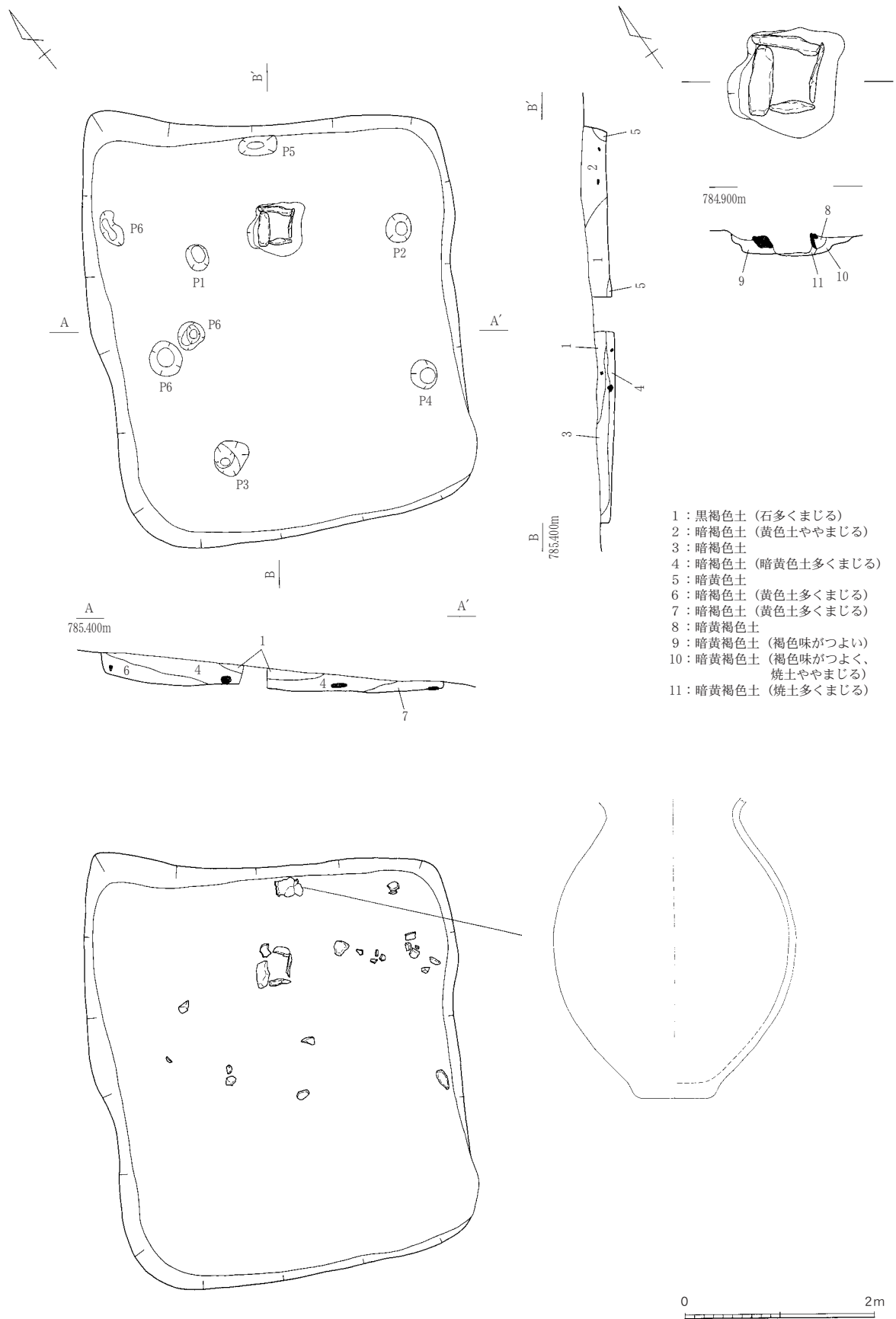
遺物（第51図、第64図7）

第51図がこの住居址から出土した土器である。1は甕である。破片からの反転復原であるが、頸部に補修孔がみられる。外面の体部上部から口縁部にかけて6条1単位と考えられるクシ描波状文が左から右の順位で施されているが、断絶や重複が著しく、単位ごとの施文順位は不明である。全体的には粗雑な印象の施文である。その後、体部に縦位のヘラミガキ調整を行っている。なお、体部下半にはススが附着している。内面は口縁部上端部を除き、横位のヘラミガキ調整が、粗雑ではあるが施されている。なお、口縁部上端部には明瞭な調整痕が確認できないことから、ナデ調整が行われていると考えられる。

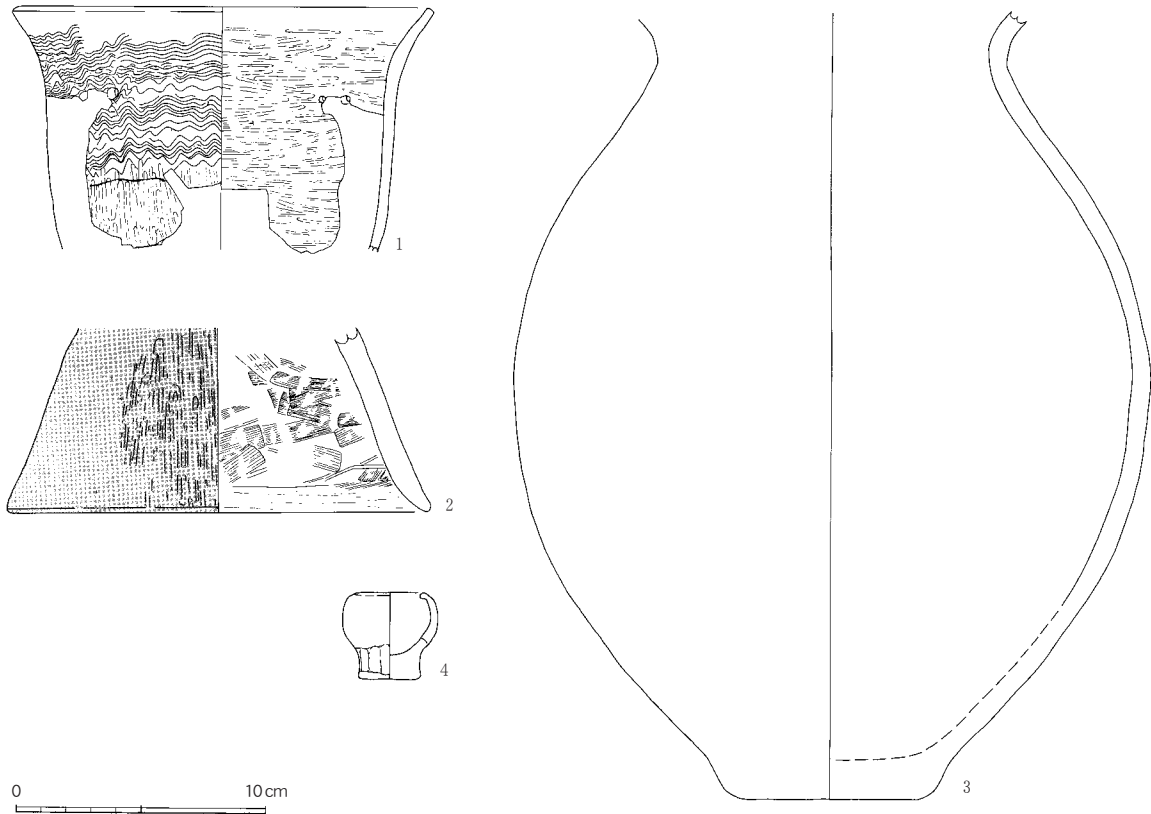


第49図 第40号住居址出土遺物

1. 住居址



第50図 第41号住居址遺構平面図および遺物出土状況図 (炬: S=1/30)



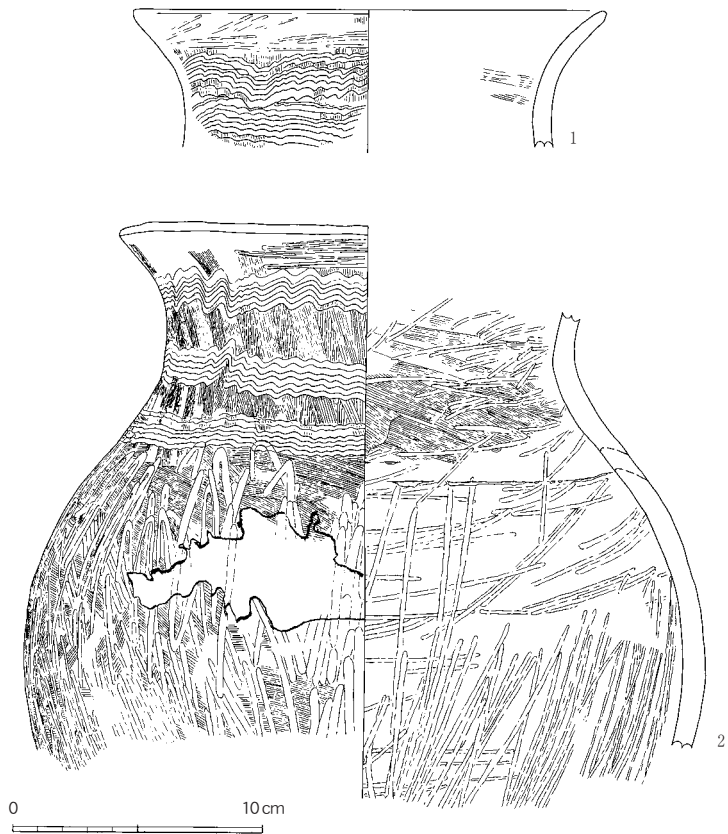
第51図 第41号住居址出土遺物

2は高杯脚部の下半部である。外面は赤色顔料を塗布した後に、縦位のヘラミガキを実施している。内面は不規則なハケ調整痕を留め、裾部はハケ調整以前にヨコナデ調整を行っている。なお、外面の赤色顔料は剥離しており、一部に残存しているのみである。

3は壺である。上部が欠損しているが、球状の胴部から強く屈曲する短い頸部にいたり、外反する口縁部となる器形と考えられる。外面には特に明瞭な調整痕は確認できないことから、ナデ調整と考えられ、内面も明瞭な調整痕を留めていないものの、ナデ調整が行われていると考えられる。

4はミニチュア土器である。底部に整形時の指頭圧痕がみられる。

第64図7は住居址覆土内から出土した黒曜石の剥片石器である。



第52図 第42号住居址出土遺物

第42号住居址（第53図）

E A-67から出土している。平面プランは約3.7×2.4mの若干台形になる長方形で、壁高は20cmを測る。覆土は暗褐色系の土であり、中層から下層にかけて焼土および炭化物の混入がみられた。また、床面に硬化面は検出できなかったが、焼土や炭化物が検出され、それらを除去したところ、多数のピットが出土した。なお、ピットは不規則に検出されており、支柱穴の特定には至らなかった。

炉は住居址東部寄りから、炉周辺床面に焼土を伴って出土している。この炉は、直径40cmほど掘り込んだ後に、甕の上半部を埋め込んでいる。覆土は暗褐色系の土で、焼土の混入はみられなかった。なお、底部には別の甕の破片を敷いていた。

また、住居址西部隅からは直径約50cmの土坑が出土していたが、詳細は明確にできなかった。

遺物（第52図）

1は炉の底部に敷かれていた甕で、口縁部の破片である。口縁部から頸部にかけて縦位のハケ調整を行った後、頸部に9条1単位の振幅の小さいクシ描波状文が、下から上の施文順位で描かれている。そしてその後にヘラミガキ調整を、口縁部上端部には斜位、その直下には横位に施している。また、内面にはハケ調整の痕跡を頸部に留めている。

2は炉体である。下半部が欠損しているが、外面はハケ調整を器面全体に行っている。ハケ調整は、まず体部に斜位に施し、その後に口縁部から頸部にかけて縦位の後にやや斜めに施している。さらにこのハケ調整の後、体部上部から口縁部にかけて7条1単位のクシ描波状文が3段施文され、口縁部上部は横位の、体部には縦位の間隔の空いた粗いヘラミガキ調整が施されている。また、内面は頸部から口縁部にかけて斜位のハケ調整の後に粗い斜位のヘラミガキ調整を、体部の上部には横位の後縦位のヘラミガキ調整を行い、下半部には縦位の粗いヘラミガキ調整が施されている。

第43号住居址（第54図）

この住居址は、E X-57より出土している。長辺約3.5m、短辺約2.9mの平面長方形のプランで、壁高は約40cmであった。覆土は暗褐色系の土でやや黒色味をおびており、下層では黄色土の混入も目立った。炉は北部壁寄りから出土した。この炉は四方を細長い石で囲った石囲炉で、直径60cmほど掘り込んだ後に石を設置し、黄色味を帯びた暗褐色土で埋設していた。また、炉内からは焼土も検出された。

なお、床面には硬化面は確認できず、柱穴も検出することができなかった。

遺物（第64図8）

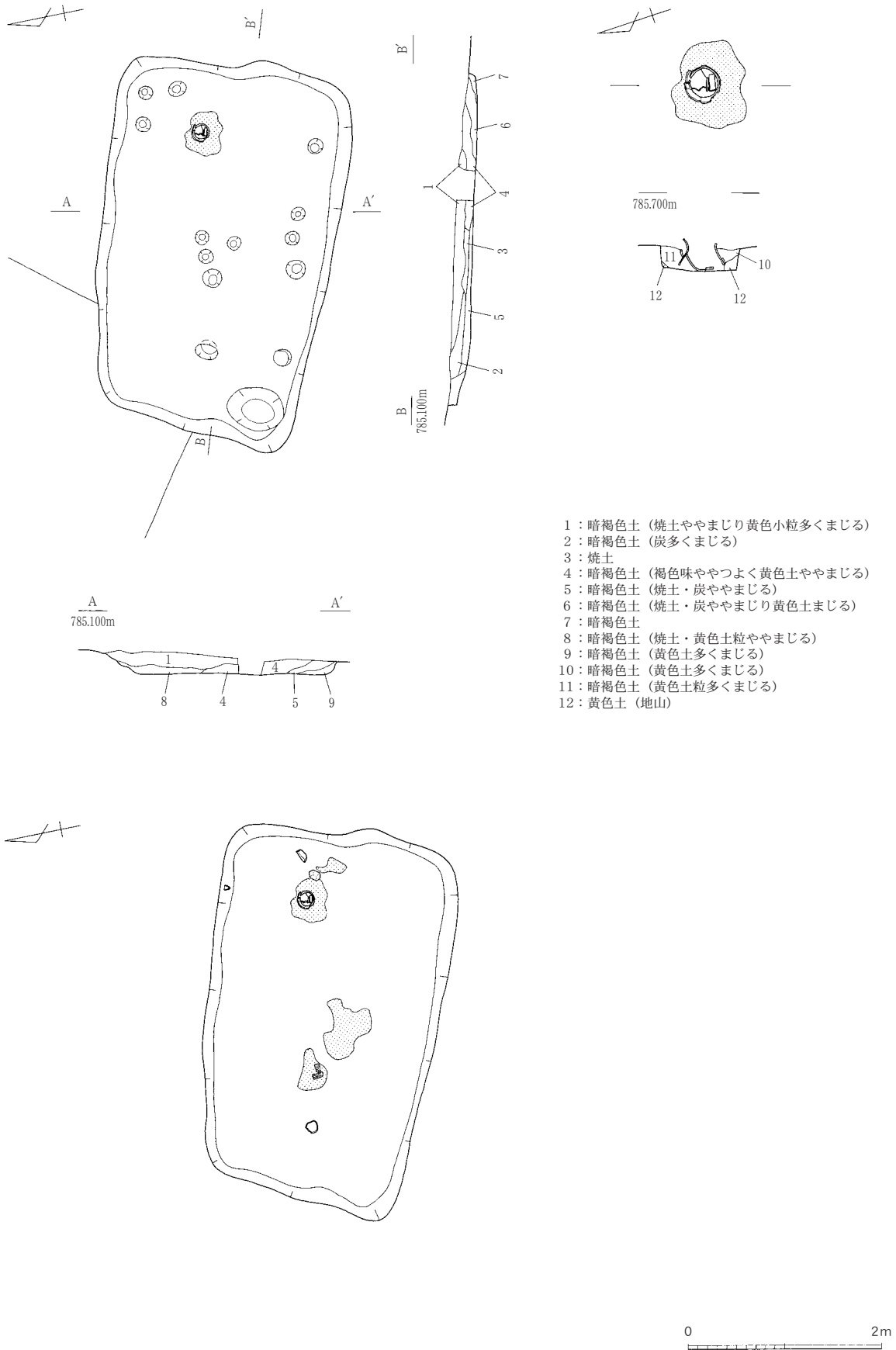
この住居址内で図化できた唯一の遺物である。炉内から出土した時期不明の黒曜石製の剥片石器である。

第45号住居址（第56図）

E E-59から出土している。約4.1×3.5mのやや長方形のプランで、壁高は約20cmであった。床面からは北寄りと南に寄った地点から直径60cmほどの土坑が確認され、底部から焼土が検出されていることから、炉の作り替えが行われている可能性が高い。なお、北部土坑内の底部の赤色化が激しく、使用期間が長かったことが推察できるが、炉体が出土しておらず、前後関係は不明である。柱穴はP 1～P 4が出土し、この4ヶ所が支柱穴と考えられる。また、床面には硬化面を確認することはできなかった。

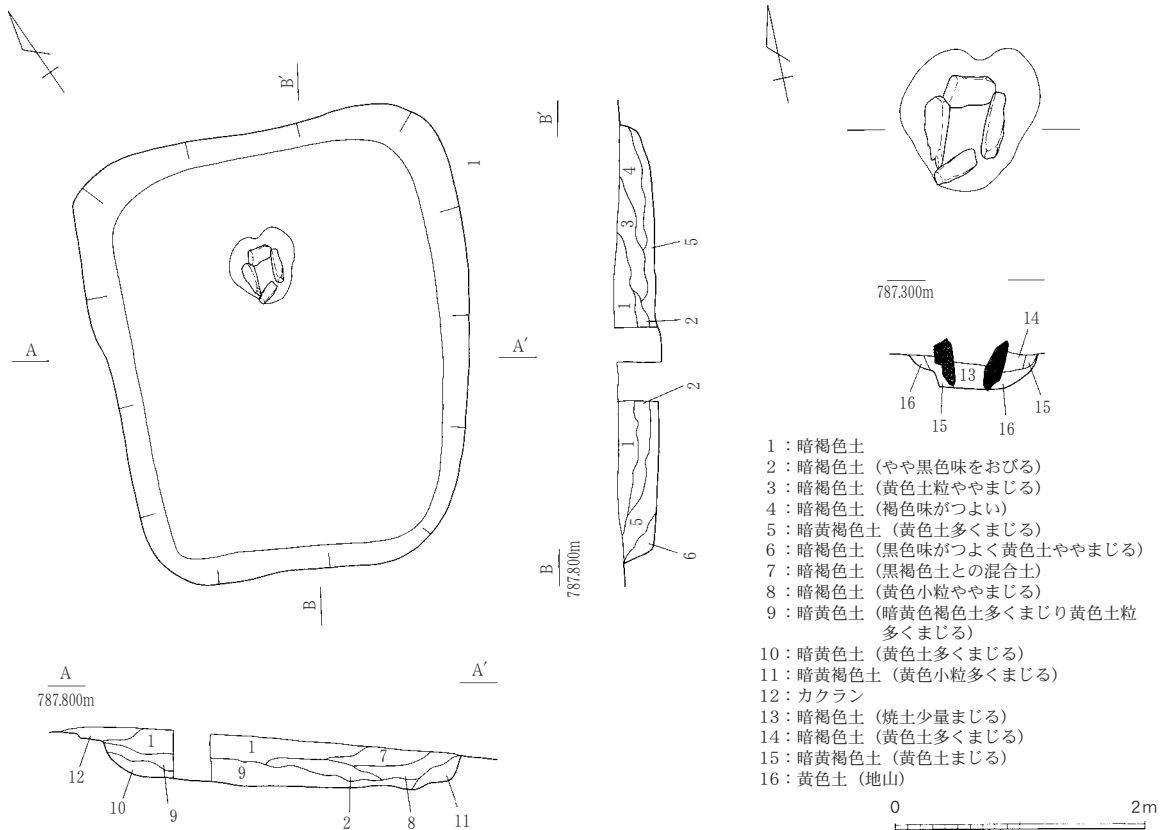
また、北部の炉の南部床面には一辺約30cmの偏平な礫が出土しており、作業台として使用されていたとも推定された。

第IV章 遺構と遺物



- 1 : 暗褐色土 (焼土ややまじり黄色小粒多くまじる)
- 2 : 暗褐色土 (炭多くまじる)
- 3 : 焼土
- 4 : 暗褐色土 (褐色味ややつよく黄色土ややまじる)
- 5 : 暗褐色土 (焼土・炭ややまじる)
- 6 : 暗褐色土 (焼土・炭ややまじり黄色土まじる)
- 7 : 暗褐色土
- 8 : 暗褐色土 (焼土・黄色土粒ややまじる)
- 9 : 暗褐色土 (黄色土多くまじる)
- 10 : 暗褐色土 (黄色土多くまじる)
- 11 : 暗褐色土 (黄色土粒多くまじる)
- 12 : 黄色土 (地山)

第53図 第42号住居址遺構平面図および遺物出土状況図 (炬 : S=1/30)



第54図 第43号住居址遺構平面図 (炉：S=1/30)

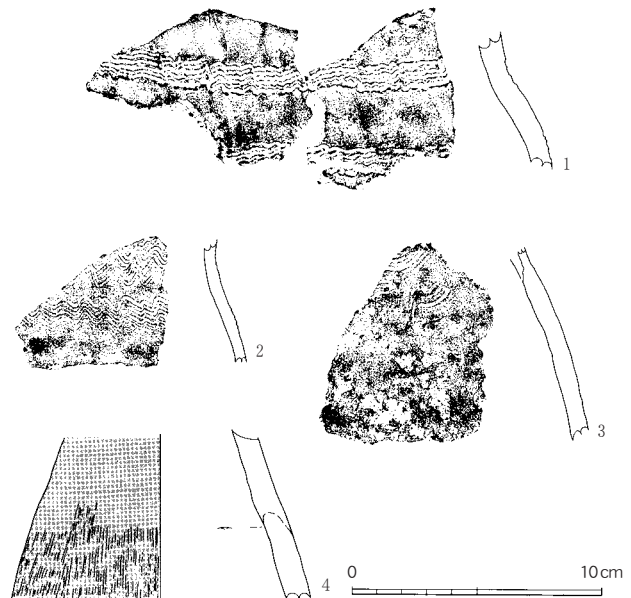
遺物 (第55図)

この住居址からは器形の復原できる遺物は出土しなかった。

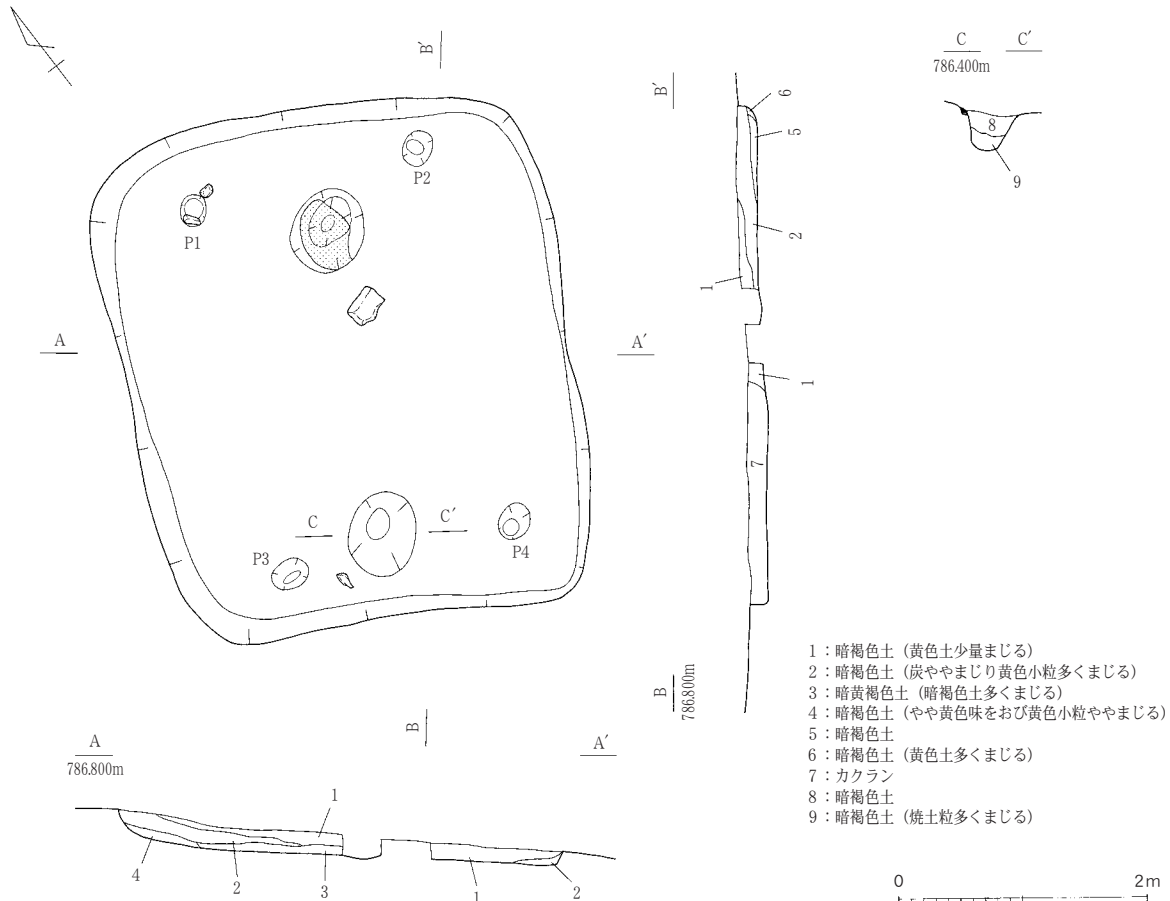
1・2は甕の破片である。1は振幅のごく小さい6条1単位のクシ描波状文を、胴部と頸部に2段、施文工具を強く押しつけて施文している。2は1よりも振幅の大きなクシ描波状文を、1と同様に体部と頸部に施文している。しかし工具の押し当て方は1ほど強くなく、器壁も薄く仕上げられている。

3は壺の体部上部破片である。6条1単位と考えられるクシ状工具によって扇状文を施している。内面は剥離が激しく、外面の一部にも剥離がみられる。

4は高杯の脚部である。外面は赤色顔料を塗布した後に、縦位のヘラミガキ調整を行っている。内面はナデ調整を施しているものの、一部に接合痕が確認できる。なお、外面の赤色顔料は若干残存している程度である。



第55図 第45号住居址出土遺物



第56図 第45号住居址遺構平面図

第46号住居址 (第57図)

この住居址はDU-77より出土している。約3.7×2.5mの平面やや台形の長方形プランを持ち、壁高は約20cmを測った。また、床面の硬化面は検出できず、柱穴も出土していない。覆土は暗褐色土が中心であるが、底部付近では黄色味を帯び、黄色土粒の混入も目立った。なお、西壁隅には直径約1.1mの土坑が掘り込まれているが、この住居址に伴うか明確ではない。

住居址の北壁寄りには、周囲の床面に焼土を伴って、2個体の甕が埋設されていた。この甕が炉体と考えられるが、前後関係は土層観察による切り合いから、西炉が新しいと考えられる。なお、西炉の底部直上からは炉体とは別の甕を割って敷いている。なお、炉穴の覆土中にも多くの焼土が混入しており、西炉の底部からは焼土が厚く出土した。

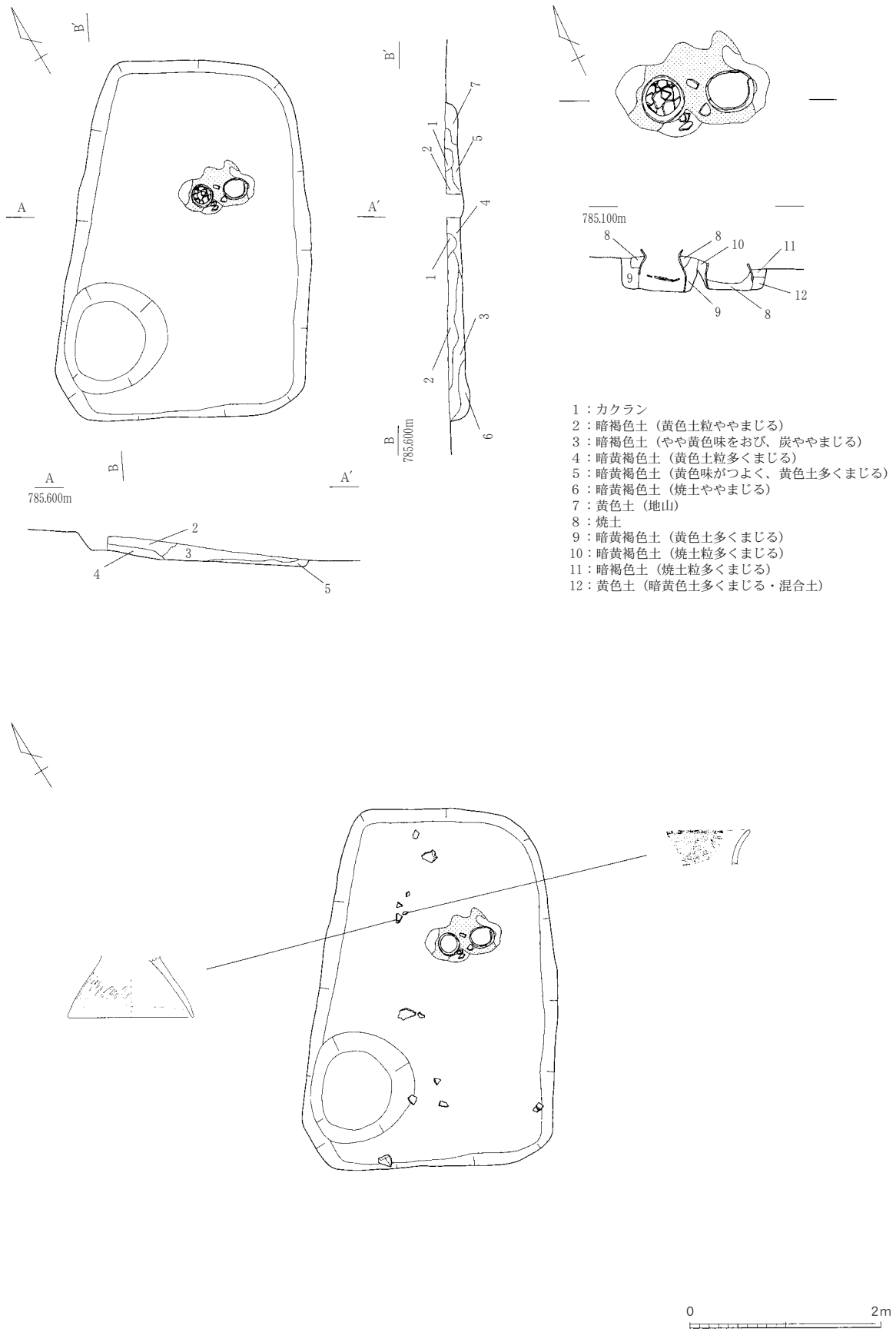
また、破片が出土しているが、図化に耐えられるものは少数であった。

遺物 (第58図)

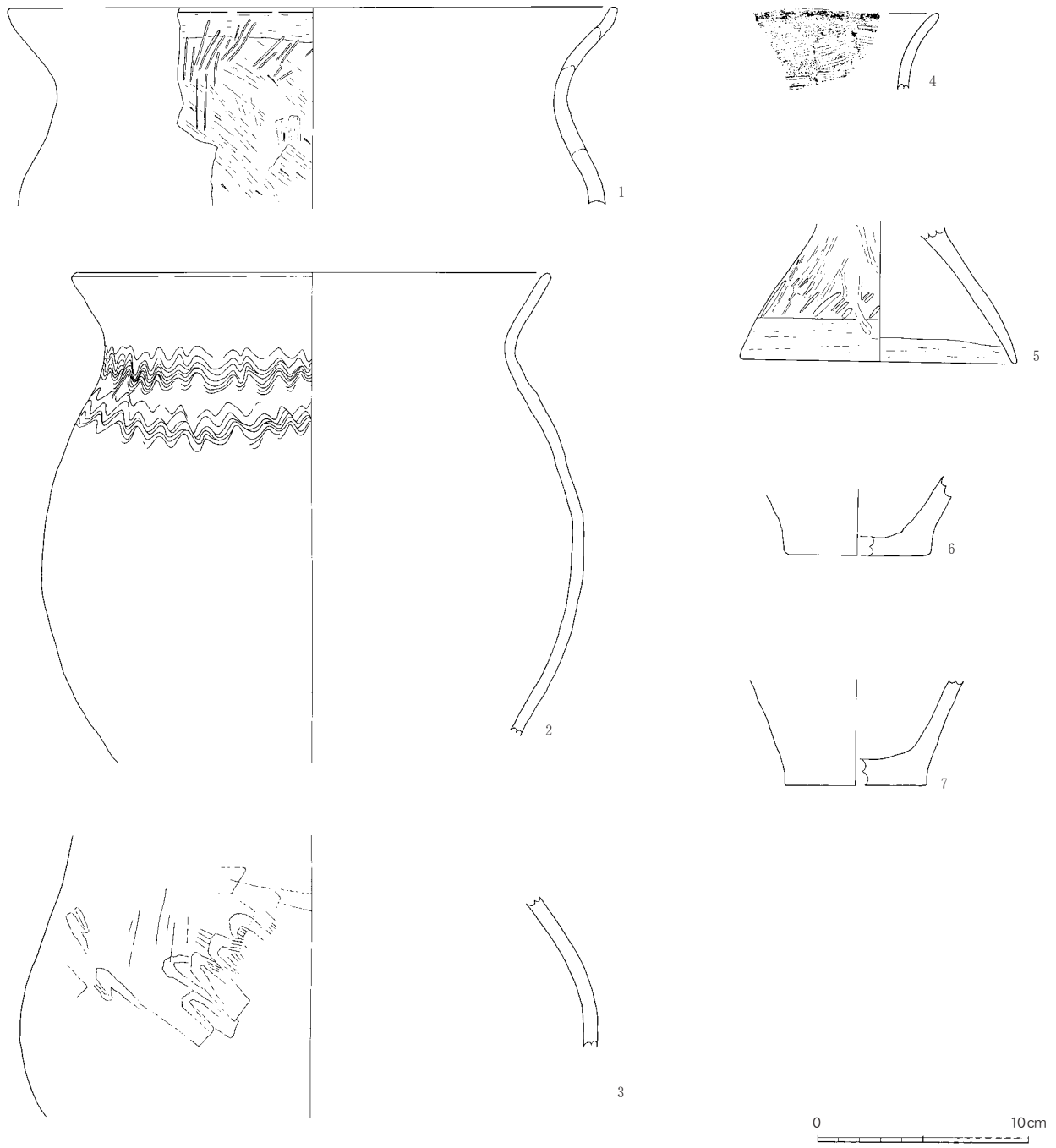
1～4は甕である。1は西炉に敷かれていた甕である。やや受け口状に立ち上がる口縁部を持ち、外面に板状工具によるケズリ調整かとも思えるような強いナデ調整が斜位に施され、その後、口縁部上部にヨコナデ調整を行っている。また、口縁部下部から頸部にかけて、太いクシ状工具による縦位の施文が粗雑に行われている。内面は、明瞭な調整痕を留めていないことから、ナデ調整が行われていると考えられる。なお、外面の一部にスガが付着している。2は西炉の炉体である。球胴形の体部から直線上に口縁部が立ち上がる器形で、頸部から体部上半に、6～8条1単位と考えられるクシ描波状文が2段施文されている。

3は東炉の炉体で、若干歪んだ体部である。外面には板状工具による斜位のナデ調整の後に、粗い横位のへ

1. 住居址



第57図 第46号住居址遺構平面図および遺物出土状況図 (炬 : S=1/30)



第58図 第46号住居址出土遺物

ラミガキ調整が散見される。なお、これらの土器の内面はいずれもナデ調整と考えられる。

4は口縁部の破片である。外反気味に立ち上がる器形で、外面は口縁部上端部付近までクシ描の斜走短線文が施文されており、ススが付着している。

5は高杯の脚部である。上半部は縦位のヘラミガキ調整を施し、裾部はヨコナデ調整を行っている。また下半部にはヘラ状工具かと考えられる工具を使用した、斜位の調整痕がみられる。内面はナデ調整で、裾部は明瞭にヨコナデ調整痕を留めている。なお、外面の上部にはススの付着がみられる。

6・7は甕の底部破片である。両者共に外面には縦位のヘラミガキ調整を行っており、6の最下部にはヨコナデ調整が施されている。また、7の内面下半部にはススの付着がみられる。

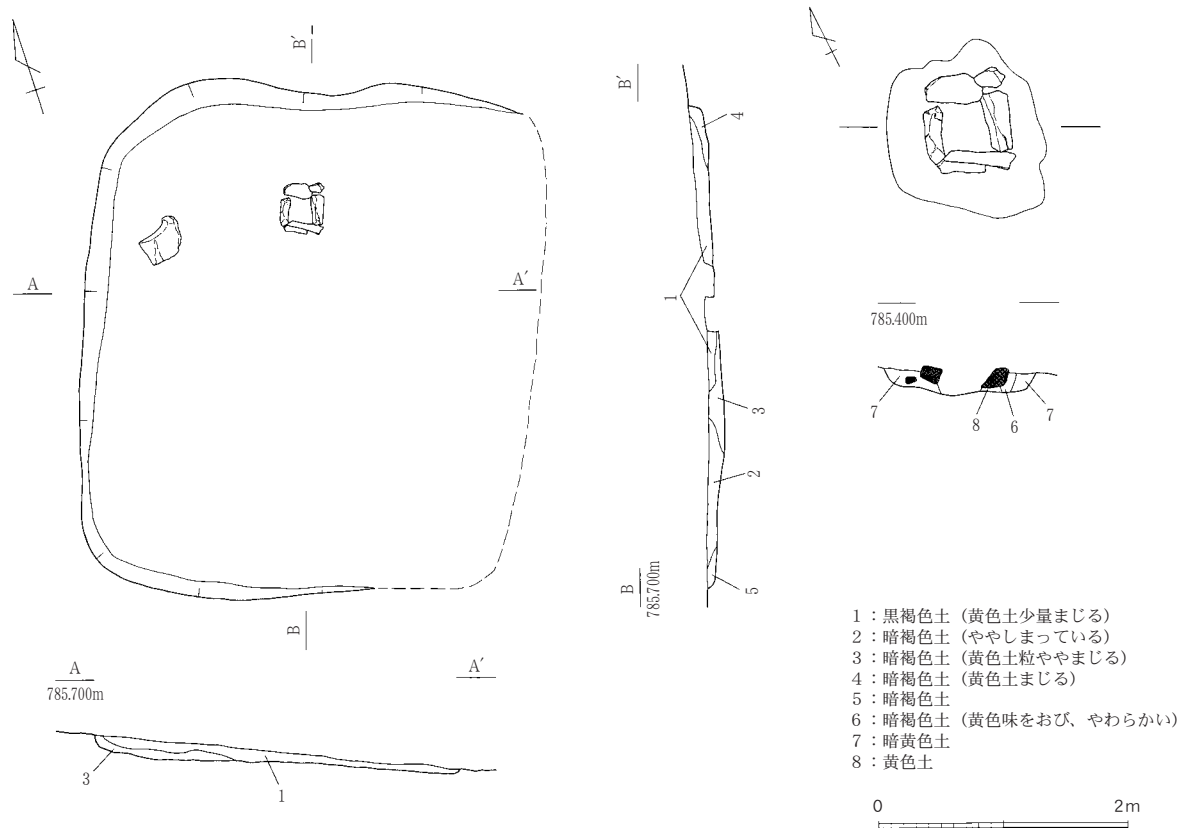
第52号住居址（第59図）

この住居址はEG-63から出土している。プランは約4×3.6mと考えられるが、東部壁が削平されており、明確ではない。残存する壁高は約15cmで、覆土は黒褐色系の土を中心に、下層に暗褐色系の土が堆積していた。

炉は北部壁寄りに出土し、一辺約60cm程の掘り込みの中に、細長い石を四方に配し、暗黄褐色系の土で周囲を固めた、いわゆる石囲炉の形態を呈していた。しかし、この炉から焼土を検出することができなかった。また、床面に硬化面はなく、柱穴も検出できなかった。

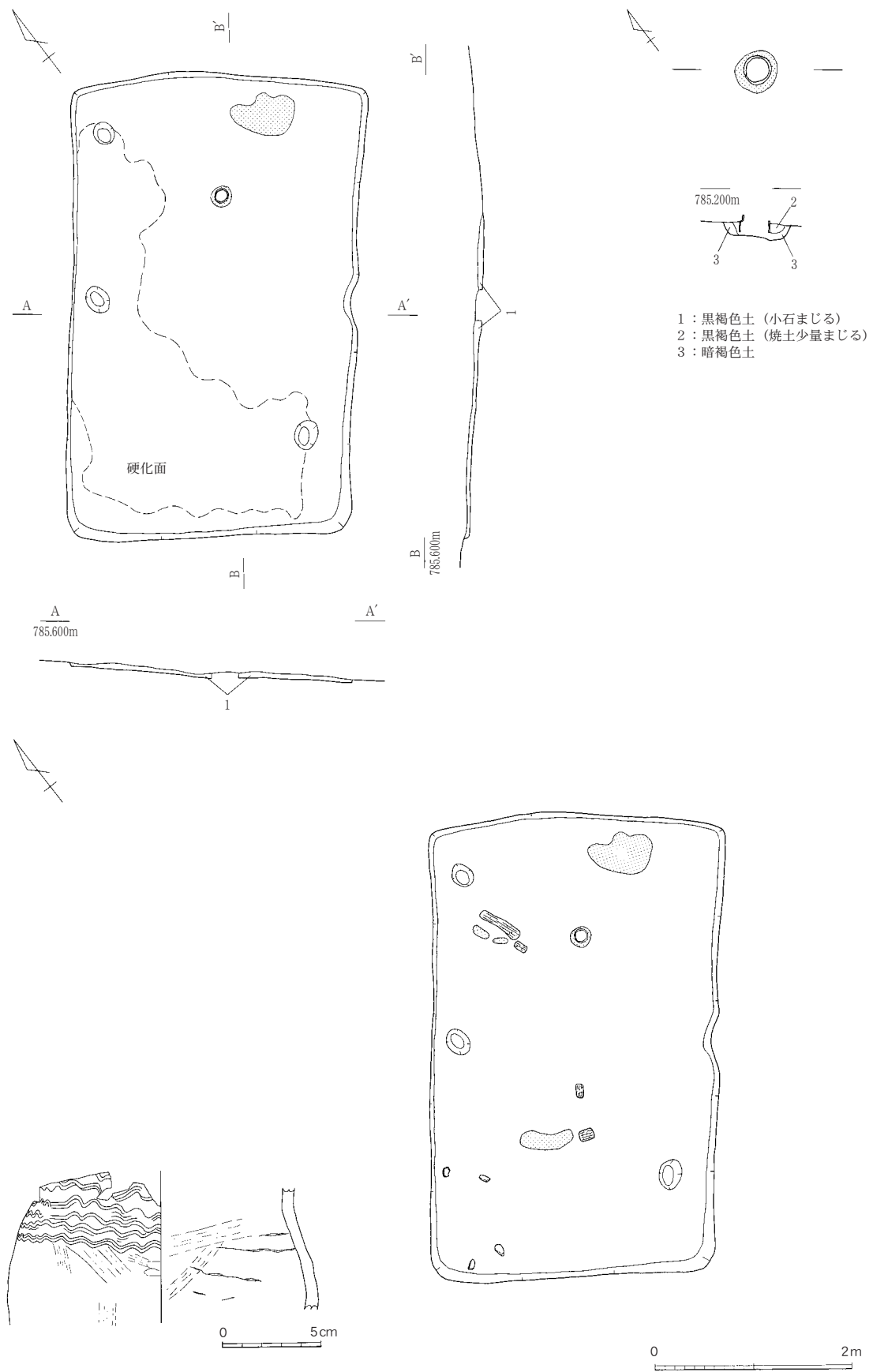
遺物

図示できる遺物は出土しなかった。



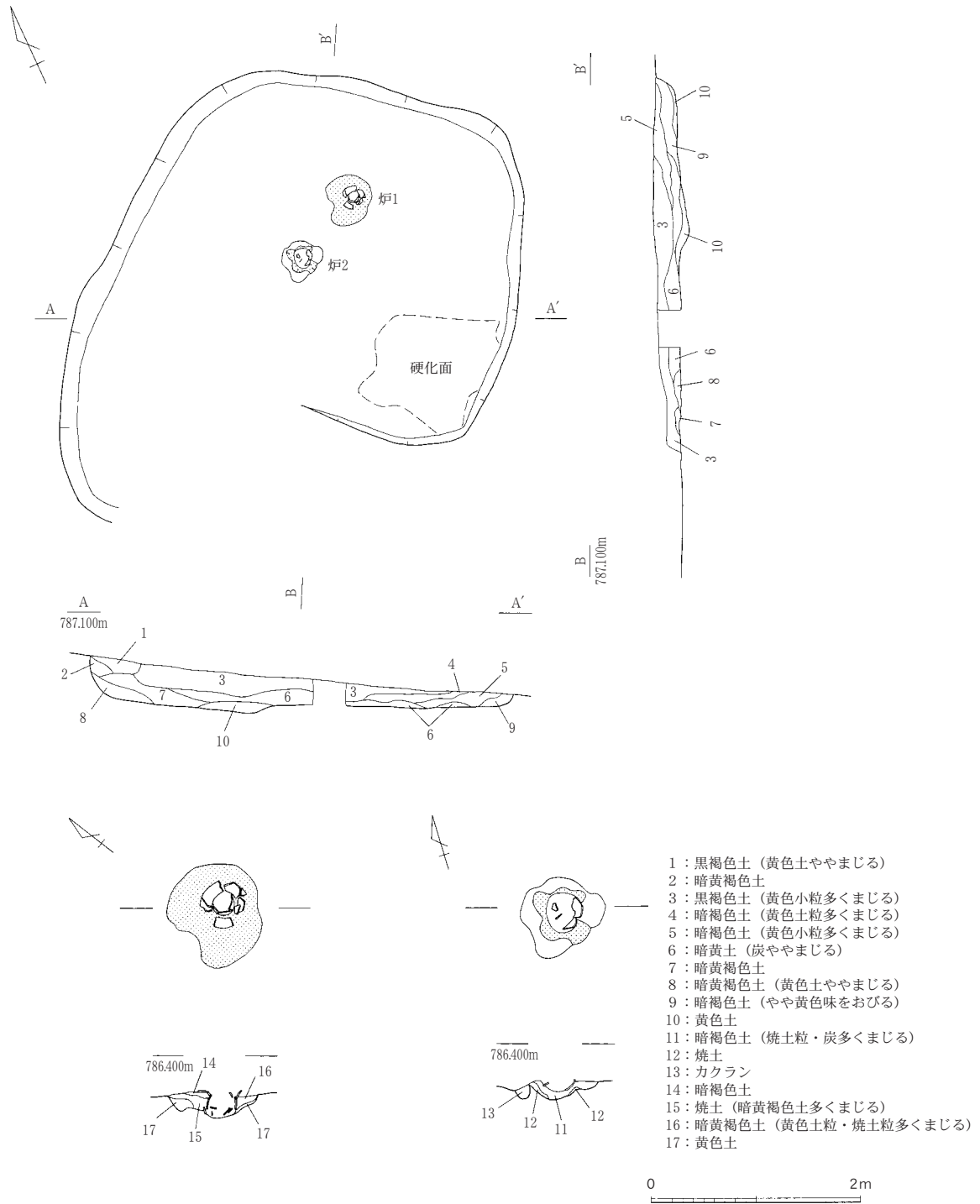
第59図 第52号住居址遺構平面図 (炉：S=1/30)

第IV章 遺構と遺物

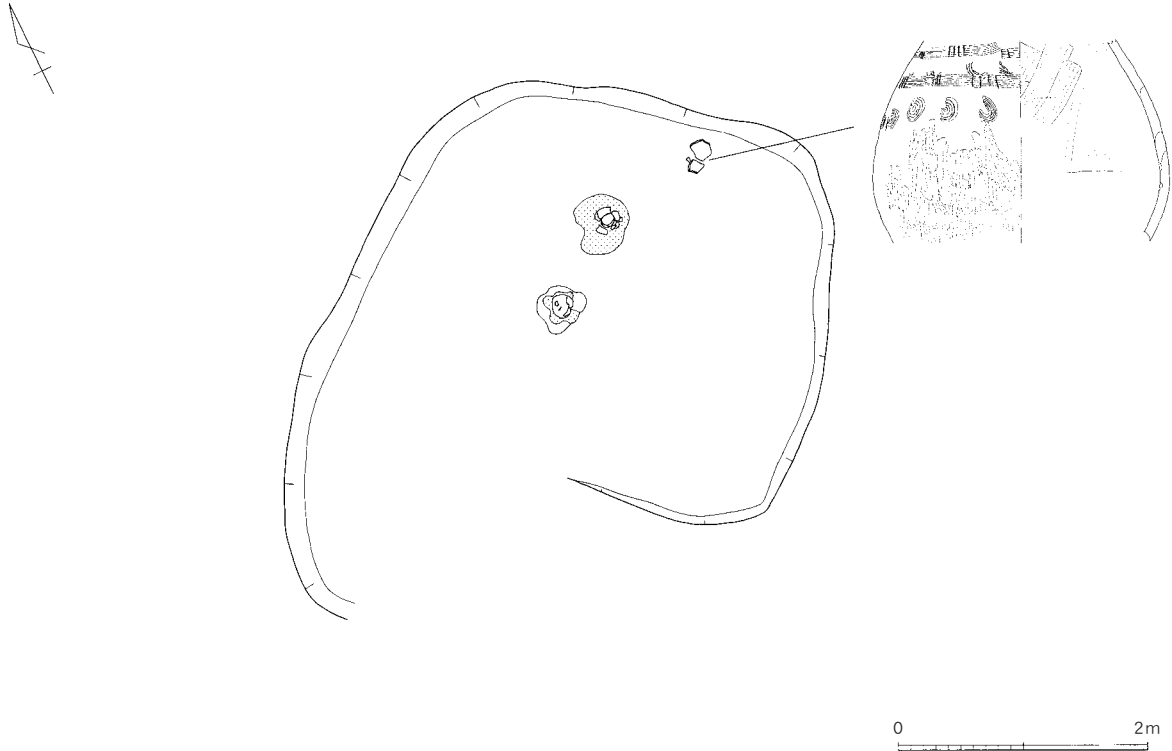


第60図 第53号住居址遺構平面図および遺物出土状況図 (炬: S=1/30)

1. 住居址



第61図 第54号住居址遺構平面図 (炬: S=1/30)



第62図 第54号住居址遺物出土状況図

第53号住居址（第60図）

この住居址はE J -61から出土している。4.7×2.9mの長方形プランで、壁高は約10cmであった。この住居址は黒褐色土の包含層内から検出されたため、プランが容易に把握できず、壁を破壊してしまっている。覆土も黒褐色系の土が中心であった。床面の西半部からは硬化面が検出され、ピットも出土したが、支柱穴は特定できない。炉は北東壁寄りに埋甕炉が出土し、甕の周囲は被熱していた。また、炉の奥の床面からも被熱箇所が検出されている。なお調査中、床面直上からは炭化材や焼土が検出された。

遺物（第60図、第64図11）

第60図は炉体の土器である。外面は斜位のナデ調整の後に3条1単位の粗いクシ描波状文が5段施文されている。内面は粗いナデ調整のために、接合痕が完全に消し去られていない。

第64図11は炉内から出土している時期不明の黒曜石の剥片石器である。

第54号住居址（第61図・第62図）

この住居址はE A -61から出土している。南部は第39号住居址と重複している。当初は長辺約4.5mの長方形のプランと判断して調査を実施していたが、東壁が約3mの地点で屈曲してきたため、西壁の検出状況と矛盾が生じ、明確に検出することができなかった。覆土は黄色小粒の混入した暗褐色系の土を主体とし、下層に炭化物の混入もみられた。床面は、段差があるように検出しているが、土層図で検証すると黄色土および暗黄褐色土が下層に堆積している状況から、掘りすぎている可能性も考えられる。また、硬化面が南隅の一部にみられたが、柱穴は検出できなかった。

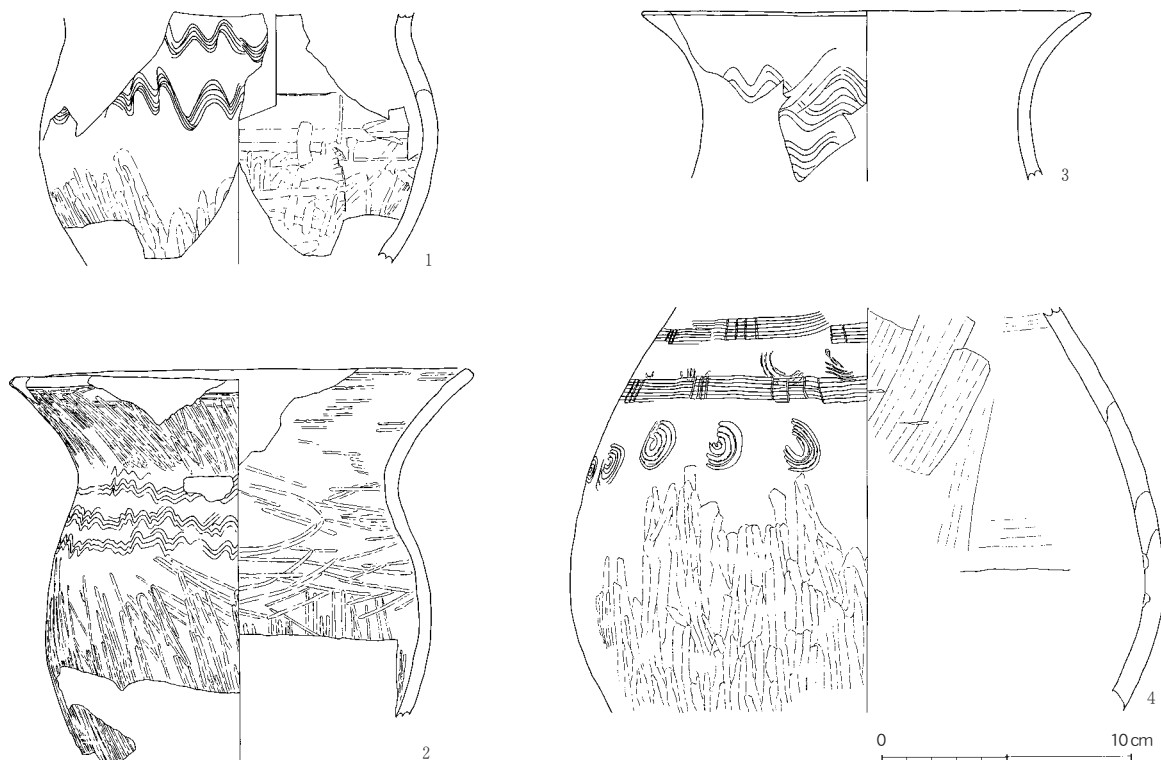
炉は埋甕炉で、北部から2ヶ所出土した。北側の炉1は、周辺に焼土が広く検出されており、直径40cmほどの掘り込みに炉体を設置した際の覆土にも、多くの焼土が混入していた。南側の炉2は、炉体の遺存率が悪く、破片程度しか出土していないが、掘り込みの覆土中に多くの焼土が混入していた。

遺物 (第63図、第64図12)

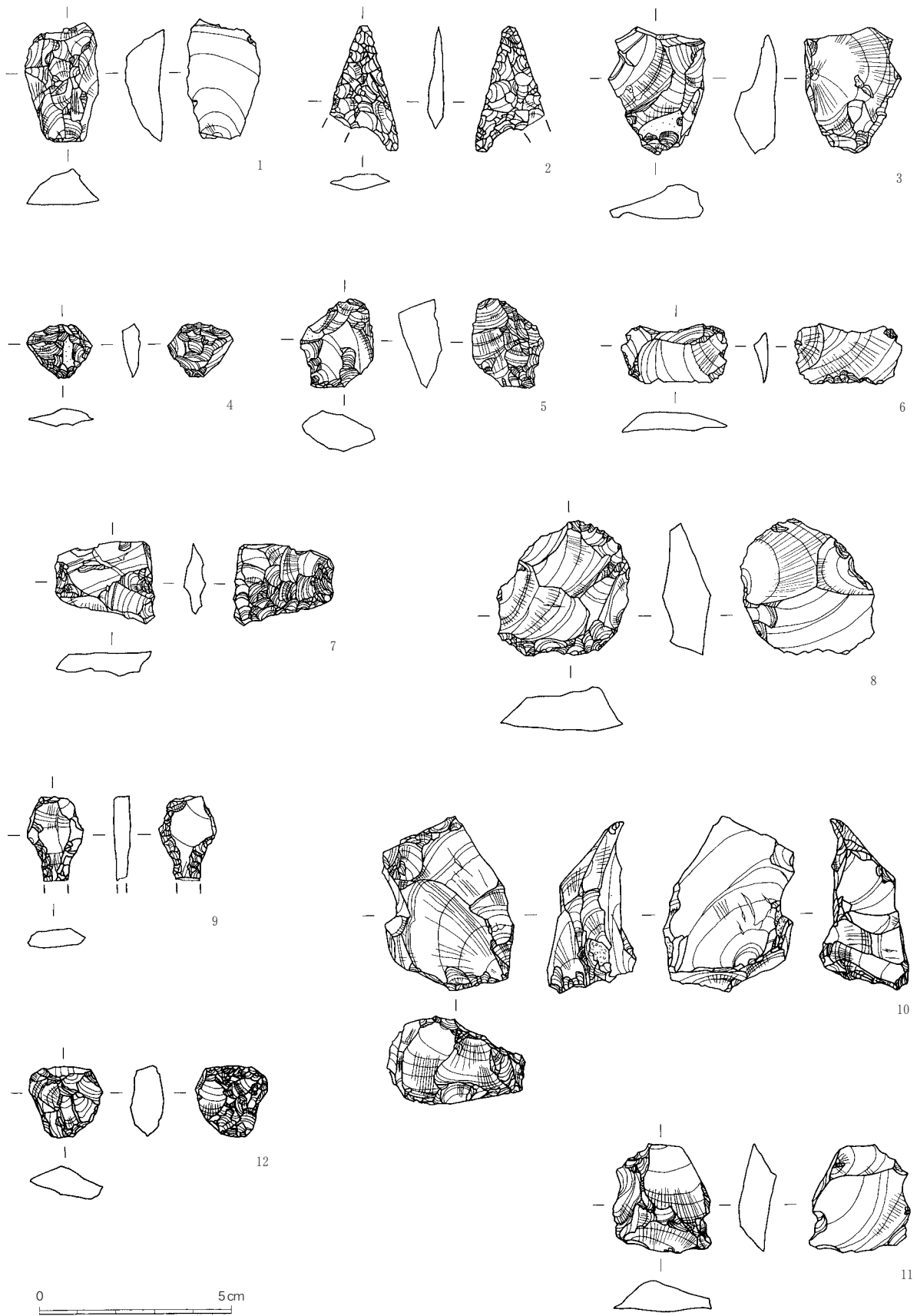
第63図がこの住居址から出土した土器である。1～3は甕である。1は炉2の炉体である。1/4ほどの残存である。外面には6条1単位の、右から左への施文方向のクシ描波状文を胴部上部と頸部に2段施文している。また、胴部下半部には縦位のやや幅の広いヘラミガキ調整が行われている。内面は、横位に板状工具によるナデ調整を施した後に、外面と同じ原体を使つてのヘラミガキ調整が行われている。2は炉1の炉体である。焼成の良好な土器である。口縁部上端部に横位のヘラミガキ調整を行った後に口縁部に縦位のヘラミガキ調整を丁寧に施している。頸部には数条1単位のクシ描波状文が3段、左から右方向の施文方向で描かれている。なお、波状文単位ごとの施文順位は下段から上段の順位と考えられる。体部は斜位のヘラミガキ調整の後に、縦位のヘラミガキ調整を比較的密に行っている。内面は、口縁部に横位のヘラミガキ調整が痕跡程度にみられ、頸部から体部上部には粗雑なヘラミガキ調整が行われている。体部下半部にはやや粗雑なヘラミガキ調整がみられる。なお、ミガキの原体幅は全体に細い。3は甕の口縁部である。やや伸長した頸部から、球胴化した体部につながると考えられる。外面は、幅の広いクシ描波状文が左から右方向に2段施文されている。内面には目立った調整痕が確認できないことから、ナデ調整の可能性が高い。

4は壺の体部である。下半部に最大径をもっており、外面の上端部に、断絶をはさむ4単位連続止めを1単位とする、粗雑な簾状文を2段施文している。また、下段の簾状文と重複する形で、不整形な扇状文が描かれており、簾状文下部に描かれた比較的弧の大きな扇状文とは対照的である。なお、体部下半部には幅の広いヘラミガキ調整が施されている。また、内面には縦位の板状工具によるナデ調整痕が頸部付近の一部には横位に、胴部上部には縦位に施しているのが確認できる。

第64図12はこの住居址覆土から出土した黒曜石製の剥片石器である。



第63図 第54号住居址出土遺物



第64図 住居址出土石器 (1 : 28住、2~6 : 38住、7 : 41住、8 : 43住、9・10 : 46住、11 : 53住、12 : 54住)

(1) 平安時代

第24号住居址 (第65図)

CJ-84付近より出土している。南東部は耕作と考えられるカクランによって破壊されている。プランは一辺3.5mの方形を呈していたと考えられ、現存する深さは約10cmであった。なお、北部壁に接して土坑が1基出土しているが、この住居址に伴う遺構が確認できなかった。

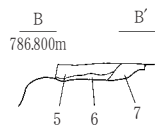
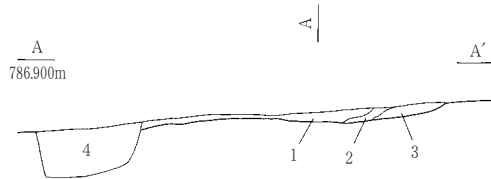
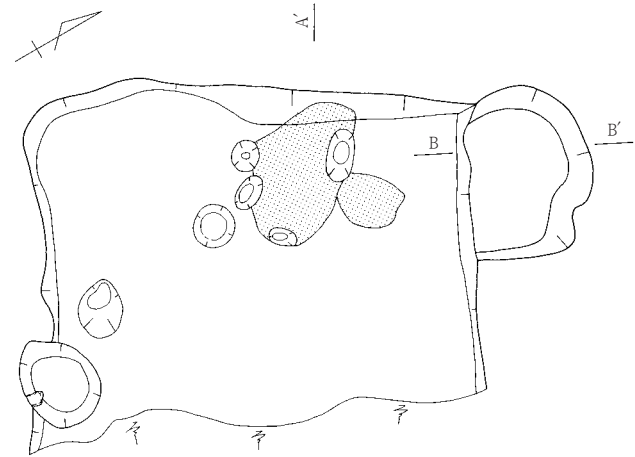
覆土は暗褐色系の土であり、床面からは長胴甕の破片をはじめ、小型甕などの小片も出土している。カマドは西壁に作られていたと考えられ、その付近は床面が焼土化していたが、カマドの構造物は検出できなかった。また、ピットは2ヶ所検出したが、柱穴と判断していいか疑問はある。

遺物 (第66図)

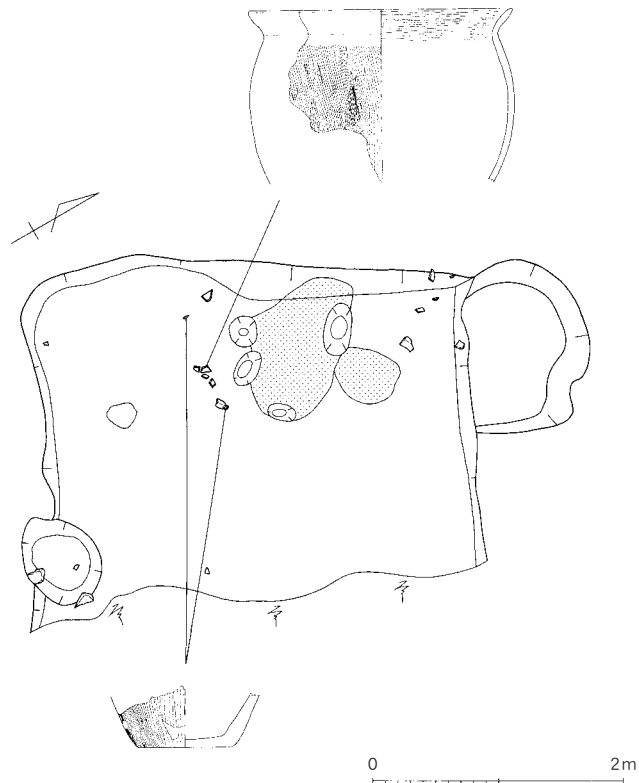
1は内黒土器の上半部破片である。内面のミガキは密で、丁寧に施されている。また、外面はすべてススにおおわれている。

2は灰釉陶器碗である。上半部のみ残存しており、施釉されていない露胎部に墨書がみられる。釉葉は比較的厚く掛けられているが、焼成が悪い。3～5は甕の破片である。3は底部で、縦位のハケ目調整が施されている。4は小型甕の上半部である。口縁部は「く」字状に屈曲し、内面には横位のハケ目調整がみられる。体部の外面には横位のカキメが施されている。なお、この甕は住居址検出中に出土したものであり、厳密にはこの住居址の出土とは言えない。5は長胴甕の上半部である。若干中央部が肥厚し、大きく屈曲した口縁部で、体部は長胴甕としては丸みを帯びている。口縁部内面は横位のハケ目調整が観察され、外面は密な縦位のハケ目調整が施され、体部上端部では口縁部の調整であるヨコナデ調整によってナデ消されている。

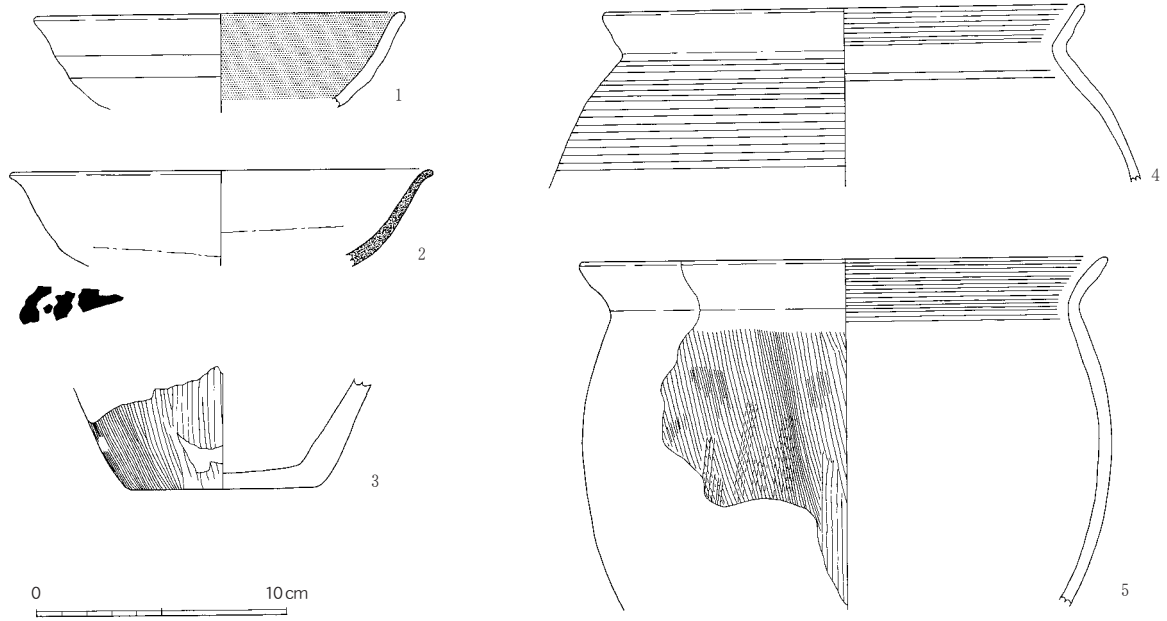
なお、カマドからは鉄滓も出土している。



- 1: 暗褐色土 (黄色小粒多くまじる)
- 2: 暗褐色土 (焼土・黄色土粒ややまじる)
- 3: 暗褐色土 (焼土多くまじる)
- 4: カクラン
- 5: 暗褐色土 (黄色小粒多くまじり、炭まじる)
- 6: 暗褐色土 (黄色小粒多くまじり、黄色土粒ややまじる)
- 7: 暗褐色土 (黄色小粒と焼土ややまじる)



第65図 第24号住居址遺構平面図および遺物出土状況図



第66図 第24号住居址出土遺物

第25号住居址（第68図）

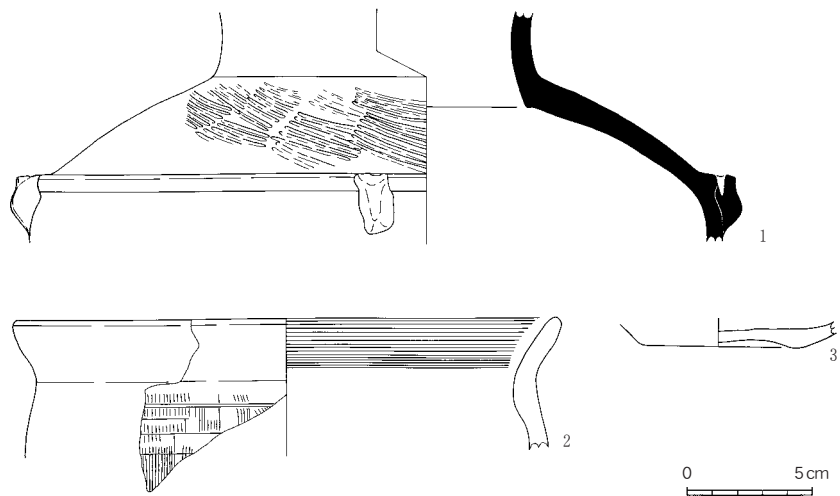
CP-79から出土している。北東部は削平されてしまい、プランを明確にすることはできないが、一辺約3.2mの方形なプランであったと推定できる。なお、壁は良好な残存部分で約13cmであった。覆土は暗褐色系の土であり、硬化面は床全体にわたっていた。カマドは北西壁の中央部にあり、その両脇からは、覆土中に焼土が混入した、直径およそ80cmほどの不整形な土坑が検出されている。また北角には偏平な石が床面から出土していることから、作業台かとも考えられる。

カマドは基底部付近が残存しており、燃焼部付近は被熱によって深く赤化していた。

遺物（第67図）

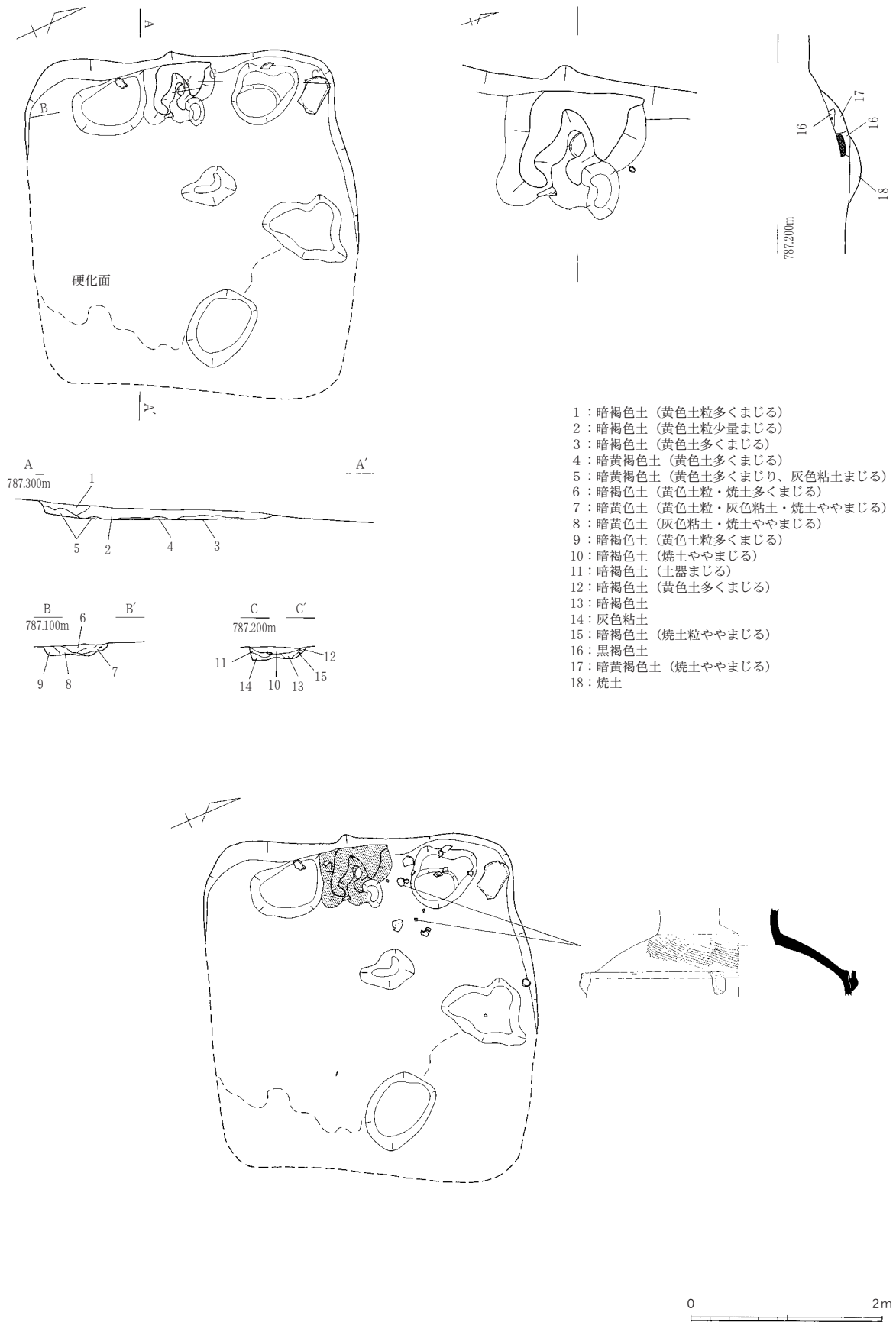
1は須恵器の四耳壺の破片である。カマド周辺から小片で出土した。凸帯は下部ですぼまる三角形をしている。耳部の孔は途中まで開けられ、完全には開孔していない。なお、体部外面の、自然釉の掛かった上部（肩部）に平行叩き目がみられ、内面にはハケ調整の痕跡が残されている。

2は長胴甕の上部である。全体的に器壁が厚く、口縁部の屈曲も弱い。口縁部内面には横位のハケ目調整が認められ、体部外面には縦位のハケ目調整が施されている。なお、外面の縦位はハケ目調整の後、ヘラ状工具による横位の浅い沈線が数条にわたって引かれ、ハケ目を直線的に消している。

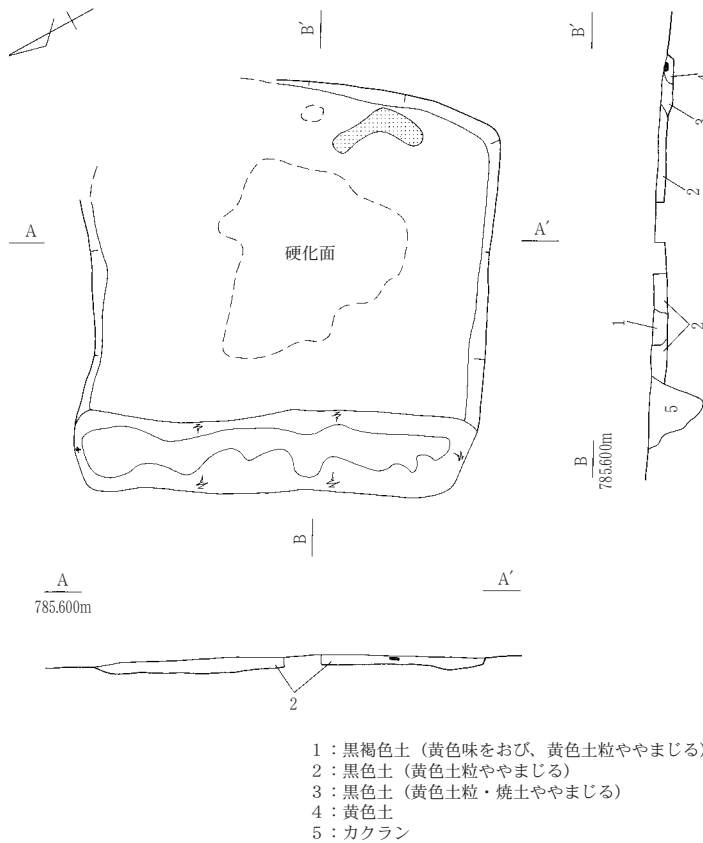


第67図 第25号住居址出土遺物

1. 住居址



第68図 第25号住居址遺構平面図および遺物出土状況図 (カマド：S=1/30)



第26号住居址 (第69図)

DL-81より出土している。東部隅および北西部の壁がカクラン等によって失われている。平面プランは一辺約3.2mの方形であり、深さは現存で約10cmであった。覆土は黒褐色系の土が主体であった。カマドは出土しなかったが、南東壁中央部付近の床が被熱によって赤色化しており、ここに築かれていた可能性が考えられる。

また、床中央部に硬化面が検出されているが、柱穴は検出できなかった。

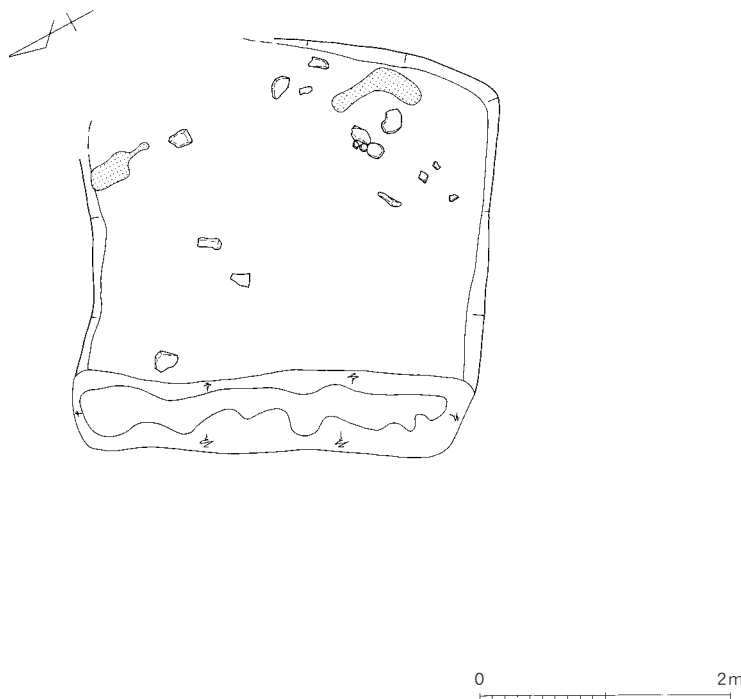
なお、この住居址からは遺物は出土していない。

第27号住居址 (第70図、第71図、第73図)

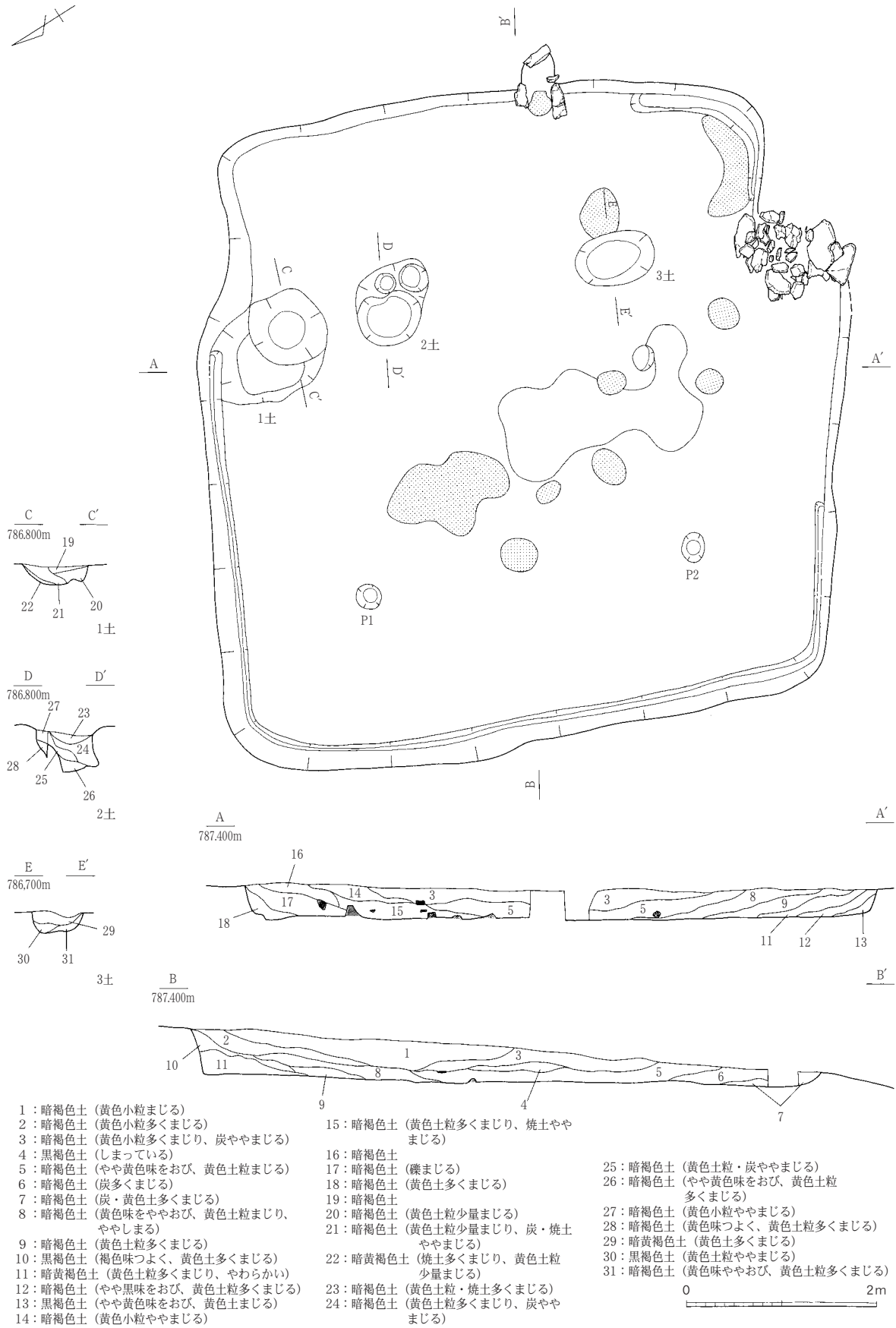
DS-67より出土している。この住居址は当初1基と考えて調査を実施し、調査が進んでいく段階で重複していた事に気がついたものであり、記録的にも明確な前後関係を把握していない。しかし、カマドの設置位置から北東部のやや小型の住居址を大型の住居址が切っ作られていると考えられる。このため、本報告で、東部の切られた住居址を第27号(旧)住居址、掘り込んだ新しい住居址を第27号(新)住居址とする。

土層断面図を確認すると、明確な境界は表現できていないが、旧住居址の覆土中には炭化物が多く混入しており、ここに新住居址の掘り込みが行われていると推定される。

新住居址は6.6×5mほどの長方形と考えられ、三方に周溝が出土している。床面には被熱によって赤色化した部分が数箇所わたって検出されているほか、中央ややカマド寄りには極浅い窪

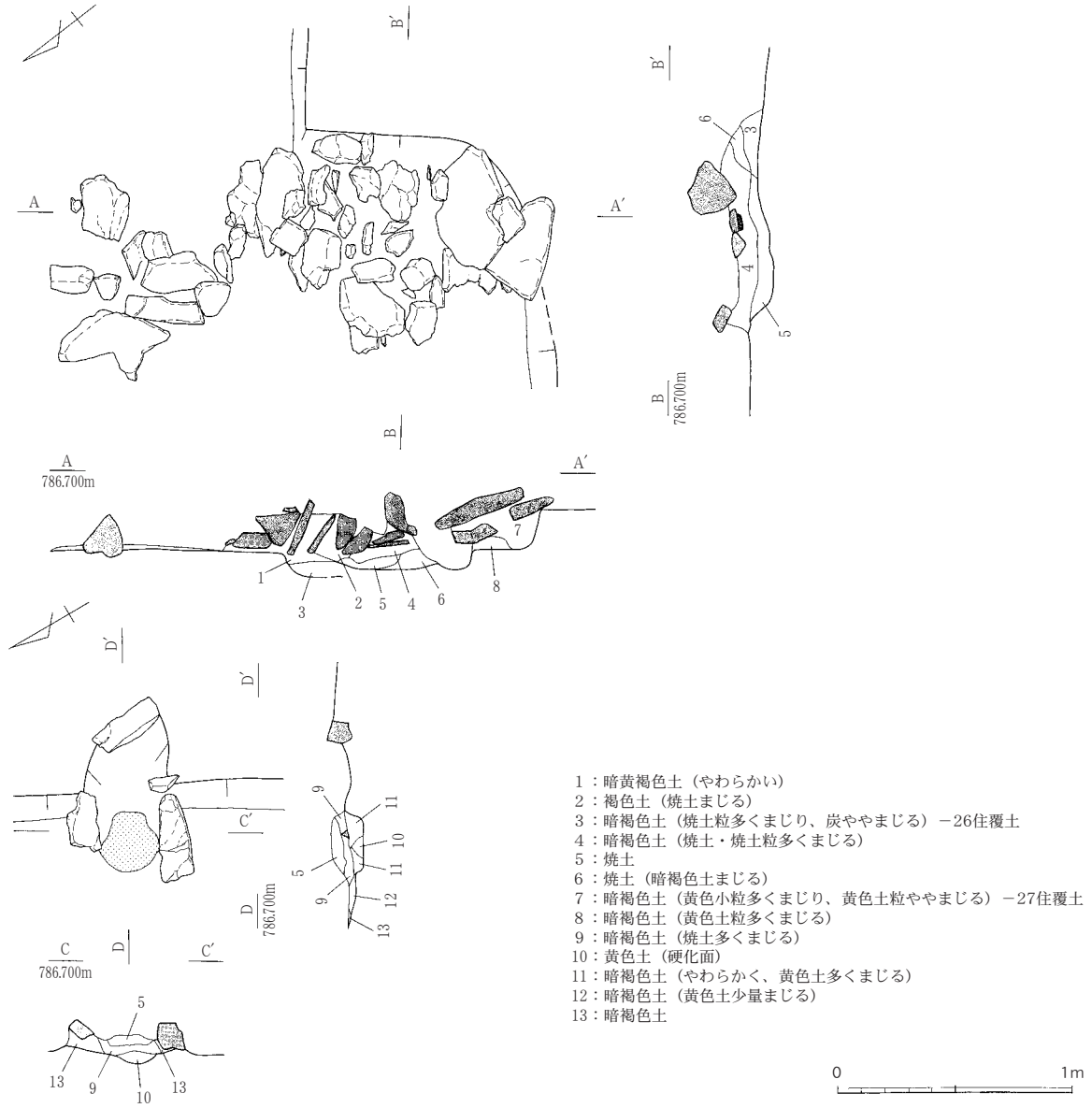


第69図 第26号住居址遺構平面図および遺物出土状況図

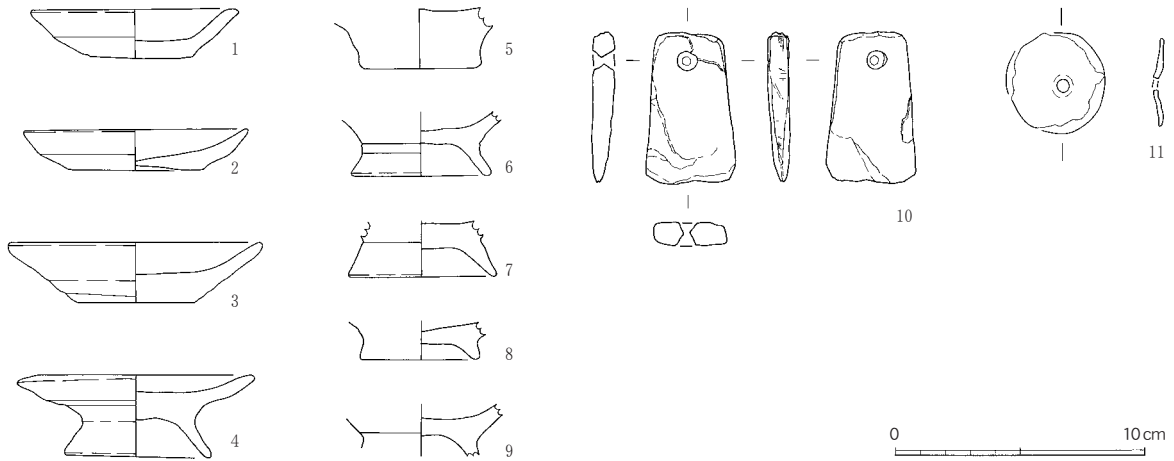


第70図 第27号住居址遺構平面図(1)

第IV章 遺構と遺物



第71図 第27号住居址遺構平面図 (2)



第72図 第27号住居址出土遺物

みもみつがっている。また柱穴はP 1、P 2を検出することができたものの、それ以上はみつげることができなかった。なお、新旧住居址の切り合っている地点では、土坑が3基出土しているが、その上部に礫が集中して出土しており、第1号土坑からはこの住居址に近い段階の土師器坏が出土しているものの、この住居址に伴うかは明確にできなかった。

新住居址のカマドは南隔壁に出土しており（第71図上図）、当初の状態を留めてはいないものの、扁平な石を組み合わせて作られている事が出土状況から推測できる。

旧住居址は1辺約5.7mであるが、そのほとんどを新住居址によって掘削されていると考えられ、プランは明確でない。唯一残存している南東壁の中心部にカマドが出土しているが、袖石と、奥壁上部に礫が出土したのみである（第71図下図）。また、南西部には床面に赤化した部分を検出されている。柱穴は、新旧住居址の重複箇所存在する第2号土坑にピットが検出されているものの、柱穴とする根拠に乏しく、検出されていないと判断している。

なお、この住居址は図化できないものの多量の土器片が出土しており、そのほかにもフイゴの羽口と考えられる破片も出土している。

遺物（第72図）

1～3は土師器坏である。皿と分類が困難なまでに小型化が進んでいる。1はほぼ完形で出土している。2は半分程度の残存であり、極薄く仕上げられた見込み中心部付近に、タール状の炭化物が付着している。3は口縁部が3/4ほど欠損している。

4～7は土師器盤である。4は高台を作り付けるタイプであり、完形である。5は中実のタイプの脚部である。6・7は高台部である。6は高台が1/3程度残存し、7は一部が残存しているのみであった。

8は土師器碗の高台部である。一部にススがみられる。

9は高台の下部が全周欠損しており、盤か碗かは明確にできないが、円盤状に残存した底部である。

なお、5～9は意図的に見込み部分を残しているように円形に残存している。

10は砥石と考えられる。弱い砂岩で、表面の観察が十分行えないものの、上部に1ヶ所穿孔が見られ、側縁部に磨耗痕が観察できる。

11は紡錘車の弾み車である。実測図上では軸は失われているように表現しているが、X線写真での観察では、弾み車と同じ厚さで残存している可能性が高く、何らかの理由で軸を切り取っている可能性が考えられる。

これらの出土遺物から新住居址は15期と考えられる。

第30号住居址（第74図）

この住居址はDG-81より出土している。東部壁を失っているが、一辺約4.5mの、平面方形のプランと考えられ、残存する壁高は約15cmである。覆土は黒褐色系の土であり、下層に炭化物の混入がみられた。

残存している床面では、ほとんどの部分で硬化面が検出されており、土坑も2基出土したものの、柱穴は検出できなかった。また、南部には浅い落ち込んだ部分も検出されているが性格は不明である。なお、床面には被熱で赤色化した箇所や、炭化材および器形のわかる遺物が出土しており、火災住居の可能性も考えられる。

カマドは北壁中央部付近に焼土が出土していることからこの地点に築かれていた可能性が考えられるが、南部の被熱地点からは甕の破片が出土していることから、カマドの造り替えが行われている可能性もある。いずれにしてもカマドに関連する構造材は出土しなかったため、詳細は明確にできない。

なお、この住居址からは図化されたもの以外にも、長胴甕の破片をはじめ、小片が少量出土している。

第IV章 遺構と遺物

遺物 (第75図)

図化可能な遺物が8個体出土している。いずれも床面付近よりの出土である。

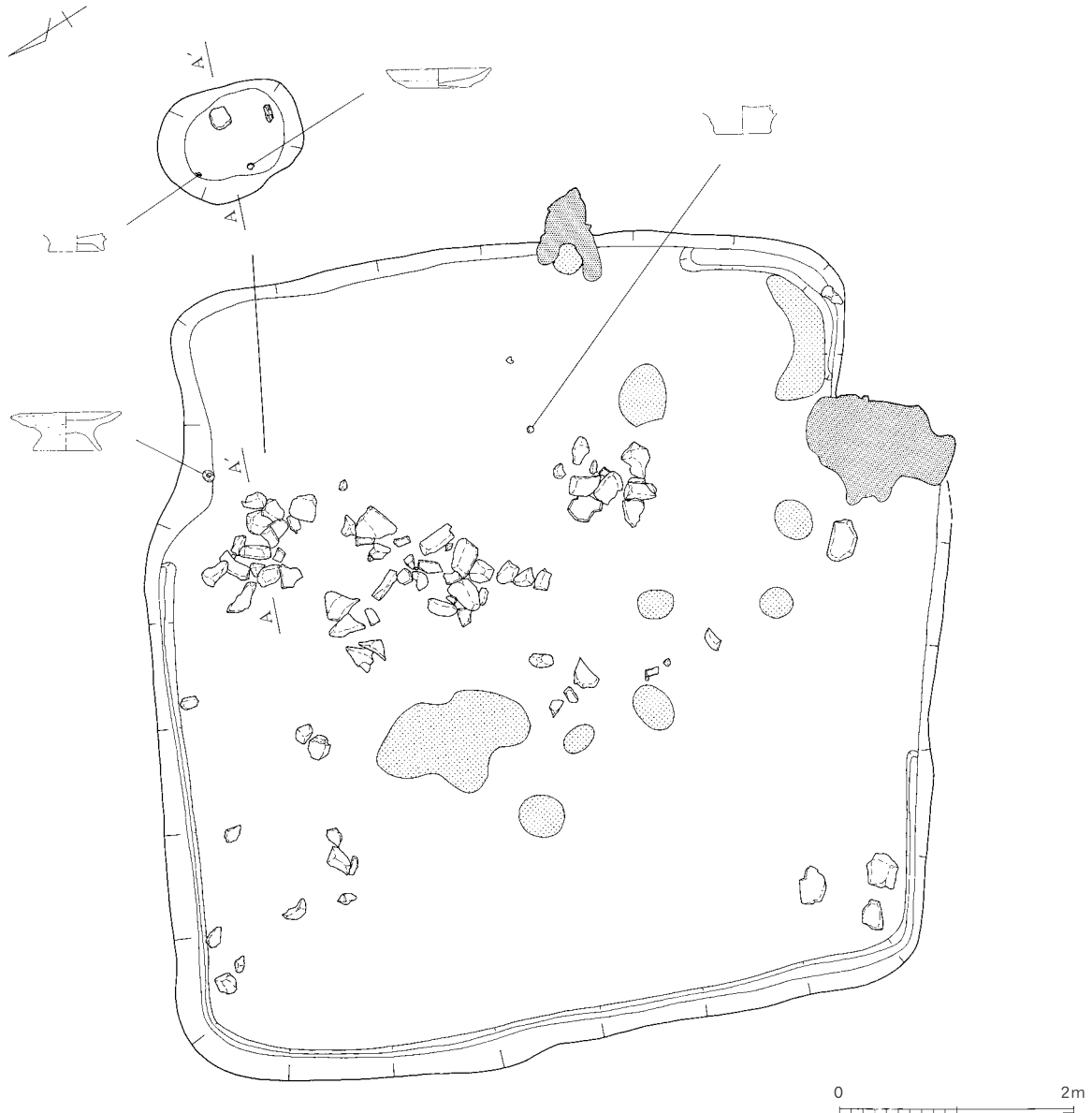
7は灰釉陶器碗である。口径12cm、器高26cmを測る。口縁部が一部欠損しているものの、ほぼ完形である。釉薬は比較的厚く掛けられていた。なお、外面の無釉部分に墨書がみられ、内面には墨が付着していることから、硯に転用している可能性が高い。

3～5は土師器盤である。3は口径11cm、器高3.7cmで、脚部が一部欠損している。4は口径10.2cm、器高4cmで、口縁部が一部欠損している。なお、口縁部の一部にススが付着している。5は脚部のみ出土している。

1・2は土師器杯である。2は口径10.9cm、器高3.6cmを測り、ほぼ完形である。1は口径10.8cm、器高3.6cmである。1/2程度残存している。また、外面の体部には墨書が確認できる。

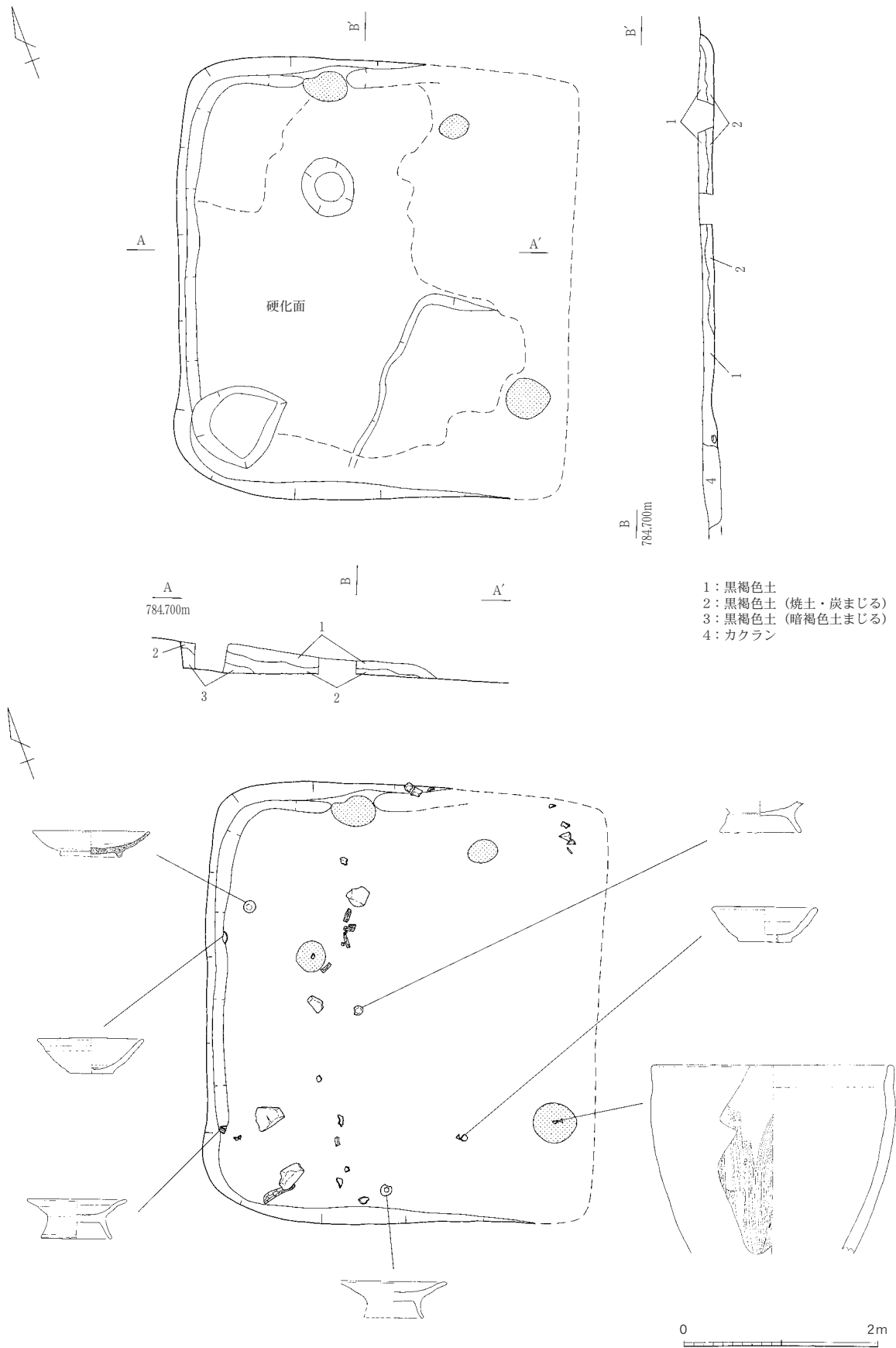
6は土師器杯の底部である。体部はすべて欠損して底部のみ完全に残存している。

9は長胴甕である。体部下部以下が欠損している。開き気味に立ち上がる体部から屈曲の弱い口縁部に至る



第73図 第27号住居址遺物出土状況図

1. 住居址



第74図 第30号住居址遺構平面図および遺物出土状況図

第IV章 遺構と遺物

器形で、口縁部にはヨコナデ調整が施され、若干内湾している。体部は粗い縦位のハケ目調整が施されている。

8は鉄製の火打ち金である。ほぼ完形での出土である。

これらの出土遺物から、この住居址は11期と考えられる。

第31号住居址（第76図、第77図、第79図）

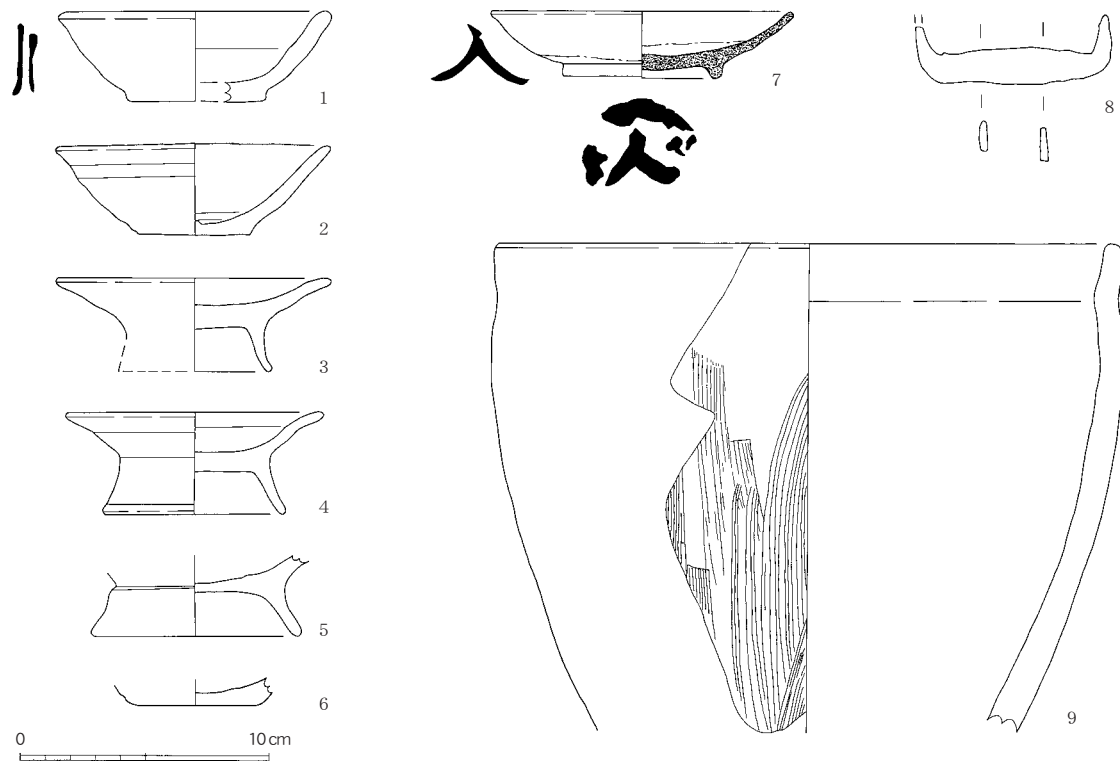
この住居址はDK-85から出土している。東部壁が破壊されているが、一辺が約6.2mの平面方形のプランと推定される。現存する壁高は最深で25cmであった。覆土は全体的に暗褐色系の土であり、若干の炭化物の混入がみられた。

カマドは南西隅から出土しており、カマドの構成材かとも考えられる礫が左袖部周辺に散在しているものの、比較的遺存率がよく、袖部、焚口部等が良好な状態で観察できる。燃焼部中央部には支柱石が立てられ、袖部は礫と粘土で構築されていたと考えられる。また、袖部と、奥壁上部が被熱でやや焼土化している。

また、カマド左袖周辺の礫下部からは、直径20cmのピットが出土し、その東部にもピットが検出されていることから、壁面に沿って何らかの施設が存在していたことが推定される。しかし、東部ピットの床面と同一レベルに皿が2個体出土しており、この皿が口縁部を合わせた、いわゆる合わせ口の状態で出土していることから、住居址の使用されていた時期から皿が置かれていたとも考えられ、壁面に沿って出土した2ヶ所のピットとの関係に問題を残してしまった。

さらに、カマド前面付近に集中して出土した礫は、その直下から出土した、直径90cmほどの土坑と重複しており、この土坑との関係が考えられる。なお、硬化面は床の西半部で検出されている。

なお、図化できなかったが、酸化焰焼成の須恵器小片や、灰釉陶器の破片も少量出土している。



第75図 第30号住居址出土遺物

遺物 (第78図)

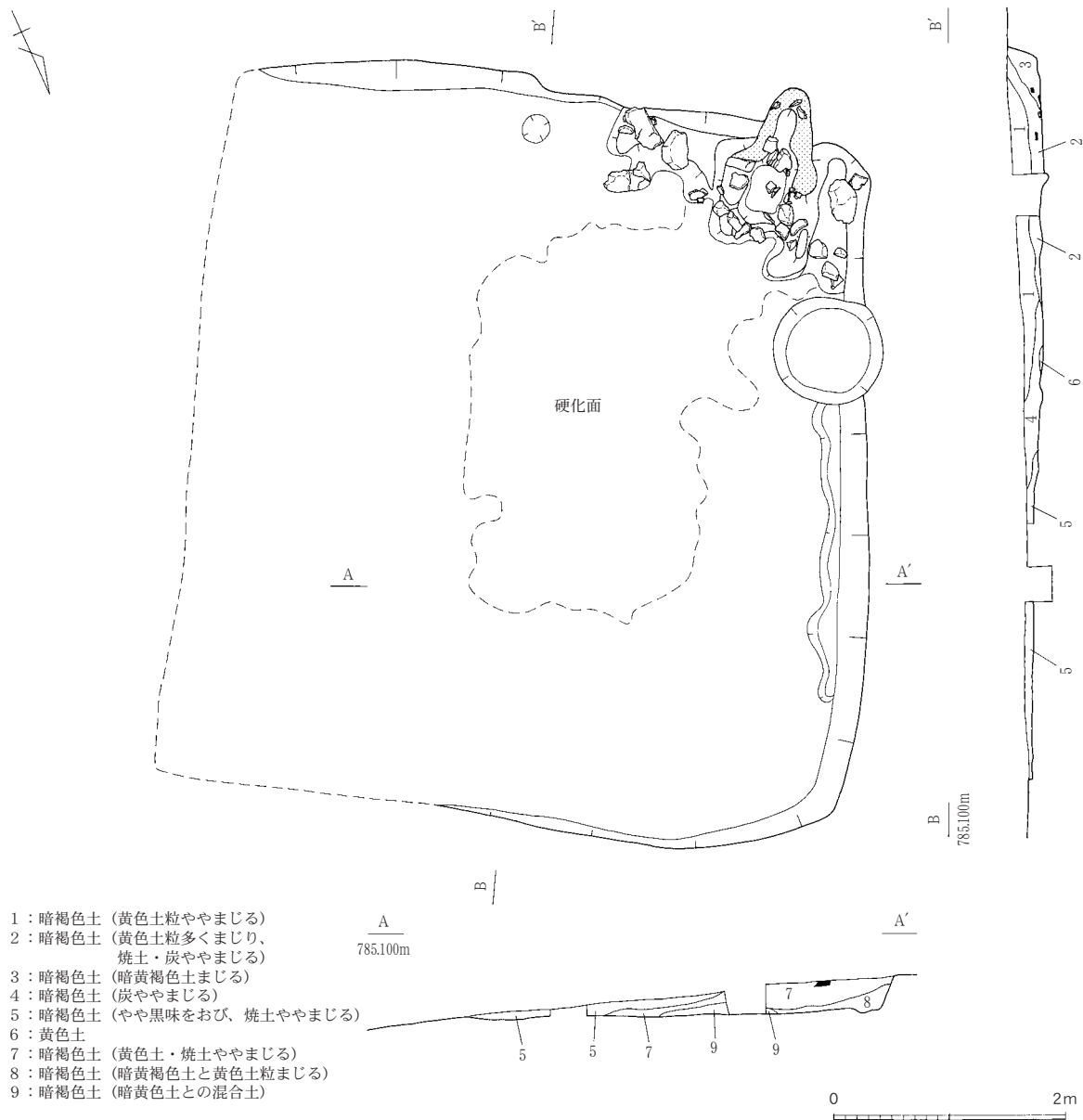
この住居址からは10点図化可能な遺物が出土している。1・2は灰釉陶器である。1は小片であり、口縁部に屈曲部をもちながら外反している。この器形から段皿と考えられる。釉薬は比較的厚めに掛けられているが、ツヤはない。2は碗の下半部である。全面にススが付着している。

3～7は土師器皿である。3は小片であり、4は1/3ほどの残存、5は1/2ほど残存しており、その残存部からの復原である。これらの破片のうち、5の口唇部にはススの付着が確認できる。6・7はカマド東側のピットから合わせ口の状態で出土している。両個体とも完形である。また、6の口唇部の一部にススの付着がみられ、灯明具として使用された可能性もある。これらの土師器の法量は口径9cm前後、器高1.5～1.9cmである。

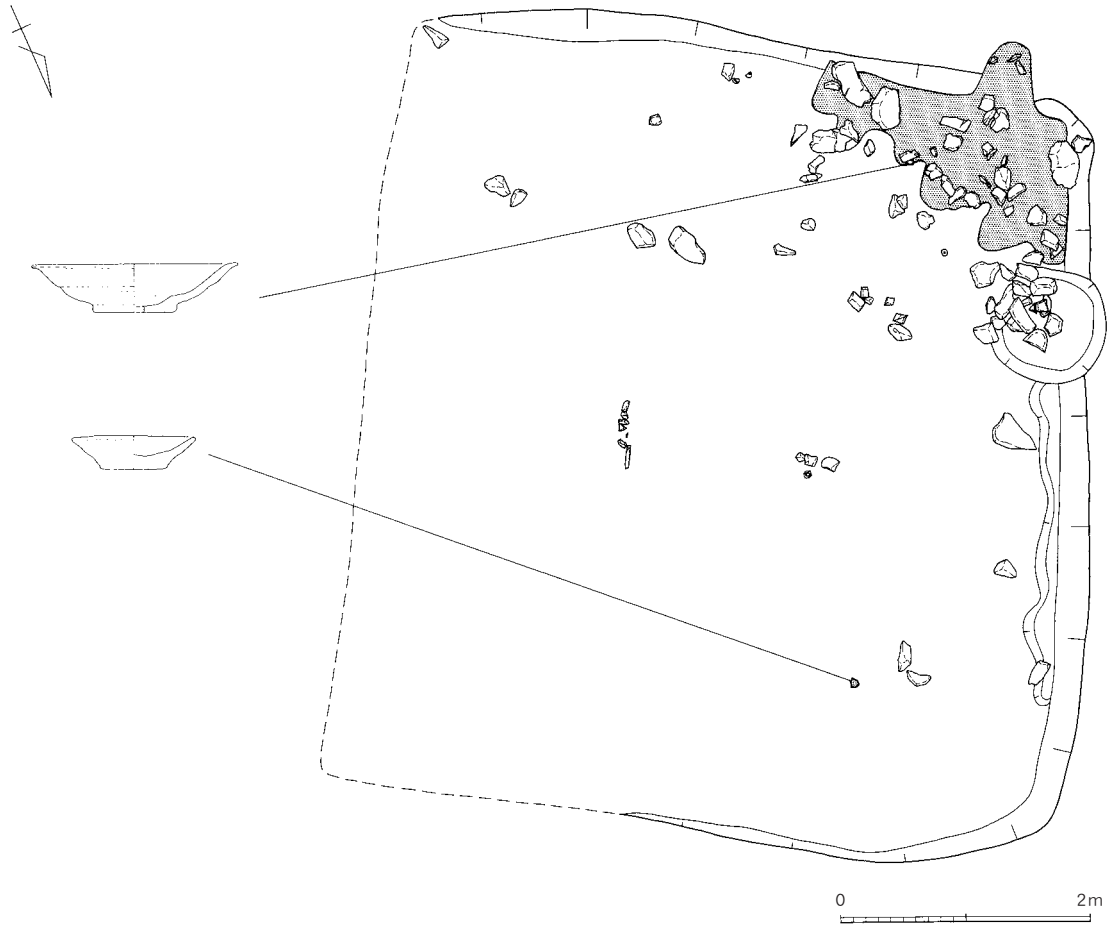
8は土師器坏である。口縁部が一部欠損している。法量は、口径9.8cm、器高2.6cmを測る。

9は土師器の底部である。高台のみが残存していた。

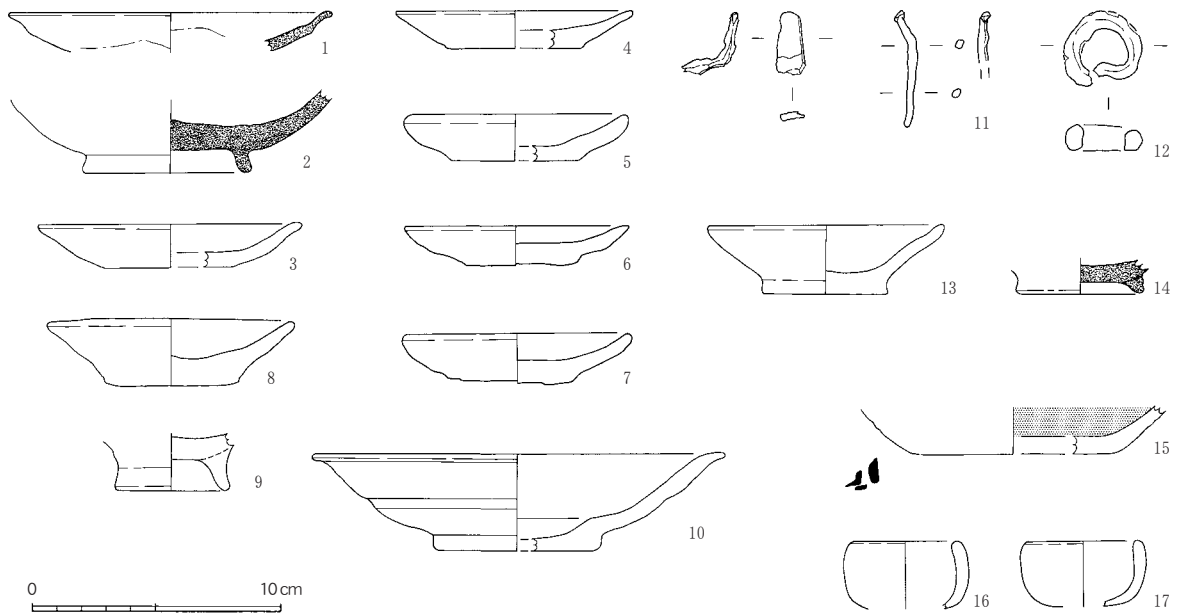
10はカマド付近出土の土師器皿である。1/4程度残存している。口径16.4cm、器高4cmと推定される。



第76図 第31号住居址遺構平面図 (1)

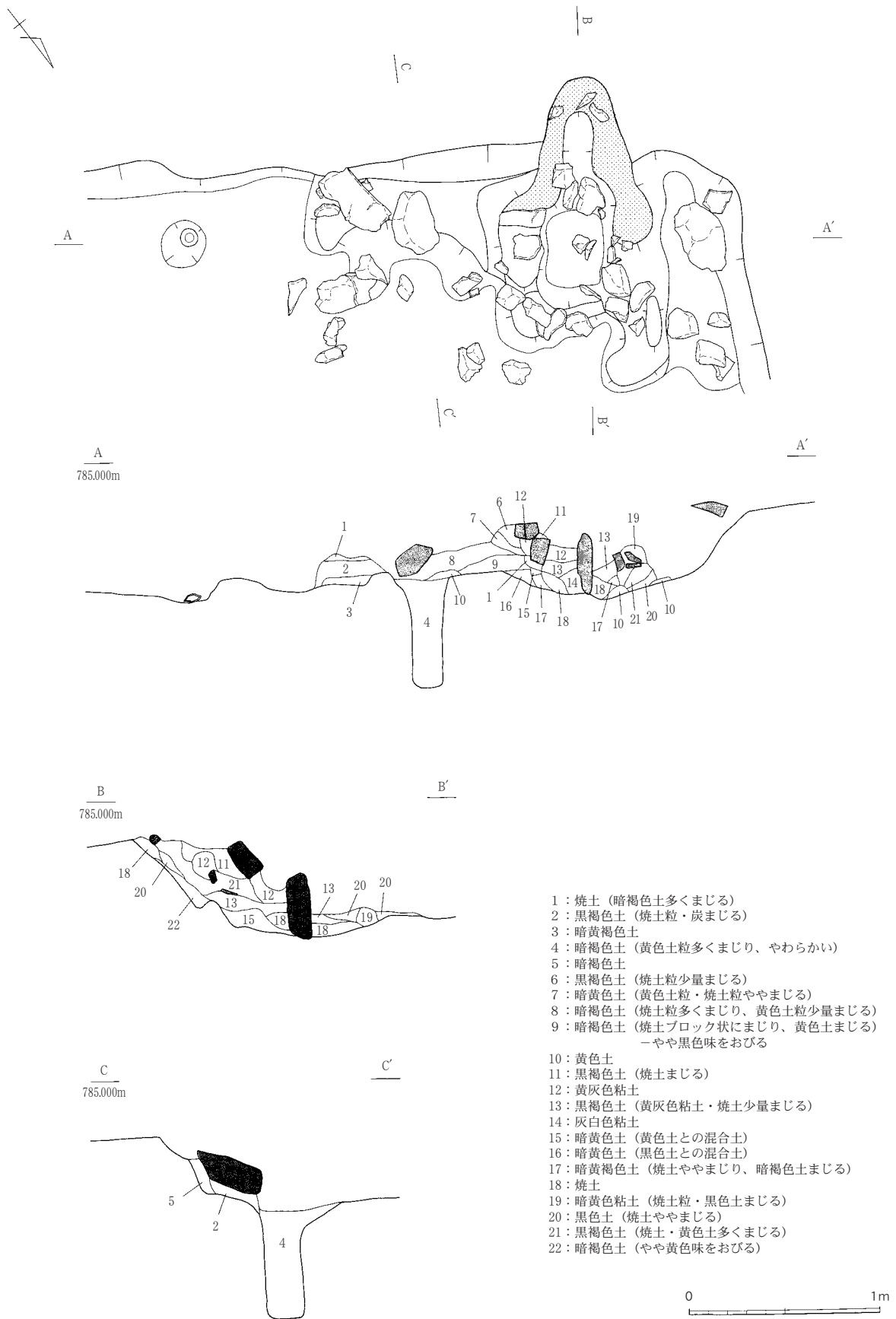


第77図 第31号住居址遺物出土状況図



第78図 第31号・32号・35号住居址出土遺物 (1~10: 31住、11~13: 32住、14~17: 35住)

1. 住居址



第79図 第31号住居址遺構平面図(2)

第IV章 遺構と遺物

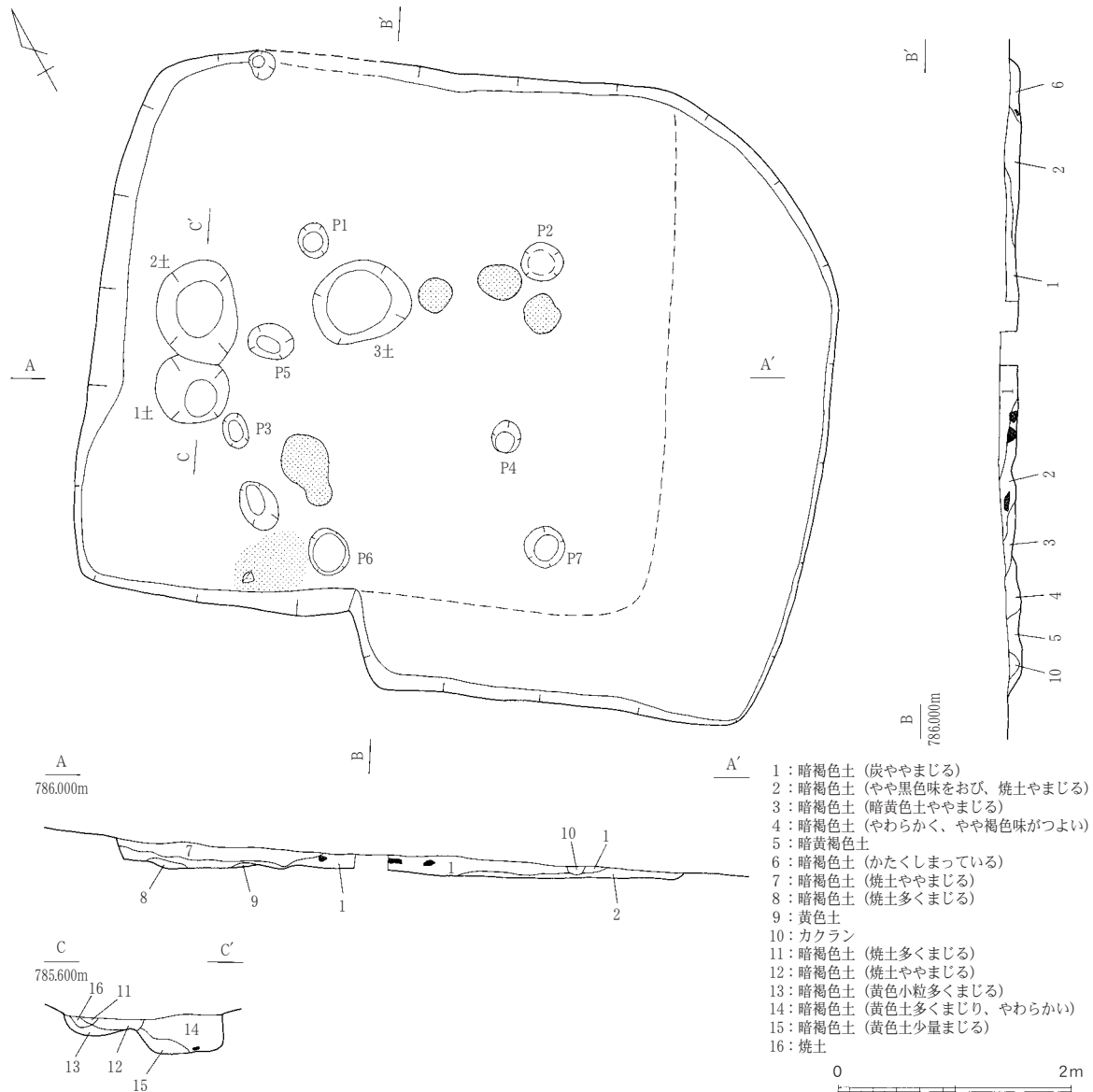
第32号住居址（第80図、第81図）

DE-81より出土している。当初、土層観察によって遺構外の一部から、焼土が混入した層位が観察され、2基の住居址の重複かと判断していたが、内部施設が検出されず、結果的に遺構から外している。その結果、南東部の壁を掘りこんでしまい、破壊してしまった。プランは47mの方形と推定され、残存壁高は、約15cmであった。覆土は暗褐色系の土で占められ、西側の上層では焼土が混入していた。床面に硬化面は検出できなかったが、ピットや土坑が被熱地点と共に多数検出されている。

主柱穴はP1～P4と考えられるが、住居址の軸と若干ズレが生じてしまうため、確定はできない。なお、P1とP2の上部には礫が3個程まとまって出土しており、意図的に入れられた可能性も考えられる。

また、第1・2号土坑の覆土には焼土が混入しており、この住居址に伴うと考えられるが、第3号土坑についてはこの住居址に伴うものか明確にはできなかった。

カマドは、その構造物を検出することができなかったが、南壁に接するように被熱箇所があり、付近からは多くの礫も出土していることから、ここに存在していた可能性が高い。



第80図 第32号住居址遺構平面図

遺物 (第78図)

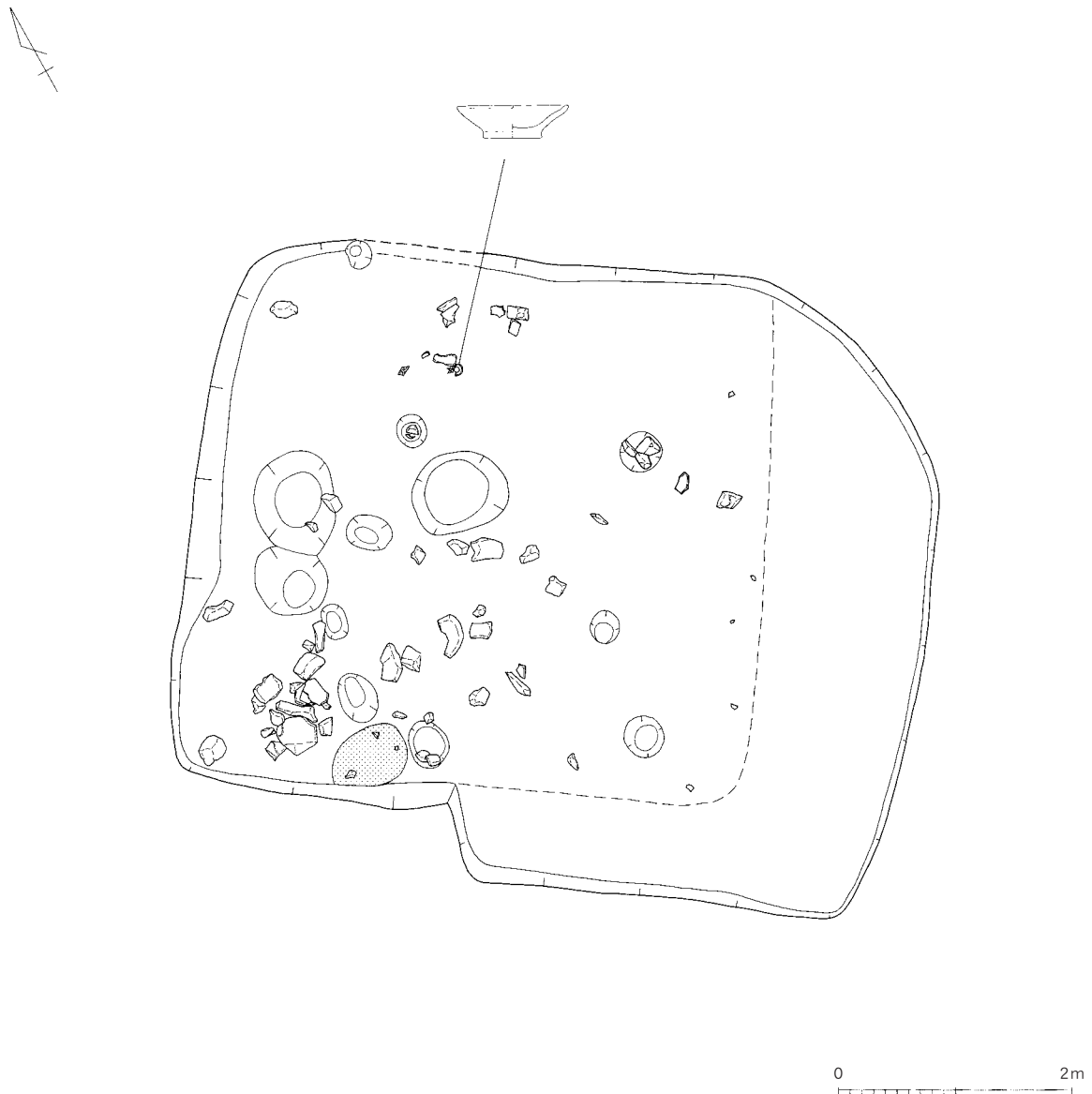
13は土師器坏である。北部床面からの出土である。口径は9.5cm、器高は2.8cmを測る完形品である。

11・12は鉄製品である。11は釘である。12は環状を呈している。いずれも覆土からの出土ではあるが、この住居址に伴うものかは疑問である。

この住居址は、土師器坏でみると15期と考えられる。

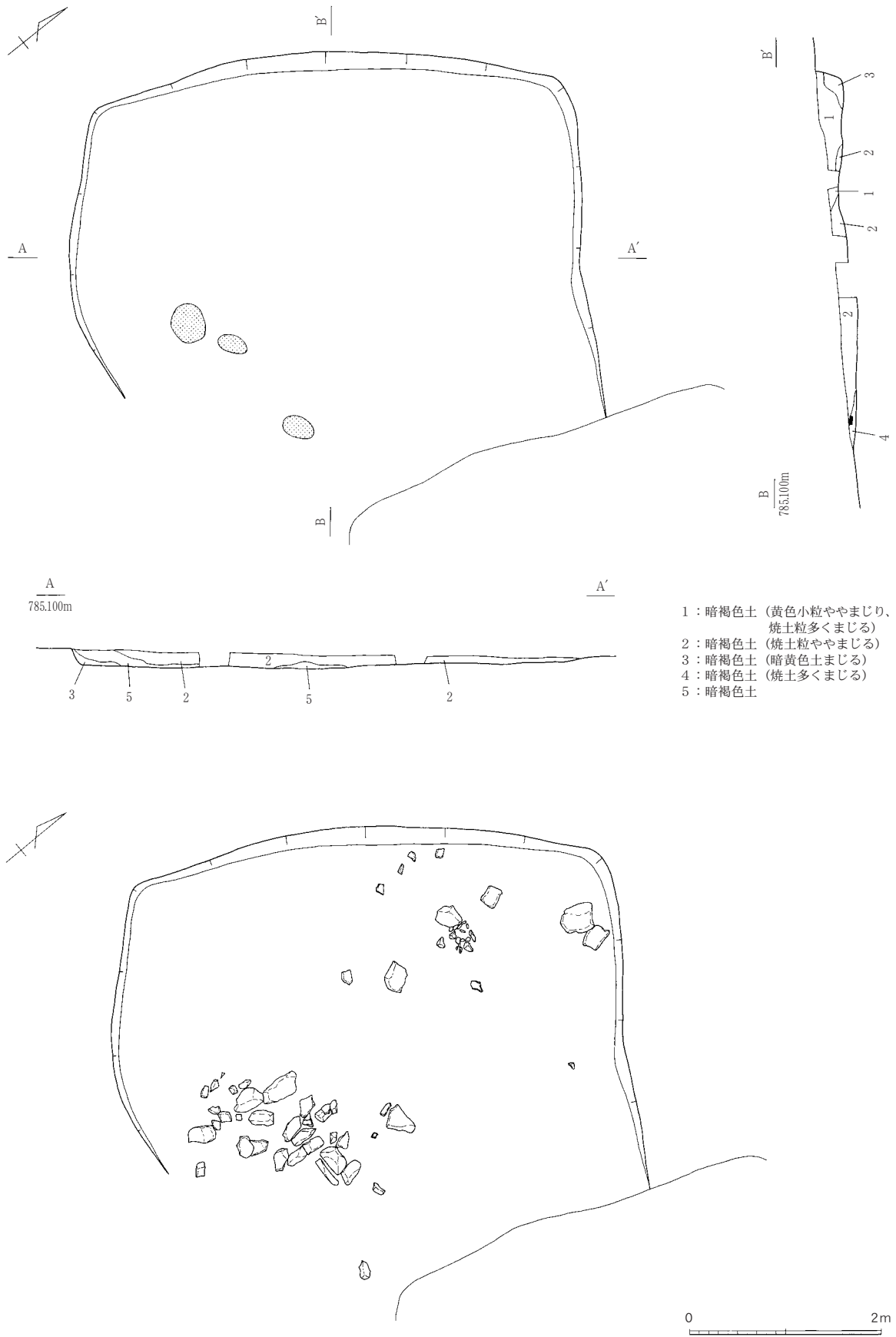
第34号住居址 (第82図)

DG-87より出土している。南東壁は削平されており、東部には第30号住居址が重複していた。プランは一辺5.2mの方形と推定され、現存する壁高は最深で約30cmであった。この住居址は調査中に多くの礫が出土しており、それらの除去後、床面を精査したところ3ヶ所から被熱箇所が検出された。しかし、灰釉陶器および土師器の破片が微量出土しているものの、カマド等の施設が確認できなかったため、住居址として取り扱っていないか疑問もある。



第81図 第32号住居址遺物出土状況図

第IV章 遺構と遺物



第82図 第34号住居址遺構平面図および遺物出土状況図

第35号住居址（第83図）

この住居址はDB-83を中心にして出土している。プランは約5×4.5mの若干長方形であり、現存する壁高は最深で約55cmであった。覆土は暗褐色系の土であり、全体的に焼土が混入し上層には炭化物が混入している状況が観察された。周溝はカマドの築かれた壁をのぞいた3方向に検出されている。

カマドは南東壁の若干隅によった位置で出土しているが、礫が周囲に散乱した状態で検出され、構造を把握することはできなかった。床面からは柱穴が2ヶ所検出され、これらの周囲が硬くしまっていた。また、調査中にはカマド周辺と北部付近を中心に礫が出土しているが、図化できるような遺物はほとんど出土していない。

さらに、南東部のカマド寄りの柱穴が検出されると推定できる位置に、直径1mほどの比較的浅い土坑も2ヶ所出土している。

なお、図化できた遺物以外にも、灰釉陶器および土師器の小片が少量出土している。

遺物（第78図）

14は灰釉陶器碗の底部である。高台の一部が欠損して出土している。

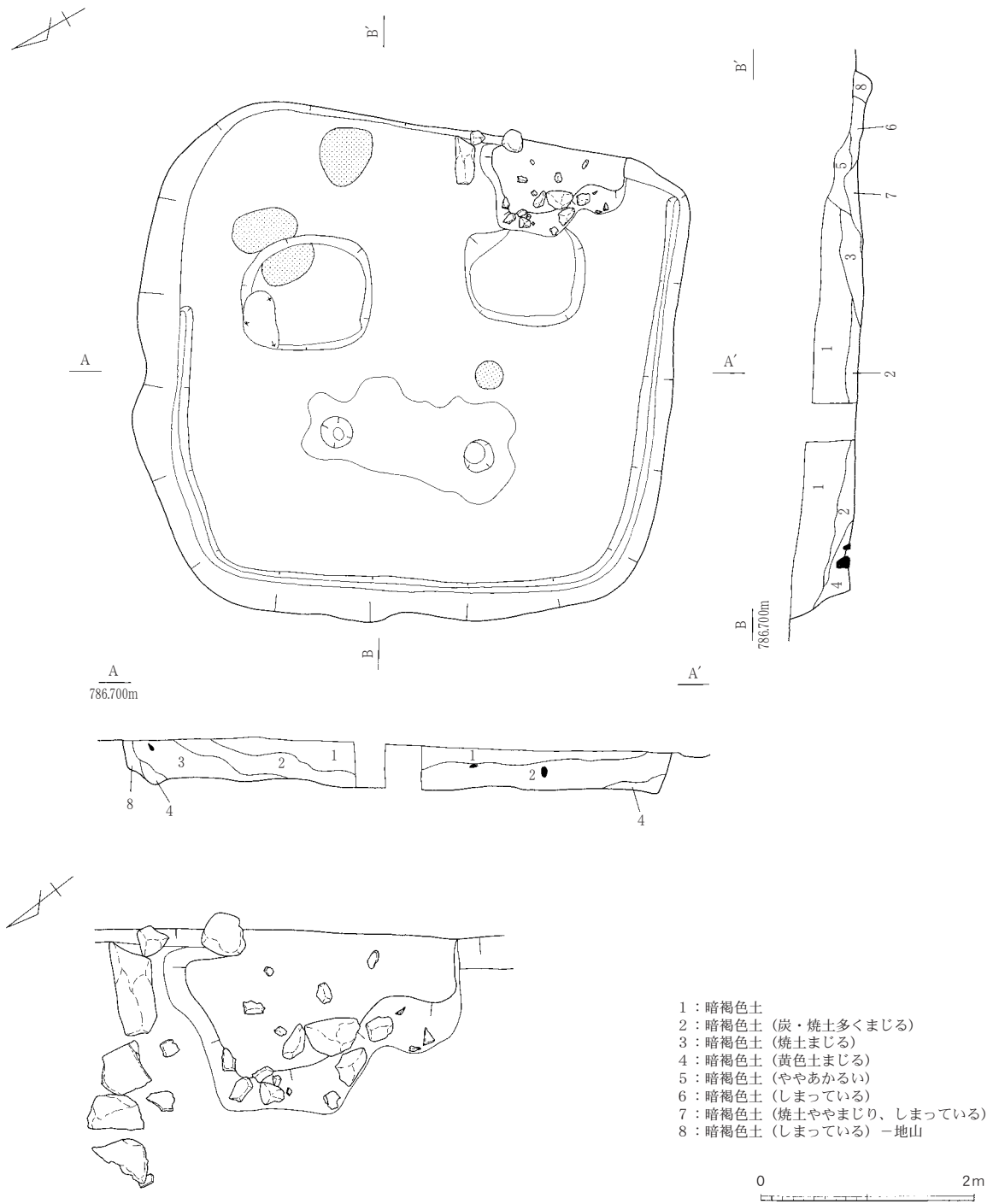
15は内黒土器杯の底部である。外面に墨書が確認できる。

16・17は土師器で、小型の椀状をしている。やや砂粒の多い淡褐色の胎土で、いずれも底部は欠損している。胎土、器形が似ているので、同一個体の可能性もあるが、いずれにしても正確な器形を把握できない。



0 2m

第83図 第35号住居址遺物出土状況図



第84図 第35号住居址遺構平面図 (カマド：S=1/30)

第37号住居址（第85図、第86図）

DY-66より出土している。この住居址の北部は第50号住居址、南部は第42号住居址と重複している。プランは約3.8×3.2mの若干長方形を呈している。残存する壁高は最深で約15cmであった。覆土は全体的に暗褐色系で炭化物が混入し、一部には焼土もみられた。

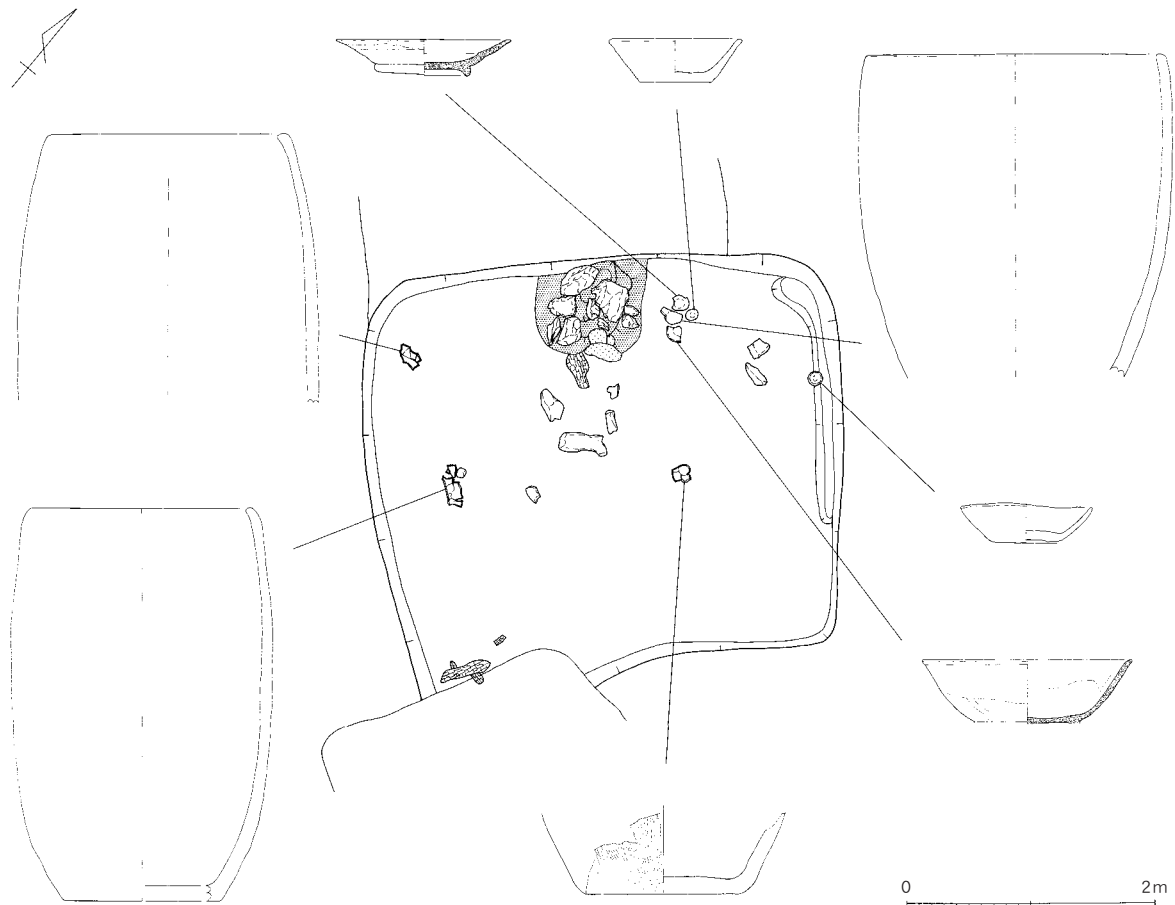
カマドは北壁中央部に出土した。比較的大きな石が見られ、それらの礫と灰色粘土を使って構築したと考えられる。燃焼部に立てられた支柱石も検出されている。このカマドは焚口付近を中心に焼土が出土しているのみで、燃焼部に被熱箇所も確認できなかった。

カマド脇には、約1mの土坑が出土し、覆土は黄色土であった。また、この土坑からは遺物等は出土していないが、カマドとの間から検出された直径50cmほどの浅い落ち込み付近からは土師器坏等が集中して出土した。また床面には散在するように長胴甕が出土しているほか、図化できない灰釉陶器の小片も少量出土している。

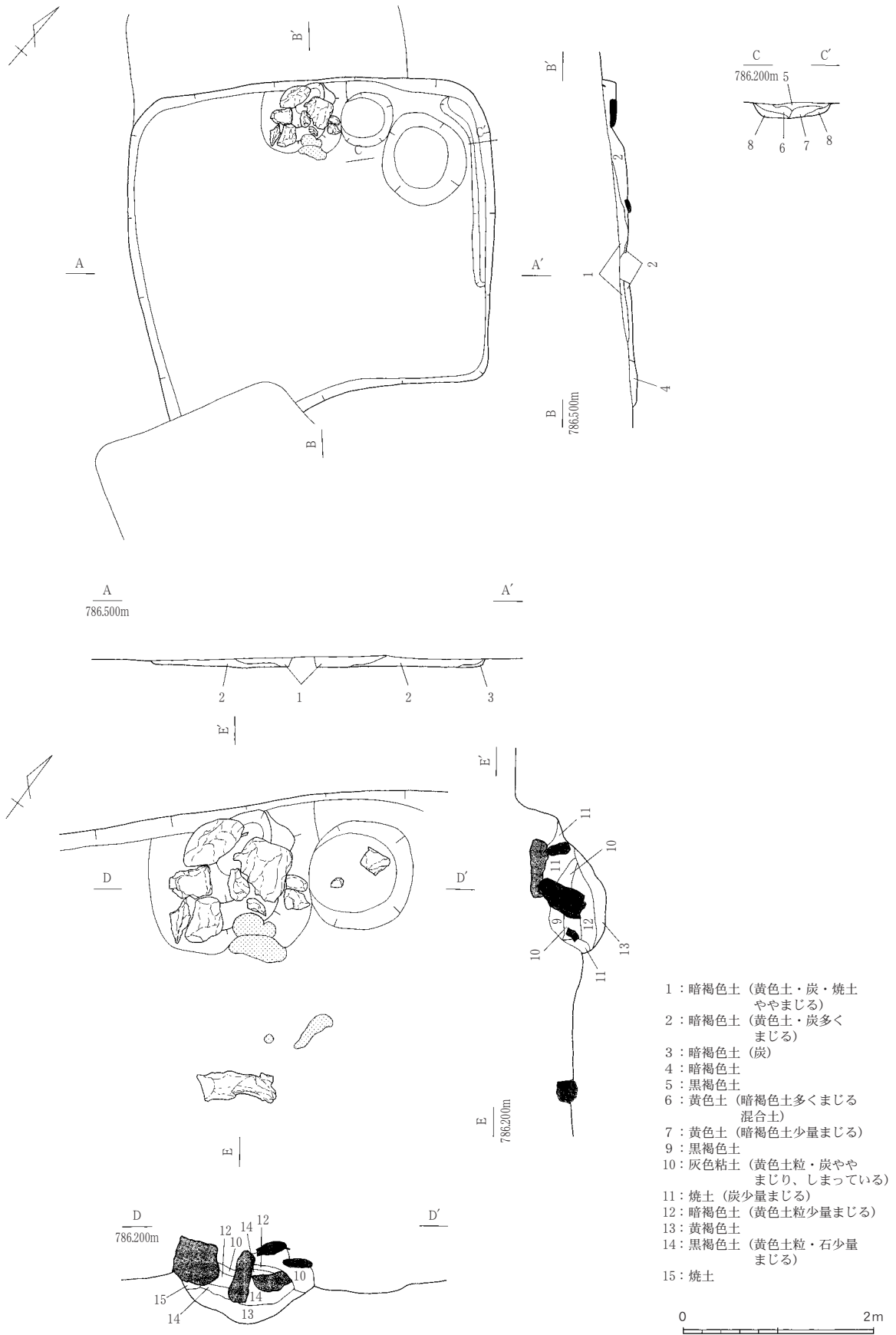
遺物（第87図）

1・2は灰釉陶器である。1は完形の段皿である。内・外面ともに薄い釉葉が口縁部上部に掛けられている。なお高台に3ヶ所の亀裂がみられ、焼成は良好であるが、作り自体は粗雑である。2は碗である。いわゆる深碗といわれるもので、完形で出土している。ツヤのない薄い釉葉が掛けられている。

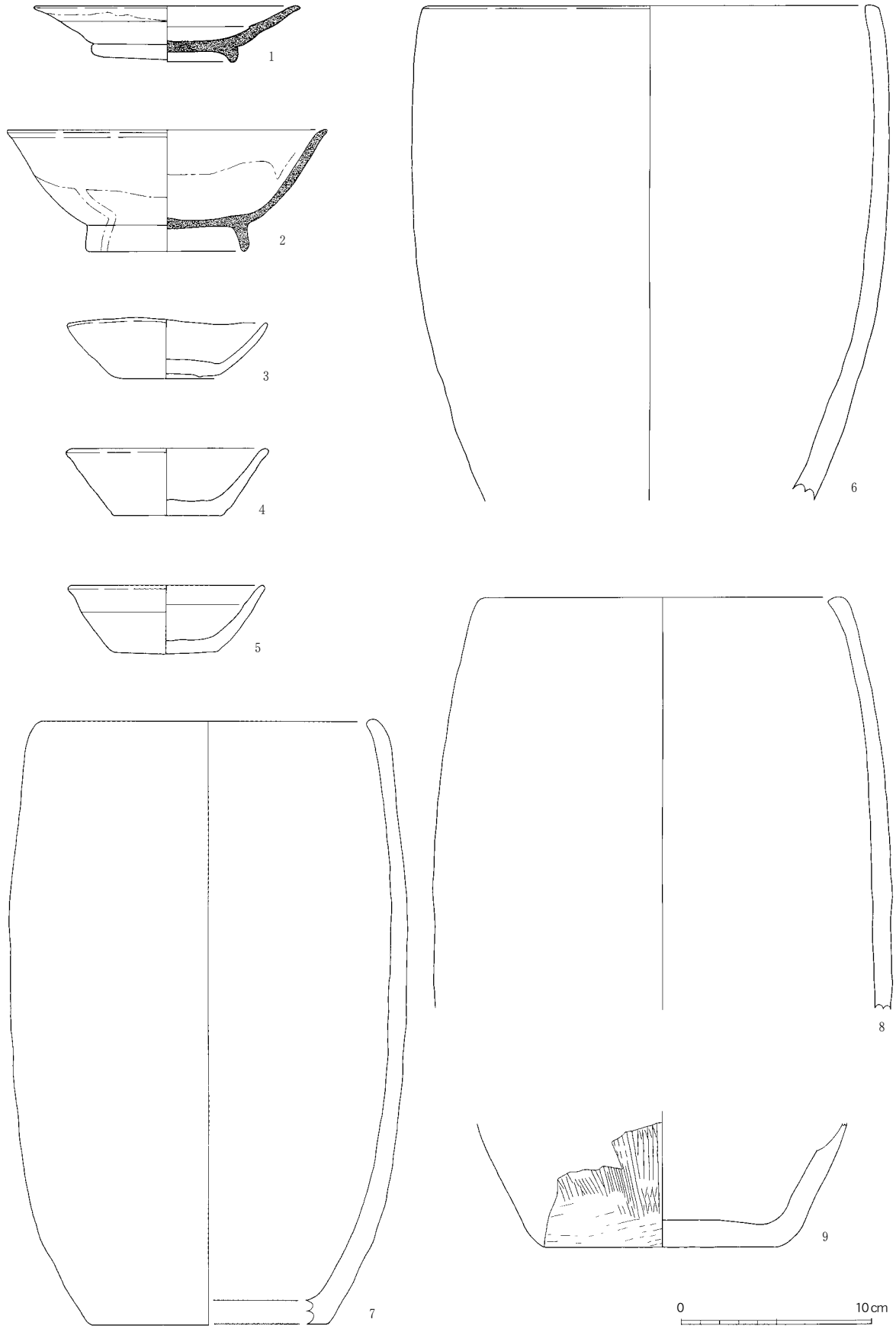
3～5は土師器坏であり、3・4はいずれも完形で出土している。3はやや歪みが目立つ。4は外面および見込み部の中心付近と、内面の体部下部に横位の線状にススが付着している。5は、約1/2個体の残存で、ナデ調整が確認できる。これらの坏の法量は、口径10.5～11cm、器高3～3.6cmである。



第85図 第37号住居址遺物出土状況図

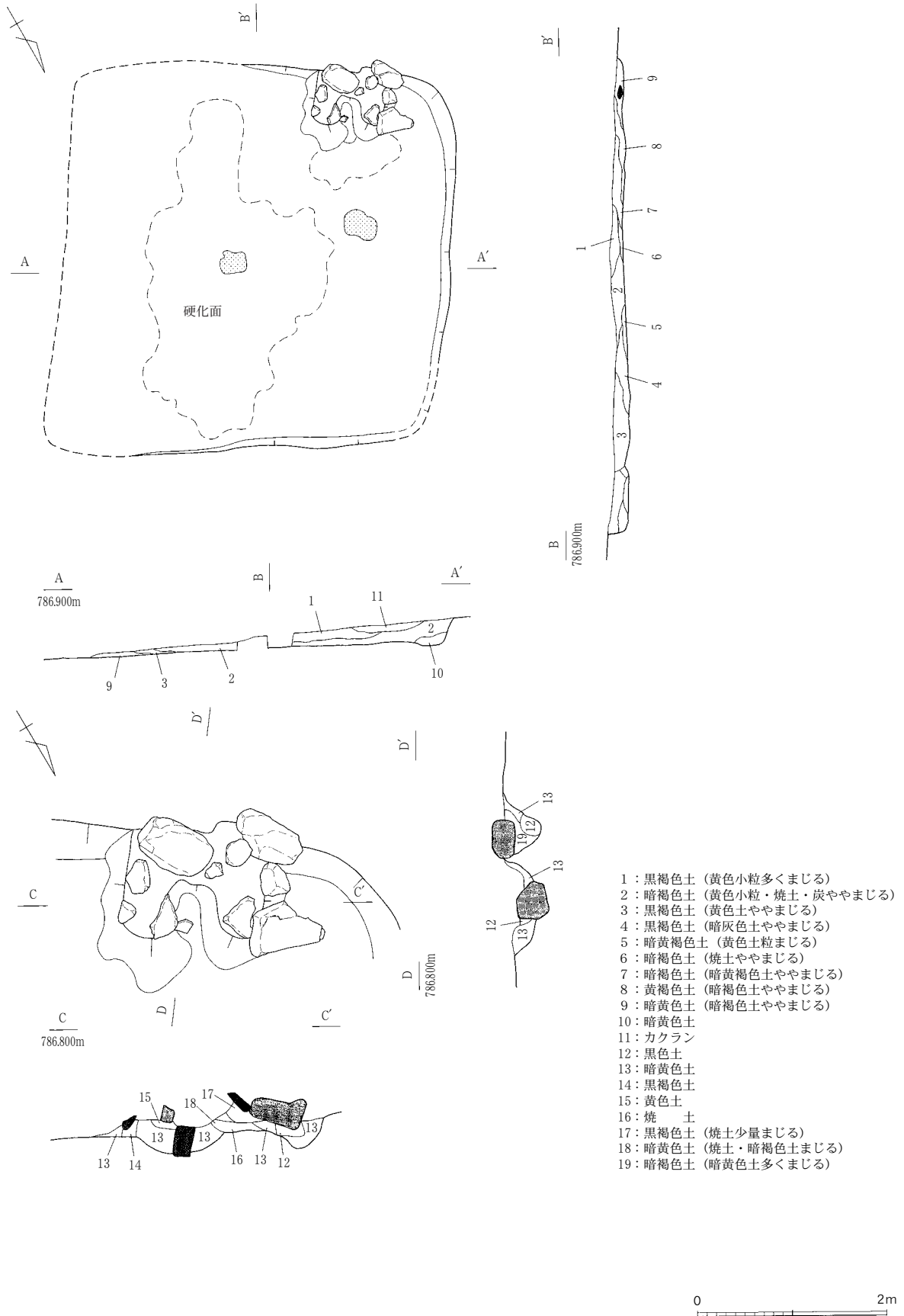


第86図 第37号住居址遺構平面図 (カマド：S=1/30)



第87図 第37号住居址出土遺物

第IV章 遺構と遺物



- 1：黒褐色土 (黄色小粒多くまじる)
- 2：暗褐色土 (黄色小粒・焼土・炭やまじる)
- 3：黒褐色土 (黄色土ややまじる)
- 4：黒褐色土 (暗灰色土ややまじる)
- 5：暗黄褐色土 (黄色土粒まじる)
- 6：暗褐色土 (焼土ややまじる)
- 7：暗褐色土 (暗黄褐色土ややまじる)
- 8：黄褐色土 (暗褐色土ややまじる)
- 9：暗黄色土 (暗褐色土ややまじる)
- 10：暗黄色土
- 11：カクラン
- 12：黒色土
- 13：暗黄色土
- 14：黒褐色土
- 15：黄色土
- 16：焼土
- 17：黒褐色土 (焼土少量まじる)
- 18：暗黄色土 (焼土・暗褐色土まじる)
- 19：暗褐色土 (暗黄色土多くまじる)

第88図 第39号住居址遺構平面図 (カマド：S=1/30)

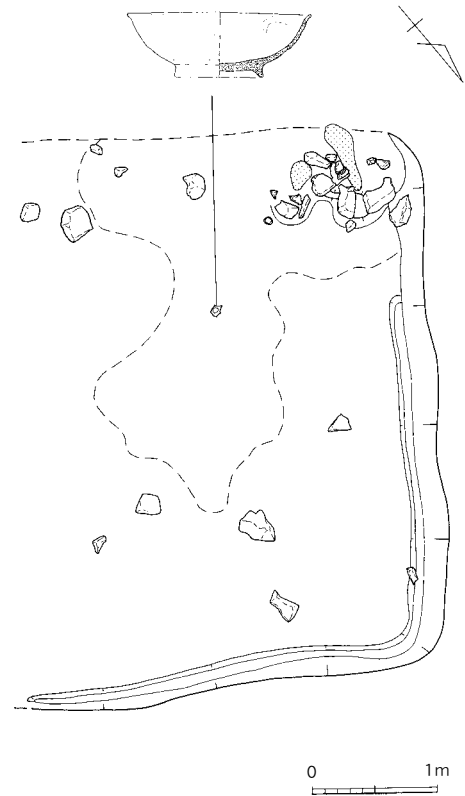
6～9は長胴甕である。6～8は口唇部が内湾する器形である。内・外面共にナデ調整が行われ、その他の調整痕等は確認されない。なお、7は外面に薄くススの付着がみられ、8の外面にも一面にススが付着している。9は底部である。縦位のハケ目調整が見られ、底部付近にはヘラ状工具によるナデ調整痕が確認できる。また、底部にはススが付着している。

第39号住居址（第88図）

EB-60付近より出土している。一辺4mの方形プランと考えられるが、東部壁が耕作によって削平されており、明確にすることができない。壁高は最深部で約20cmであった。

カマドは西隅に築造され、その周辺と、床中央部に硬化面が検出されている。しかし、柱穴は検出できなかった。また被熱箇所が、床中央部と西壁に寄った地点から検出されている。カマド自身は破壊されていたが、その構成材は大ぶりの礫と暗黄色系の土であり、燃烧部には焼土も確認された。

なお、この住居址からは調査中に床付近から礫は出土したが、遺物は出土していない。

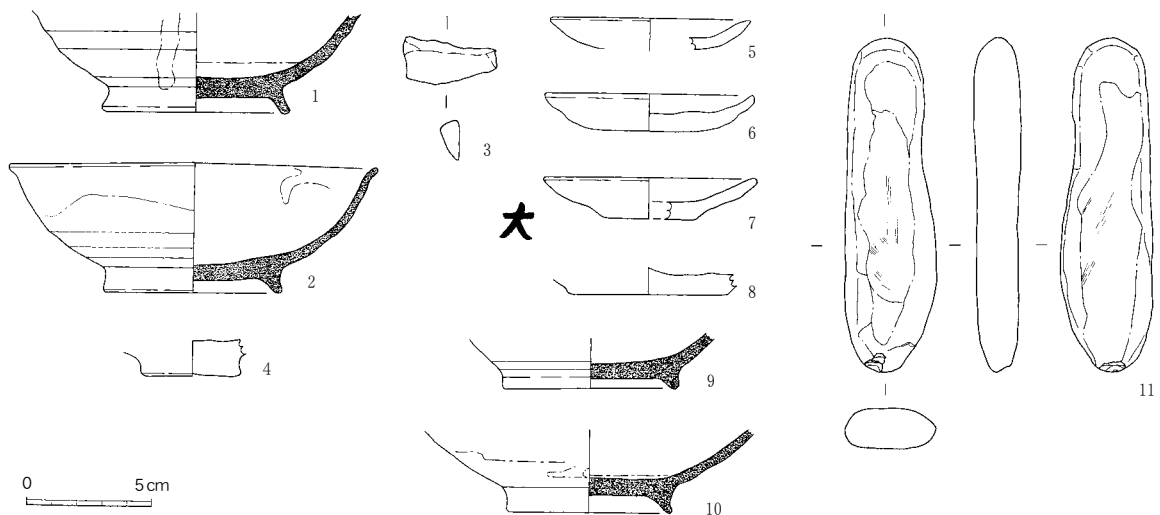


第89図 第44号住居址遺物出土状況図

第44号住居址（第89図、第91図）

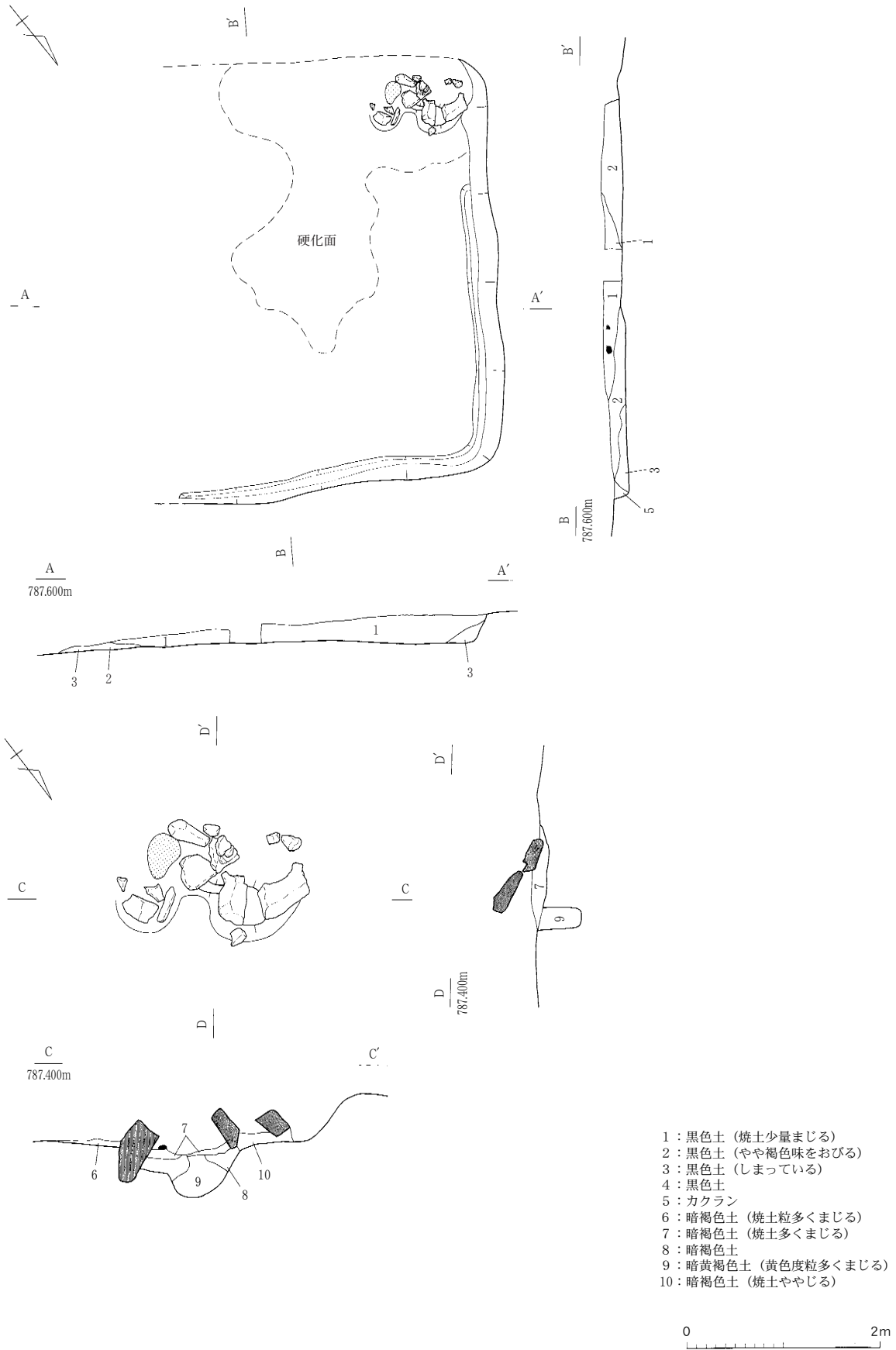
EE-54付近より出土している。南西壁および南東壁が耕作によるカクランによって破壊されているため、プランは把握できなかった。覆土は全体に黒色系の土で占められていた。また、周溝が北東壁と北西壁際から検出されている。

カマドは西隅に築造されていたが、遺存状態が悪く詳細は不明であるが、礫下部の床面と同じレベル付近に焼土が出土している。なお、この住居址の床面の中心部からカマド付近までに硬化面が検出されている。



第90図 第44号・47号・48号住居址出土遺物（1～3：44住、4：48住、5～11：47住）

第IV章 遺構と遺物



第91図 第44号住居址遺構平面図 (カマド：S=1/30)

遺物 (第90図)

1・2共に灰釉陶器碗である。1は口縁部を欠損している。釉薬はほとんど確認できないほど薄く、山茶碗に近似している。2は完形である。内・外面ともに薄いがツヤのある釉薬が掛けられている。また内面全体に痕跡程度の釉薬もまばらに掛けられている。

3は鉄製品である。

第47号住居址 (第92図、第93図)

EM-65から出土した。この住居址も南西壁および南東壁が耕作によるカクランによって破壊されているため、プランは把握できなかった。現存する遺構のプランは、一辺約5.8mで、壁高は約25cmであった。

覆土は黒褐色系の土が中心で、中層には焼土が若干混入していた。

カマドは西壁隅に構築されており、上部は崩れていたものの、袖石の残存状況は良好であり、石組みカマドの外側を、暗黄褐色土で固定している様子が伺えた。また、燃烧部の底部には焼土が厚く堆積しており、カマド右袖部分にまで広がっていた。なお、このカマドの左袖石については、表土除去中に重機によって引き上げてしまい、十分な記録をとることができなかった。

カマドの東脇には直径70cmほどの土坑が掘られており、覆土中からは焼土粒や炭の混入した暗褐色土系の土が堆積していた。

周溝は北西壁際から検出されているのみであり、硬化面についてはカマド付近からこの周溝の掘られている付近に検出されている。

なお、図化できた遺物以外にも、灰釉陶器および土師器の小片が若干出土している。

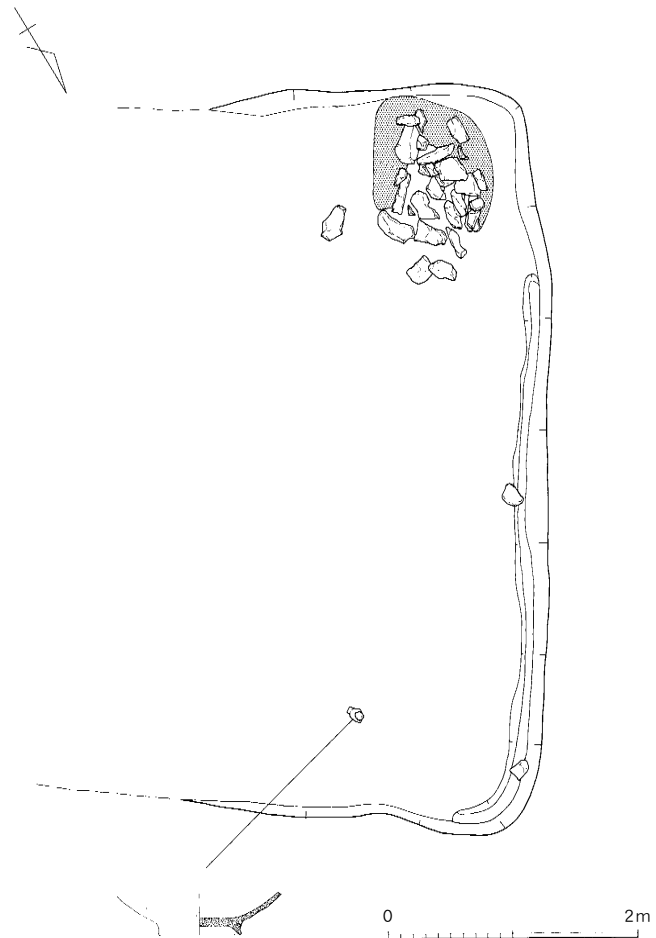
遺物 (第90図)

5～8は土師器坏である。5は小片からの復原である。6は口縁部が1/2ほど欠損している。口径8.2cm、器高1.5cmを測る。7は1/4個体ほどの残存である。外面には墨書がみられる。なお、この坏はカマド内からの出土である。8は底部のみ残存している。

9・10は灰釉陶器碗の破片である。9は底部のみの残存である。緻密な胎土である。10は外面には薄いがツヤのある釉薬が、内面にはツヤのある釉薬が厚めに掛かっている。なお、高台には4ヶ所の亀裂がはいっている。

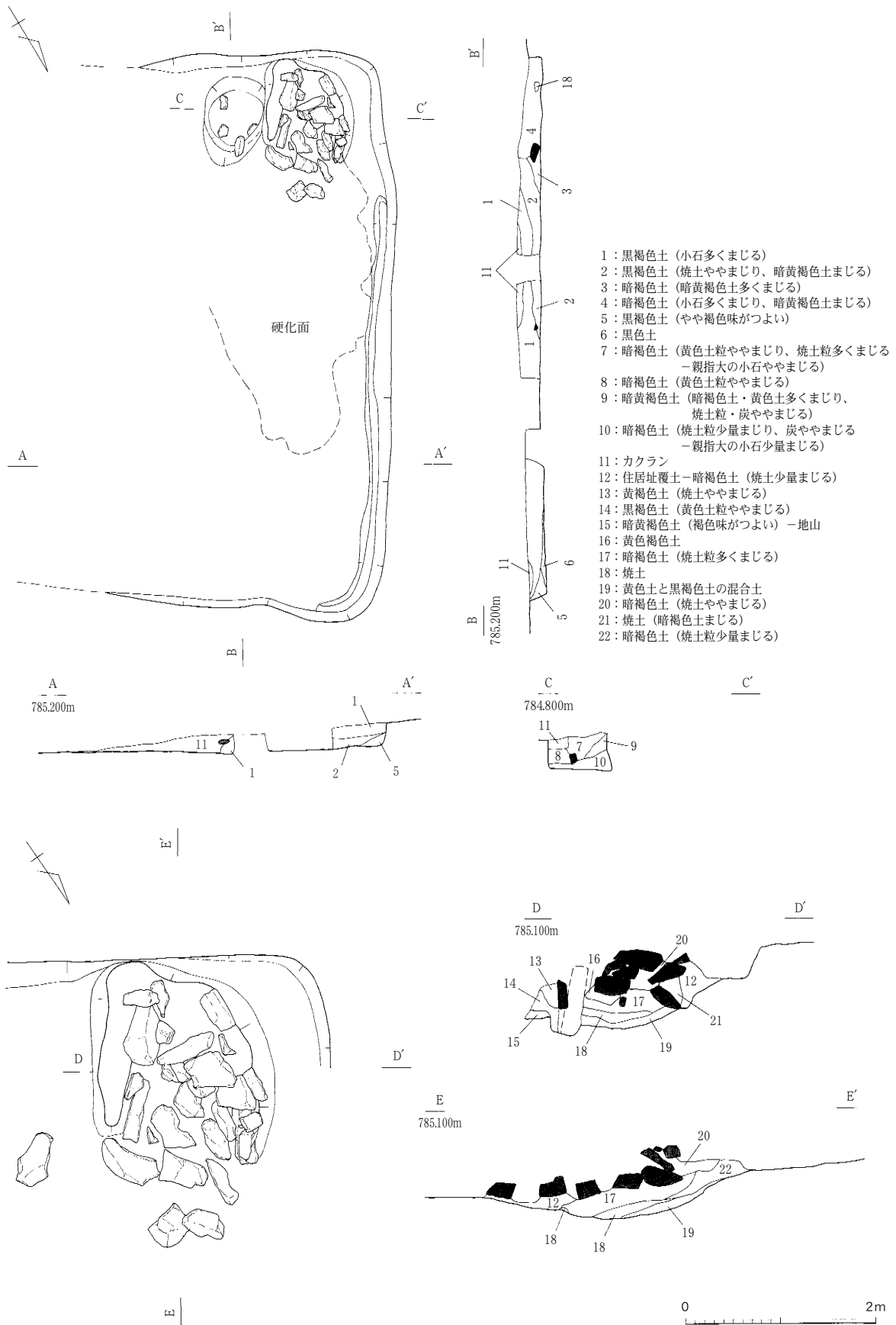
11はこの住居址から出土した石器である。扁平な石の表面および、背面になめらかなスリ痕が確認され、図下部には打撃によると考える剥離痕が残されている。砥石の可能性はある。

この住居址は、出土した土師器から15期と考えられる。



第92図 第47号住居址遺物出土状況図

第IV章 遺構と遺物



第93図 第47号住居址遺構平面図 (カマド：S=1/30)

第48号住居址（第94図、第95図）

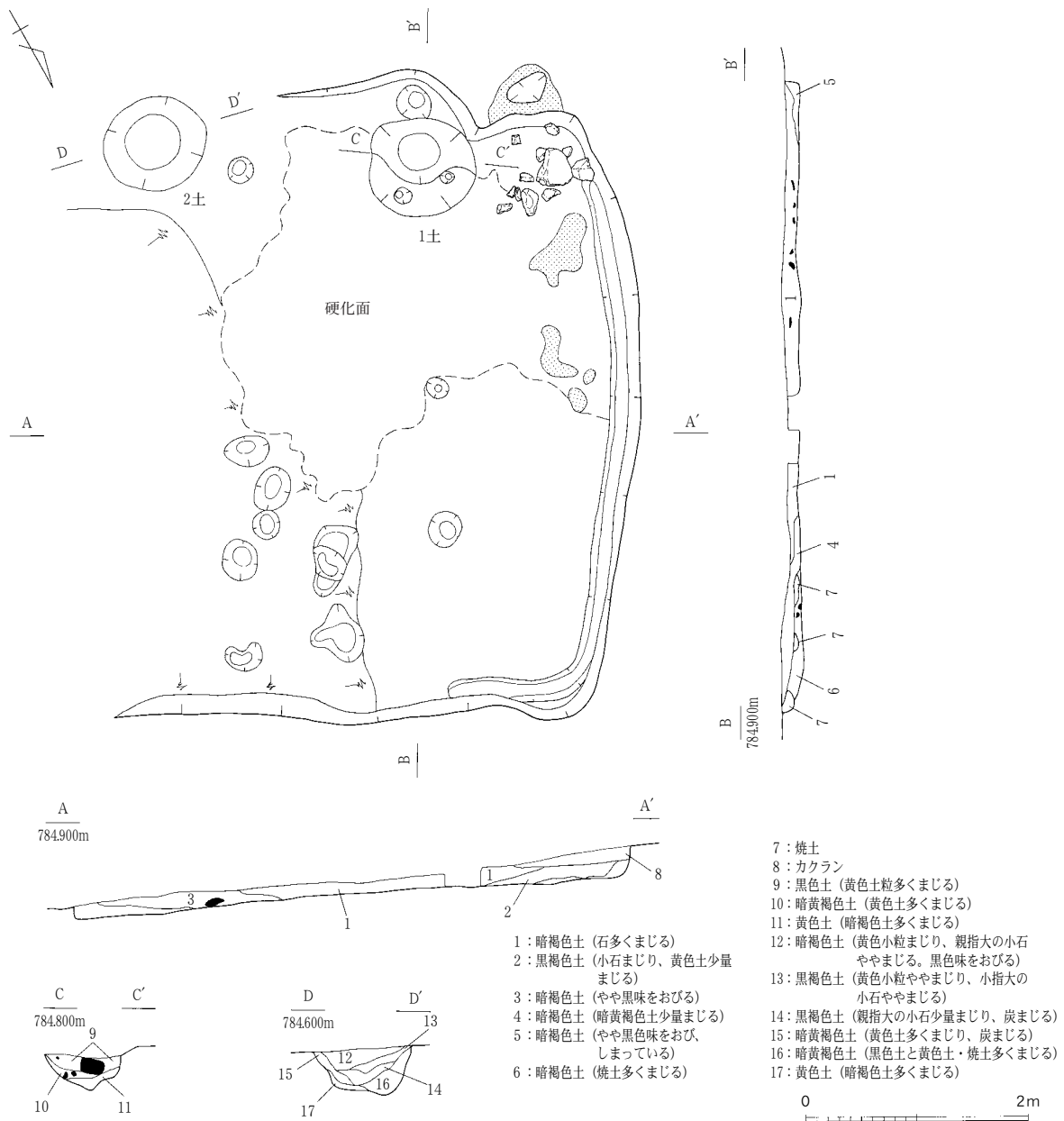
この住居址はE P -64から出土している。この住居址も東部が耕作によるカクランにより破壊されており、全体を把握することができなかった。プランは一辺5.5mほどの方形と推定される。覆土は暗褐色系の土が中心であり、下層からは礫が出土し、中層からは焼土や、炭化物が出土していた。

カマドの残存状況は悪く、西隅に礫や焼土が検出されたことから、ここに築かれていたと考えられる。また、周溝は西壁にみられ、硬化面はカマド周辺に検出された。

なお、この住居址の床面からは土坑が2ヶ所出土しており、どちらも黄色土が混入した覆土で覆われ、1号土坑では大きな礫が出土し、2号土坑からは小石や炭化物が出土している。また、カクラン箇所も含めてピットが多数出土しているが、この住居址にともなうか明確にできないため、柱穴を確認することができなかった。

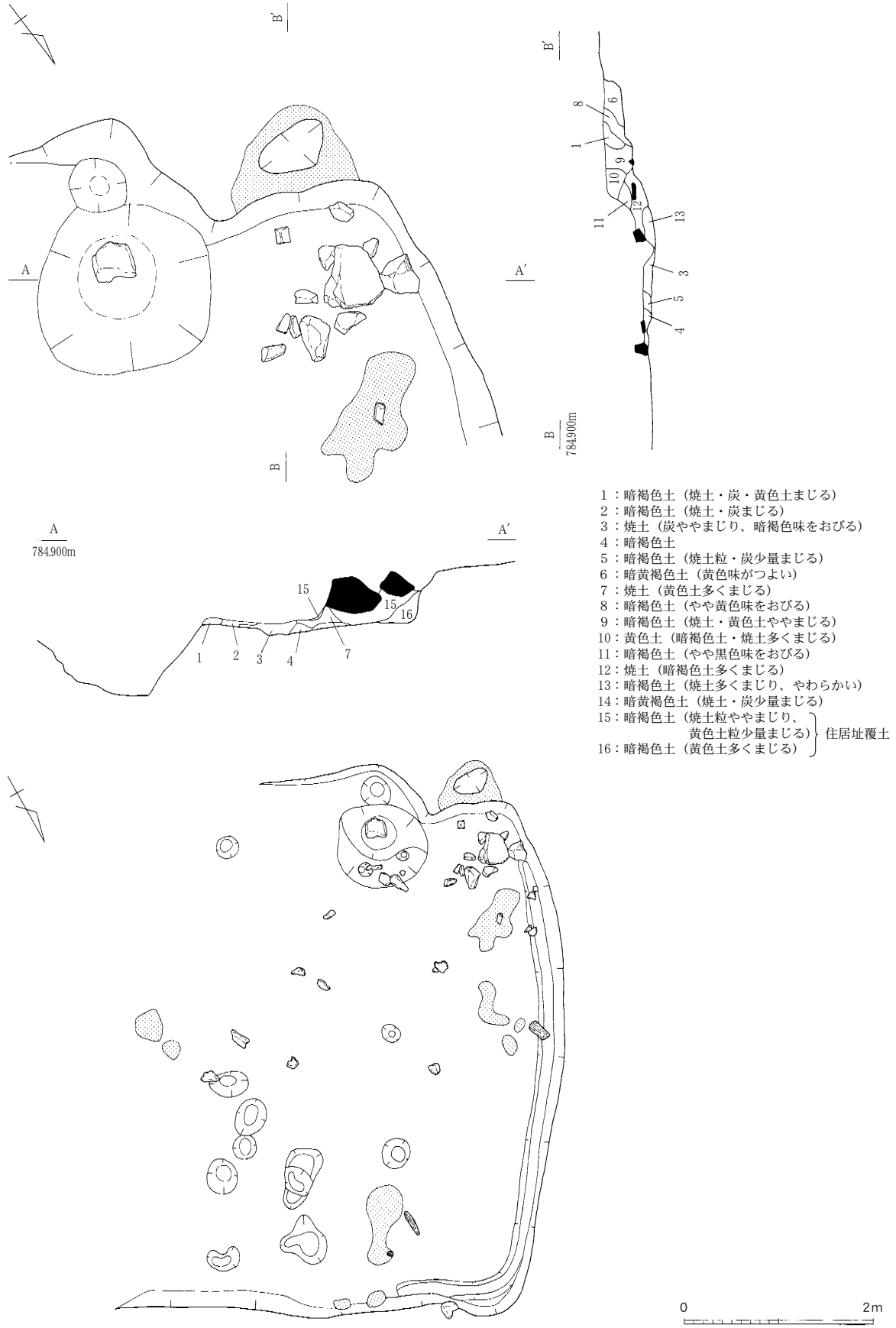
遺 物（第90図4）

この遺物が唯一出土した土器である。土師器坏と考えられる底部で、底部のみが完全に残存していた。



第94図 第48号住居址遺構平面図

第IV章 遺構と遺物



第95図 第48号住居址カマドおよび遺物出土状況図 (カマド：S=1/30)

第49号住居址（第97図）

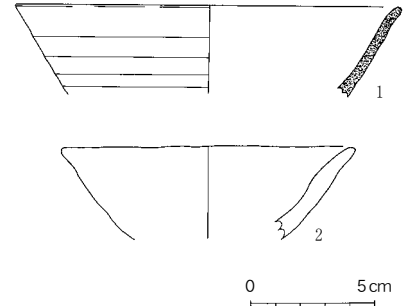
DD-67より出土している。一辺が約3.7mの方形の住居址と推定されるが、東半部が耕作によって破壊されてしまっており、明確ではない。遺存している部分での深さは、最深部で約25cmであった。覆土は暗褐色系の土であり、上層ではその中に黄色小粒が混入していた。また、カマドは検出できず、ピットが2ヶ所から出土したのみであった。このため、遺構からこの住居址の時代を決定するには無理があり、出土した遺物から、平安時代としている。

なお、東部のカクランの境界付近からは被熱部分が検出されている。

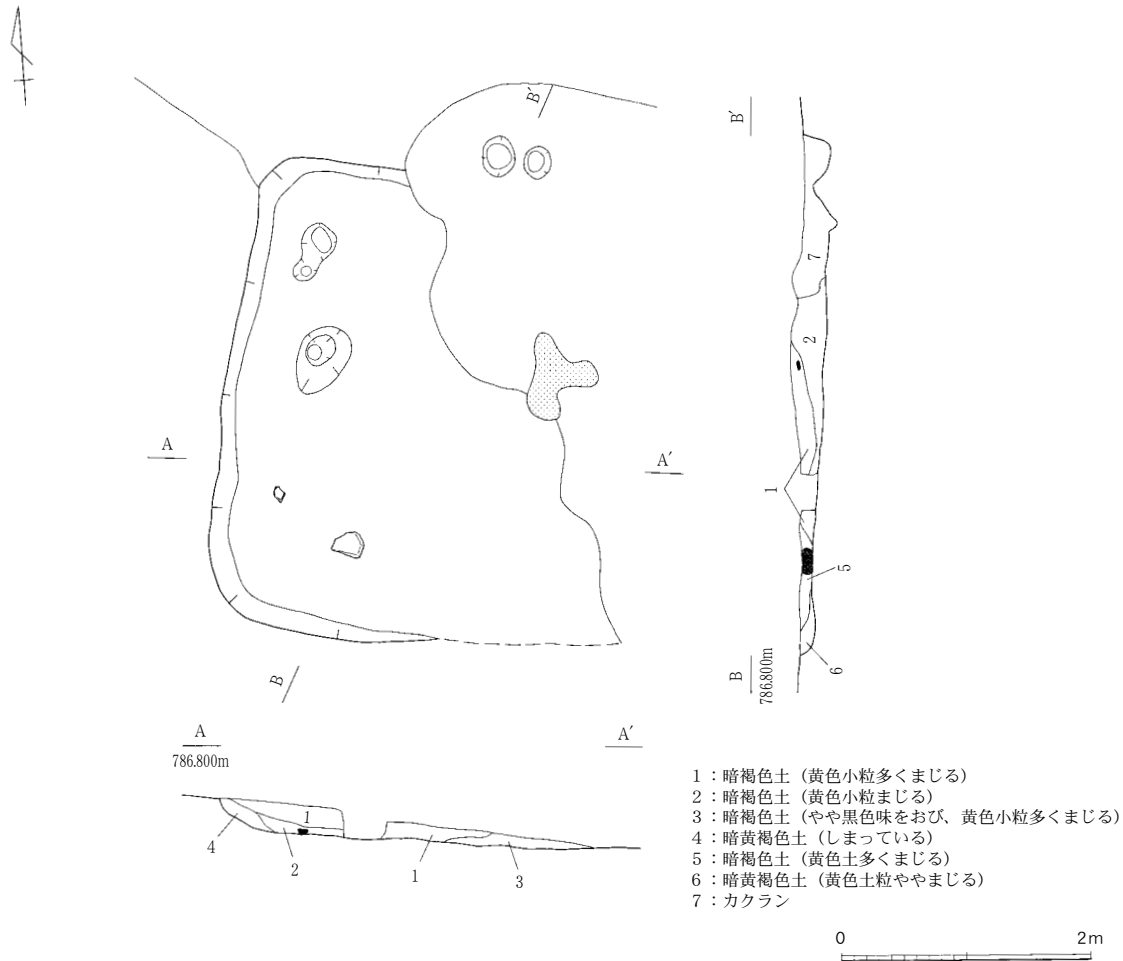
遺物（第96図）

1は灰釉陶器の碗で、下半部が欠損している小片である。内・外面共に薄く釉薬が掛けられている。胎土は緻密であった。

2は素焼きの陶器である。胎土に砂粒が多く混入され、内面には溶融した物質が一面に付着している。この物質は一部に赤色を帯びており、銅を铸造する際に使用した坩堝の可能性が高い。



第96図 第49号住居址出土遺物



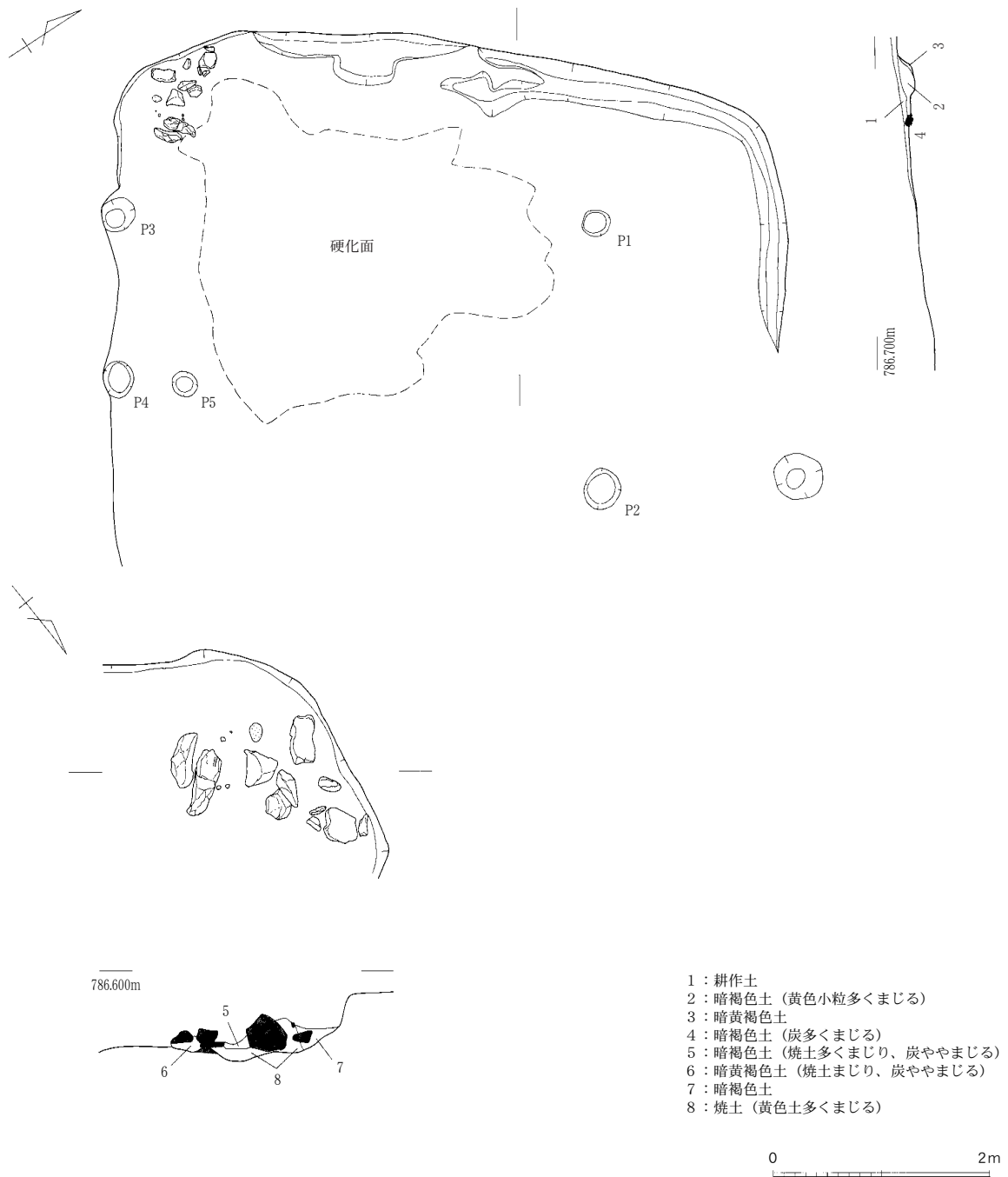
第97図 第49号住居址遺構平面図

第IV章 遺構と遺物

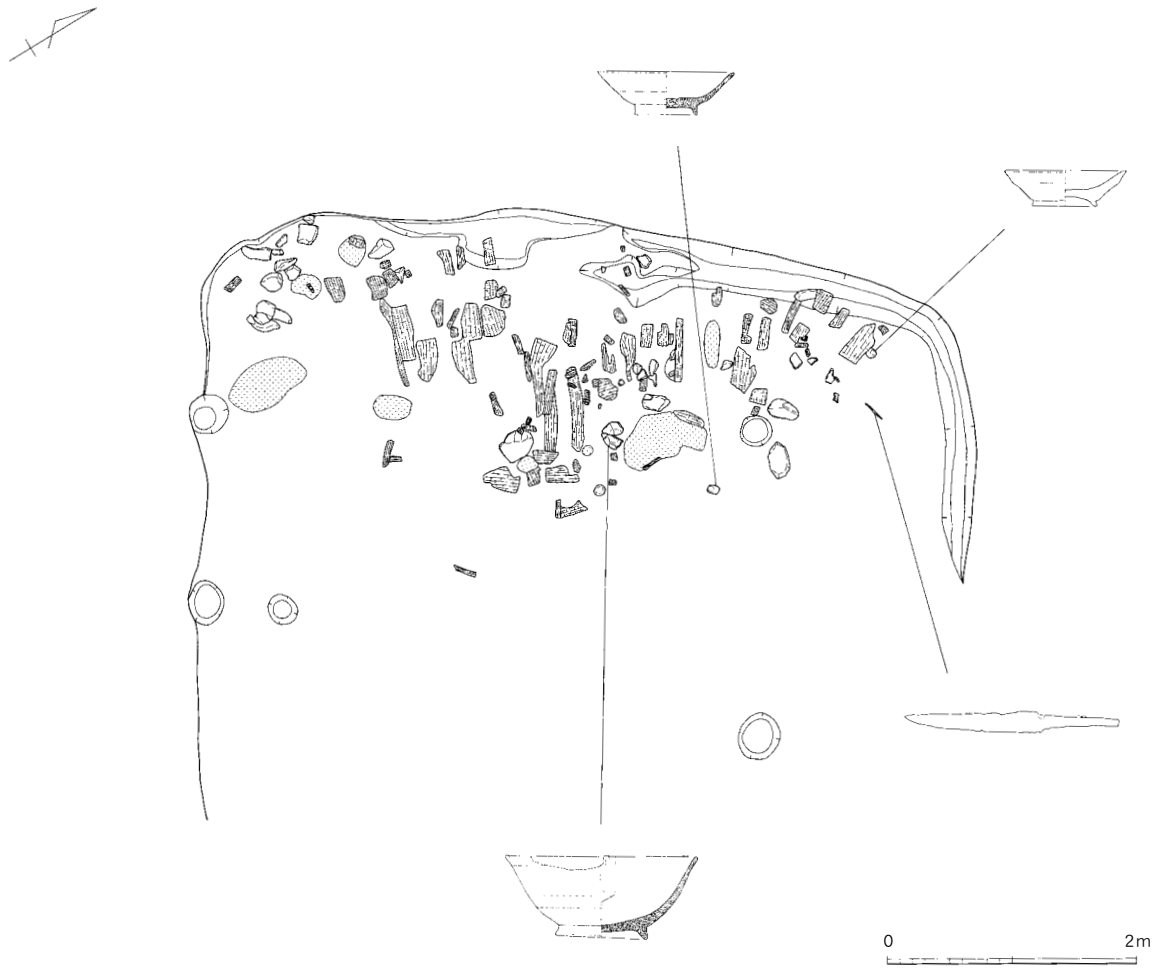
第59号住居址（第98図、第99図）

EU-53より出土している。この住居址も、東部が耕作によるカクランによって破壊されている。残存している部分で、長さ約6 m、深さは約10cmであった。周溝は北西壁と南東壁際から検出されているが、北西部の周溝は乱れた状態で検出されている。床面からはピットが5ヶ所出土し、このうちP1、P2は柱穴と考えられる。また、P3、P4は壁際からの出土であり、出入り口に関する施設の存在が推定される。また、硬化面が北西隅から、中央部にかけて検出されている。

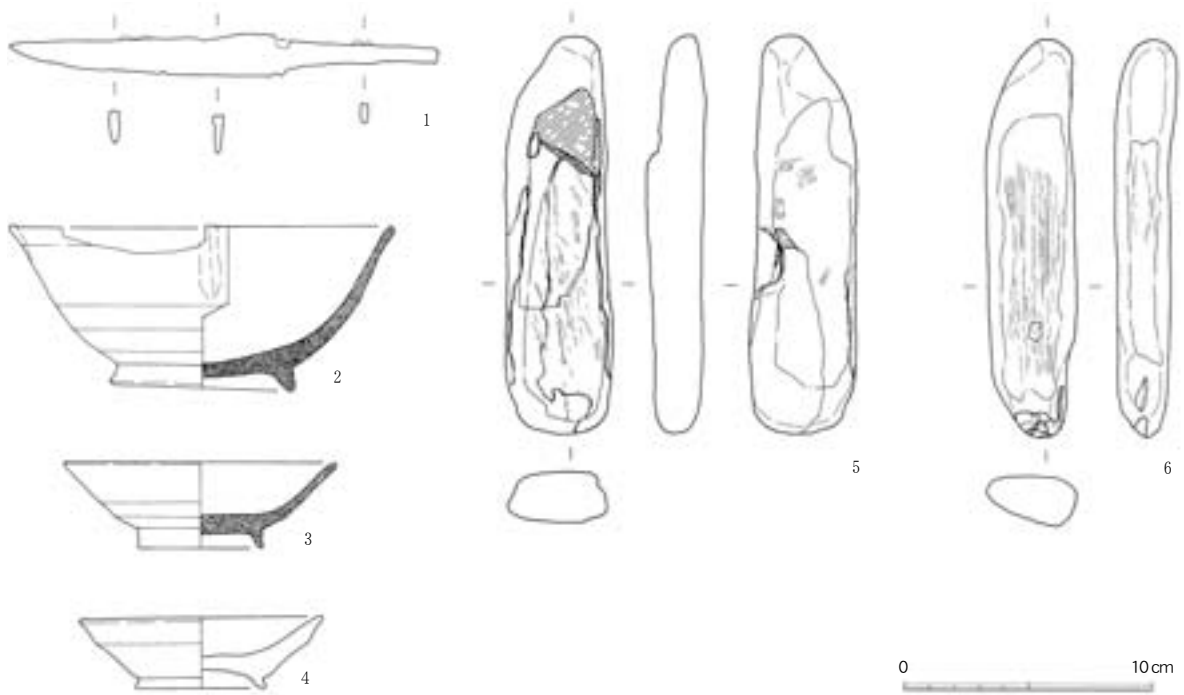
カマドは北西隅に出土したが、遺存度が悪く、礫が集中して出土していたことに加えて、床面に被熱箇所が検出されたことからカマドと判断した。



第98図 第59号住居址遺構平面図 (カマド：S=1/30)



第99図 第59号住居址遺物出土状況図



第100図 第59号住居址出土遺物

第IV章 遺構と遺物

なお、この住居址の床面直上からは板状の炭化材や焼土が検出されていることから、火災住居と考えられる。

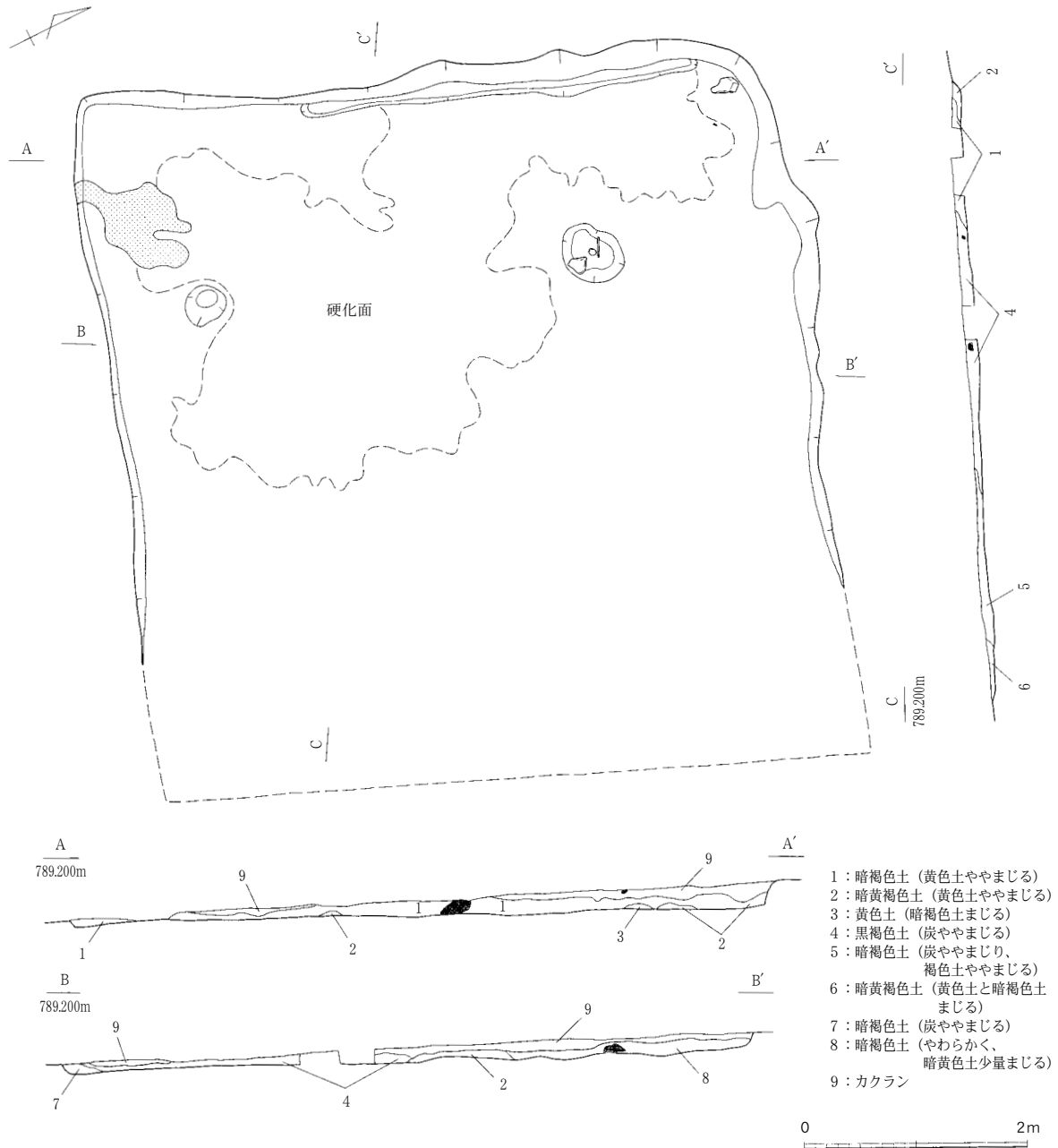
遺物 (第100図)

2・3は灰釉陶器碗である。2はいわゆる深碗で口縁部の一部が欠損している。口縁部を輪花としているが焼成はあまりよくなく、所々にススの付着がみられる。また釉葉は確認できない。3は小型の碗で、体部の一部が残存しているのみである。内・外面に薄い釉葉が掛けられて、外面の高台下部以外は全面にススが付着していた。

4は土師器碗である。口縁部が3/4ほど欠損している。

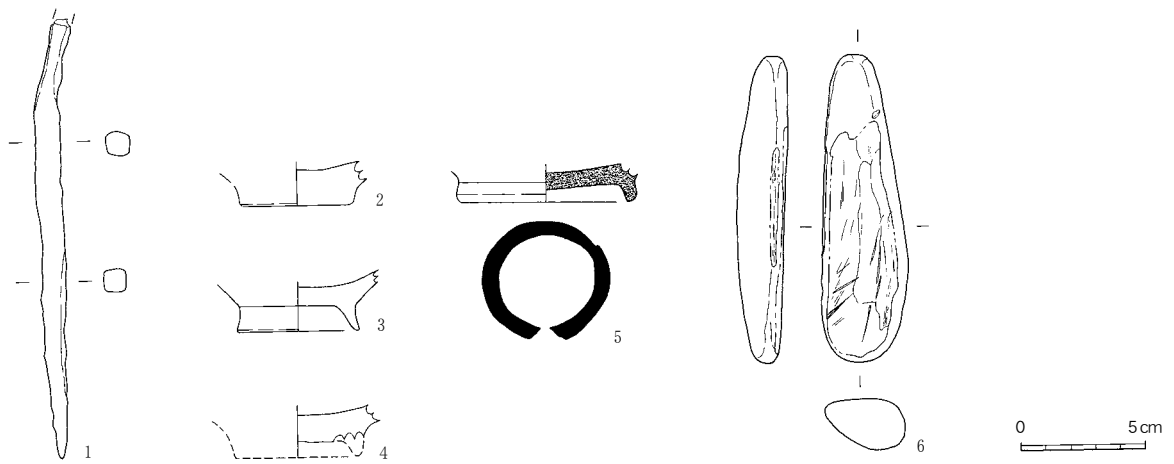
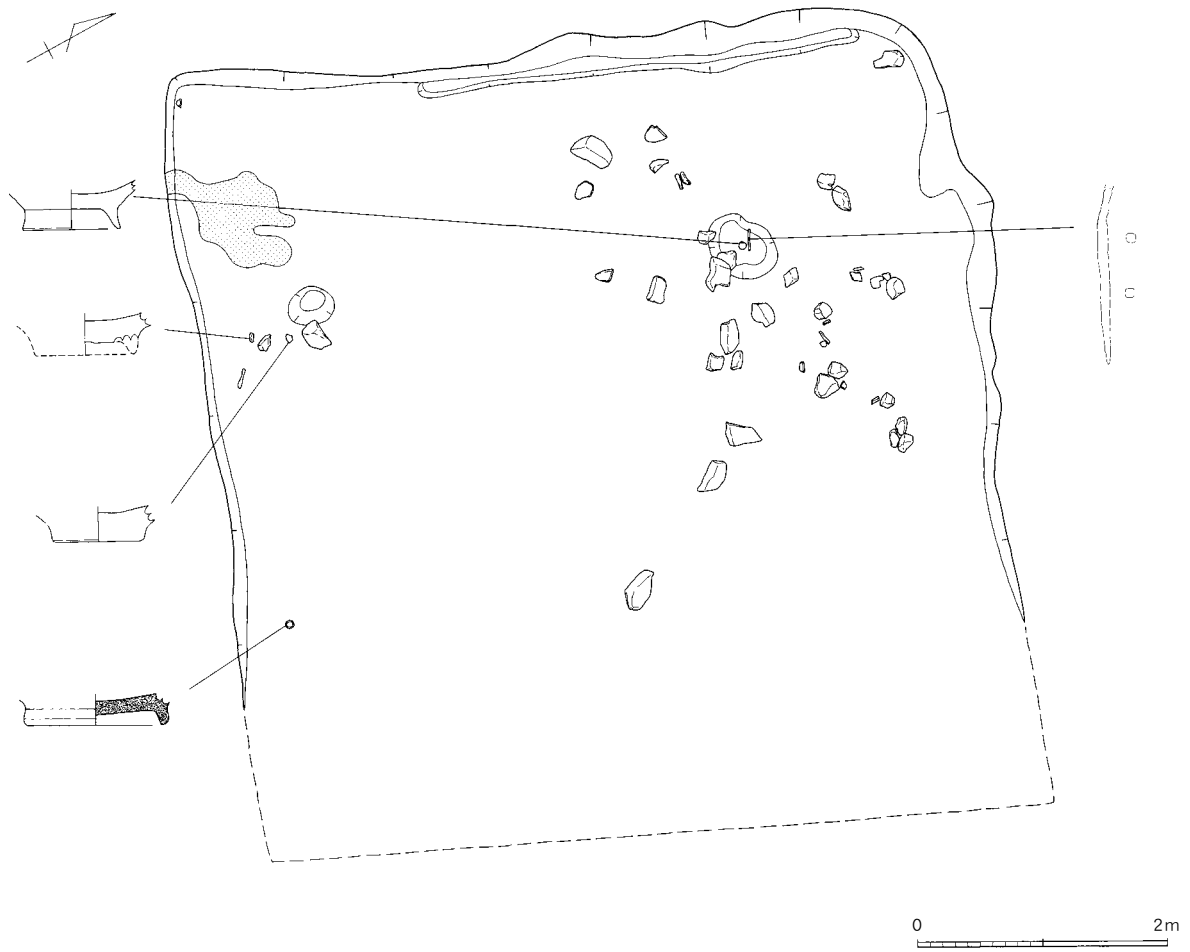
1は刀子である。ほぼ完形で出土している。

5・6は砥石である。5は正面にススが付着しており、剥離していることから被熱していると考えられる。



第101図 第62号住居址遺構平面図

1. 住居址



第102図 第62号住居址遺物出土状況図および出土遺物

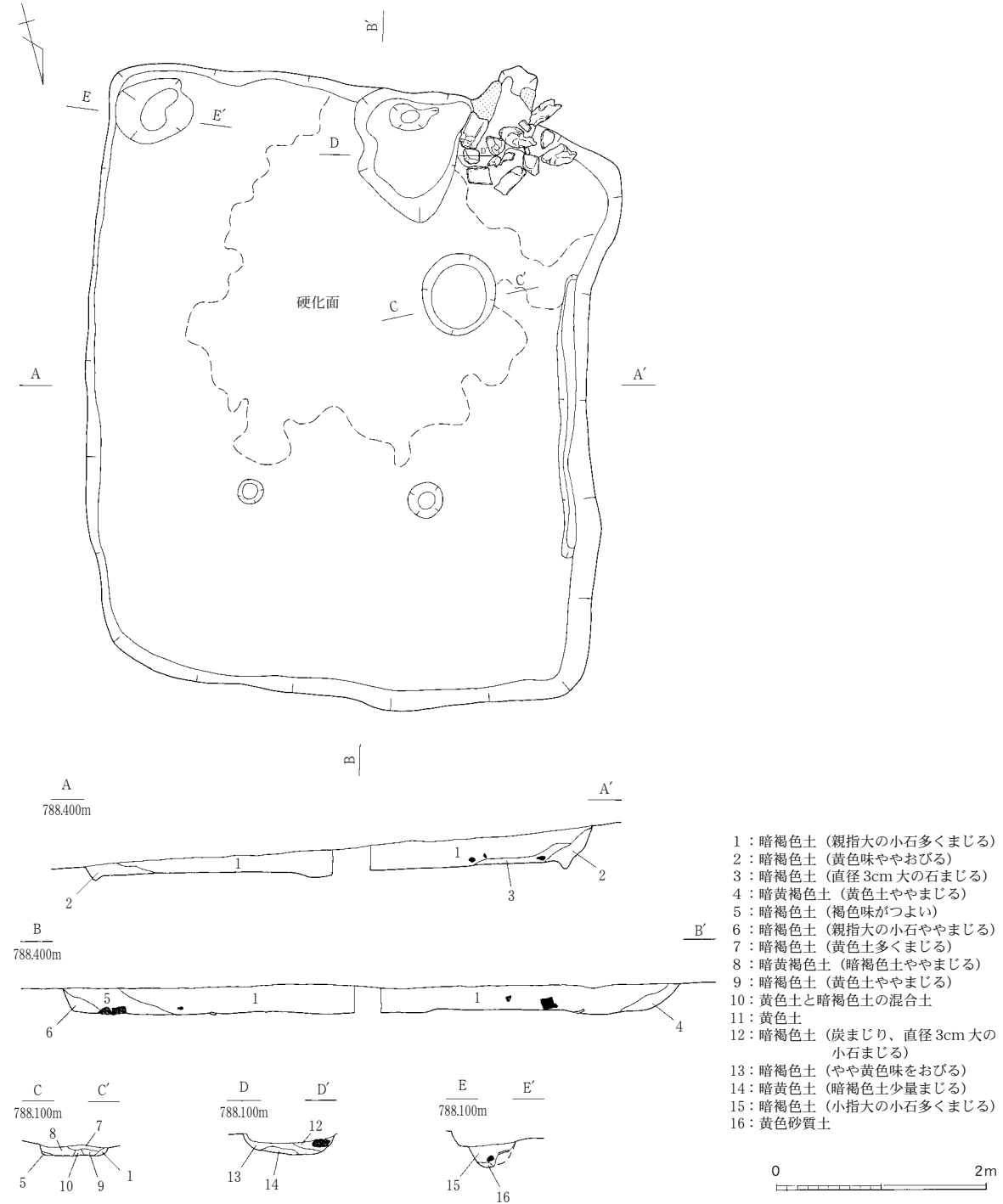
第IV章 遺構と遺物

第62号住居址 (第101図、第102図)

EY-33から出土している。一辺6.3mほどの方形プランと考えられるが、東部壁が削平されてしまい、確定はできない。壁高は最深で約20cmであり、覆土は暗褐色系および黒褐色系の土で占められ、炭化物の混入がみられた。床面直上からは、礫が北西部を中心に多数出土したが、遺物の出土は少量であった。

床面からはピットが2ヶ所出土しており、柱穴と考えられる。また西壁際にもみ周溝が確認され、西半部の全体的に硬化面が検出された。

カマドは、南西部の床面に被熱箇所が検出されたことから、この地点に築造されていたと考えられる。



第103図 第63号住居址遺構平面図(1)

遺物 (第102図)

- 1は鉄器である。頭部の欠損した釘の可能性がある。
- 2は土師器杯の底部である。底部は全て残存している。
- 3・4は土師器碗の底部である。3は底部全周が残存しているが、4は高台がほとんど欠損していた。
- 5は灰釉陶器碗の底部である。焼成は甘く、釉葉は確認できない。なお、高台内面に墨書が確認できる。
- 6は砥石である。正面と左縁部に使用痕が確認できる。

第63号住居址 (第103図、第104図、第107図)

この住居址はE R-37から出土しており、今回の調査では最も南部に位置している。長辺5.8m、短辺4.2mの長方形のプランで、深さ20cmであった。覆土は暗褐色系の土であり、小石の混入が目立った。カマドは南壁の西寄りに築造され、カマド脇には不整形な土坑が出土しているのをはじめ、床面の2ヶ所に土坑が出土している。これらの土坑はこの住居址に伴うと考えられるが、カマド脇の土坑については、出土遺物からみると若干疑問も残る。また、ピットを2ヶ所検出しており、これらは柱穴と推定される。

さらに、床面はカマド付近から中央部にかけて硬化面が検出された。

カマドは石組みのカマドで、破壊されていたものの、両袖石は残存しており、燃焼部の床面は被熱によって非常に赤色化していた。

なお、この住居址床からは今回の調査で最も多くの遺物が出土しており、特にカマド西脇からは重なるように集中して出土している。

遺物 (第105図、第106図)

第105図1は砥石である。上半部が欠損しているがその他の5面には使用痕が確認できる。

2・3は土師器杯の底部である。底部のみ完形で残存しており、3の内面は剥離している。

4は碗の底部と考えられる。高台部が欠損しており、底部のみの出土である。

第106図は床面およびその直上から出土した遺物である。

1～29は小型の土師器杯である。ほとんどが床面からの出土であり、出土位置を図化できずに取り上げた4・7・12・17・19の杯の内、4・12・17・19が床面からの出土で、19が口縁部の一部を欠損したほぼ完形である以外は1/2～1/4ほど残存している破片からの復原である。

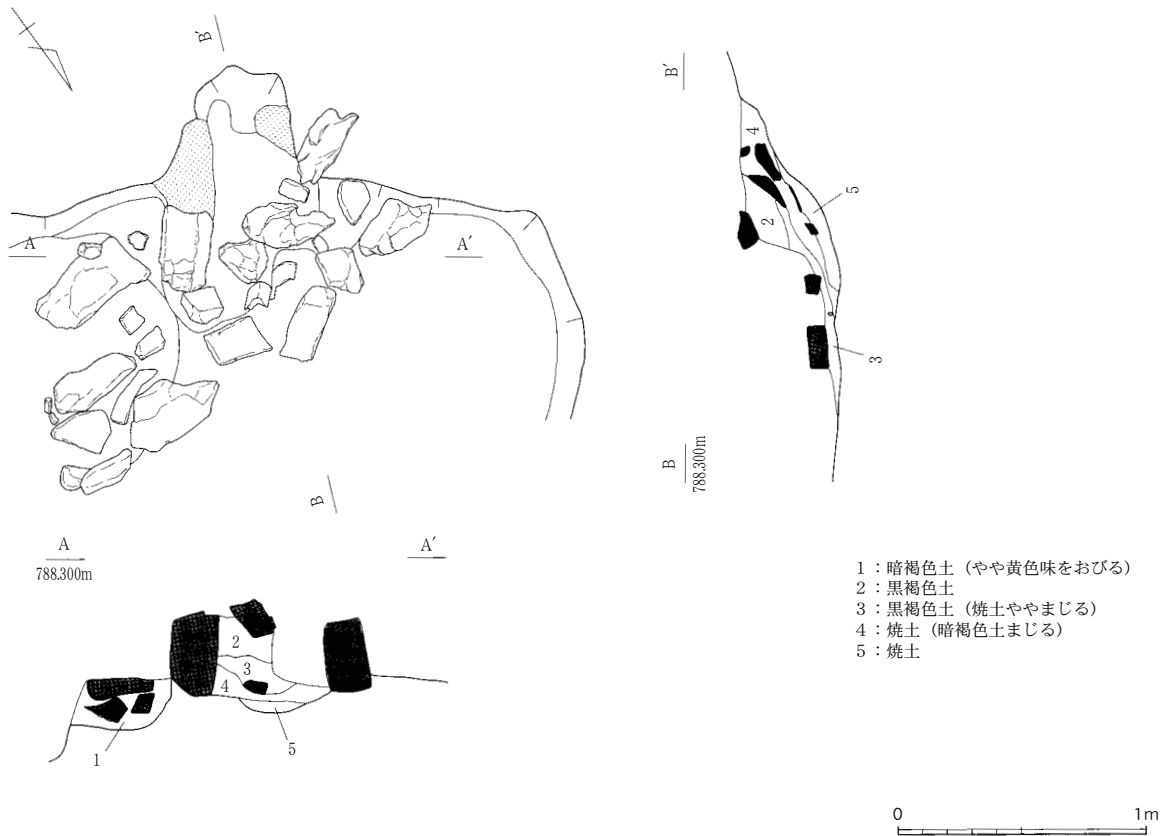
また、出土位置を図化した小型土師器の内、完形で出土したものは、5・18・20・23・24・29の6点であり、口縁部の一部が欠損したほぼ完形のものは、3・6・9・10・15・19・22・25～27であり、他のものは口縁部を中心に1/3～1/4ほどの欠損箇所があった。

なお、1・23の内面および27の見込み部にススが付着しており、10・18の外表面の一部にもススの付着がみられた。特に10のススはタール状に厚く付着していた。また、3は作りが粗雑で、杯を切り離す際に底部に穴があいてしまい、粘土で充填している。このほかにも、12は成型時の底部を切り離す際、平坦に切り離せずに段差ができてしまっているなど、11～14も粗雑な印象を受ける。

また、口径に対して底径が大きい印象の器種(7・17・18)も確認できる。

30～39は、口径は1～29と同程度であるが、器高が2cmを超える若干深いタイプである。これらはやはり床面からの出土がほとんどであり、出土位置を図化できなかったものは30・37であった。なお、37はカマドからの出土で、ほとんど完形で、30は小片である。また、33～36・38は底部の器厚が1cmを超えており、33は口縁部を大きく欠損しているものの、他のものは残存率が高い。また、33と35は胎土がなめらかである。40は土師

第IV章 遺構と遺物



第104図 第63号住居址遺構平面図(2)

器坏である。カマド脇の不整形な土坑からの出土である。口径9.5cm、器高2.6cmで、見込み部は剥離している。

48・49は大型の土師器坏である。49は床面での出土である。いずれも大きく欠損しており、48は口縁部が1/2ほど残存し、49の口縁部は一部残存するのみである。

41～43は土師器盤である。いずれも床面から出土している。41は脚部がほとんど失われているが、43はほぼ完形であり、42も高台のみ完全に残存している。なお、43はいわゆる中実の盤である。

45・46は灰釉陶器である。45は碗で、外面に釉葉は確認できず、内面にツヤのある釉葉が掛けられている。46はいわゆる深碗である。釉葉はほとんど掛けられていない。

47は土師器碗である。カマド右脇の床面から出土している。

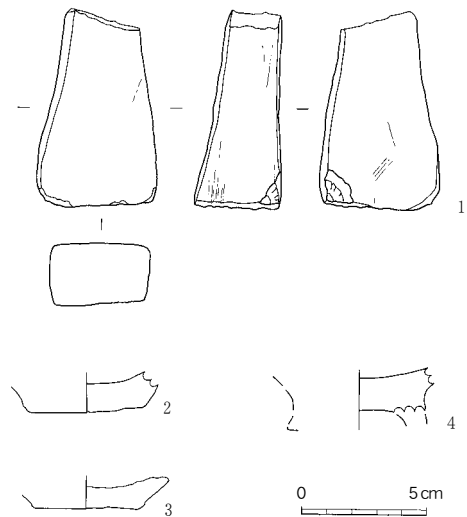
50は鉢と考えられる。内面にはススが付着している。

51は底部である。体部の接合部を打ち欠いて円盤にし、その中心部に刺突痕がみられることから、穿孔しようとした意図が伺える。

52は刀子の切先付近である。遺構検出中に出土した。

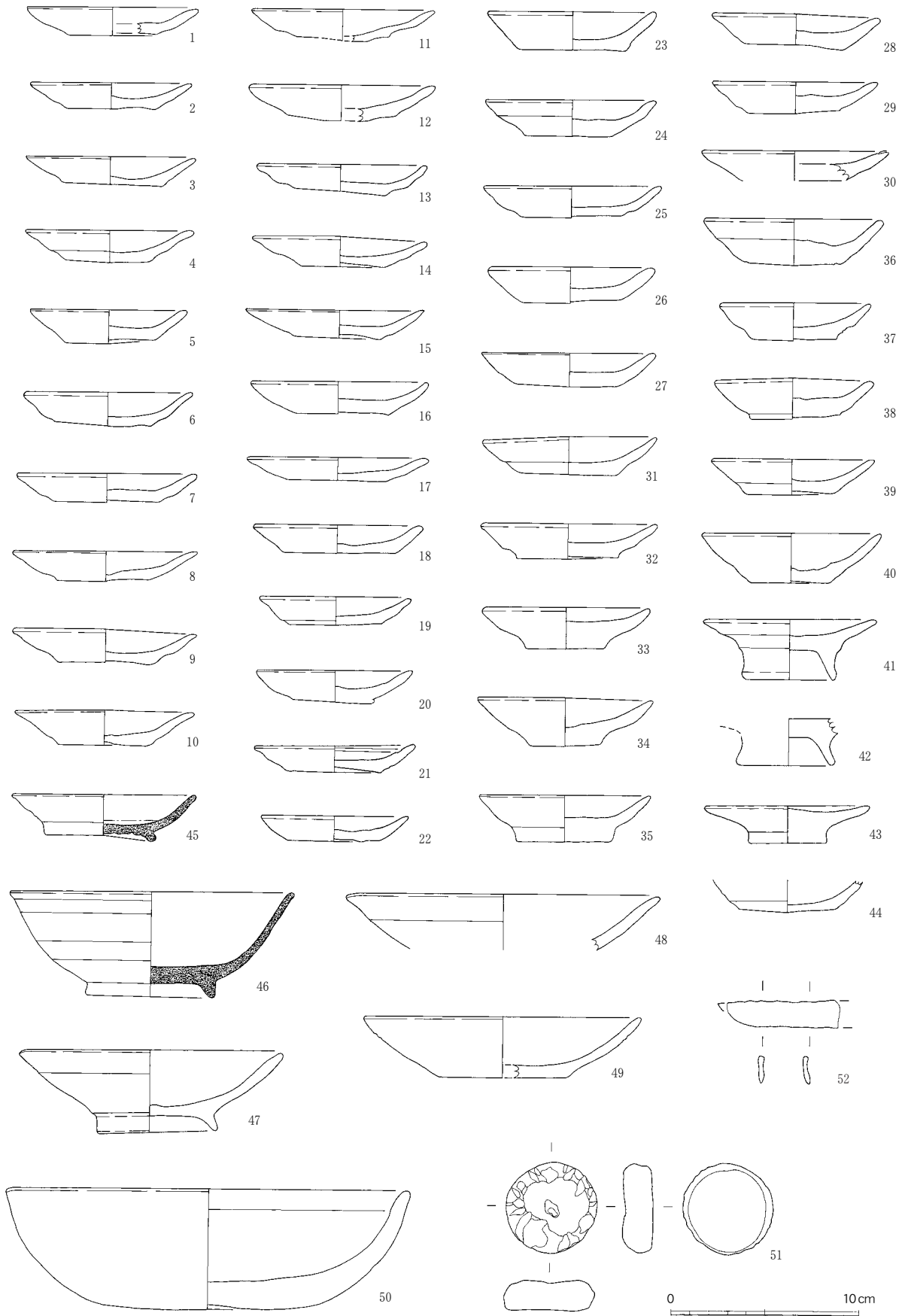
なお、カマド西脇の住居址隅で出土した遺物は3・9・20・22・24・25・27・31・32・36・39・47・50の13点である。

この住居址は出土した遺物から15期と考えられる。

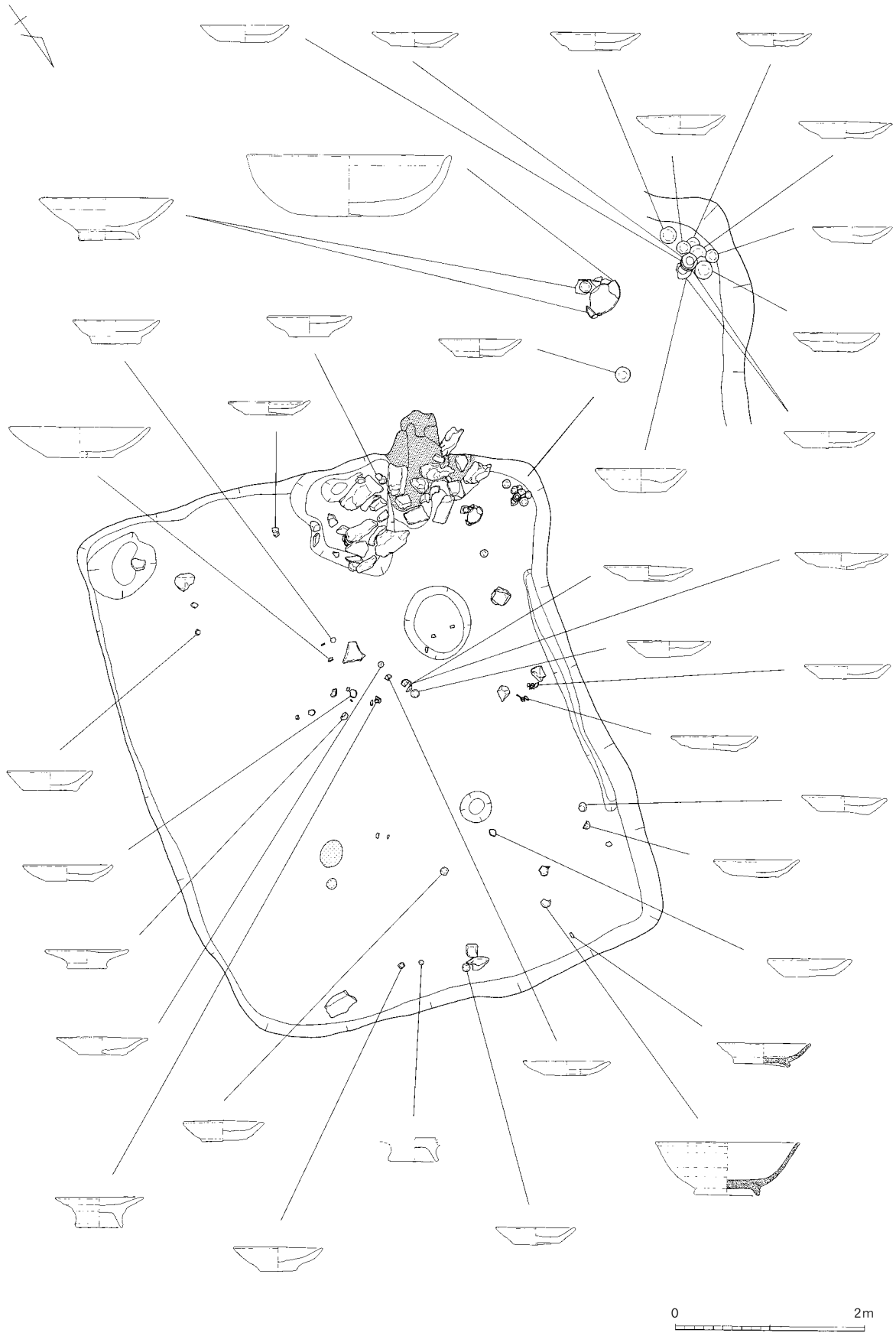


第105図 第63号住居址出土遺物

1. 住居址



第106图 第63号住居址出土遺物



第107図 第63号住居址遺物出土状況図

第64号住居址（第109図）

この住居址はFC-3から出土している。南部および西部の壁が削平を受けており、規模を詳細に把握できないが、残存している限りでは、一辺が5.7mの方形と推定される。残存している壁高は最深で約22cmであった。覆土は暗褐色系の土で、炭の混入がみられた。

なお、床面の検出中には炭化材が出土していることから、この住居址は火災住居であったと考えられる。

また、床面の東壁および西壁付近に被熱箇所が検出されており、カマドの造り替えが行われているかとも考えられるが、遺存が悪く確定できない。

床面の精査の結果、硬化面は検出できなかったものの、ピットが3ヶ所と土坑が1基出土した。ピットに関しては位置が整わないため、支柱穴とするのは難しいと考えられる。また、土坑についても出土遺物がないため、この住居址に伴うものかは明確にできなかった。

遺物（第108図）

この住居址は4点の遺物が図化できた。1は羽釜である。底部が破損しており、鏝部付近から口縁部にかけてのみ残存している。なお、外面の鏝下部と、内面の一部にススの付着がみられる。

2は土師器碗の破片と考えられる。床面からの出土で、1/4ほど残存しているのみである。

3は土師器坏である。口縁部が約1/3程欠損している。内面にはロクロ成型時のヨコナデ調整痕を留めている。法量は口径16.4cm、器高3.6cmである。

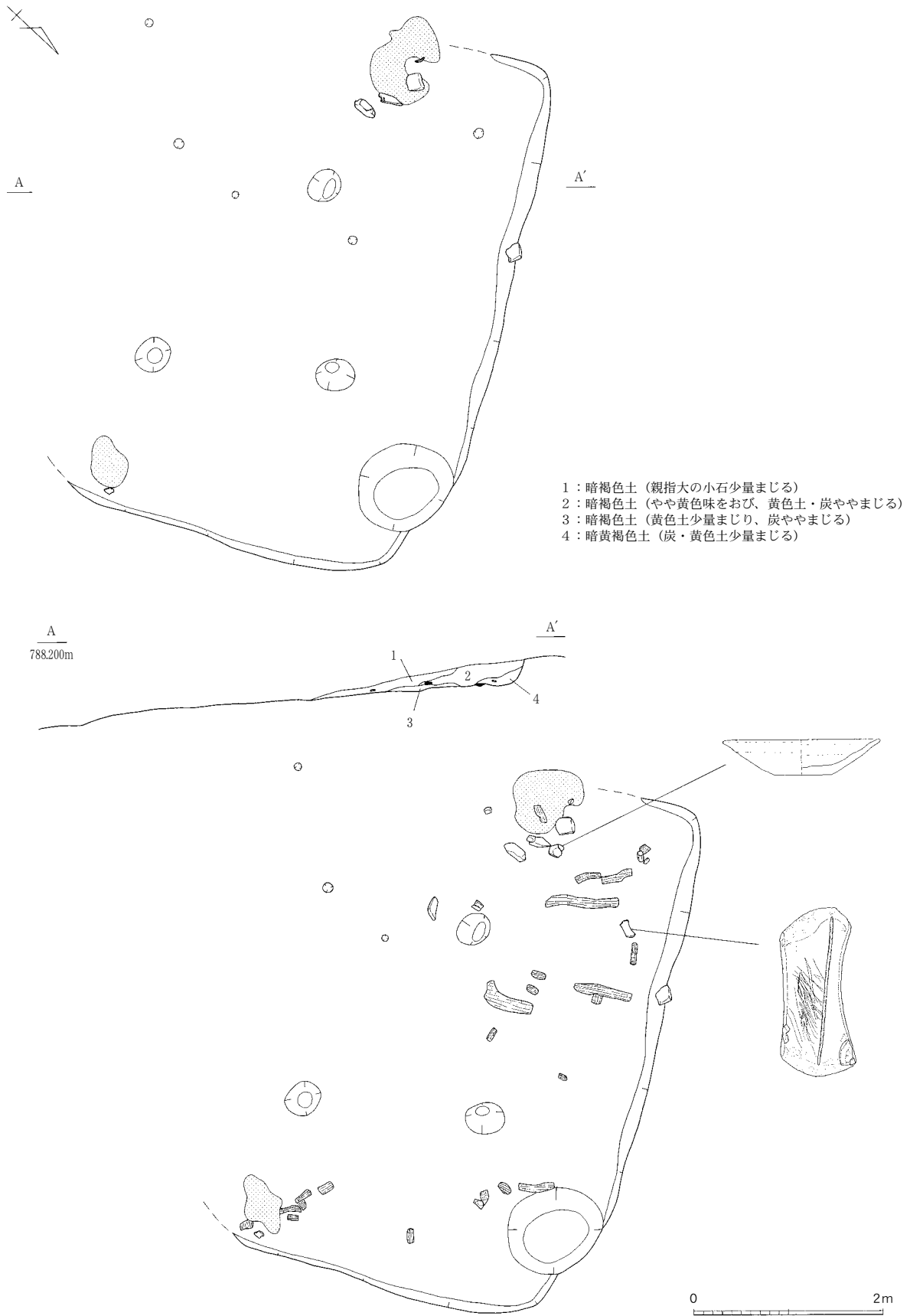
4は砥石である。上部と下部には敲打痕がみられ、その他の4面には使用痕が確認できる。特に正面および背面には筋状の溝が複数確認できる。

この住居址はこれらの出土遺物から15期と考えられる。



第108図 第64号住居址出土遺物

第IV章 遺構と遺物



第109図 第64号住居址遺構平面図および出土状況図

2. 土 坑

(1) 土坑と遺物

今回の調査では番号をつけた土坑が183基を数えるが、ここでは、主な土坑について記述することにする。

第160号土坑（第110図、第116図）

D S -75から出土している。直径約1 m深さ約60cmで、平面不整円形を呈する。黄色土粒の混入した暗褐色系の覆土で、下層に炭化物が混入していた。なお、第29号住居址および第159号土坑と重複して出土している。

遺 物（第134図1～3）

1・2は同一個体である。半截竹管状工具による平行沈線文で、口縁部は横位の文様区画を主体とした構成であり、体部は縦位の区画で構成されている。3は繊維の混入した土器であり、混入品と考えられる。

第163号土坑（第110図、第116図）

D P -80から出土している。平面円形のプランで、直径1.3m、深さは10cmとごく浅い。この土坑内からは礫や、器形の判明する土器が出土した。

遺 物（第133図4～6、第134図4～10）

第133図4～6は、ある程度まとまって出土した土器である。4は浅鉢の破片である。1/2個体程度の出土である。大きな波長の波状口縁で、外面の口縁部上端部に沿って平行沈線文が施文され、波頂部からは縦位に底部に向かって平行沈線が施文されている。内面は口縁部に沿って3段の押引沈線文と、交互刺突文がみられる。5はほぼ器形を復原できる個体である。ただし、上半部と下半部は接合していない。この土器は4ヶ所の突起をもっていると考えられ、口縁部上端部と頸部の押引文を施文した横位隆帯で文様帯を区画している。口縁部の文様帯には縦位の平行沈線を施文した後に、上下部に横位の平行沈線を引いている。また突起直下には、一部に押引文を施文した隆帯を「く」字状に貼り付けている。また、頸部隆帯下部にも横位の平行沈線文がみられる。6は体部下半部の破片である。斜位の平行沈線文が引かれている。

第134図4は頸部の破片と考えられる。隆帯上に爪形文が施文されている。5は格子目文を平行沈線文で施文している。6・7・8は同一個体である。口縁部には斜格子目文を施文し、横位の平行沈線で体部を区画している。そしてその下部は、縦位の平行沈線文を充填した文様帯を数段経て、体部下に2本、縦位の平行沈線文を施文している。9は縦位の平行沈線を密接した「U」字状に施文している体部の破片である。10は底部の破片である。縄文を地紋に持ち、その上から縦位の沈線を施文している。

第180号土坑（第118図）

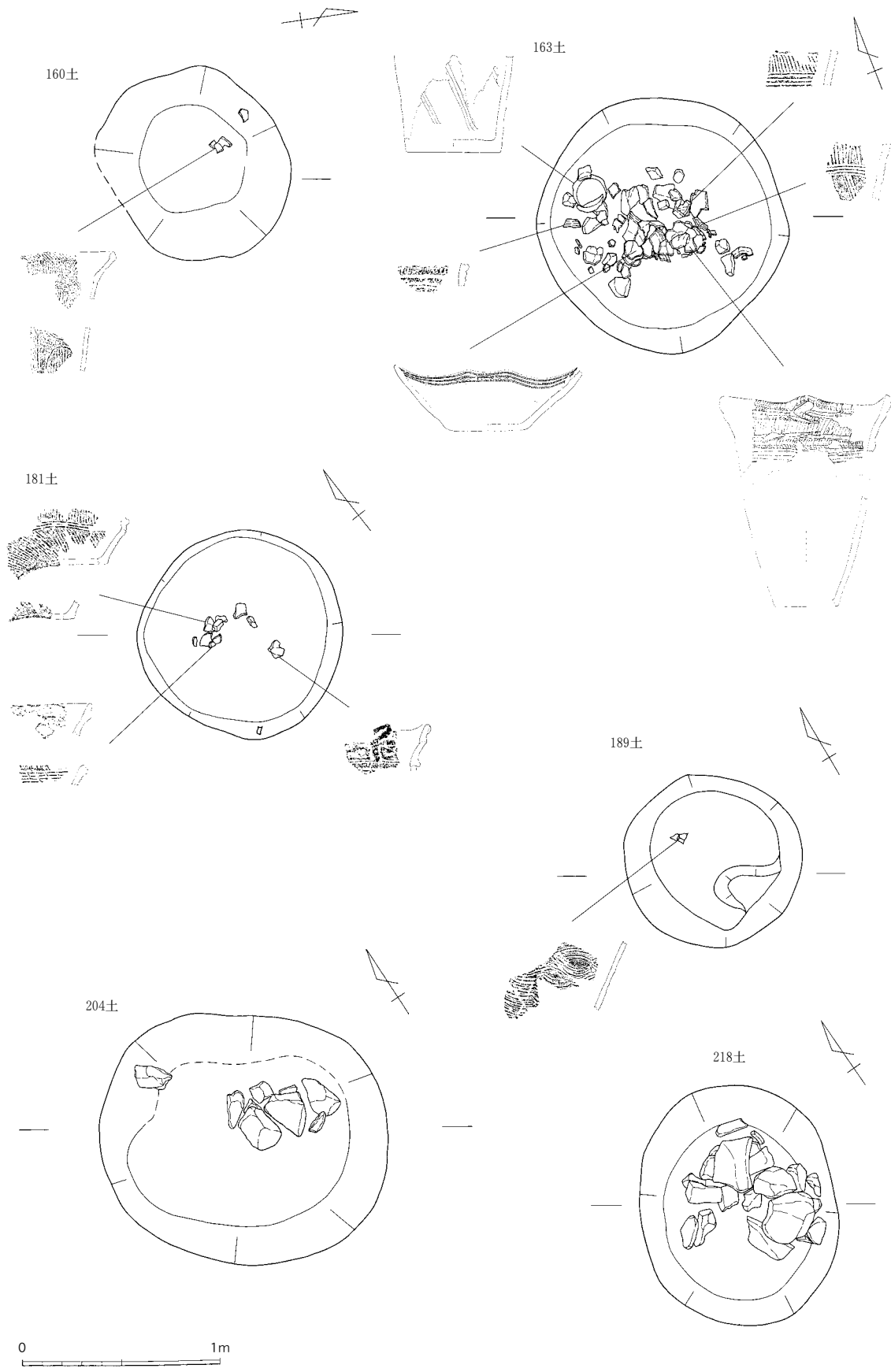
この土坑はE F -70から出土している。直径約1.2m、深さ約30cmの円形を呈する。覆土は黒褐色系の土が主流で、中層付近からは遺物が出土している。

遺 物（第134図15～21、第143図3～8）

第134図15～21は土器である。

15・16・19は無文の土器で、15・16の外面に若干ススが付着している。19は胎土中に砂粒が多く混入している。

17は口縁部の破片である。波状を呈し、上端部まで施文が及んでいる。なお地紋に縄文が施されている。



第110図 土坑遺構平面図(1)

18は体部上部の破片である。口縁部は無文帯であり、押引文を伴う隆帯の下部には平行沈線による斜格子目文が施文されている。なお、施文順位は、隆帯、横位平行沈線、斜位平行沈線の順である。

20は押引文を伴う隆帯の下部に、平行沈線によって方形の区画文を施文している。焼成は若干あまい。

21は浅い平行沈線で縦位の羽状文を施文している。

第143図3～8は黒曜石である。3・4は石鏃である。3は基部が逆U字状に抉れる石鏃である。4は有茎鏃である。5・6は石核と考えられる。7・8は図面下部に小剥離痕がみられることから、剥片石器と考えられる。

第181号土坑（第110図・第118図）

OX-81から出土している。直径約1.1m、深さ約20cmの平面円形のプランである。この土坑の底面直上から土器片が少量出土している。

遺 物（第134図22～26）

22・23は口縁部の破片である。22は無文であるが、口縁部の屈曲する部分の外面には粘土紐を貼り付けている。また、明確ではないが、破片の右部が厚みを増し、横位の隆帯上にも粘土を貼り付けたと考えられる痕跡があることから、縦位の隆帯を持つ突起が作られていた可能性も考えられる。23は突起を持つ口縁部である。屈曲部には1と同様の横位の隆帯がみられ、無文帯をはさんで爪形文を伴う横位隆帯が貼り付けられており、接着部には半截竹管状工具による強い平行沈線文が引かれている。なお、突起部には、上端部に折り返しを伴う隆帯が貼り付けられているが、施文順位は明確にできない。25は口縁部下部の破片である。横位の半截竹管状工具による平行沈線文を施文し、その上に斜位の平行沈線を引くことによって斜格子目文を形作っている。この斜格子目文の上部は、爪形文を伴う隆帯によって文様帯が区画されている。なお、22・23・25は外面に薄くススが付着しており、胎土内に砂粒の混入が多いこと等が共通していることから、同一個体と考えられる。

24は26と同一個体であり、胎土内に少量の砂粒の混入がみられる。底部から屈曲して内湾気味に立ち上がる体部に至るが、その変化点に粘土を積み上げた痕跡をみることができる。外面は平行沈線を使った文様を施文しており、右上から左下に向かう平行沈線を施文した後に、縦位に施文して斜格子文を描いている。その後、屈曲部の横位平行沈線文と、破片上部の瘤状の突起を貼付している。なお、体部から底部に至る斜位の平行沈線文は底部まで丁寧に施文されている。

第188号土坑（第119図）

DN-82から出土している。直径約1.1m、深さ約40cmの不整楕円形を呈する。覆土は黄色土粒の混入した黒褐色土が主体を占めていた。

遺 物（第135図1～12）

1・2は同一個体である。口唇部と隆帯上の押引文施文に使用した工具と、押し引きによる沈線文に使用した工具が異なっている。なお文様は口縁部から体部上部にかけて集中しており、体部下半部は無文である。

3は口縁部の破片である。押引文を伴う隆帯の上部に平行沈線を引いている。なお、この平行沈線文の中程には、間隔のあいた押引文もみられる。

4は淡褐色を呈し、外面にはクシ歯状工具による条痕文を斜位に施文している。

5は外面に原体不明の蛇行する沈線文が施文され、内面にはミガキ調整が行われている。焼成は堅緻である。

6～9は平行沈線を施文した土器である。6は斜位の平行沈線を施文した後に、横位の平行沈線を引いている。7は逆U字状に平行沈線を引いた後、その下部に結節沈線文を施文している。なお、内面にはススの付着

第IV章 遺構と遺物

がみられる。8は外面に若干ススが付着している。9は彫りの深い平行沈線を弧状に施文している。

11は縄文を施文した土器である。

10・12は浅い平行沈線を縦位に施文している破片である。12の内面には微量ではあるがススが付着している。

第189号土坑（第110図、第119図）

この土坑はDN-18から出土している。直径約90cm、深さ約30cmの平面円形のプランである。覆土は上層が焼土や炭化物の混入した暗褐色系の土、下層は黄色土の多く混入した暗黄褐色系の土であった。

遺物（第135図13）

13がこの土坑の底面付近から出土している。レンズ状文を平行沈線文で施文している口縁部の破片である。内面にミガキ調整痕を留め、焼成は良好である。

第204号土坑（第110図、第120図）

この土坑はDW-10から出土している。直径約1.4m、深さ約50cmの平面円形のプランで、覆土の上層は黒褐色系、中層以下は暗褐色系の土で占められていた。土坑の中層には直径20cm程度の礫が集中して出土しており、覆土全体にわたって親指大の小石の混入がみられた。なお、この土坑からは図化できる遺物は出土していない。

第218号土坑（第110図、第122図）

この土坑はEN-38から出土している。直径約1.1m、深さ約40cmの平面やや楕円形のプランである。覆土は上層に小石がまじる暗褐色系の土が中心であった。なお、土坑の底面付近からは直径20cm大の礫が多数出土した。

遺物（第135図14～17）

14～17が出土した破片である。14は平行沈線文を施文した平口縁の器形と考えられる。破片左下にボタン状貼付文が1個みられる。内面にミガキ調整痕を留めた、堅緻な土器である。

15・16は結節浮線文を施文した土器片である。15は隆帯上を半截竹管状工具によって押し引きを加えたもので、波状口縁を呈する。淡褐色の色調であり、焼成は堅緻である。内面にはミガキ調整が施されている。16は縄文を地紋に持ち、口縁部上端部にヘラ切りの結節浮線文を施文している。この土器も15と同様に色調は淡褐色を呈し、内面にミガキ調整痕を留めており、焼成も堅緻である。

17は体部の破片と考えられ、斜位のごく浅い半截竹管状工具による平行沈線文が施文されている。外面には薄くススが付着し、内面にはミガキ調整がみられる。焼成は堅緻である。

第233号土坑（第111図、第123図）

この土坑はFL-25から出土している。直径約1.1m、深さ約30cmの平面円形のプランを持つ、底面に凹凸のある土坑である。覆土は暗褐色土が中心で、上層に炭化物の混入がみられた。

遺物（第136図11～19）

11～19が出土している。11は無節の結節縄文を施文している。内面にナデ調整痕を残し、外面の破片上端部の一部にススが認められる、焼成の堅緻な破片である。

12・13は平行沈線による弧状文を施文した土器である。12は平口縁を呈した土器である。13は、12に比べて器壁が厚く、胎土に砂粒の混入が多い。

14は口縁部の破片である。外面に一部剥離があるが、地紋に縄文を施文し、その上に粘土紐を貼り付けてそ

の上部のみを、竹管状工具によって縁取りを加えている。また、隆帯上には縄文が施文されている。内面にはミガキ調整が施されている。

15は波状口縁とも考えられ、縄文を地紋に持ったヘラキザミによる結節浮線文を施文している。結節浮線文はその半分程度が剥離している。なお、内面にはミガキ調整痕を留め、焼成も良好である。

16～19は縄文を施文している土器片である。16・17・19は淡褐色の色調を呈する土器である。16は浅い縄文であり、内面下部にはススの付着がみられる。17・19は共に内面にミガキ調整痕を留め、19については胎土に砂粒を多く混入しているが、焼成は良好である。

第234号土坑（第111図、第123図）

E M-25から出土している。直径約80cm、深さ約20cmの平面円形のプランと考えられるが、土坑の重複がみられるために詳細を明確にできない。

遺 物（第136図20～26）

20～26が出土した土器片である。20・21は口縁部の破片である。半截竹管状工具による渦巻文を施文している波状口縁の土器片である。20は渦巻文を施文した後に、渦巻文に沿って竹管状工具による太い沈線文を引いている。なお、口縁部については幅を持った肥厚部が存在したと考えられるが、剥離している。また、外面にはススの付着がみられ、焼成は良好である。21は文様に剥離がみられるが、渦巻文を施文後に、口縁部に沿って3本の平行沈線文を施文している。内外面共にススの付着がみられ、内面にはミガキ調整が行われている。

22は半截竹管状工具による平行沈線文で斜格子目文を施文し、3個1組と2個1組の2種類のボタン状貼付文をそれぞれ貼付している。内面にはミガキ調整が施され、外面にススが付着している。なお、外面は暗褐色を呈し、内面は赤褐色を呈している。

24は底部の破片である。半截竹管状工具による浅い平行沈線によって、斜格子目文を施文している。なお、体部の内面にはススの付着がみられる。

25は半截竹管状工具を使用して、横位の条線を施文している。また、破片下部に傾斜の変化点がみられることから、体部下部の破片と考えられる。

23・26は浅い縄文が施文されている。23は破片の下半部を縄文施文後に、ナデ調整を行っている。また、下部には横位の平行沈線文がみられる。26は内面の一部にススの付着がみられる。

第247号土坑（第111図、第124図）

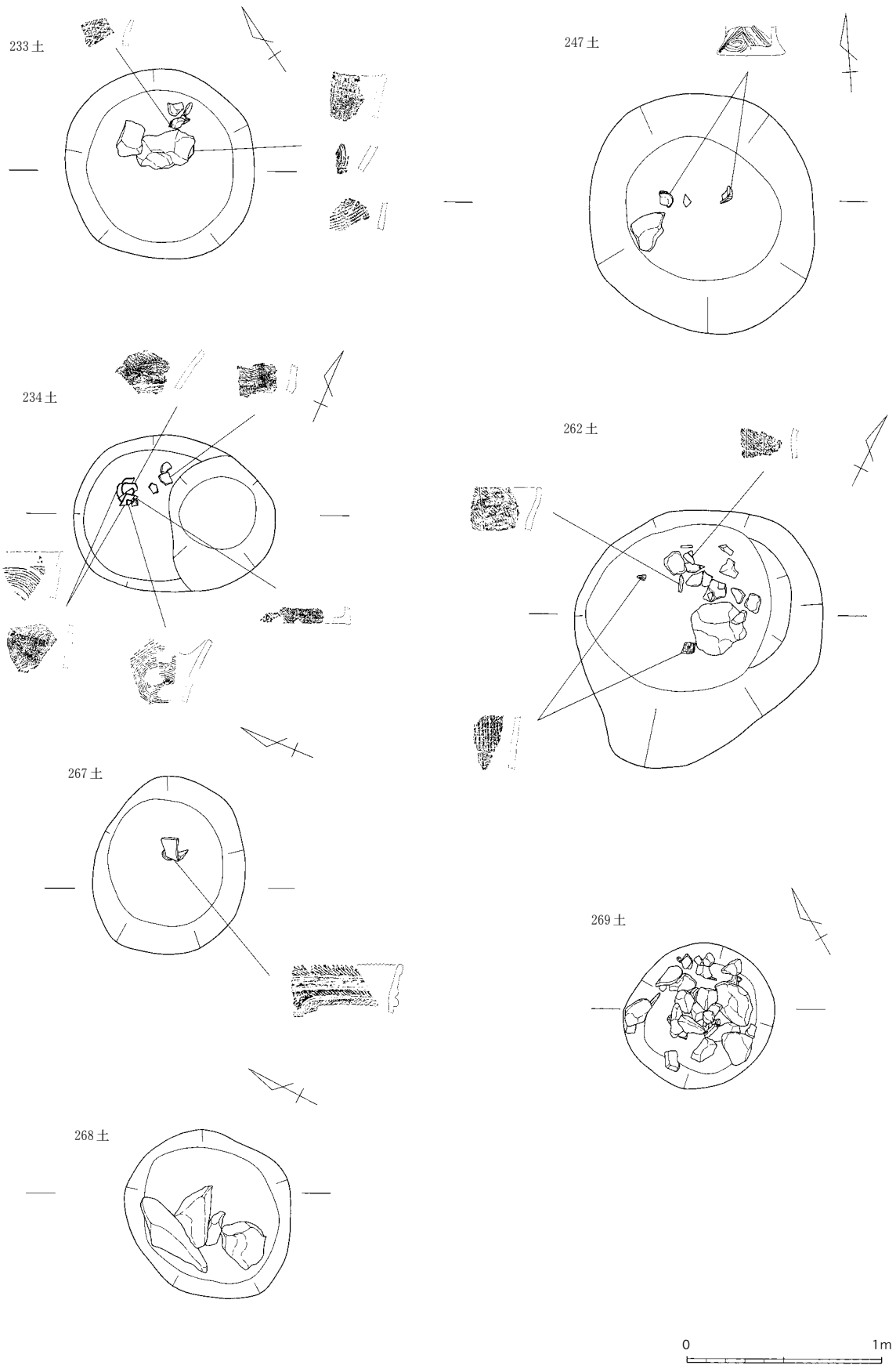
この土坑はE P-36から出土している。直径約1.2m、深さ約40cmの平面不整形のプランである。この土坑は覆土中から土器片が出土したのをはじめ、底面付近には礫や土器底部の破片（第133図1）が出土している。

遺 物（第133図1、第137図1～6）

第133図1が底面付近から出土した土器である。外面には平行沈線による縦位の羽状文を描き、その下部にレンズ状文を施文している。淡褐色の色調をした、焼成の良好な土器である。

第137図1～6は、この土坑の覆土から出土した土器である。1～3は平行沈線文を施文した土器である。1の破片上部には、彫りの深い平行沈線が横位に引かれ、その下部に、幅の異なる半截竹管状工具を使用しての彫りの浅い平行沈線文を施文している。なお、外面にはススの付着がみられ、内面にはミガキ調整が行われている。2はレンズ状文が施文されており、内面にはミガキ調整が施されている。3は平行沈線文で、曲線文を施文されている。外面にややススの付着がみられ、内面はミガキ調整が行われている。

第IV章 遺構と遺物



第111図 土坑遺構平面図(2)

4は浅めの縄文が施文されている。内面にはナデ調整の痕跡が明瞭で、やや粗雑な印象の土器である。

5は横位の平行沈線文を施し、その後に斜位のヘラ切りによる結節浮線文を施文している。なお内面にはミガキ調整がみられる。

6は破片下部に縄文が施文され、その後に平行沈線による斜格子目文が施されている。なお、器壁の厚みが均一でなく、上部に接合痕が残されている。

第262号土坑（第111図、第126図）

E F-72より出土している。直径約1.2m、深さ約20cmの平面不整楕円形を呈している。この土坑底面からは礫と共に土器片が出土している。

遺 物（第133図2、第137図11～16、第143図11・12）

第133図2は円筒形の器形の土器である。底部以外は全体の1/4程度の残存率である。口縁部上部に無文帯を残し、その下部に右上から左下に平行沈線を先に引いた斜格子目文を施文した後に、鍵の手状の屈曲文を施文している。また、その下部には縦位の平行沈線文を充填した後、円文および横位の平行沈線文を引いている。さらに体部中部には、縄文を地紋にした後に左上から右下にむけて短い平行沈線を引き、その下部に逆三角形になるように、対角に平行沈線文を1本引いている。また、この三角形の頂点から半截竹管状工具を使って、縦位の波状に平行沈線文を垂下させている。なお、文様帯の区画に使われている平行沈線は、これらの充填文様を施文した後に施文されている。

第137図11は口縁部の肥厚した平行沈線を施文している土器である。波状口縁を呈し、焼成も堅緻である。内面にはミガキ調整もみられる。

12は口縁部が外に強く屈曲した土器である。屈曲部の外面には平行沈線文が施文され、その下部には平行沈線による斜格子目文が施文されている。焼成のあまい土器である。なお、斜位の平行沈線文を施文している19はこの土器片と同一個体である。

13は14と同一個体である。平口縁で、口唇部には面取りがみられる。上端部に無文帯を残し、横位の平行沈線文を経て弧状の平行沈線を引き、その区画内に格子目文を充填している。格子目文は縦位の後に横位の平行沈線を施文している。

15・16も同一個体である。縄文を施文した後、間隔をあけた縦位の平行沈線文を施文している。

17は、外面の剥離が著しいものの、平行沈線で格子目文を施文している。この格子目も縦位の後に横位を施文している。内面はミガキ調整が施されている。

18は外面に縦位の平行沈線文が施文されている。なお、外面上部と内面にススの付着がみられる。

第143図11・12は黒曜石である。11は石核と考えられ、12は小剥離の存在から、剥片石器と考えられる。

第267号土坑（第111図、第126図）

E U-28より出土している。約0.9m×0.8mの楕円形で、深さ50cmの楕円形である。

遺 物（第137図26・27、第144図3）

第137図26・27の土器は土坑底面付近から出土している。27は隆帯を貼り付けた後に器面全体に縄文を施し、口唇部に竹管状工具の押圧による装飾を行い、隆帯上部の縄文をナデ消している。なお各文様帯の区画部には竹管状工具による沈線が引かれている。26は縄文を施文した土器である。両者共に焼成の良好な土器片である。

第144図3は黒曜石である。剥片の可能性もある。

第IV章 遺構と遺物

第268号土坑（第111図、第126図）

この土坑はE V-33から出土している。直径約0.9m、深さ約15cmの平面円形を呈する。この土坑の底面付近からは、大型の礫が出土した。

遺物（第137図28～35）

28～30は平行沈線によってレンズ状文を施文した土器で、内面にミガキ調整が行われている。なお、これらの土器は胎土、文様構成から同一個体と考えられる。

31は浅い平行沈線文が縦位の羽状に施文された土器である。内面にはススが付着している。

33・34は同一個体と考えられる。実測部分の違いによって形態に差が生じているが、基本的には口唇部は面取りされている。器面全面に縄文を施文した後に隆帯を2本貼り付け、その上に縄文原体を押圧している。

32・35は同一個体である。外面に縄文が、内面にはミガキ調整が施されている。また、外面にススの付着もみられる。

第269号土坑（第111図、第126図）

E U-31から出土している。直径約1.5m、深さ約30cmの平面円形を呈している。この土坑からは暗褐色系の覆土中から多量の礫が出土した。

遺物（第137図36）

この土器片が唯一図化できた土器である。体部中部の破片で、半截竹管状工具による平行沈線文を横位の羽状に施文した後、縦位の平行沈線文を施している。

第275号土坑（第112図、第127図）

この土坑はE V-29から出土している。規模は約1.3×1mの平面楕円形を呈し、深さは約35cmであった。この土坑の覆土中層付近からは比較的大型の礫が出土し、土器片も出土した。

遺物（第142図1～3、第144図2）

第142図1～3は土器である。1・2は口縁部破片である。1は外反しながら立ち上がり、上部で内側に屈曲して、直立気味に立ち上がる口縁部に向かう器形である。口縁部上端部の内外面には縄文が施文され、その直下から屈曲部までに瓦状押引文が施文されている。なお、文様帯を区画している平行沈線および押引文を伴う隆帯は、各文様帯を充填した後に施文している。2は口縁部上端部に押引文を施文し、その直下に引かれた平行沈線文の下部に刺突文を加えている。また、口縁部には爪形文を伴う渦巻状の隆帯も貼り付けられている。

3は口縁部の破片と考えられる。斜位の平行沈線を地紋とし、半截竹管状工具を使用しての押し引きによる結節浮線文が貼付されている。なお、この土器片は混入品の可能性が高い。

第144図2は黒曜石である。石核と考えられる。

第276号土坑（第112図、第127図）

E L-7から出土している。直径約1.6mの不整円形で、深さは約50cmを測る。この土坑周囲には礫が散在し、土坑内部にも、覆土中層の黒褐色土層を中心に、大小の礫の出土がみられた。

第281号土坑（第112図、第127図）

D X-33から出土している。約1.5×1.2mの平面不整楕円形のプランを呈し、深さは約30cmを測る。この土坑の上層から中層にかけての暗褐色土層から礫が出土し、若干の土器片もみつまっている。

遺 物 (第138図5～19)

5・6・13は口縁部破片である。いずれも波状口縁で、13は波頂部に突起がみられる。外面には平行沈線による曲線文が施文されている。なお、5・6の内面にはミガキ調整がみられ、6の内面上部と外面下部にはススが付着している。

7～12はレンズ状文を施文している土器である。7・8・12と9・11はそれぞれ同一個体である。12にはボタン状貼付文がみられる。10は外面にススがやや付着している。

17は焼成があまく、表面の磨耗が激しいものの、12と同様にボタン状貼付文がみられる。地紋には浅い平行沈線文が施文されている。

14・15は浅い平行沈線文を羽状に施文している土器である。

16・18・19は縄文が施文されている土器である。16の外面上部にはススが付着している。

第282号土坑 (第112図、第128図)

D X-33から出土している。プランは約1.9×1.2mの平面楕円形で、深さは約40cmであった。覆土は黄色土粒の混入した暗褐色土系の土で占められていた。また、底面付近からは直径10cm程度の石が出土している。

遺 物 (第138図20、第144図4)

第138図20は唯一出土した土器である。底部の破片で、外面に縄文が施文されている。内面にススの付着がみられる。

第144図4は黒曜石である。石核と考えられる。

第283号土坑 (第112図、第128図)

E T-29から出土している。直径約1mの平面不整形円形で、深さ約20cmを測る。この浅い土坑内には直径10cm程度の石が多量に出土した。

第285号土坑 (第113図、第128図)

E O-31より出土している。第286号土坑と重複して出土しており、土層観察によってこの土坑が第286号土坑を掘り込んでいることがわかる。

プランは約1.5×1.1mの平面不整形楕円形で、深さ約40cmを測る。この土坑の覆土中には小石が多量に混入しており、下層には炭化物が混入していた。また、土坑北部には直径20cm程度の礫も出土している。

遺 物 (第138図21～27)

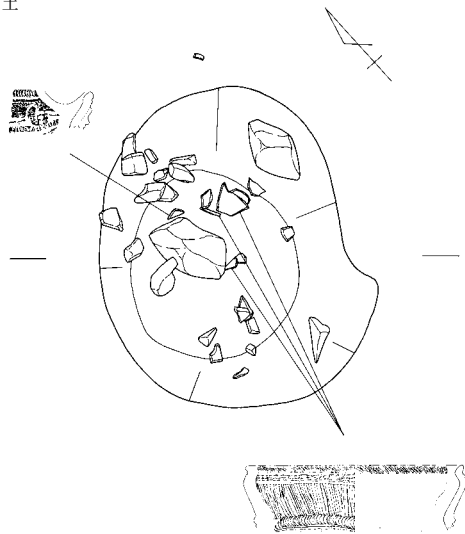
21～23・26は浅い平行沈線文を施文した土器である。21・23は縦位の羽状文であり、22・26は横位の羽状文である。22にはボタン状貼付文がみられる。26は焼成があまく、表面に剥離がみられる。破片の下部が若干肥厚しており、その直上にはその肥厚部にそって結節沈線文が引かれている。なお、23の内面にはススが付着している。

24は平行沈線文を地紋にもち、その上にヘラ切りの結節浮線文を施文している。また内面上部にススの付着がみられる。

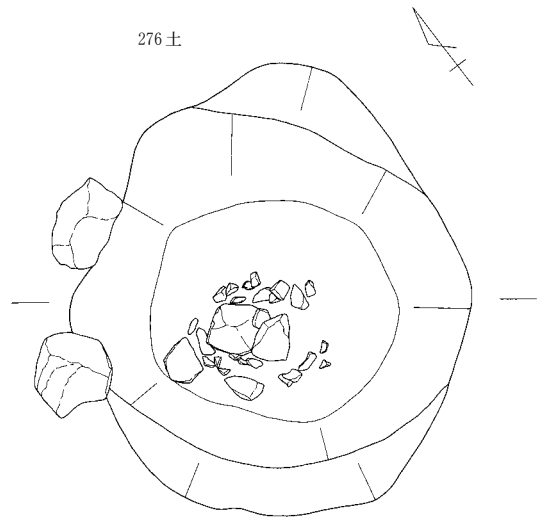
25は口縁部の破片である。口唇部には竹管状工具の押圧によってキザミが入れられ、外面および、内面の上端部に縄文を施文している。

27は底部の破片である。竹管状工具による沈線によって曲線文を引き、その間隙に、細いヘラ状工具によって結節沈線文を充填している。

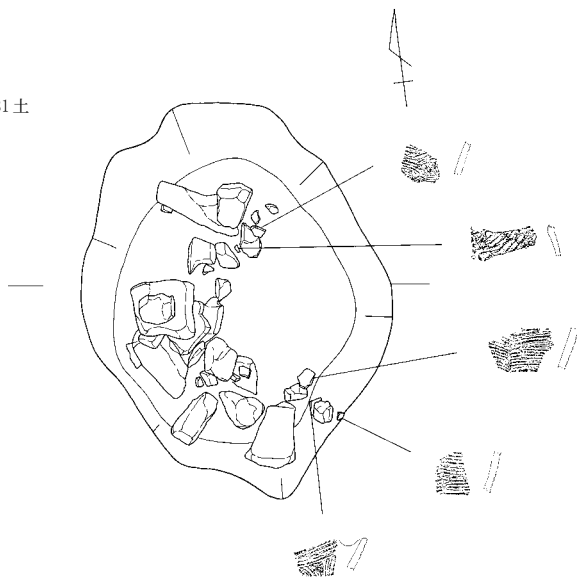
275土



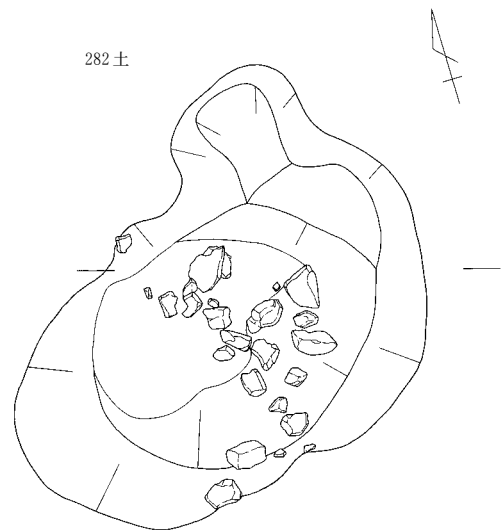
276土



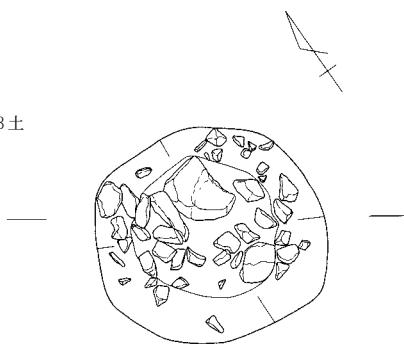
281土



282土



283土



0 1m

第112図 土坑遺構平面図(3)

第286号土坑（第113図、第128図）

E N-31より出土している。直径約1.2mの平面円形で、深さ約40cmを測る。覆土は暗褐色系の土で占められ、炭化物の混入もみられた。この土坑も第285号土坑と同様に北部に礫が出土している。

遺 物（第138図28～42、第144図5）

第138図28～42は土器である。28～32は結節浮線文が施文された土器である。28～30は浅い平行沈線文を地紋にもち、ヘラ切りによる結節浮線文を施文している。30は口縁部である。波頂部が丸みをおびている。焼成があまく、結節浮線文も不鮮明である。

31・32は半截竹管状工具を使用した押し引きによる結節浮線文を施文している土器である。31は外面にススが付着し、地紋はみられない。32は丁寧な作りで、色調は淡褐色である。

33～35は、口縁部上端部に結節沈線文を施文している土器である。胎土に砂粒を多く混入し、焼成はややあまい。33は平口縁である。34は波頂部に丸みを持つ、波状口縁である。いずれの破片も結節沈線文の施文前に、平行沈線文を施文している。35は体部の破片である。上半部に強めの平行沈線による縦羽状文が施文され、その下部には条線状の浅い平行沈線文が斜位に引かれている。なお、破片上部にボタン状貼付文の痕跡が1個みられる。

40は体部の破片である。平行沈線文による施文の後、2個1対のボタン状貼付文が貼り付けられている。また、内面にはススが付着している。

37～39は浅い平行沈線文を施文している体部の破片である。比較的厚手の土器で、表面に剥離がみられる。なお、38の破片下部には縦位の平行沈線を施文後に、横位に平行沈線文を引いている。

41・42は土製円盤の破片である。

第144図5は黒曜石である。図下部に小剥離痕がみられ、剥片石器と考えられる。

第289号土坑（第128図）

E M-24から出土している。プランは約1.3×1.2mの楕円形で、深さ約40cmである。底面には一部抉れるように掘られているが、詳細は明確にできない。なお、覆土は暗褐色系の土が主体であり、底面付近からは拳大の礫が出土している。

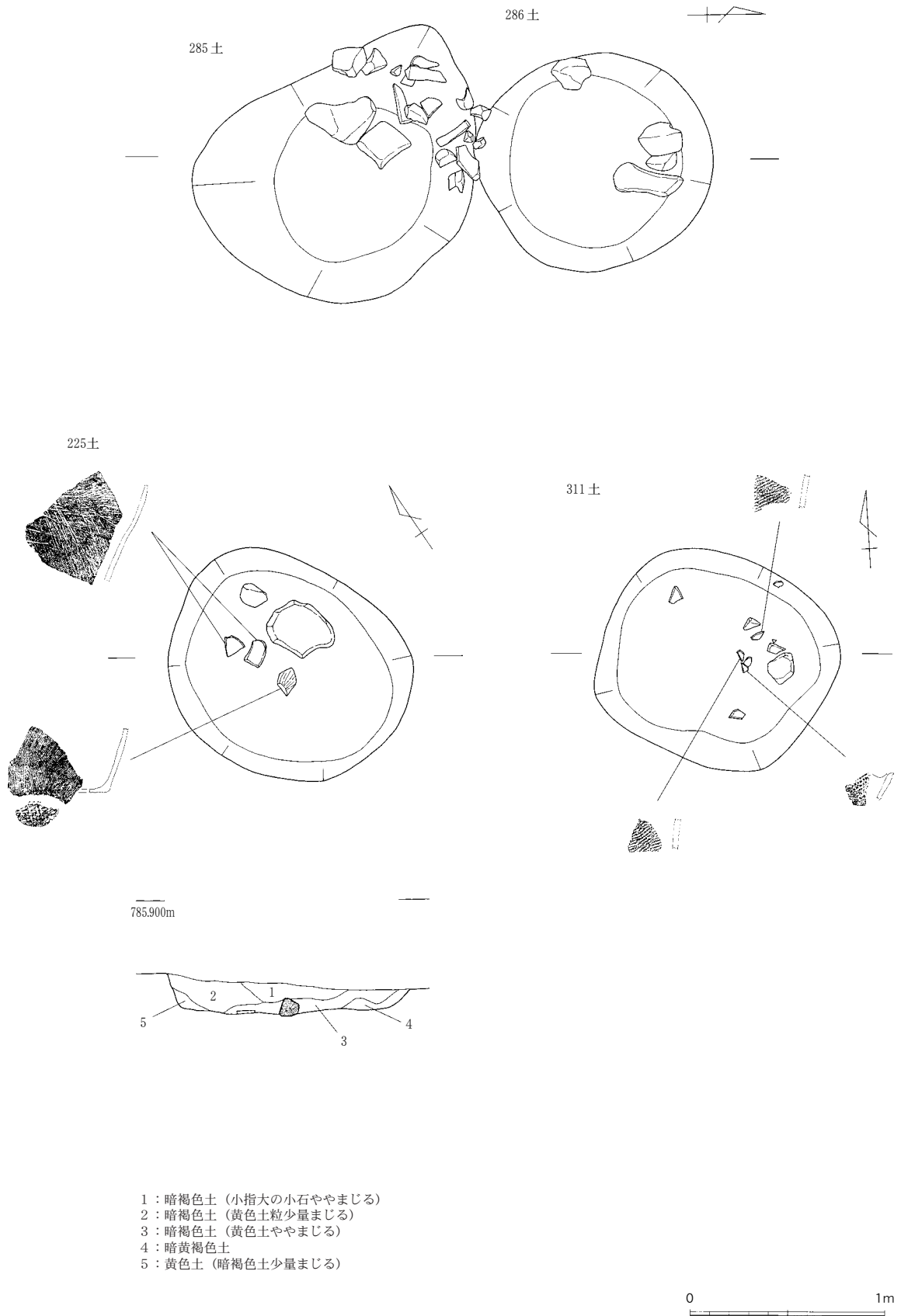
遺 物（第139図2～6）

2は橋状把手を有する土器である。口縁部上部に平行沈線で区画を引き、その後、橋状把手とその下部の隆帯を貼付している。なお、これらの隆帯および、口縁部上端部はその後ヘラ切りによるキザミを施文している。また、体部には短い平行沈線を梯子状に施文し、その後両脇に平行沈線を引いている。この土器片の外面の一部にはススの付着がみられる。4は2と同一個体である。口縁部上端部にヘラ切りによるキザミを持ち、口唇部に三角形の印刻文と、渦巻状の装飾を加えている。

3・5・6は平行沈線を施文している土器である。3は口縁部で、横位の平行沈線が施文されている。6は体部の破片と考えられ、上半部には平行沈線による幾何学文様が施文され、三角形の印刻文が彫り込まれている。また、下半には縄文が施文され、その後文様帯の区画として平行沈線を引いている。なお、内面はミガキ調整が施されている。5は底部である。横位の平行沈線を条線状に施文している。

第290号土坑（第114図、第128図）

E N-30から出土している。プランは直径約1mの円形で、深さは約70cmを測り、断面袋状の形態で、覆土上層に炭化物の混入もみられた。この土坑の覆土中層までには多量の礫が出土し、土器片も多数出土している。



第113図 土坑遺構平面図(4)

遺 物 (第140図、第141図 1～14)

第140図は縄文を施文した土器である。1・2は口唇部に無節の縄文原体を押し当てて、キザミ状の文様を施している。また外面にも無節の縄文を施文している。なお、内面は丁寧なミガキ調整が確認できる。

3～11・14～22は雲母を多量に含み、砂粒の含有した胎土であり、外面には無節の縄文が施文されていることから、同一個体と考えられる。なお、3の上部の一部、5～9・11・14の外面にススが付着している。

12・13は同一個体と考えられる。前者と同様に無節の縄文を施文している。

23は接合痕の部分が内面で肥厚しており、そこを中心にナデ調整が行われている。

25は縄文を地紋として、そこに隆帯を貼り付け、ヘラ状工具によるキザミを加えている。

26は口縁部の破片である。口唇部に縄文原体を押圧して装飾を加えている。

第141図 1～10は結節沈線文を施文している土器である。1～3・7は竹管状工具による沈線文を施文した後、空白部に半截竹管状工具による結節浮線文を充填している。雲母が多量に混入しており、胎土の状況から、これらが同一個体と考えられる。また、1～3の外面の一部、および7の外面全面にススの付着がみられる。

4～6・8～10はやはり竹管状工具によって沈線文を引いた後、半截竹管状工具を使って結節沈線文を施文しているが、前者にくらべて彫りが浅く、刺突文状になっている。また、施文箇所によっては平行沈線文になっている部分もある。内面にはミガキ調整を行っているが、成形時の凹凸が完全にならされていない。また、6・9・10の外面の一部にススの付着がみられる。これらの土器片も同一個体と考えられる。

12～14はレンズ状文を施文している土器である。12・14は口縁部の破片、13は底部の破片である。13の内面の上部および、14の外面の上部にはススが付着している。

第311号土坑 (第113図・第131図)

E T-26から出土している。直径約1.2mの不整円形で、深さは約50cmを測る。

遺 物 (第139図23～32)

23・24は、半截竹管状工具を使用した結節浮線文を施文している。23は波状口縁の破片である。地紋には平行沈線文が斜位に引かれ、口縁部にそって3本、結節浮線文が施されている。焼成はややあまく、外面にススが付着している。24は内面にミガキ調整がみられる。

25・27はレンズ状文を施文している土器である。内面にはミガキ調整が施されている。27は底部である。斜位の平行沈線が斜格子目状に施文されている。

26は平行沈線文を条線状に横位に施文している。破片下部に傾斜の変化点があり、この部分が肥厚している。

28～32は縄文が施文されている。28は内面にミガキ調整がみられる。外面にはススが付着している。29・30も外面にススが付着し、内面にはミガキ調整がおこなわれている。

第255号土坑 (第113図)

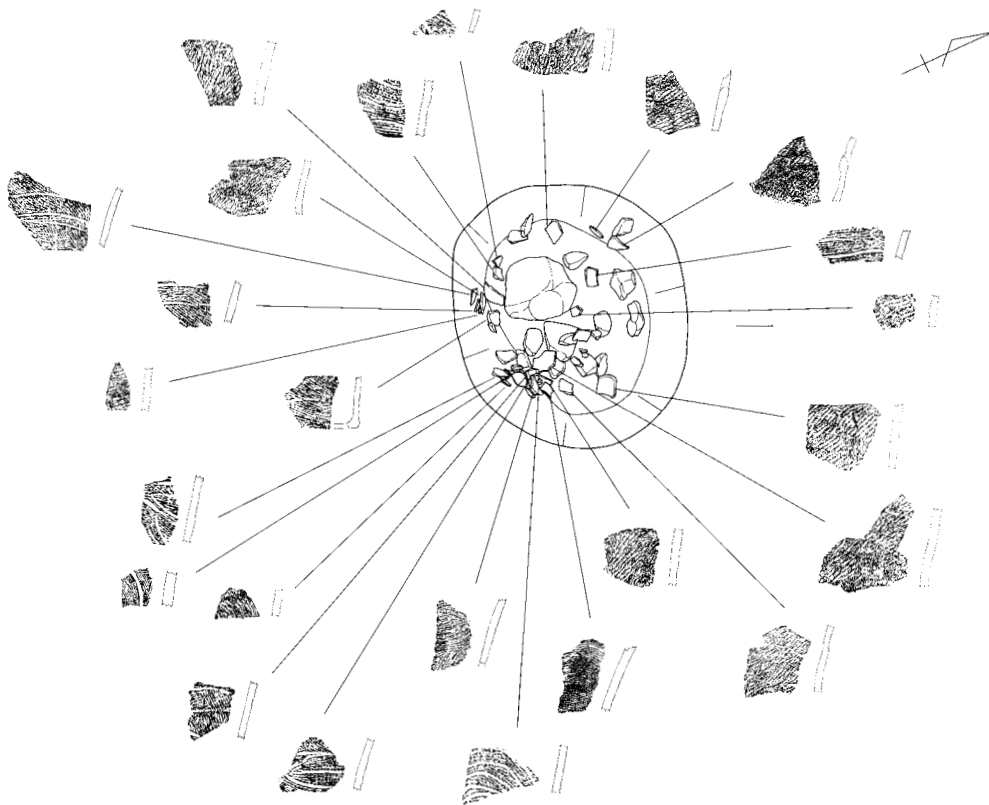
D T-30から出土している。平面プランは約1.3×1.2mの楕円形であり、深さは約40cmであった。この土坑は暗褐色系の覆土に覆われており、底面からは礫とススにまみれた土器片が出土した。

遺 物 (第141図15～17)

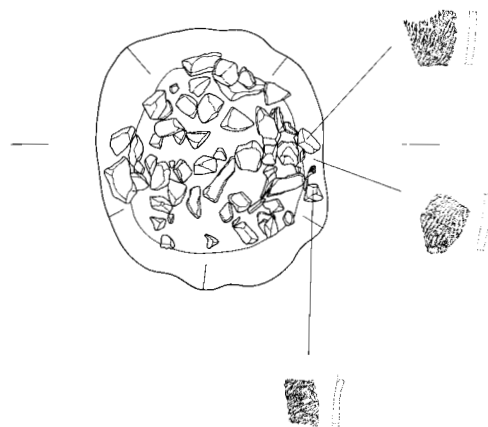
15～17は同一個体である。外面に斜位の条痕文を施文した土器片である。内面は板状工具によって斜位のナデ調整が行われている。また、内、外面共にススが多量に付着している。

この土器から、この土坑は弥生時代前期と考えられる。

290土 No.1



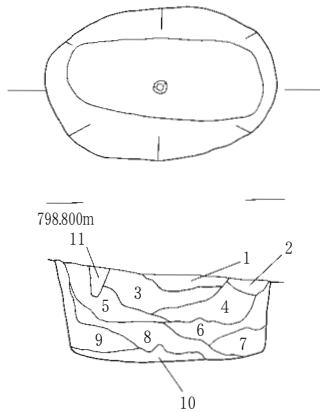
290土 No.2



第114図 土坑遺構平面図(5)

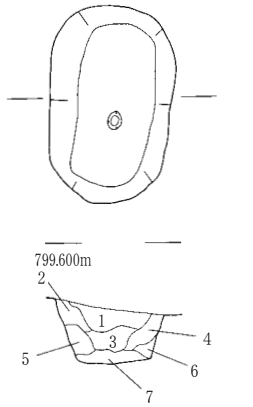
2. 土 坑

147 土



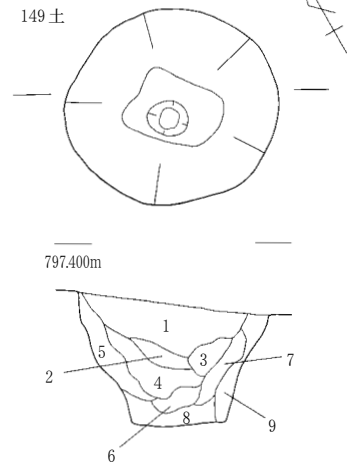
- 1: 暗褐色土 (黄色小粒ややまじる)
- 2: 暗褐色土 (黄色土多くまじる)
- 3: 暗褐色土 (やや黄色味をおびる)
- 4: 暗褐色土 (黄色土少量まじり、黄色土粒多くまじる)
- 5: 暗褐色土 (黄色味をおび、黄色土多くまじる。しまっている)
- 6: 暗黄色土 (黄色土多くまじる)
- 7: 黄色土 (暗黄色土まじり、やわらかい)
- 8: 黄色土 (暗黄色土多くまじり、しまっている)
- 9: 暗黄色土 (黄色土粒多くまじる)
- 10: 暗黄色土 (しまっている)
- 11: カクラン

148 土



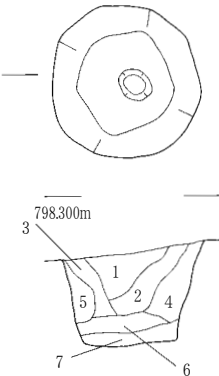
- 1: 黒褐色土 (黄色小粒少量まじる)
- 2: 暗褐色土 (黄色土まじる)
- 3: 黒褐色土 (黄色小粒ややまじり、しまっている)
- 4: 黒褐色土 (黄色土ややまじる)
- 5: 暗黄褐色土 (黄色土、黄色土粒ややまじる)
- 6: 暗黄褐色土 (黄色土ややまじる)
- 7: 暗黄褐色土 (しまっている)

149 土



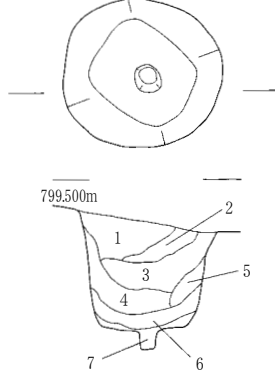
- 1: 暗褐色土 (黄色小粒多くまじる)
- 2: 暗褐色土 (黄色小粒ややまじる)
- 3: 暗褐色土 (やや黄色味をおび、黄色小粒ややまじる)
- 4: 暗褐色土 (黄色味をおび、黄色土粒ややまじる)
- 5: 暗黄褐色土 (黄色土多くまじる)
- 6: 暗黄色土 (暗褐色土まじる)
- 7: 暗黄褐色土 (暗黄色土まじり、黄色小粒ややまじる)
- 8: 褐色土 (ややしまり、黄色味をおびる)
- 9: 暗黄色土 (暗褐色土多くまじる)

151 土



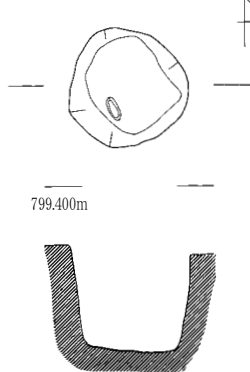
- 1: 黒褐色土 (小石少量まじる)
- 2: 黒褐色土 (小石少量まじり、暗黄色土少量まじる)
- 3: 暗褐色土 (暗黄色土少量まじる)
- 4: 暗黄褐色土 (黄色土まじる)
- 5: 暗黄色土 (暗黄褐色土まじる)
- 6: 暗黄褐色土 (暗黄色土少量まじり、しまっている)
- 7: 暗黄褐色土 (しまっている)

154 土

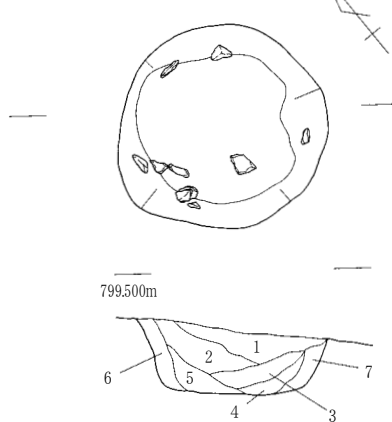


- 1: 黒褐色土 (黄色土少量まじり、拳大の石まじる)
- 2: 黒褐色土 (小石ややまじる)
- 3: 暗褐色土 (やや黄色味をおび、黄色土ややまじる)
- 4: 暗褐色土 (黄色味をおび、暗褐色土多くまじる)
- 5: 暗黄色土 (暗褐色土多くまじる)
- 6: 暗褐色土 (ややしまっている)
- 7: 暗褐色土 (やや黄色味をおび、しまっている)

153 土



156 土

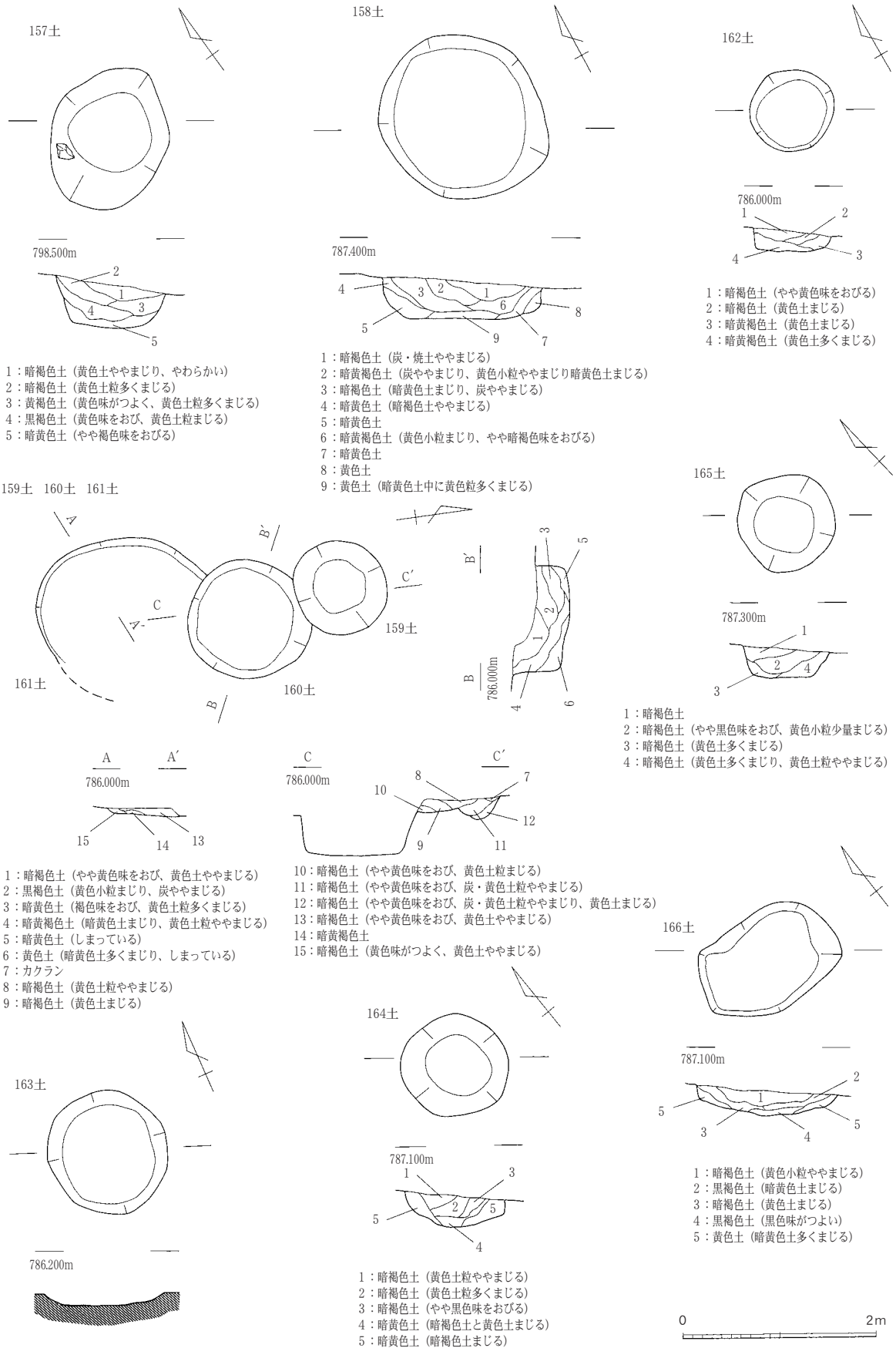


- 1: 褐色土 (やや暗く、炭ややまじる)
- 2: 褐色土 (暗黄褐色土多くまじる)
- 3: 褐色土 (暗黄褐色土と暗褐色土ややまじる)
- 4: 暗黄褐色土 (暗褐色土まじる)
- 5: 暗黄褐色土 (褐色土多くまじる)
- 6: 暗黄褐色土 (褐色味がつよい)
- 7: 黄色土 (やや褐色味をおびる)

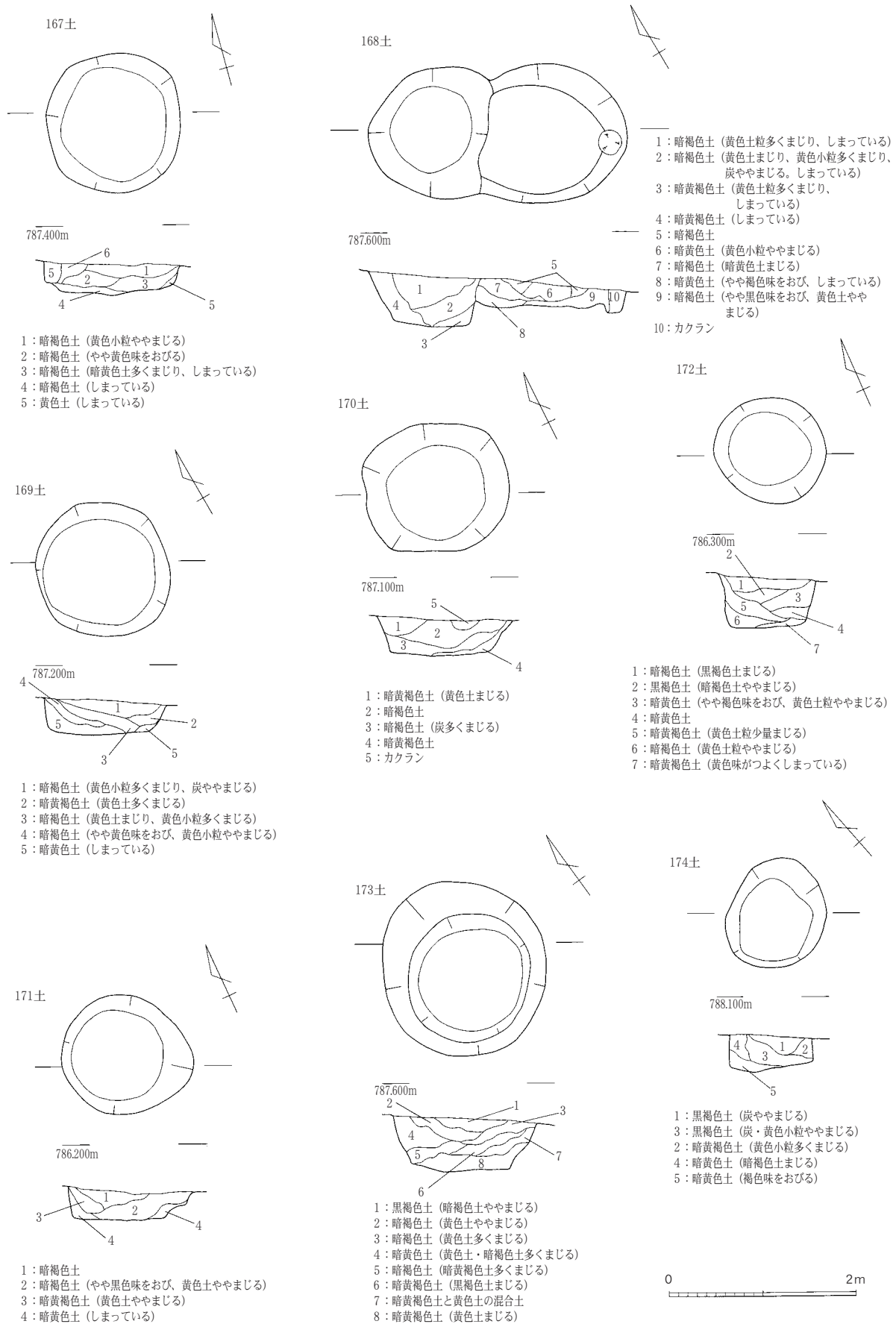
0 2m

第115図 土坑遺構平面図 (6)

第IV章 遺構と遺物

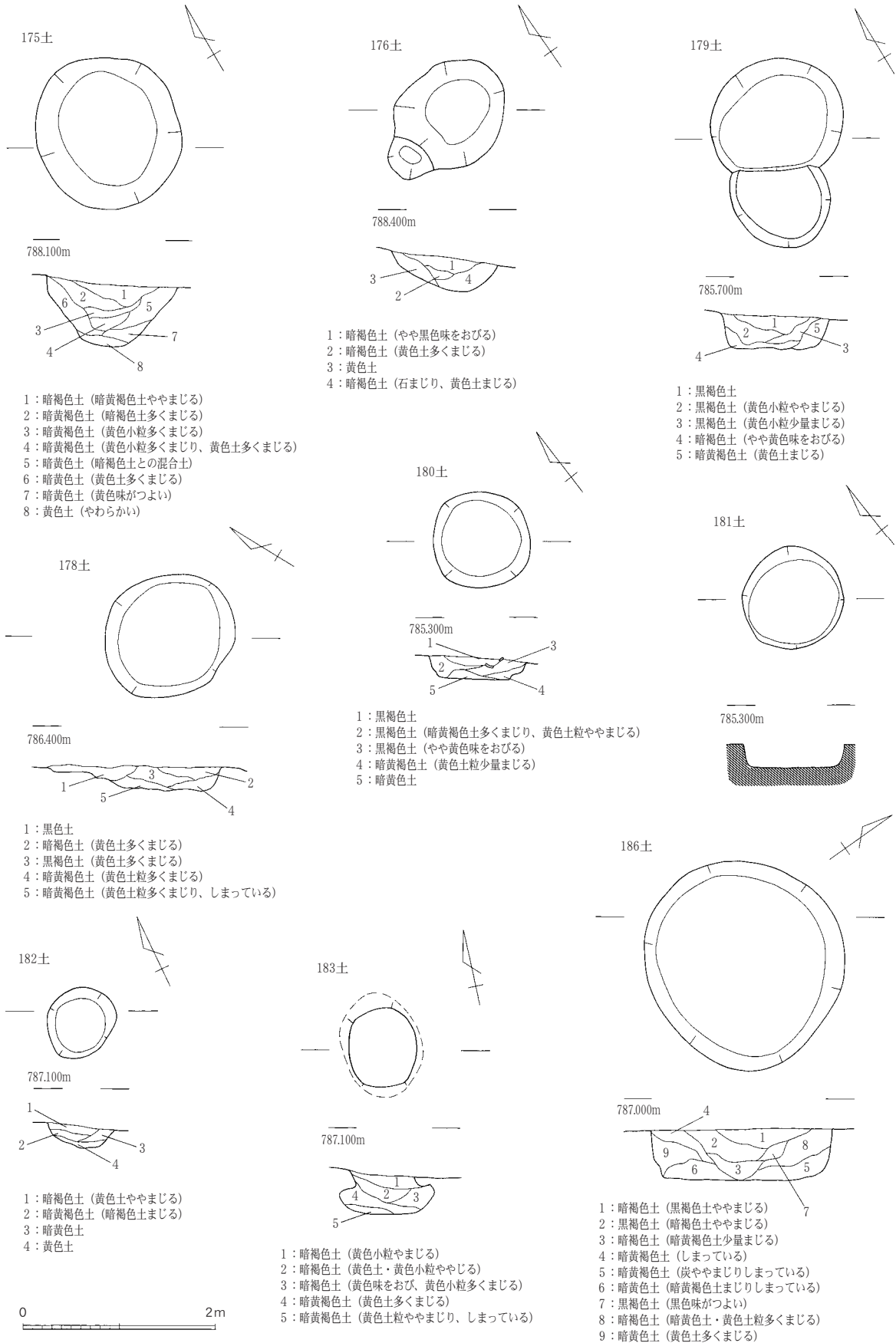


第116図 土坑遺構平面図 (7)

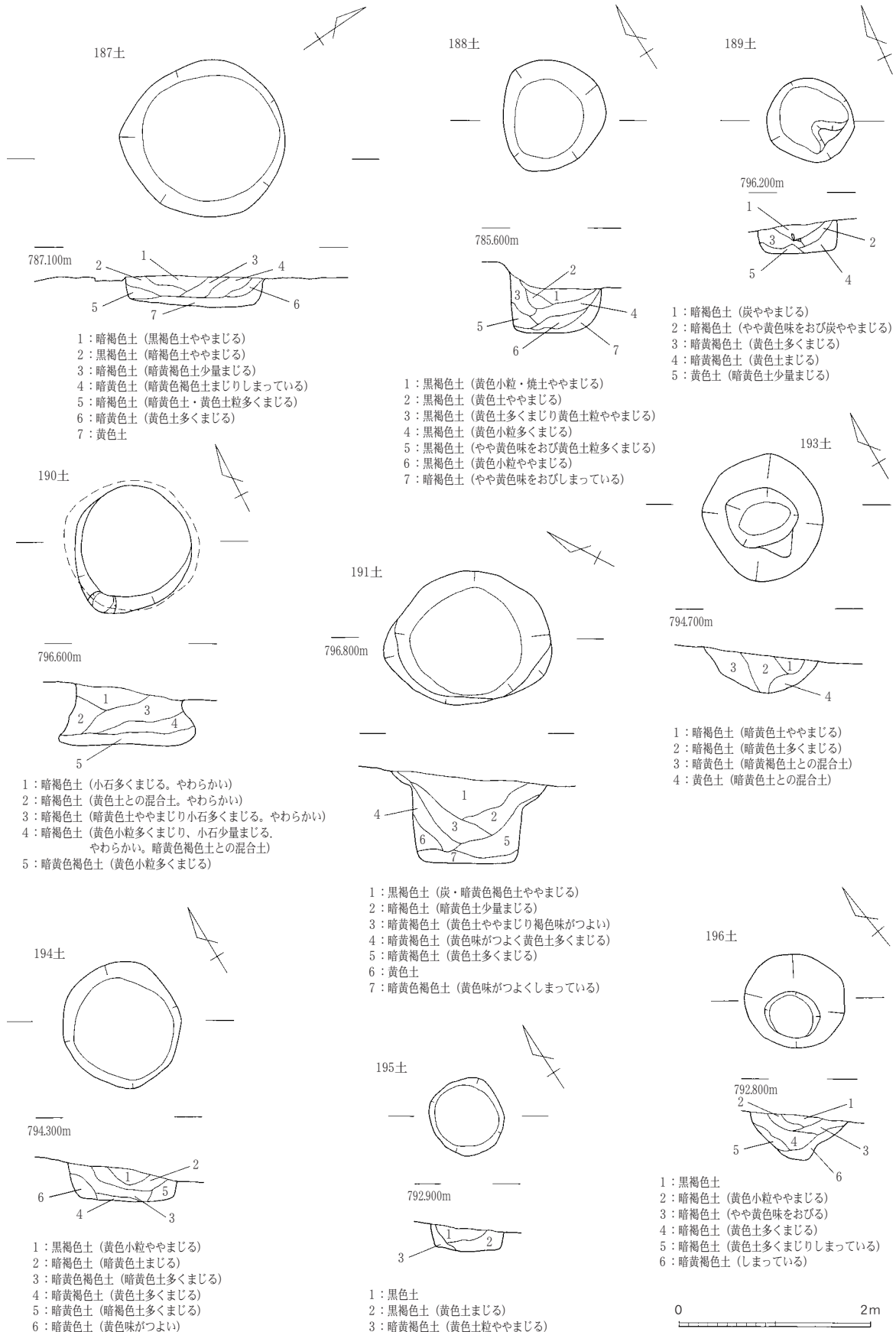


第117図 土坑遺構平面図 (8)

第IV章 遺構と遺物

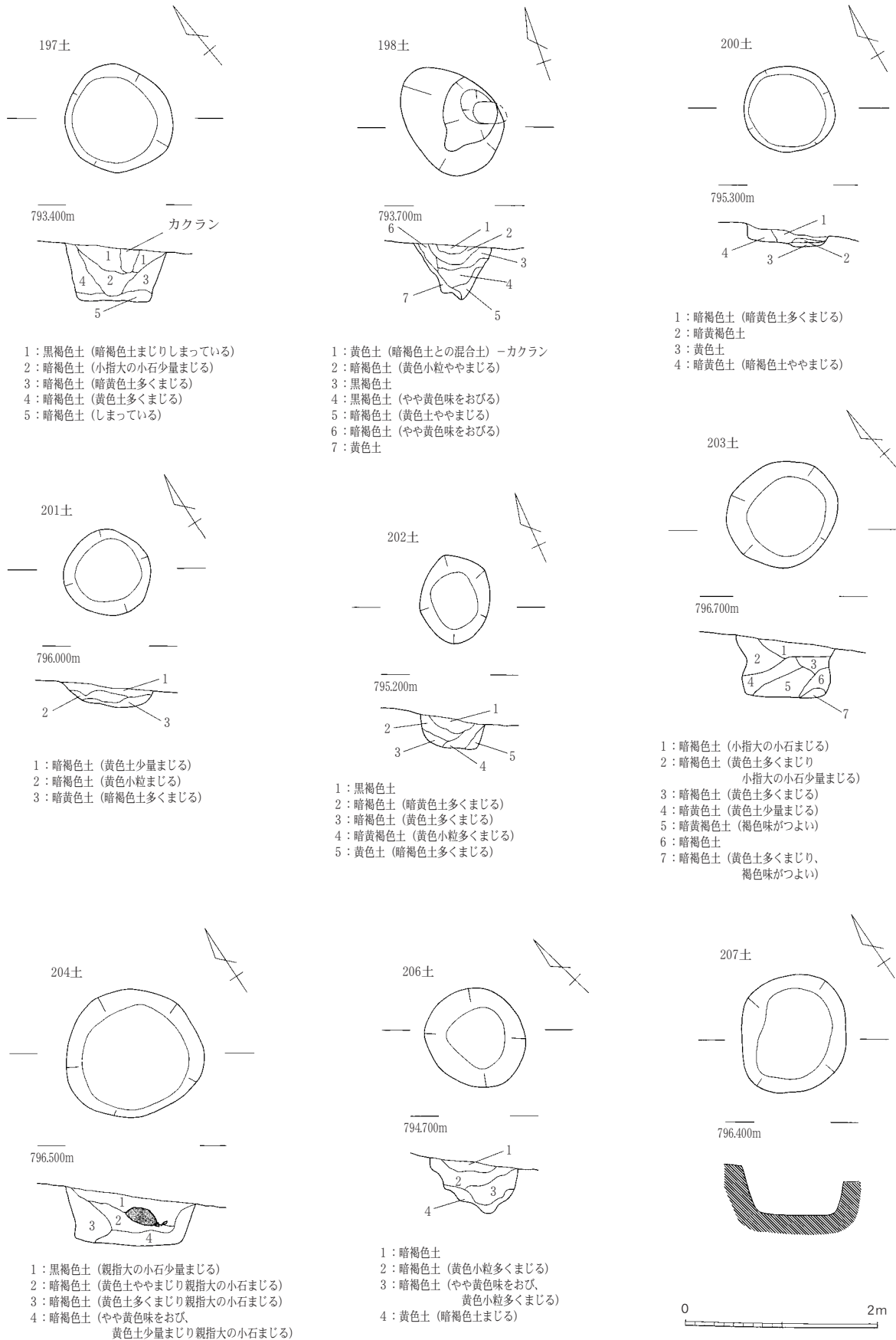


第118図 土坑遺構平面図(9)

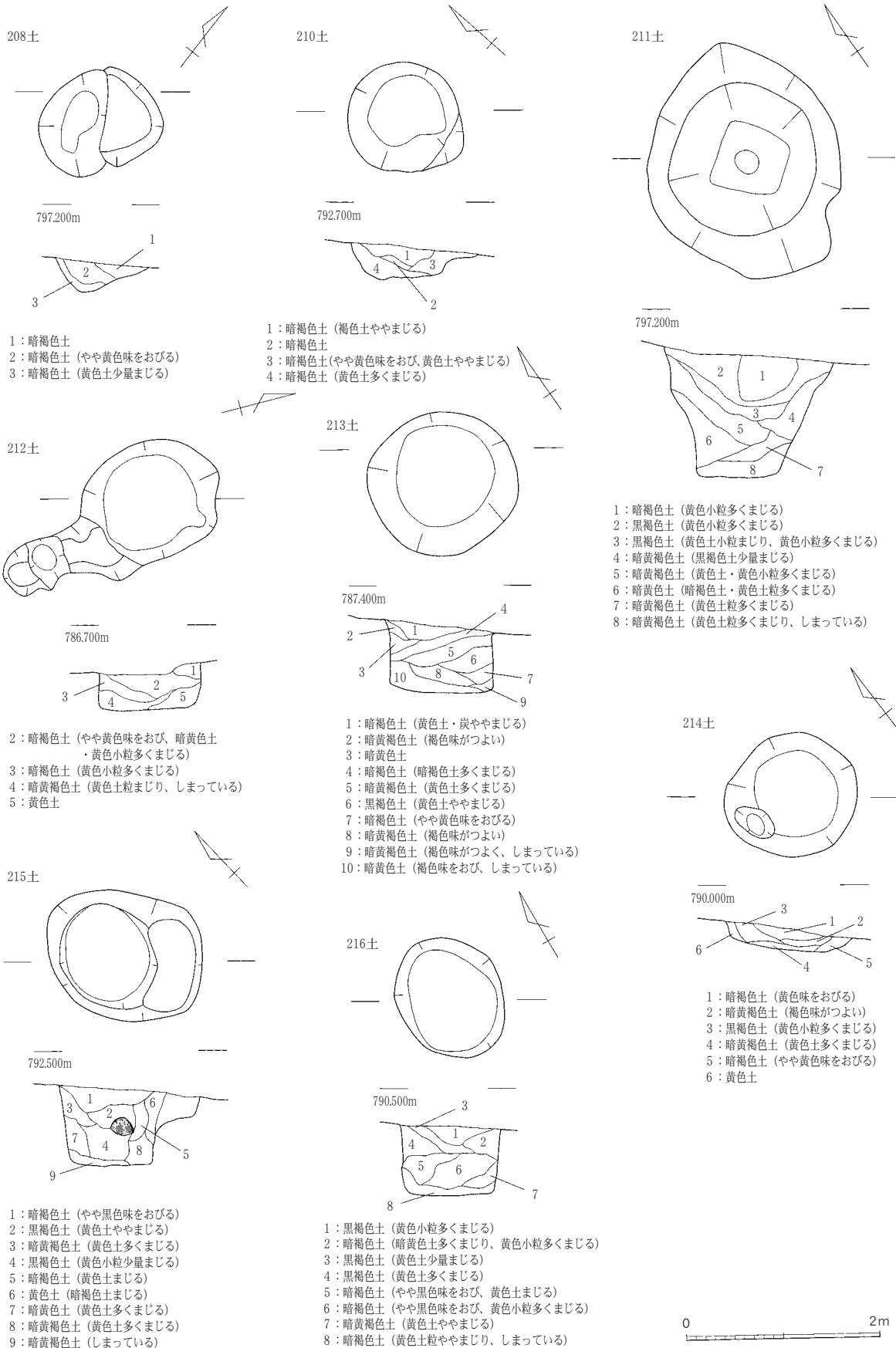


第119図 土坑遺構平面図 (10)

第IV章 遺構と遺物

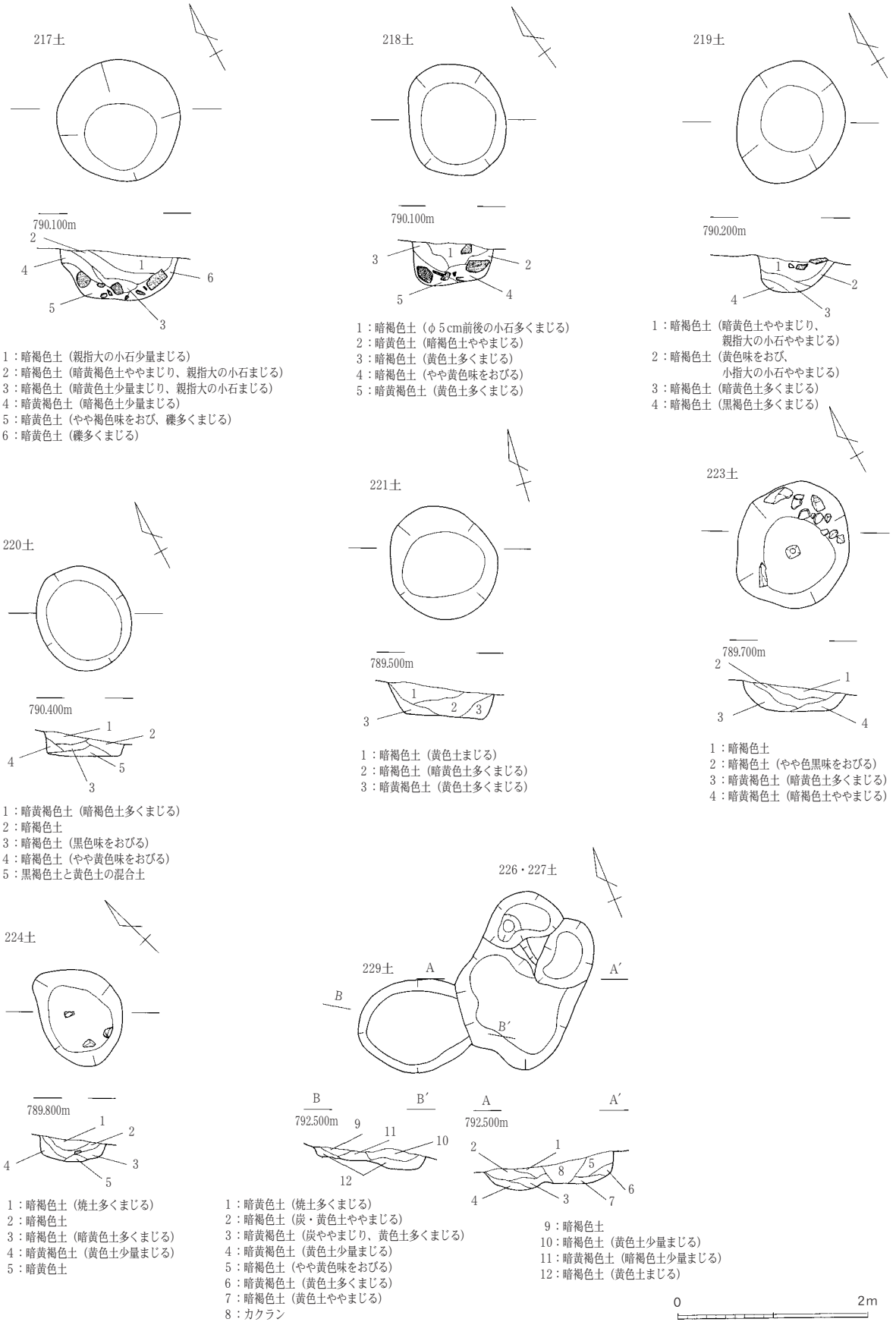


第120図 土坑遺構平面図 (11)



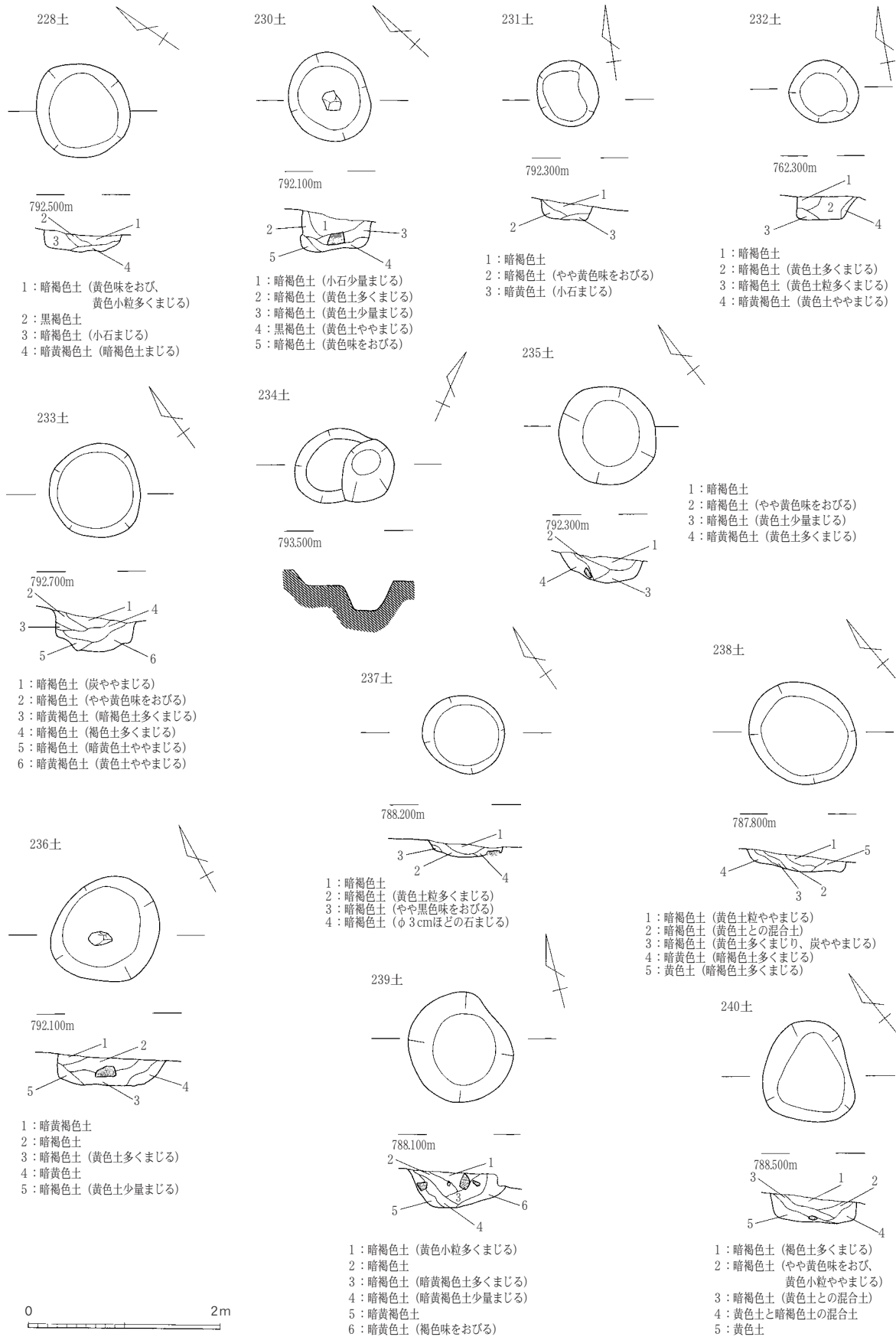
第121図 土坑遺構平面図 (12)

第IV章 遺構と遺物



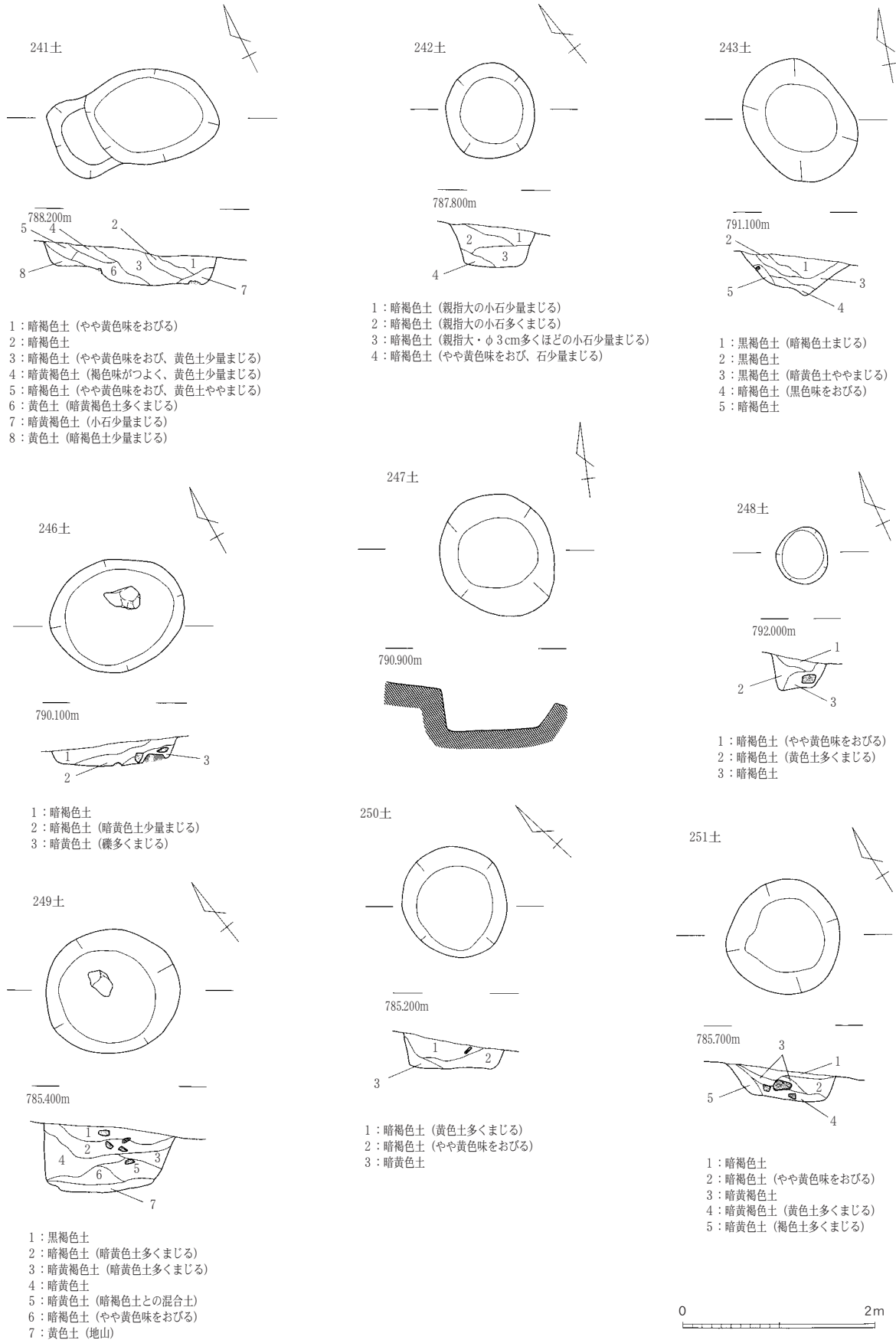
第122図 土坑遺構平面図 (13)

2. 土 坑



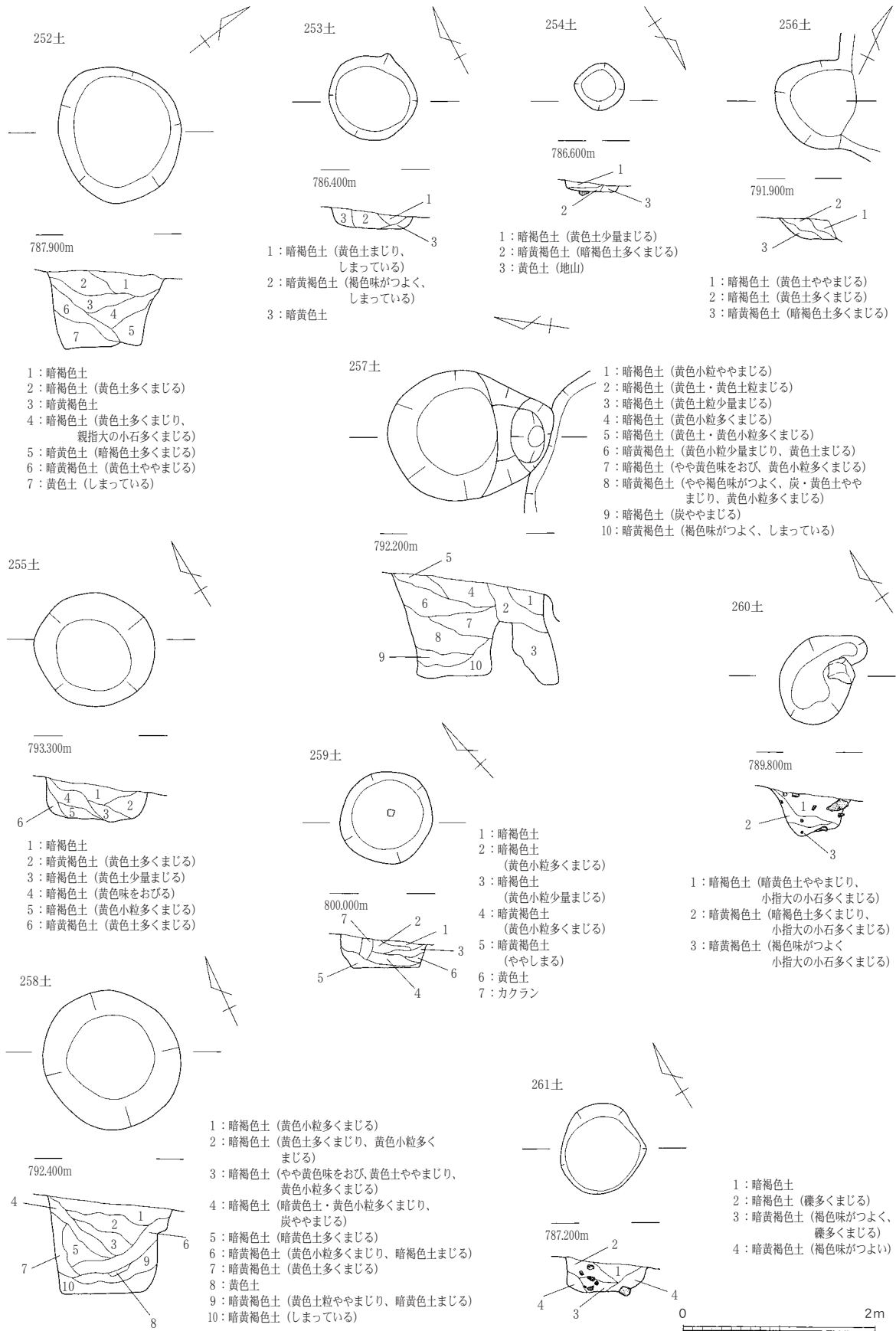
第123図 土坑遺構平面図 (14)

第IV章 遺構と遺物



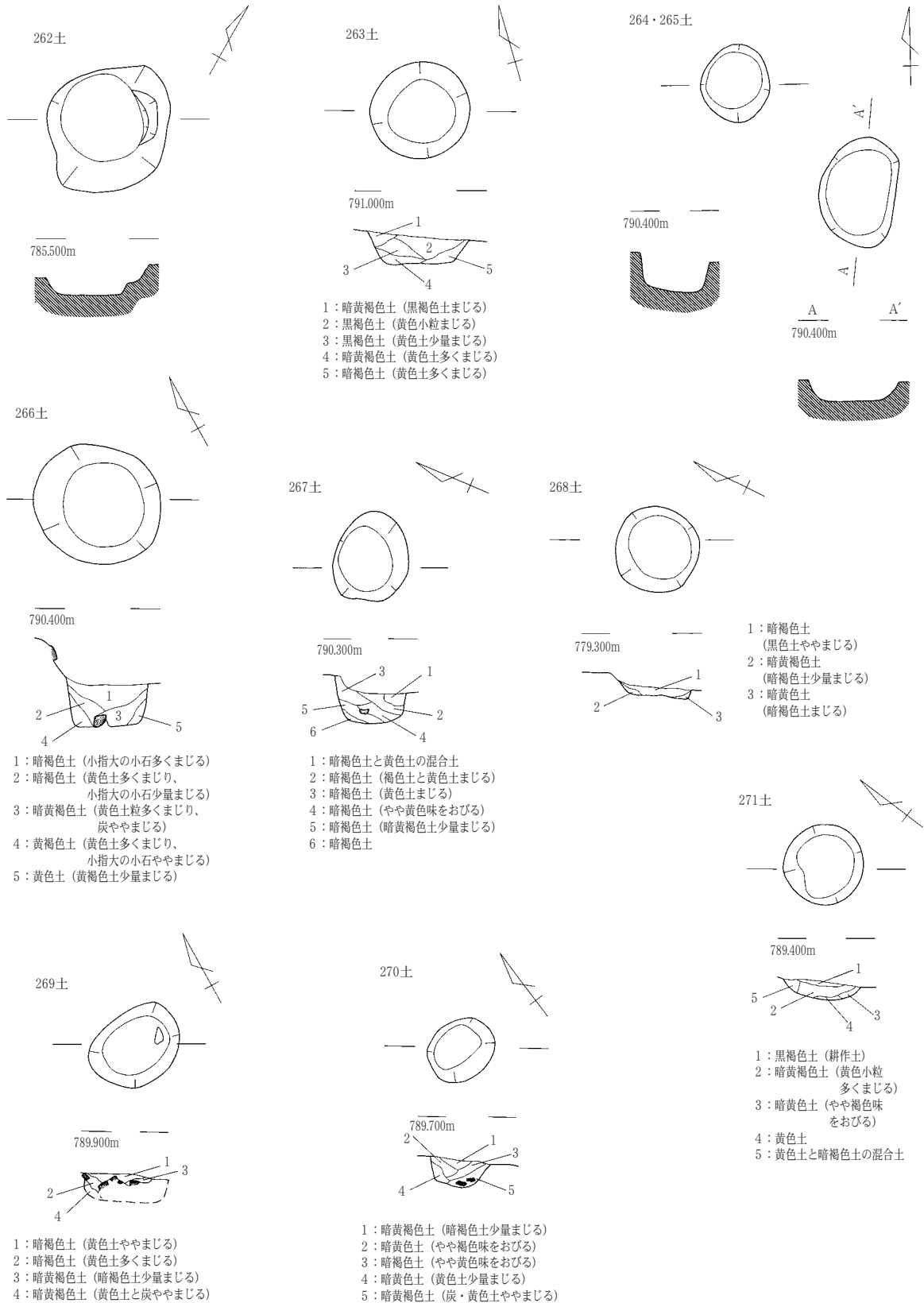
第124図 土坑遺構平面図 (15)

2. 土 坑



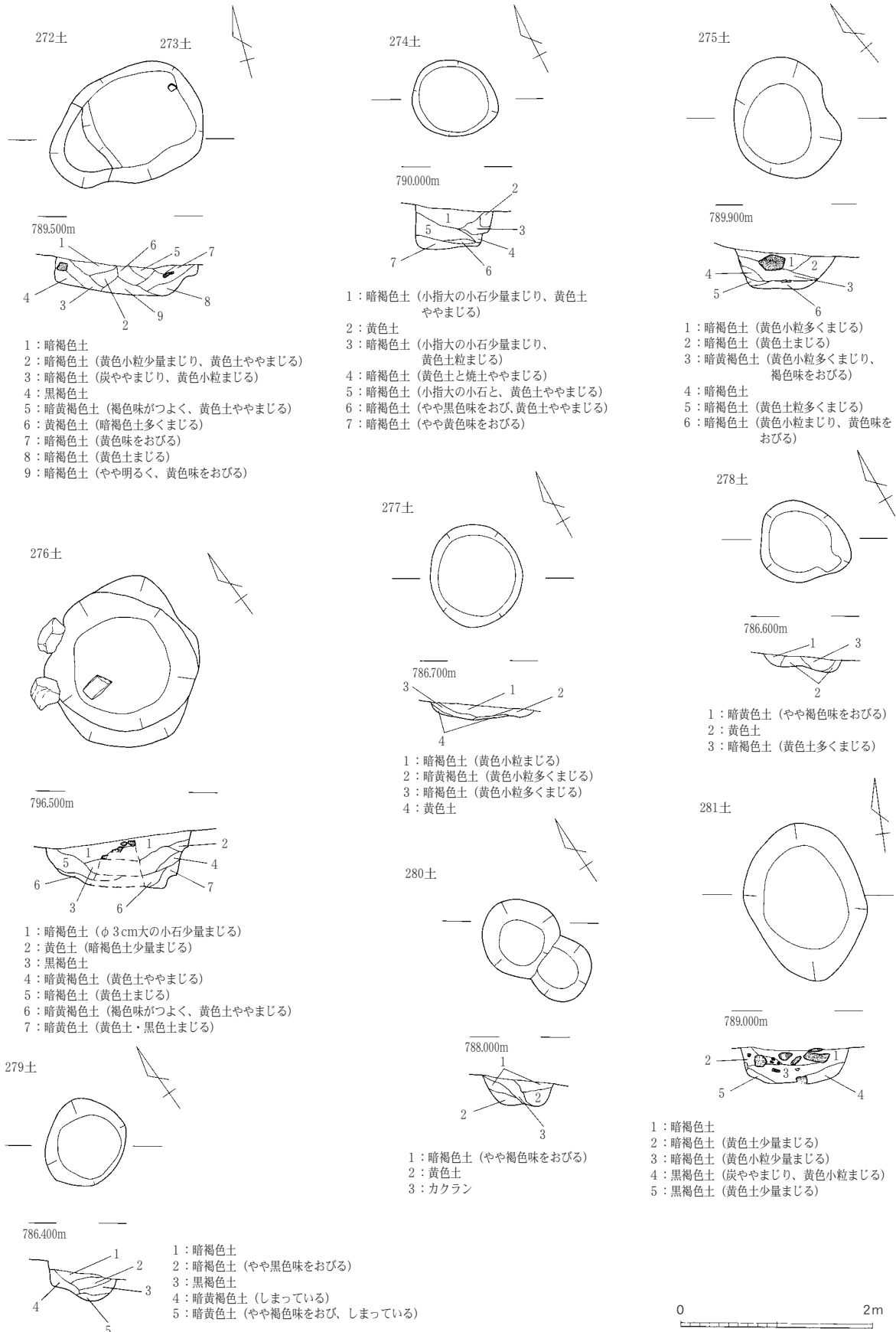
第125図 土坑遺構平面図 (16)

第IV章 遺構と遺物



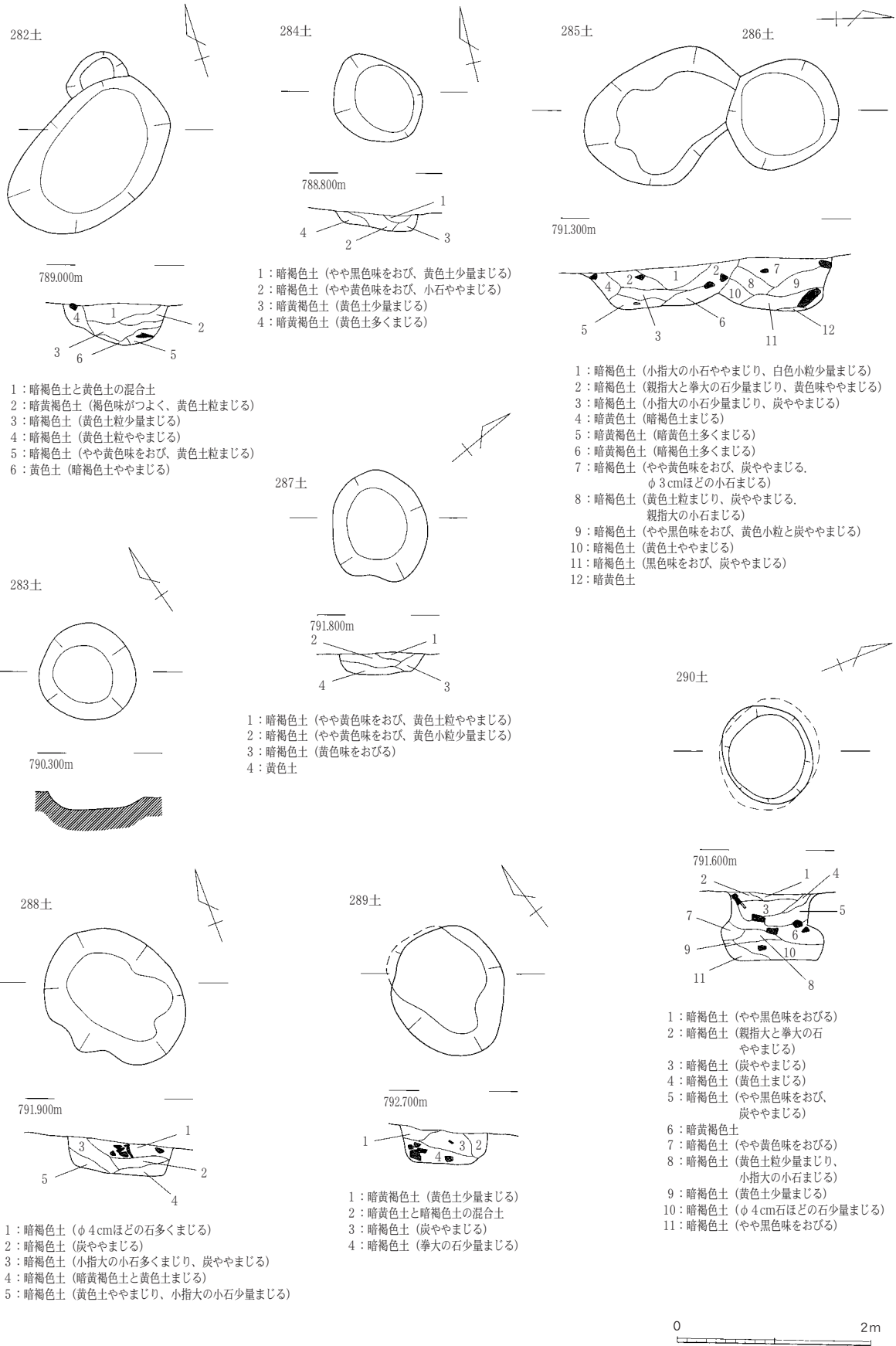
0 2m

第126図 土坑遺構平面図 (17)



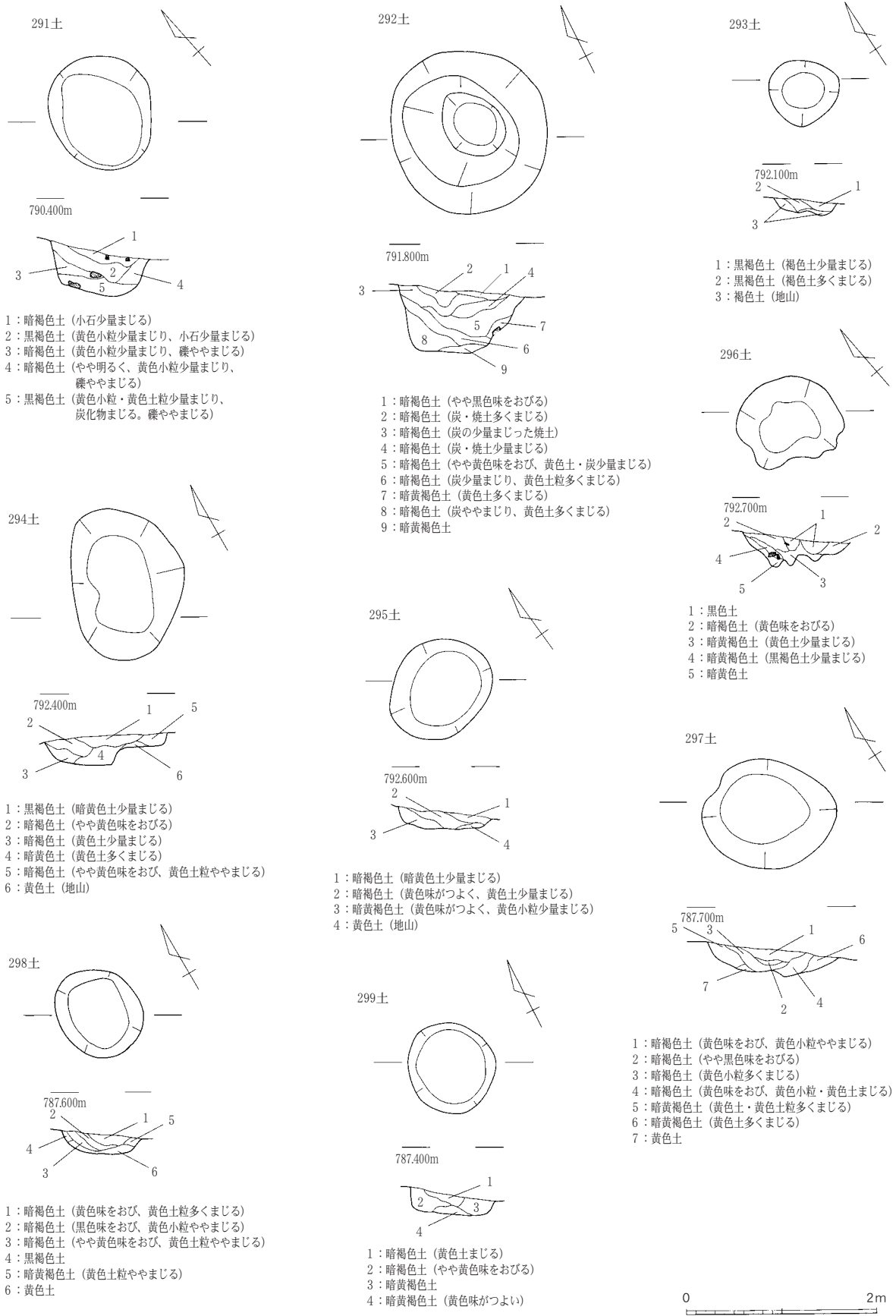
第127図 土坑遺構平面図 (18)

第IV章 遺構と遺物



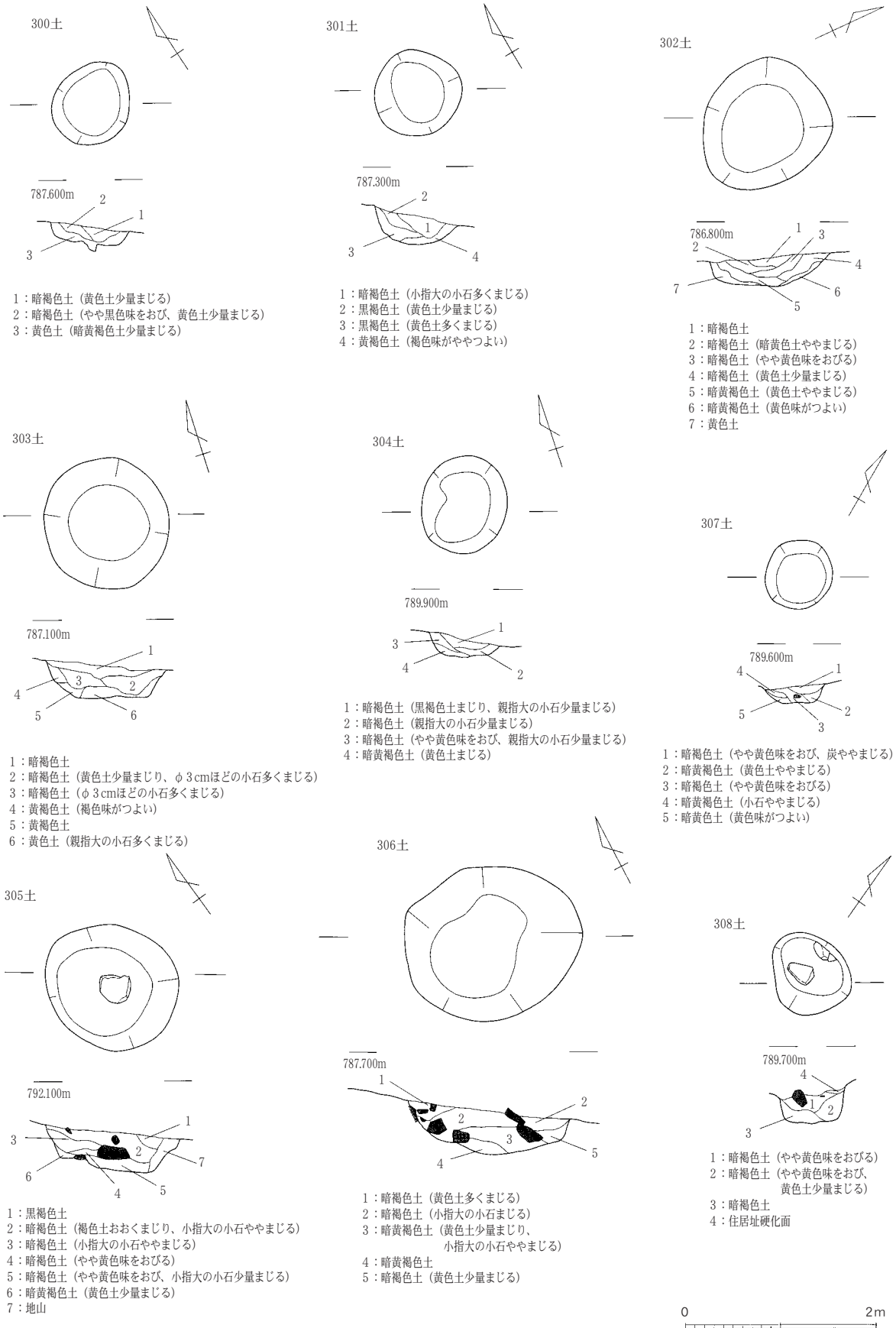
第128図 土坑遺構平面図 (19)

2. 土 坑



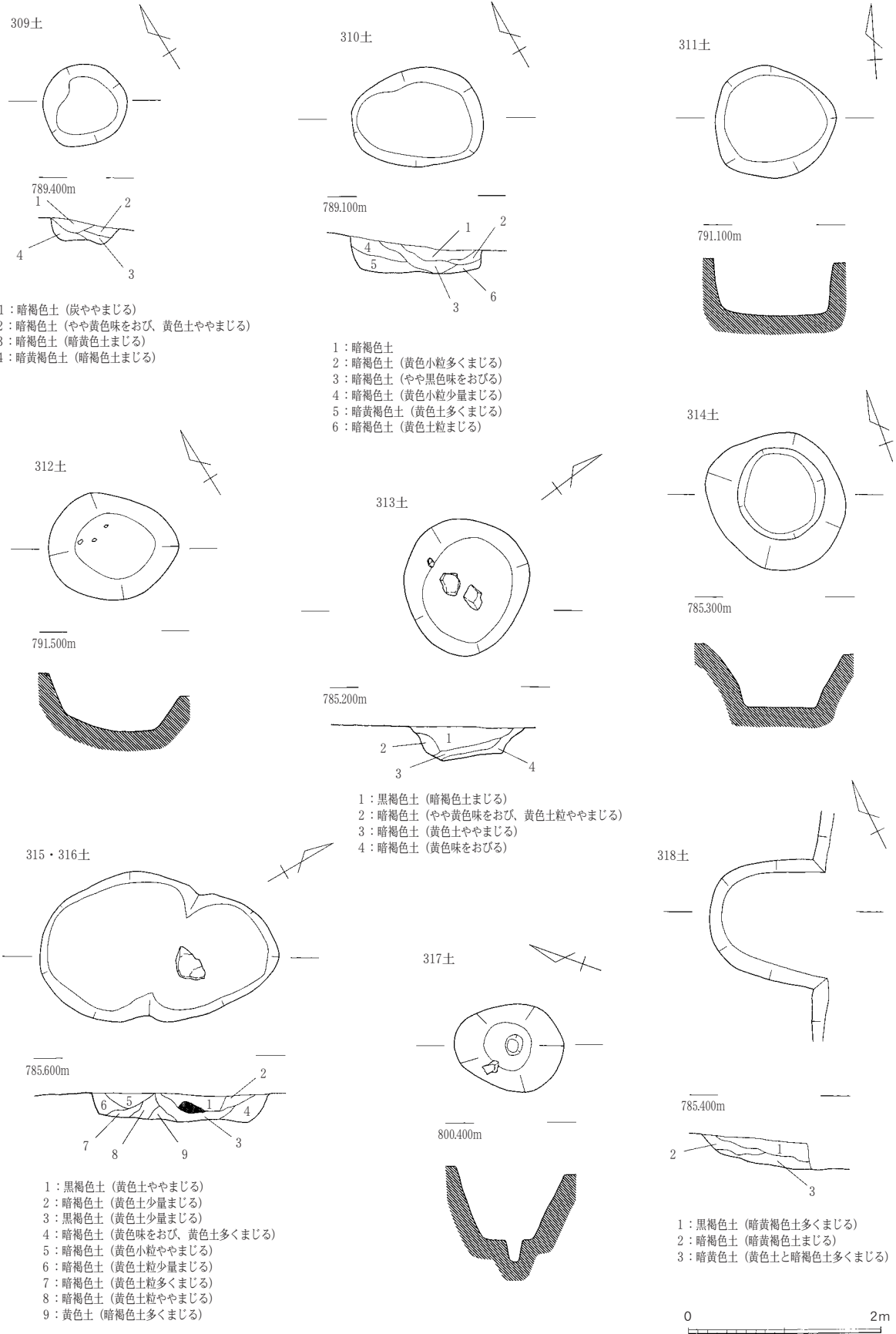
第129図 土坑遺構平面図 (20)

第IV章 遺構と遺物



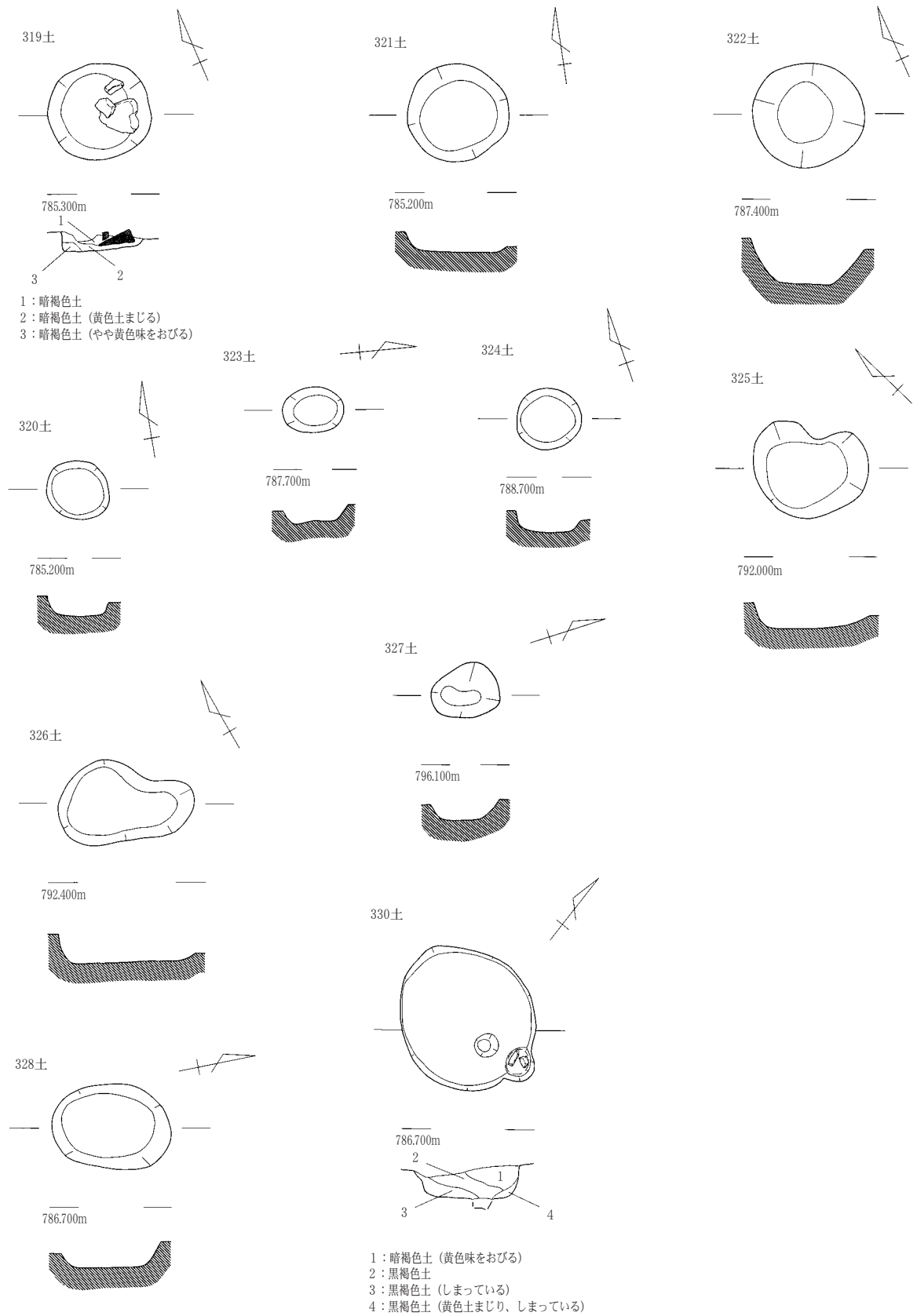
第130図 土坑遺構平面図 (21)

2. 土 坑



第131図 土坑遺構平面図 (22)

第IV章 遺構と遺物



0 2m

第132図 土坑遺構平面図 (23)

神谷所遺跡第2次調査土坑一覧

番号	出土位置	検出面				ピット		検出形態		所見	備考 (出土遺物等)	
		上端		下端		直径	深さ	検出面	底部			
		長径	短径	長径	短径							
147	CY-13	1.84	1.20	1.54	0.52	0.72	0.09	0.45	楕円形	長方形	落とし穴	
148	DA-9	1.58	0.98	1.30	0.62	0.42	0.12	0.13	楕円形	長方形	落とし穴	
149	DE-17	1.60	1.58	0.72	0.52	0.97	0.28	0.36	円形	不整形	落とし穴	
150	DF-15	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	実測図なし
151	DG-11	1.25	1.20	0.76	0.68	0.72	0.20	0.32	円形	不整形	落とし穴	
152	DH-8	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	実測図なし
153	DI-7	0.92	0.82	0.74	0.60	0.78	-	-	不整形	不整形	土坑隅にピット?あり.落とし穴	
154	DJ-5	1.28	1.24	0.82	0.67	0.85	0.22	0.30	円形	方形	落とし穴	
155												実測図なし.位置不明
156	DQ-1	1.64	1.62	1.20	1.20	0.58	-	-	円形	不整形	礫出土	
157	DO-7	1.54	1.22	0.86	0.82	0.39	-	-	楕円形	不整形		
158	DO-68	1.82	1.68	1.56	1.44	0.34	-	-	円形	円形	小竪穴?	
159	DR-75	1.28	1.20	1.00	1.00	0.51	-	-	円形	円形	160・161土坑・29住と重複.小竪穴?	
160	DS-75	1.00	0.96	0.54	0.52	0.63	-	-	円形	円形	159土・29住と重複	
161	DR-75	(1.90)	(1.60)	(1.80)	(1.50)	0.05	-	-	楕円形	楕円形	159土・29住と重複	削平により規模は推定
162	DP-76	0.88	0.84	0.71	0.66	0.17	-	-	円形	円形		
163	DP-80	1.30	1.20	1.04	0.96	0.11	-	-	円形	円形	断面皿状.ごく浅い	
164	DH-73	1.22	1.06	0.70	0.58	0.28	-	-	円形	円形		
165	DP-71	1.02	1.00	0.52	0.56	0.29	-	-	円形	円形		
166	DH-72	1.48	1.00	1.16	0.79	0.19	-	-	不整形	不整形	断面皿状	
167	DM-69	1.50	1.42	1.18	1.09	0.26	-	-	円形	円形	小竪穴?(一部にカクランはいる)	
168	DM-67	1.30	(1.26)	0.82	0.86	0.53	-	-	円形	円形	土坑2基重複	
		(1.70)	1.50	1.50	1.16	0.19	-	-	楕円形	楕円形		
169	DN-69	1.46	1.42	1.18	1.10	0.31	-	-	円形	円形		
170	DO-70	1.52	1.36	1.04	1.02	0.38	-	-	円形	円形	位置は推定	
171	DS-73	1.42	1.30	0.96	0.96	0.32	-	-	楕円形	円形		
172	DS-72	1.20	1.10	0.84	0.76	0.55	-	-	円形	円形		
173	DV-59	1.92	1.82	1.14	1.10	0.52	-	-	円形	円形	落とし穴	
174	DU-55	1.20	1.00	0.88	0.78	0.34	-	-	円形	不整形		
175	DX-53	1.62	1.48	1.20	1.00	0.71	-	-	円形	円形	断面挿鉢状	
176	DX-51	(1.20)	1.04	0.66	0.59	0.25	-	-	楕円形	不整形	底部傾斜.ピットと重複	
177	DW-66	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	実測図なし
178	DS-71	1.42	1.30	1.21	1.04	0.22	-	-	楕円形	楕円形	土坑と重複.浅い	
179	DX-69	1.42	1.34	1.20	0.98	0.37	-	-	楕円形	楕円形	土坑と重複	
180	EF-70	1.22	1.00	0.82	0.78	0.28	-	-	円形	円形		
181	DO-81	1.06	1.02	0.96	0.86	0.21	-	-	円形	円形		
182	DX-61	0.76	0.68	0.56	0.54	0.17	-	-	円形	円形	底部傾斜	
183	DX-61	0.72	0.70	1.08	0.82	0.40	-	-	円形	楕円形	袋状土坑	
184	DS-64	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	実測図なし
185	DO-67	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	実測図なし
186	DM-71	2.10	2.04	1.82	1.72	0.26	-	-	円形	円形	小竪穴?	
187	DL-70	1.74	1.63	1.43	1.29	0.27	-	-	円形	円形	小竪穴?	
188	DN-82	1.16	1.00	0.72	0.70	0.44	-	-	円形	円形	46住と重複	
189	DN-18	0.90	0.83	0.72	0.58	0.26	-	-	円形	不整形		
190	DI-21	1.38	1.26	1.42	1.39	0.53	-	-	円形	円形	袋状土坑	
191	DG-19	1.76	1.38	1.16	1.10	0.86	-	-	円形	円形		
192	DL-25	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	実測図なし
193	DI-27	1.28	1.18	0.54	0.30	0.41	-	-	円形	円形	断面挿鉢状	
194	DI-30	1.28	1.26	1.04	0.98	0.28	-	-	円形	円形		
195	DN-35	0.76	0.70	0.66	0.62	0.23	-	-	円形	円形		
196	DN-35	1.06	0.98	0.48	0.43	0.46	-	-	円形	円形	断面挿鉢状	
197	DN-32	1.12	1.06	0.88	0.86	0.54	-	-	円形	円形		
198	DO-30	1.20	0.94	0.33	0.20	1.17	-	-	楕円形	楕円形	不整形な土坑.底部に凹凸あり	
199												実測図なし.位置不明
200	DG-25	0.94	0.90	0.80	0.74	0.08	-	-	円形	円形	浅い	
201	DK-20	0.92	0.90	0.68	0.62	0.14	-	-	円形	円形	浅い	
202		0.90	0.70	0.60	0.46	0.32	-	-	楕円形	楕円形		位置不明
203	DU-10	1.19	1.06	0.83	0.76	0.55	-	-	円形	円形	一部袋状	
204	DW-10	1.44	1.34	1.11	1.02	0.51	-	-	円形	円形	覆土中層に礫出土	
205	DY-20	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	実測図なし
206	DO-18	1.06	0.98	0.60	0.56	0.45	-	-	円形	不整形	底部に凹凸あり	
207	DM-14	1.24	1.08	0.96	0.70	0.56	-	-	楕円形	楕円形		
208	DM-15	1.28	1.08	0.64	0.28	0.29	-	-	不整形	不整形	2基重複?.断面挿鉢状	

第IV章 遺構と遺物

番号	出土位置	検出面				ピット			検出形態		所見	備考 (出土遺物等)
		上端 長径	上端 短径	下端 長径	下端 短径	深さ	直径	深さ	検出面	底部		
209	DQ-24	—	—	—	—	—	—	—				実測図なし
210	DP-36	1.28	1.14	0.79	0.66	0.23	—	—	楕円形	不整形円形		
211	DC-19	2.48	2.00	0.72	0.68	1.27	0.27	0.27	不整形円形	方形	落とし穴	
212	DT-67	1.50	1.20	1.04	0.96	0.43	—	—	楕円形	円形	ピット.27住と重複	
213	DX-59	1.49	1.48	1.06	1.00	0.65	—	—	円形	円形		
214	DP-49	1.40	1.28	0.86	0.86	0.13	—	—	円形	円形	浅い	
215	DQ-36	1.50	1.30	1.00	0.84	0.78	—	—	楕円形	楕円形		
216	DO-46	1.32	1.06	1.10	0.88	0.68	—	—	楕円形	楕円形		
217	EN-39	1.28	1.25	0.74	0.68	0.48	—	—	円形	円形	覆土下層に礫出土	
218	EN-38	1.16	1.02	0.85	0.78	0.40	—	—	楕円形	楕円形	覆土下層に礫出土	
219	EO-37	1.22	1.12	0.70	0.64	0.29	—	—	楕円形	楕円形	断面楕円形.覆土上層に礫出土	
220	EL-37	1.10	0.98	0.86	0.72	0.21	—	—	楕円形	楕円形	浅い	
221	EL-36	1.23	1.10	0.90	0.68	0.31	—	—	楕円形	楕円形	浅い	
222		—	—	—	—	—	—	—				実測図なし.位置不明
223	DY-44	1.32	1.17	0.80	0.74	0.25	0.12	0.10	楕円形	楕円形	落とし穴.浅い.覆土中に礫出土	
224	DV-75	1.12	0.88	0.78	0.61	0.19	—	—	楕円形	楕円形	覆土中層に礫出土	
225	EL-60	1.26	1.08	1.08	0.91	0.12	—	—	楕円形	楕円形	底部に礫出土.浅い	弥生時代前期(条線文)土器出土
226	EJ-28	1.27	1.00	1.14	0.66	0.19	—	—	楕円形	楕円形	227・229土と重複.浅い	
227	EJ-28	0.74	0.55	0.50	0.28	0.19	—	—	楕円形	楕円形	226土と重複.浅い	
228	EJ-27	0.98	0.97	0.78	0.68	0.28	—	—	円形	円形	浅い	
229	EJ-27	(1.30)	0.98	1.02	0.76	0.18	—	—	楕円形	楕円形	80土と重複	
230	EL-28	0.94	0.84	0.68	0.62	0.42	—	—	円形	円形	覆土中層に礫出土	
231	EL-27	0.70	0.64	0.54	0.35	0.22	—	—	円形	不整形円形		
232	EL-27	0.70	0.54	0.50	0.42	0.22	—	—	円形	円形		
233	EL-25	0.98	0.94	0.81	0.79	0.37	—	—	円形	円形		
234	EM-25	(0.90)	0.78	(0.70)	(0.55)	0.09	—	—	楕円形	楕円形	2基重複	
		0.68	0.52	0.30	0.26	0.34	—	—	楕円形	楕円形		
235	EM-26	1.01	0.98	0.68	0.60	0.24	—	—	円形	円形		
236	EN-27	1.19	1.08	0.89	0.78	0.26	—	—	円形	円形	覆土中層に礫出土	
237	EM-49	0.88	0.79	0.66	0.63	0.11	—	—	楕円形	楕円形		
238	EN-51	1.15	1.01	0.80	0.78	0.14	—	—	楕円形	楕円形	浅い	
239	EQ-48	1.13	1.00	0.74	0.64	0.36	—	—	円形	円形	覆土上層に礫出土	
240	ES-45	1.04	0.96	0.80	0.68	0.23	—	—	不整形円形	三角形		
241	EU-45	1.42	1.00	1.12	0.78	0.37	—	—	楕円形	楕円形	2基重複	
		0.88	(0.50)	0.60	(0.30)	0.27	?	?	?	?		
242	EV-46	1.00	0.94	0.68	0.65	0.39	—	—	円形	円形		
243	EG-36	1.32	1.04	0.80	0.68	0.38	—	—	楕円形	楕円形	底部傾斜	
244												実測図なし.位置不明
245												実測図なし.位置不明
246	EQ-37	1.40	1.20	1.14	0.84	0.19	—	—	楕円形	楕円形	下層に礫出土	
247	EP-36	1.36	1.29	0.82	0.74	0.35	—	—	楕円形	楕円形		
248	EK-29	0.61	0.54	0.48	0.44	0.53	—	—	楕円形	楕円形	覆土内に礫出土	
249	EW-59	1.40	1.31	1.01	0.98	0.59	—	—	円形	円形	覆土上層に礫出土	
250	EX-59	1.14	1.08	0.99	0.80	0.38	—	—	円形	円形		
251	EY-54	1.20	1.16	0.78	0.73	0.29	—	—	円形	不整形円形	覆土中層に礫出土	
252	DY-53	1.48	1.45	1.12	1.01	0.78	—	—	楕円形	楕円形		
253	ES-55	0.92	0.86	0.76	0.64	0.15	—	—	楕円形	楕円形	浅い	
254	ER-54	0.46	0.47	0.30	0.23	0.09	—	—	円形	円形	浅い	
255	DT-30	1.26	1.18	0.76	0.72	0.37	—	—	円形	円形		
256	DU-35	(1.00)	0.93	(0.90)	0.69	0.20	—	—	楕円形	楕円形	34住と重複	
257	DT-36	(1.40)	1.36	0.90	0.84	1.00	—	—	円形	円形	2基重複	
		0.80	(0.60)	0.22	0.16	0.97	—	—	楕円形	楕円形		
258	DS-35	1.46	1.36	0.88	0.86	0.94	—	—	円形	円形		
259	DC-6	0.98	0.94	0.73	0.71	0.34	—	—	円形	円形		
260	EV-52	1.10	(0.80)	0.87	0.38	0.44	—	—	楕円形	楕円形	覆土上層に礫出土.底部に凹凸あり	
261	EW-53	0.94	0.88	0.76	0.74	0.32	—	—	円形	円形	覆土中層に礫出土	
262	EF-72	1.50	1.24	0.86	0.78	0.22	—	—	不整形円形	円形	竪穴建物址と重複	
263	ED-36	1.02	0.96	0.67	0.64	0.29	—	—	円形	円形		
264	EJ-40	0.78	0.69	0.56	0.54	0.31	—	—	円形	円形		
265	EK-41	1.10	0.76	0.86	0.66	0.17	—	—	楕円形	楕円形	浅い	
266	EV-27	1.28	1.18	0.84	0.80	0.85	—	—	円形	円形	底部に礫出土	
267	EU-28	0.90	0.73	0.66	0.56	0.47	—	—	楕円形	円形	覆土中層に礫出土	
268	EV-33	0.84	0.82	0.66	0.62	0.17	—	—	円形	円形	浅い	
269	EU-31	0.92	0.76	0.70	0.52	0.25	—	—	楕円形	楕円形	覆土中層に礫出土	

2. 土 坑

番号	出土位置	検 出 面				ビット		検 出 形 態		所 見	備 考 (出土遺物等)	
		上 端 長径	上 端 短径	下 端 長径	下 端 短径	深さ	直径	深さ	検出面			底 部
270	EV-31	0.70	0.60	0.50	0.34	0.21	—	—	楕円形	楕円形	覆土下層に礫出土	
271	EA-29	0.80	0.80	0.63	0.57	0.15	—	—	円形	不整形円形	浅い	
272	EW-32	()	0.72	()	0.60	0.26	—	—	楕円形?	楕円形?	273土と重複	
273	EW-32	(1.30)	1.28	0.94	0.92	0.36	—	—	隅丸方形	隅丸方形	272土と重複	
274	EV-28	0.92	0.79	0.74	0.68	0.42	—	—	楕円形	楕円形		
275	EV-29	1.28	1.00	0.84	0.69	0.42	—	—	不整形円形	楕円形	覆土上層に礫出土	
276	EL-7	1.58	1.38	1.01	0.99	0.22	—	—	円形	円形	覆土上層に礫出土	
277	FB-46	1.08	0.96	0.83	0.80	0.13	—	—	円形	円形	浅い	
278	FD-45	0.92	0.82	0.64	0.64	0.13	—	—	楕円形	不整形円形	浅い	
279	FE-46	1.42	0.82	0.65	0.64	0.27	—	—	円形	円形	底部凹凸あり	
280	EX-42	0.82	(0.80)	0.48	0.48	0.24	—	—	円形	円形	2基重複	
		0.64	(0.60)	(0.40)	0.36	0.15	—	—	円形	円形		
281	DX-33	1.64	1.25	1.08	0.84	0.38	—	—	楕円形	楕円形	覆土中に礫出土	
282	DX-33	1.88	1.18	1.39	0.88	0.29	—	—	楕円形	楕円形		
283	ET-29	1.00	0.98	0.58	0.58	0.15	—	—	円形	円形	浅い	
284	DY-33	0.94	0.82	0.74	0.58	0.17	—	—	楕円形	楕円形	浅い	
285	EO-31	1.62	1.22	1.26	0.86	0.43	—	—	楕円形	不整形円形	覆土中に礫出土.140土と重複	
286	EN-31	1.16	1.06	0.94	0.82	0.42	—	—	円形	円形	覆土中に礫出土.139土と重複	
287	EM-29	1.10	0.98	0.74	0.62	0.18	—	—	楕円形	楕円形		
288	EN-28	1.54	1.30	1.10	0.70	0.30	—	—	楕円形	不整形円形	覆土上層に礫出土	
289	EM-24	1.34	1.16	(1.04)	0.82	0.35	—	—	不整形円形	不整形円形	覆土下層に礫出土	
290	EN-30	1.04	0.91	1.16	1.00	0.68	—	—	円形	円形	袋状土坑	
291	ES-31	1.24	1.12	1.06	0.84	0.42	—	—	楕円形	不整形楕円形	覆土に礫出土	
292	EQ-26	1.76	1.68	1.21	1.03	0.38	0.45	0.14	円形	楕円形		プラン十分に把握できず
293	EP-25	0.74	0.68	0.44	0.36	0.20	—	—	隅丸三角形	楕円形		
294	EP-23	1.62	1.18	1.02	0.60	0.31	—	—	楕円形	楕円形	底部段差あり.重複か?	
295	EP-22	1.16	0.96	0.84	0.66	0.20	—	—	楕円形	楕円形	浅い	
296	EO-22	1.14	0.84	0.62	0.46	0.22	—	—	不整形楕円形	不整形楕円形	底部に凹凸あり	
297	EX-43	1.43	1.14	1.44	0.74	0.18	—	—	楕円形	楕円形		
298	EX-44	0.98	0.85	0.77	0.72	0.25	—	—	円形	円形	浅い	
299	EY-44	0.95	0.85	0.72	0.56	0.20	—	—	円形	円形	浅い	
300	EY-43	0.92	0.79	0.70	0.59	0.20	—	—	楕円形	楕円形	底部に凹凸あり	
301	EY-44	0.93	0.80	0.66	0.52	0.31	—	—	円形	円形	断面鍋底状	
302	FA-46	1.44	1.24	0.98	0.81	0.30	—	—	楕円形	楕円形	断面鍋底状	
303	EY-46	1.35	1.32	0.81	0.79	0.34	—	—	円形	円形		
304	ET-33	1.02	0.88	0.74	0.48	0.20	—	—	楕円形	不整形楕円形	浅い	
305	EO-26	1.46	1.26	0.98	0.88	0.30	—	—	楕円形	楕円形	覆土中層に礫出土.浅い	
306	EB-42	1.84	1.61	1.12	0.88	0.43	—	—	楕円形	不整形楕円形	覆土に礫出土	
307	EW-28	0.73	0.68	0.52	0.50	0.17	—	—	円形	円形	底部にビット2箇所あり.67住と重複.浅い	
308	EW-28	0.92	0.80	0.74	0.52	0.36	—	—	隅丸三角形	楕円形	覆土上層に礫出土	
309	ES-38	0.86	0.84	0.66	0.58	0.19	—	—	円形	不整形円形	底部に凹凸あり	
310	ET-39	1.37	1.02	1.18	0.76	0.28	—	—	楕円形	楕円形	土坑2基重複?	
311	ET-26	1.26	1.16	1.08	0.89	0.52	—	—	円形	円形		
312	ES-27	1.34	1.08	0.84	0.64	0.38	—	—	楕円形	楕円形		
313	DN-82	1.40	1.26	1.05	0.89	0.35	—	—	楕円形	楕円形	覆土下層に礫出土	
314	DO-83	1.48	1.44	0.82	0.72	0.60	—	—	円形	円形	落とし穴	
315	DL-79	1.80	1.42	1.48	1.22	0.23	—	—	楕円形	楕円形	316土と重複.浅い	
316	DL-79	1.56	1.11	1.28	0.93	0.21	—	—	楕円形	楕円形	315土と重複.浅い	
317	DK-3	1.15	0.92	0.52	0.48	0.71	0.18	0.22	楕円形	円形	落とし穴	
318	EM-63	(1.50)	1.27	(1.40)	0.98	0.21	—	—	楕円形	楕円形	47住と重複.浅い	
319	DW-77	1.03	0.98	0.76	0.69	0.11	—	—	円形	円形	覆土下層に礫出土	
320	DO-82	0.65	0.59	0.53	0.46	0.13	—	—	円形	円形	浅い	
321	EY-58	1.03	1.00	0.80	0.67	0.12	—	—	円形	円形	浅い	
322	EX-45	1.13	1.05	0.62	0.55	0.40	—	—	円形	円形	浅い	
323	EX-43	0.62	0.46	0.44	0.30	0.13	—	—	楕円形	楕円形	浅い	
324	EX-43	0.66	0.63	0.54	0.47	0.14	—	—	円形	円形	浅い	
325	EM-28	1.16	0.94	0.81	0.64	0.17	—	—	不整形楕円形	不整形楕円形	浅い	
326	EM-27	1.38	0.80	1.08	0.50	0.18	—	—	不整形楕円形	不整形楕円形	浅い	
327	DO-18	0.68	0.52	0.40	0.14	0.20	—	—	楕円形	不整形楕円形	浅い	
328	DS-64	1.23	0.84	0.64	0.94	0.19	—	—	楕円形	楕円形	浅い	
329											欠番	
330	DS-68	1.50	1.40	1.39	1.29	0.30	—	—	楕円形	楕円形	底部にビットあり.27住と重複	

(2) 土坑出土の遺物

第178号土坑 (第134図11～14)

これらの土器は同一個体である。平行沈線によってレンズ状文を施文しており、波状口縁の器形を呈する。内面にはミガキ調整が施され、外面の一部にはススが付着している。

第212号土坑 (第135図18・19、第143図9)

第135図18は、波状を呈した口縁部である。口縁に沿って、半截竹管状工具を使用した平行沈線文が施されている。

19は土器である。縄文を地紋にもつ、結節浮線文を施文した土器である。口縁部上部に2本の結節浮線文を貼り付けているが、剥離してしまっている。なお内面にはミガキ調整が行われている。

第143図9は黒曜石である。石核と考えられる。

第219号土坑 (第135図20～26)

20は口縁部である。上端部に2本隆帯を貼付した後、隆帯と器面に縄文を施文している。内面にはミガキ調整が行われている。21・25は平行沈線文を施文している土器である。21は浅い平行沈線を条線状に施文し、ボタン状貼付文を貼り付けている。25は浅い平行沈線を縦位の羽状に施文している。22～24・26は縄文を施文している土器である。22・23は同一個体で、器面の柔らかいうちに原体を押圧している。内面はミガキ調整が施されている。24・26も同一個体である。22・23と同様に縄文原体を押圧して施文していると考えられるが、施文がうすく、明確ではない。なお、24の外面にススの付着がみられる。

第220号土坑 (第135図27・28)

平行沈線文を施文している土器である。28の内面下部にススが付着している。

第227号土坑 (第135図32～35)

32・34は同一個体である。半截竹管状工具による平行沈線で、縦位の羽状文を丁寧に施文している。33は口縁部上端部が肥厚し、竹管状工具を用いた沈線で円文を描く土器である。内面はミガキ調整が施されている。35は内面にミガキ調整がみられ、外面下部にススが付着している。

第228号土坑 (第136図1～6、第142図5)

第136図1～6は土器である。1・4～6は平行沈線を施文した土器である。これらのうち、4は浅い平行沈線文を施文しており、5の外面にはススの付着がみられる。また内面はミガキ調整が施されている。6は口縁部の破片である。口縁部上端部の残存率が悪く、器形を把握できないため、波状口縁の可能性もある。なお、破片上部に扁平な隆帯が貼り付けられているが、一部しか残存していないため、文様構成は不明である。外面にはススが付着し、内面にミガキ調整が行われた土器である。

2は内面にミガキ調整がみられ、3の外面にはススが付着している。

第142図5は石器と考えられる。表面に自然面を多く残し、図面下部に使用に伴う剥離がみられる。

第229号土坑（第136図9・10）

9・10は同一個体である。この土器は、胎土に繊維を含んでおり、淡褐色を呈する。外面には貝殻条痕文かと考えられる施文がみられる。

第236号土坑（第136図28～30、第142図8）

第136図28～30は土器である。28は燃糸を施文している。外面にはススが付着している。29・30は縄文を施文した土器である。30は羽状縄文が施文され、下部に横位と考えられる隆帯が貼付されている。なお、外面と内面の下部にススが付着している。

第246号土坑（第136図34～37、第143図10）

第136図34～37は土器である。34は比較的浅い平行沈線で、縦位の羽状文を施文している。35は結節沈線文によって縦位の羽状文を施文している。内面にはミガキ調整が施されている。36は縄文が施文された土器である。37は彫りの深い平行沈線を斜位に施文している。

第143図10は黒曜石である。下部に一部小剥離痕があることから、剥片石器と考えられる。

第260号土坑（第137図8～10）

8は口縁部の破片である。上端部を若干肥厚させ、その下部に沈線を引いた後に、縄文を施文している。なお、外面の上部にはススが付着している。9・10は平行沈線文を横位の羽状に施文している土器である。

第265号土坑（第137図20・21、第142図6）

第137図20・21は土器である。20は平行沈線によって縦位の羽状文を施文している。21は縄文を施文しており、外面にはススが付着している。

第142図6は凹石である。浅い打撃痕が集中している部分が、表裏面合わせて4ヶ所確認でき、その周辺にも微細な打撃痕が確認できる。

第266号土坑（第137図22～25、第142図7）

第137図22～25は土器である。22・23は平行沈線文を施文している土器である。22にはレンズ状文、23には口縁部に沿ったと考えられる斜位の平行沈線文を施文し、その後下部に平行沈線による円文を施している。なお、23の内面にはミガキ調整が行われている。24・25は結節浮線文が施文されている。24は横位の平行沈線文を地紋に持ち、浮線文はヘラ切りである。なお、内面にはミガキ調整が施される。25は斜位の平行沈線を密接に施文している。このうち、破片左側にはヘラ切りによるキザミを施し、その横には半截竹管状工具を使つての押し引きによる弱い結節沈線文が施文されている。なお、内面にはススの付着がみられる。

第142図7は凹石である。表裏面にそれぞれ2ヶ所深い窪みがみられる。その周囲には滑らかな磨痕が確認され、縁辺部と下部にザラザラした磨痕が確認できる。なお、角部には敲打痕もみられる。

第270号土坑（第137図37・38）

浅い平行沈線文を施文している土器である。37は下部の破断面から内面下部にかけてススが付着しており、38は内面にミガキ調整の痕跡を若干留めている。

第IV章 遺構と遺物

第273号土坑（第137図39・40）

39は縄文を施文した土器である。内面にはススが付着している。40は底面付近から出土している。平行沈線を条痕状に施文した土器で、内面にミガキ調整が施され、外面上部にススが付着している。

第274号土坑（第138図1～4）

1・3は縄文施文の土器である。1は内面にミガキ調整が施されている。2はいわゆるトロフィー形の深鉢の把手と考えられる。破片上部に穿孔がみられ、半截竹管状工具を浅く押引きして施文した、細かい連続刺突状の文様が施文され、側面には押引文が施されている。4は粗いナデ調整の後に、縦位の浅い平行沈線文が施文され、その後、横位に短い平行沈線文を1本施文している。

第292号土坑（第139図7～9）

すべて縄文施文の土器である。8・9は文様がうすく、8の内面および9の外面にはススが付着している。

第294号土坑（第139図10・11）

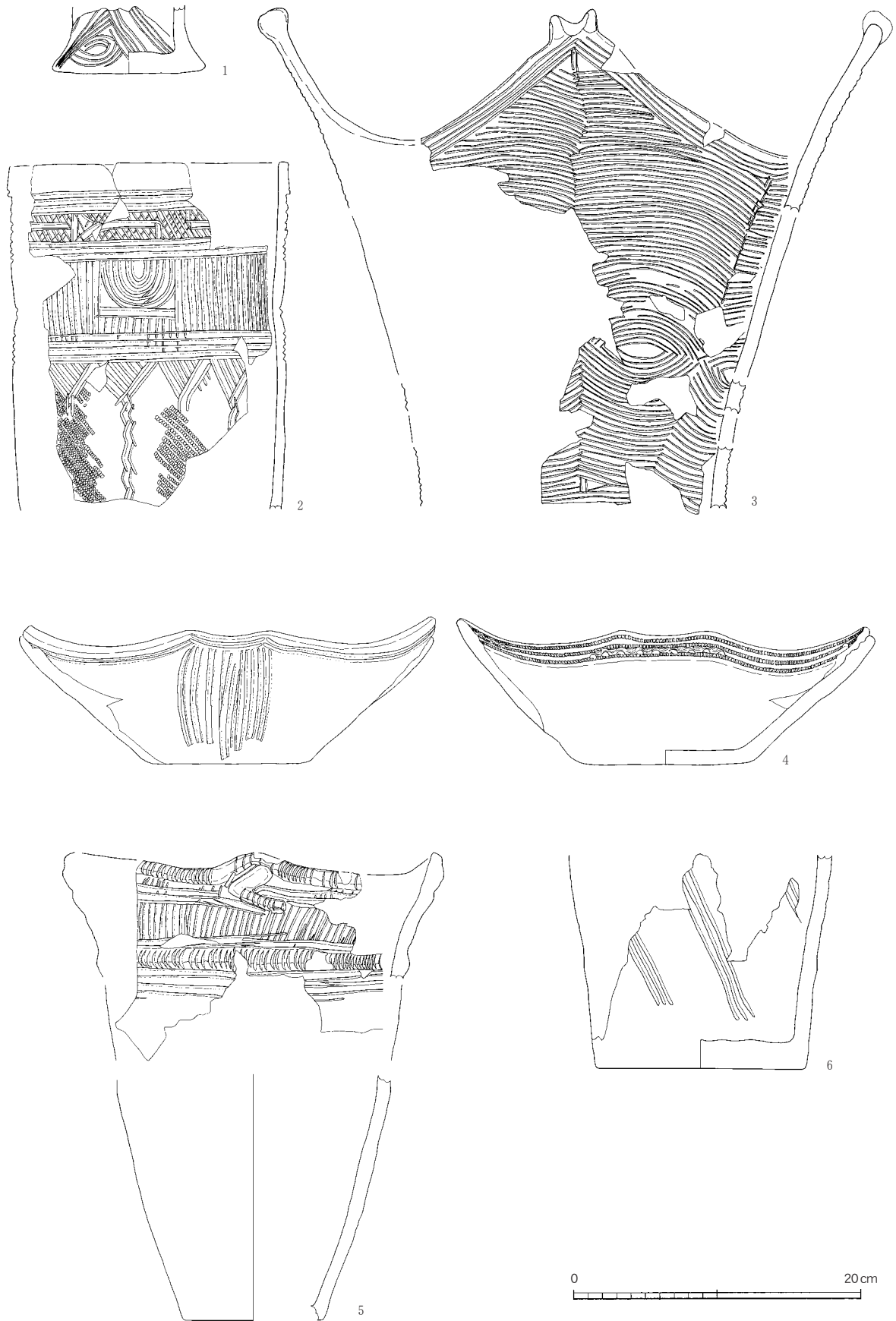
10は斜位のレンズ状文が施文されている。外面上部にススの付着がみられ、内面にはミガキ調整を行っている。11は縄文を施文している土器である。外面にススの付着がみられる。

第304号土坑（第139図12～15）

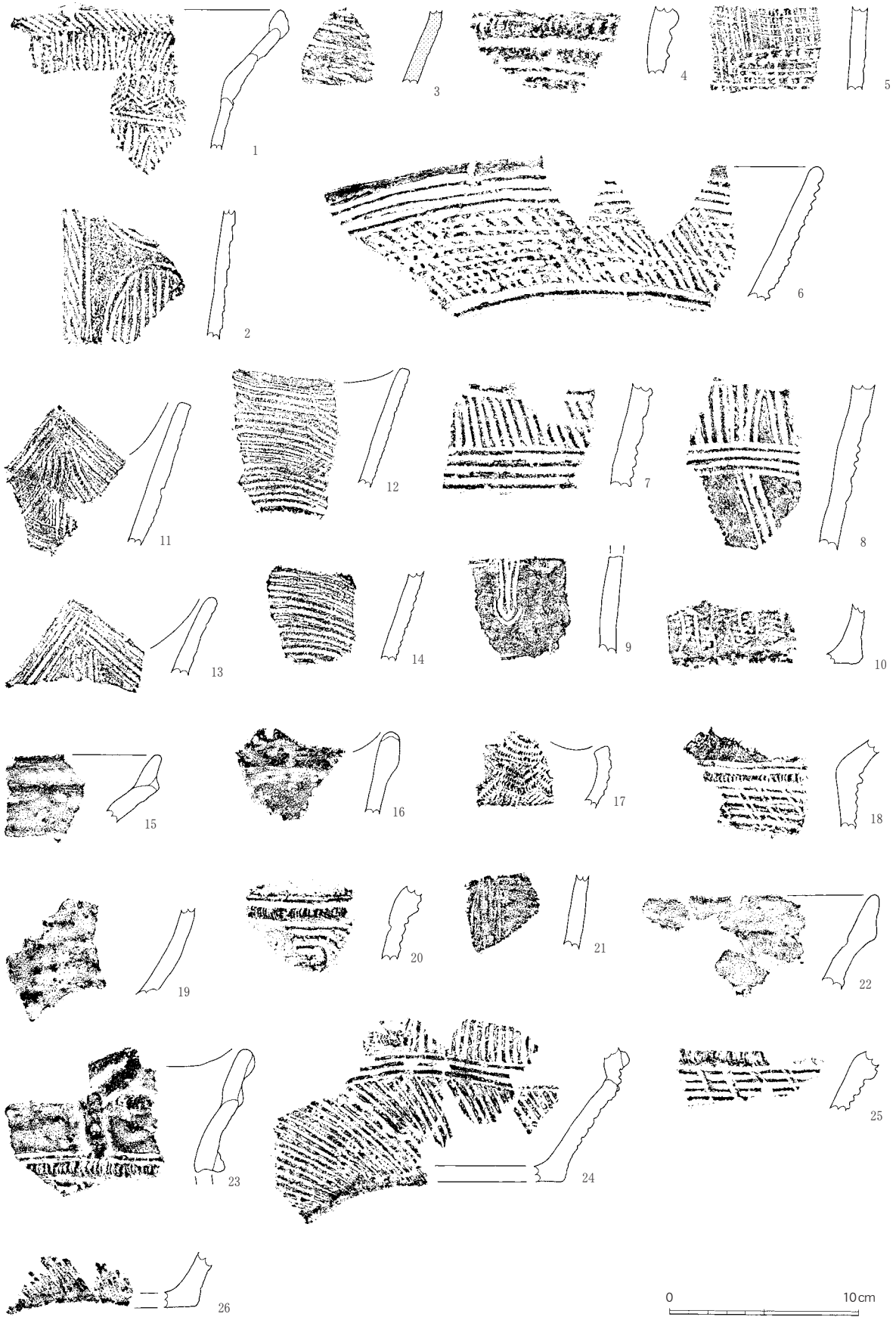
平行沈線文を施文した土器である。12は浅い平行沈線で縦位の羽状文を施文しており、内外面の一部にはススの付着がみられる。13は平行沈線文を地紋とし、半截竹管状工具による結節浮線文を施している。なお、結節浮線文間に2個1対のボタン状貼文も貼り付けられている。14は浅い条線状の平行沈線を施文し、内面にはミガキ調整がみられる。

第312号土坑（第139図33～39）

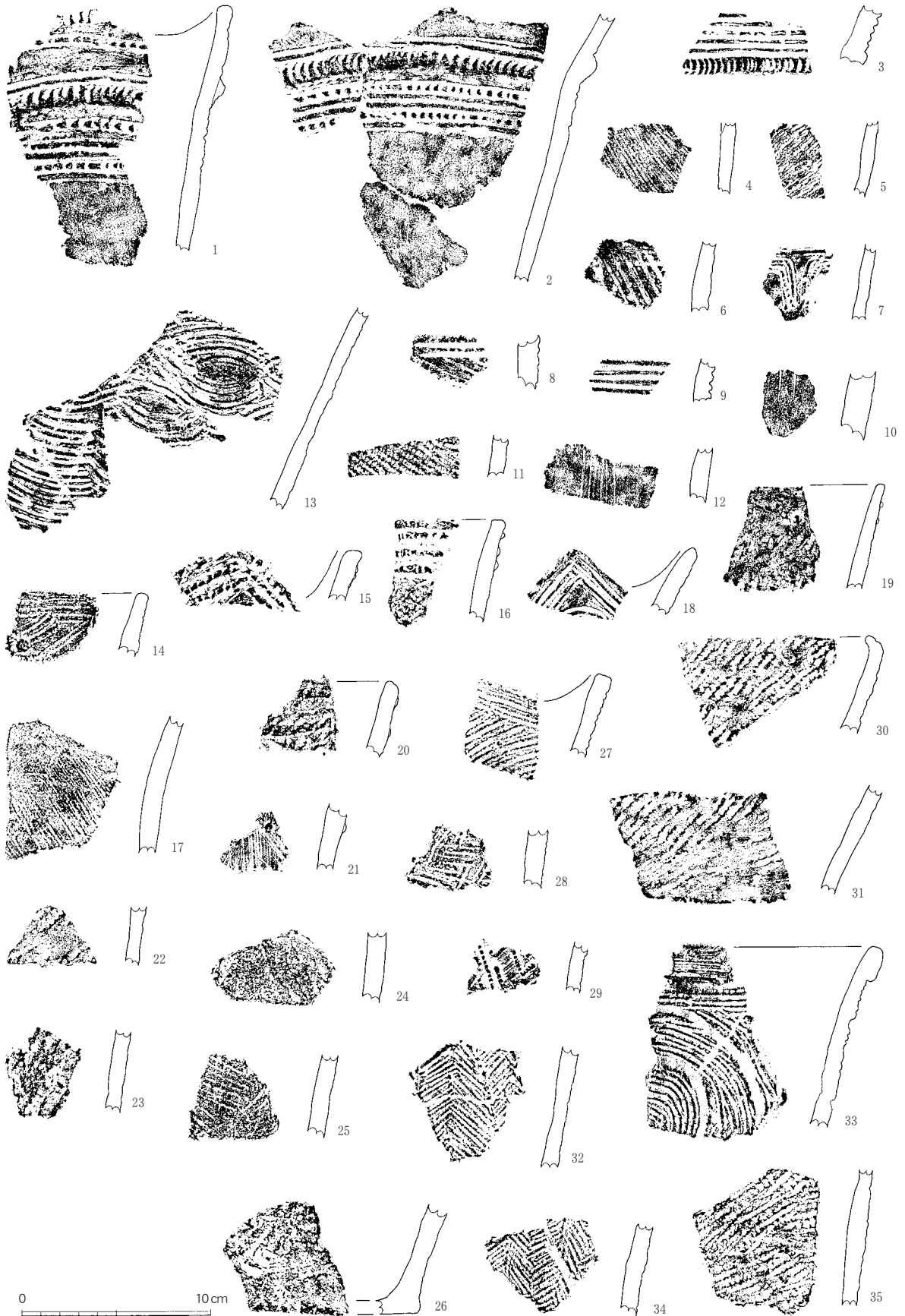
33は口縁部の破片である。口縁上端部を肥厚させ、その上に平行沈線文を施文し、その後、直下から口縁部全体に平行沈線文を施文している。内面はミガキ調整が施され、口縁部上部の内外面にはススが付着している。34は口縁部上部に沿って平行沈線を複数本施文した後、曲線文や縦位の直線文を施文している。なお、内面にはナデ調整が施され、外面の下部にススが付着している。35にはレンズ状文が施文され、内面に丁寧なナデ調整がみられる。なお、外面にはススが付着している。36は若干剥離や磨耗があり明確にできないが、燃糸文を施文していると考えられる。37～39は縄文施文の土器である。37は外面に押圧と思われる浅い縄文が施文されている。内面にミガキ調整が施され、外面にはススがみられる。38の外面下部および、39の内面にもススが付着している。なお、39の底部には剥離がみられる。



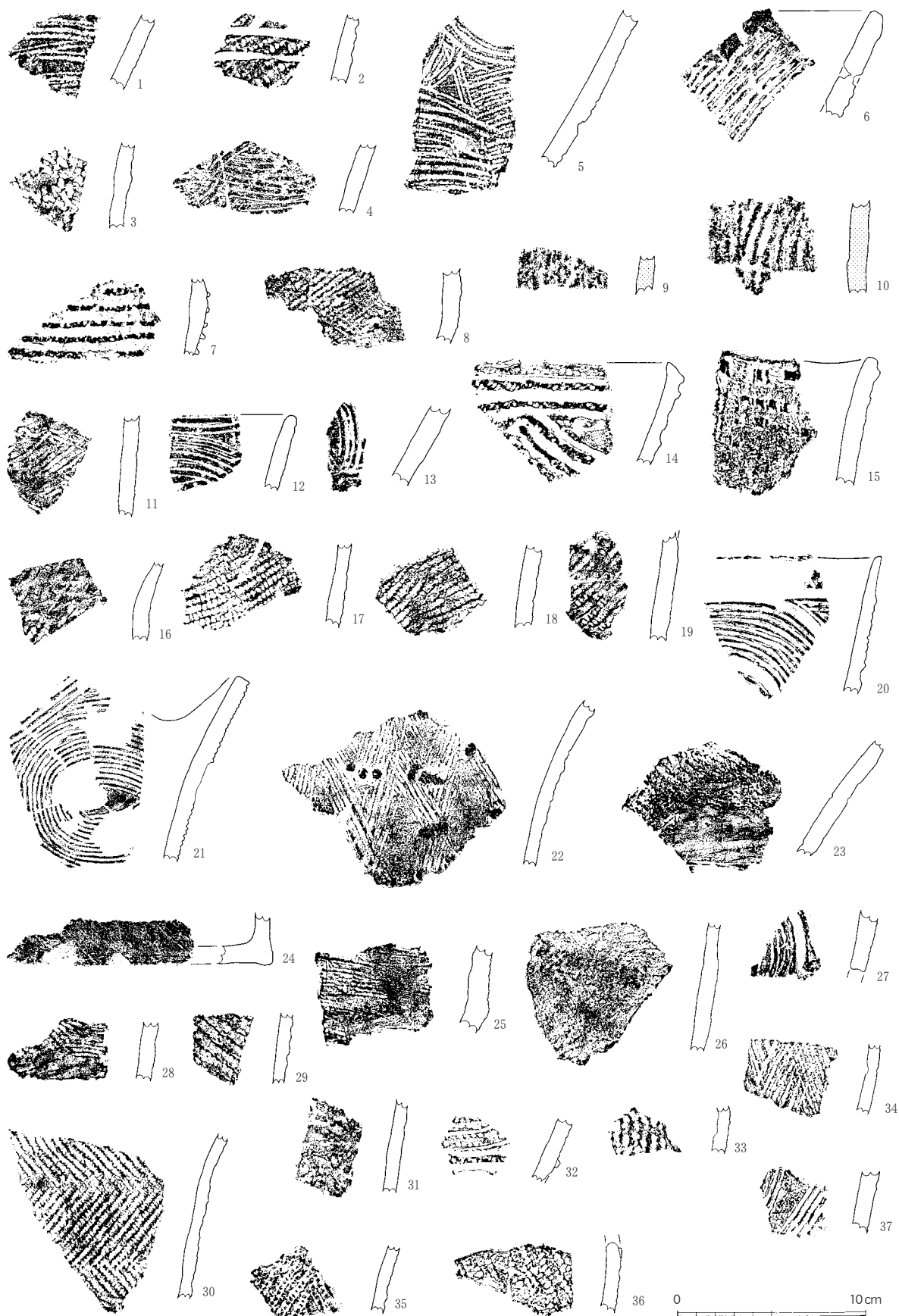
第133图 土坑出土遗物 (1) (1 : S=1/3) (1 : 247土、2 : 262土、3 : 275土、4~6 : 163土)



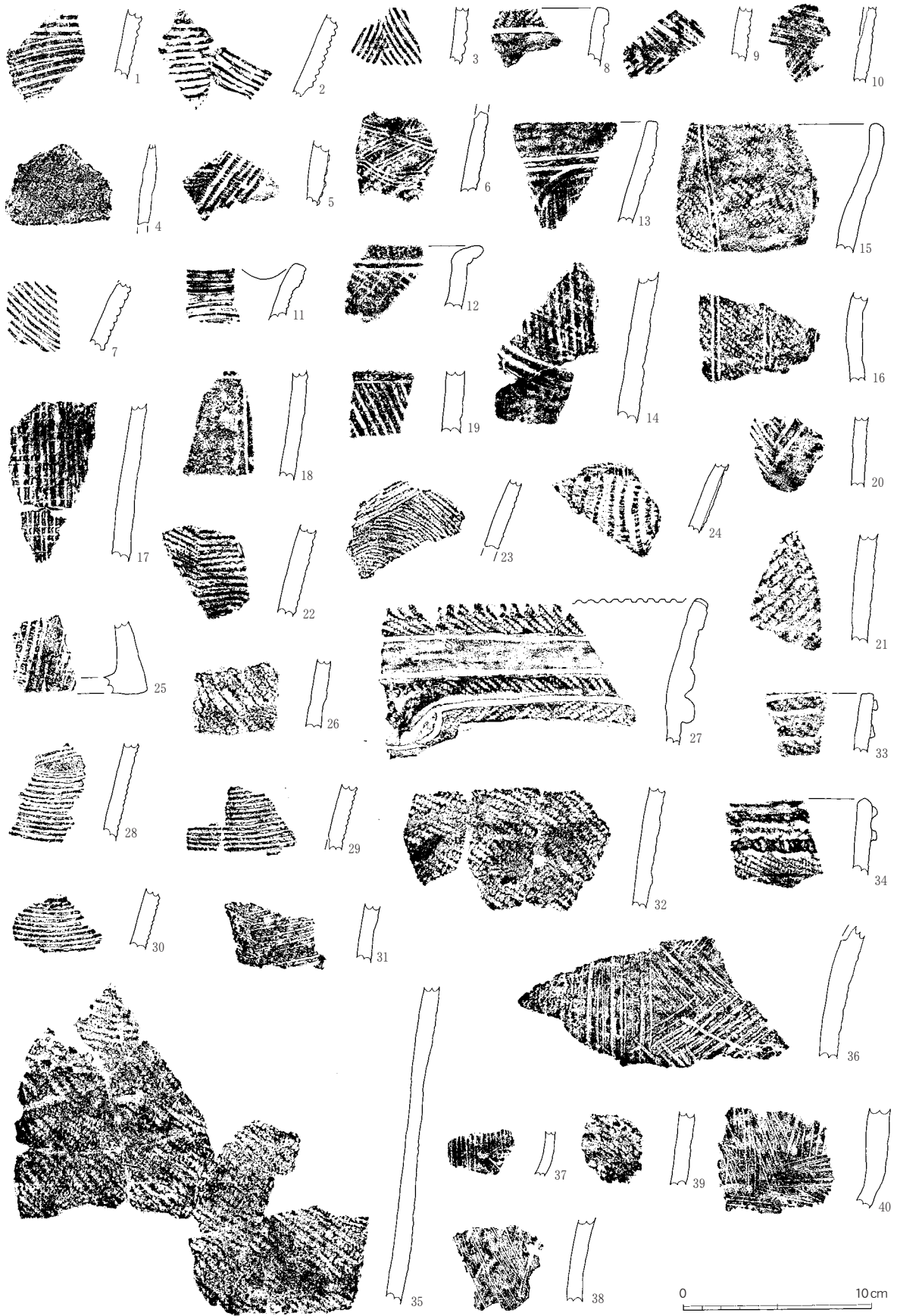
第134図 土坑出土遺物 (2) (1~3 : 160土、4~10 : 163土、11~14 : 178土、15~21 : 180土、22~26 : 181土)



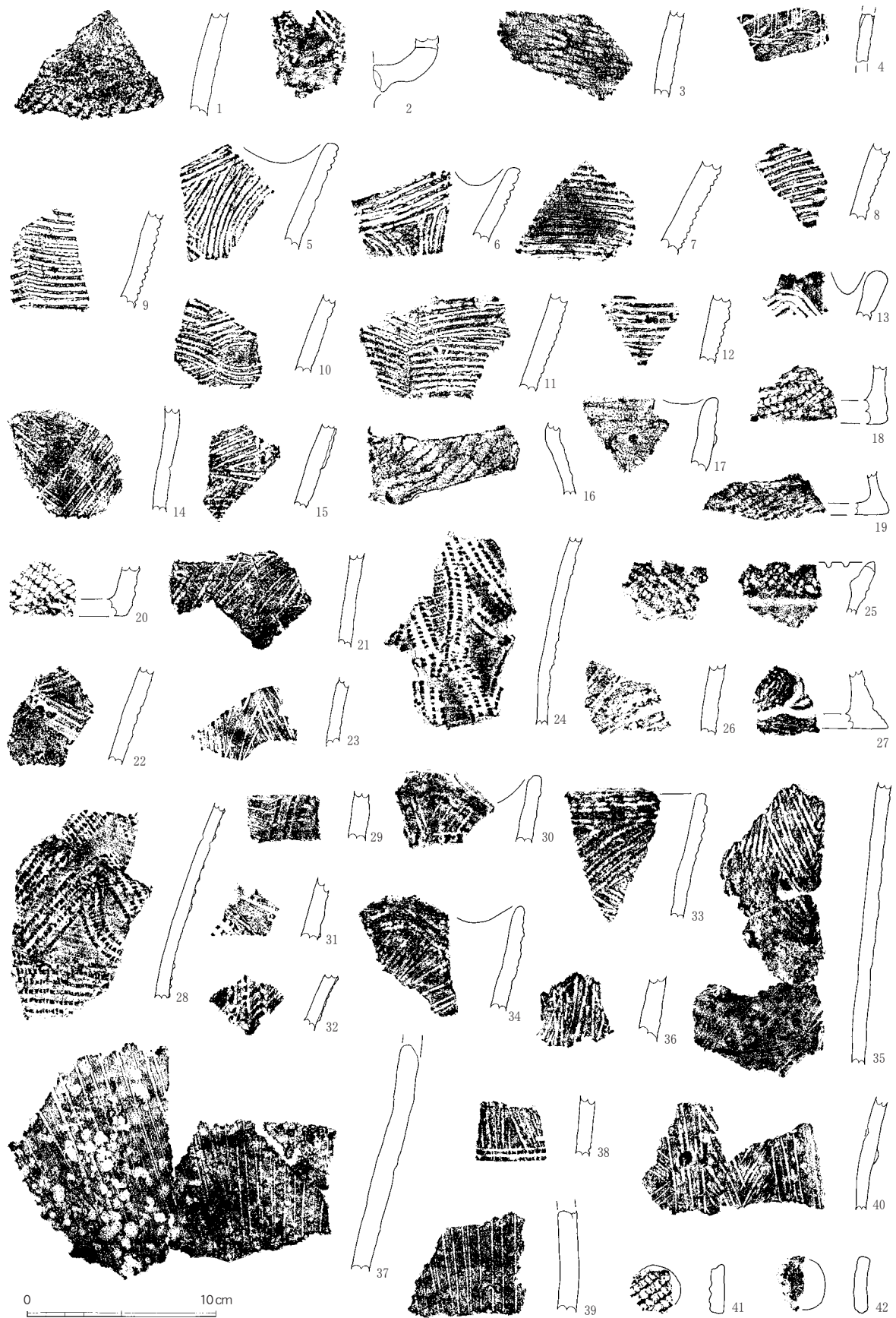
第135图 土坑出土遗物(3) (1~12:188土, 13:189土, 14~17:218土, 18·19:212土, 20~26:219土, 27·28:220土, 29:221土, 30·31:226土, 32~35:227土)



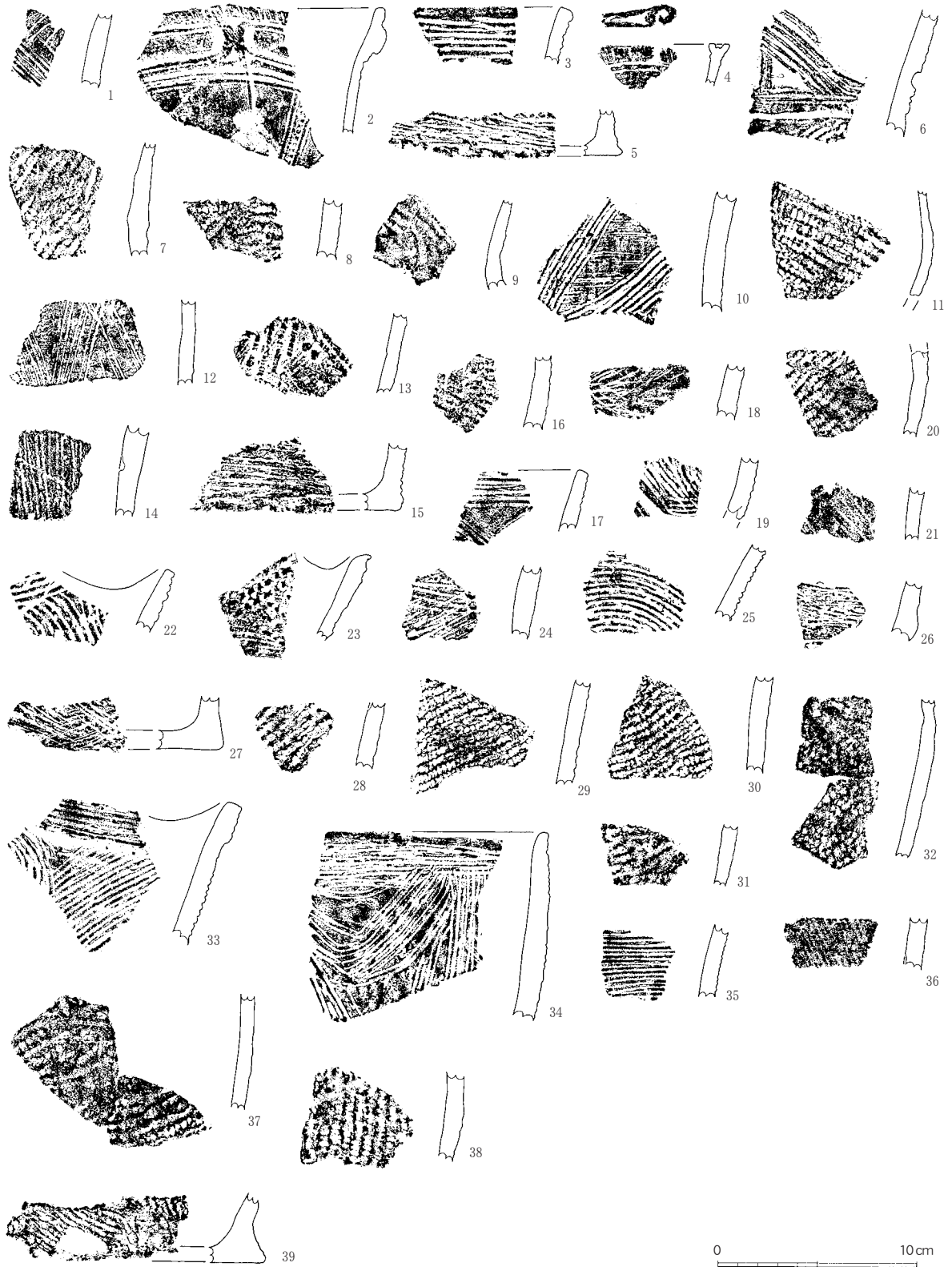
第136図 土坑出土遺物(4) (1~6:228土, 7・8:232土, 9・10:229土, 11~19:233土, 20~26:234土, 27:235土, 28~30:236土, 31:239土, 32・33:241土, 34~37:246土)



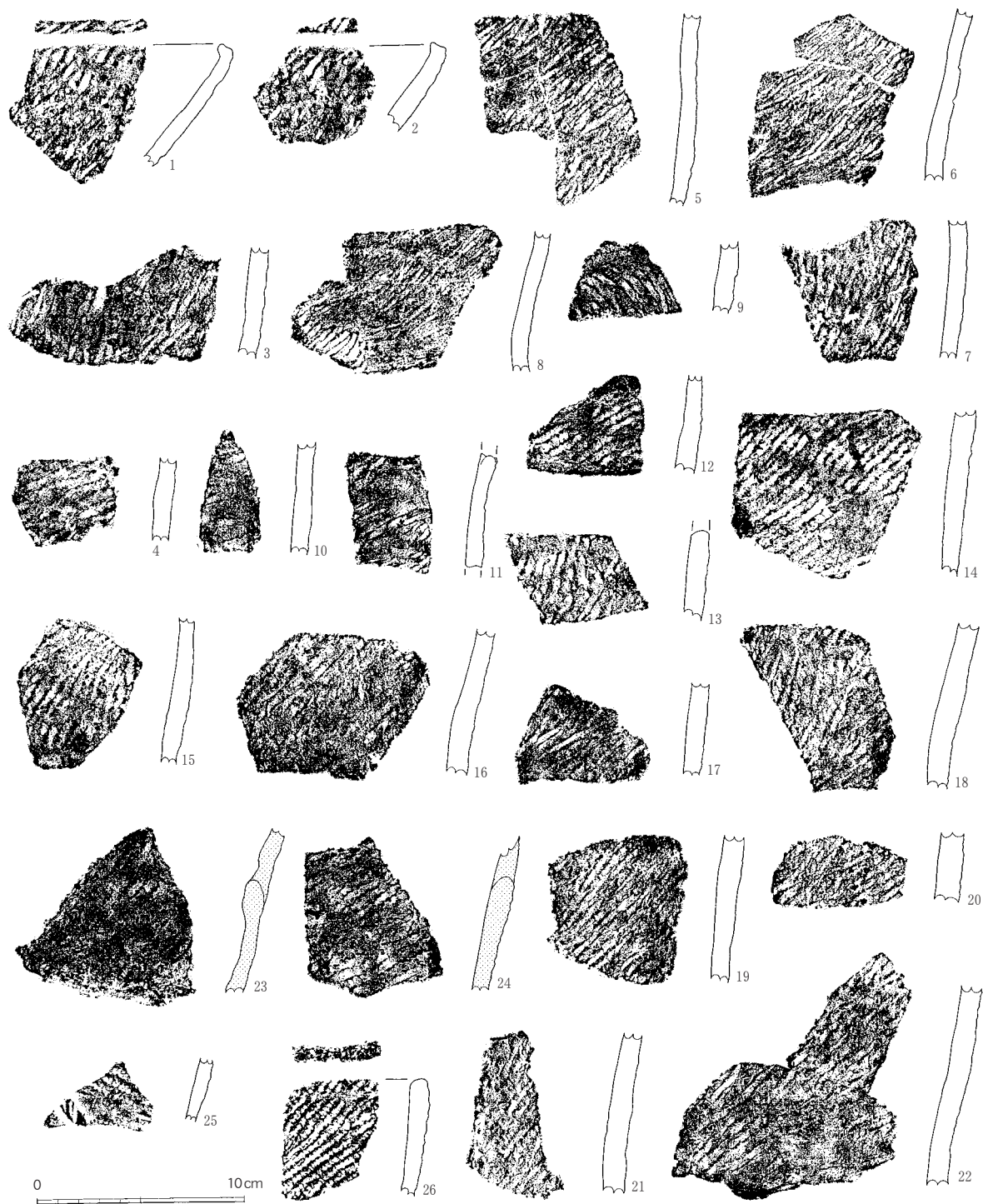
第137图 土坑出土遗物 (5) (1~6:247土, 7:248土, 8~10:260土, 11~19:262土, 20·21:265土, 22~25:266土, 26·27:267土, 28~35:268土, 36:269土, 37·38:270土, 39·40:273土)



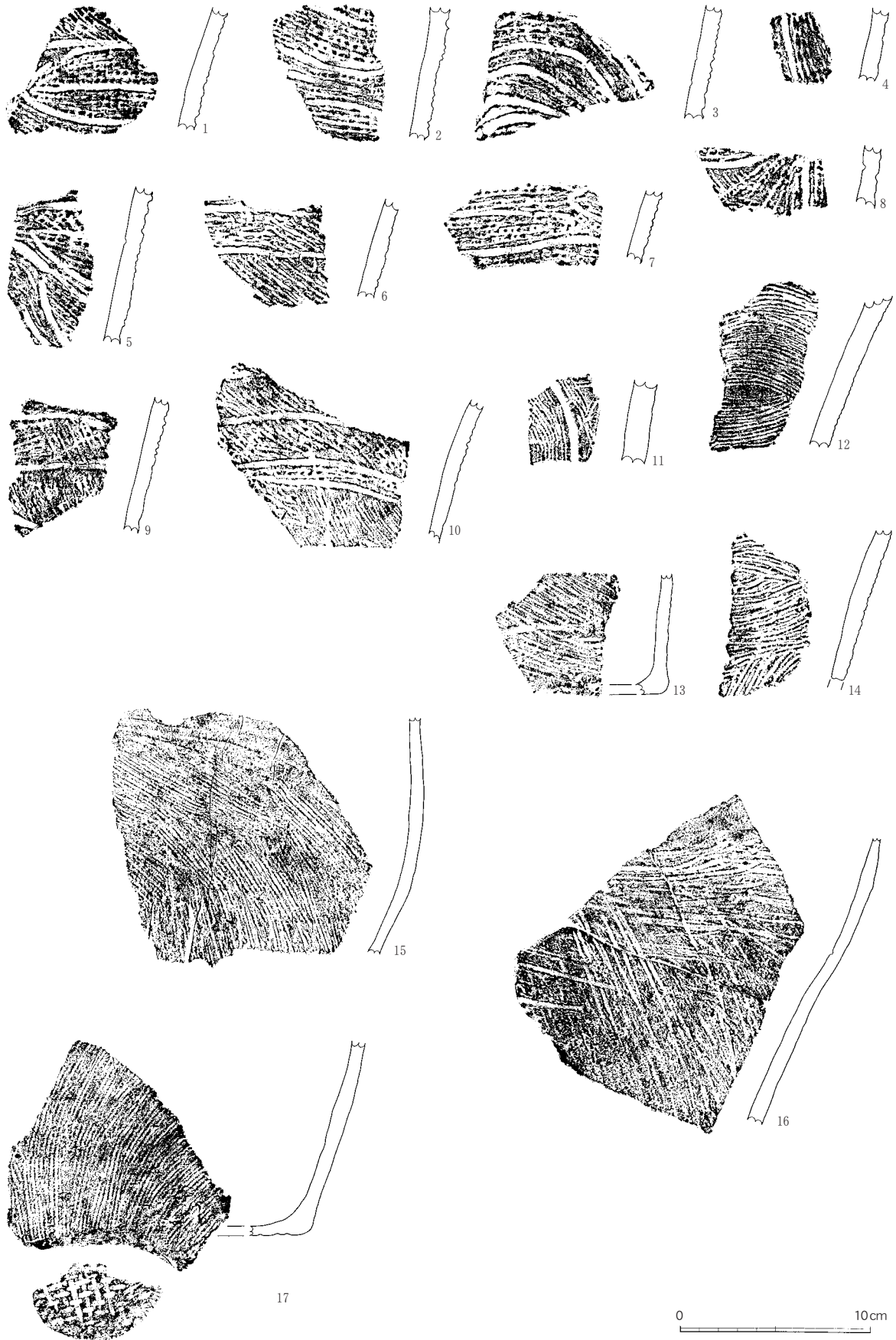
第138図 土坑出土遺物 (6) (1~4 : 274土、5~19 : 281土、20 : 282土、21~27 : 285土、28~42 : 286土)



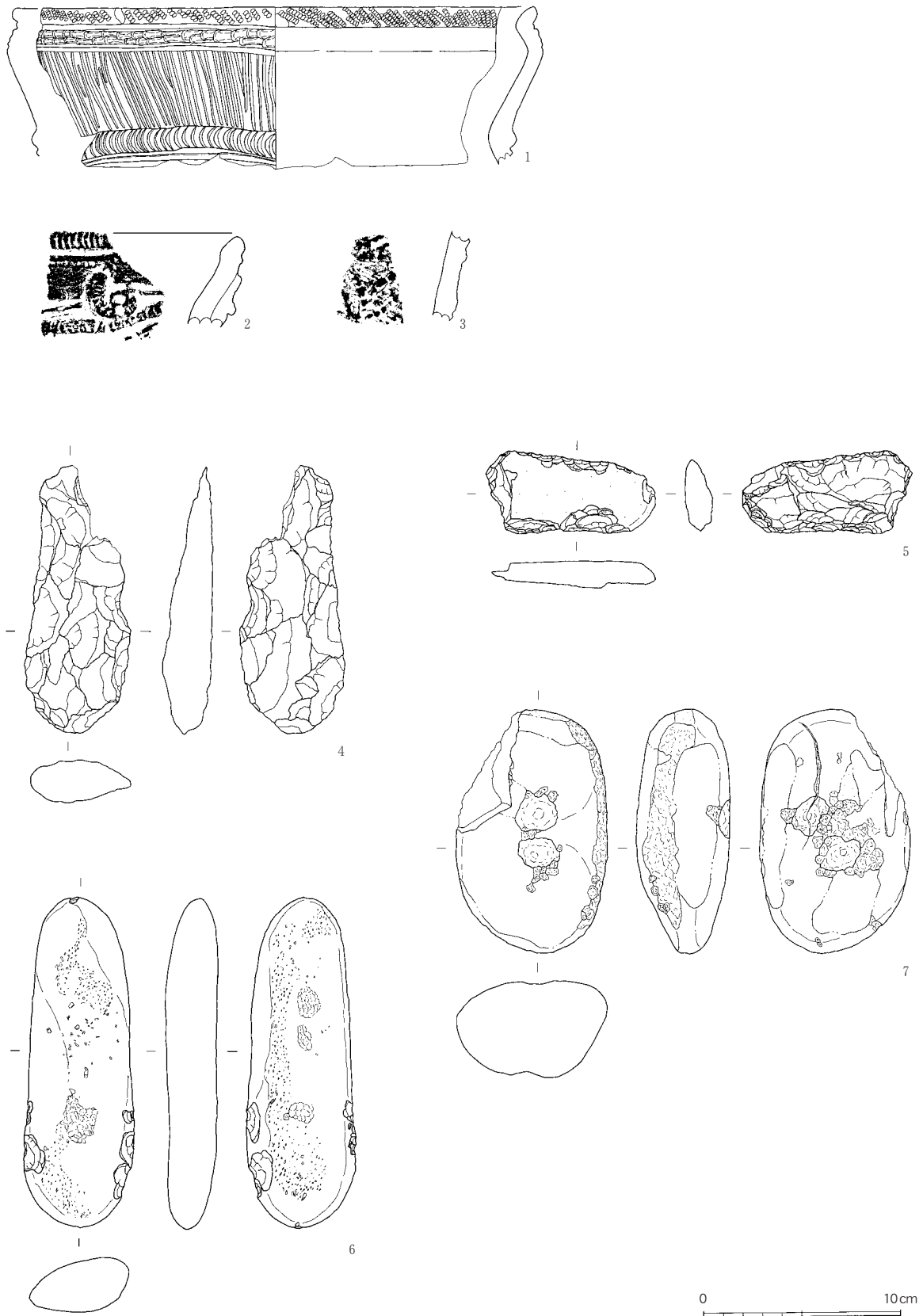
第139图 土坑出土遺物 (7) (1:288土、2~6:289土、7~9:292土、10·11:294土、12~15:304土、16:301土、17:306土、18·19:307土、20·21:308土、22:310土、23~32:311土、33~39:312土)



第140図 土坑出土遺物 (8) (290土)



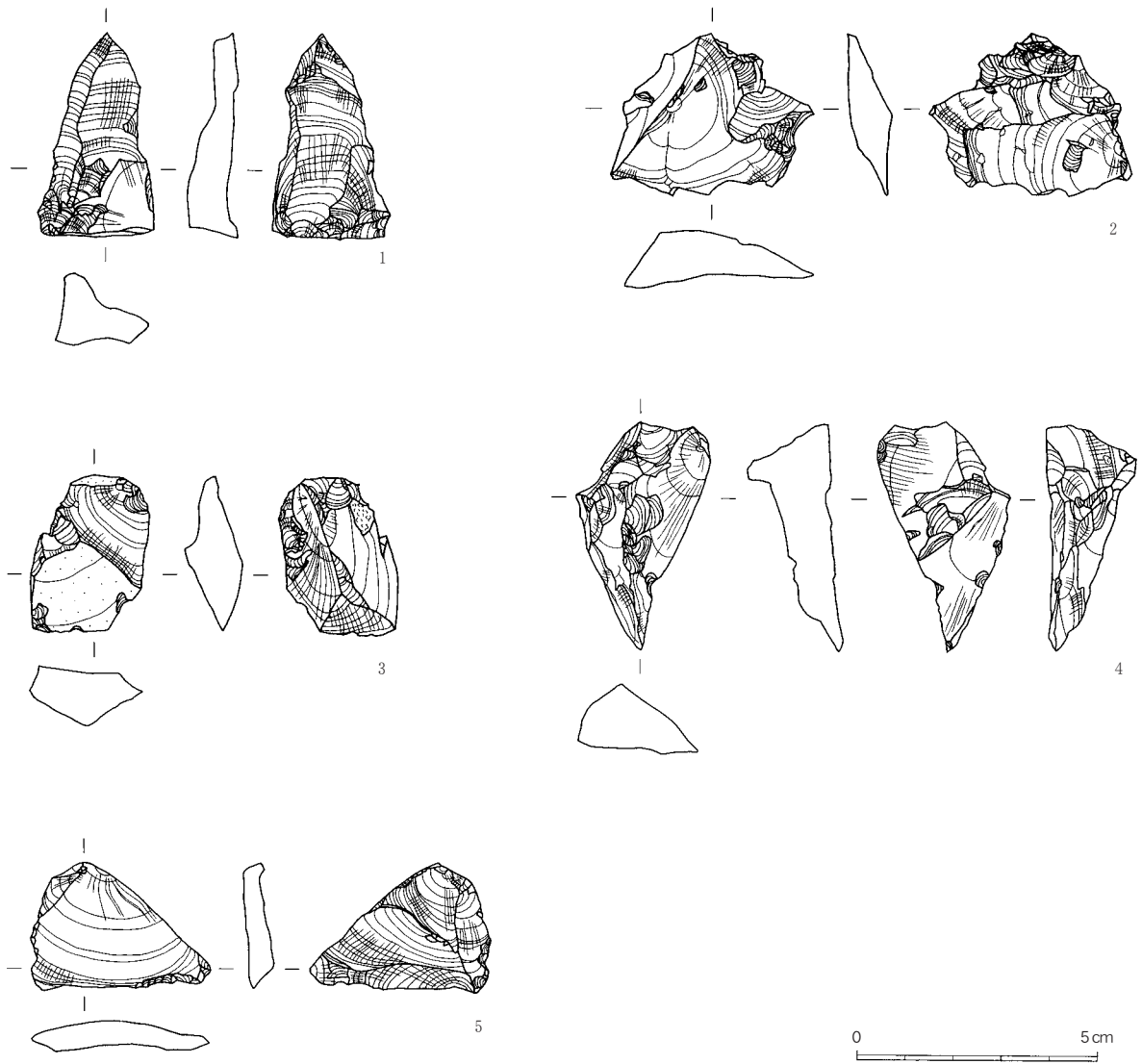
第141图 土坑出土遺物 (9) (1~14: 290土、15~17: 225土)



第142図 土坑出土遺物 (10) (1~3 : 275土、4 : 217土、5 : 228土、6 : 265土、7 : 266土)



第143图 土坑出土遗物 (11) (1 : 161土、2 : 159土、3~8 : 180土、9 : 212土、10 : 246土、11·12 : 262土)



第144図 土坑出土遺物 (12) (1 : 263土、 2 : 275土、 3 : 267土、 4 : 282土、 5 : 286土)

3. 集 石

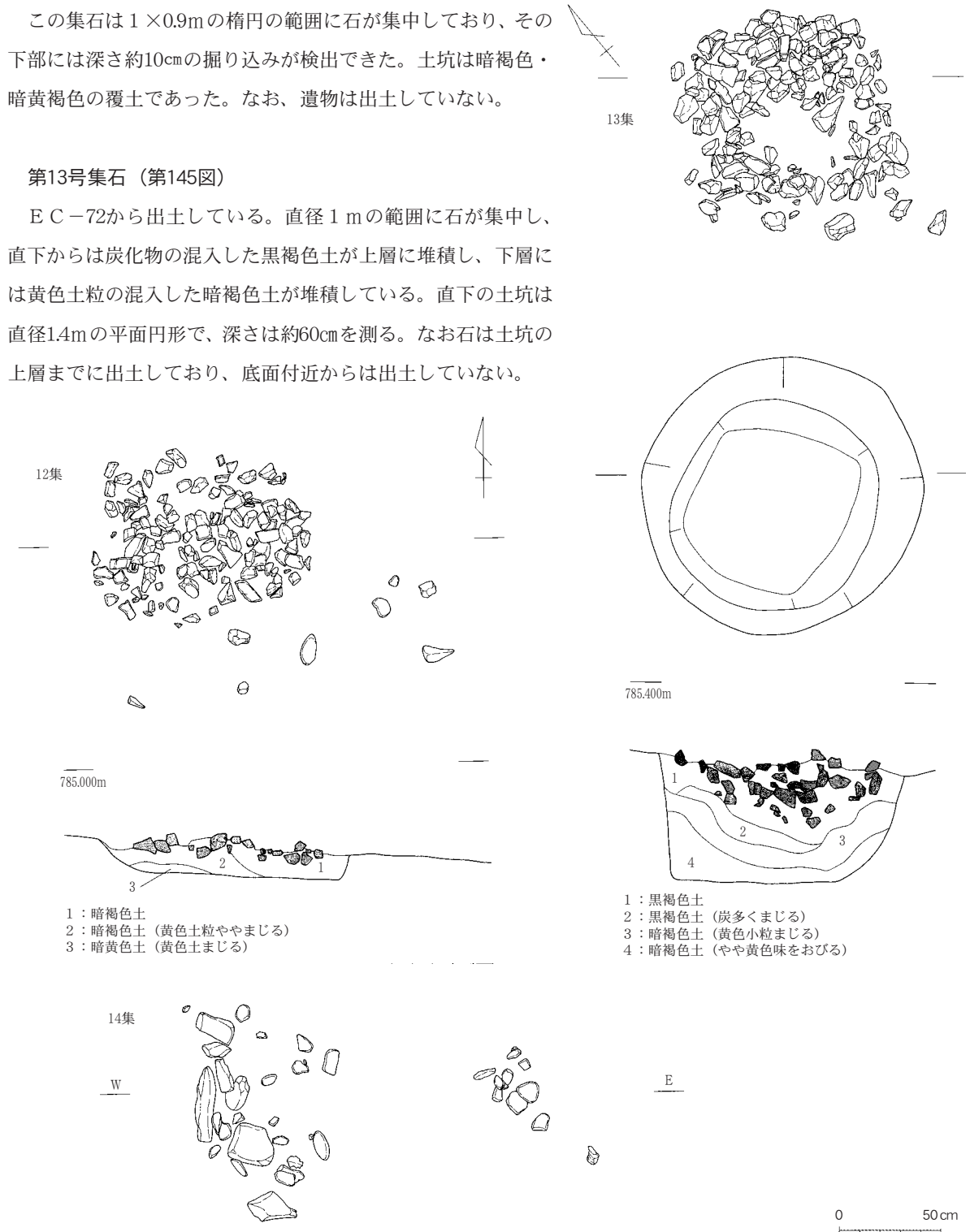
(1) 集 石

第12号集石 (第145図)

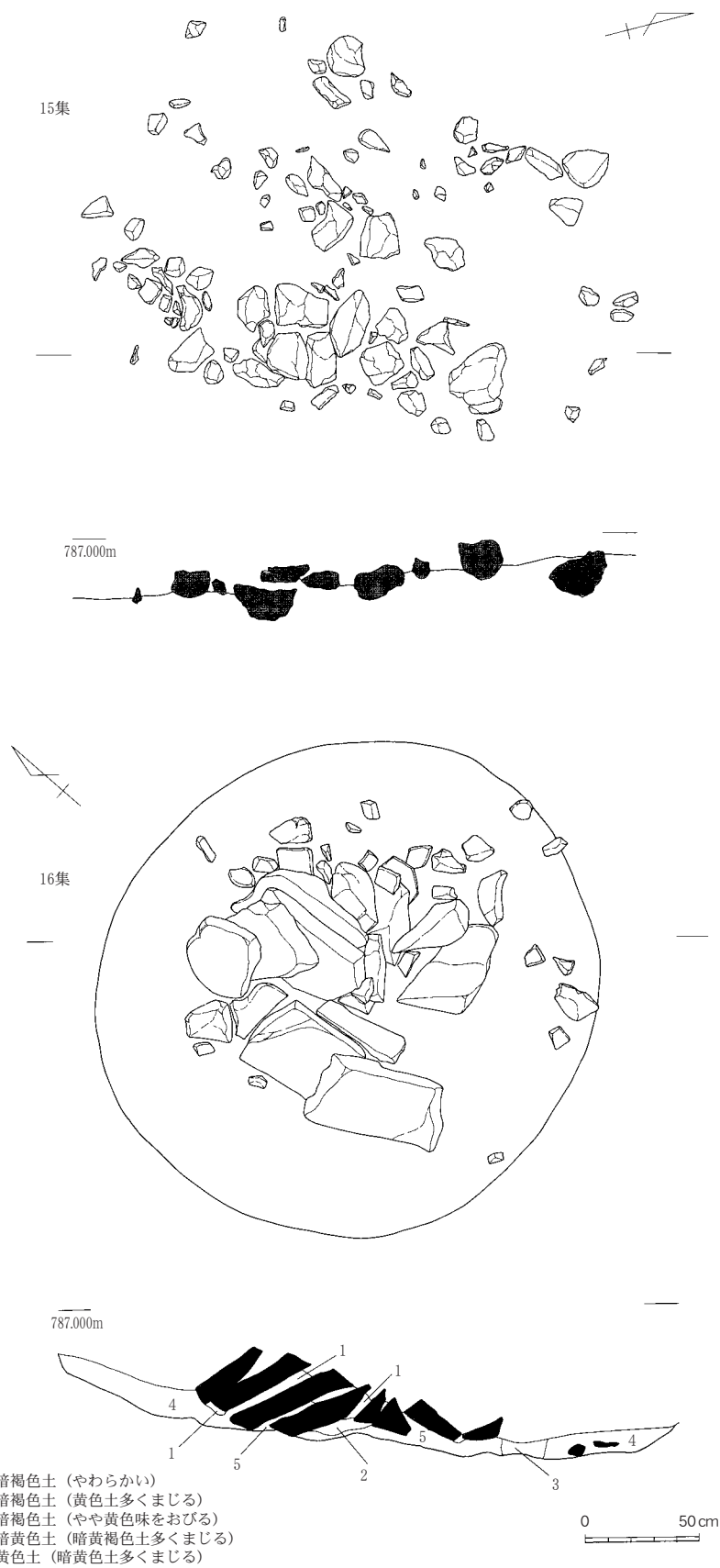
この集石は1×0.9mの楕円の範囲に石が集中しており、その下部には深さ約10cmの掘り込みが検出できた。土坑は暗褐色・暗黄褐色の覆土であった。なお、遺物は出土していない。

第13号集石 (第145図)

EC-72から出土している。直径1mの範囲に石が集中し、直下からは炭化物の混入した黒褐色土が上層に堆積し、下層には黄色土粒の混入した暗褐色土が堆積している。直下の土坑は直径1.4mの平面円形で、深さは約60cmを測る。なお石は土坑の上層までに出土しており、底面付近からは出土していない。



第145図 集石遺構平面図 (1)



第146図 集石遺構平面図 (2)

第14号集石（第145図）

この集石は2ヶ所に集中する地点が検出されており、本来は2基の遺構と考えられるが、調査時に1基としてあるため、ここではまとめて掲載している。

1基は1×0.7mの楕円形の範囲に直径20cm程度の石や細長い石が集中している。もう1基は直径0.5mの円形で、前者より小形の石が集中している。なお、下層には土坑等は検出されていない。

第15号集石（第146図）

2.3×1.5mの範囲にやや広がりをもって出土している。この集石の下層からは遺構は検出されていない。

第17号集石（第147図）

E G-30から出土している。直径1mの円形の範囲に集中して出土している。なお、下層には約1.1×0.9m、深さ約20cmの平面楕円形を呈する掘り込みが検出された。

（2）集 石 炉

第18号集石（第148図）

E G-29から出土した。直径2×1.5mの楕円形状に石が集中していた。この集石の下部には直径約1.7m、深さ約60cmの平面不整形円形を呈し、断面形状が楕円形をした土坑が出土した。石はこの土坑内の底面付近まで散在し、これらの石と共に覆土中からは炭化物や焼土が出土し、底面には偏平な石が敷かれているような状況で検出された。この出土状況からこの集石は炉であった可能性が高い。

第19号集石（第149図）

この集石はE D-30から出土している。1.5×1.3mのやや楕円を呈する範囲に集中しており、その下層からは土坑が重複して出土した。石は直下の土坑からも多数出土し、覆土中には炭化物や焼土も混入していた。なお、土坑底面より若干高い位置に偏平な石が敷かれたように検出されている。

石の出土した土坑は直径約1.4mの円形であり、深さは約50cmであった。また重複した土坑は、重複に気づかず掘り上げてしまったため、土層観察することができなかったが、直径約1.4mの平面不整形円形と考えられ、深さは約50cmの、断面楕円形を呈していた。

第20号集石（第149図）

D W-18の直径約0.9mの円形に石が集中して出土した。この集石直下から土坑が出土し、そこからも石が出土した。この土坑の覆土には炭化物および焼土が混入していた。下部出土の土坑は直径約1.2mの円形をしており、深さは約20cmを測った。

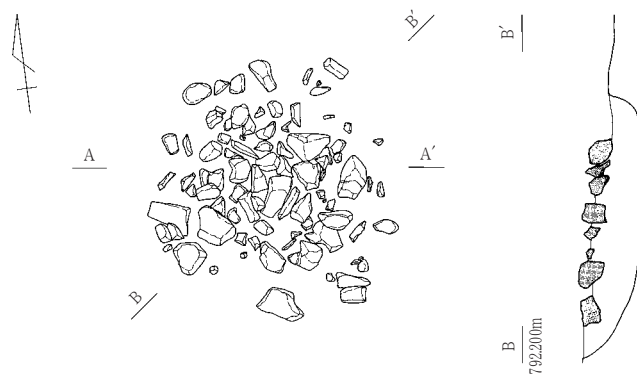
第21号集石（第150図）

F O-59から出土した。直径1.1mに集中して検出され、直下の土坑も、平面は同規模の方形に近い円形を呈し、深さ約20cmを測る、断面皿状の土坑底面まで、石が多量に出土した。

第IV章 遺構と遺物

第22号集石 (第150図)

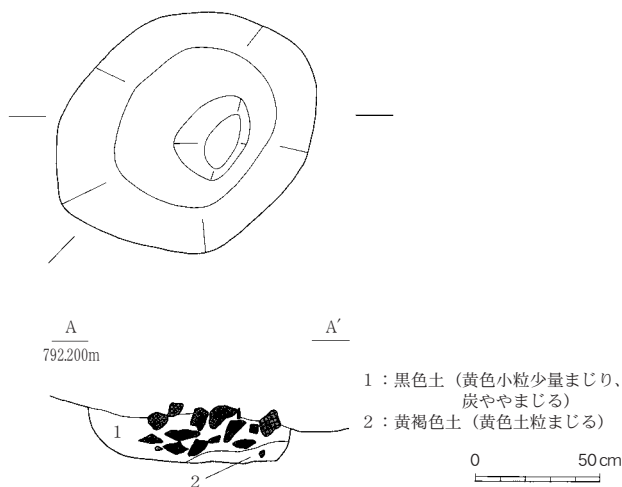
直径約0.6mの範囲に集中して検出され、直下の土坑の中層にまで多量に出土した。土坑は直径約1mの円形を呈し、深さは約1mであった。なお、覆土中からは炭化物や焼土は検出されていない。



(3) その他の集石

第16号集石 (第146図)

E B-58から出土している。これは1個の安山岩が節理面から剥離しており、意図的な痕跡を見いだすことはできなかった。しかし、自然石が単に割れたとは考えられない礫の配列から、何らかの素材としてここに置かれていたと考えられる。なお、遺物が出土していないため、時代の特定はできない。



4. 礫 群

第1号礫群 (第152図)

D Y-35を中心に出土している。直径約20cmの礫が、平面約2.7×1.5mと、約1.9×1.5mの範囲に隣接して出土した。礫は約40cmの深さまで入れられていた。礫の上面のレベルは、2基の間で若干高低差があるものの、遺構検出面とほぼ同一であり、この遺構の性格は明確にできないが、礫の上面の平面性を意識している可能性が高い。なお、この遺構からは鉄釘が1本 (第151図1) 出土している。

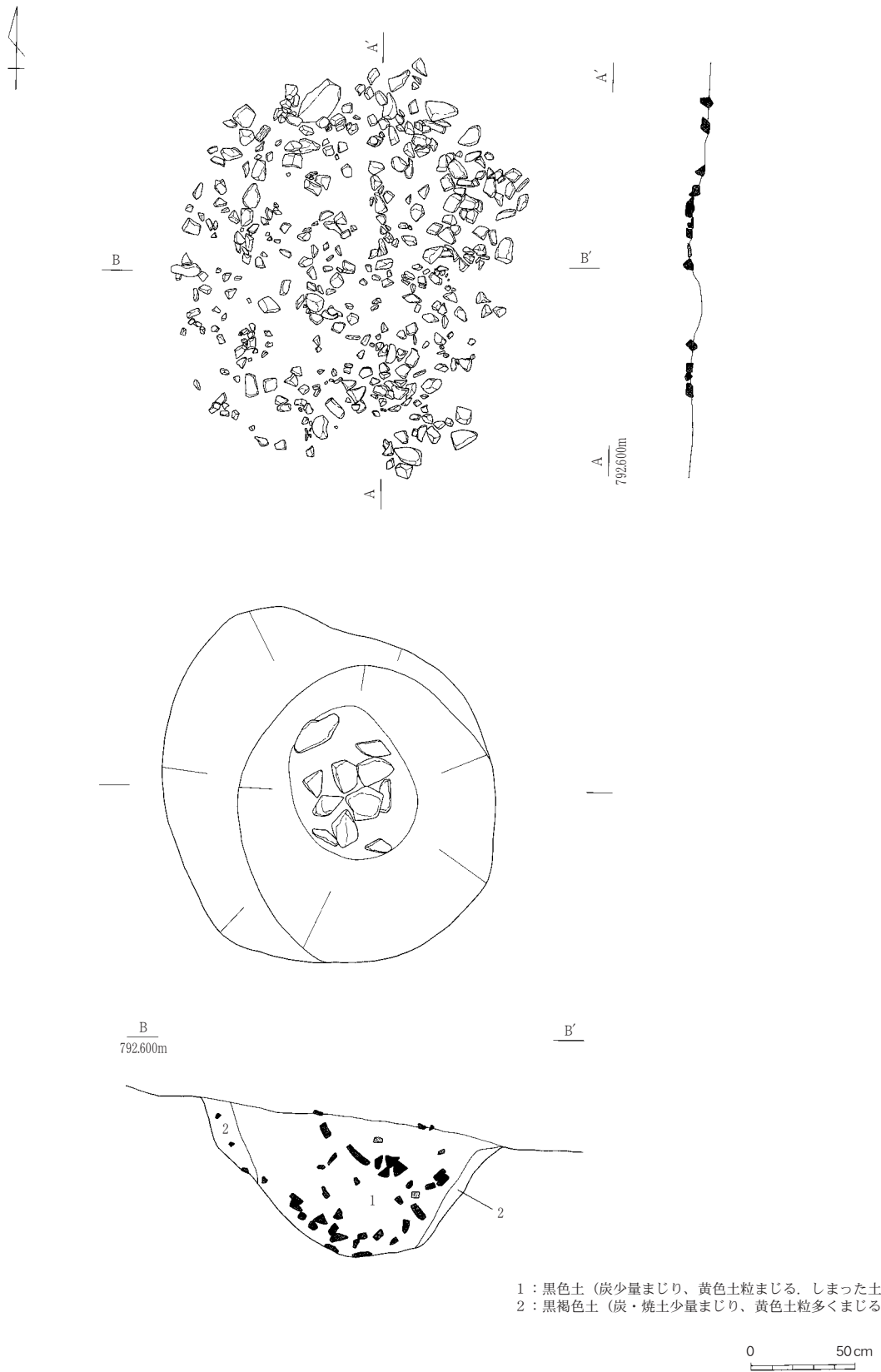
第147図 第17号集石遺構平面図

第2号礫群 (第153図、第154図)

この礫群はF I-26から出土している。この北方には、軸を直行させるようにして第3号礫群が出土している。第2号礫群は、長軸が北方向より若干東に傾いており、南部の遺存状態が悪く、形態を十分に留めていない。礫は、幅約80cmから1mを単位として、南北に7列配置され、長さは中央部の列で、最長5mに達していた。なお、西端部と東端部は長さ約2mで、さらに北西角に1.6×1mの東西に長い方形の礫集中区と、その対角部分にあたる南東角に、遺存状況は悪いものの1.5mの方形と考えられる礫の集中箇所が確認できる。この検出状況から、全体的にはクラック状の形状と考えられる。なお、性格不明の鉄 (第151図2) が出土している。

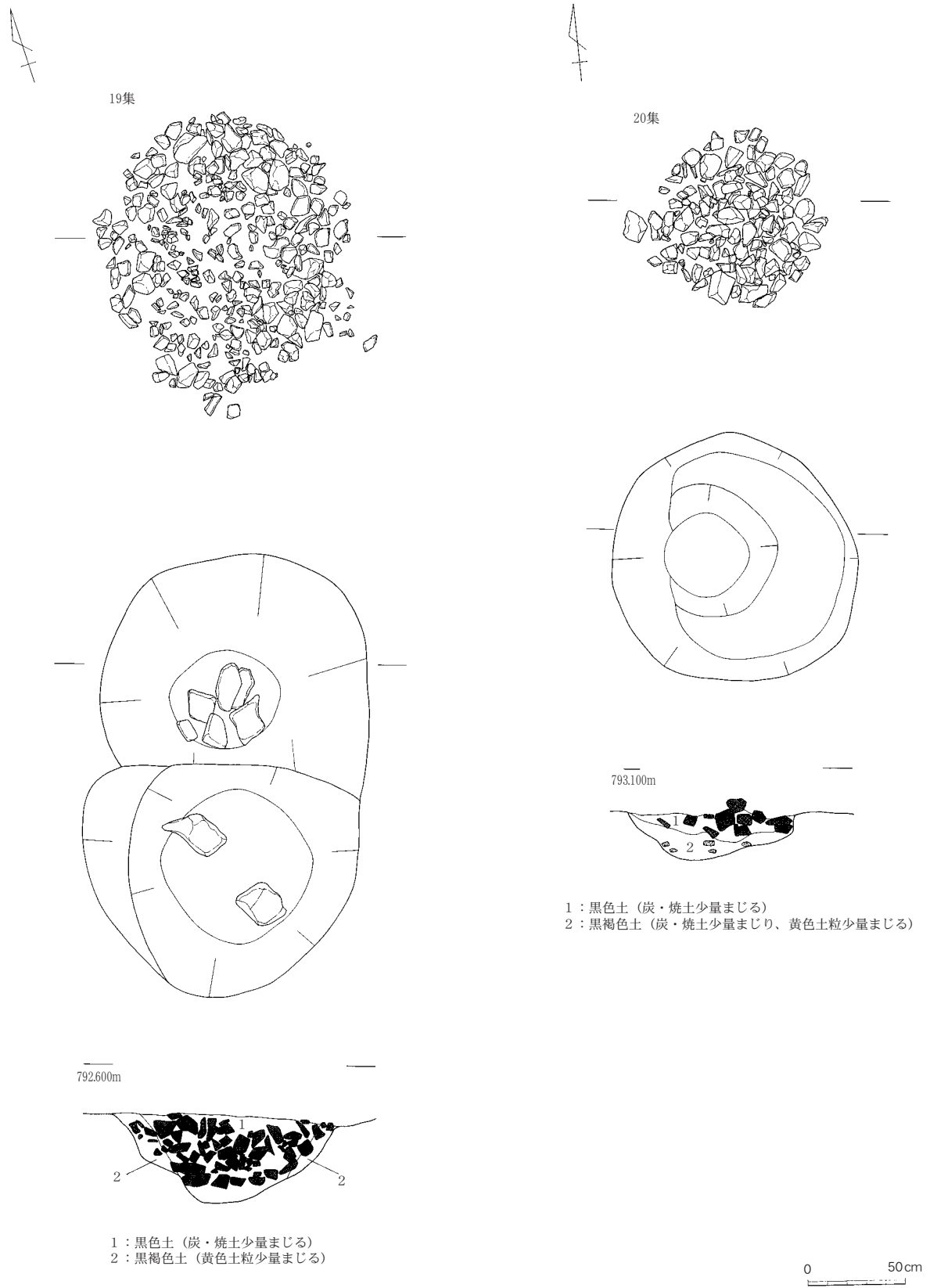
第3号礫群 (第153図、第154図)

第2号礫群と長軸を直行させるようにして検出された。この礫群は、幅約80cmで長さ約8.7mに渡って筋状に3本と、幅約1mで、長さ約6mの礫群が1本で構成されており、北部の礫群の長さが短い。なお、長軸方向に直行するような礫群の構成はみられなかった。なお、器形不明の鉄 (第151図3) が出土している。

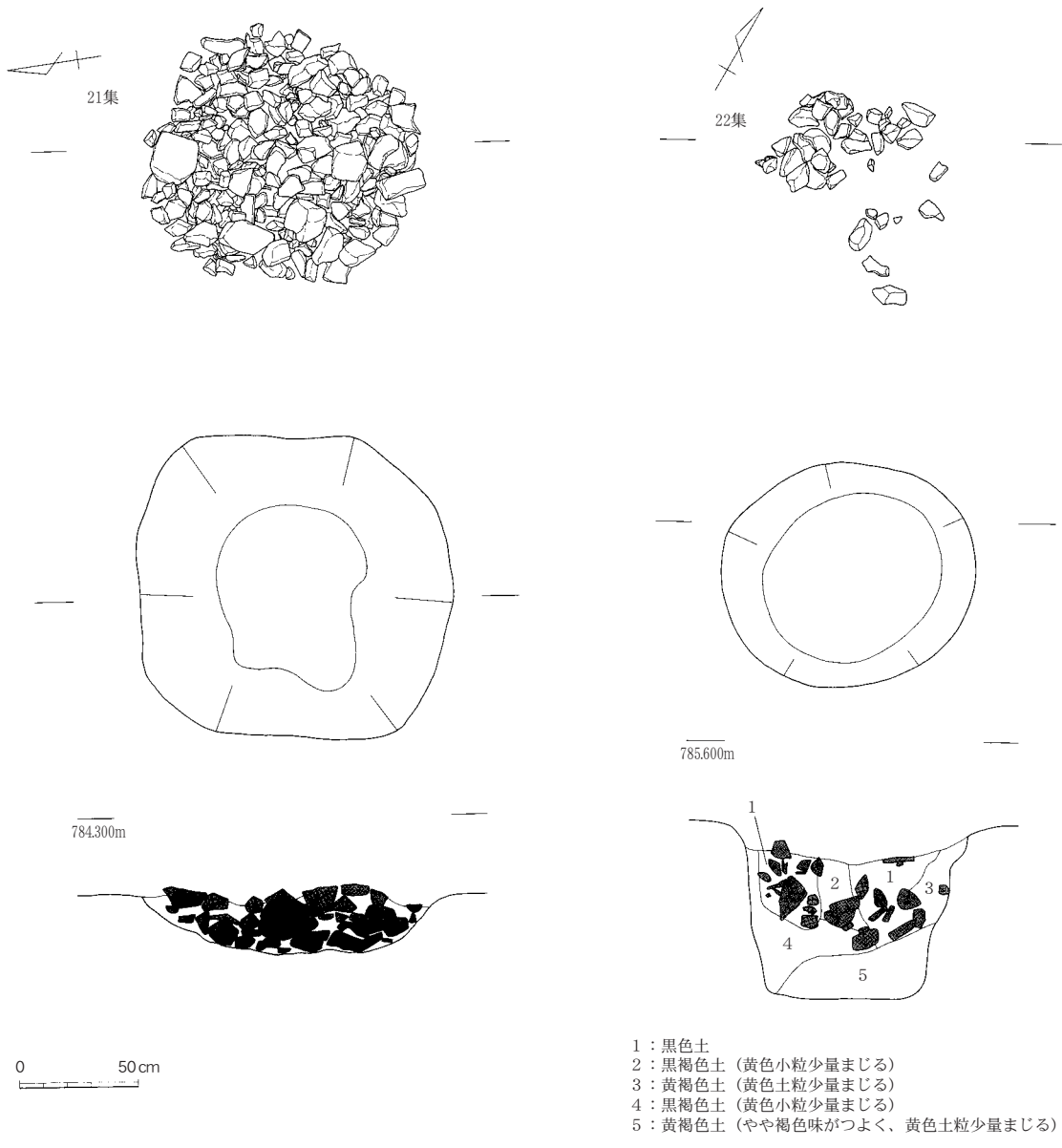


1 : 黒色土 (炭少量まじり、黄色土粒まじる、しまった土)
 2 : 黒褐色土 (炭・焼土少量まじり、黄色土粒多くまじる)

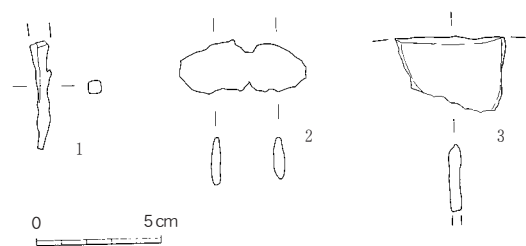
第148図 第18号集石遺構平面図



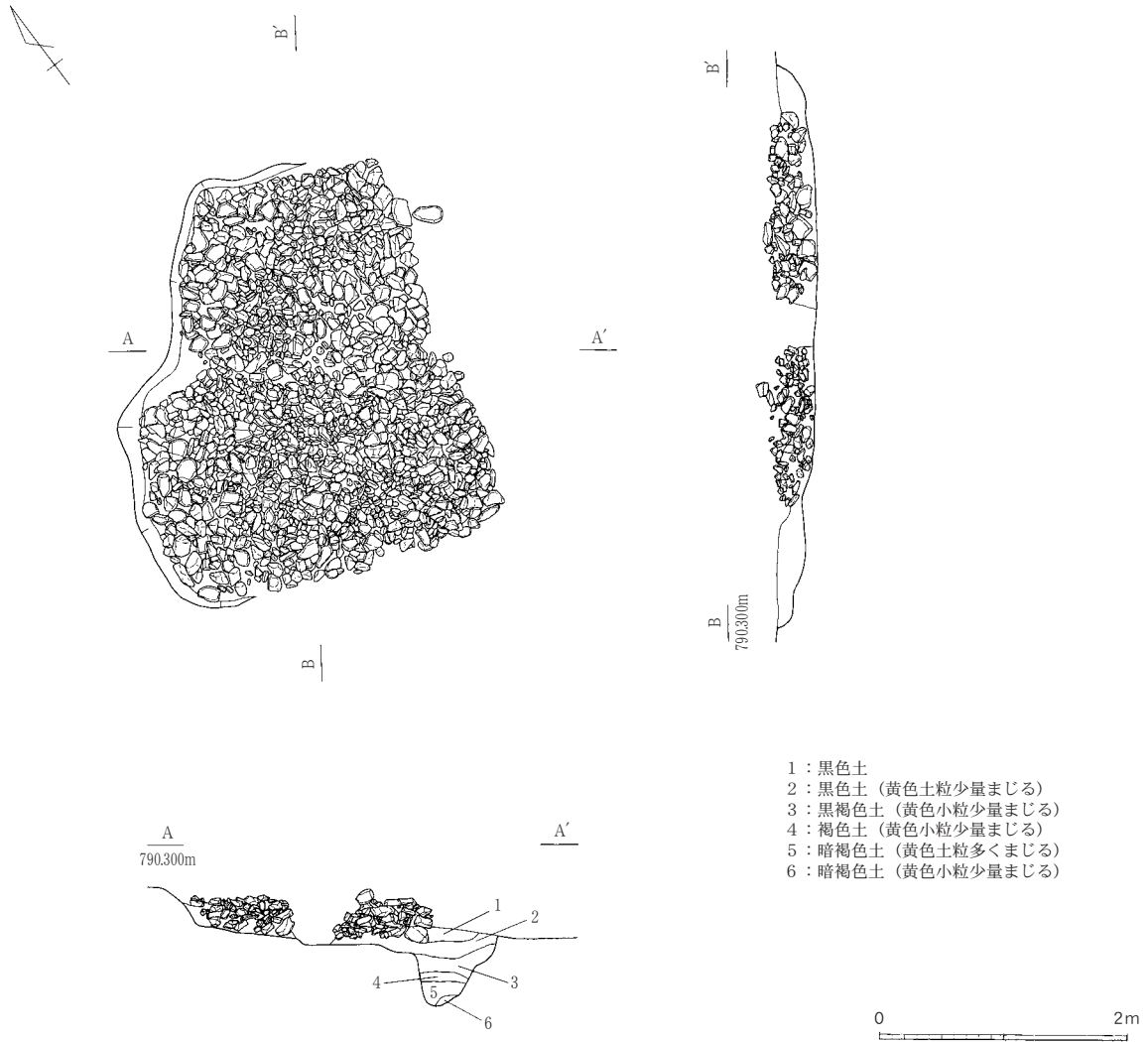
第149図 集石遺構平面図 (3)



第150図 集石遺構平面図 (4)



第151図 礫群出土遺物



第152図 第1号礫群遺構平面図

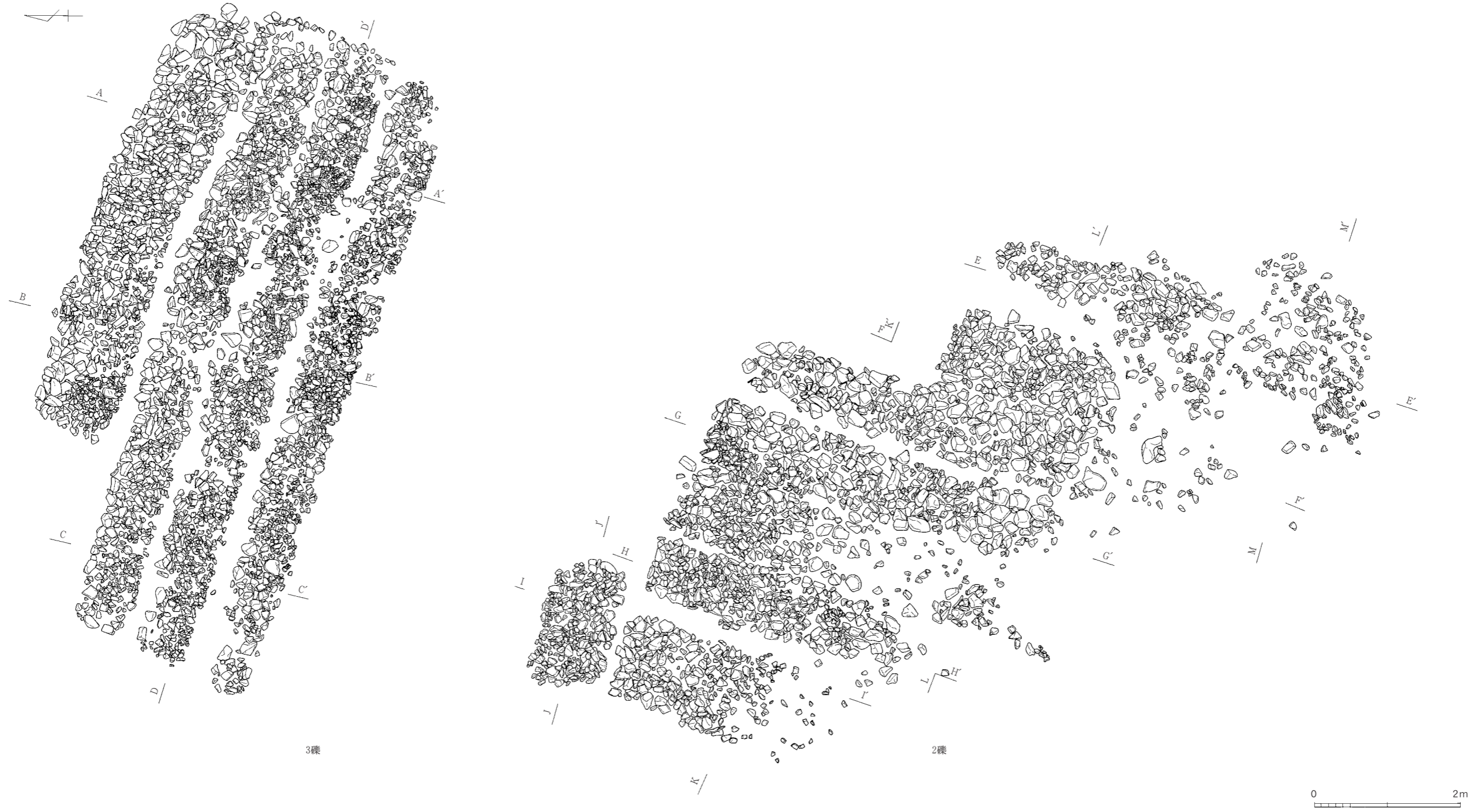
5. 溝 址

第1号溝址 (第155図)

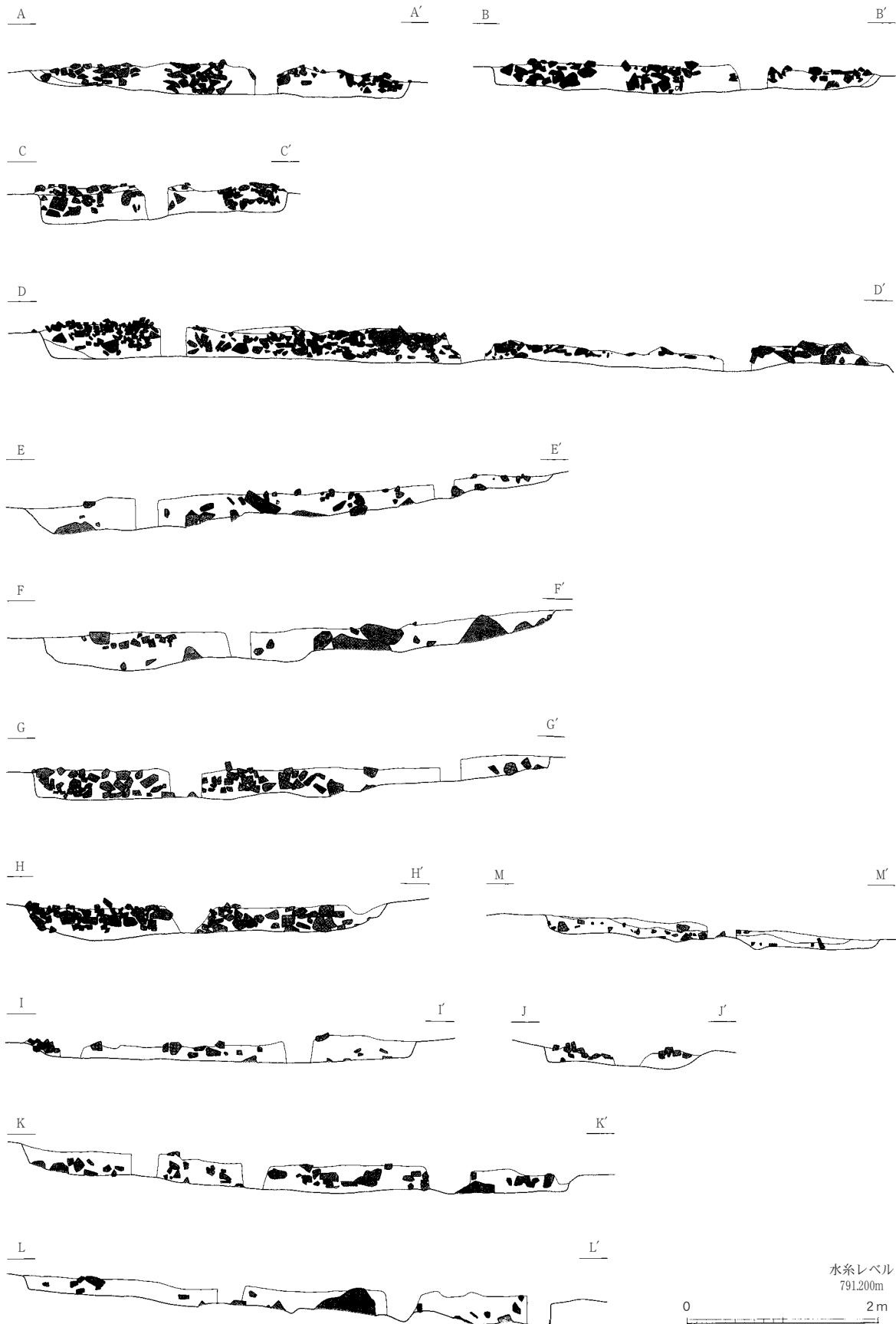
調査区の南西部から出土している。幅約1.5m、検出された長さは約12mであった。この溝址は西から東にむかって低くなっており、底面には少量の礫も出土している。覆土は、上部では暗褐色系の土が中心であり、下部になると黒褐色系の土が主体を占めるようになる。

第2号溝址 (第156図)

調査区の北西部から出土している。この溝址は西部から東部にむかって低くなっており、幅約1m、検出された長さは最長で約31mを測り、東部で2本に分かれている。なお、深さは全体的に浅く、15cm前後であった。また、覆土は全体的に暗褐色系の土で占められていた。

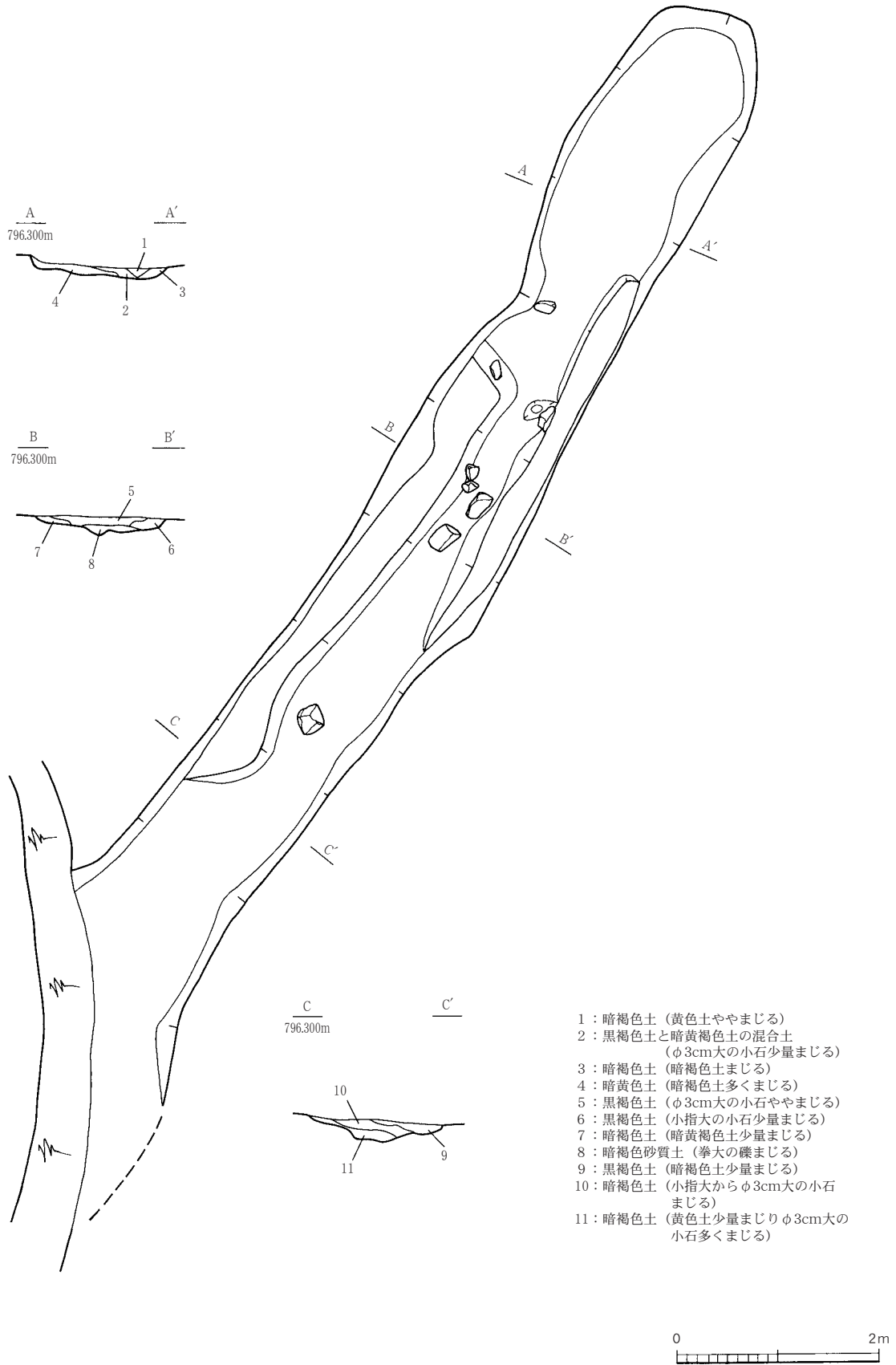
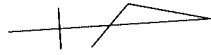


第153図 第2号・第3号礫群遺構平面図



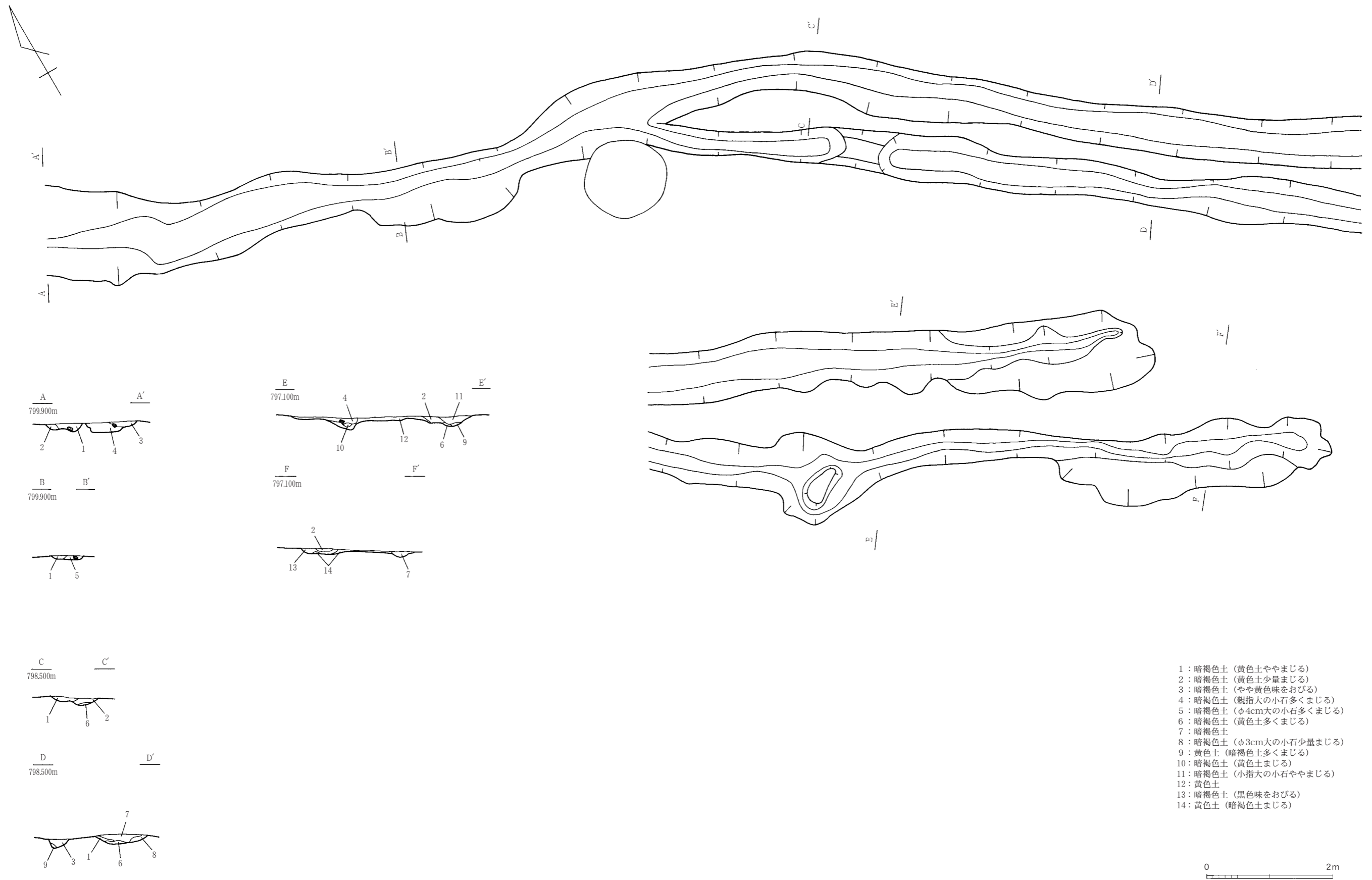
第154図 第2号・第3号礫群土層断面図

第IV章 遺構と遺物

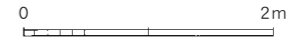


- 1 : 暗褐色土 (黄色土ややまじる)
- 2 : 黒褐色土と暗黄褐色土の混合土
(φ3cm大の小石少量まじる)
- 3 : 暗褐色土 (暗褐色土まじる)
- 4 : 暗黄色土 (暗褐色土多くまじる)
- 5 : 黒褐色土 (φ3cm大の小石ややまじる)
- 6 : 黒褐色土 (小指大の小石少量まじる)
- 7 : 暗褐色土 (暗黄褐色土少量まじる)
- 8 : 暗褐色砂質土 (拳大の礫まじる)
- 9 : 黒褐色土 (暗褐色土少量まじる)
- 10 : 暗褐色土 (小指大からφ3cm大の小石まじる)
- 11 : 暗褐色土 (黄色土少量まじりφ3cm大の小石多くまじる)

第155図 第10号溝址遺構平面図



- 1 : 暗褐色土 (黄色土ややまじる)
- 2 : 暗褐色土 (黄色土少量まじる)
- 3 : 暗褐色土 (やや黄色味をおびる)
- 4 : 暗褐色土 (親指大の小石多くまじる)
- 5 : 暗褐色土 (φ4cm大の小石多くまじる)
- 6 : 暗褐色土 (黄色土多くまじる)
- 7 : 暗褐色土
- 8 : 暗褐色土 (φ3cm大の小石少量まじる)
- 9 : 黄色土 (暗褐色土多くまじる)
- 10 : 暗褐色土 (黄色土まじる)
- 11 : 暗褐色土 (小指大の小石ややまじる)
- 12 : 黄色土
- 13 : 暗褐色土 (黒色味をおびる)
- 14 : 黄色土 (暗褐色土まじる)



第156図 第11号溝址遺構平面図

6. その他の遺構と遺物

(1) 小 豎 穴

第1号小豎穴（第158図）

今回の調査ではFC-46から1基出土している。直径約2.5mの平面円形を呈し、深さは約20cmと浅く、壁の立ち上がりは比較的なだらかである。なお、北東部のテラス状の落ち込みは地山の可能性も考えられる。

また、遺物も出土していない。

(2) 豎穴建物址

第1号豎穴建物址（第158図）

EF-71から出土している。約3×1.5mの平面長方形を呈し、深さ約15cmであった。なお、この豎穴建物址は第2号豎穴建物址と重複して出土している。また、遺構検出の際に豎穴建物址が把握できなかったため、土層を記録することができなかった。

遺物は出土していない。

第2号豎穴建物址（第158図）

第1号豎穴建物址の西部、EF-72から重複して出土している。プランは約2.2×1.2mと推定される平面長方形で、深さ約50cmであった。この豎穴建物址の西部には第262号土坑が重複して出土しており、この遺構を先行して調査してしまったため、土層観察を十分に行っていない。

遺物は出土しなかった。

第3号豎穴建物址（第158図）

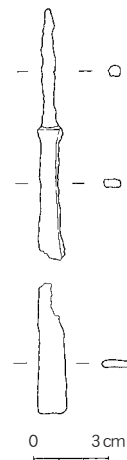
西部が第2号豎穴建物址と重複してEE-73から出土している。1辺約1.9mの平面方形で、深さ約10cmであった。遺構検出面からの深度は浅く、遺物の出土も確認できなかった。

遺物は出土していない。

(3) 柱 穴

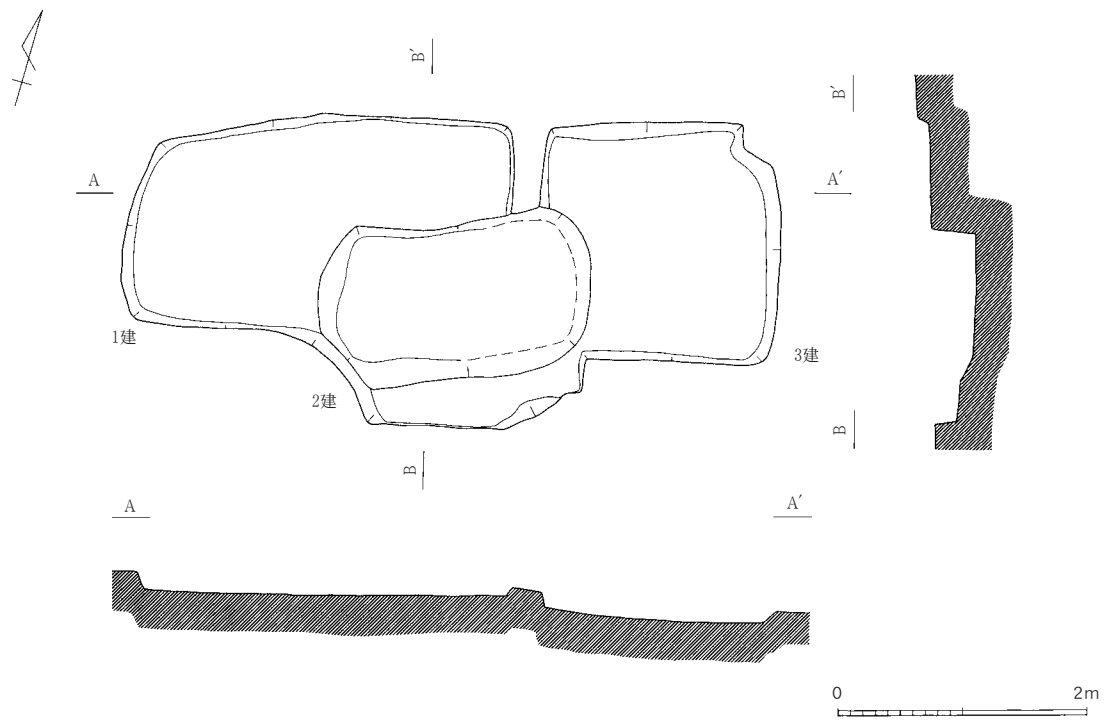
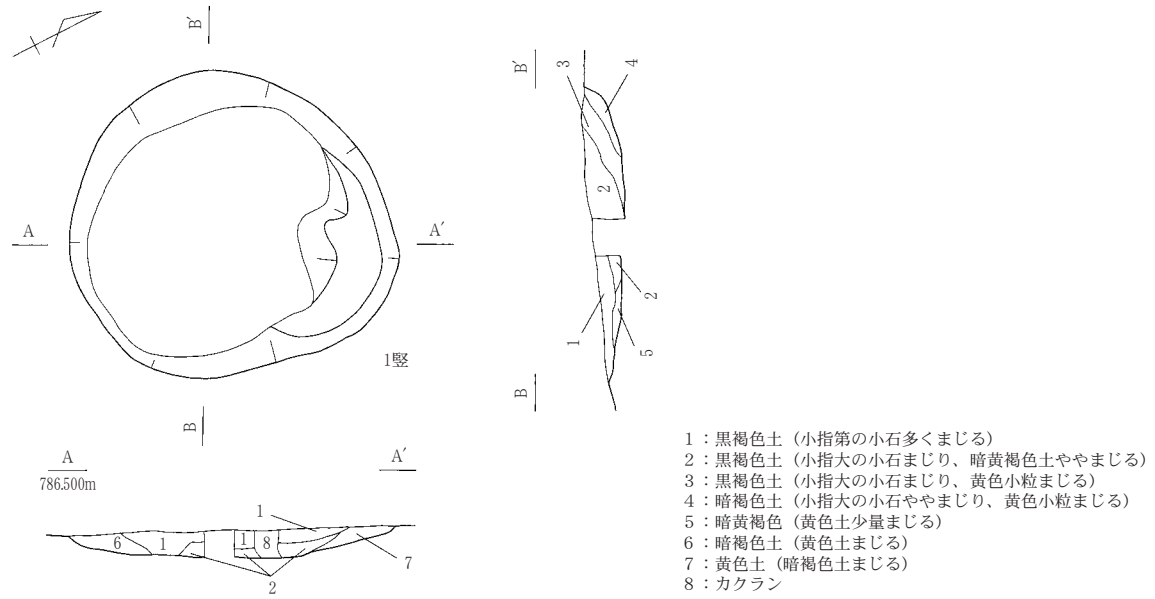
今回の調査では柱穴が数箇所からまとまって出土しているが、建物址のプランを明確に確認できる地点はなかった。しかし、第33号住居址（第9図）で検出された柱穴（P1）から鉄器が出土したため、ここで遺物を掲載する（第157図）。この鉄器は鑿と考えられるが、刃部の中部が欠損しており、正確な大きさは不明である。

なお、この鉄器は『神谷所遺跡Ⅰ』調査報告書において第10号住居址出土として掲載しているが、調査次の誤認によって誤って掲載してしまっているため、ここで訂正し、再度掲載する。



第157図 柱穴出土遺物

第IV章 遺構と遺物



第158図 第1号竖穴・第1・2・3号竖穴建物址遺構平面図

7. 遺構外出土の遺物

今回の調査でも第1次調査と同様に多量の遺構外出土遺物があるが、ここではその中でも、遺構として検出されなかった時期の遺物および石器、鉄器を中心に掲載している。

第159図1は縄文時代早期の遺物である。振幅の小さい山形文を帯状に施文した押型文である。

第159図2は縄文を施文している土器片である。

第159図3～19は縄文時代中期初頭の土器片である。主に縄文系の土器である。3は並行沈線を縦位に施文し、口縁部上端部と頸部に横位の区画文を施文している。8は口縁部に弧状の隆帯を貼り付け、口縁部上部に達した所から、平行沈線文が縦位に引かれている。また、口唇部にはキザミがみられる。

第159図4・6・7・9・11は縄文系である。口縁部付近や、頸部に爪形隆帯が貼付され、平行沈線で直線文やY字文が施文されている。その他は縄文系ではあるが、隆帯を伴わない沈線のみを施文の土器片である。半截竹管状工具による並行沈線文の施文と、棒状工具による単沈線による施文の2種がみられる。なお、口唇部にはキザミが行われている。

第159図20～25は縄文時代後期の土器である。棒状工具による曲線文や、磨消縄文を施文した破片がある。また粗製土器の破片もみられる。

第159図26～28、第160図1～3は縄文時代晩期の土器である。磨消縄文や、浮線網状文がみられる。

第160図4～6は弥生土器である。4は前期の土器片と考えられ、条痕文が施されている。5は後期の壺の破片である。口縁部にクシ描波状文の痕跡が残されている。6は高杯の口縁部と思われる。

第161図1～15は石鏃である。これらの内、未成品と考えられる破片は第161図12～15である。

これらの未成品と、大きく欠損した破片を除いてみると、石鏃には全体の形状が正三角形を呈する物と、二等辺三角形を呈する2種類がある。

正三角形を呈する石鏃は、基部の挟りが逆V字状（第161図5）または弧状を呈する（第161図7）2種類が存在する。

二等辺三角形を呈する石鏃については、基部の挟りが逆V字状（第161図4・8・9）、弧状（第161図1・3）の3種類の石鏃がみられる。

その他、有茎鏃として凹基有茎鏃（第161図10・11）も出土している。

第161図16～19は石鏃である。棒状でつまみを持たない（第161図16）ものや、大きなつまみを持ち、刃部の短い（第161図17）もの、逆三角形の形態（第161図18）を呈したものの、破片を利用している（第161図19）ものなどがある。

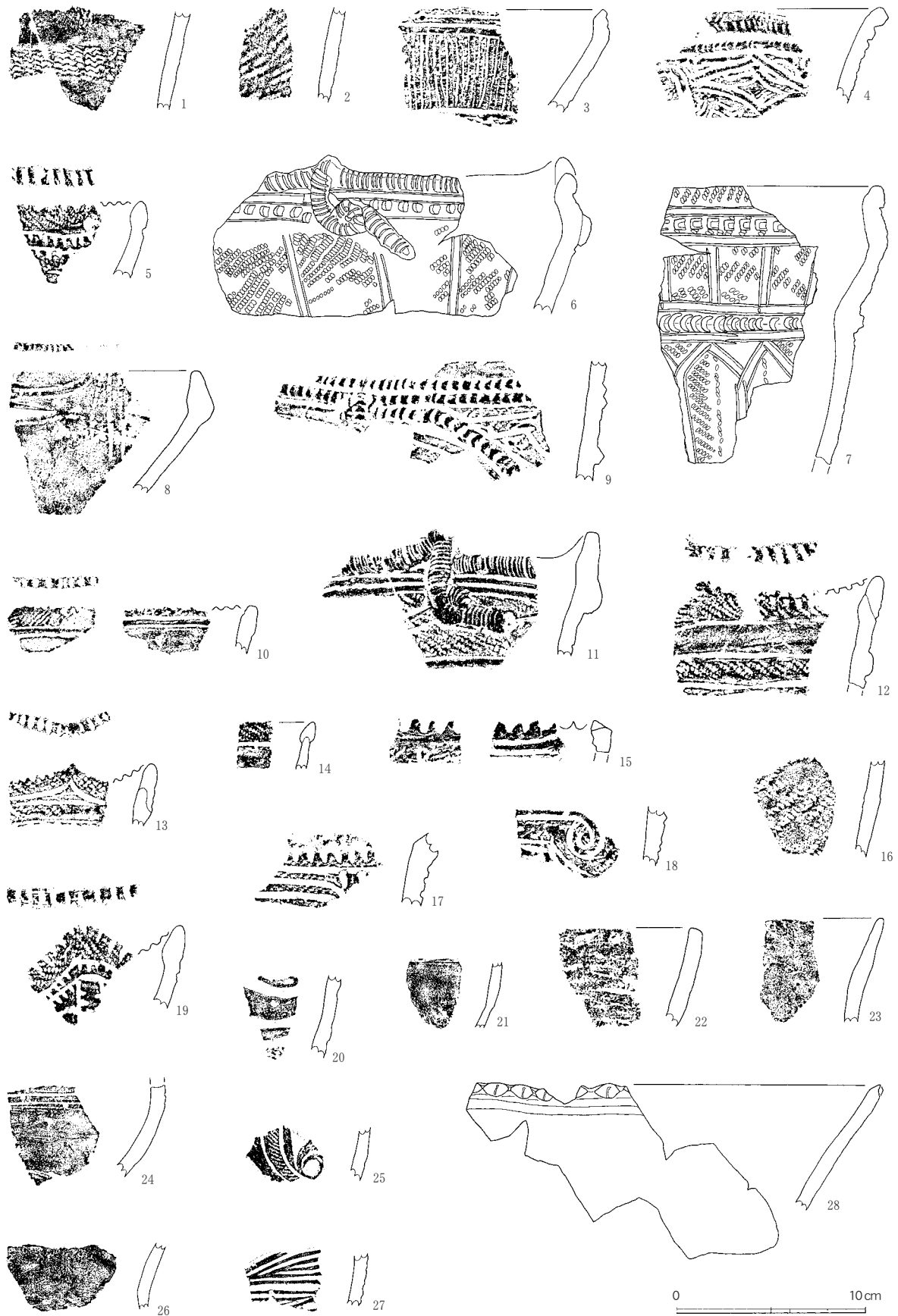
第161図20～22、第162図1～6は石匙である。つまみを明確に作っている（第161図20・21）ものが出土している。

このほかに、楔型石器（第163図11～16）や、剥片を使用した石器（第162図7～17、第163図1～10）、石核（第164図、第165図、第166図）等が出土している。

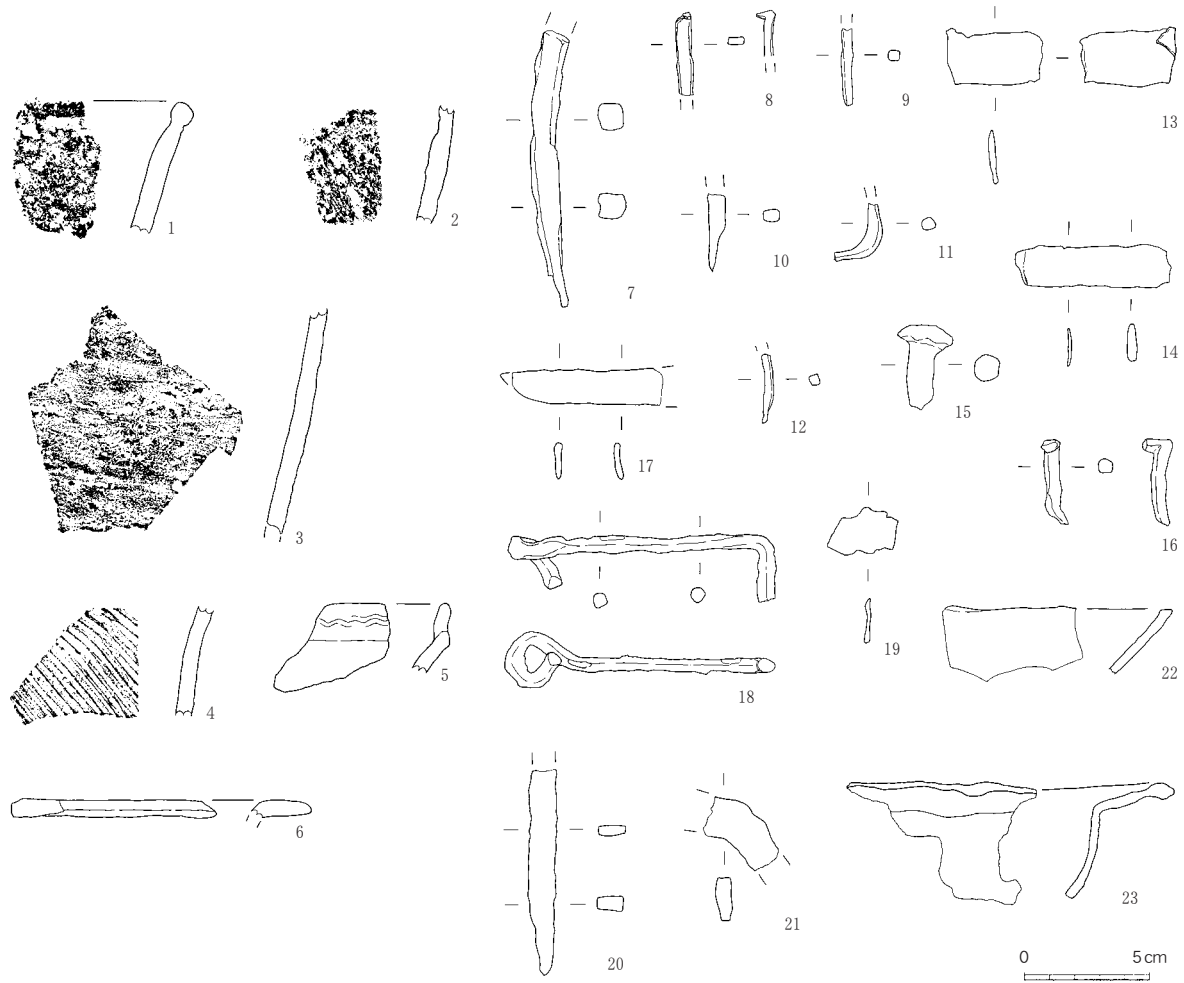
第167図1～7は打製石斧である。第167図1・2・5は撥型である。第167図6・7は短冊型である。また第167図3・4は横刃型石器である。

第169図4は乳棒状磨製石器である。

第169図7は磨製の石斧と考えられる。黄褐色を呈し、5面すべてきれいに磨かれている。



第159図 遺構外出土遺物(1)



第160図 遺構外出土遺物（2）

第167図8・10は磨石の破片である。第167図9、第168図3・4、第169図1～3は磨石である。偏平な円盤状の形態（第167図9、第168図3・4）と、偏平な楕円状の形態（第169図1～3）がある。

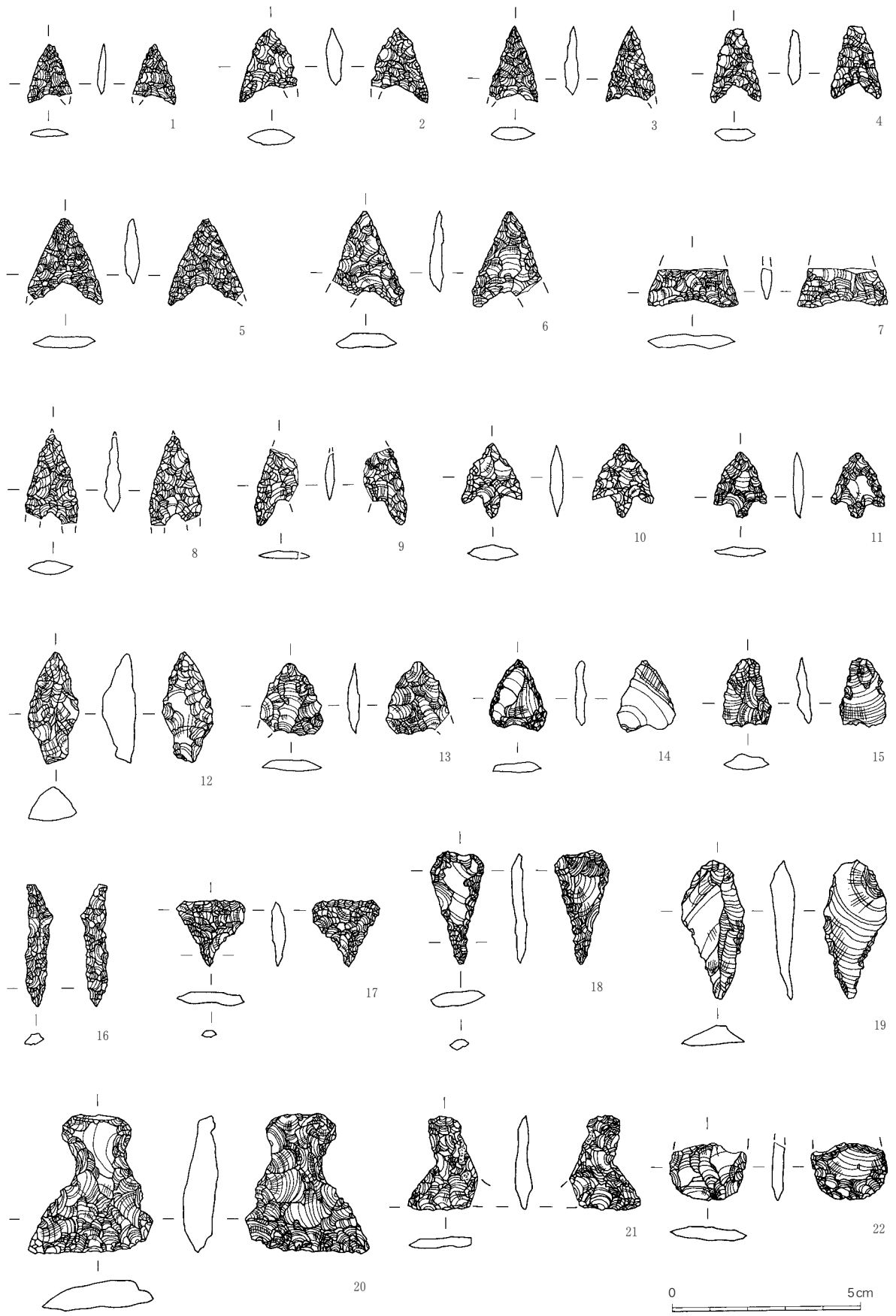
その他、打撃痕をとどめる礫がある。第168図1・2は棒状の礫の上下部に打撃痕がみられ、1の側面には埴打痕が観察される。第168図5は、偏平な礫の表面と背面に埴打痕がみられる。

第169図5も上下部に打撃痕がみられ、側縁部には磨痕をとどめている。

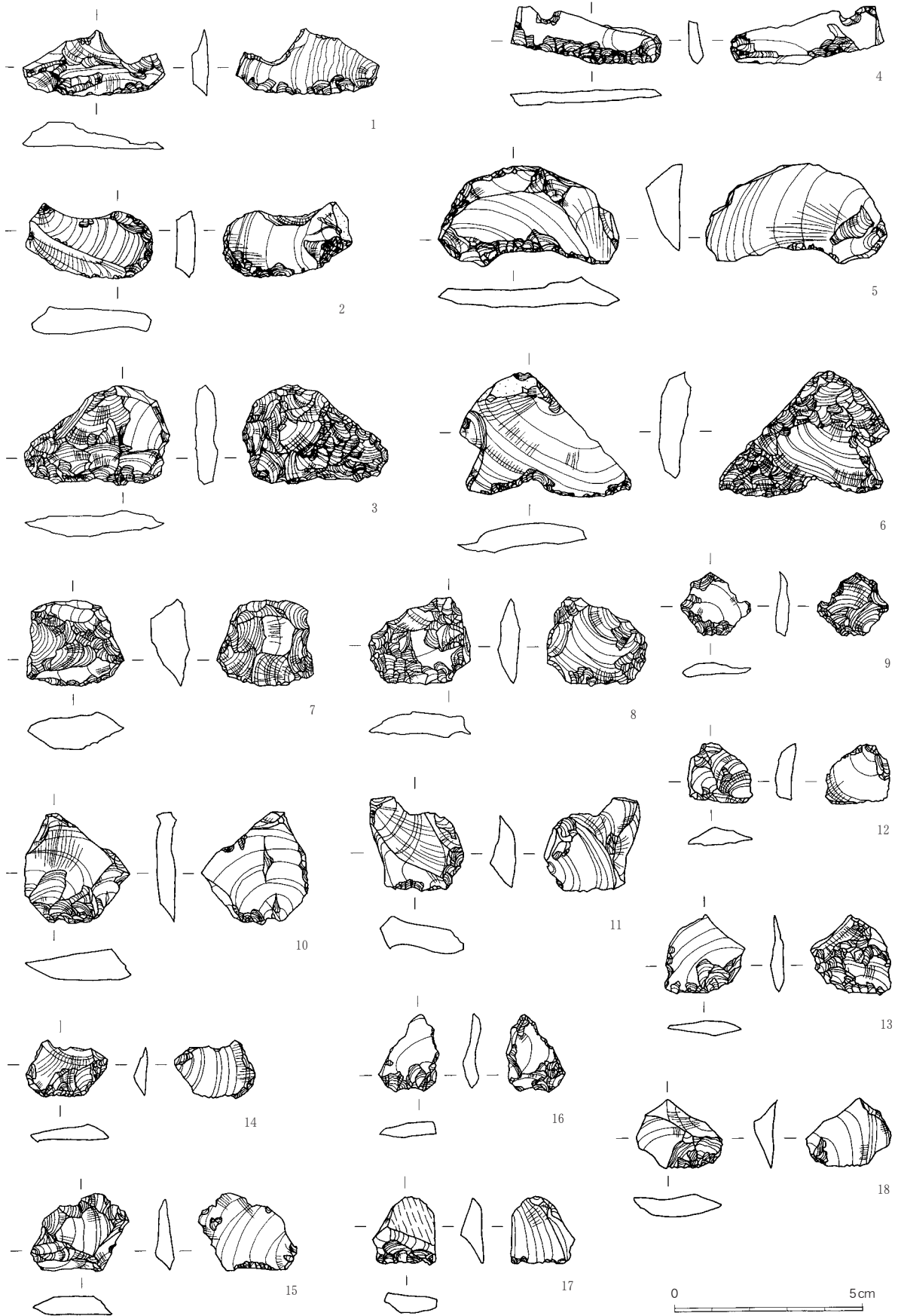
口絵は陶磁器である。小片ではあるが白磁碗の破片や、龍泉窯系の青磁碗、鉢（片口鉢か）の破片等が出土している（巻頭図版2）。

美濃瀬戸系の陶磁器は鉛釉の小皿片等が出土している。

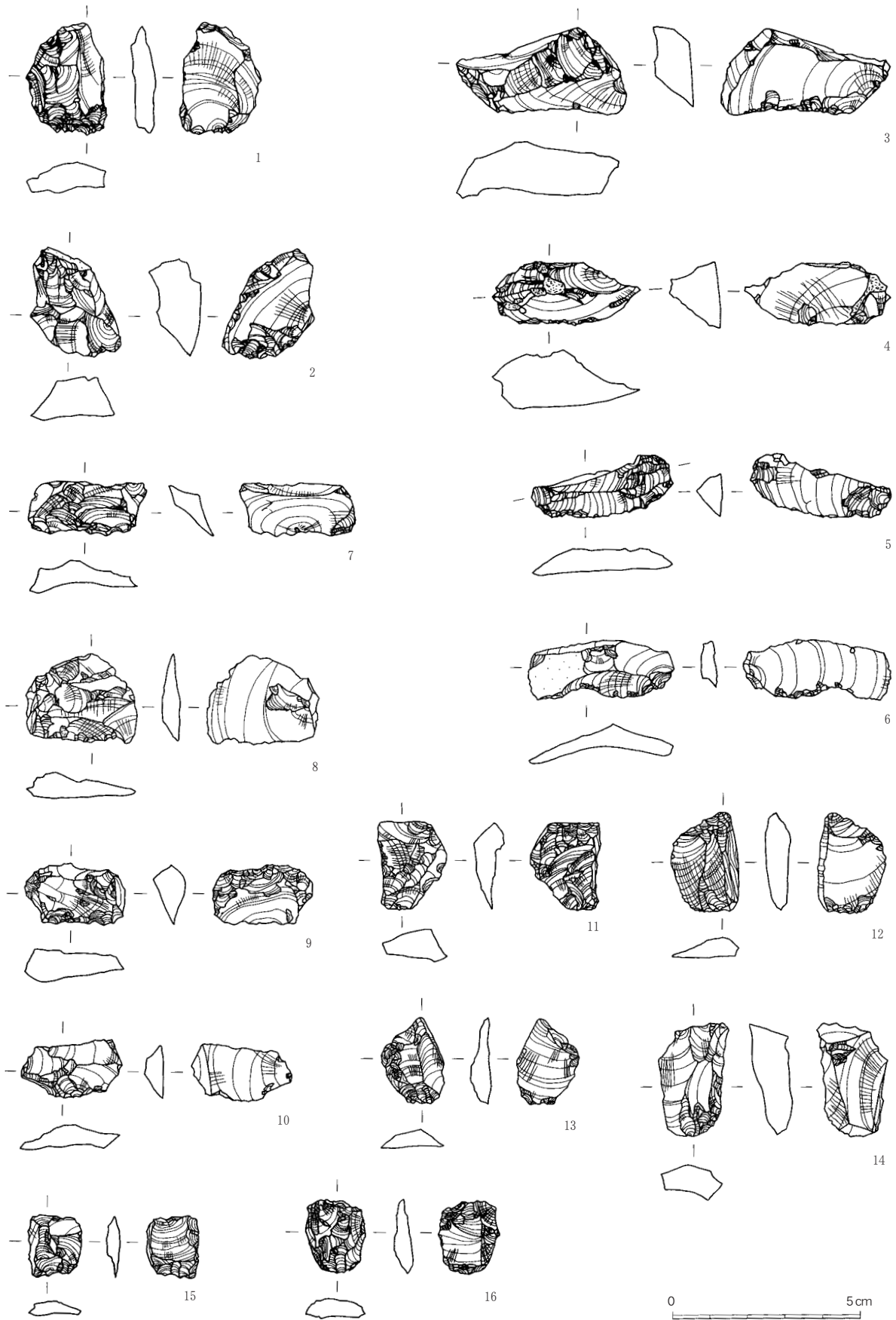
第160図は7～23鉄製品である。用途のわからない製品が多い。7～10・12は鉄釘である。15は大型の釘の可能性もある。17は刀子の刃部である。22・23は铸造鉄器の破片と思われる。22は内耳鍋片、23は鉄鍋片と考えられる。



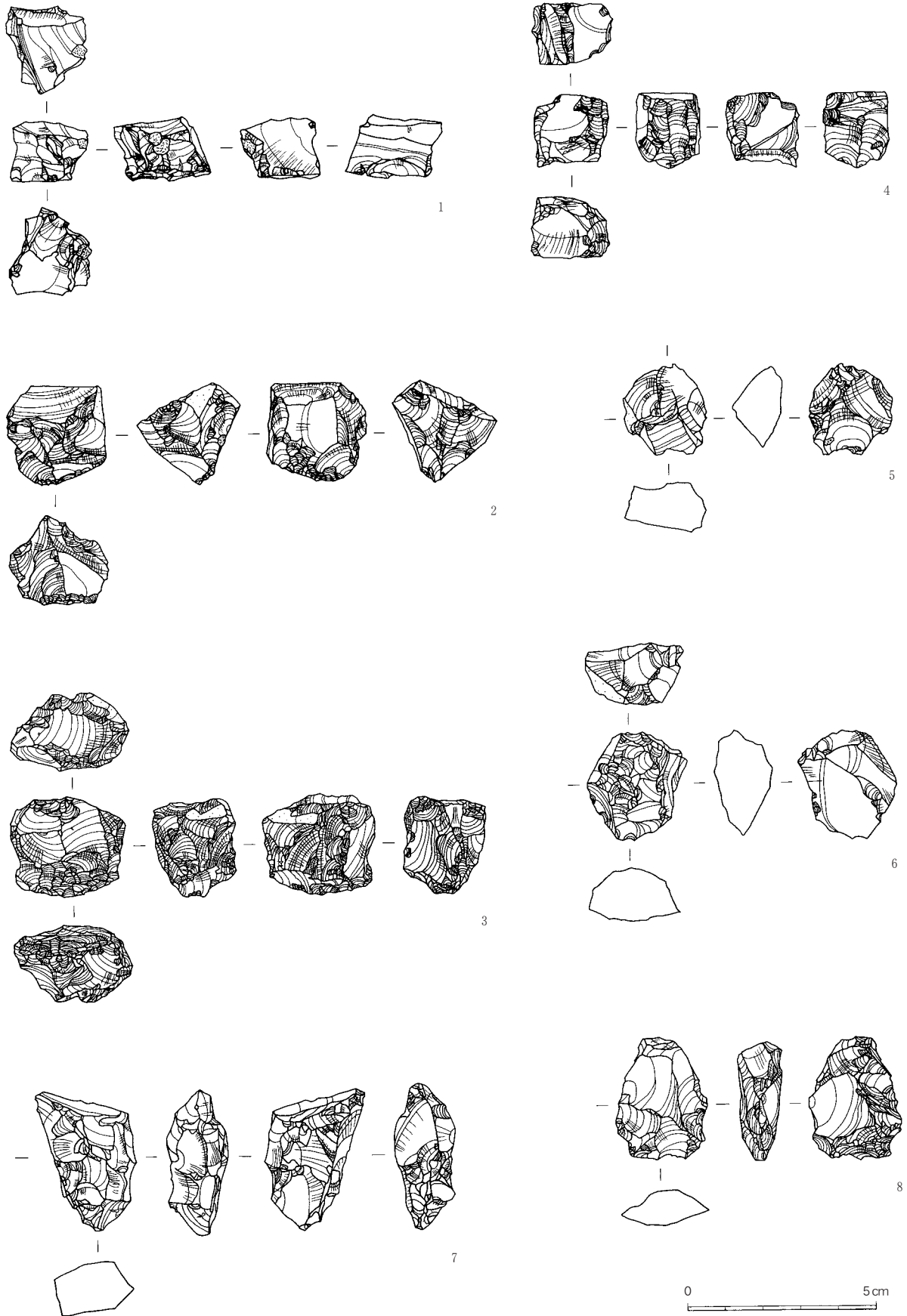
第161図 遺構外出土遺物 (3)



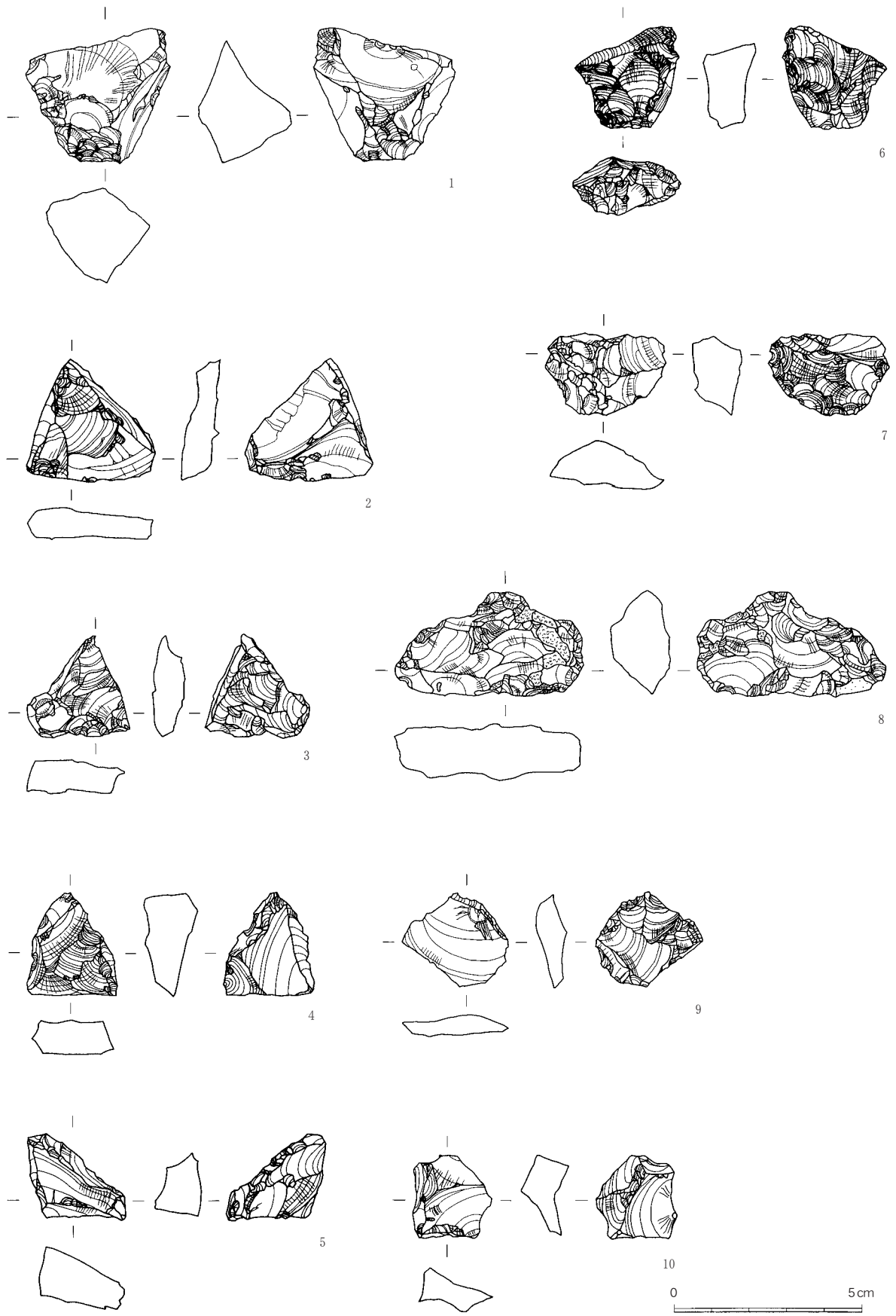
第162図 遺構外出土遺物（4）



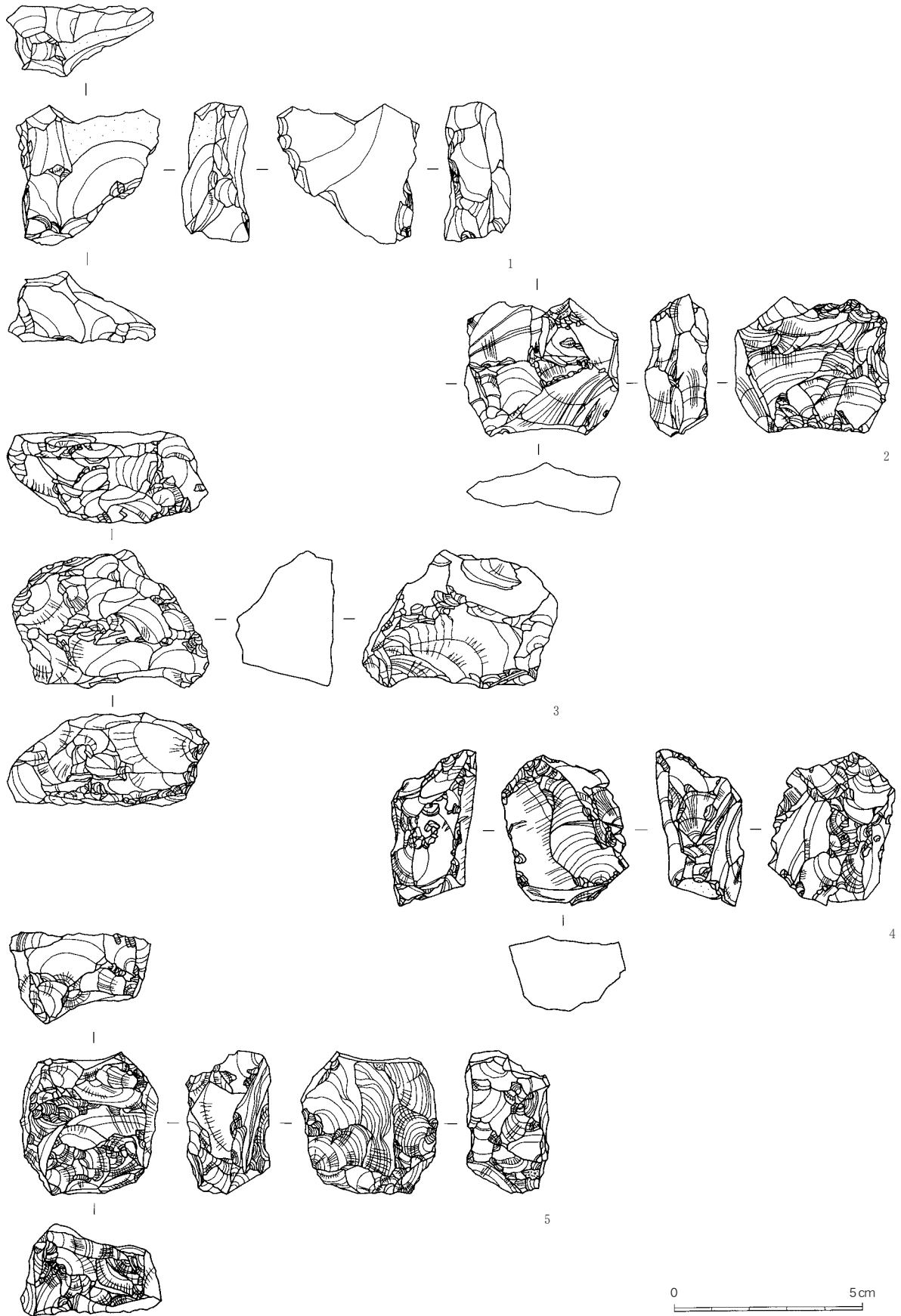
第163図 遺構外出土遺物 (5)



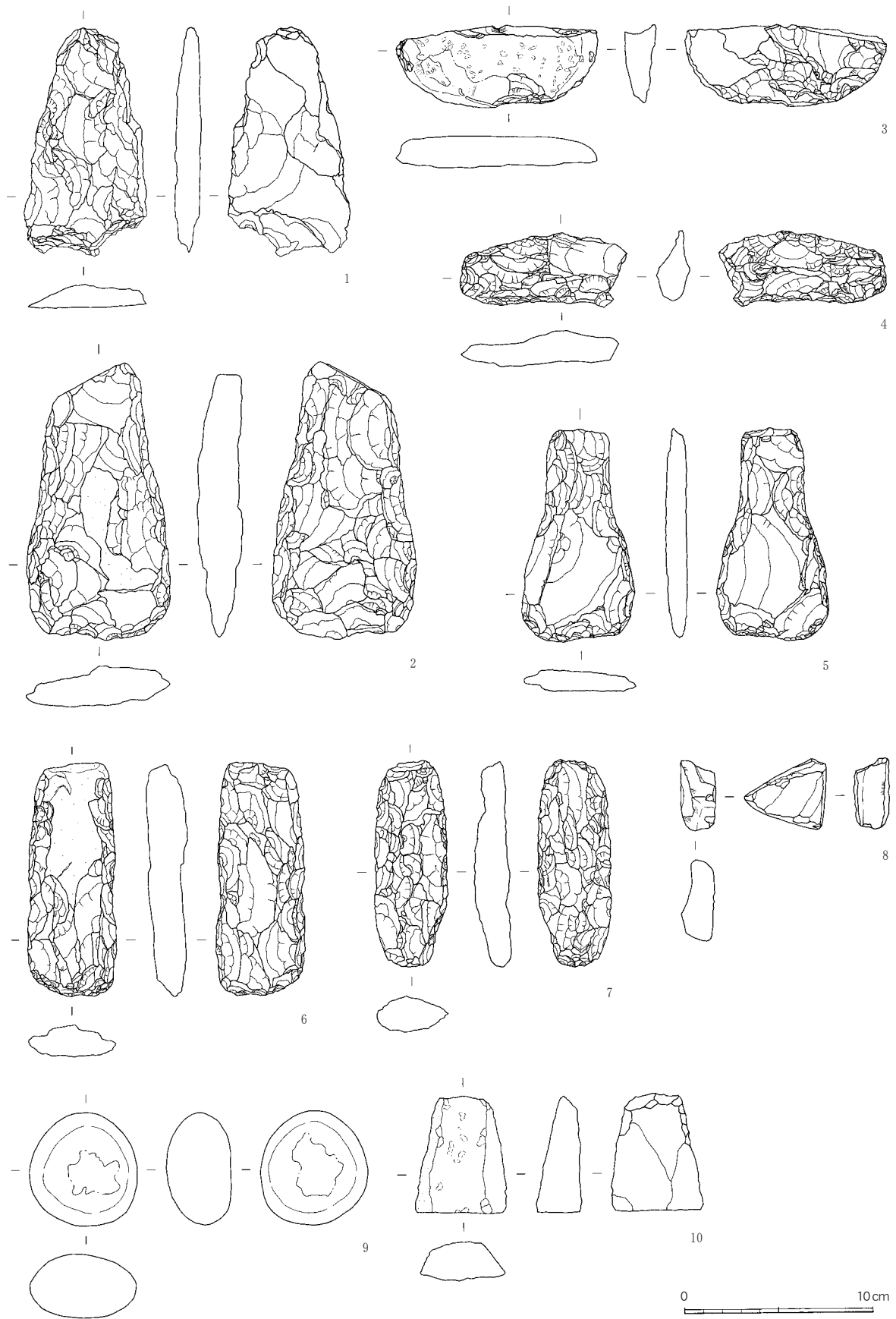
第164図 遺構外出土遺物 (6)



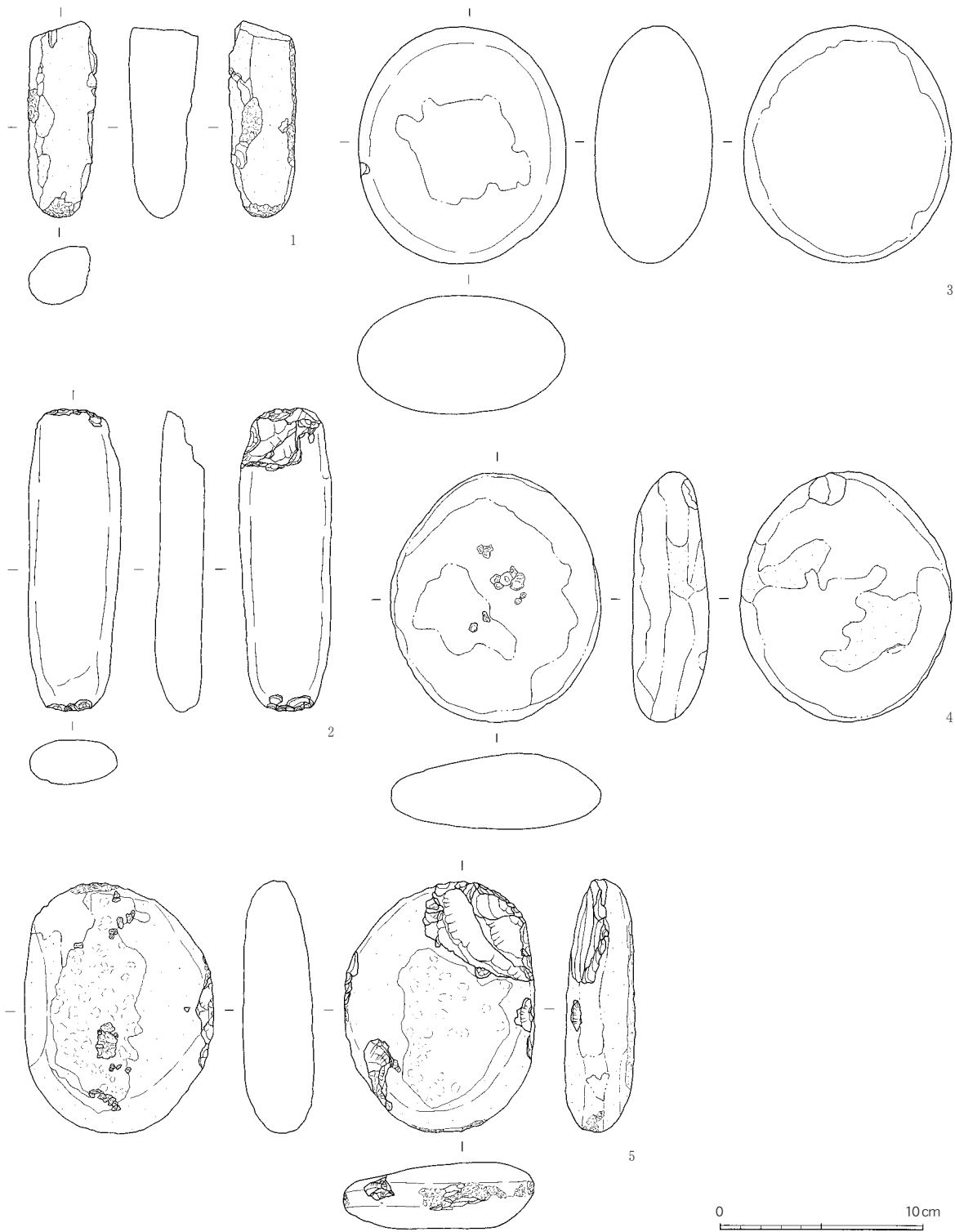
第165図 遺構外出土遺物 (7)



第166図 遺構外出土遺物（8）



第167図 遺構外出土遺物 (9)



第168図 遺構外出土遺物 (10)



第169図 遺構外出土遺物 (11)

第V章 ま と め

今回の調査では縄文時代前期から中期初頭にかけての住居址が出土した。

このなかでも遺物を多量に出土した住居址は日向式期であった。

第58号住居址はレンズ状文や沈線による羽状文、結節浮線文が見られる。結節浮線文は同心円状に施文されず、曲線状に施され、貼付文も単独で貼り付けられている。また、ヘラ切りによる浮線文の破片も出土している。住居址の形態は、不整形な方形で、壁の周囲に細い柱を立てていたようである。炉は住居址中央部に設けられていた。

65住と67住は重複関係にある。調査時の所見では、第67号住居址が、第65号住居址を切っていると観察されている。出土した遺物をみると、両者ともに、日向式と考えられ、時期差が認められない。文様構成で見ると、第65号住居址出土遺物は結節（ヘラ切り）浮線文と、平行沈線文によるレンズ状文が施文されているのに対して、第67号住居址ではレンズ状文の他に、深い沈線を伴う渦巻文の破片が出土している。また三角形の印刻文も見られる。さらに結節沈線文の破片も散見された。住居の構造は、第65号住居址は半分ほど掘り込まれ、明確にすることができないが、両者ともに地床炉であったと考えられ、柱穴も明確に検出できなかった。壁は第65号住居址では直立するように造られていたものの、第67号住居址ではなだらかに立ち上がる部分も見受けられた。

以上のとおり日向式期の土器を出土する住居址をみてきたが、その形態は様々である。特に第58号住居址と、第68号の形態は、第1次調査で出土した第23号住居址と近似している。この住居址からは、縄文時代中期初頭（九兵衛式期）の土器片が出土しており、時間的に隔たりが感じられる。今後その系統について検討していかなくてはならない。

次に弥生時代であるが、前期の条痕文土器片を伴う土坑も出土しているが、多くは後期の住居址であった。

弥生時代については辰野町ではこれまでに中期と考えられる遺構からの一括資料の出土例がなく、後期でも遺構内からの遺物の出土は非常に乏しい。神谷所遺跡においても例外ではなく、住居址内から出土し、図化できたのは埋設炉に使われた土器が中心であった。このような状況ではあるが、今調査と第1次調査で出土した土器について、その文様や調整痕から傾向をさぐってみたい。その基準軸を土器形態の「無文化」と「球胴化」として見ていくことにする。

まず、ハケ調整を行った後に施文し、器面全体を丁寧にミガキ上げている個体は、第40・42号住居址から出土している。この2住居址が今回調査できた住居址では最古段階と考えられる。第40号住居址からは丁寧な作りの甕の他に、頸部と体部の境界部分に段を有する器形の甕も出土している。この器形が球胴化したものが第54号住居址の炉体（第63図1）と考えられ、頸部に2段のクシ描波状文を施文し、体部下部に縦位のヘラミガキ調整を行っている。内面も体部下部にヘラミガキ調整がみられる。また、ハケ調整を簡略した3段のクシ描波状文、ヘラミガキ調整の土器（第63図2）が共伴している。また、壺の破片も出土しているが、簾状文・扇状文ともに形態が崩れ、この文様が最終段階にいたっていると思われる。

なお、いわゆる中部高地型とされる断絶を伴う密接したクシ描波状文を施文した土器は、この前の段階で姿を消すのかもしれない。このため、第41号住居址の資料は第40・42号住居址と同時期の可能性がある。ただし、壺に調整痕や、施文がみられない「無文」であることから、この破片資料が混入である可能性も残されている。

これらの文様の他に、斜走短線文が伴う甕が第28・38号住居址から出土している。第38号住居址からは第40

第V章 ま と め

号住居址と同じ器形で、無文化の進んだ甕（第47図5）が共伴し、他の個体も調整痕が観察されないことから、第54号住居址より新しい段階と考えられる。両者の間に時間的な間隙が開くのかも知れないが、この遺跡では把握できない。なお、この2住居址から出土した土器にしか斜走短線文を施文した土器が出土していないため、今後検討していかなくてはならない。

また、第45図1や第47図2のように、頸部を中心に板状工具による縦位のナデ調整痕があり、この頃に新たに発生した調整方法の可能性もある。

第46号住居址は無文の甕と、2段のクシ描波状文の施文された甕が出土している。球胴で、調整痕がみられないことから時期的には新しい段階と予想される。しかし共伴した甕（第58図1）が受口状を呈しており、後期にはあまり出土していない器形であることから、流動的な要素も含まれている。

今回の調査での時期差は以上のように考えられ、さらに新しい段階に第1次調査で出土した第12号住居址の遺物が位置づけられる可能性が高い。

なお、同一遺構から出土している遺物をみていると、丁寧な調整痕をとどめる個体と、比較的粗雑に作られている印象の個体が共存している様子がうかがえることから、いわゆる精製・粗製の作り分けが行われていた可能性が高い。

住居址をみると、炉の形態が数種類存在する。この内、埋甕炉については町内の後期と考えられる住居址の調査事例でも多数出土しており、当該期の一般的な形態と考えられる。また、地床炉は町内での調査例や、箕輪町での調査事例（『箕輪遺跡』2005財長野県埋蔵文化財センター）から想定すると、中期に一般的な形態と考えられ、第45号住居址は中期から後期の初め頃に位置づけられそうである。なお、石囲炉と、その内部に甕を炉体として設置する炉については、今後更に検討していかなくてはならない。

また、広大な調査区域の中で、小範囲にまとまるようにして当該期の住居址が出土しており、この状況についても今後検討していかなくてはならない。

次に平安時代であるが、今回出土した住居址は後半期が中心であった。松本平の編年で、11期が2基、14～15期が2基、15期が6基出土した。今回の調査では15期（11世紀後半代）が集落の中心的な時期といえる。

第1次調査では7・8期（9世紀中頃から後半代）が中心であり、第2次までの調査範囲内での傾向としては、北部から南部にむかって徐々に居住域を移動している様子が観察できる。また、7・8期の住居址の周辺には2間×3間の掘建柱建物址が検出されており、住居址とセットで構成されていると考えられることができそうである。今後第3次調査の成果もふまえてみていく必要がある。

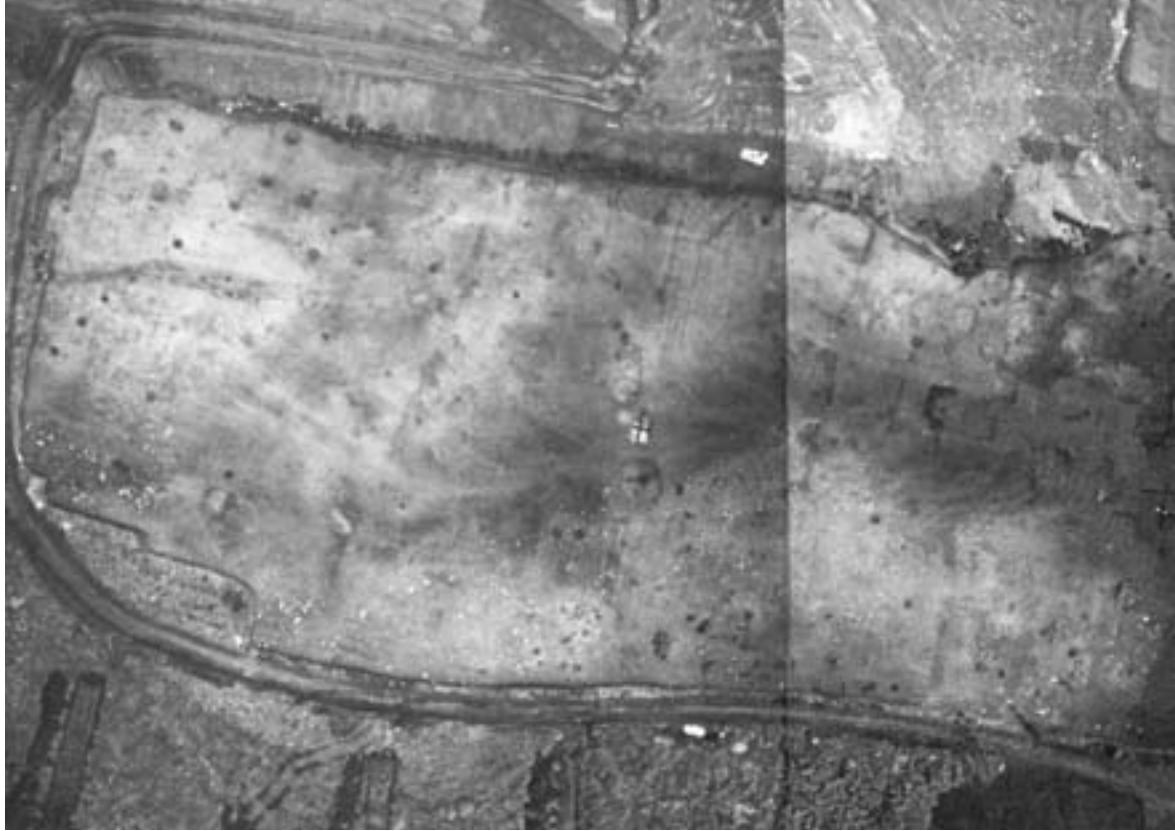
また、今回の調査でも少量ながら越州窯系の白磁（V類）や龍泉窯系の青磁の破片が出土しており、ほかにも鉛釉の小皿片が出土するなど、平安時代末期から中世へ移行していく痕跡もうかがえ、第1次調査で出土した製鉄関連遺構とのつながりへと発展していく可能性を秘めている。

最後に中世であるが、今回の調査では竪穴建物址が3基調査区境界付近で出土した。第3次調査ではこの遺構付近にさらに多くの遺構が出土しているので、この調査報告書の刊行時に傾向をみたいと考えている。

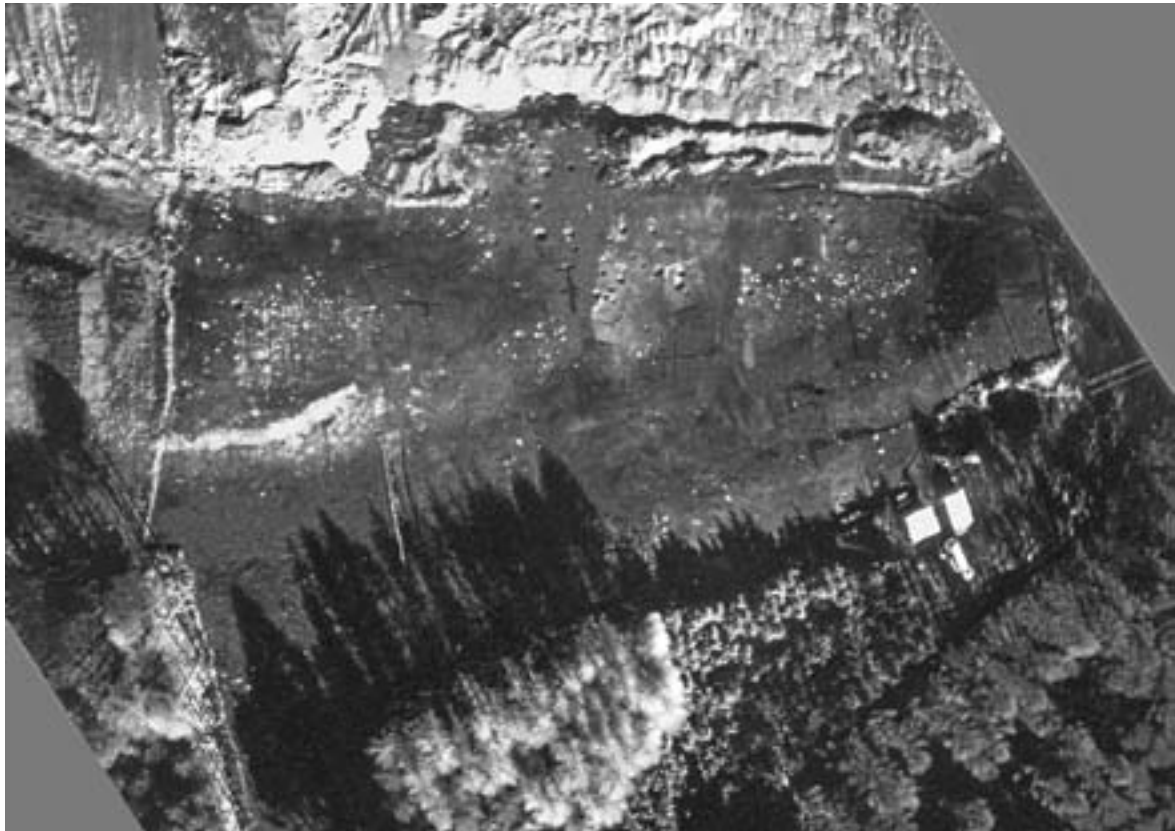
末筆とはなりましたが、古代の土器についてご指導を賜りました小平和夫氏をはじめ、現場作業および整理作業に携わっていただいた多くの皆さんに感謝を申し上げます。

写真図版





調査区全景 (1)



調査区全景 (2)

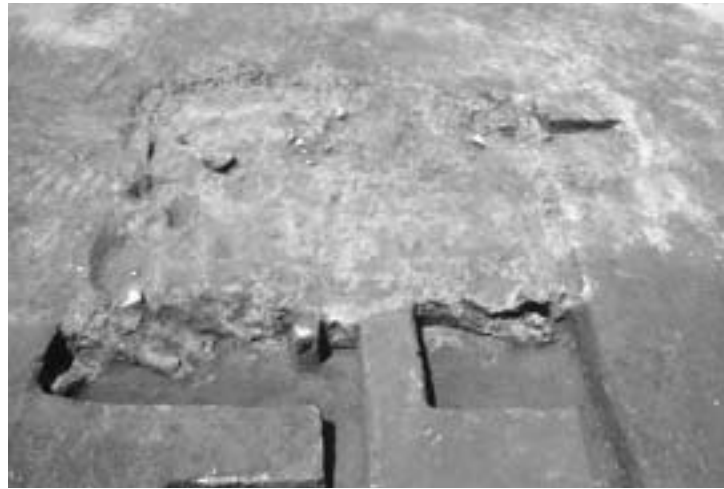
図版 2



調査区全景 (3)

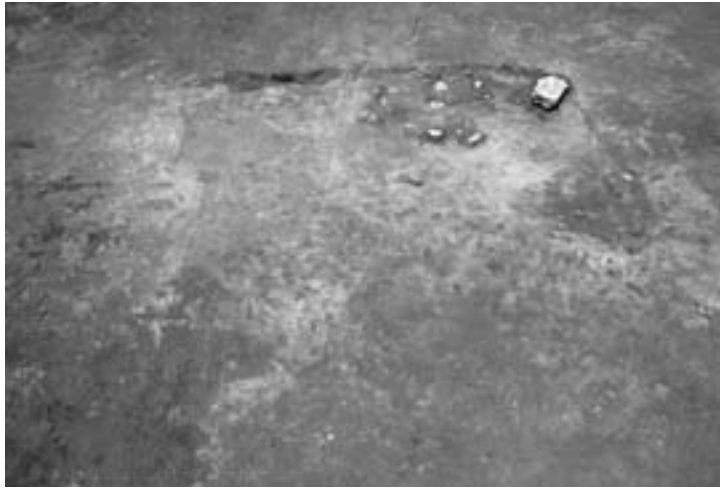


調査区全景 (4)



第24号住居址

图版 4

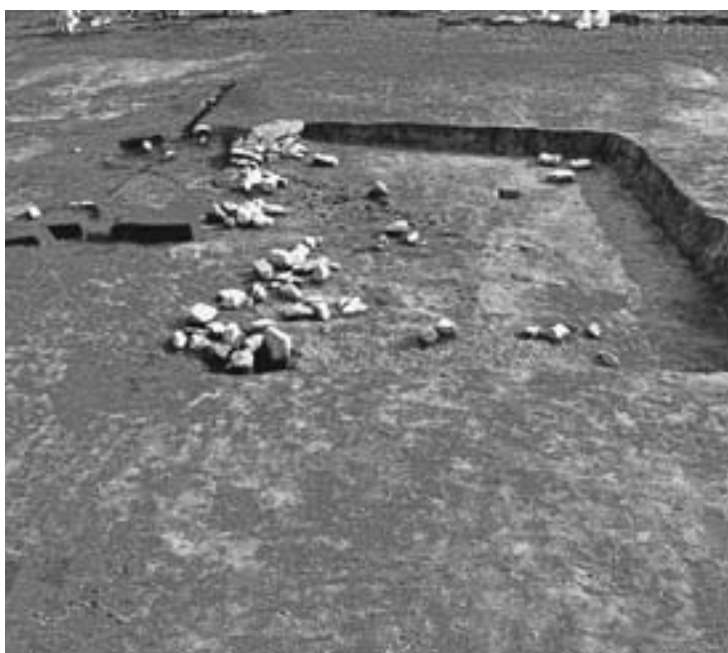


第25号住居址

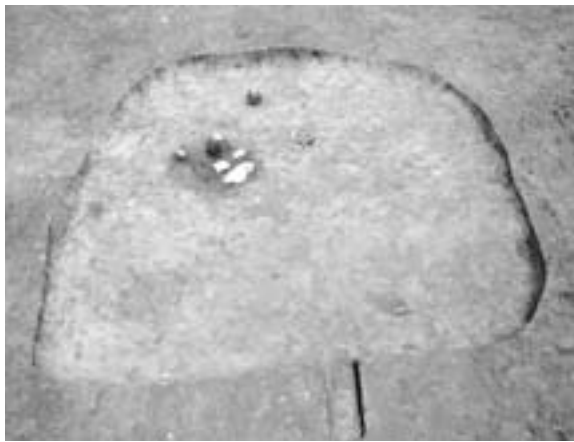
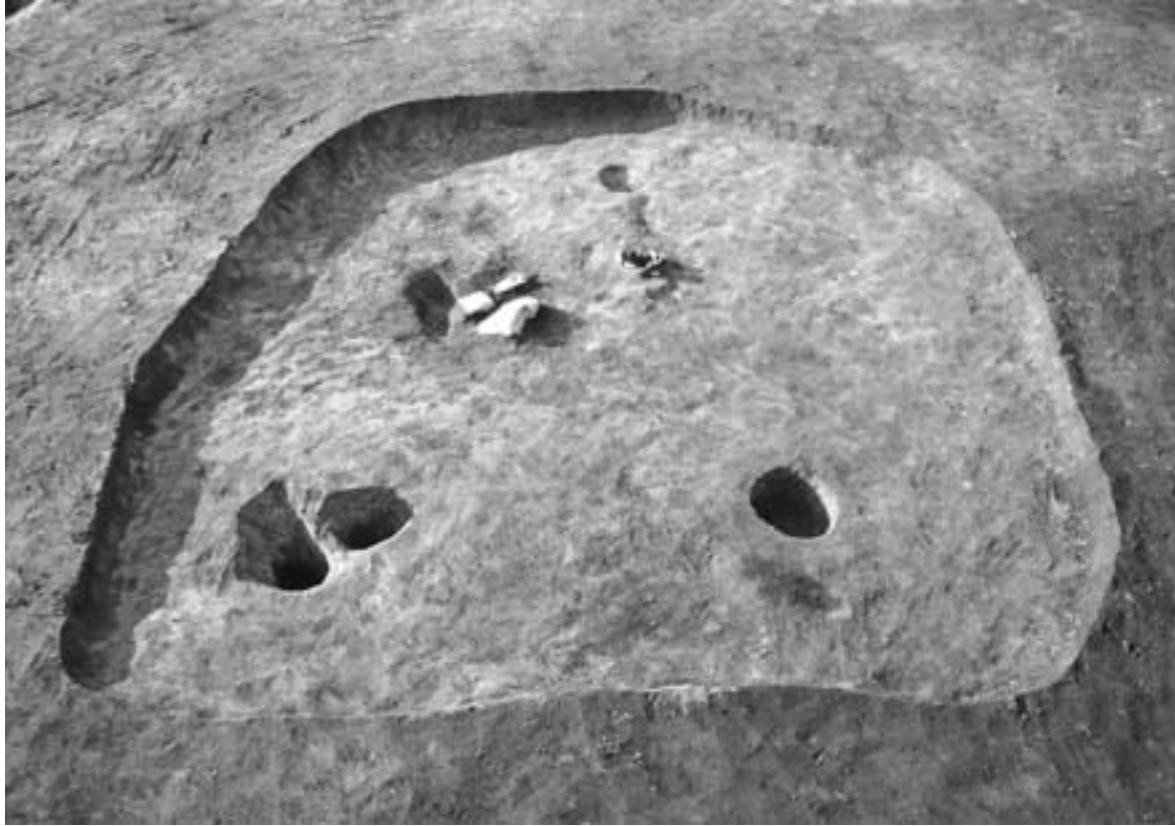


第26号住居址

图版 6

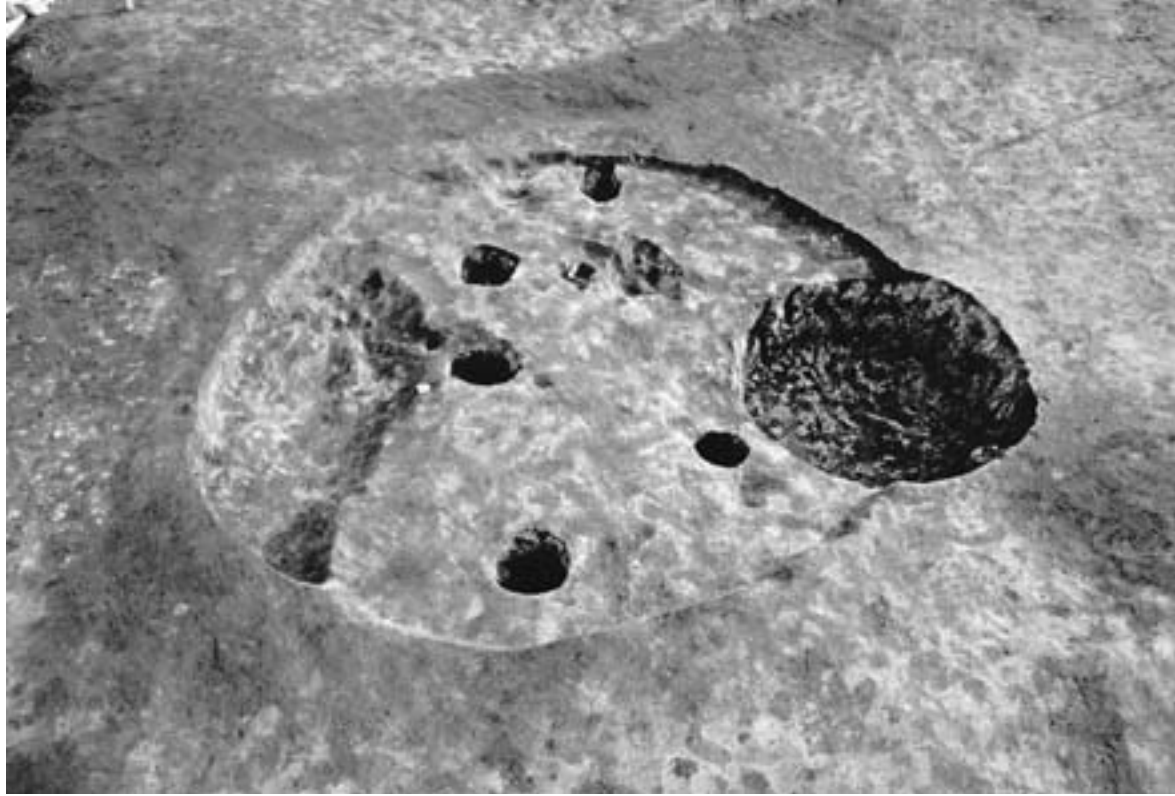


第27号住居址



第28号住居址

图版 8



第29号住居址

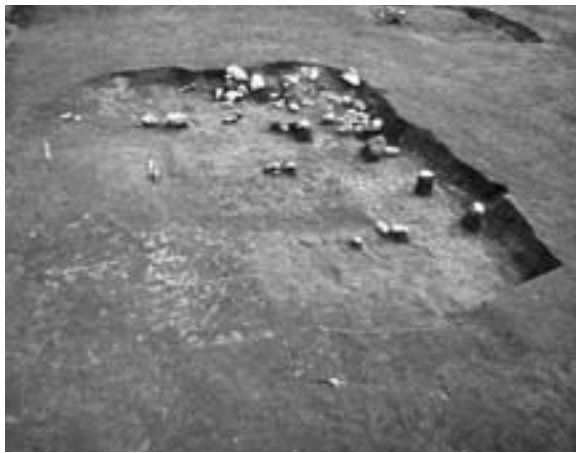


第30·34号住居址

图版 10



第30号住居址

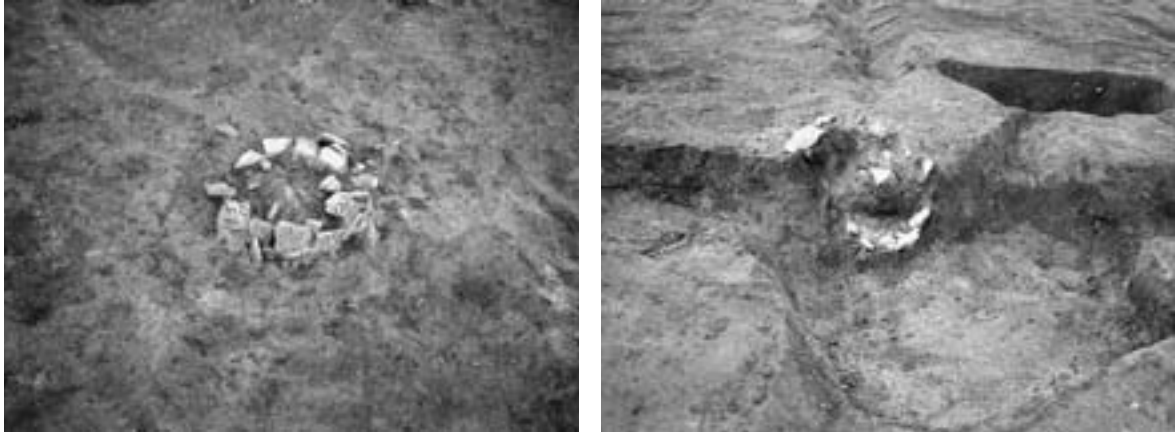


第31号住居址

图版 12



第32号住居址



第33号住居址



第35号住居址（1）



第35号住居址 (2)



第36号住居址

图版 16



第37·42号住居址



第37号住居址



第38号住居址

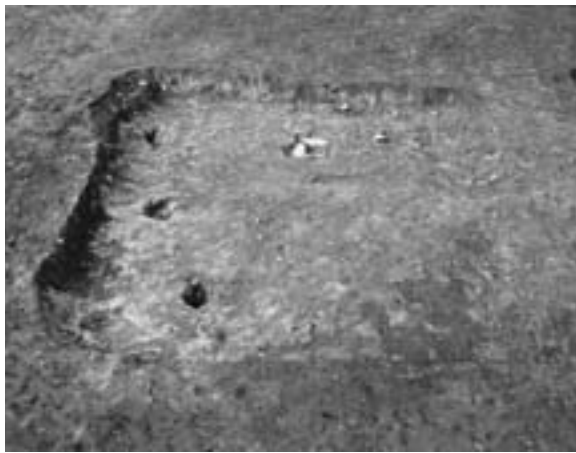


第39号住居址

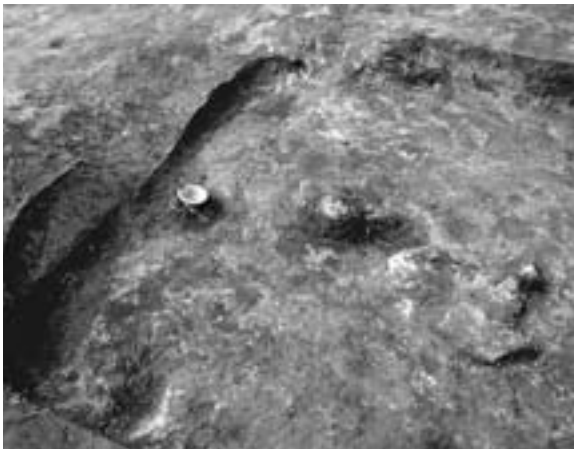
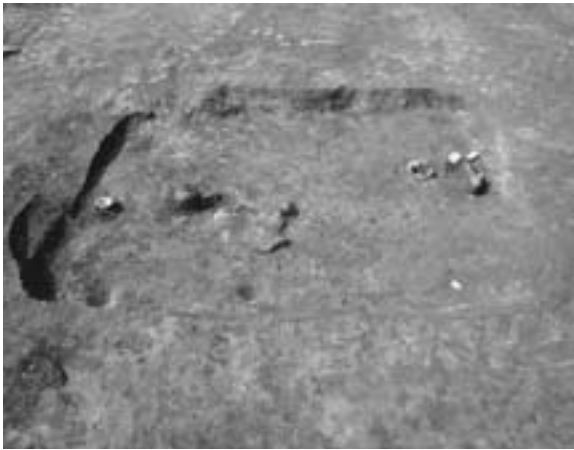
图版 20



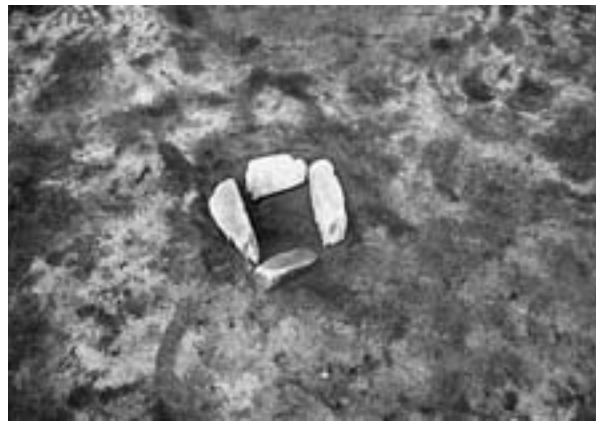
第40号住居址



第41号住居址

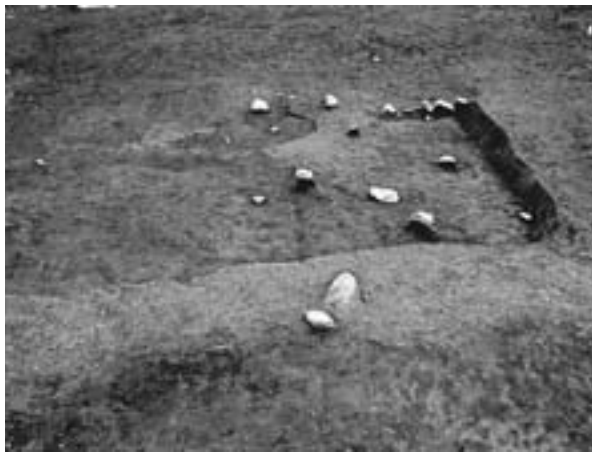


第42号住居址

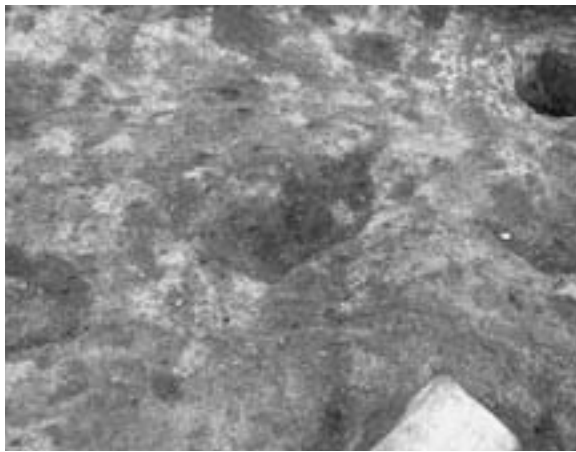


第43号住居址

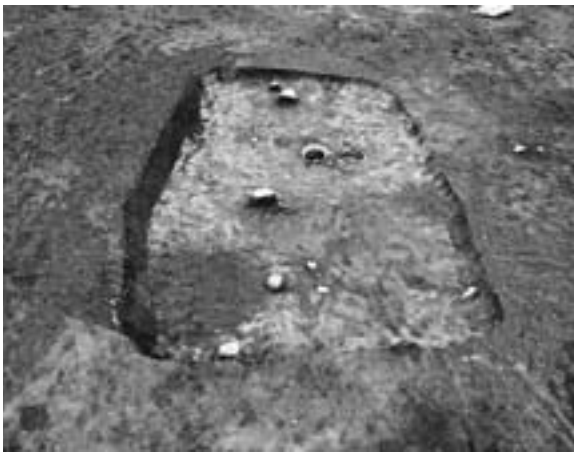
图版 24



第44号住居址



第45号住居址



第46号住居址



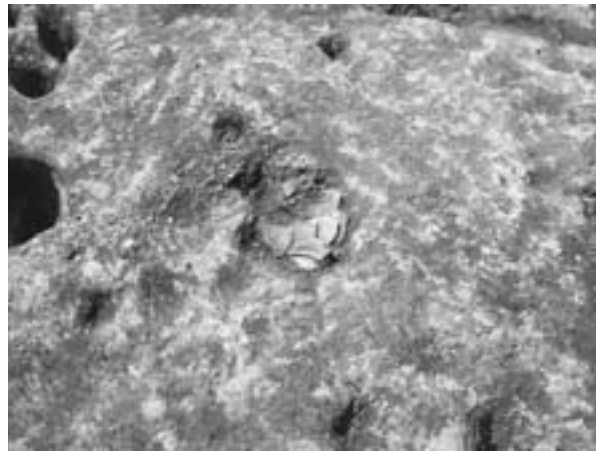
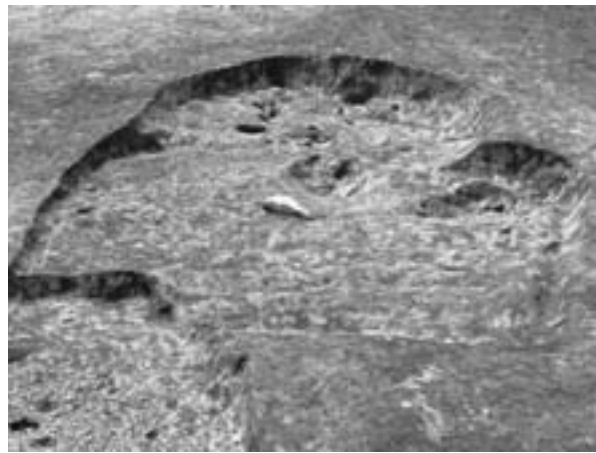
第48号住居址



第49·27号住居址



第49号住居址

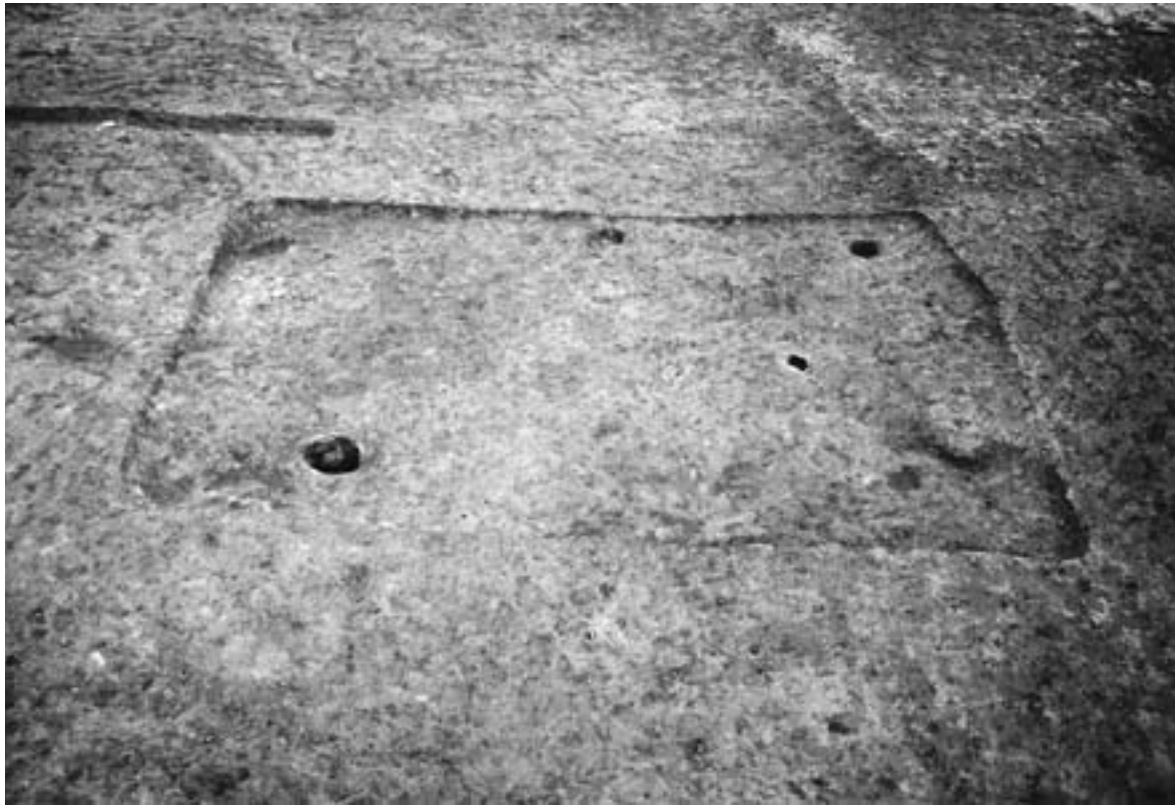


第50号住居址

图版 30

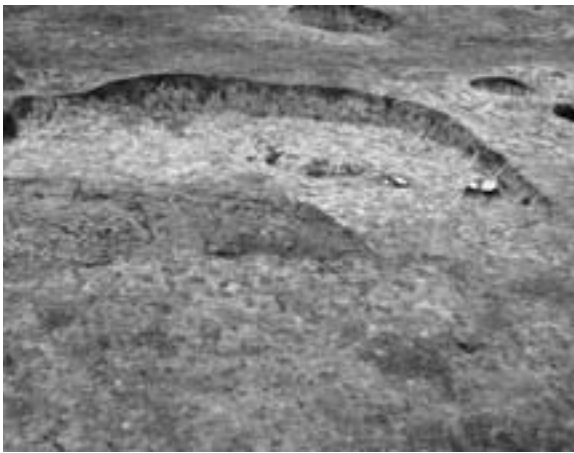


第50·37·42号住居址

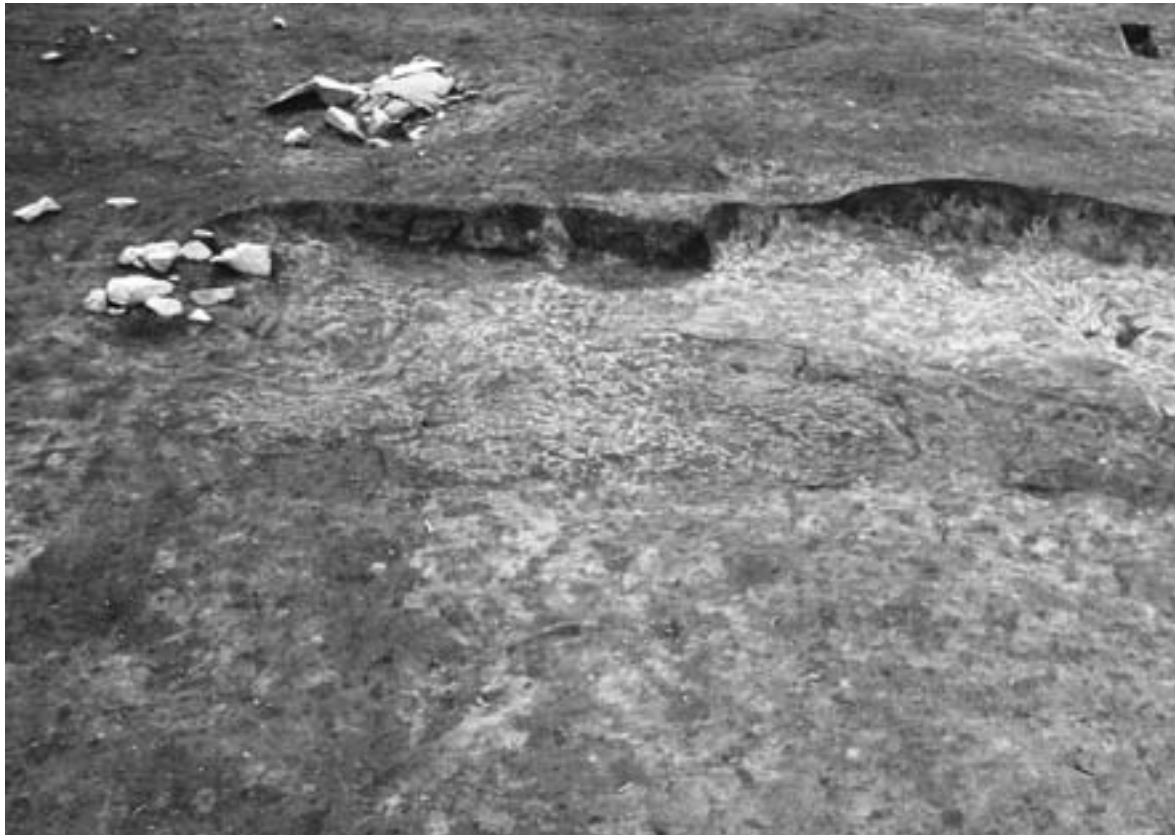


第53号住居址

图版 32



第54号住居址

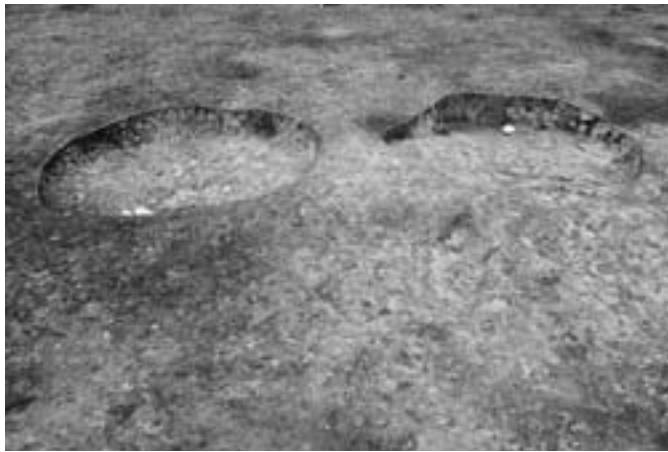


第39号住居址

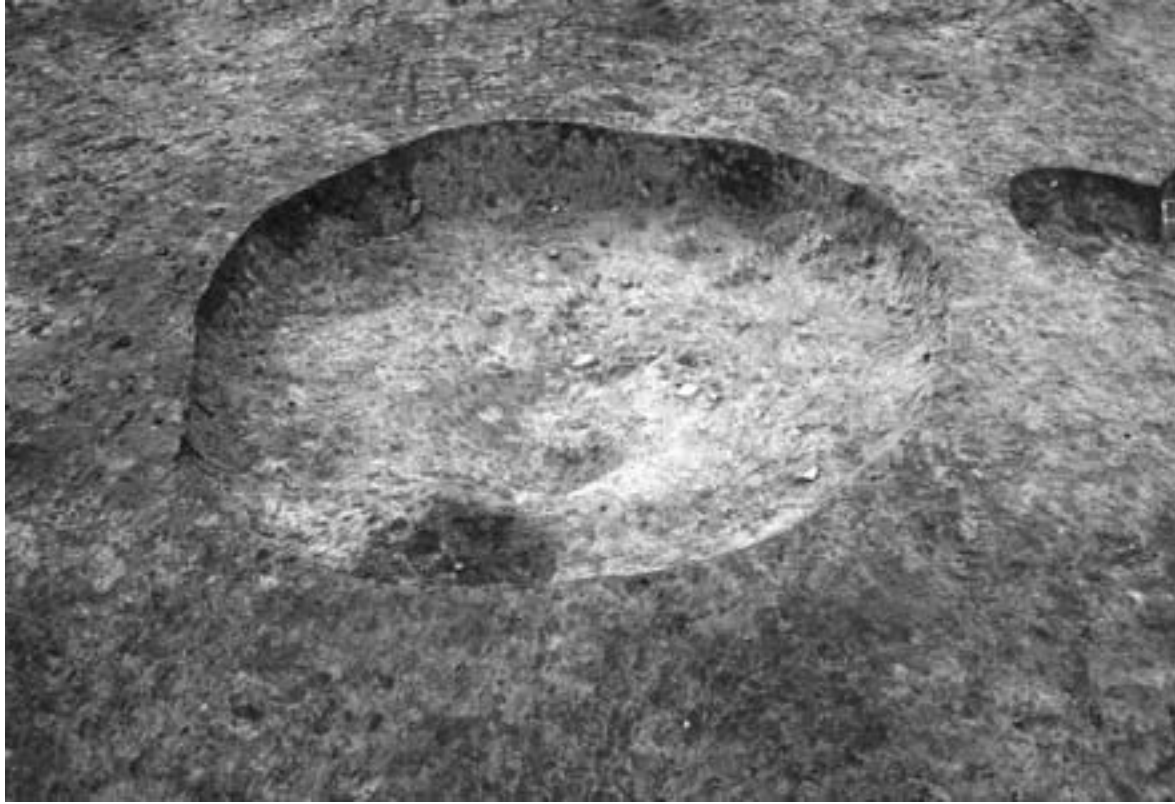


第39 (左) · 54号住居址

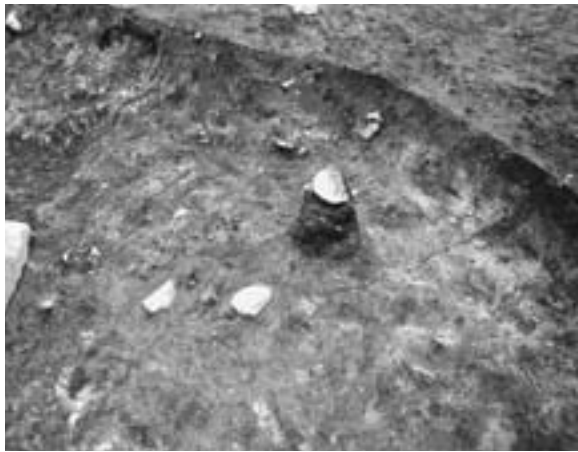
图版 34



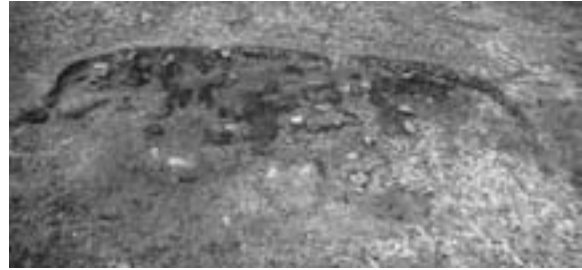
第56号住居址



第57号住居址



第58号住居址



第59号住居址



第62号住居址

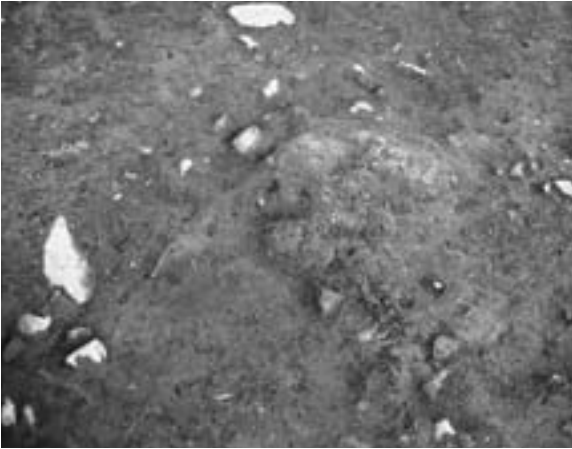


第63号住居址（1）

图版 40



第63号住居址 (2)



第64号住居址

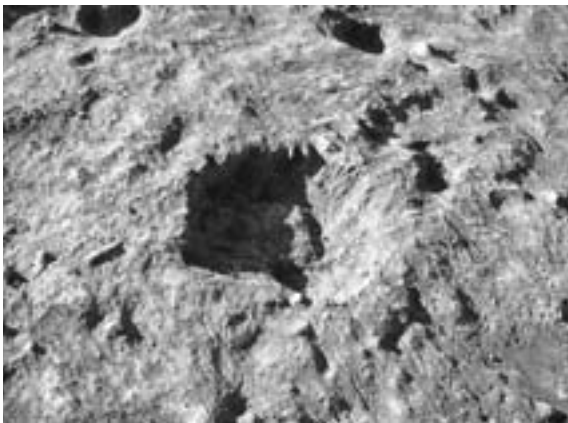


第65号住居址



第67号住居址

图版 44



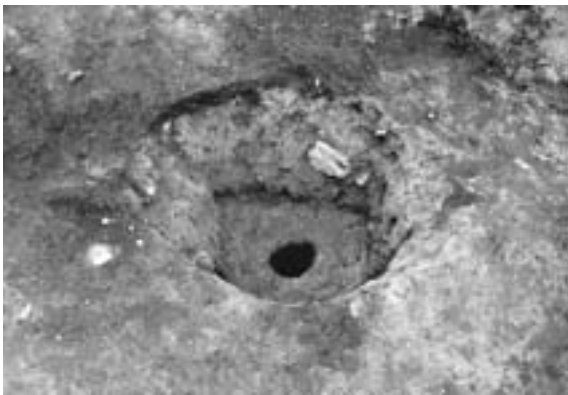
第68号住居址



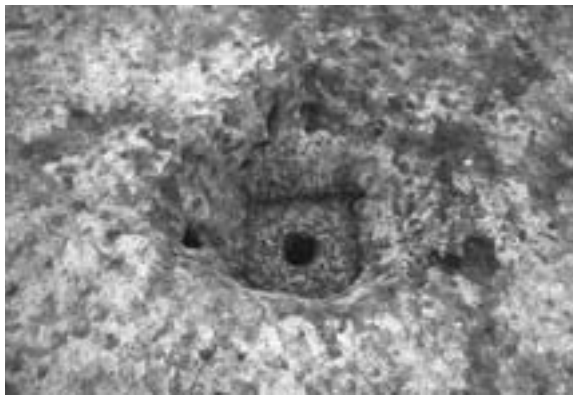
第147号土坑



第148号土坑



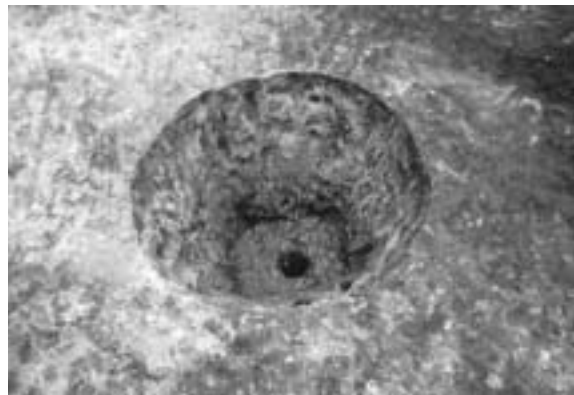
第149号土坑



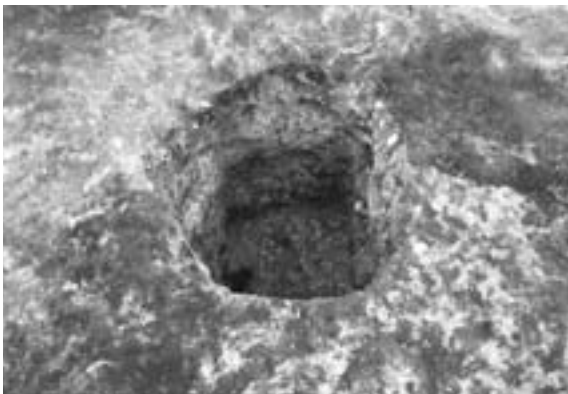
第150号土坑



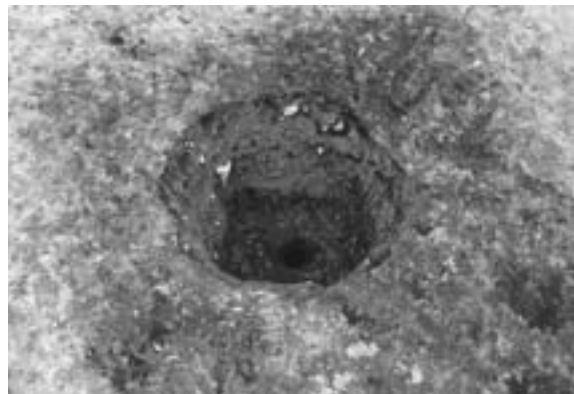
第151号土坑



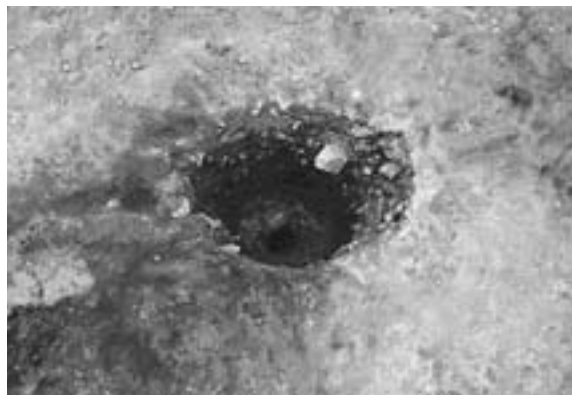
第152号土坑



第153号土坑



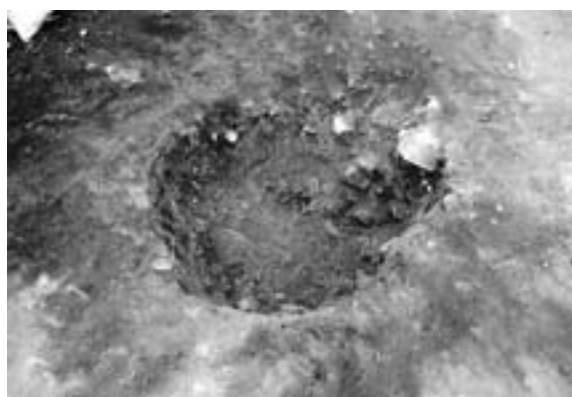
第154号土坑



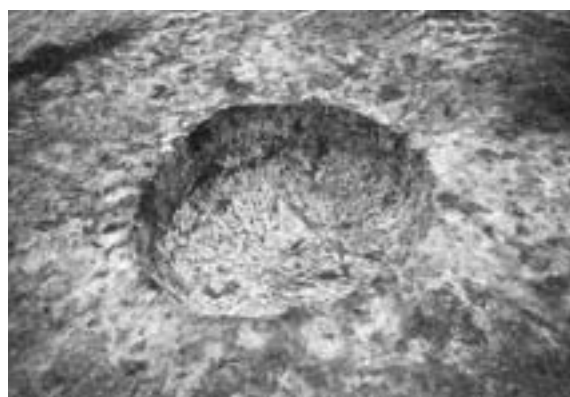
第155号土坑



第156号土坑



第157号土坑



第158号土坑



第159·160·161号土坑



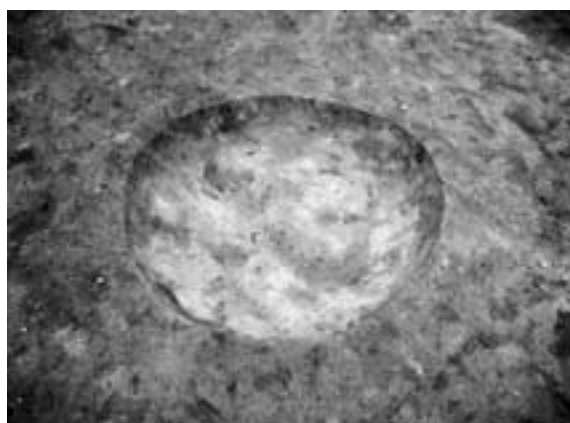
第163号土坑



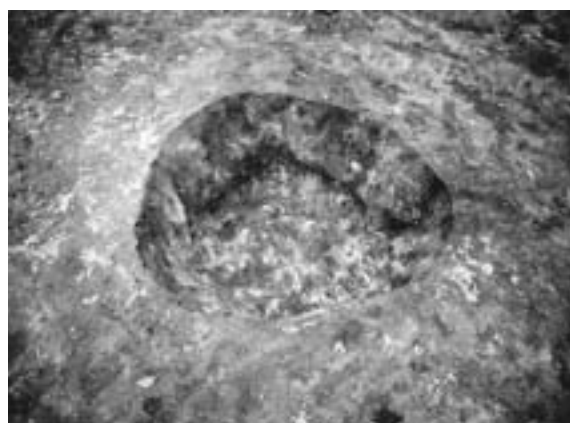
第161号土坑



DG-72附近土坑群



第164号土坑



第165号土坑



第166号土坑



第170号土坑



DM-69附近土坑群



第167号土坑



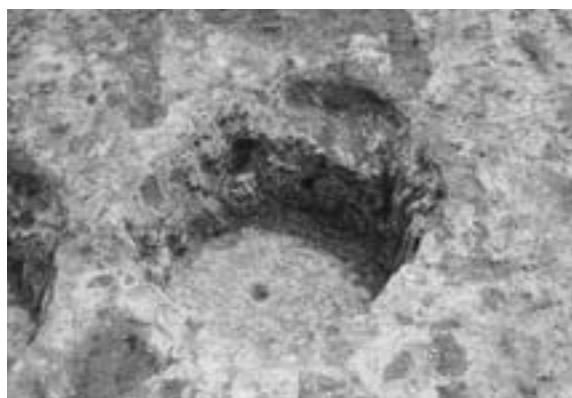
第168号土坑



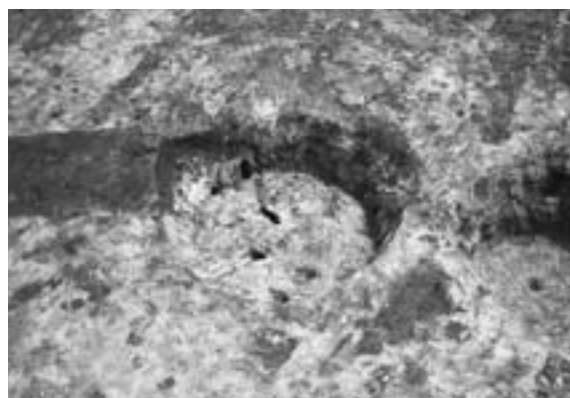
第169号土坑



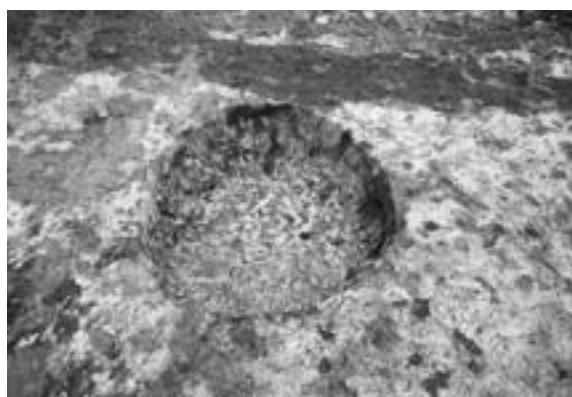
第173号土坑



第171号土坑



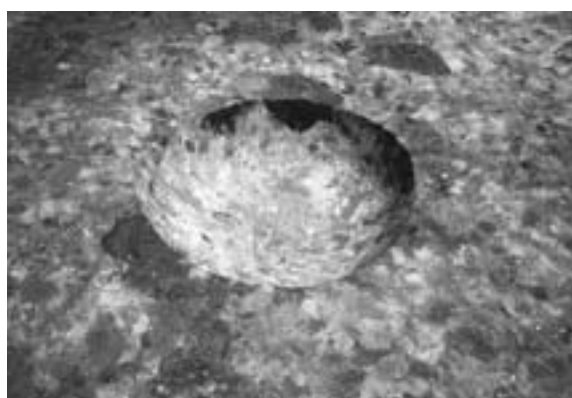
第172号土坑



第174号土坑



第175号土坑



第176号土坑



第177 (左) · 178号土坑



第179号土坑



第182号土坑



第181号土坑



第183号土坑



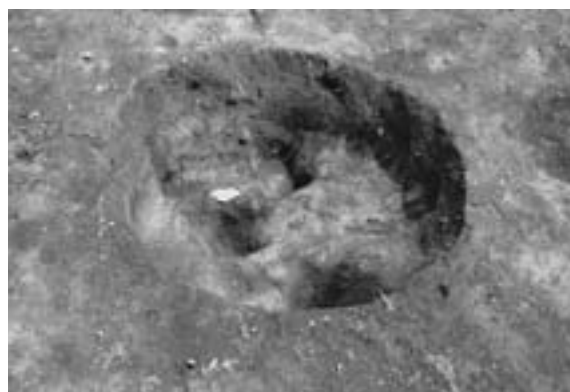
第186号土坑



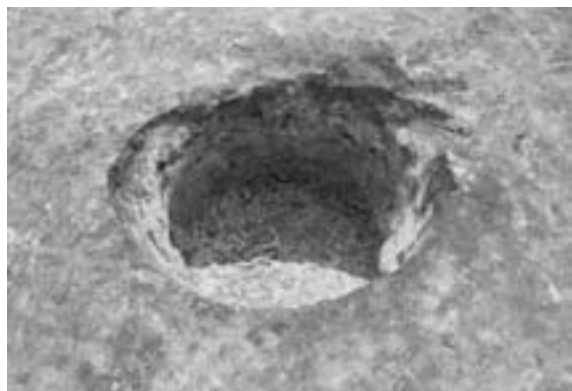
第187号土坑

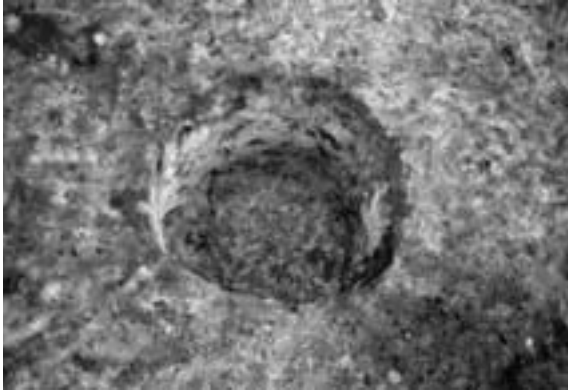


第189号土坑

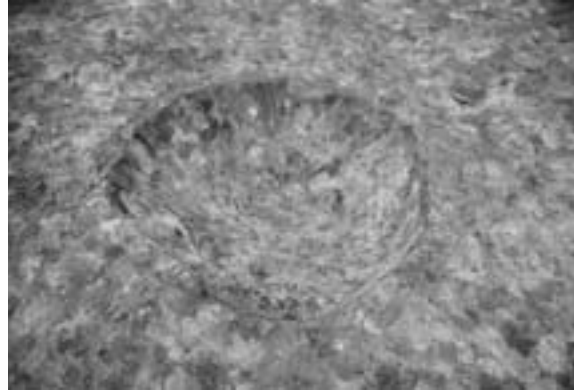


第191号土坑

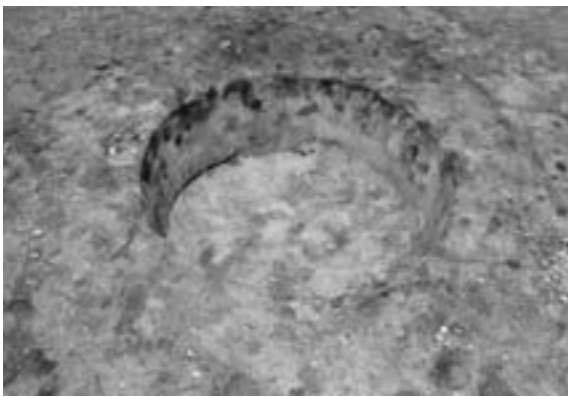




第192号土坑



第193号土坑



第194号土坑



第195号土坑



第196号土坑



第197号土坑

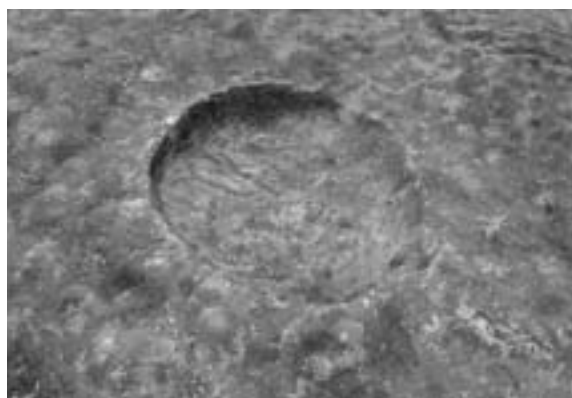


第198号土坑

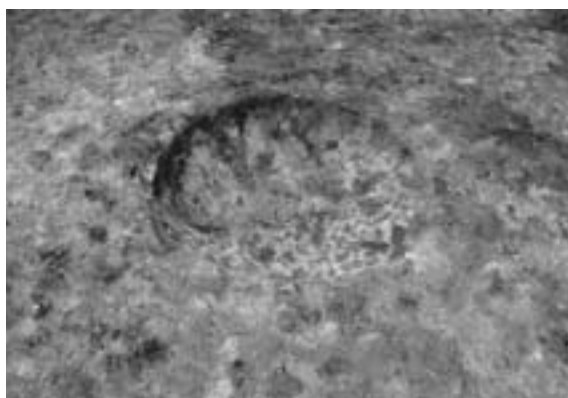


第199号土坑

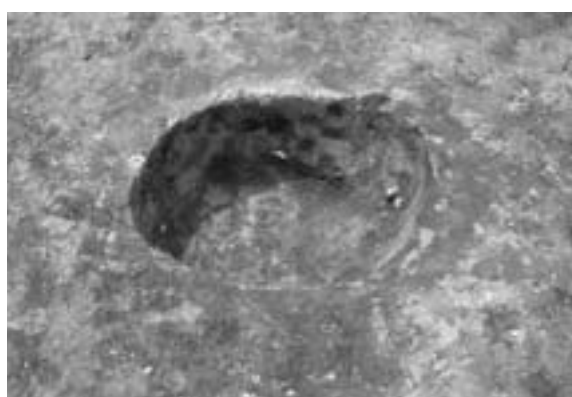
图版 52



第200号土坑



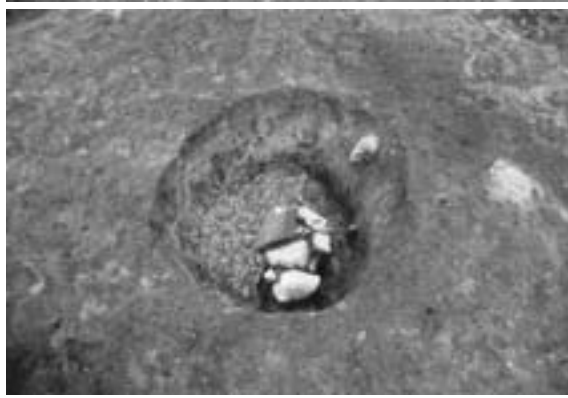
第201号土坑



第202号土坑



第203号土坑



第206号土坑



第204号土坑



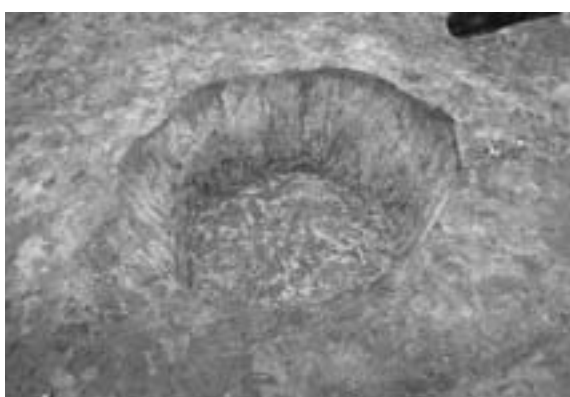
第207号土坑



第208号土坑



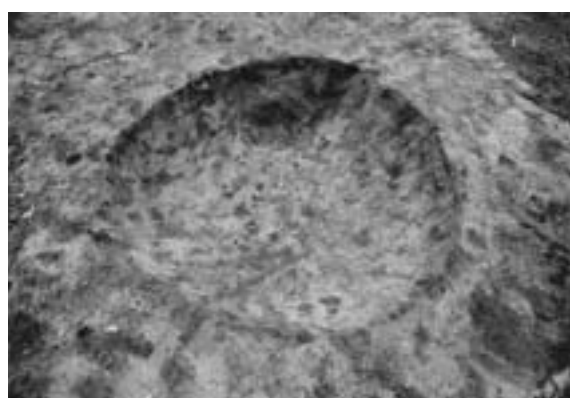
第209号土坑



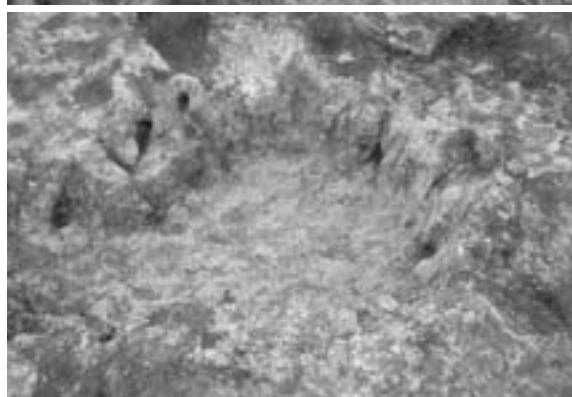
第213号土坑



第212号土坑



第214号土坑



第212号土坑



第215号土坑

图版 54



第217·218·219号土坑



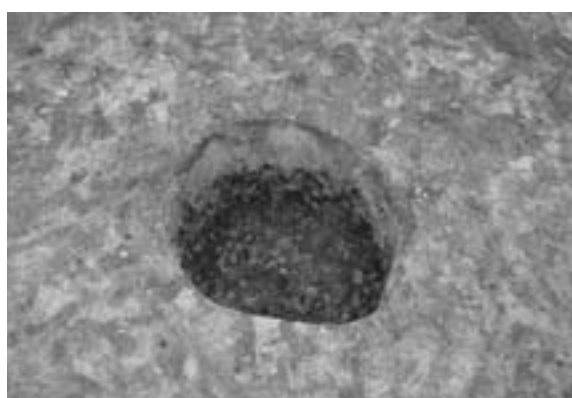
第217号土坑



第218号土坑



第219号土坑



第216号土坑



第220号土坑



第221号土坑



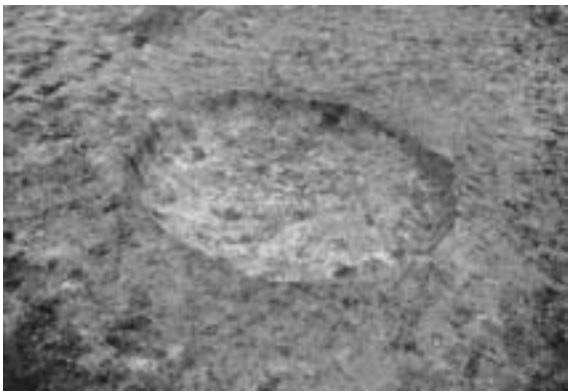
第222号土坑



第223号土坑



第224号土坑



第225号土坑



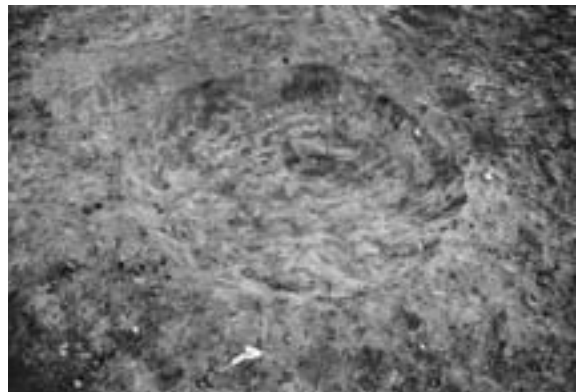
第237号土坑



第238号土坑



第239号土坑

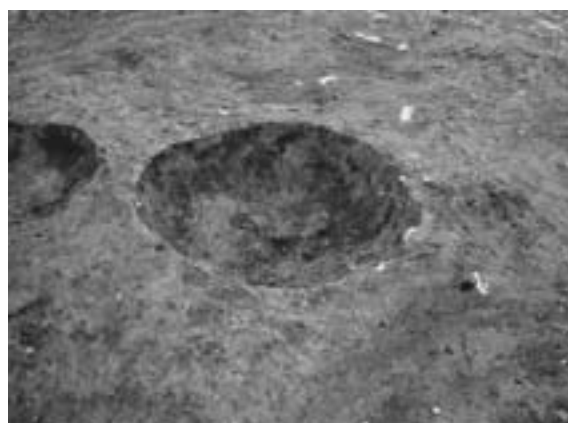




E J - 28附近土坑群



第226·227·229号土坑



第228号土坑



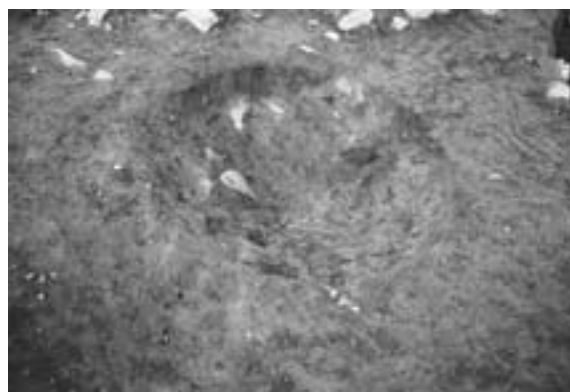
第230号土坑



第231·232号土坑



第233号土坑



第235号土坑



第236号土坑



第240号土坑



第241号土坑



第242号土坑



第246号土坑



第244·245号土坑



第244号土坑



第245号土坑



第251号土坑



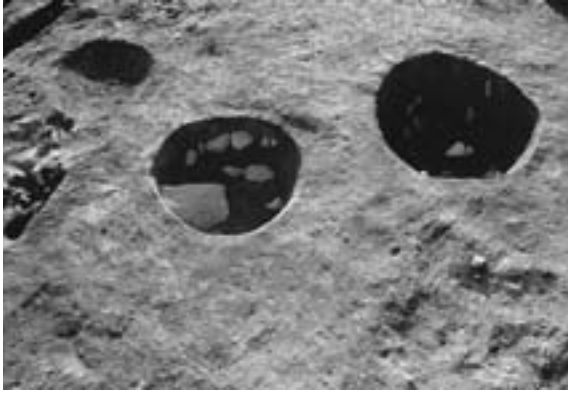
第247号土坑



第252号土坑



第253号土坑



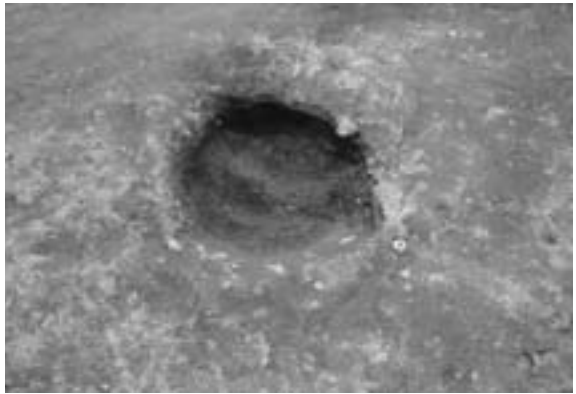
第249·250号土坑



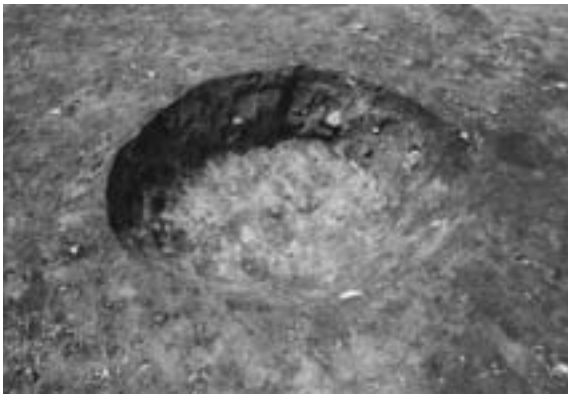
第249号土坑



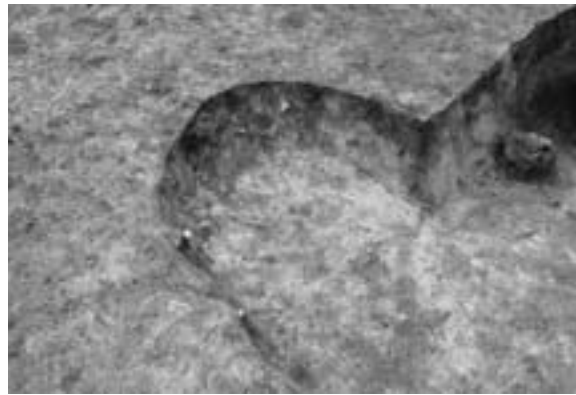
第250号土坑



第254号土坑



第255号土坑



第256号土坑



第259号土坑



第260号土坑



第257·258号土坑



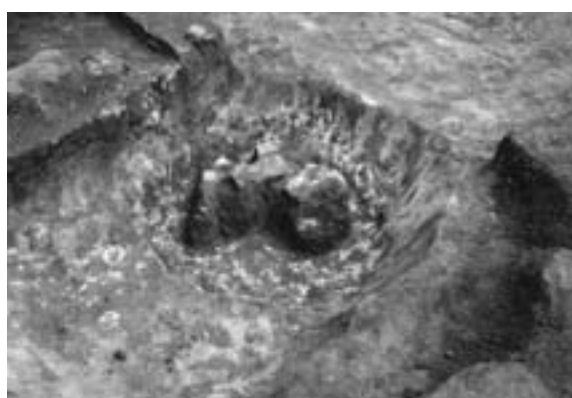
第257号土坑



第258号土坑



第261号土坑



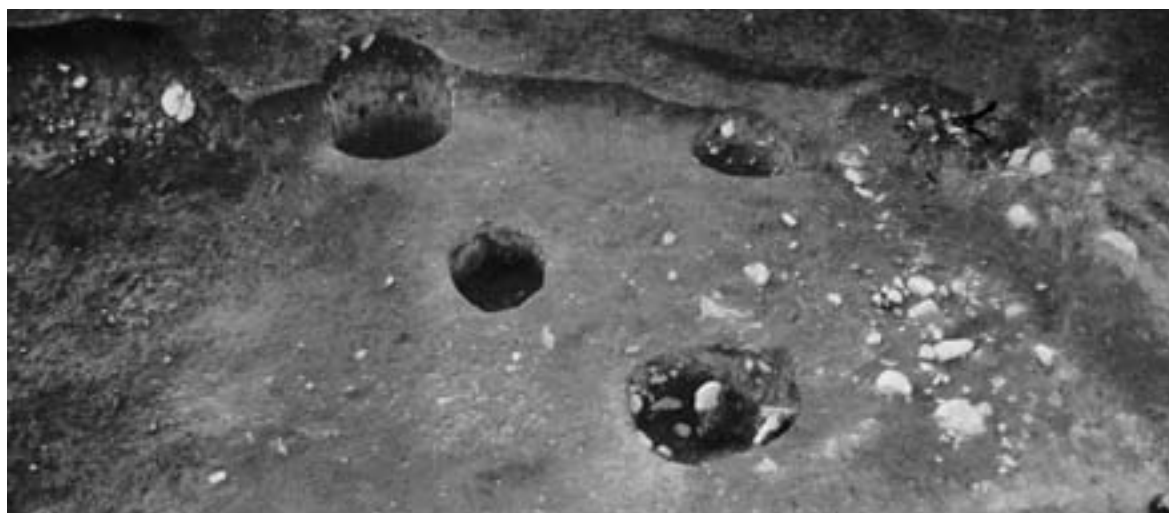
第262号土坑



第263号土坑



第283号土坑



EV-28附近土坑群



第266号土坑



第267号土坑



第274·275号土坑



第276号土坑



第288号土坑



第289号土坑



第284号土坑



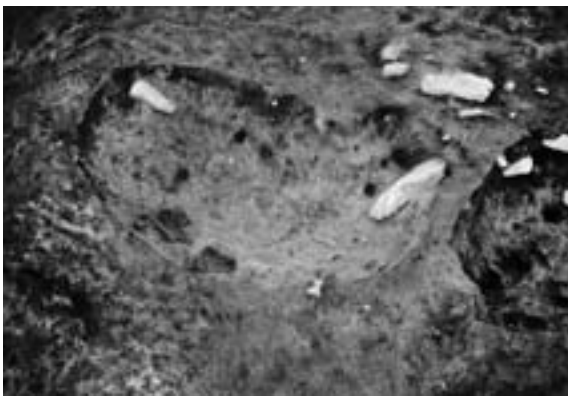
第290号土坑



第281·282号土坑



第281号土坑



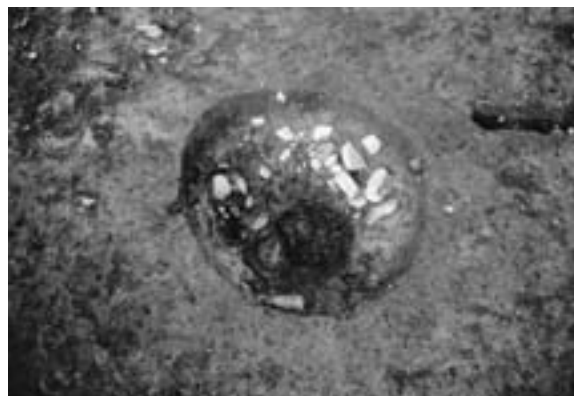
第282号土坑



第281号土坑



第291号土坑



第292号土坑



第294号土坑



第296号土坑

图版 64



第297号土坑



第304号土坑



第305号土坑



第306号土坑



第307·308号土坑



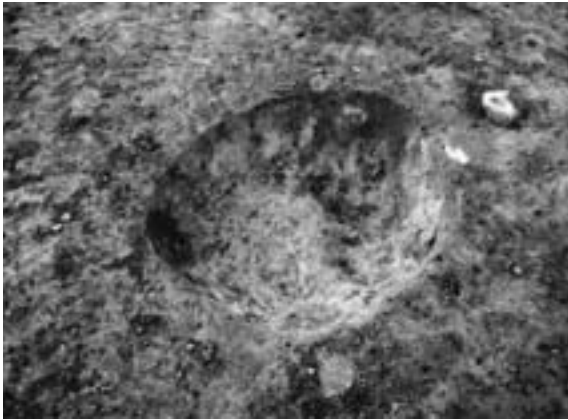
第311号土坑



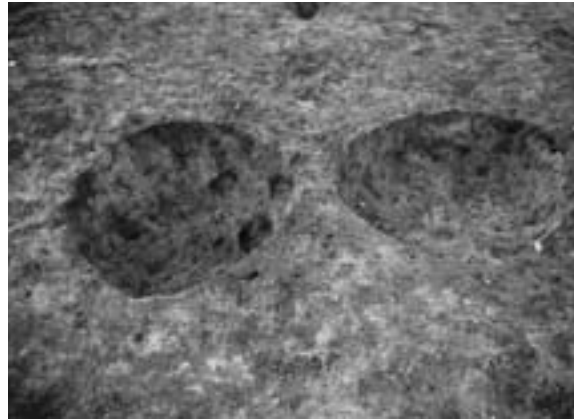
第309·310号土坑



EX-45附近土坑群



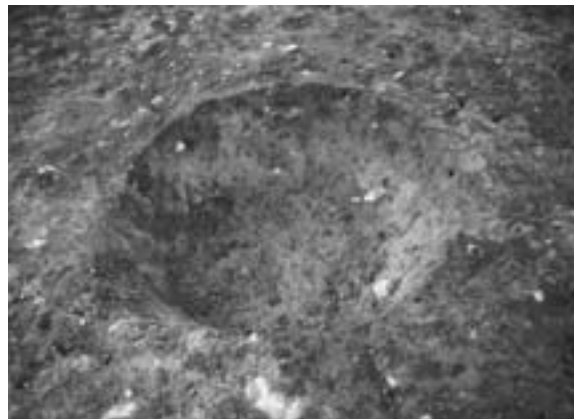
第298号土坑



第299·301号土坑



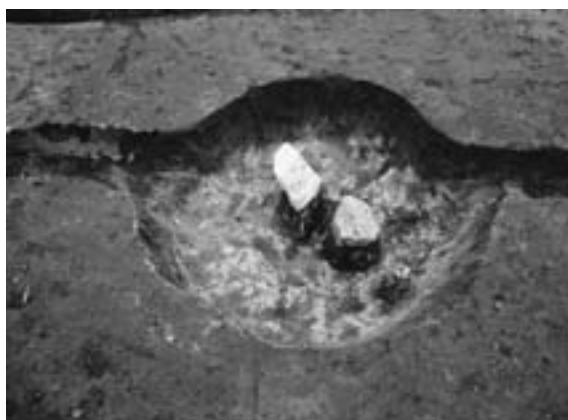
第300号土坑



第303号土坑



第312号土坑



第314号土坑



第313号土坑



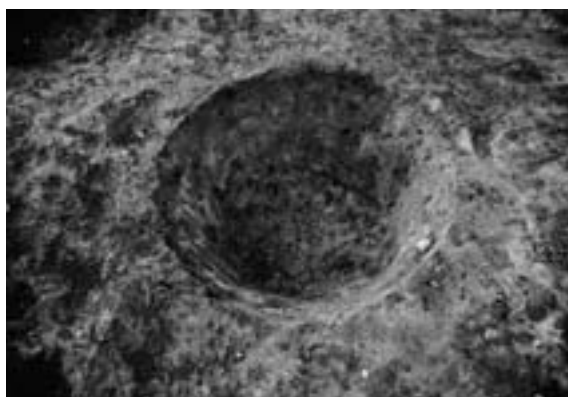
第315·316号土坑



第317号土坑



第318号土坑



第322号土坑



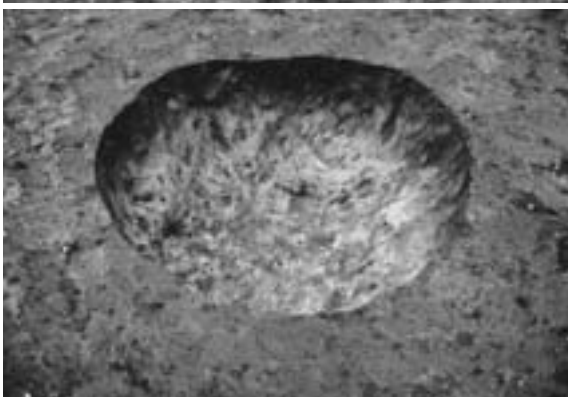
第12号集石



第13号集石



第14号集石



第16号集石



第15号集石



第17号集石



第18号集石

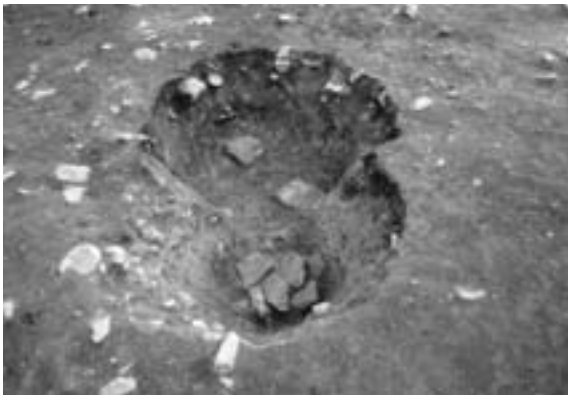


第20号集石

第22号集石



第21号集石



第19号集石



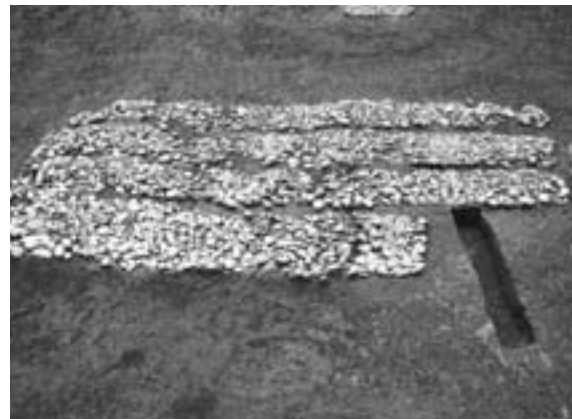
第2号沟址



第1号沟址



第2号礫群



第3号礫群

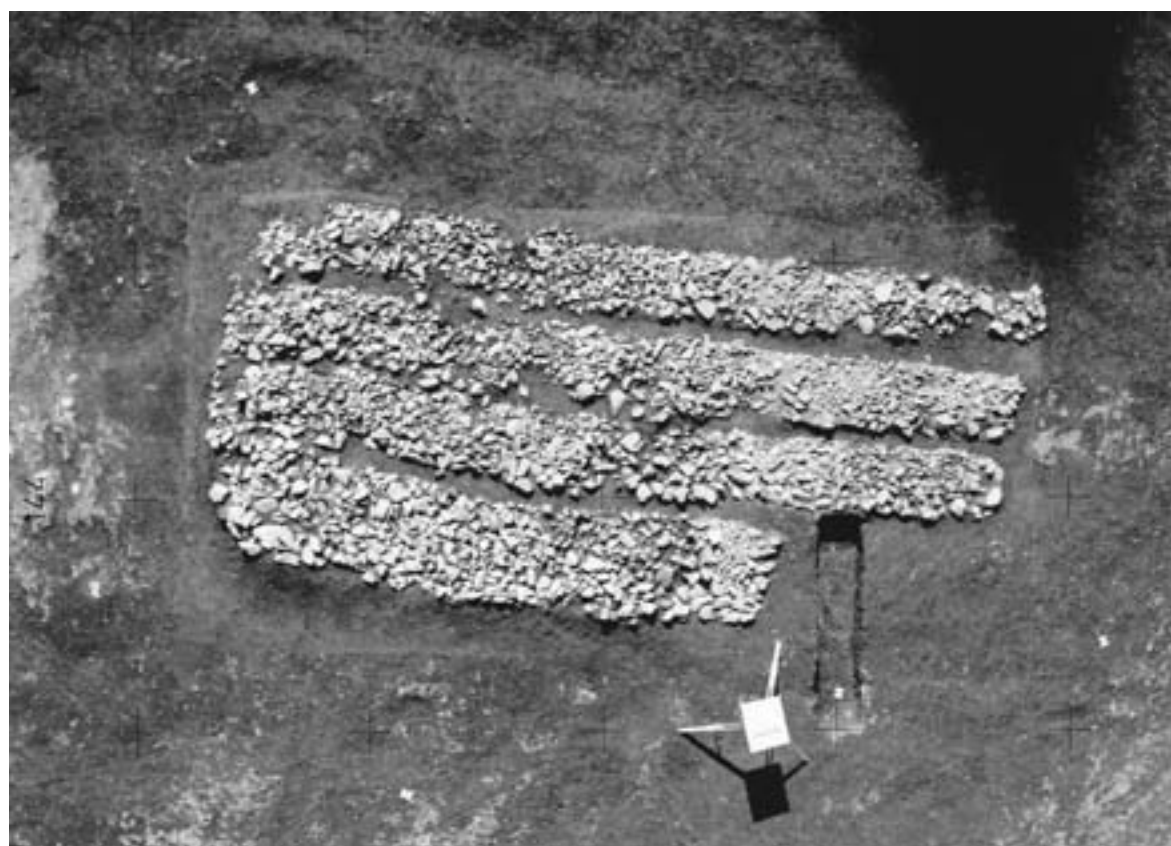


第1号礫群

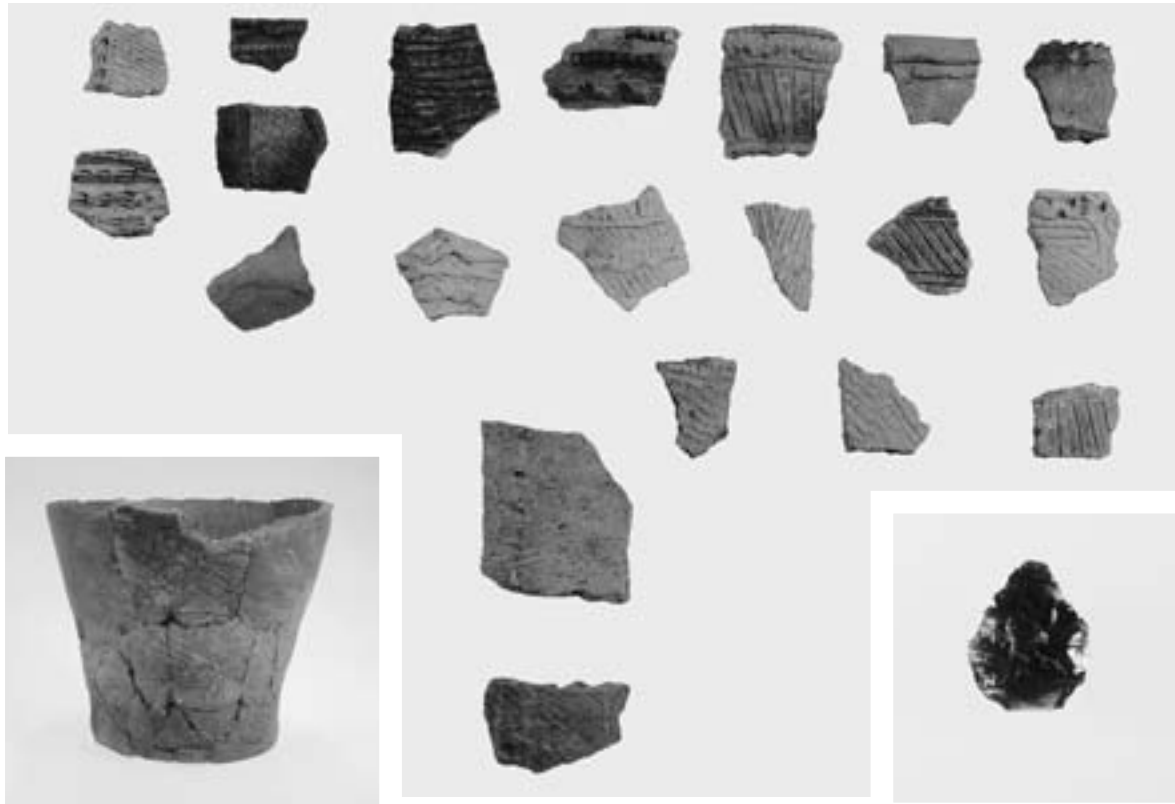




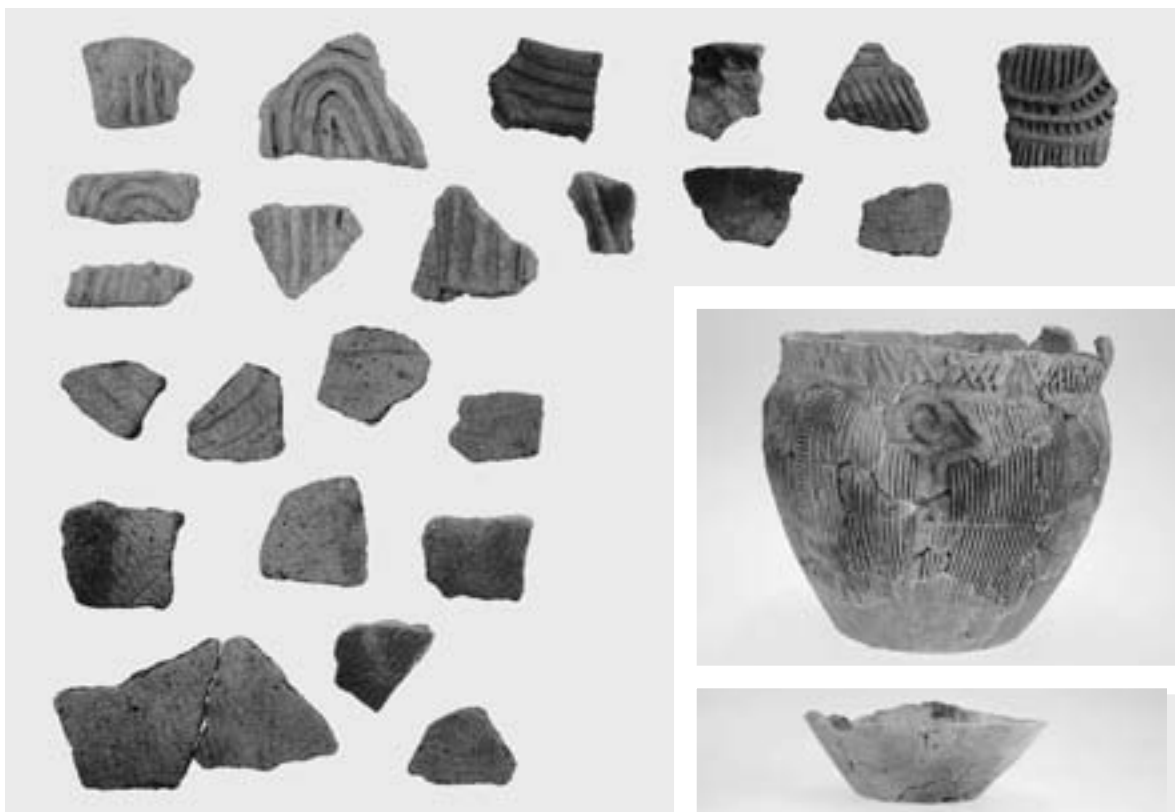
第2号礫群



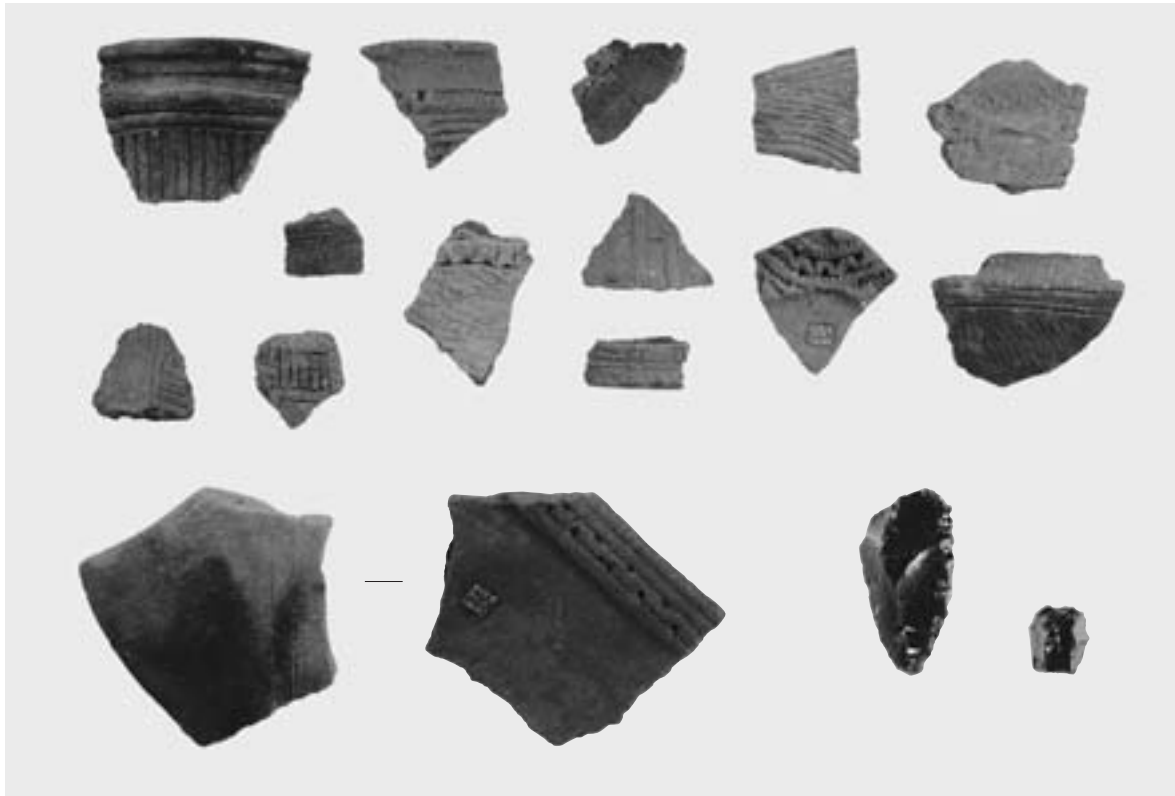
第3号礫群



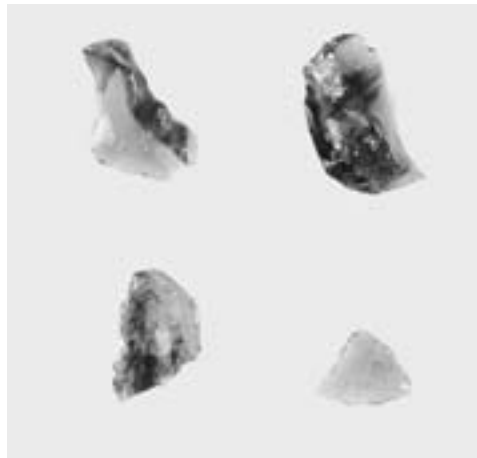
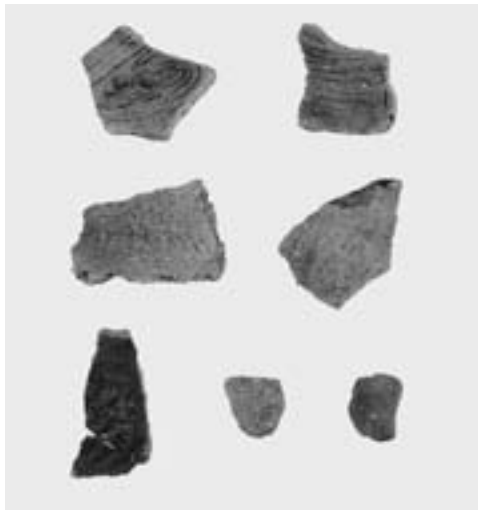
第29号住居址



第33号住居址



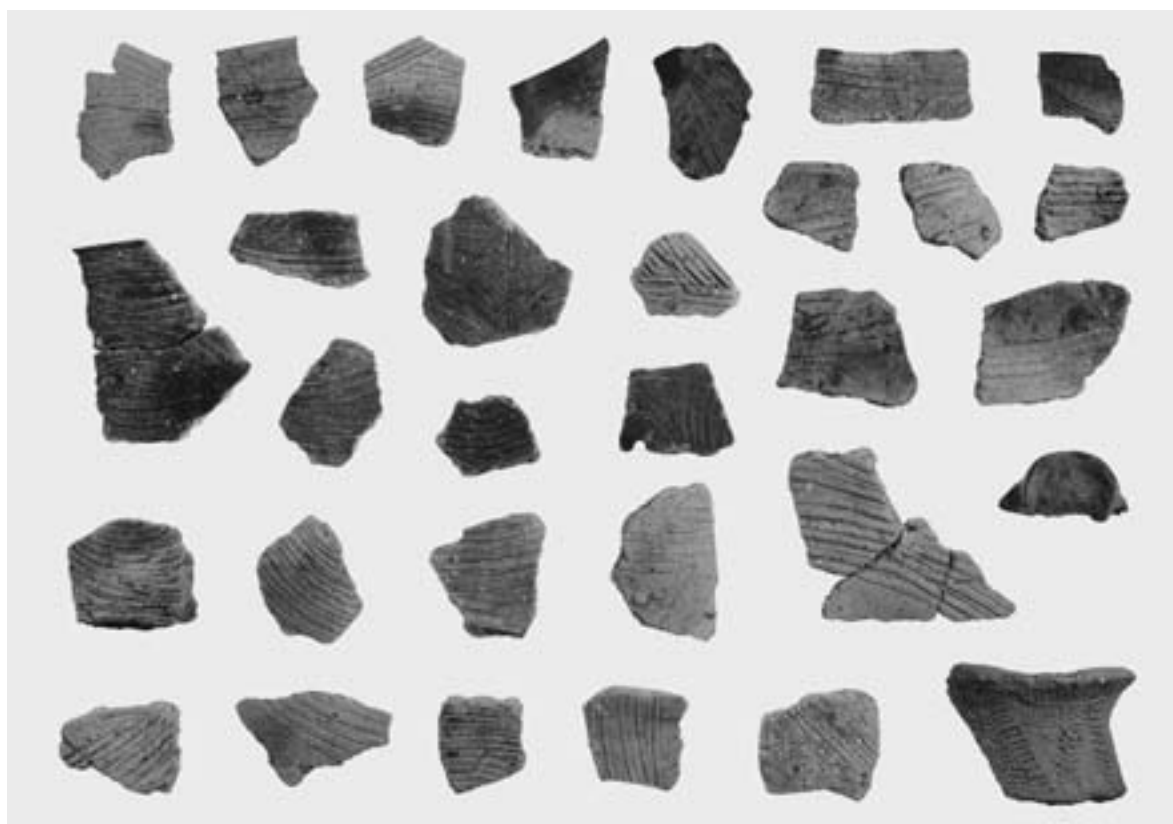
第36号住居址



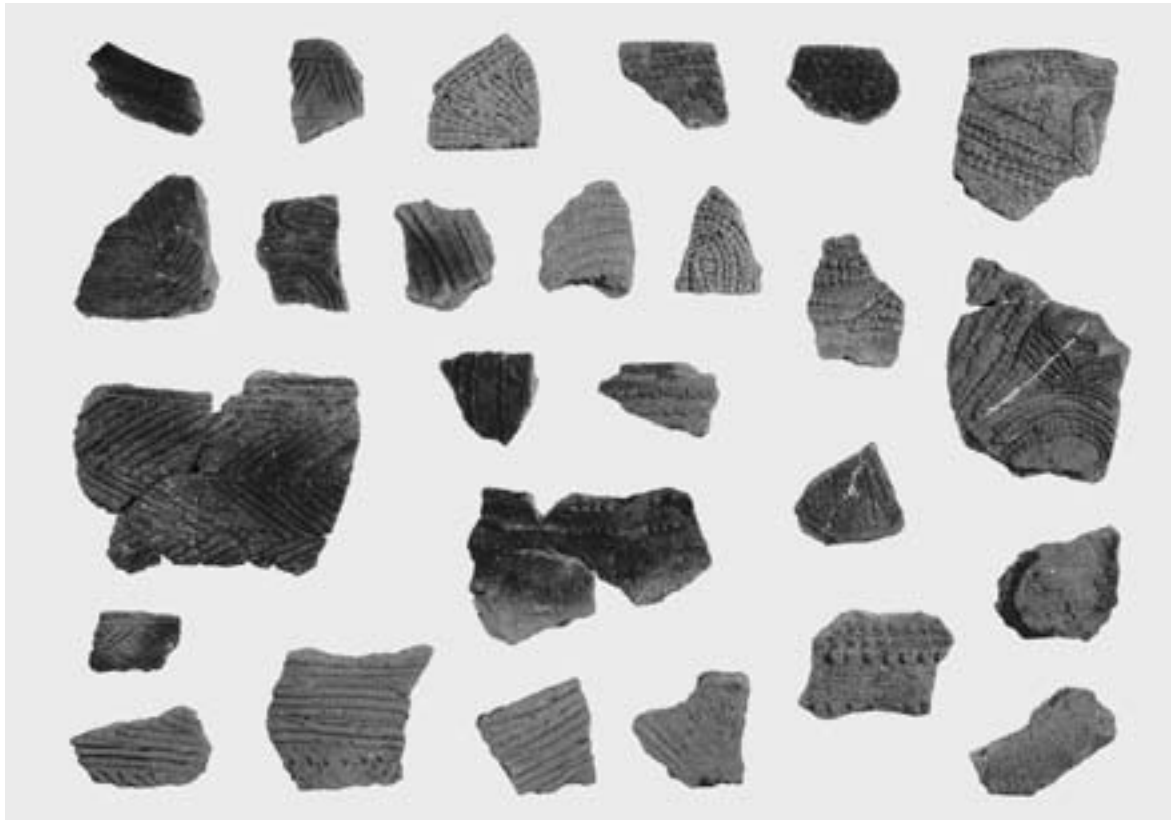
第50号住居址



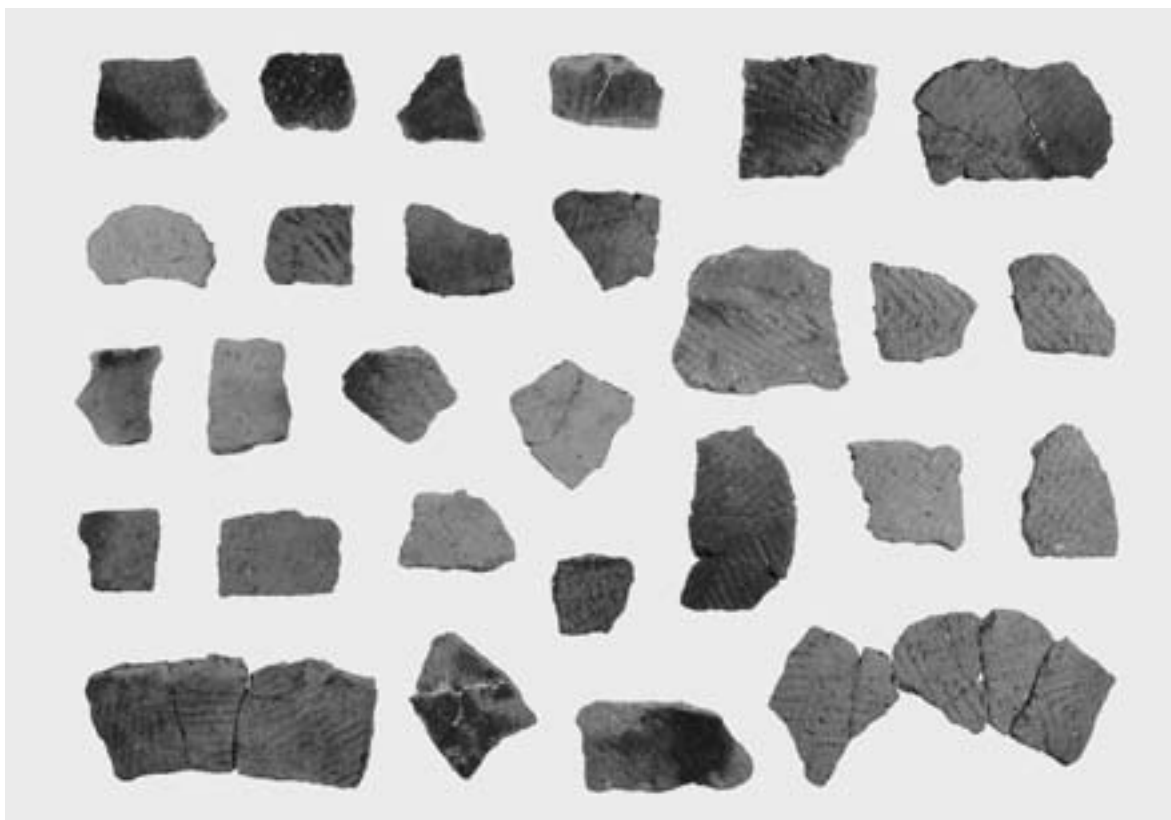
第56·57号住居址



第58号住居址 (1)



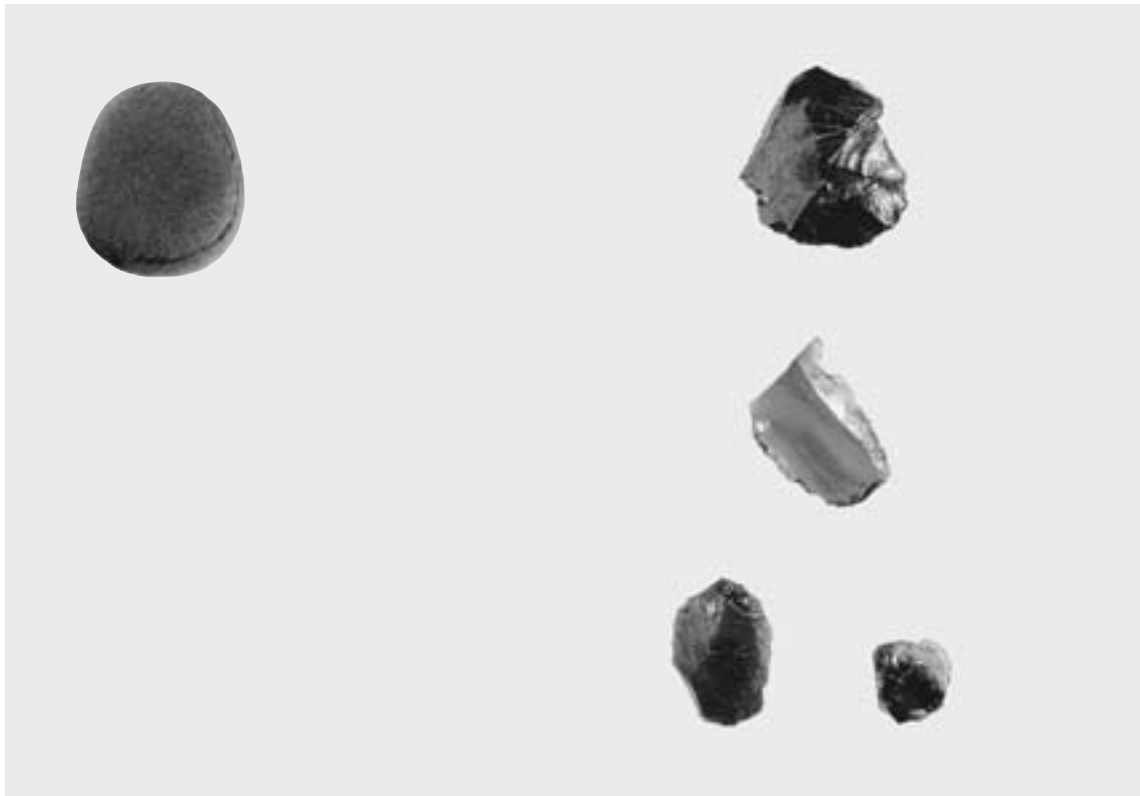
第58号住居址 (2)



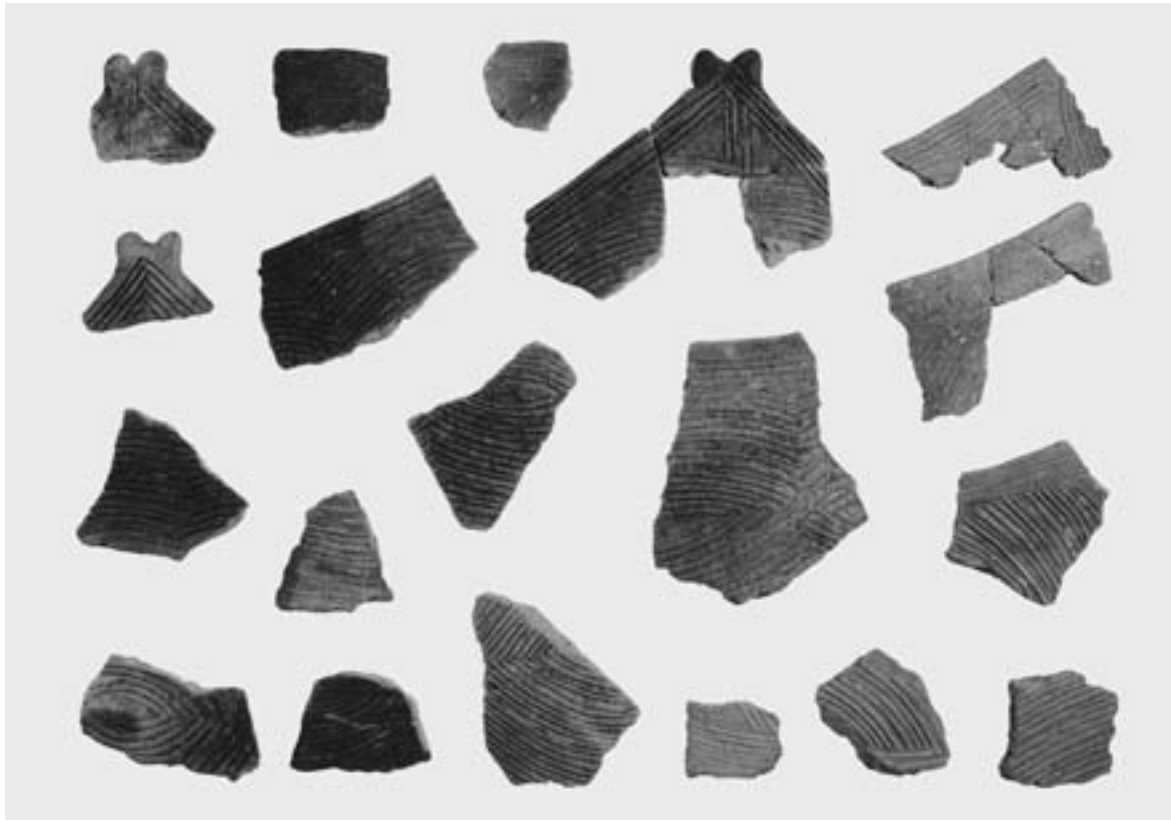
第58号住居址 (3)



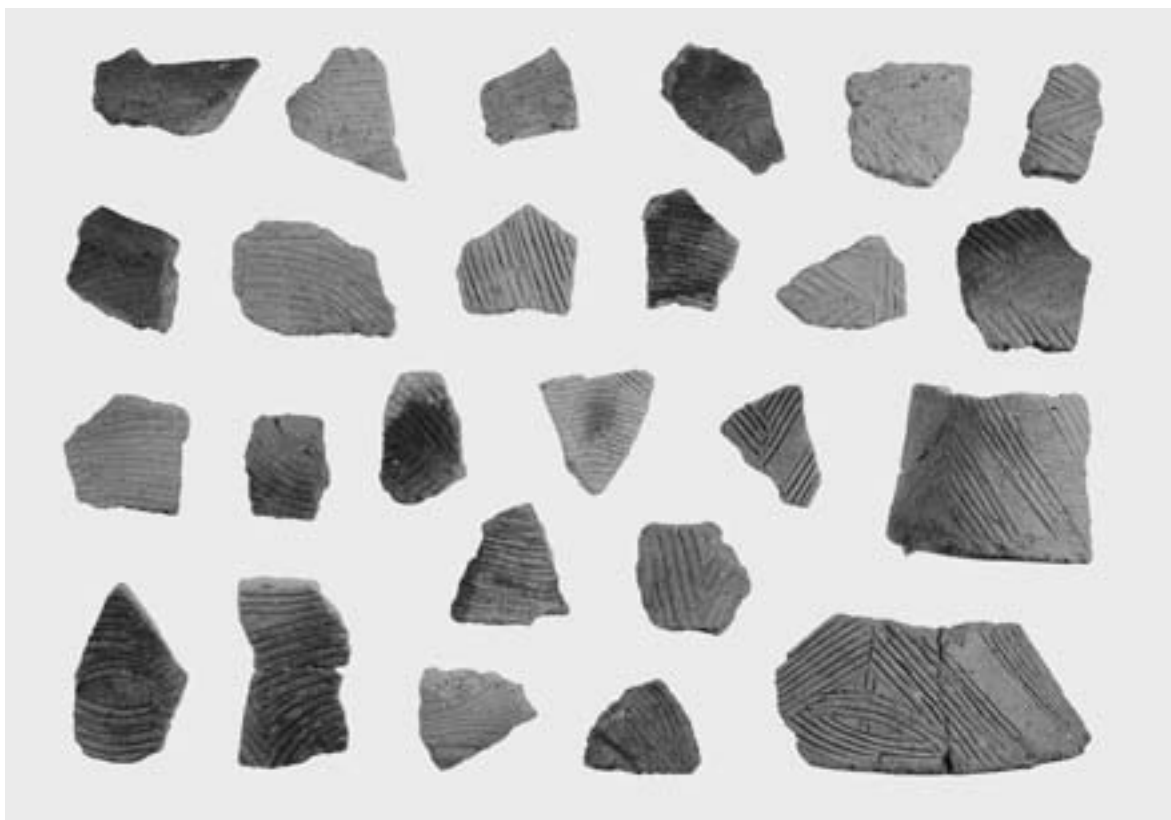
第58号住居址 (4)



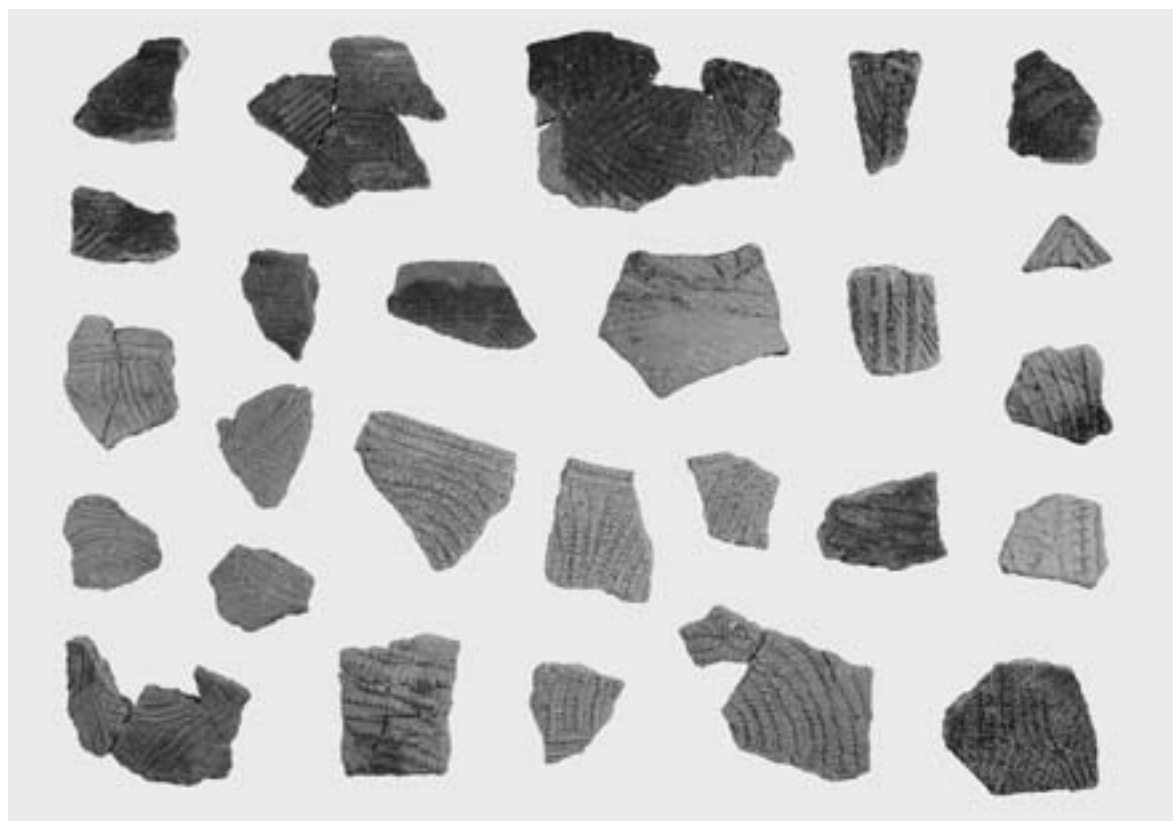
第61号住居址



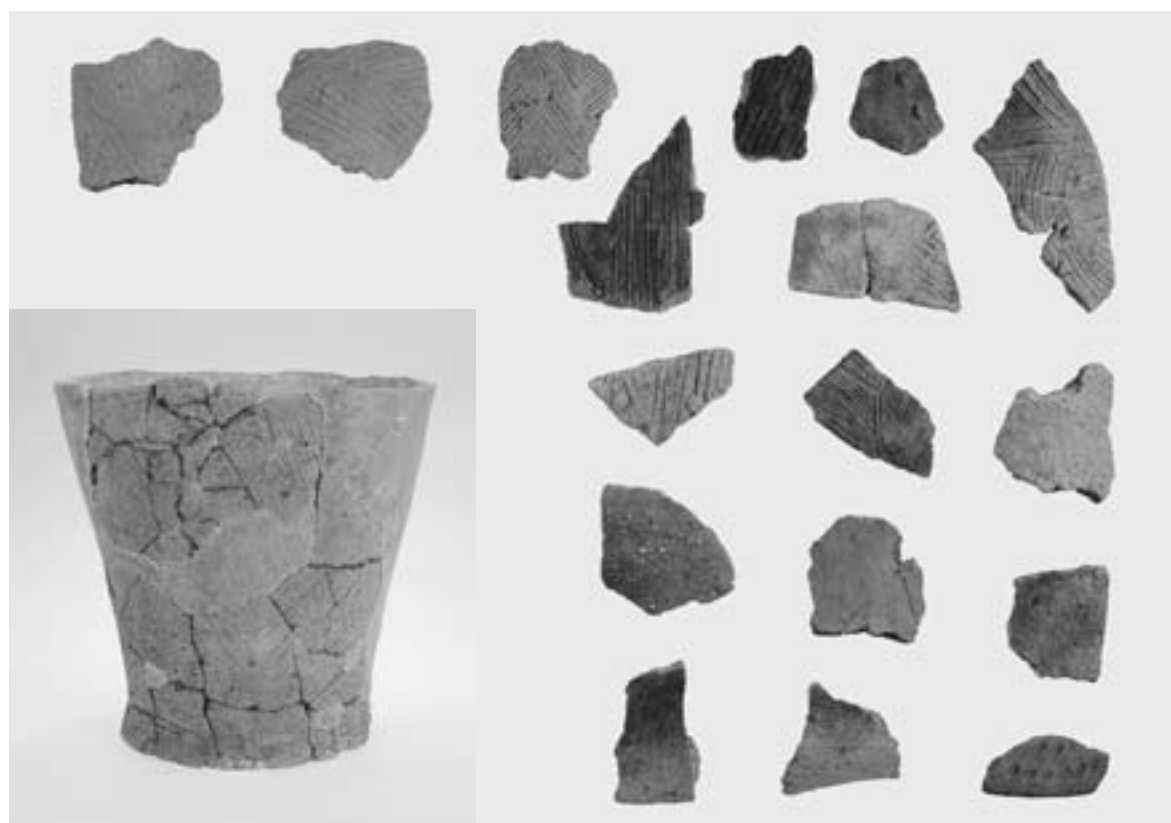
第65号住居址 (1)



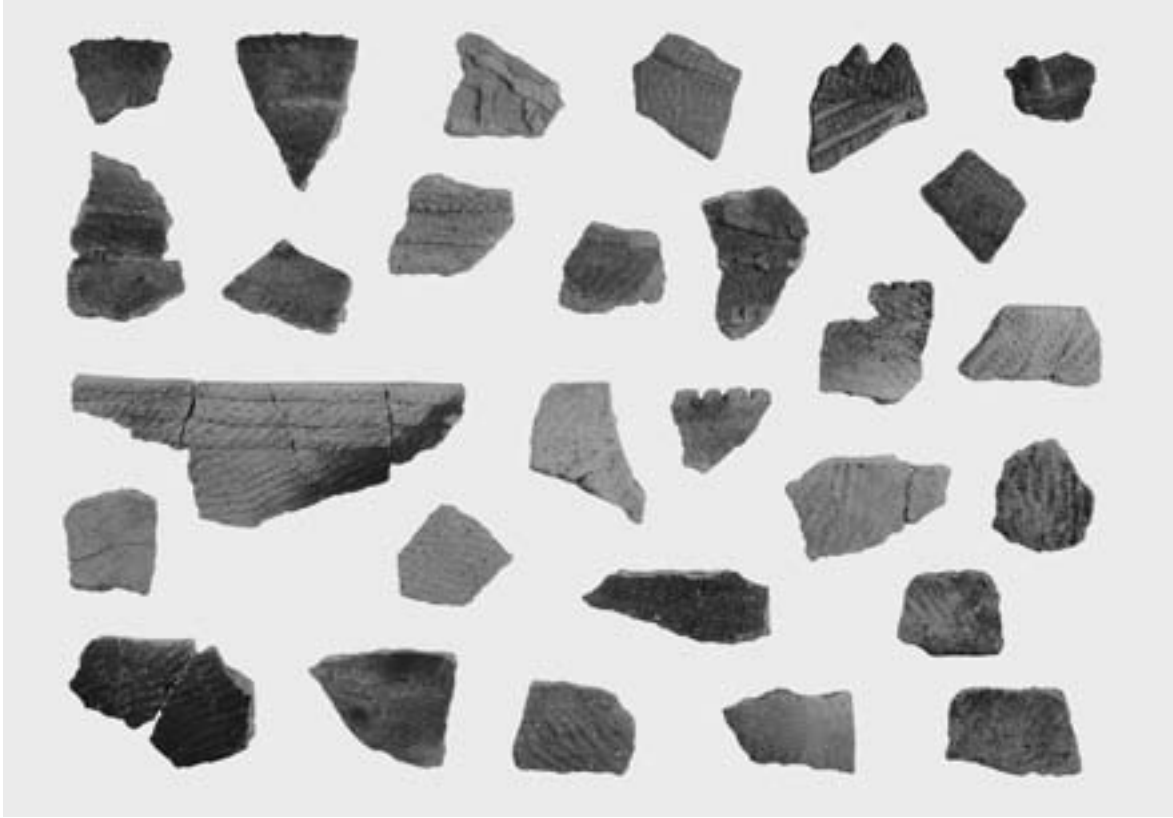
第65号住居址 (2)



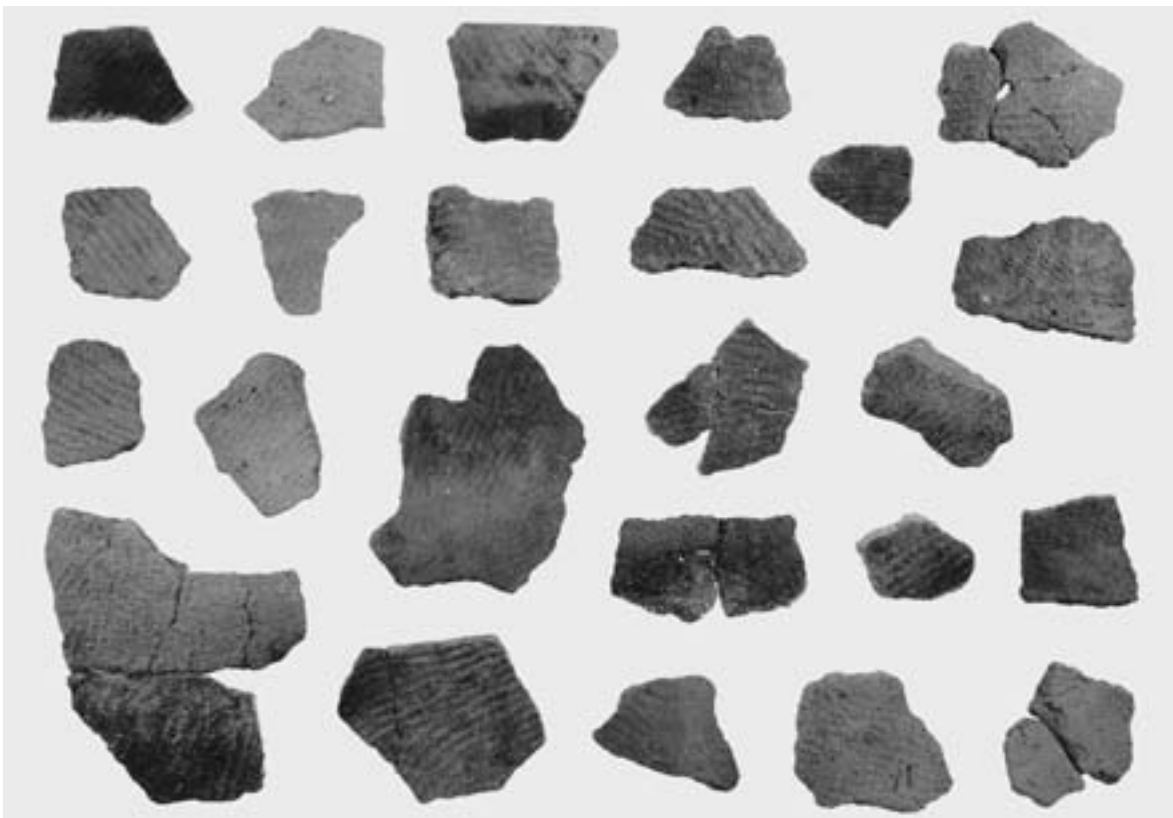
第65号住居址 (3)



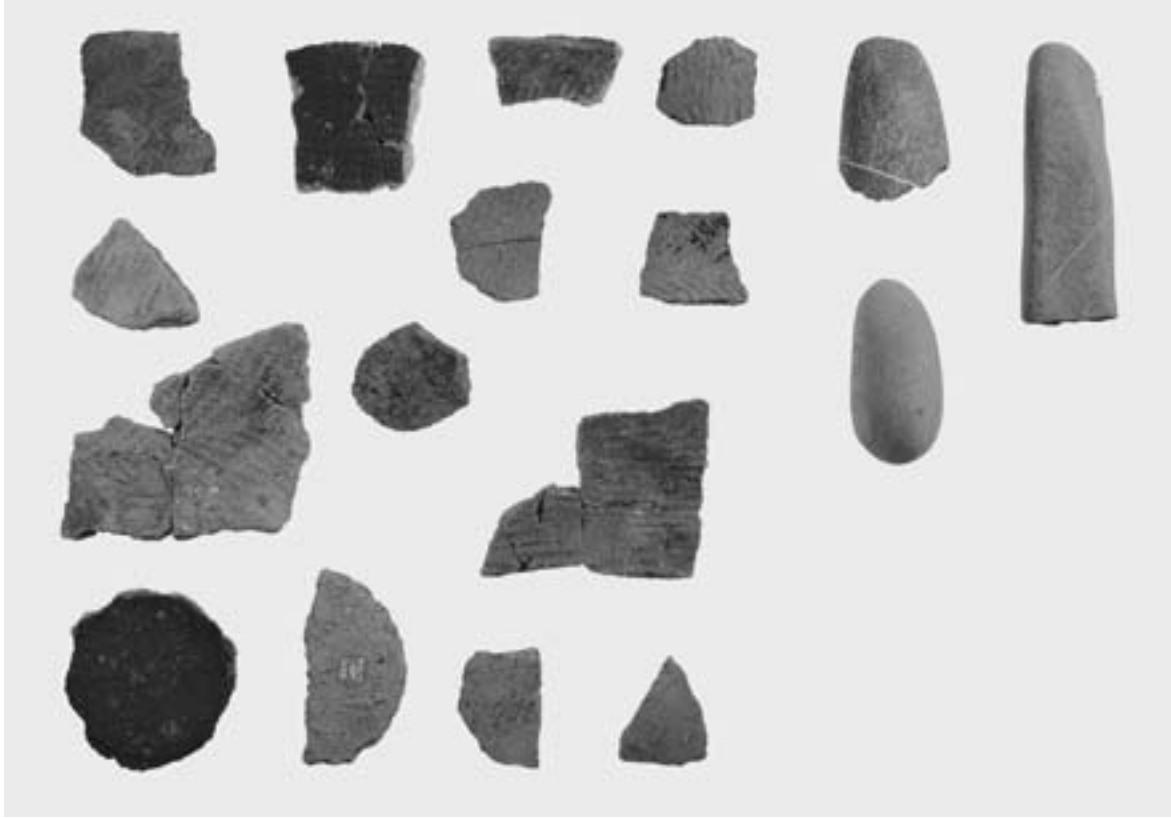
第65号住居址 (4)



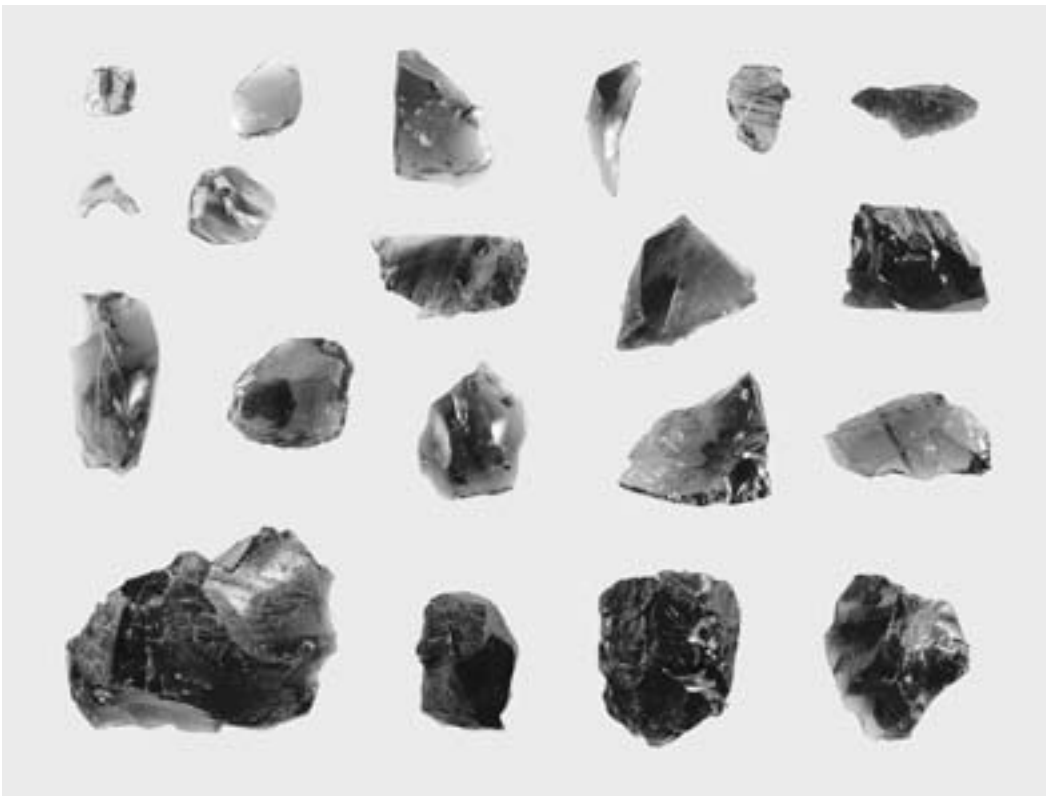
第65号住居址 (5)



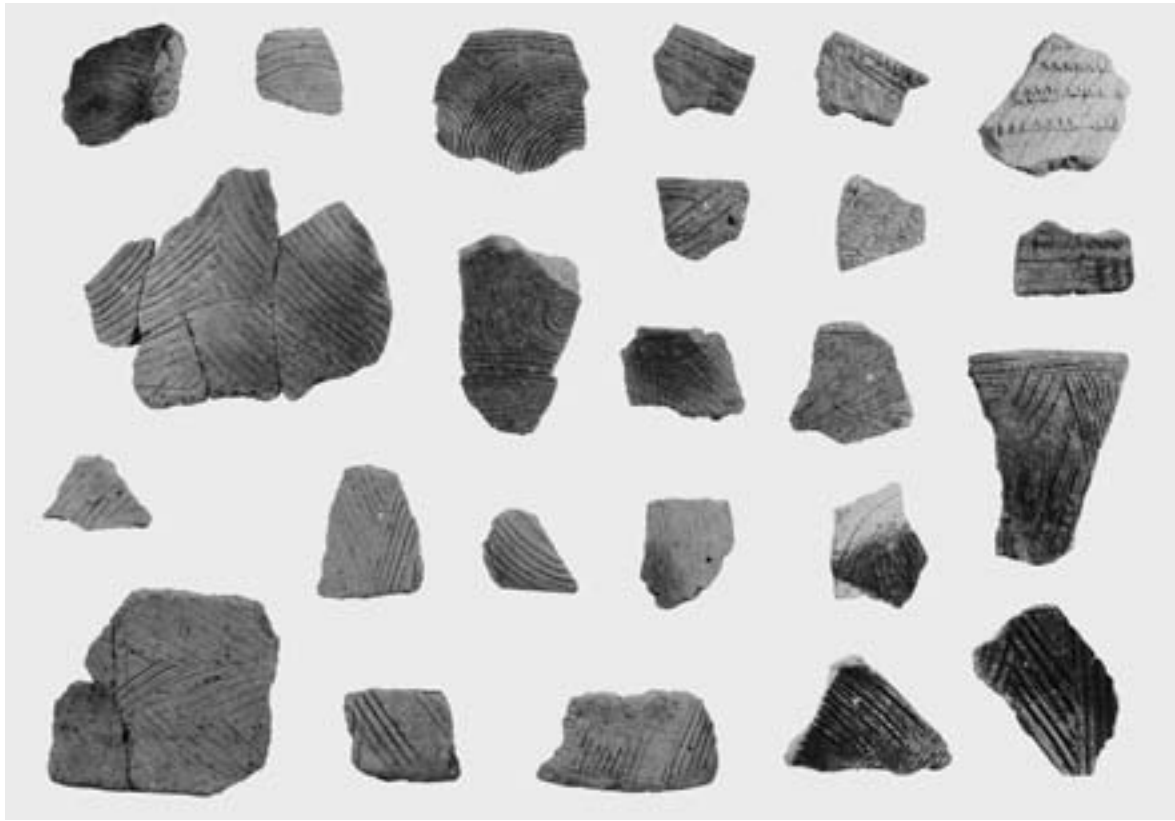
第65号住居址 (6)



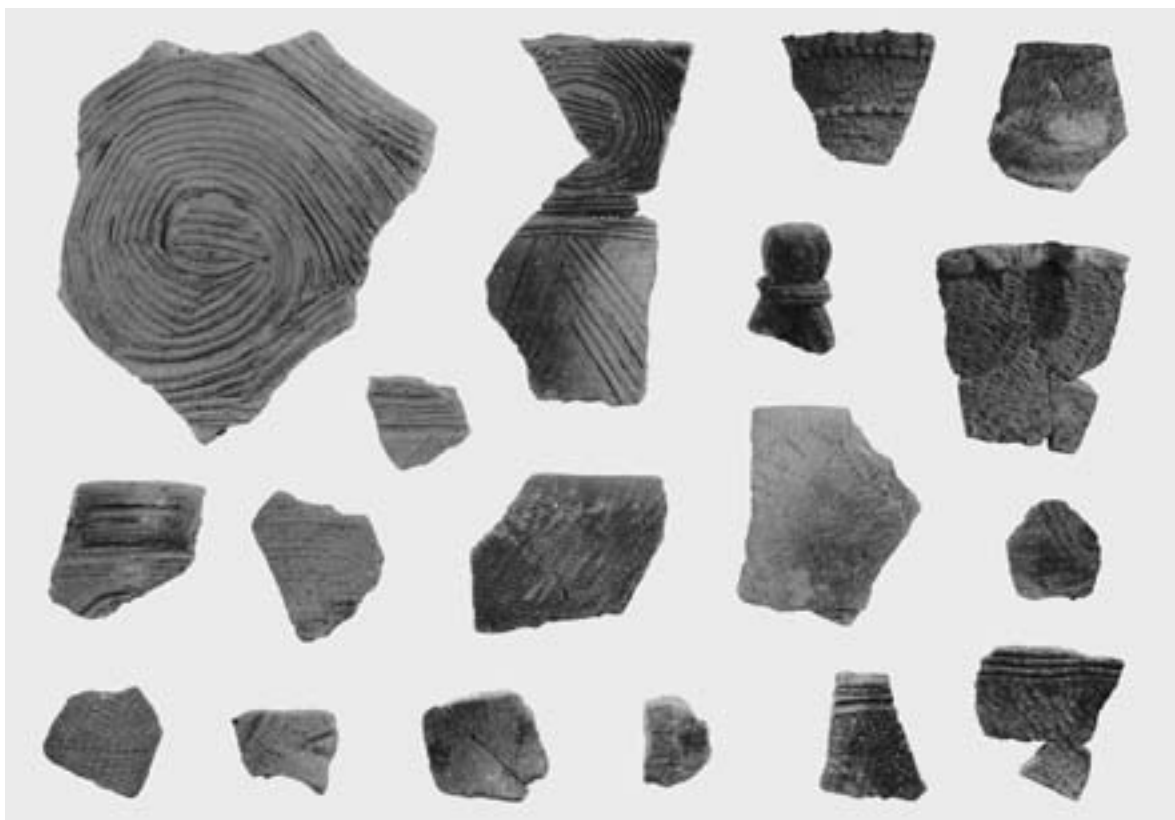
第65号住居址 (7)



第65·68号住居址



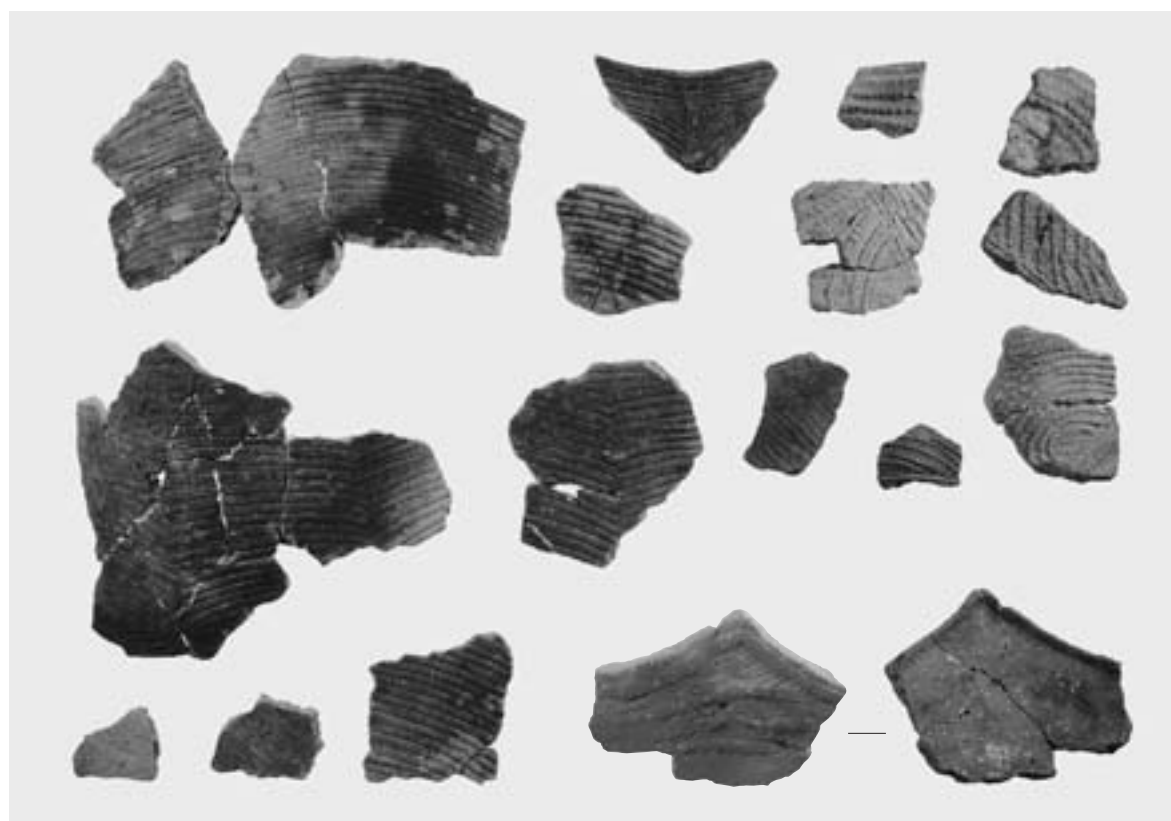
第67号住居址 (1)



第67号住居址 (2)



第67号住居址 (3)



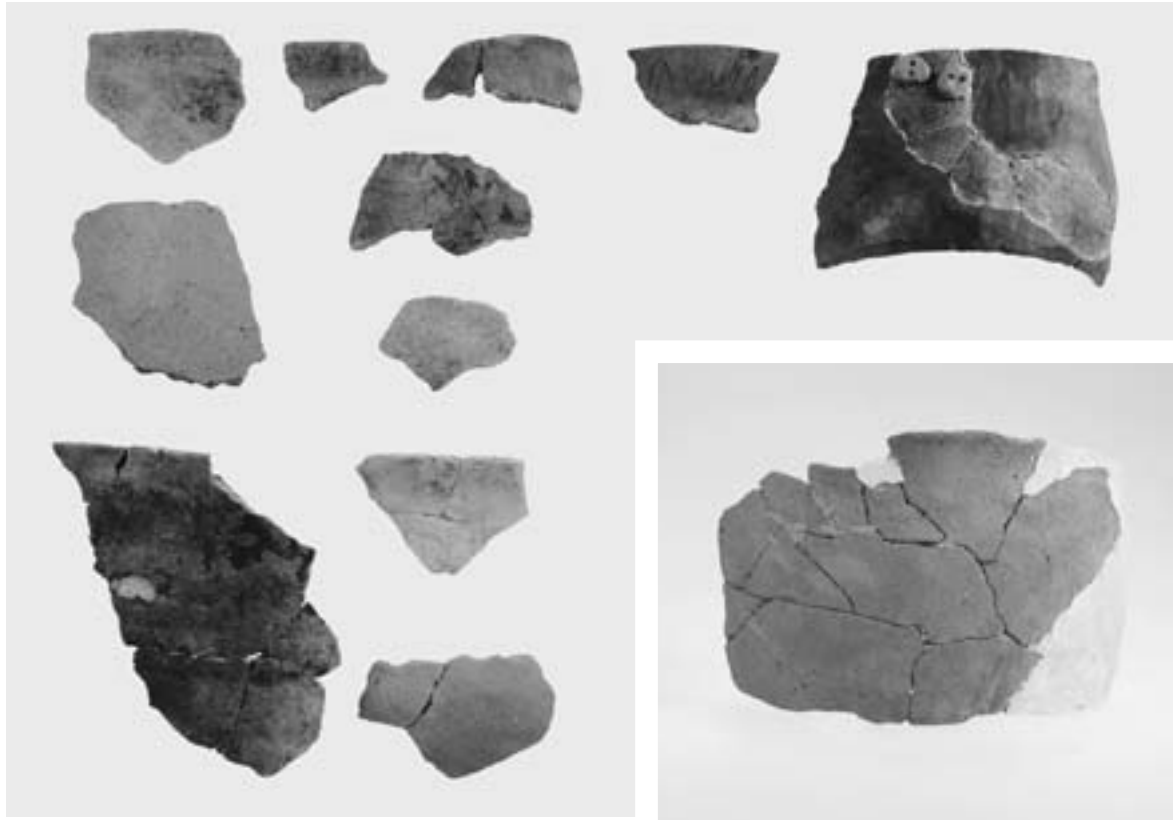
第68号住居址 (1)



第68号住居址 (2)



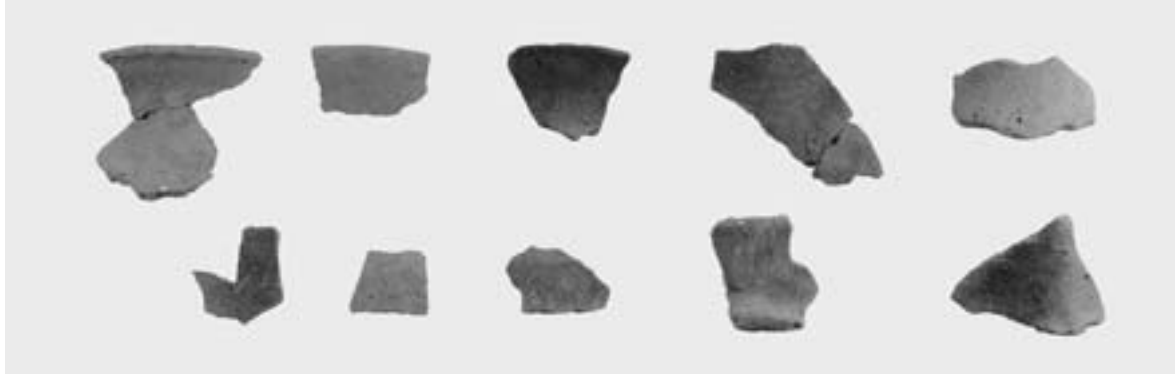
第28号住居址 (1)



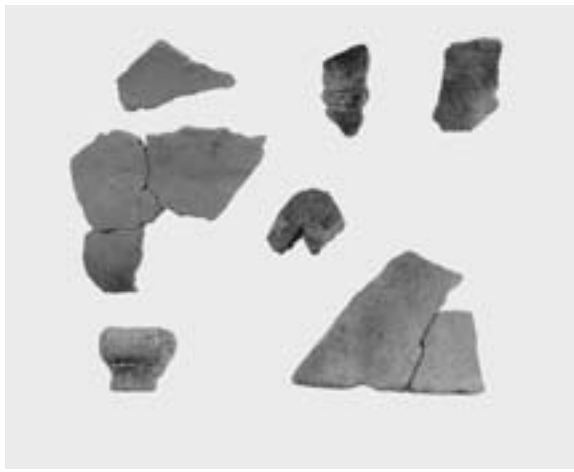
第28号住居址 (2)



第38号住居址



第40号住居址

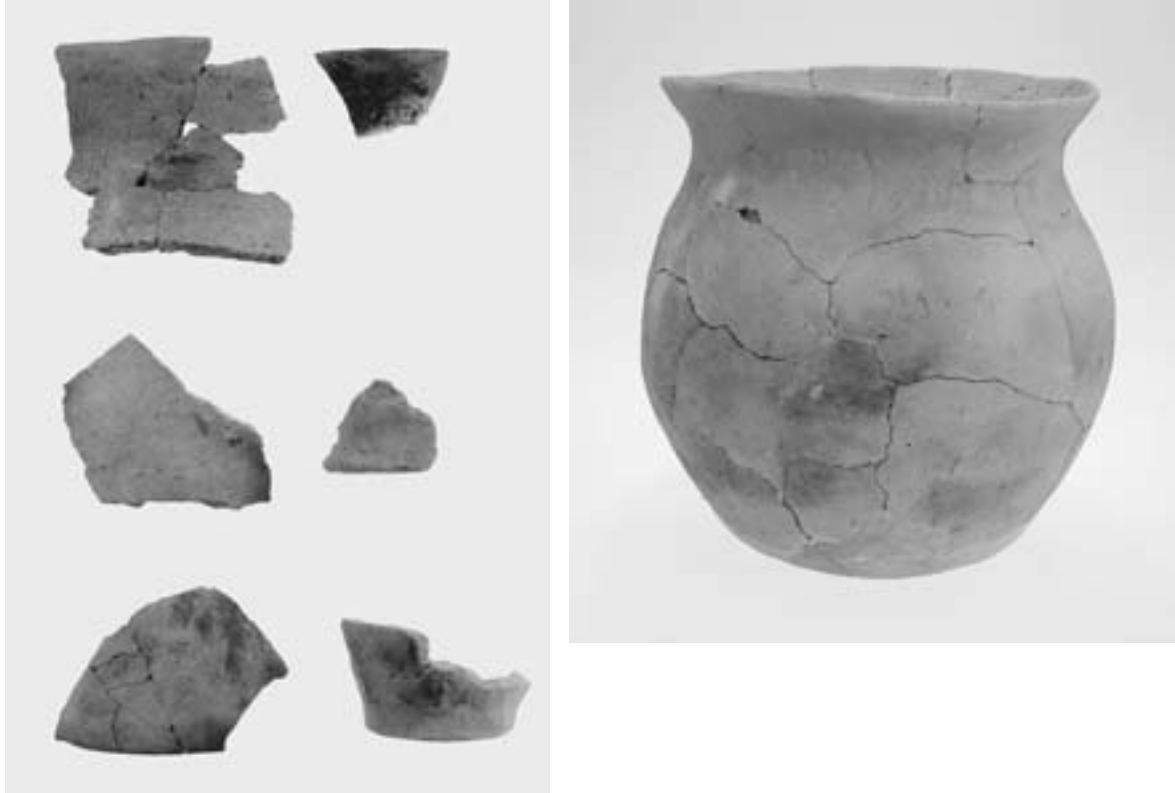


第41号住居址

图版 86



第42・45号住居址



第46号住居址



第46・53・54号住居址

图版 88



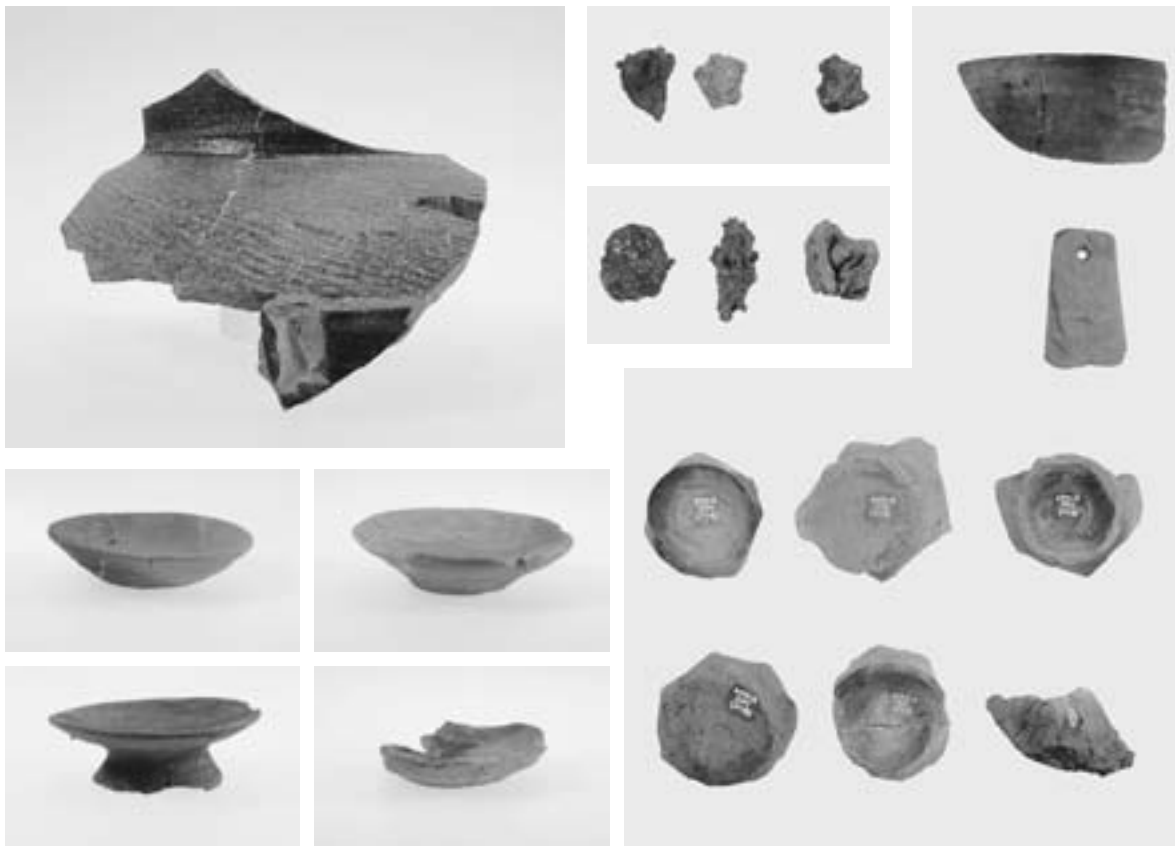
第54号住居址



弥生时代住居址出土石器

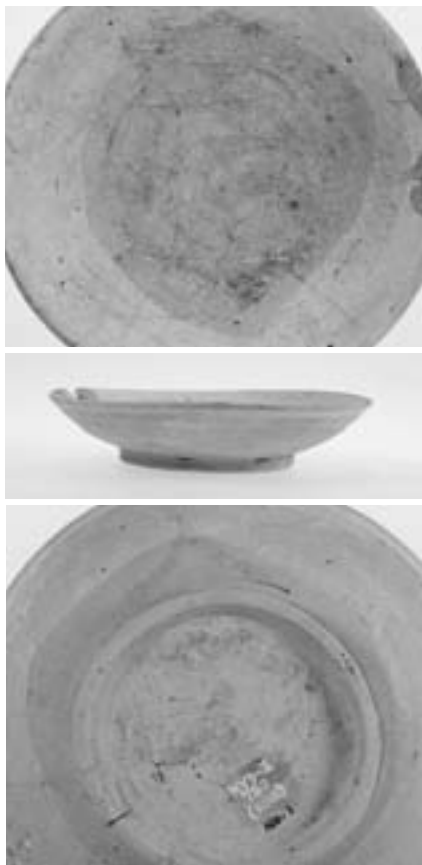


第24·25号住居址

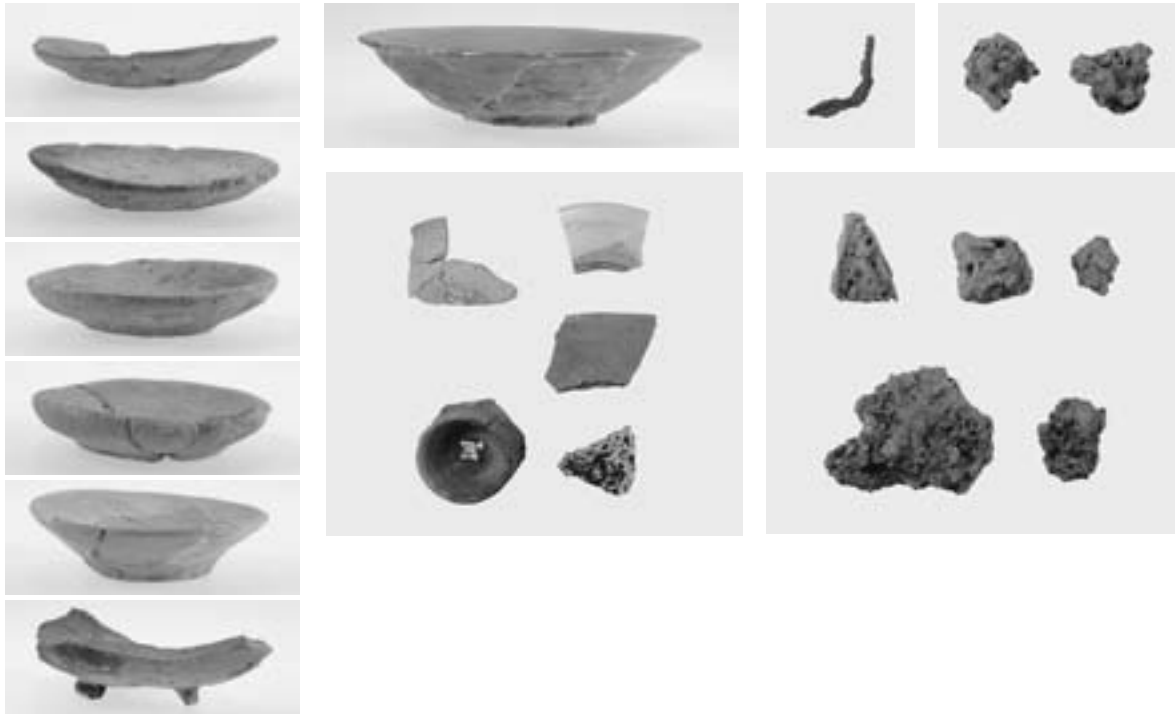


第25·26·27号住居址

图版 90



第30号住居址

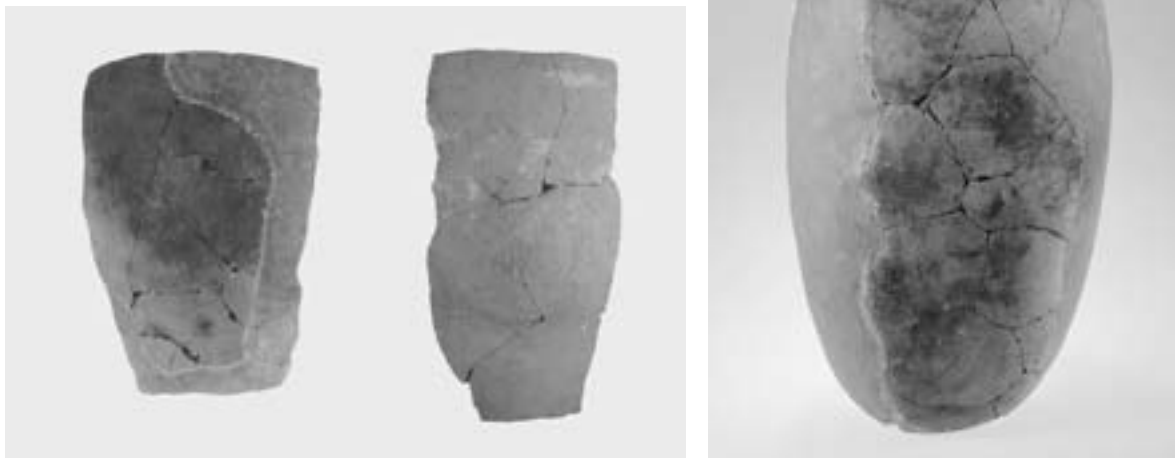


第31号住居址



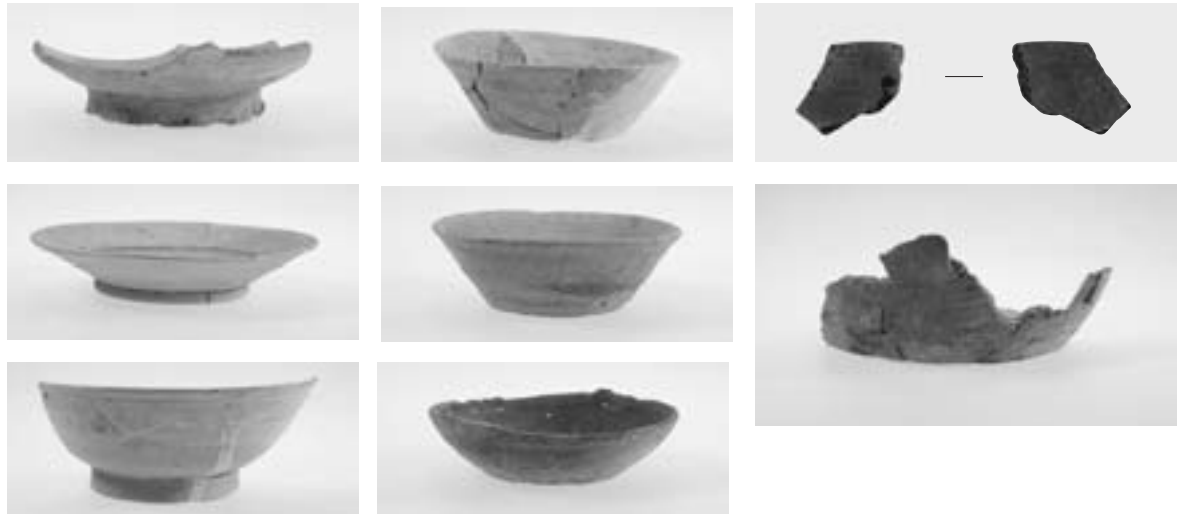
第32号住居址

第35号住居址

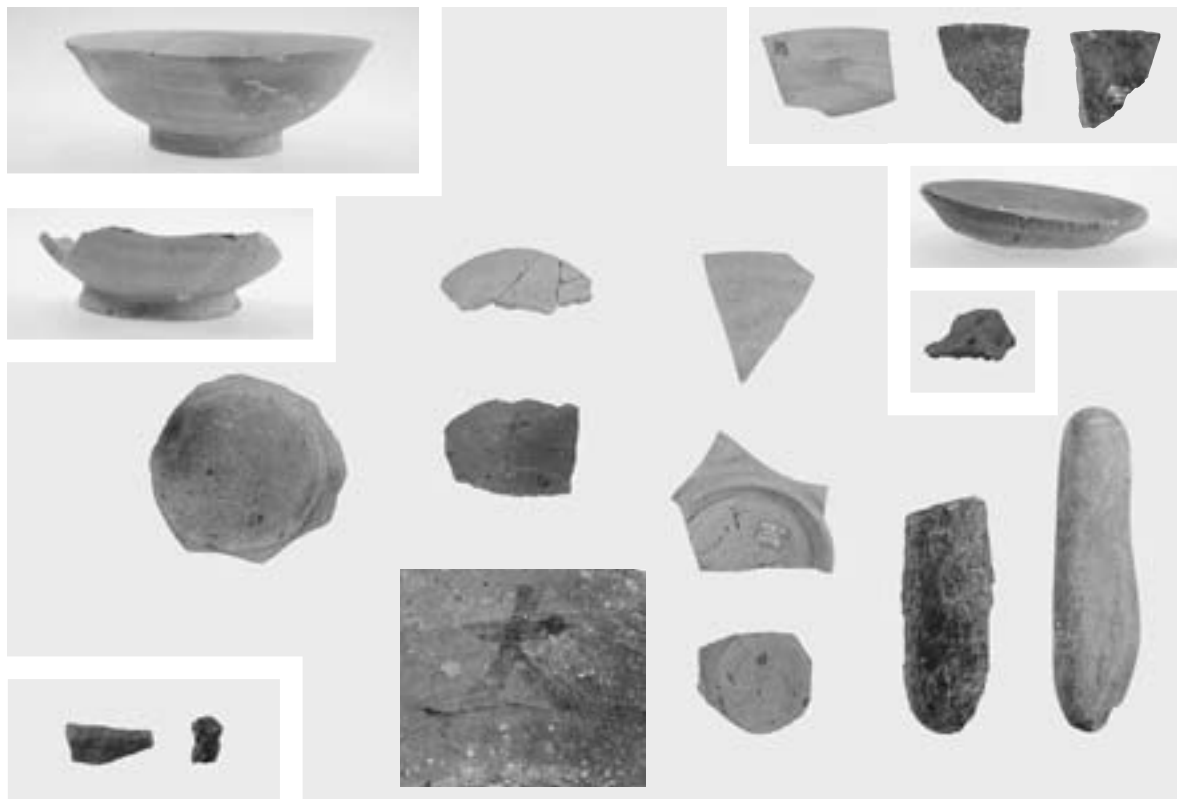


第37号住居址

图版 92



第37号住居址



第44·47·48·49号住居址

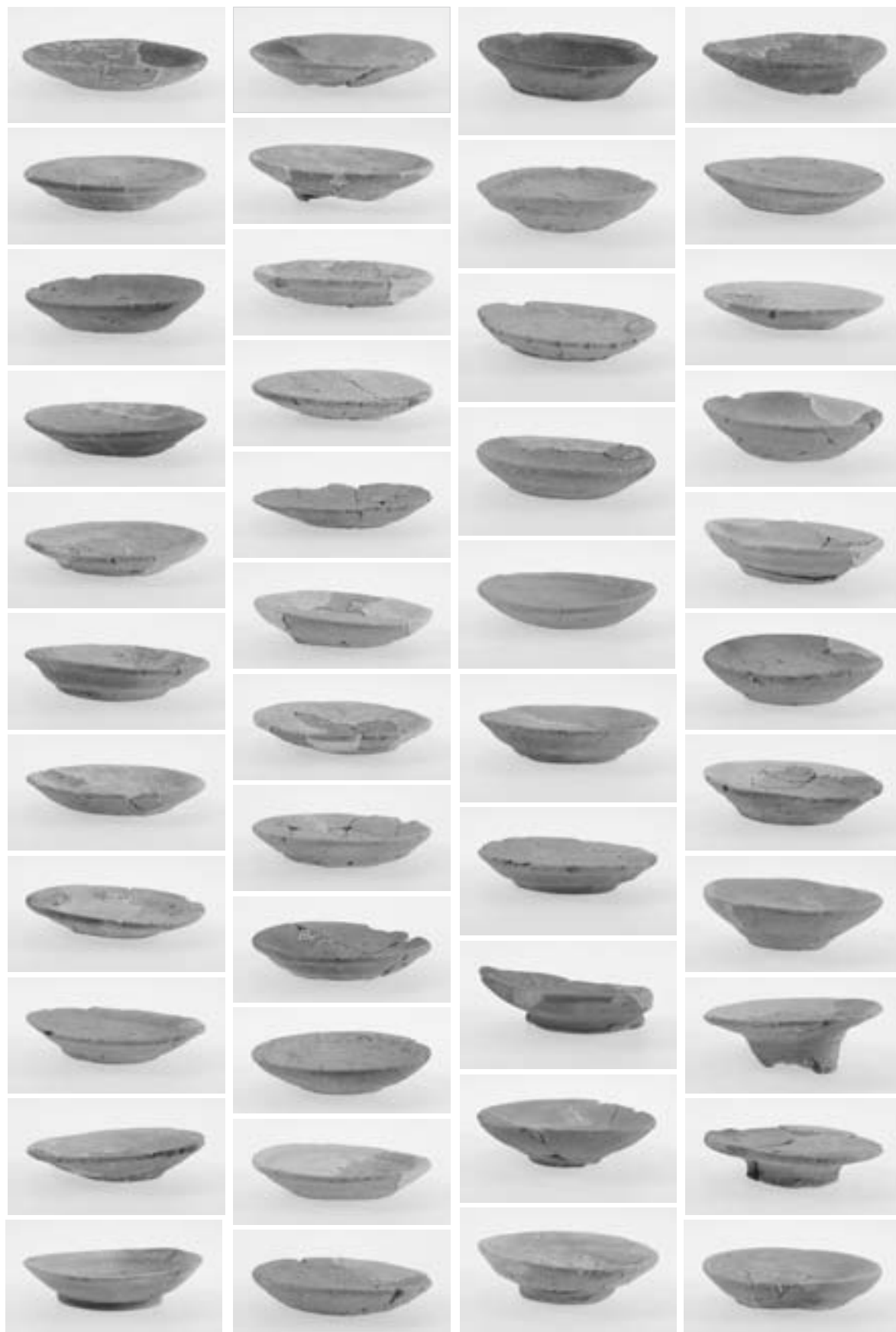


第59·62号住居址



第51·63·64号住居址

图版 94



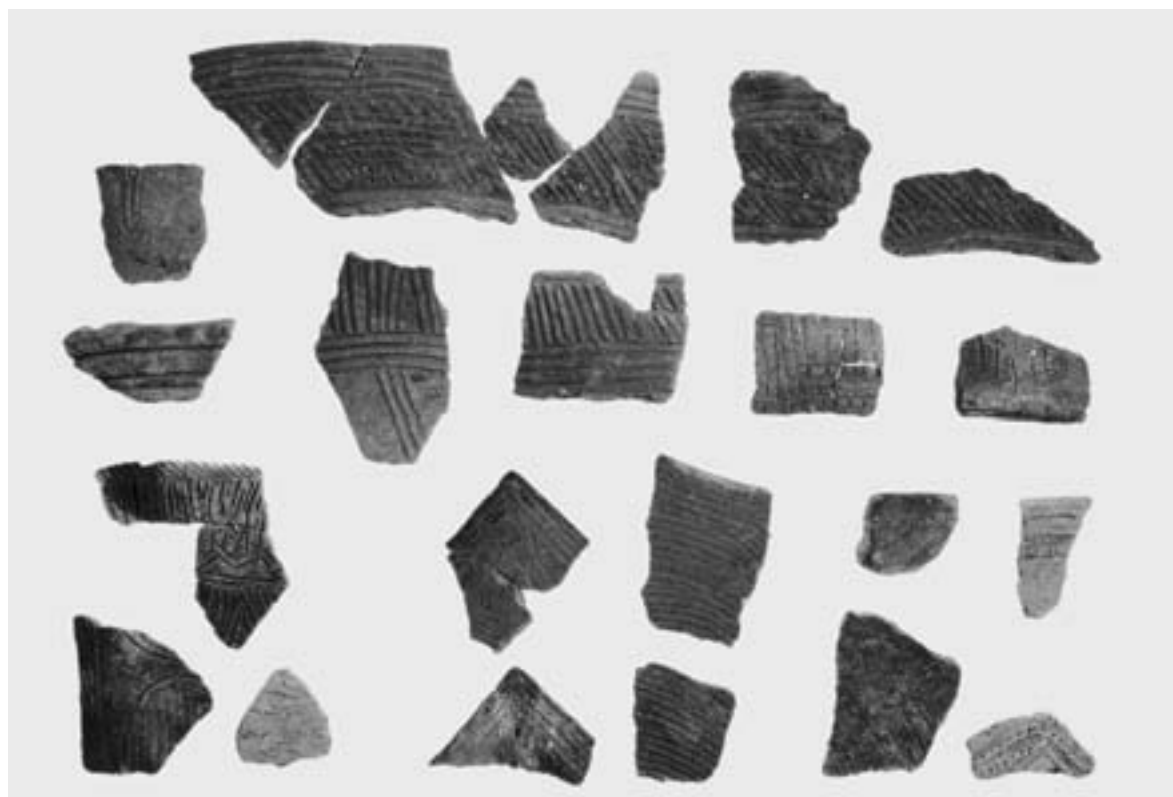
第63号住居址（1）



第63号住居址 (2)



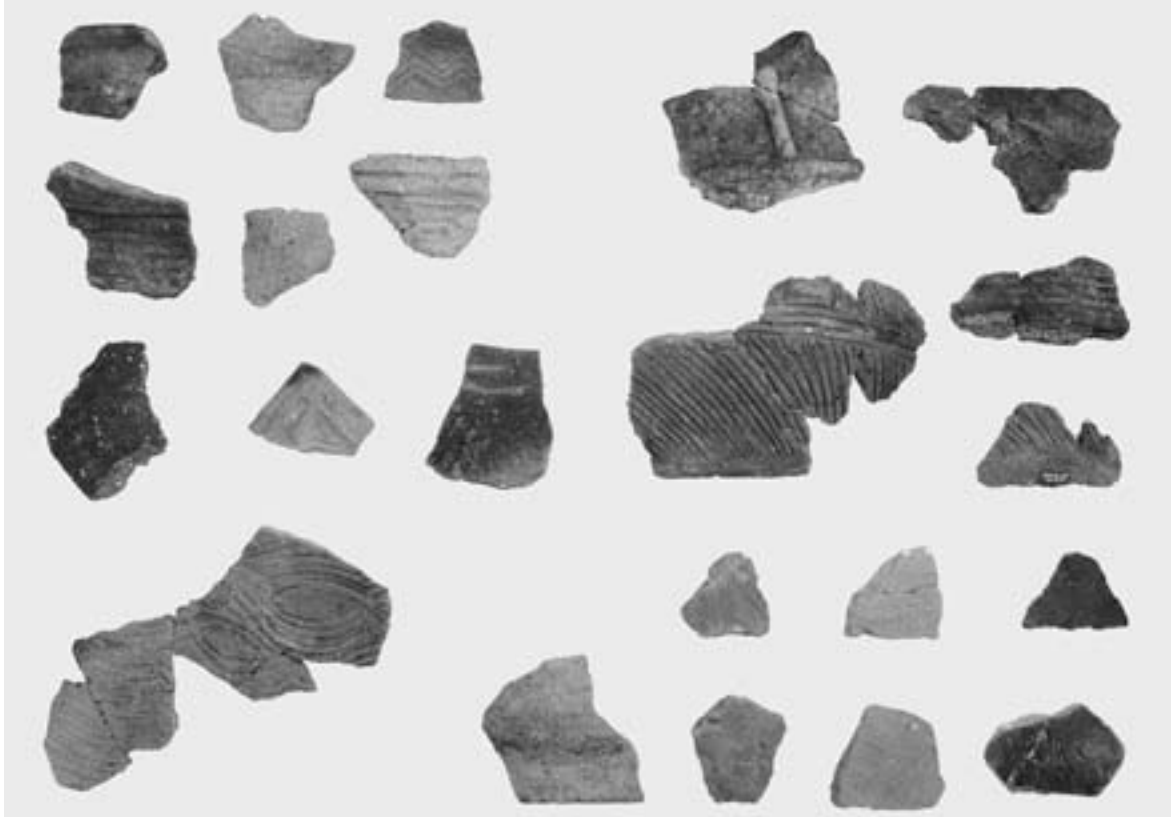
出土鉄製品



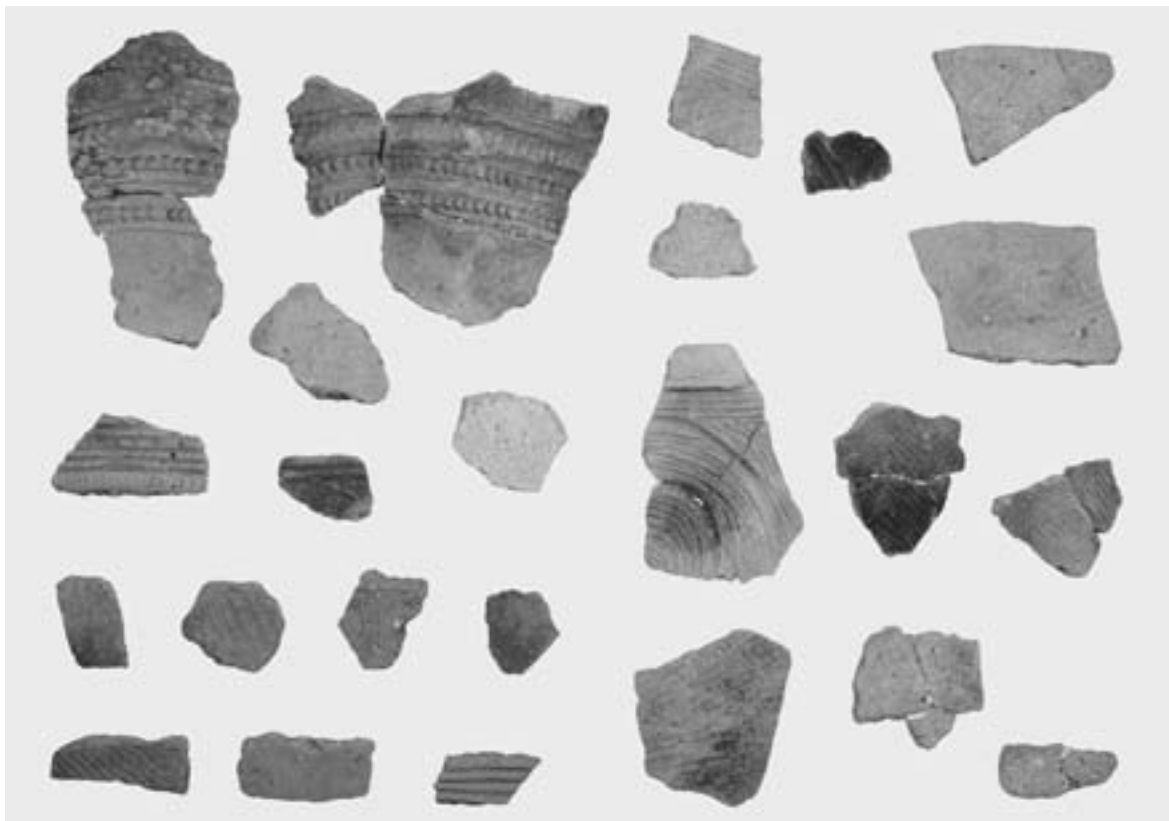
土坑 (160 · 163 · 178 · 218土)



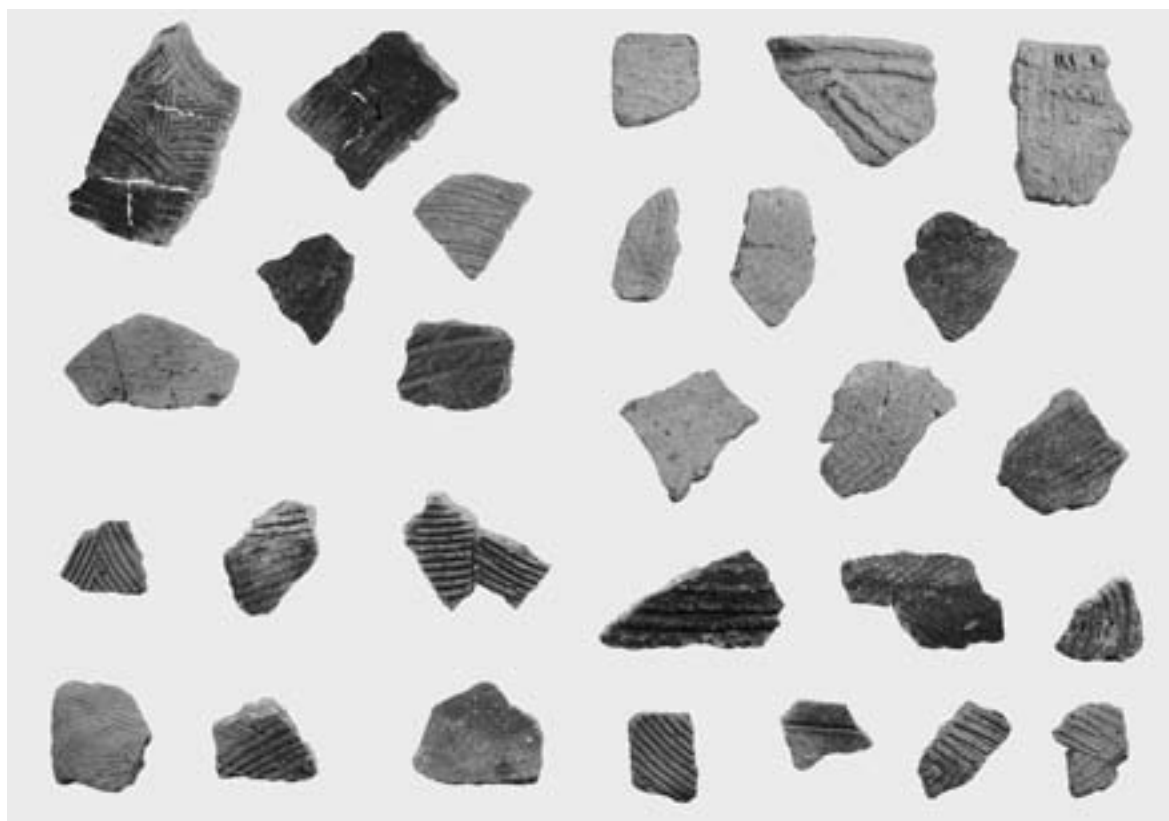
第163号土坑



土坑 (180·181·189·212·219土)



土坑 (188·220·221·226·227·229土)



土坑 (228 · 232 · 233 · 235 · 247 · 248 · 260土)



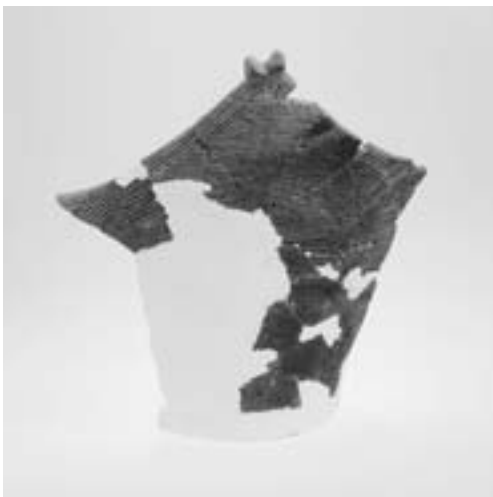
土坑 (234 · 248 · 262 · 265 · 267土)



土坑 (236 · 239 · 241 · 246 · 269 · 270 · 273 · 282 · 285土)



第247号土坑



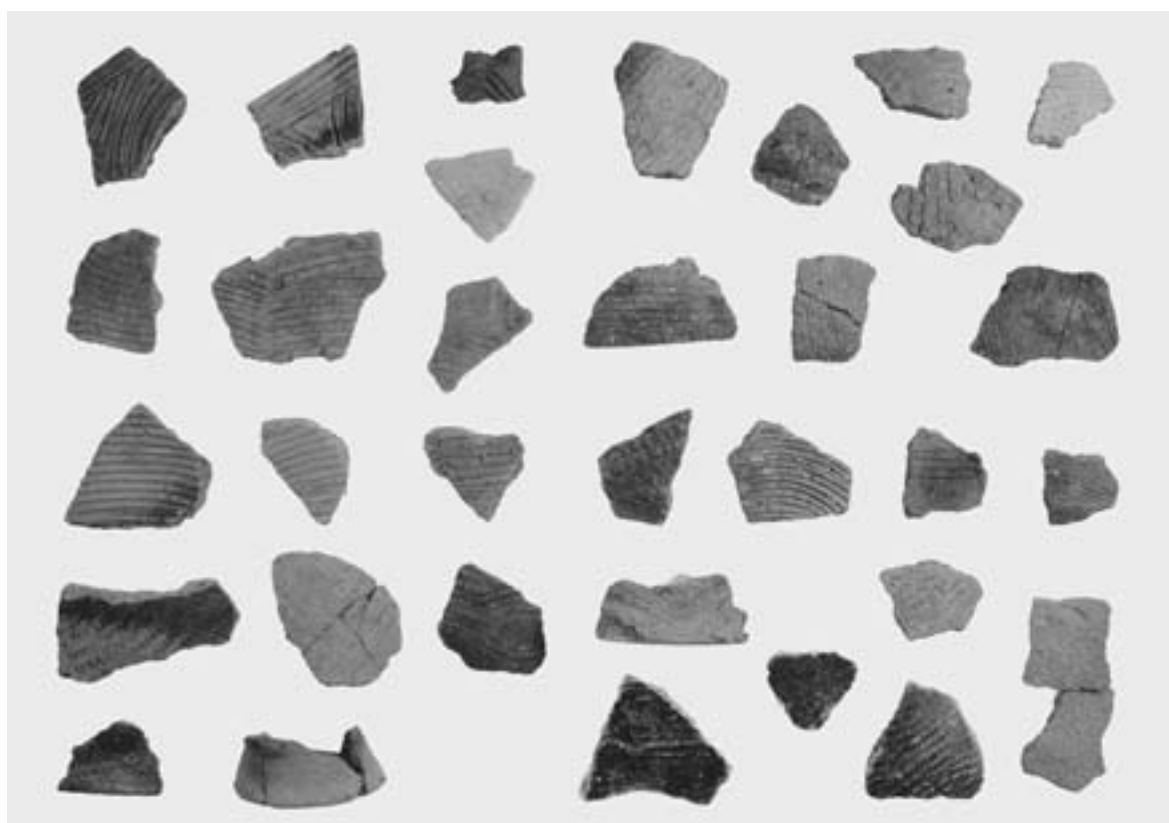
第275号土坑



第262号土坑



土坑 (281·292·301·306·310·311土)



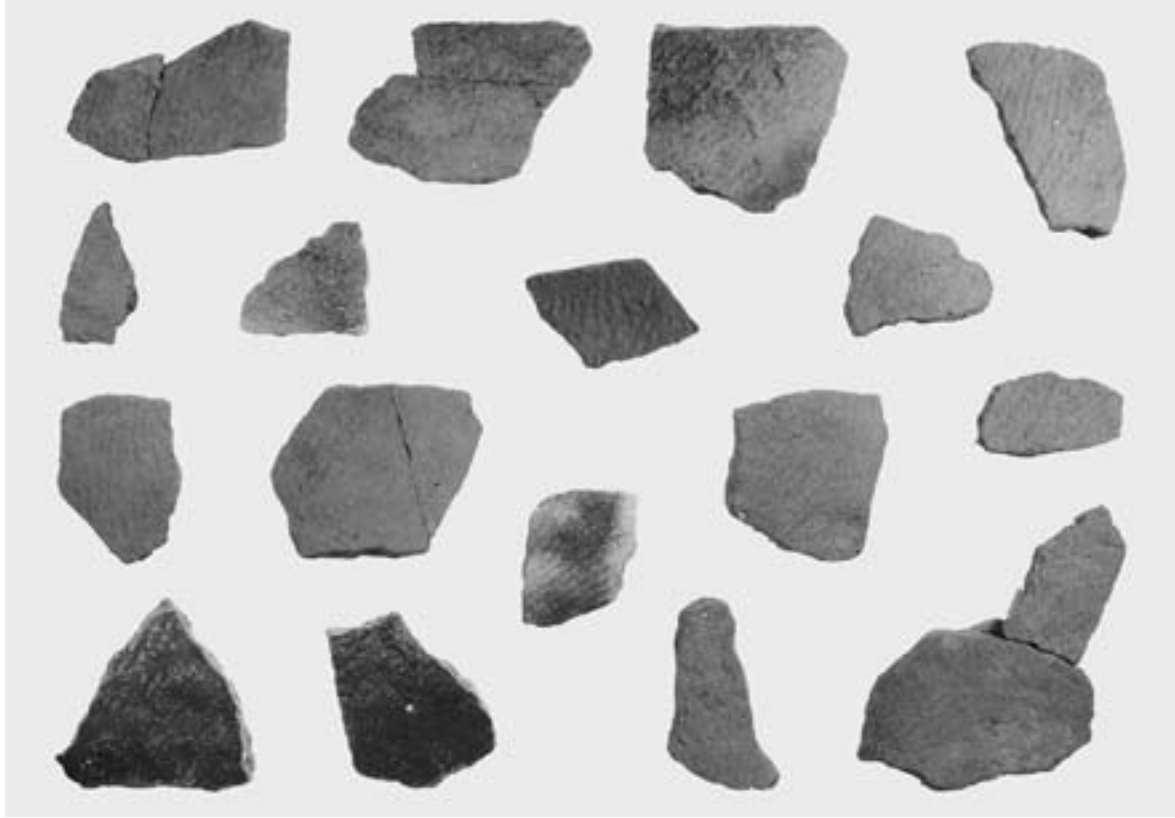
土坑 (268·275·288·289·294土)



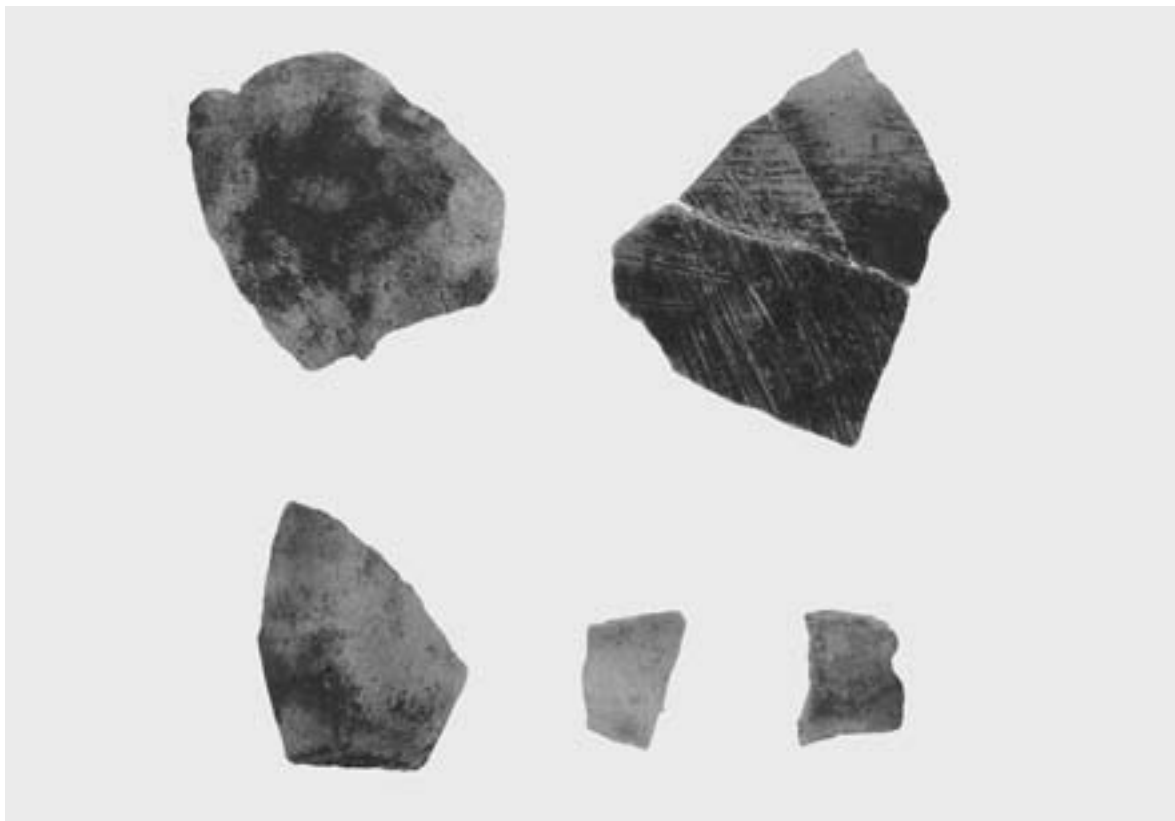
土坑 (268·275·288·289·294土)



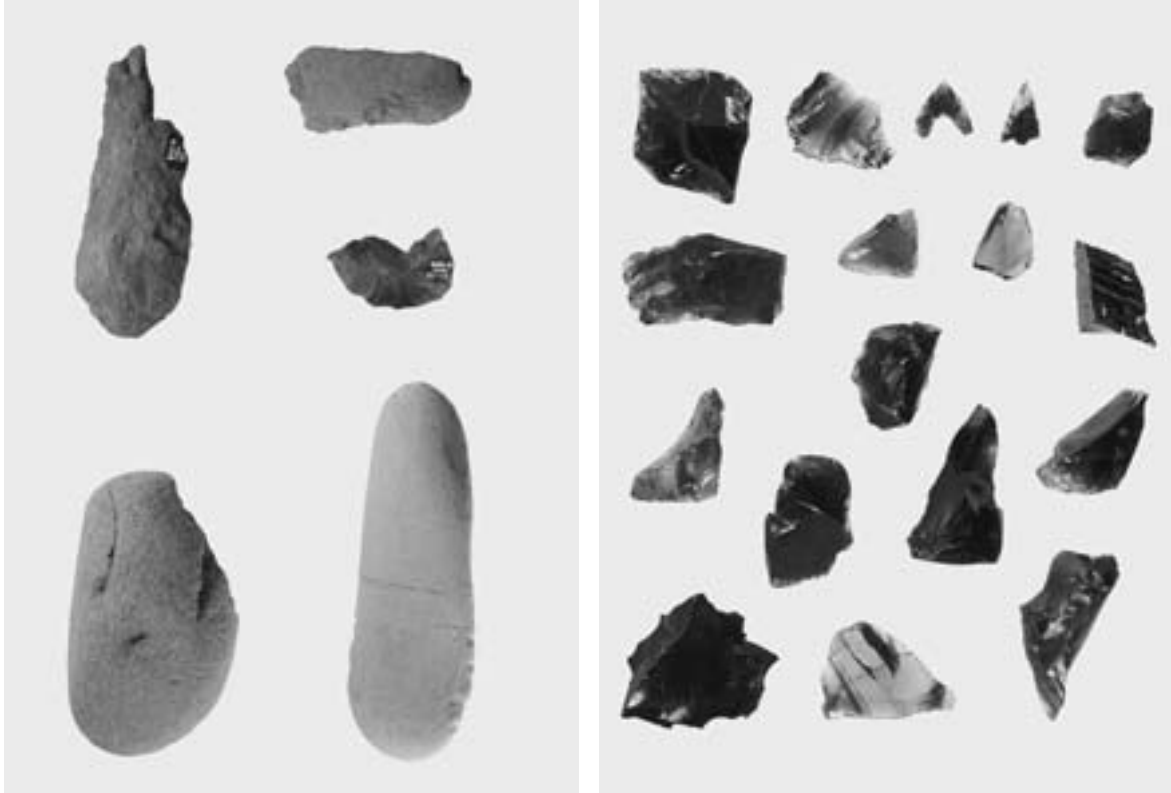
第290号土坑 (1)



第290号土坑 (2)



第225号土坑



土坑出土石器



調查風景

報告書抄録

ふりがな	かみやどこいせき に						
書名	神谷所遺跡Ⅱ						
副書名	後山工業団地造成事業に先立つ第2次緊急発掘調査						
著者名	福島 永						
編集機関	辰野町教育委員会						
所在地	〒399-0493 長野県上伊那郡辰野町中央1番地 電話 (0266) 41-1681						
発行年月日	平成22 (2010) 年3月31日						
ふりがな 所収遺跡名	所在地	コード		日本測地系		調査期間	調査面積
		市町村	遺跡番号	北緯	東経		
かみやどこいせき 神谷所遺跡	長野県上伊那郡辰野町大字伊那富字後山5908番地ほか	20382	66	35° 57' 52"	137° 58' 37"	19930412 } 19931214	18,500m ²
所収遺跡	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		
神谷所遺跡	集落址 狩猟場	縄文時代 弥生時代 平安時代 中世 不明	住居址 集石 集石炉 土坑 (落し穴状土坑含む) 住居址 土坑 住居址 竪穴建物址 柱穴 溝址 礫群	10 4 5 188 11 1 19 3 数ヶ所 2 3	縄文時代前期末葉土器 弥生時代後期土器 平安時代陶器・土師器 縄文時代石器 平安時代鉄器 中世陶磁器		
特記事項	<p>第2次調査では、縄文時代前期の遺構が出土した。</p> <p>また、弥生時代の住居址が多数検出され、この地点に当該集落の存在が確認できた。</p> <p>平安時代の住居址は、第1次調査より若干時期の新しいものが主体であった。</p> <p>今回も中世の竪穴建物址や、鎌倉期～中世の陶磁器が出土し、この一帯に中世の何らかの施設が存在していたことが確かめられた。</p> <p>また、時代や機能のわからない礫群が出土している。</p>						

神谷所遺跡Ⅱ

後山工業団地造成事業に先立つ第2次緊急発掘調査報告書

発行日 平成22年3月31日

編集 辰野町教育委員会

〒399-0493 長野県上伊那郡辰野町中央1

電話 0266 (41) 1111

印刷 龍共印刷株式会社

〒395-0004 長野県飯田市上郷黒田121

電話 0265 (22) 5353



第31号住居址カマド
(合わせ口で出土した坏出土状況)